

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第457集

いもだに
芋田Ⅱ遺跡発掘調査報告書

国道4号渋民バイパス建設事業関連遺跡発掘調査

国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

い も だ に
芋田Ⅱ遺跡発掘調査報告書

国道4号渋民バイパス建設事業関連遺跡発掘調査



空撮遠景



空撮直上



墨書土器 (多文字)



墨書土器 (六文字が全周)

序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を越す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず削減する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、国道4号渋民バイパス建設事業に関連して、平成15年度に発掘調査された玉山村芋田Ⅱ遺跡の調査成果をまとめたものです。今回の調査では、縄文時代および平安時代の集落跡が複合する遺跡であることがわかりました。特にも平安時代においては、大形の住居跡や付属する作業場などが確認され、また墨書土器などの文字資料や他地域との関わりを示す遺物も多数出土しています。

本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所や玉山村教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成17年2月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 合 田 武










例 言

1. 本報告書は、^{いわてけんいわてぐんたまやまむらのおおあざいもだあざいもだ}岩手県岩手郡玉山村大字芋田字芋田53-10ほか^{いもだ}所在する芋田II遺跡の発掘調査結果を収録したものである。
2. 本遺跡の調査は、国道4号渋民バイパス建設事業に伴う事前の緊急発掘調査である。調査は、国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所と岩手県教育委員会との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
3. 岩手県遺跡情報検索システムに記載される遺跡番号・遺跡略号は、KE47-2199・I DII-03である。
4. 発掘調査期間は、平成15年4月11日～11月11日、調査面積は6,784㎡である。調査は、濱田宏・飯坂一重の2名で行った。
5. 室内整理期間は平成15年11月1日～平成16年3月31日で、濱田宏・飯坂一重が担当した。
6. 本報告書の執筆は、Iを国土交通省岩手河川国道事務所、それ以外は、飯坂・濱田・石崎が分担して行った。当センター期限付調査員の石崎には、本遺跡出土の墨書土器について検討してもらい、VI. 3の執筆を依頼した。なお、執筆分担は文末に示している。
7. 発掘調査では、国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所、玉山村教育委員会、岩手県教育委員会のご協力をいただいた。
8. 本報告書作成にあたり、次の方々にご指導いただいた。(順不同・敬称略)
井上雅孝 (滝沢村教育委員会)、宇部則保 (八戸市教育委員会)、小椋勇紀 (東北芸術工科大学院生)
鎌田祐二 (宮古市教育委員会)、神原雄一郎 (盛岡市教育委員会)、菊地幸裕 (玉山村教育委員会)
佐藤正彦 (陸前高田市教育委員会)、熊谷賢 (海と貝のミュージアム)、佐藤浩彦 (遠野市教育委員会)
佐藤嘉広・女鹿潤哉・高木晃 (岩手県立博物館)、菅原修 (岩手町教育委員会)、神敏明 (岩泉小学校)
高橋昭治 (日本考古学協会会員)
9. 野外調査では玉山村、西根町の作業員18名のご協力をいただいた。
室内整理作業は、当センター期限付職員7名で行った。
10. 各種委託業務は以下の機関に依頼した。
<基準点測量・基準杭設置> (株) ハイマーテック
<航空写真> 東邦航空
<石質鑑定> 「花崗岩研究会」
<金属製品の保存処理> 岩手県立博物館
<木器の樹種同定> (株) パリノ・サーヴェイ
<炭化材の樹種同定> 岩手県木炭協会
11. 今回の調査成果は、現地説明会(9月13日開催)および調査略報に概略を公表しているが、本書と記載が異なる場合は、すべて本報告書が優先する。
12. 調査で得られた出土遺物や整理に関わる諸記録等については、岩手県立埋蔵文化財センターで保管・管理している。

凡 例

1. 本報告書に掲載した遺構図の方位は平面直角座標第X系の座標北を、遺構図の水糸レベルは海拔高度を示す。
2. 遺跡内に設けた基準点の成果は、平成9年度調査と同様、日本測地系における値である。
3. 遺構図の縮尺は原則1/50であるが、住居のカマドに関する断面図は1/25とした。また、焼土遺構と土器埋設遺構の平・断面図については1/40、柱穴の平面図は1/100である。
4. 遺構名は、野外調査ではその遺構が属するグリッド名を付けて表していたが、整理作業の段階で遺構毎の連番に付け替えている。なお、本書第IV章では、新遺構名とともに旧遺構名についても併記した。
5. 層名は基本層序にはローマ数字を、遺構の埋土にはアラビア数字を用いた。
6. 土層の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を使用した。
7. 遺物実測図の縮尺は、剥片石器1/2、礫石器1/3、土器類1/3、鉄製品・土製品・木器・陶磁器1/2、銭貨は原寸である。
8. 遺物写真図版の縮尺は、遺物実測図のそれにほぼ準じている。

実測図凡例

 焼土（カマド燃焼部・炉）	 内面黒色処理（内黒）
 焼土（焼失時のもの）	 タール付着部分
 灰白色火山灰（十和田a火山灰・To-a）	 羽口溶着滓
 灰層の範囲	 羽口還元部分
	 礫石器磨面

目 次

序
例言
凡例

< 本 文 >

I	調査に至る経過	1
II	遺跡の立地と環境	3
	1. 遺跡の位置と立地	3
	2. 地形・地質	3
	3. 基本層序	5
	4. 周辺の遺跡	6
III	野外調査と室内整理の方法	10
	1. 野外調査	10
	2. 室内整理	11
IV	検出された遺構と遺構内出土遺物	14
	1. 竪穴住居跡	14
	2. 住居状遺構	59
	3. 土坑	67
	4. 焼土遺構	79
	5. 柱穴	83
	6. 土器埋設遺構	83
V	遺構外出土遺物	143
	1. 平安時代の遺物	143
	2. 縄文時代の遺物	143
VI	まとめ	181
	1. 遺構	181
	2. 遺物	184
	3. 墨書土器について	187
	4. 芋田II遺跡の集落のあり方	192
付篇	芋田II遺跡の自然科学分析	195

< 図 版 >

第1図	岩手県全区	1	第36図	第14号住居跡(2)	54
第2図	遺跡の位置(1:50,000 沼宮内)	2	第37図	第15号住居跡(1)	55
第3図	地形分類図	3	第38図	第15号住居跡(2)	56
第4図	周辺の地形	4	第39図	第16号住居跡	58
第5図	調査区について	5	第40図	第1号住居状遺構	59
第6図	土層柱状図	5	第41図	第2号住居状遺構	60
第7図	トレンチ配置図	6	第42図	第3号住居状遺構	62
第8図	周辺の遺跡	8	第43図	第4号住居状遺構	63
第9図	遺構配置図	13	第44図	第5・6号住居状遺構	65
第10図	第1号住居跡(1)	15	第45図	第7号住居状遺構	66
第11図	第1号住居跡(2)	16	第46図	土坑(1)	69
第12図	第1号住居跡(3)	17	第47図	土坑(2)	71
第13図	第2号住居跡(1)	19・20	第48図	土坑(3)	73
第14図	第2号住居跡(2)	21	第49図	土坑(4)	75
第15図	第3号住居跡(1)	23	第50図	土坑(5)	78
第16図	第3号住居跡(2)	24	第51図	焼土遺構・土器埋設遺構	81
第17図	第4号住居跡(1)	27・28	第52図	柱穴(1)	84
第18図	第4号住居跡(2)	29	第53図	柱穴(2)	85
第19図	第5号住居跡(1)	31	第54図	遺構内出土遺物(1)	87
第20図	第5号住居跡(2)	32	第55図	遺構内出土遺物(2)	88
第21図	第6号住居跡(1)	35・36	第56図	遺構内出土遺物(3)	89
第22図	第6号住居跡(2)	37	第57図	遺構内出土遺物(4)	90
第23図	第7号住居跡(1)	38	第58図	遺構内出土遺物(5)	91
第24図	第7号住居跡(2)	39	第59図	遺構内出土遺物(6)	92
第25図	第7号住居跡(3)	40	第60図	遺構内出土遺物(7)	93
第26図	第8号住居跡	41	第61図	遺構内出土遺物(8)	94
第27図	第9号住居跡	43	第62図	遺構内出土遺物(9)	95
第28図	第10号住居跡(1)	45	第63図	遺構内出土遺物(10)	96
第29図	第10号住居跡(2)	46	第64図	遺構内出土遺物(11)	97
第30図	第11号住居跡(1)	47	第65図	遺構内出土遺物(12)	98
第31図	第11号住居跡(2)	48	第66図	遺構内出土遺物(13)	99
第32図	第12号住居跡(1)	49	第67図	遺構内出土遺物(14)	100
第33図	第12号住居跡(2)	50	第68図	遺構内出土遺物(15)	101
第34図	第13号住居跡	51	第69図	遺構内出土遺物(16)	102
第35図	第14号住居跡(1)	53	第70図	遺構内出土遺物(17)	103

第71図	遺構内出土遺物 (18)	104	第99図	遺構内出土遺物 (46)	132
第72図	遺構内出土遺物 (19)	105	第100図	遺構内出土遺物 (47)	133
第73図	遺構内出土遺物 (20)	106	第101図	遺構内出土遺物 (48)	134
第74図	遺構内出土遺物 (21)	107	第102図	遺構内出土遺物 (49)	135
第75図	遺構内出土遺物 (22)	108	第103図	遺構内出土遺物 (50)	136
第76図	遺構内出土遺物 (23)	109	第104図	遺構内出土遺物 (51)	137
第77図	遺構内出土遺物 (24)	110	第105図	遺構内出土遺物 (52)	138
第78図	遺構内出土遺物 (25)	111	第106図	遺構内出土遺物 (53)	139
第79図	遺構内出土遺物 (26)	112	第107図	遺構内出土遺物 (54)	140
第80図	遺構内出土遺物 (27)	113	第108図	遺構内出土遺物 (55)	141
第81図	遺構内出土遺物 (28)	114	第109図	遺構内出土遺物 (56)	142
第82図	遺構内出土遺物 (29)	115	第110図	遺構外出土遺物 (1)	144
第83図	遺構内出土遺物 (30)	116	第111図	遺構外出土遺物 (2)	145
第84図	遺構内出土遺物 (31)	117	第112図	遺構外出土遺物 (3)	146
第85図	遺構内出土遺物 (32)	118	第113図	遺構外出土遺物 (4)	147
第86図	遺構内出土遺物 (33)	119	第114図	遺構外出土遺物 (5)	148
第87図	遺構内出土遺物 (34)	120	第115図	遺構外出土遺物 (6)	149
第88図	遺構内出土遺物 (35)	121	第116図	遺構外出土遺物 (7)	150
第89図	遺構内出土遺物 (36)	122	第117図	遺構外出土遺物 (8)	151
第90図	遺構内出土遺物 (37)	123	第118図	遺構外出土遺物 (9)	152
第91図	遺構内出土遺物 (38)	124	第119図	遺構外出土遺物 (10)	153
第92図	遺構内出土遺物 (39)	125	第120図	住居跡長辺・短辺比	181
第93図	遺構内出土遺物 (40)	126	第121図	カマド煙道方位	182
第94図	遺構内出土遺物 (41)	127	第122図	土器分類図	185
第95図	遺構内出土遺物 (42)	128	第123図	代表的な墨書・刻書土器	189
第96図	遺構内出土遺物 (43)	129	第124図	「山マ」に関わる墨書土器	192
第97図	遺構内出土遺物 (44)	130	第125図	集落の変遷	193
第98図	遺構内出土遺物 (45)	131			

< 写真図版 >

写真図版1	空中写真	199	写真図版36	遺構内出土遺物(1)	234
写真図版2	平坦部近景	200	写真図版37	遺構内出土遺物(2)	235
写真図版3	基本層序と調査区各部の全景	201	写真図版38	遺構内出土遺物(3)	236
写真図版4	第1号住居跡	202	写真図版39	遺構内出土遺物(4)	237
写真図版5	第2号住居跡	203	写真図版40	遺構内出土遺物(5)	238
写真図版6	第3号住居跡	204	写真図版41	遺構内出土遺物(6)	239
写真図版7	第4号住居跡(1)	205	写真図版42	遺構内出土遺物(7)	240
写真図版8	第4号住居跡(2)	206	写真図版43	遺構内出土遺物(8)	241
写真図版9	第5号住居跡	207	写真図版44	遺構内出土遺物(9)	242
写真図版10	第6号住居跡	208	写真図版45	遺構内出土遺物(10)	243
写真図版11	第7号住居跡	209	写真図版46	遺構内出土遺物(11)	244
写真図版12	第8号住居跡	210	写真図版47	遺構内出土遺物(12)	245
写真図版13	第9号住居跡	211	写真図版48	遺構内出土遺物(13)	246
写真図版14	第10号住居跡	212	写真図版49	遺構内出土遺物(14)	247
写真図版15	第11号住居跡	213	写真図版50	遺構内出土遺物(15)	248
写真図版16	第12号住居跡	214	写真図版51	遺構内出土遺物(16)	249
写真図版17	第13号住居跡	215	写真図版52	遺構内出土遺物(17)	250
写真図版18	第14号住居跡	216	写真図版53	遺構内出土遺物(18)	251
写真図版19	第15号住居跡	217	写真図版54	遺構内出土遺物(19)	252
写真図版20	第16号住居跡	218	写真図版55	遺構内出土遺物(20)	253
写真図版21	第1号住居状遺構	219	写真図版56	遺構内出土遺物(21)	254
写真図版22	第2号住居状遺構	220	写真図版57	遺構内出土遺物(22)	255
写真図版23	第3号住居状遺構	221	写真図版58	遺構内出土遺物(23)	256
写真図版24	第4号住居状遺構	222	写真図版59	遺構内出土遺物(24)	257
写真図版25	第5号住居状遺構	223	写真図版60	遺構内出土遺物(25)	258
写真図版26	第6号住居状遺構	224	写真図版61	遺構内出土遺物(26)	259
写真図版27	第7号住居状遺構	225	写真図版62	遺構内出土遺物(27)	260
写真図版28	土坑(1)	226	写真図版63	遺構内出土遺物(28)	261
写真図版29	土坑(2)	227	写真図版64	遺構内出土遺物(29)	262
写真図版30	土坑(3)	228	写真図版65	遺構内出土遺物(30)	263
写真図版31	土坑(4)	229	写真図版66	遺構外出土遺物(1)	264
写真図版32	土坑(5)	230	写真図版67	遺構外出土遺物(2)	265
写真図版33	焼土遺構(1)	231	写真図版68	遺構外出土遺物(3)	266
写真図版34	焼土遺構(2)	232	写真図版69	遺構外出土遺物(4)	267
写真図版35	焼土遺構(3)・土器埋設遺構ほか	233	写真図版70	遺構外出土遺物(5)	268

写真図版71 墨書・刻書土器集成 (1) …… 269

写真図版72 墨書・刻書土器集成 (2) …… 270

写真図版73 墨書・刻書土器集成 (3) …… 271

写真図版74 墨書・刻書土器集成 (4) …… 272

< 表 >

表1 周辺の遺跡 …… 9

表2 柱穴観察表 …… 86

表3-1 遺物観察表 (遺構内) …… 154

表3-2 遺物観察表 (遺構外) …… 176

表4 住居跡一覧表 …… 182

表5 カマド一覧表 …… 183

表6 遺構別出土土器一覧表 …… 186

表7 墨書 (刻書含む) 土器一覧表 …… 190

I 調査に至る経過

「芋田II遺跡」は、「渋民バイパス改築工事」の施工に伴って、その事業区域内に存することから発掘調査を実施することになったものである。

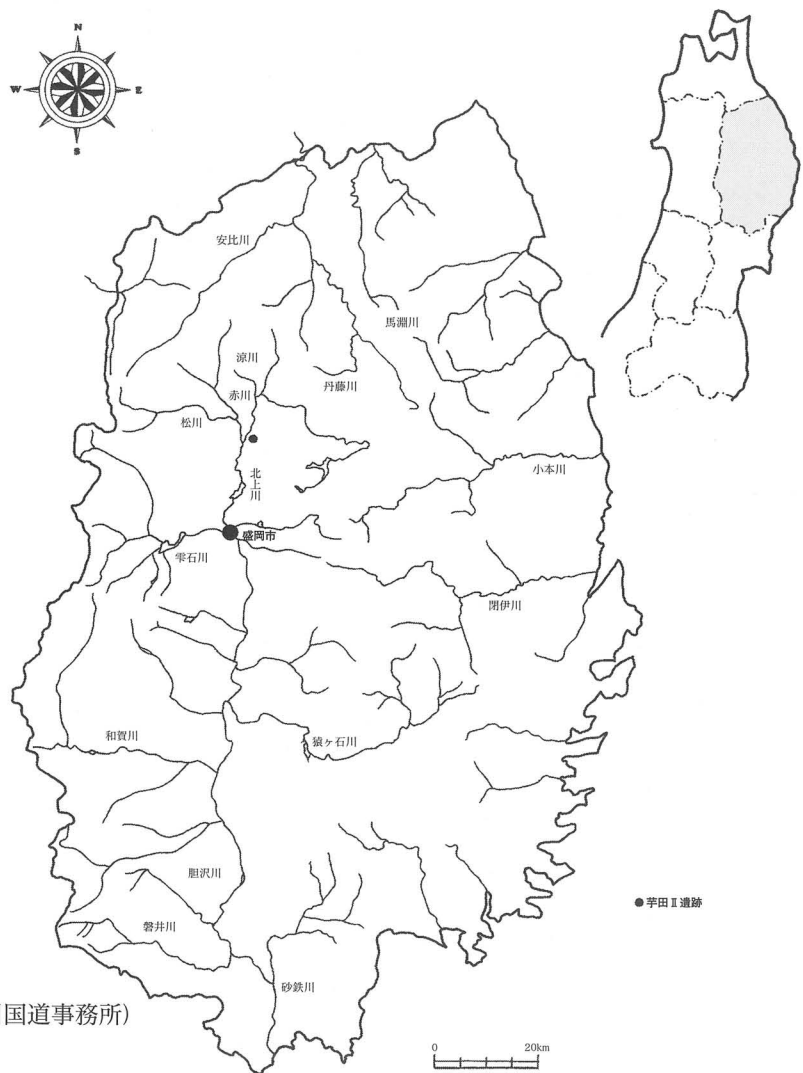
一般国道4号は、東京都中央区を起点として、青森県青森市に至る延長約858kmのわが国最長の国道で、東北地方の大動脈を担っている主要幹線道路である。

渋民バイパスは、岩手郡玉山村渋民と同村馬場の間約5.6kmの区間で計画されている。現国道は全幅員7.8～8.5mと狭く、且つ市街地を通過しているにもかかわらず、両側に歩道がない状態であり、近年の自動車交通の増大と車両の大型化に伴い、沿道環境の保全及び交通安全の確保が困難になっている。このため交通の円滑化、交通安全の確保、沿道環境の改善などを目的に渋民バイパスを建設することとなり、昭和61年度に事業着手し、平成2年度に用地着手、平成8年に工事着手した。

この区間の埋蔵文化財包蔵地については、岩手県教育委員会が分布調査を実施し、「芋田II遺跡」も確認されている。「芋田II遺跡」については、平成14年度に試掘調査を実施している。その結果に基づいて岩手県教育委員会は、国土交通省東北地方整備局岩手工事事務所（現河川国道事務所）に対し、事業について照会した。回答を受けた岩手県教育委員会は、岩手工事事務所と協議を行い、発掘調査を財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業とすることとした。

これにより、岩手県教育委員会は平成15年度事業について平成15年1月14日付け「教生第1457号」で財団法人岩手県文化振興事業団に、平成15年3月6日付け「教生第1630号」で岩手工事事務所長に通知した。これを受けた財団法人岩手県文化振興事業団は、平成15年4月1日付けで岩手河川国道事務所長と岩手県文化振興事業団理事長との間で受託契約を締結し、同年4月11日から「芋田II遺跡」の発掘調査に着手した。

(国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所)



第1図 岩手県全図



第2図 遺跡の位置図

II 遺跡の立地と環境

1. 遺跡の位置と立地

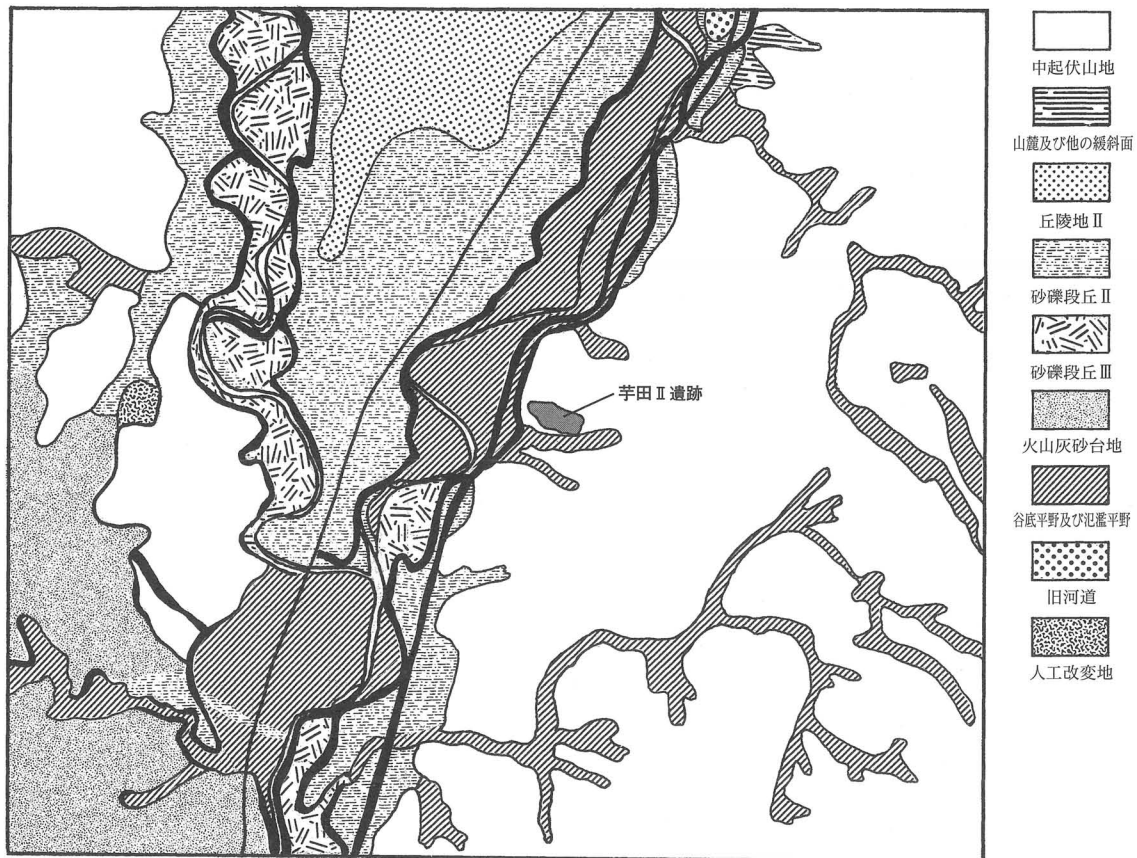
芋田II遺跡の所在する玉山村は、岩手県の中央やや北寄りに位置し、県庁所在地である盛岡市の北東に隣接している。北は岩手郡岩手町・葛巻町、東は下閉伊郡岩泉町、西は岩手郡滝沢村・西根町の1市4町1村と接している。また、村の西方をIGRいわて銀河鉄道線と国道4号が縦断している。

芋田II遺跡はIGRいわて銀河鉄道株式会社好摩駅の南東約1km、国道4号芋田交差点の東脇に位置し、岩手郡玉山村大字芋田字芋田53-10ほかに所在している。その地点は北緯39度51分49秒、東経141度11分9秒(日本測地系)付近であり、国土地理院発行2万5千分の1地形図「渋民」、同5万分の1地形図「沼宮内」の図幅に含まれる。

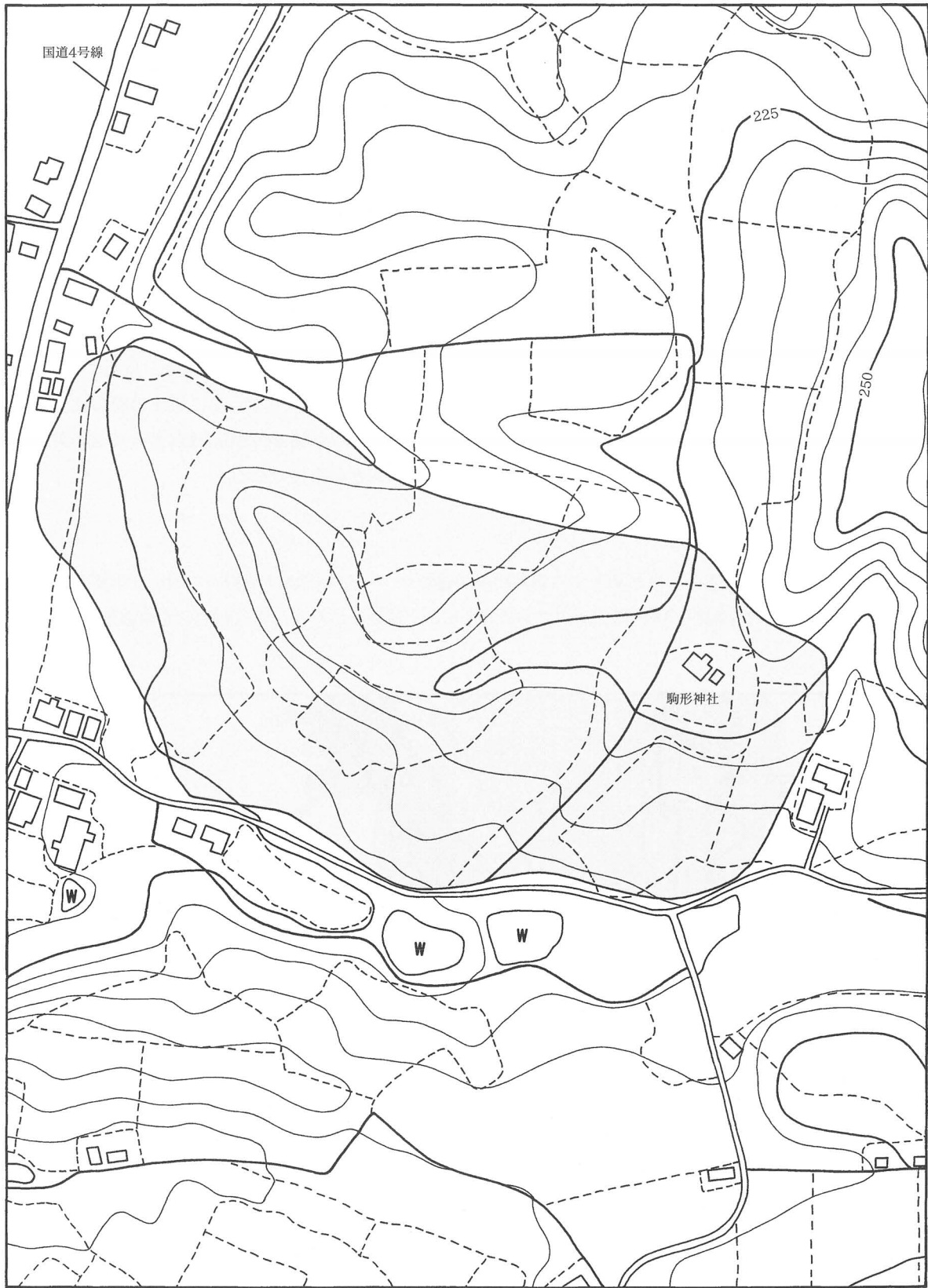
遺跡は、秀峰姫神山から延びる小起伏山地の縁辺部に立地し、遺跡の範囲は南北に200m、東西に450mを測る。南側は西流する沢で区切られており、沢は西方約500mで北上川と合流している。遺跡の標高は、北側の尾根部で223m前後、南側の平坦地で205.7~206.7mほどで、平坦部と尾根部の比高はおよそ17mである。調査前の状況は、平坦部が畑地として利用されていたほかは、ほとんどが山林である。

2. 地形・地質

玉山村は、西部には岩手山をはじめとする奥羽山脈が連なり、一方東部には姫神山を中心に物見山・時館山などの北上山系の山々を臨む。県内最大河川である北上川の上流域にあたり、川は村西部を南流している。



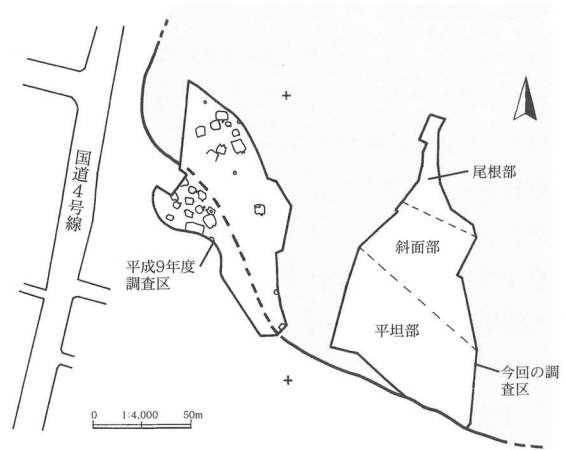
第3図 地形分類図



第4図 周辺の地形

また、この周辺は、東西にある数本の支流が合流する地域で、東側からは西郡川や芦名沢川が、西側からは松川などの支流が合流する。本村内の北上川周辺は河岸段丘がよく発達しており、平坦性も強い。この地域の河岸段丘は3つに区分され、最も発達している段丘を中位段丘、それより高位の段丘を上位段丘、低位のものを下位段丘としている。中位段丘は北上川や松川沿いに連続して分布し、村内の主要な台地を形成している。下位段丘は、中位段丘を侵食して形成されたもので、中位段丘の前面、川沿いの両岸に断片的に分布している。遺跡が立地する北上川の東側は、北上山系から延びる山地とそこにある小河川が形成した平野からなっている。

(飯坂)



第5図 調査区について

3. 基本層序

今回の調査区は地形的に大きく3つに分けられた。調査では調査区北側から、北西方向に延びる尾根の一部を「尾根部」、そこから南側の平坦部に続く南向きの斜面を「斜面部」、平安時代の遺構が集中する遺跡の南端までの平坦地を「平坦部」と呼ぶことにした。これまでの試掘調査や周辺の地形からみても、各部の層序が異なっていることは明らかで、調査開始当初には数カ所（第7図参照）で基本層序の確認と堆積状況の把握に努めた。しかし、調査区全域の層序をつかむまでには、相当の時間を要することとなった。以下に「平坦部」トレンチにおける層序を示す。

<第I層> 黒褐色土 (10YR3/2) シルト 表土・耕作土で草木根を多く含む。層厚25~30cm。

<第II層> 黒色土 (10YR2/1) シルト 岩手山起源の火砕流堆積物であるオレンジパミスを含む黒色土。上面が平安時代の遺構検出面で、かつ縄文時代後期・晩期の遺物包含層である。層厚20~25cm。

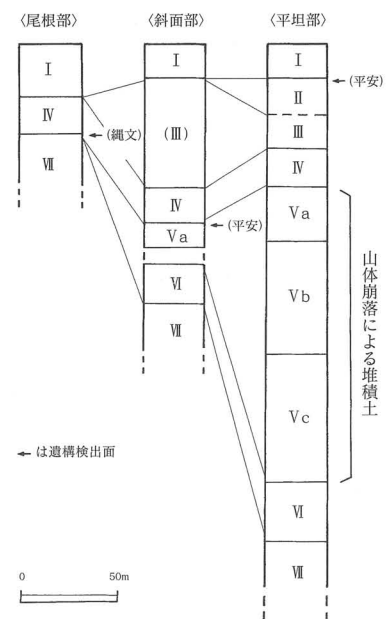
<第III層> 黒色土 (10YR2/1) シルト
第II層のオレンジパミスの混入が減り、他の浮石粒や小さな円礫を含む。第II層との区別は明瞭でない。層厚10~25cm。

<第IV層> 黒褐色土 (10YR2/3) 粘土質シルト
浮石、円礫を含み、第II・III層よりも黒みを欠く。層厚5~20cm。

<第V層> 褐色土 (10YR4/6) 粘土質シルト
当初地山と思われた層で、詳しくは後述のとおり。大きく3層に分けられ、最下層では砂礫が含まれる。縄文時代後期以前の山体崩落が原因となって形成された層と思われる。層厚120~160cm。

<第VI層> 黒色土 (10YR2/1) 粘土質シルト 第V層が崩落する以前の沢地形の堆積物で、青黒く水っぽい。本層上位から湧水があり、無遺物層であった。層厚20~30cm。

<第VII層> 暗灰黄色土 (2.5Y4/2) 粘土質土 地山で層厚は不明。部分的にグラライ化している。



第6図 土層柱状図

なお、「尾根部」では第II・III層が発達せず、表土（森林腐植土）下に第IV層・第VII層の順で層位が確かめられた。第V・VI層については、上述のとおり尾根部には存在しえない層である。

調査も中盤に差しかかった頃、それまで竪穴住居の床面となる礫混じりの層（第V層）が地山、いわゆる最終的な遺構検出面ではなく、さらにその下位に縄文時代後期以前の黒色土層（第VI層）が存在していることが判明した。このことは、斜面部から平坦部への変換点付近につくられた竪穴住居に付属する土坑の底面が黒色土であったため、あらかじめ予測していたものであった。部分的にトレンチ調査を行ったところ、第VI層は平坦部全域に分布することが明らかとなったが、いずれのトレンチにおいてもその黒色土中から湧水が見られ、かつ遺物も含まれていなかった。このことから、第V層以下の取り扱いについては、平坦部面積約3,900㎡のおよそ3%程度のトレンチ調査（第VII層上面の検出まで）で終了することとなった。

前回の調査で確認された層序と今回の層序との関係であるが、前回報告の第VI層（褐色土層）は今回の第V層にあたり、それ以前の層についてもほぼ対応するものと思われる。なお、前回の調査では、第V層褐色土層以下については確認していなかった。(濱田)

4. 周辺の遺跡

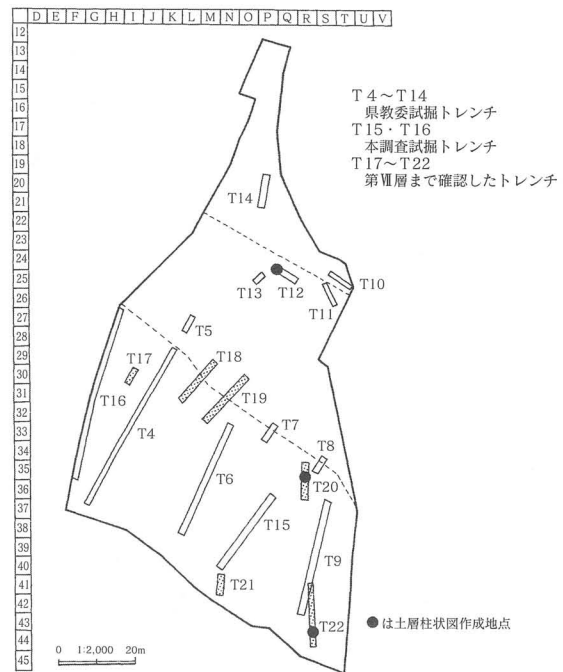
岩手県教育委員会が作成した平成14年度版『岩手県遺跡情報検索システム（盛岡地方振興局管内北部）』によると、玉山村内にはこれまでに旧石器から近世までの遺跡206箇所が確認されている。時代毎のそれぞれの遺跡数は、旧石器時代1遺跡、縄文・弥生時代130遺跡、古墳～古代14遺跡、中世以降10遺跡、縄文・弥生と平安、中世の複合遺跡が19遺跡である。ここでは、調査された主な遺跡とその特徴を挙げておく。また第8図には、芋田II遺跡を中心とする周辺の遺跡を、表1にはその図中の遺跡の内容を示した。

旧石器時代の遺物が出土した遺跡は、小石川遺跡である。昭和55年に玉山村教育委員会によって発掘調査が行われた。出土遺物は、尖頭器4点、剥片27点、石核4点、屑片104点、礫製ハンマー1点、台石1点等であり、後期旧石器時代の遺跡であることが確認された。

縄文時代の遺跡には、日戸遺跡、間洞遺跡、長渡遺跡、小長根II遺跡、才津沢遺跡、芦名沢I遺跡、芦名沢II遺跡、宇登遺跡がある。それぞれの遺跡の概要は次のとおりである。

<日戸遺跡> 昭和31年に草間俊一氏らによって調査された。中期～後期の遺物のほか、早期・前期の土器及び土器片が出土していることが日戸遺跡の調査略報に記されている。代表的な出土遺物には、長さ47cmもの大形磨製石斧がある。また、平成8～9年には熊谷常正氏（盛岡大学）らによって調査が行われており、中期の土器、後期の土器・土偶が出土している。

<芦名沢I遺跡> 平成9年に（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（以下埋文センター）により調査され、前期のものと思われる竪穴住居跡3棟を検出した。



第7図 トレンチ配置図

＜芦名沢Ⅱ遺跡＞ 平成10年に埋文センターにより調査され、中期後葉の複式炉を持つ竪穴住居跡1棟を検出した。

＜間洞遺跡＞ 平成7年に埋文センターにより調査され、後期のものと思われる土坑が数十基検出されている。遺物は中期後葉の大名系土器や後期前葉末に相当する土器が出土している。

＜長渡遺跡＞ 平成8～9年に埋文センターにより調査され、後期のものと思われる竪穴住居跡が2棟、土坑が21基検出されている。

＜小長根Ⅱ遺跡＞ 平成9年に埋文センターにより調査され、早期及び後期・晩期の土器が出土した。

＜才津沢遺跡＞ 平成8年に埋文センターにより調査され、後期の竪穴住居跡が1棟、晩期の竪穴住居跡が1棟、縄文時代に属するものの詳細な時期が不明な竪穴住居跡が1棟、土坑が7基検出され、後期の土器が出土している。

＜前田Ⅰ遺跡＞ 昭和60～平成元年に東北大学により調査が行われている。3棟の竪穴住居跡が検出され、うち1棟から晩期の土器が多量に出土した。

＜宇登遺跡＞ 平成11年度に玉山村教育委員会によって発掘調査が行われ、晩期を主体とする土器や土製品（土偶など）、石器類が捨て場から大量に出土した。住居跡も確認されている。

弥生時代の遺跡には前述した才津沢遺跡がある。竪穴住居跡、住居状遺構がそれぞれ1棟ずつ、土坑が4基検出された。遺物は弥生前期に帰属すると思われる土器が出土している。

古墳時代～奈良時代の遺跡には、昭和48・49年に草間俊一氏らによって調査された釜崎遺跡、永井沢遺跡がある。釜崎遺跡からは、奈良時代の土師器を伴った竪穴住居跡が2棟確認されている。永井沢遺跡からは石組みや葺石を持たない円墳が確認され、隣接する岩手町浮島古墳群、西根町谷助平古墳群との関連性が想定される。

平安時代の遺跡は本遺跡同様、縄文との複合遺跡がほとんどで、前述の才津沢遺跡、芦名沢Ⅰ遺跡、小長根Ⅱ遺跡がある。各遺跡の概要は次のとおりである。

＜才津沢遺跡＞ 住居跡が3棟検出され、うち2棟は十和田a降下火山灰を埋土中に含み、1棟は含んでいない。また、この時期の土坑が1基検出されている。

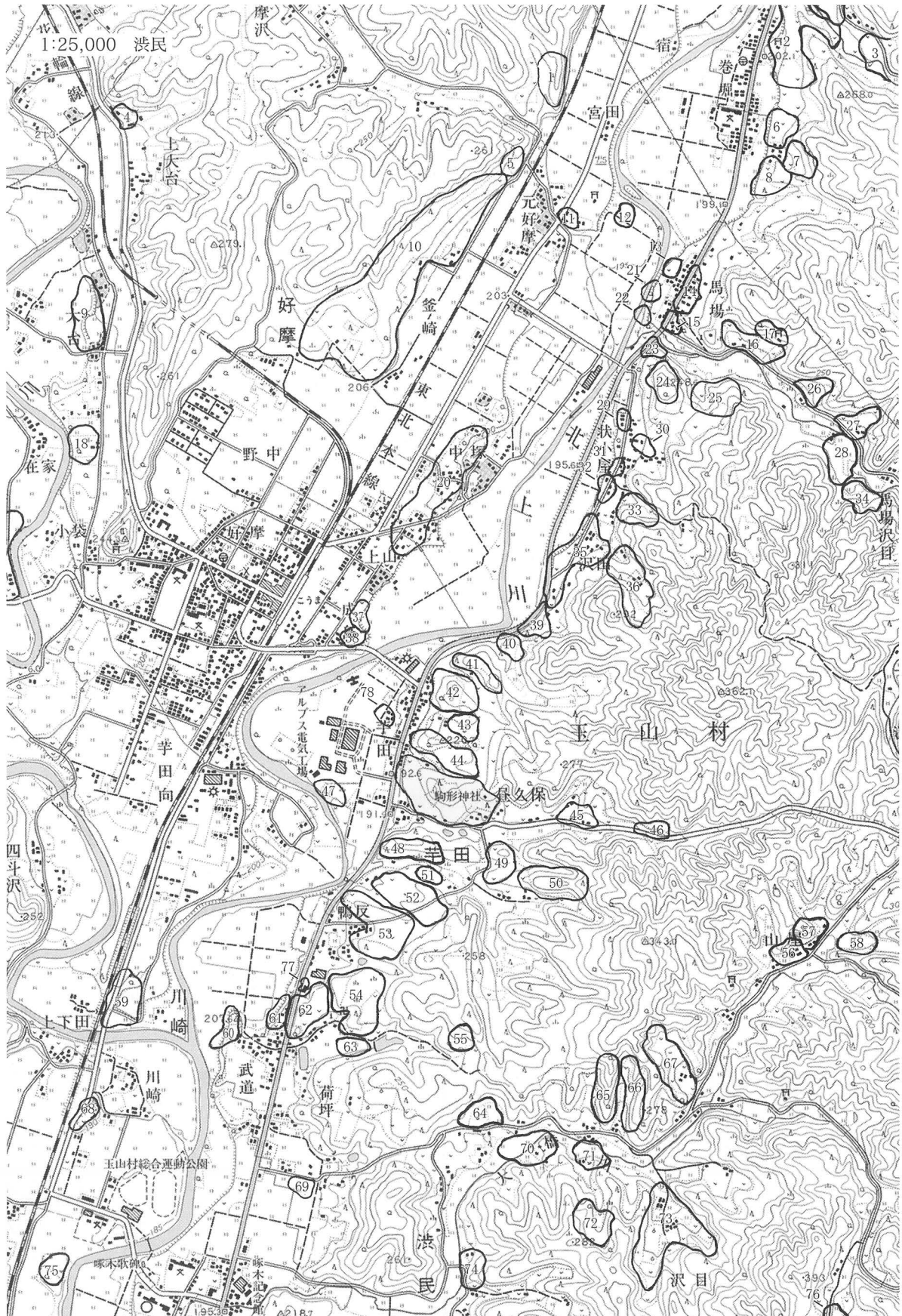
＜芦名沢Ⅰ遺跡＞ 住居跡が6棟検出され、うち2棟からは鍛冶炉とみられる施設が設けられ、床面からは鉄製品が多量に出土した。その他、土坑は6基検出されているが、9世紀後半から10世紀に相当する遺構と思われる。

＜小長根Ⅱ遺跡＞ 平安時代の墨書土器が1点出土したほか、玉山村教育委員会が調査した部分からはこの時期の住居跡2棟が検出された。

中世の遺跡には、現存するものとしては日戸館、玉山館がある。日戸館では15世紀末に相当する天目茶碗が表面採集されている。また、玉山館は玉山村史跡に指定されている。発掘調査されたものとしては下田八幡館、川口平館がある。

＜下田八幡館＞ 玉山村教育委員会により調査され、堀が4条、土塁が2条、掘立柱建物跡が10棟、竪穴住居跡が1棟検出された。

＜川口平館＞ 玉山村教育委員会により調査され、2条の堀と4基の土坑が検出された。 (飯坂)



第8図 周辺の遺跡

表1 玉山村の遺跡

番号	遺跡名	種別	時代	遺構・遺物	所在地
1	いたこ石	散布地	奈良・平安	土器、土師器、須恵器	大字永井字鳥木沢
2	本宮Ⅰ	散布地	縄文・平安	縄文土器、土師器	大字巻堀字本宮・幅下
3	幅下Ⅰ	散布地	縄文・弥生	縄文土器(後期)、弥生土器	大字好摩字幅下
4	上大台館	城館跡	中世	青磁器	大字好摩字新田
5	元好摩	散布地	縄文・奈良・平安	縄文土器(前・中・後期)、土師器	大字好摩字好摩沢
6	巻堀Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器(晩期)	大字巻堀字中道
7	熊堂館(えぞ館)	城館跡	中世		大字巻堀字中道
8	巻堀Ⅱ	散布地・集落跡	縄文	縄文土器(晩期)	大字巻堀字中道
9	小袋Ⅱ	集落跡	奈良・平安	土師器	大字好摩字小袋
10	釜崎	集落跡	縄文・奈良・平安	縄文土器、土師器	大字好摩字野中・好摩沢
11	築袋Ⅰ	散布地	奈良・平安	土師器?	大字好摩字築袋
12	築袋Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器	大字好摩字築袋
13	馬場北	散布地	縄文	縄文土器	大字馬場字馬場
14	馬場Ⅰ	集落跡	縄文	縄文土器	大字馬場字馬場平
15	熊野山	寺院跡			大字馬場字馬場平
16	馬場Ⅱ	集落跡	縄文	縄文土器(中期末)	大字馬場字馬場平
17	馬場Ⅳ	散布地	縄文	縄文土器	大字馬場字馬場平
18	小袋Ⅰ	集落跡	奈良・平安	土師器	大字好摩字小袋
19	古川	集落跡	奈良・平安	土師器	大字松内字在家
20	中塚館	城館跡	中世	掘、三郭	大字好摩字中塚
21	馬場中	散布地	縄文	縄文土器、土師器	大字馬場字馬場
22	馬場南	散布地	縄文	縄文土器、磁器、土師器	大字馬場字馬場
23	小豆とぎ	散布地	縄文	縄文土器、土師器	大字馬場字状小屋
24	榎沢山館	城館跡	中世	掘、平場、郭	大字馬場字状小屋
25	状小屋Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器(前・中期)、すり石、陶器	大字馬場字状小屋
26	馬場Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器	大字馬場字馬場平
27	芦名沢Ⅰ	散布地	縄文・平安	縄文土器、土師器	大字馬場字馬場平
28	芦名沢Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器	大字馬場字芦名沢
29	状小屋Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器、土師器、フレーク	大字馬場字状小屋
30	状小屋Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器	大字馬場字状小屋
31	沢田Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器、土師器	大字馬場字状小屋
32	沢田Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器	大字芋田字沢田
33	沢田Ⅴ	散布地	縄文	縄文土器	大字芋田字沢田
34	芦名沢Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器	大字馬場字芦名沢
35	沢田Ⅵ	集落跡、散布地	縄文・平安	縄文土器、土師器、陶器	大字芋田字沢田
36	沢田Ⅶ	集落跡	縄文	縄文土器、土師器	大字芋田字沢田
37	上山Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器	大字好摩字上山
38	上山Ⅱ	城館跡	中世		大字好摩字上山
39	沢田Ⅲ	集落跡、散布地	縄文・平安	縄文土器(前期)、土師器	大字芋田字沢田
40	沢田Ⅳ	散布地	縄文	縄文土器	大字芋田字沢田
41	芋田Ⅰ	散布地	縄文・平安	縄文土器、土師器	大字芋田字芋田
42	芋田Ⅱ	散布地	弥生・平安	弥生土器、土師器	大字芋田字芋田
43	芋田Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器	大字芋田字芋田
44	芋田Ⅳ	散布地	縄文・平安	縄文土器、土師器	大字芋田字芋田
45	芋田Ⅴ	散布地	縄文・弥生	縄文土器(後期)、弥生土器、土師器	大字芋田字芋田
46	芋田Ⅵ	散布地	奈良・平安	土師器	大字芋田字芋田
47	下芋田	散布地	弥生	弥生土器	大字芋田字下芋田
48	昼久保Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器	大字芋田字昼久保
49	芋田Ⅵ	集落跡	縄文・平安	縄文土器(中・後期)、土師器	大字芋田字昼久保
50	昼久保Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器(中・晩期)、土偶	大字芋田字昼久保
51	昼久保Ⅲ	散布地	縄文・平安	縄文土器、土師器	大字芋田字昼久保
52	昼久保Ⅳ	散布地	縄文	縄文土器	大字芋田字昼久保・武道
53	昼久保Ⅴ	散布地	縄文・弥生	縄文土器・後北式土器	大字芋田字昼久保・武道
54	武道Ⅳ	散布地	縄文	縄文土器	大字芋田字武道
55	武道東	散布地	縄文	縄文土器	大字芋田字武道
56	合羽沢	散布地	縄文	縄文土器(晩期)、土師器	大字洪民字山屋
57	山屋Ⅰ	散布地	縄文・弥生	縄文土器、弥生土器、土師器	大字洪民字山屋
58	水上	散布地	縄文	縄文土器(後期)	大字洪民字田ノ沢
59	矢城館	城館跡	中世	空掘、土師器	大字川崎字向川原
60	八幡館	城館跡	中世	郭、磁器、陶器	大字芋田字下武道
61	武道Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器	大字芋田字上武道
62	武道Ⅰ	散布地	縄文・平安	縄文土器、土師器	大字芋田字武道
63	武道Ⅴ	散布地	縄文	縄文土器	大字芋田字武道
64	大坊石	散布地	縄文	縄文土器	大字洪民字山屋
65	山屋Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器	大字洪民字山屋
66	山屋Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器	大字洪民字山屋
67	山屋Ⅴ	散布地	縄文	縄文土器	大字洪民字山屋
68	敷屋森館	城館跡	中世	掘、平場	大字川崎字川崎
69	越戸	散布地	平安	土師器	大字洪民字鶴飼
70	山屋館	散布地・城館跡	縄文・中世	縄文土器、土師器、平場	大字洪民字岩ノ沢
71	沢目	散布地	縄文	縄文土器	大字洪民字岩ノ沢
72	山屋Ⅳ	散布地	縄文	縄文土器	大字洪民字岩ノ沢
73	山屋開墾	散布地	縄文	縄文土器	大字洪民字岩ノ沢
74	山屋沢目	散布地	縄文	縄文土器(後・晩期)、石斧、土偶	大字洪民字岩ノ沢
75	下田	城館跡	中世	磁器、鉄片	大字下田字下田
76	寺の沢	散布地	縄文	縄文土器(晩期)	大字洪民字寺沢
77	武道Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器	大字芋田字武道
78	上芋田	散布地	縄文	縄文土器	大字芋田字上芋田

Ⅲ 野外調査と室内整理の方法

1. 野外調査

(1) グリッド設定と遺構名

グリッドの設定は、今回の調査区が平成9年度調査区の東側数十メートル内に隣接し、また地形面も同じであることから、前回同様、日本測地系の平面直角座標第X系を用いた。調査区内には、3級基準点2点と補助点4点の計6点を委託測量し、それを基に区画割りを行った。6点の成果値は以下のとおりである。

基準点1 X=-15075.000m Y=30025.000m H=218.967m

基準点2 X=-15150.000m Y=30025.000m H=206.000m

補助点1 X=-15075.000m Y=30050.000m H=223.057m

補助点2 X=-15075.000m Y=30000.000m H=209.939m

補助点3 X=-15125.000m Y=30025.000m H=206.696m

補助点4 X=-15125.000m Y=30000.000m H=205.700m

前回調査のグリッドは、座標原点をX=-14050.000m、Y=29925.000mに置いた5×5mを一区画としたもので、北から南方向にアラビア数字の1, 2, 3……、東から西方向にアルファベットの大文字A, B, Cを組み合わせて表示(例:A1区・B2区)した。今回の調査にあたっては、前回の座標原点をそのまま用いることとし、Y方向(東西方向)についてのみ、前回とは逆に西から東へアルファベットの大文字を付け直した。つまり、座標原点のY方向、Y=29925.000mを境として、東西方向のそれぞれにアルファベットが付き、東から西にA～が付くものが平成9年度調査、西から東にA～が付くものが今回使用したグリッドとなっている。なお、調査における杭の名称は、北西隅のグリッドを与えた。

なお、遺構名については、その遺構の北西隅が属するグリッド名を付けて、A1住居跡・B2土坑のように呼称し、室内整理の時点で第1号住居跡・第2号土坑など、遺構毎の連番に付け替えた。また、住居状遺構と方形土坑については、規模等から総合的に判断し、住居状遺構から土坑へあるいは逆に付け替えたものが数遺構にある。

(2) 雑物除去・粗掘・遺構検出

4月11日午後に調査器材の搬入、その後野外作業員に対するオリエンテーリングを行い、次の日から現場設営、雑物の除去、試掘調査を行った。平坦部については、事前の試掘調査時に行われた刈り払いからあまり時間も経っていないためか、雑物も少なく試掘トレンチの確認や新たに設定したトレンチ調査にはすぐ着手することができた。しかし、調査区内の斜面部には不法投棄されたゴミの山(ビン・カン類、タイヤ、洗濯機、トタン板、毛布、衣類など)があり、最終的には村の生活環境課の職員数名と遺跡の野外作業員18名で分別しながらの処理作業を丸1日行った。5月の連休明けのことであった。

試掘調査では、尾根部・平坦部の表土の厚さや遺構の有無、遺物の出土状況を確認した。その上で、第I層(表土・耕作土)の除去については重機の使用が可能と判断、5月の連休明けからほぼ1ヶ月間、調査区全域にわたって重機による表土除去を行った。

遺構の検出は、平坦部では部分的に十和田a降下火山灰が含まれる第II層上面で行った。さらに、縄文時代の遺構の有無を確かめるため、調査終盤には第IV層の褐色土上面まで検出面を下げている。なお、既述したが、第IV層下にも縄文時代の遺物が含まれる可能性があることから、平坦部全体面積の数%ではあるが、第IV層下

2 mの湧水がある層までトレンチ調査を行った。が、それらは確認されなかった。なお、尾根部については第IV層相当層でのみ、斜面部は第II層相当層と第IV層の2面で検出作業を行っている。

(3) 精査・実測・写真撮影

遺構は、原則として竪穴住居跡・住居状遺構・大きめの方形土坑などは4分法で、円形や楕円形の土坑類・柱穴の一部は2分法で精査した。遺物の取り上げについては、4分法で行った住居跡などは、Q1～Q4の4つに全体を分け、基本的には埋土・床面直上・床面・カマド内・ピット内・貼床内などの名称を付けて取り上げた。床面や付属施設から出土したものには、それぞれの場所と連番を付して取り上げている。

なお、焼土遺構と土器埋設遺構の精査は、検出状態の平面を作図後にたちわり、その断面図を作成した。

実測は基本的に簡易遣り方測量で行ったが、部分的に光波測距儀（トータル・ステーション）も使用した。現場で作成した各遺構の平面図の縮尺は、基本的に1/20であるが、住居跡のカマドに関する断面図はすべて1/10で作成した。

野外調査での写真撮影は、35mm版2台（モノクローム1台・カラーリバーサル1台）と6×7cm版モノクローム1台、デジタルカメラ1台の計4台を用いた。住居跡の全景はすべて、住居埋土・土坑は35mm2台のみなど、その都度状況に応じて使い分けた。デジタルカメラは、現地説明会や各種資料の作成に大いに役立った。空中写真は、平坦部の調査が終了に近づいた時点の9月17日にセスナ機による撮影を行っている。

(4) 普及活動

遺跡の現地説明会は、平坦部に検出された平安時代の遺構をメインとして、9月13日（土）10：30から一時間半にわたって開催した。通常より幾分早い時期に開催したが、平安時代の検出面をさらに下げる必要からそうなったものである。天候もあまり良くなかったためか、一般参加者は40名あまりであったが、村内の方々のみならず、仙台市や山形市など遠方からもおいでいただいた。

また6月には、村内にある渋民中学校一年生約70名の遺跡見学会も行った。地域の学習という授業の一環で遺跡を見学したいとのことで、当日は出てきた土器や石器に直に触れる時間を設けた。やはり、話を聞くよりもモノに触れる喜びのほうが大きかったようで、その後はいろいろな質問も出て、こちらもいい機会を与えていただいたと思っている。

2. 室内整理

(1) 遺物の整理

今回の調査で出土した遺物は、当センターの収納用大コンテナ（容量40%）25箱である。これらの水洗は、ほとんど野外調査期間中の雨天時に行ったが、一部は11月からの室内整理作業において実施した。その後、土器類は遺構内・外および種類毎の仕分け、ジェットマーカー・手書きによる注記、接合・復原作業の順に進め、掲載用遺物の選別・登録作業を行った。登録した遺物は、実測（採拓）・写真撮影・実測図トレースを行い、遺物図版を作成した。他の遺物についても、概ねこのような作業を経て図版作成まで行っているが、次にそれらについて、上記の整理手順と異なる点について記載する。

石器類は、フレイク・チップ、砥石の細片など全点登録し、製品についてはすべて掲載した。鉄製品は、錆を落とし実測・写真撮影後、外部機関で保存処理を行った。これらは全点掲載している。木製品（木器）は、炭化していることから保存処理は施さなかった。これは樹種同定のサンプリング後、乾燥、3点を接合させた。焼失住居出土の炭化材、およびカマド内出土の骨片等、自然遺物については肉眼による同定を行った。骨片は

細かいものも多く、いずれも種不明と判断されている。

(2) 遺構実測図の整理

野外調査で得られた遺構の実測図は、平面図・断面図の照合後、必要に応じて合成等の編集をし第2原図を作成した。その後トレース、版組を行い遺構図版を作成した。土層注記は、「色調」「土性」「土質」をベースに「備考」として層の特徴を付け加えているが、掲載にあたっては「備考」部分を若干編集し直している。これらの遺構図面は、原図・第2原図とも通し番号を付して台帳作成の後、収納した。

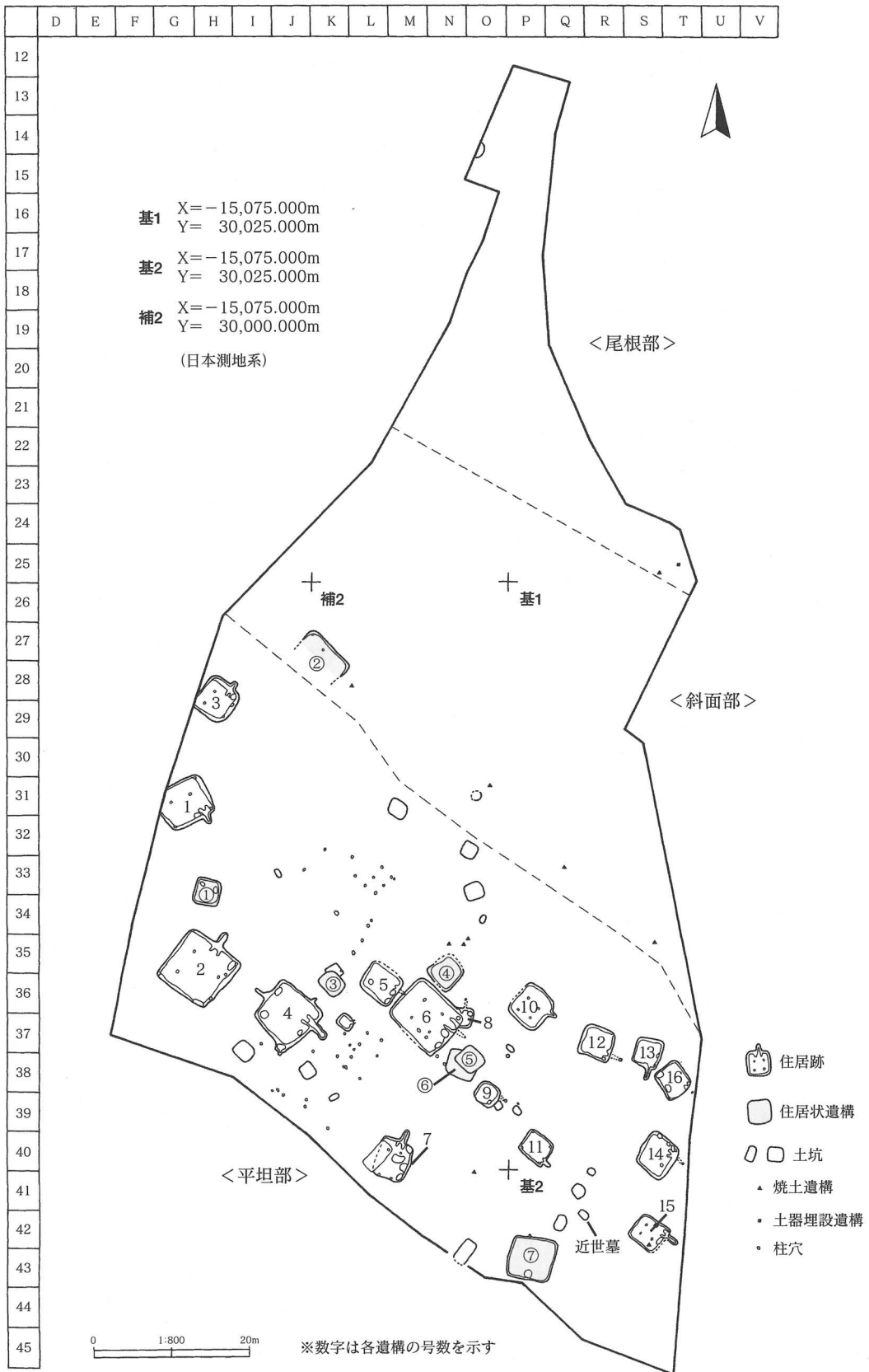
(3) 写真類の整理

調査で撮影した遺構写真は、フィルムの規格毎(35mm版モノクローム、同リバーサル、6×7版モノクローム)に整理し、台帳は撮影カード順のものと遺構毎のもの二種類を作成した。写真図版は、主に後者を用いて作成した。なお、野外調査では9月17日には航空写真を撮影している。写真は、6×7版モノクロームと35mm版リバーサルの二種で、遺跡の遠景・調査区の近景等を3カット撮影した。

遺物写真は、当センターの写真技師が35mm版モノクロームフィルムで撮影した。その後は、遺構写真同様、アルバムに整理し、掲載遺物は写真図版を作成した。(濱田)

<引用・参考文献>

- 岩手県農政部北上開発室 (1978) : 『北上山系開発地域 土地分類基本調査 沼宮内』
- 上野猛ほか (1964) : 『下田八幡館』 文化財調査報告書第10集 玉山村教育委員会
- 菊池幸裕 (1997) : 『川口平館跡』 文化財調査報告書第15集 玉山村教育委員会
- 木戸口俊子ほか (1997) : 『間洞II遺跡発掘調査報告書』 岩文振報告書第260集 (財) 岩文振
- 金子佐知子 (1998) : 『才津沢遺跡発掘調査報告書』 岩文埋調査報告書第278集 (財) 岩埋文
- 菊池強一ほか (1962) : 『小石川遺跡』 文化財調査報告書第9集 玉山村教育委員会
- 草間俊一 (1956) : 『玉山村日戸遺跡調査略報』 岩手大学学芸学部年報第14巻
- 土井宣夫ほか (1983) : 『岩手山麓、柳沢軽石・五百森泥流の¹⁴C年代—岩手火山噴出物とそれに関連する堆積物の¹⁴C年代 (その1) — 『岩手県立博物館研究報告』 1
- (1986) : 『岩手火山、分火山灰の¹⁴C年代と完新世の火山活動—岩手火山噴出物とそれに関連する堆積物の¹⁴C年代 (その2) — 『岩手県立博物館研究報告』 4
- 晴山雅光・岩淵計 (1999) : 『長渡・小長根II遺跡発掘調査報告書』 岩文振報告書第284集 (財) 岩文振
- 古館貞身 (2000) : 『芦名沢II遺跡発掘調査報告書』 岩文振報告書第322集 (財) 岩文振
- 村上 拓 (1999) : 『芦名沢I遺跡発掘調査報告書』 岩文埋調査報告書第295集 (財) 岩埋文
- 玉山村役場 (1979) : 『村誌たまやま』
- 玉山村教育委員会 (2003) : 『玉山の文化財』



第9図 遺構配置図

IV 検出された遺構と遺構内出土遺物

1. 竪穴住居跡

今回の調査によって、竪穴住居跡は16棟確認された。いずれも調査区南側の平坦部から検出されているが、すべて平安時代、9世紀後半～10世紀初頭の時期を主体とする住居群である。一部に住居間の重複があることから、16棟すべてが同時に存在し集落を構成していたわけではない。

確認された住居跡は、一辺が7～8m前後の大形のもの、4～5m前後の中形のもの、それ以下の小形のものに大別され、それぞれ規模に応じた特徴を有している。

第1号住居跡 (G30住)

遺構 (第10～12図、写真図版4)

〔位置・重複〕 調査区南側の平坦部西端G31区付近にあり、第2号住居跡とは南に13m、第3号住居跡とは北に7mの距離がある。また、第2号住居跡との間には第1号住居跡遺構を挟んでいるが、遺構間の重複はない。また、本遺構の西隅は調査区外に延びている。

〔検出面・状況〕 第II層で、方形の黒色土のプランに円形に入る灰白色火山灰が確認された。

〔平面形〕 西側の壁を若干掘りすぎているが、わずかに東西方向に長い長方形である。

〔規模〕 5.57m×(6.30m) 〔壁高〕 51cm～69cm

〔埋土〕 11層に分層される自然堆積である。上位から中位にかけては黒色土・黒褐色土を主体とし、3層と4層間に灰白色火山灰を含む。それ以下も黒褐色土が基調となるが、II層起源の黒色土、IV層起源の暗褐色の崩落土ブロックがみられる。

〔壁〕 いずれの壁も底面から外傾して立ち上がるが、第II層の崩落により本来の壁の立ち上がりではない。

〔床面〕 ほぼ平坦で、第IV層を床面とする。貼床は施されていない。

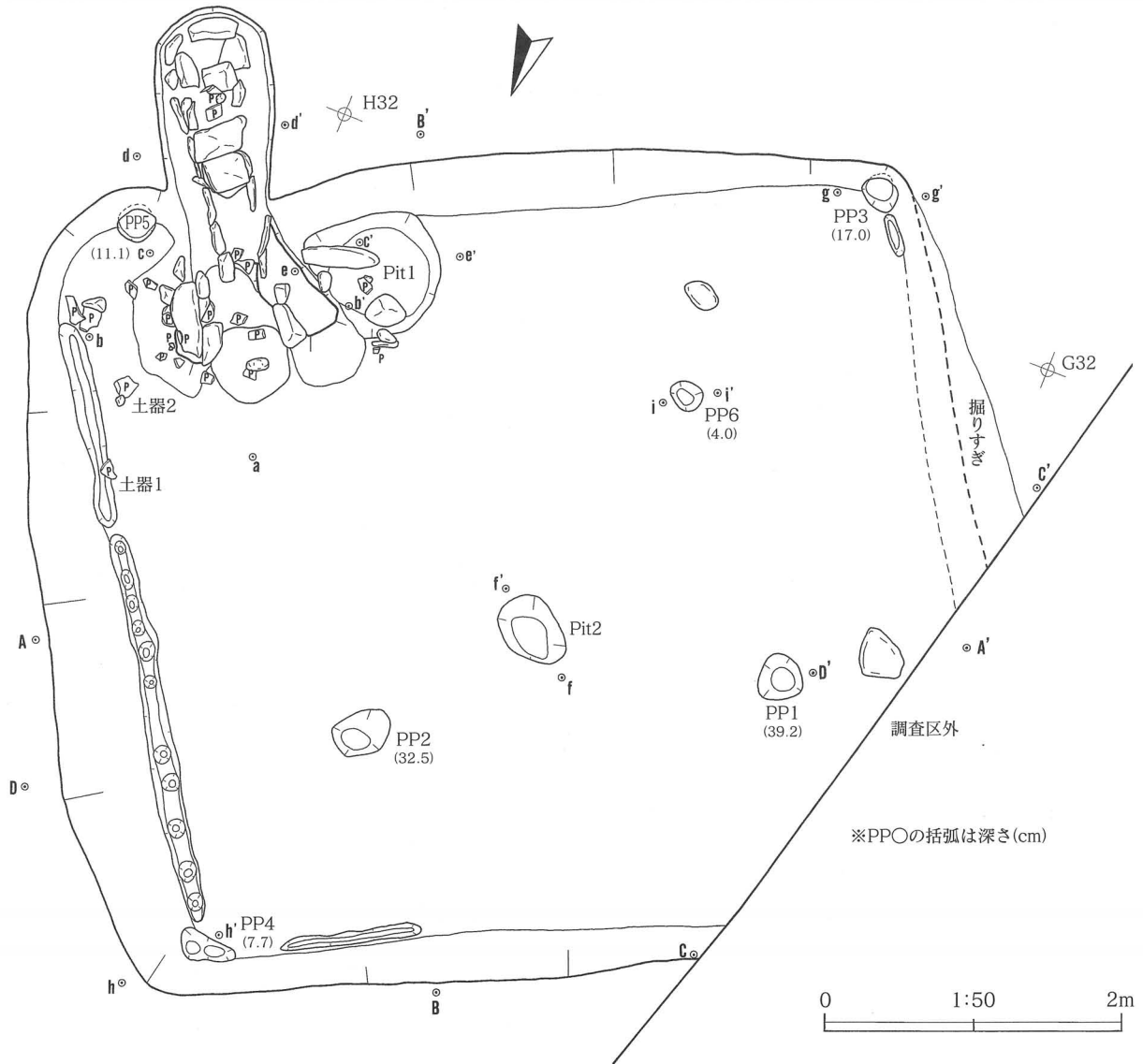
〔カマド〕 まず、煙道の両側に沿って入れられた礫群が確認された。それはひとまわり大きな掘り方を持ち、その部分に戻された黒色土の拡がりも検出の手がかりとなった。

〈位置〉南東壁の東隅寄り 〈煙道方位〉N-155° -E

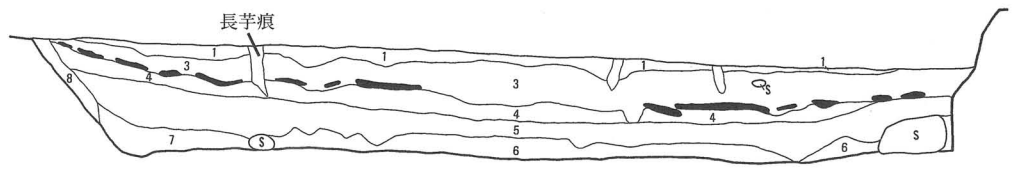
〈本体〉残存状況は極めて良好で、周辺には土器片が散在する。羽口から転用された支脚も確認された。袖部には芯材として扁平な礫が数個ずつ配され、それは煙道へと延びている。芯材は黄褐色のシルト質土により被覆され、左右の袖の間には天井部が押しつぶされた状態で確認された。その下には、直径50cm、厚さ5～16cmほどの燃焼部焼土が形成されているが、それは本体奥側で厚みを増す。全体的に焼けは良好である。

〈煙道・煙出し部〉上述のように、煙道から煙出しに向かって扁平な礫が埋め込まれた煙道である。全長は160cmほどで、煙出し部まで緩やかに立ち上がる。漏れがないように礫と礫とは一部が重なるように組み付けられ、それでも空いてしまう隙間は粘土やシルト質土が充填されているようである。また、煙道中央にある礫の上には天井としての礫がわたされ、同様の隙間処理がなされている。煙出しも礫は上部に向かって煙突状に組まれており、煙道・煙出しあわせて大小20個あまりの礫が用途に応じて使われている。煙出し孔の直径は、礫の崩れにより計測不能。深さは50cmあまりで、その底面はわずかに低められている。

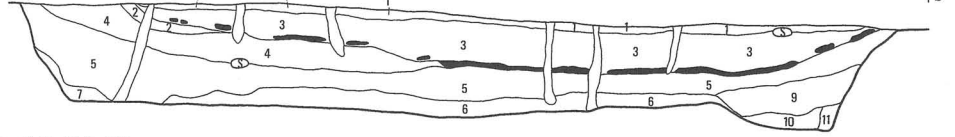
〔柱穴〕 北西隅を除く各コーナーにPP3～PP5、位置的に支柱穴と思われるPP1・PP2・PP6の計6個を検出した。配置は、支柱穴4本と住居の四隅に4本配されるものと思われるが、カマドに近い側の支柱穴が確認で



L=205.400m

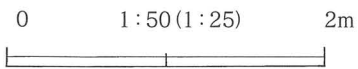
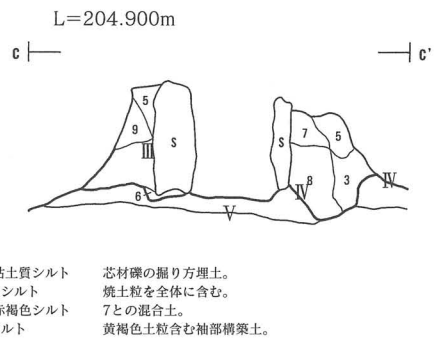
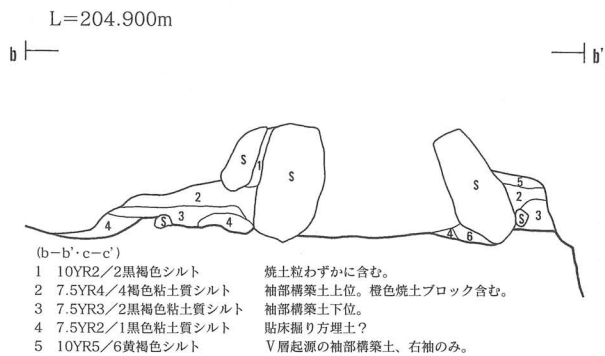
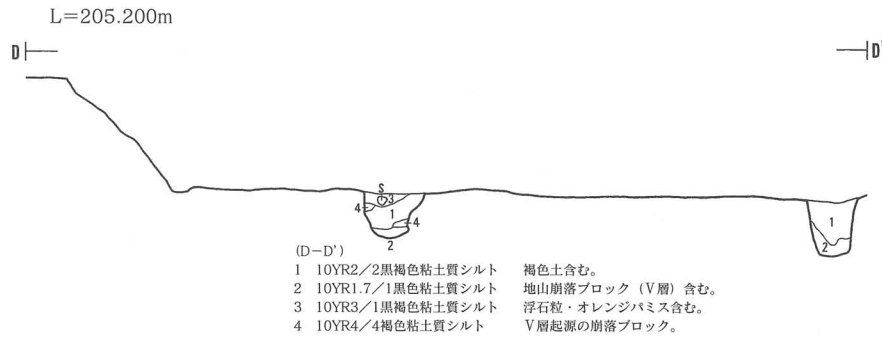
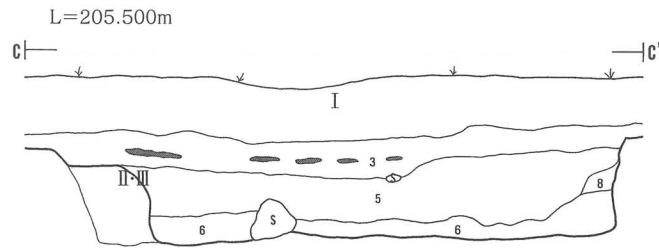


L=205.100m

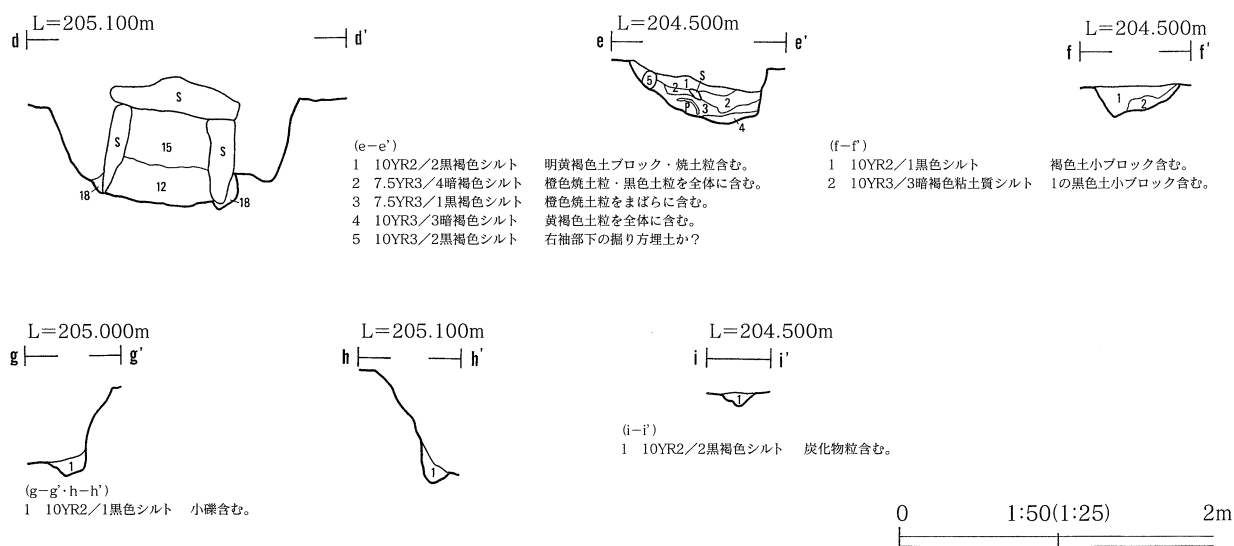


- | | | |
|---------------------|------------------------------|---------------------|
| (A-A'・B-B'・C-C') | | |
| 1 10YR2/2黒褐色砂質シルト | To-aの細粒、浮石粒を含む。 | 7 10YR2/1黒色シルト |
| 2 10YR2/1黒色砂質シルト | オレンジバミス、To-aの細粒含む。 | 8 7.5YR2/1黒色砂質シルト |
| 3 10YR2/2黒褐色シルト | 層下部にTo-aをレンズ状に含み、その上に焼けた火山灰? | 9 10YR2/1黒色粘土質シルト |
| 4 7.5YR2/1黒褐色粘土質シルト | 炭化材 (7.5YR5/6明褐色) を部分的に含む。 | 10 10YR3/3暗褐色粘土質シルト |
| 5 10YR2/1黒色粘土質シルト | オレンジバミス・焼土小ブロックを全体に含む。 | 11 10YR3/4暗褐色粘土質シルト |
| 6 10YR2/2黒褐色粘土質シルト | 浮石粒、炭化物を含む。 | |
| | 5より明るい色調でTo-a含まず。 | |
| | | II層起源の崩落土。 |
| | | III層起源の崩落土。 |
| | | 浮石粒をまばらに含む。 |
| | | 黒色土と暗褐色土の混合土。 |
| | | IV層起源の地山崩落ブロック。 |

第10図 第1号住居跡 (1)



第11図 第1号住居跡 (2)



第12図 第1号住居跡 (3)

きなかった。

〔土坑〕カマド右側のPit1からは土器も出土し、位置的に貯蔵穴と思われる。中央部のPit2は不明である。

〔周溝〕東壁沿いと北壁の一部、南西隅に深さ10cm程度のものが巡る。全周しないのは、壁の崩落が著しい部分だけに構築したためか。

〔その他〕埋土からはおびただしい量の円礫（直径5～20cm程度）が出土した。他の住居跡でも同じような傾向が認められたので、調査時に大まかな数量を計測した。ここからは大コンテナ2箱強の出土をみた。

遺物 (第54～61図、写真図版36～40)

〔出土状況〕遺物は埋土からの出土が最も多く、カマド脇のPit1やカマド周辺からも出土した。遺物の総量は大コンテナ1箱あまりである。全部で97点掲載した。

〔土器〕土師器坏・甕・羽釜、須恵器坏・甕・大甕・壺などがある。土師器坏のうち、内面に黒色処理が施されるものとそうでないものの割合は、全体でほぼ半々である。墨書土器は9点、刻書土器は3点出土したが、いずれも土師器坏に書かれたものである。この他、坏を棒状のもので人為的に壊したと思われる破片(3)や、灯明皿として使われた坏(29)などが見られる。

〔土製品〕羽口の転用と思われる支脚がカマド周辺から出土した。また、羽口の先端部が1点出土している。

〔鉄製品〕7点出土した。内訳は鉄鏃3点、刀子1点、錫杖状鉄製品のような振りのある製品(未製品?)2点、刀子か金具と思われるもの1点である。

〔時期〕埋土に灰白色火山灰が堆積する状況やカマド・付属する土坑等から出土する土器の特徴から、9世紀末～10世紀初頭(前回調査時報告の第Ⅲ期)の年代が与えられる。

第2号住居跡 (G34住)

遺構 (第13・14図、写真図版5)

〔位置・重複〕平坦部南西端のH36区付近に位置する。この南東側約5mには第4号住居跡が隣接し、北側約3mには第1号住居状遺構がある。遺構間の重複はないが、南東壁に沿って新旧3本の電柱・ステーによる攪

乱がある。

〔検出面・状況〕第Ⅱ層であるが、南側はⅡ層が薄く一部第Ⅲ層まで下げて検出している。灰白色火山灰がプランの外側にまばらに観察された。

〔平面形〕方形をなすが、わずかにゆがんでいる。〔規模〕7.40m×7.78m 〔壁高〕35cm～50cm

〔埋土〕6層に分層される自然堆積で、上位は黒色土、中位以下は黒褐色土が主体である。2層・3層間には灰白色火山灰が堆積、下位の黒褐色土中には焼土粒が混入している。壁際には第Ⅱ層起源の黒色土や第Ⅴ層起源の褐色土等が崩落している。

〔壁〕いずれの壁も床面から直立気味に立ち上がる。

〔床面〕ほぼ平坦で、第Ⅳ層を床面とする。貼床は概ね全域に施されていたが図化していない。

〔カマド〕構造的には第1号住居跡と同様の作り込みがなされている。検出状況も煙道部の礫と焼土の拡がりから確認したものであるが、その長方形土坑のような大きさから、当初は煙道とは認識できていなかった。

〈位置〉北東壁のほぼ中央 〈煙道方位〉N-38°-E

〈本体〉第1号住居跡のカマド同様、残存状況は極めて良好で、土器類もカマド周辺からの出土が多い。本体の構造は第1号住居跡と同じで、その倍以上の礫が使われ構築されている。燃焼部には44cm×59cmの楕円形の焼成面が形成され、厚さは最大で13cmほどを測る。焼け具合も極めて良好、カマド奥壁には支脚の甕が据えられている。右袖は、カマド右に拡がる不純物が混じる焼土の上につくられていた。この焼土は、鍛冶関連等の作業の際にできたものが廃棄され、貼床として使われたものと思われる。

〈煙道・煙出し部〉これも第1号住居跡と同じ構造を持つもので、天井に置かれた礫が煙出し付近まで見事に敷き詰められ、煙出しも煙突状に組み上げられている。煙道底面はほぼ水平に延びた後、緩やかに煙出しに向かって下がっていく。煙出し孔は、崩れた礫と焼土粒・黄褐色土粒を含む土で完全に埋まっていたが、その直径は約40cm、深さは79cmを測る。その底面はわずかに掘り下げられている。

〔柱穴〕位置的に支柱穴と思われるPP1・PP3、通常的位置からはずれているものの深さなどからそれと考えられるPP5、東隅・南隅を除くコーナーにPP4・PP10の計5個を確認した。その他のものは柱穴状の小土坑とした。柱穴配置は、第1号住居跡と同様と思われるが、壁際にあるPP5の位置に対応してあるべき柱穴が検出できなかった。

〔土坑〕北隅にあるPit2、南東壁にあるPit3・Pit5などは貯蔵穴の類と思われる。Pit4は不明である。

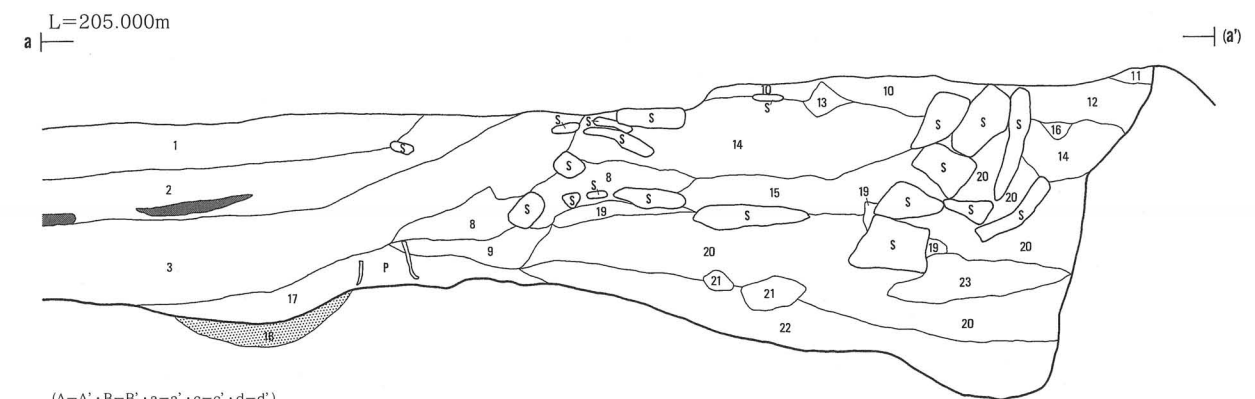
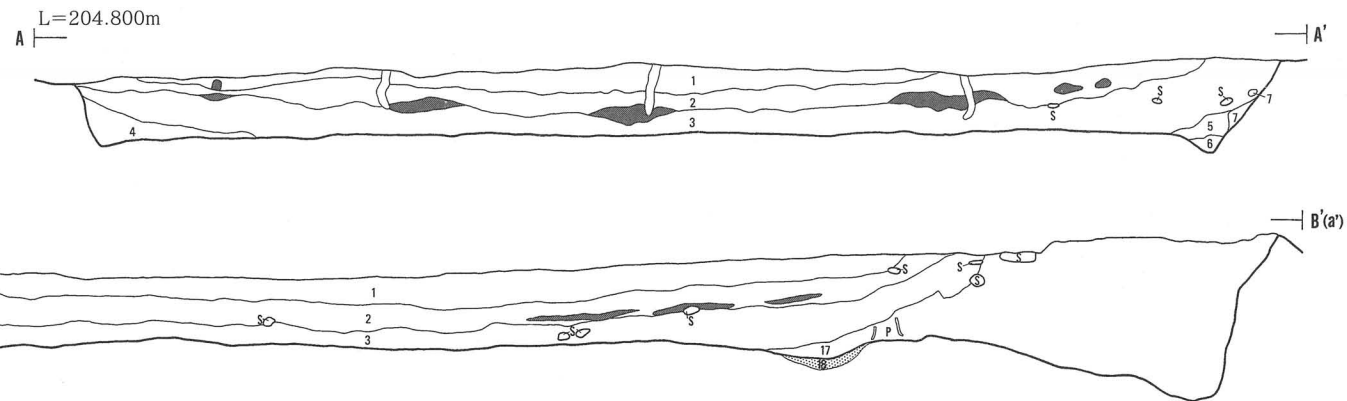
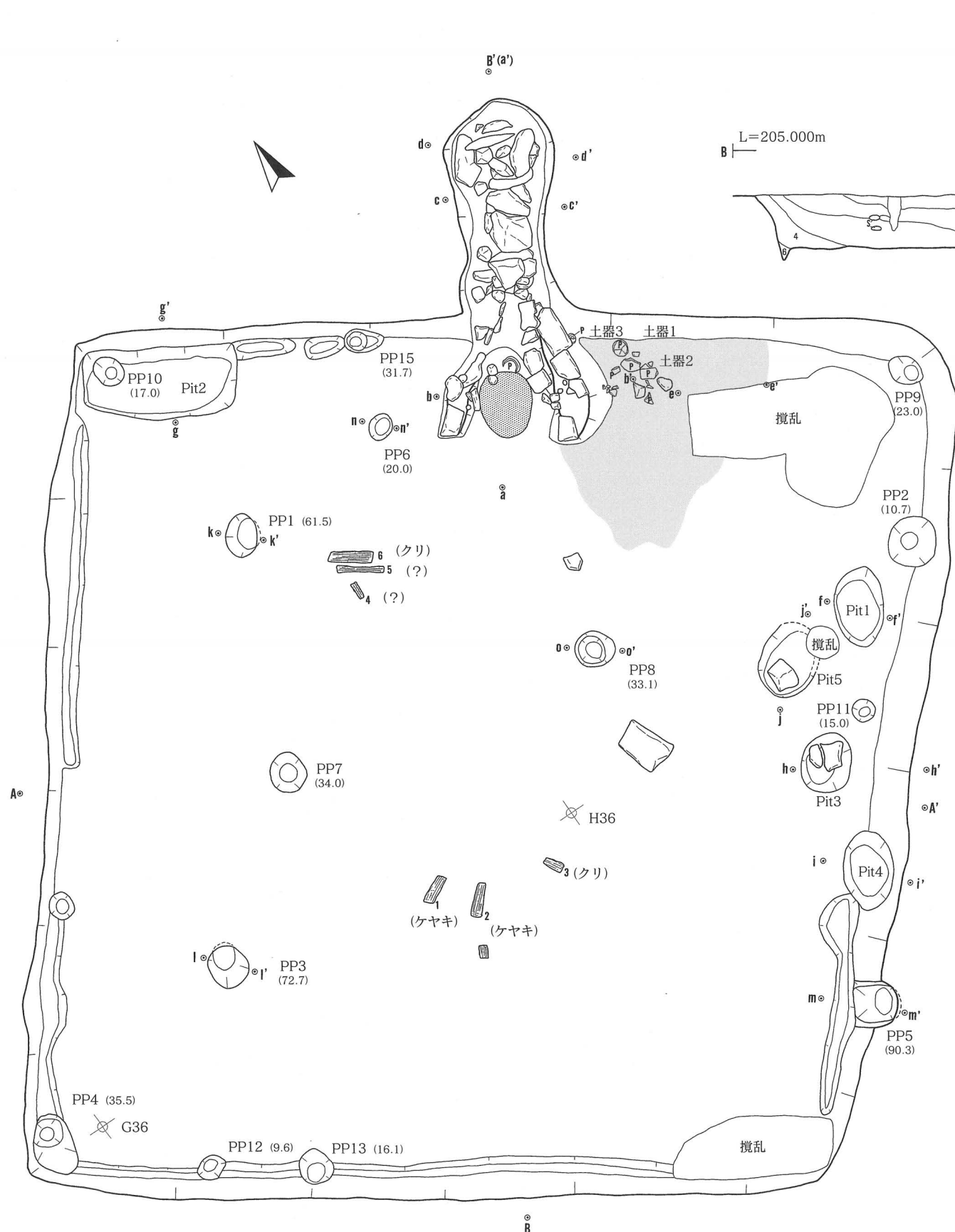
〔周溝〕各壁に深さ数cmの溝が途切れ途切れに巡る。

〔その他〕埋土からの円礫の出土量は、小コンテナ1箱と規模の割に少ない。床面に炭化材が散在するが焼土は観察されず、焼失に伴うものとは判断されない。樹種はいずれもクリと同定された。

遺物（第61～67図、写真図版40～42）

〔出土状況〕遺物は埋土からの出土が最も多く、貯蔵穴やカマド周辺、貼床内などから大量に出土した。遺物の総量は大コンテナ 箱あまりである。全部で67点掲載した。

〔土器〕土師器坏・甕・羽釜・把手付土器、須恵器坏・甕・大甕・壺などがあり、量的には須恵器の出土が目立つ。土師器坏の内黒・非内黒の割合はほぼ半々である。墨書土器は7点、刻書土器と思われるものは1点出土した。墨書のうち、須恵器坏に書かれたものは1点で、それ以外は土師器坏である。刻書としたものは、土師器甕の底部に「一」と書かれたように思えるもの。この他には、灯明皿として使われた坏（108）や把手付土器の把手の基部（120）、羽釜（144）などがある。



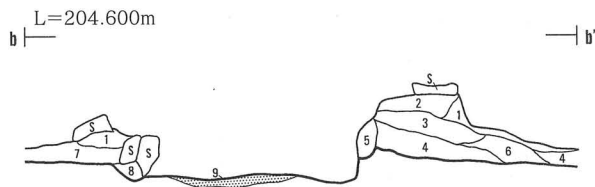
(A-A'・B-B'・a-a'・c-c'・d-d')

- 1 10YR2/1黒色シルト
- 2 10YR3/2黒褐色シルト
- 3 10YR3/黒褐色シルト
- 4 10YR1.7/1黒色シルト
- 5 10YR2/2黒褐色シルト
- 6 10YR3/2黒褐色粘土質シルト
- 7 10YR4/4褐色シルト
- 8 10YR5/4にぶい黄褐色シルト
- 9 10YR4/6赤褐色シルト
- 10 10YR3/2黒褐色シルト
- 11 10YR4/4褐色シルト
- 12 10YR2/2黒褐色シルト
- 13 10YR5/4にぶい黄褐色粘土質シルト
- 14 7.5YR3/4暗褐色粘土質シルト
- 15 7.5YR5/4にぶい褐色粘土質シルト
- 16 10YR2/2黒褐色シルト
- 17 7.5YR5/4にぶい褐色粘土質シルト
- 18 5YR4/6赤褐色シルト
- 19 5YR4/6赤褐色シルト
- 20 10YR2/2黒褐色粘土質シルト
- 21 5YR3/4暗赤褐色粘土質シルト
- 22 5YR3/6暗赤褐色粘土質シルト
- 23 5YR3/2暗赤褐色粘土質シルト
- 24 7.5YR5/4暗褐色シルト
- 25 5YR4/6赤褐色シルト

オレンジバミス・To-aの粒子含む。
 To-aのブロックを層下位に含む。To-aのブロックも黒褐色土を含んでいる。
 黄褐色土粒・焼土粒(赤褐色)層下位に含む。
 暗褐色土との混合土。
 黄褐色土小ブロック・細粒を含む。
 周溝の覆土で暗褐色土粒・黄褐色土粒を含む。
 V層起源の地山崩落土。
 カマド天井部崩落土で、赤褐色焼土粒含む。
 天井部から落ちた焼土層と思われる。
 黄褐色土粒・礫を含む。
 煙出部の褐色土ブロック。
 暗褐色土小ブロック含む。
 焼土粒を含むロームブロック。
 橙色焼土粒をまばらに含む煙道・煙出上部の崩落土か？
 煙道からのものを防ぐためのシルト質土か？すぐ下に礫あり。
 黄褐色土を含むブロック。
 燃焼部焼土の上にかかっていたシルト質土。焼土粒含む。
 燃焼部焼土で、焼けは良好。(b-b'9に同じ)
 礫下に形成された焼土層。
 黄褐色土粒・焼土粒を含む。煙道覆土上土層。
 焼土ブロック。
 煙道覆土下位層。くすんだ色調。
 焼土粒をまばらに含む。
 にぶい褐色や暗褐色土の焼土粒含む。
 V層の赤変部。

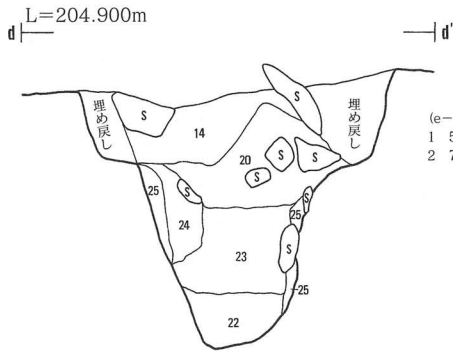
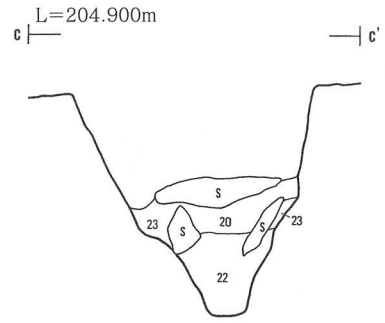
第13図 第2号住居跡(1)

0 1:50(1:25) 2m



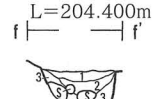
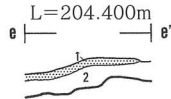
(b-b')

- | | |
|-----------------------|---------------------------|
| 1 10YR3/2黒褐色粘土質シルト | 炭化物粒・焼土粒含む。袖部構築土。 |
| 2 10YR6/4にふい黄褐色粘土質シルト | 焼土粒含む。袖部構築土。 |
| 3 7.5YR4/4褐色シルト | 炭化物・暗赤褐色焼土粒を含む。袖部構築土。 |
| 4 7.5YR3/3暗褐色砂質シルト | 袖の基礎となる。焼土粒含む。袖部構築土。 |
| 5 5YR4/6赤褐色シルト | 袖内壁の赤変部。 |
| 6 10YR2/2黒褐色シルト | 炭化物粒を含む。 |
| 7 10YR3/2黒褐色砂質シルト | 炭化物粒・焼土粒を含む。貼床掘り方理土。 |
| 8 10YR2/3黒褐色砂質シルト | 礫の掘り方理土。 |
| 9 5YR4/8赤褐色シルト | 燃焼部焼土で、焼けは良好。(a-a' 18に同じ) |



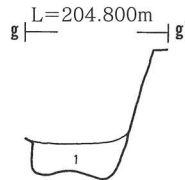
(e-e')

- | | |
|------------------|-------------------|
| 1 5YR4/8赤褐色シルト | 3~5cmの焼土。焼けは良い。 |
| 2 7.5YR3/2黒褐色シルト | 橙色焼土粒を含む。貼床掘り方理土。 |



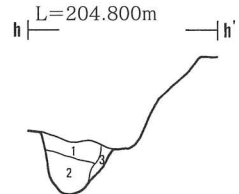
(f-f')

- | | |
|-----------------|--------------|
| 1 10YR2/2黒褐色シルト | 炭化物粒含む。 |
| 2 10YR3/3暗褐色シルト | To-aブロック |
| 3 10YR4/6褐色シルト | V層起源の崩落ブロック。 |



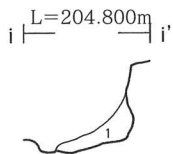
(g-g')

- | | |
|----------------|-------------|
| 1 10YR2/1黒色シルト | 褐色土粒を全体に含む。 |
|----------------|-------------|



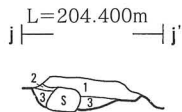
(h-h')

- | | |
|--------------------|---------------|
| 1 10YR2/2黒褐色シルト | 褐色土粒含む。 |
| 2 10YR2/3黒褐色粘土質シルト | 褐色土の極小ブロック含む。 |
| 3 10YR3/2褐色シルト | V層起源の地山崩落土含む。 |



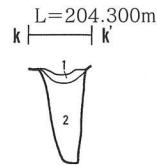
(i-i')

- | | |
|-----------------|--------------|
| 1 10YR3/2黒褐色シルト | 褐色土粒をまばらに含む。 |
|-----------------|--------------|



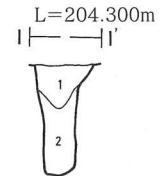
(j-j')

- | | |
|--------------------|-----------------|
| 1 10YR4/4褐色粘土質シルト | にふい黄褐色の小ブロック含む。 |
| 2 10YR4/3にふい黄褐色シルト | 混入物なし。 |
| 3 10YR2/2黒褐色粘土質シルト | 炭化物粒をまばらに含む。 |



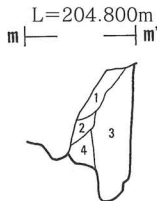
(k-k')

- | | |
|--------------------|--------------|
| 1 10YR3/2黒褐色シルト | 褐色土粒含む |
| 2 10YR2/2黒褐色粘土質シルト | 黄褐色土小ブロック含む。 |



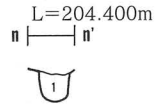
(l-l')

- | | |
|--------------------|-----------|
| 1 10YR2/2黒褐色シルト | 黒色土との混合土。 |
| 2 10YR3/2暗褐色粘土質シルト | 褐色土粒含む。 |



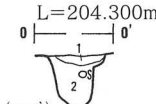
(m-m')

- | | |
|-------------------|----------------------|
| 1 10YR2/2黒褐色シルト | オレンジバミス含む。 |
| 2 10YR2/1黒色シルト | 褐色土ブロック含む。 |
| 3 10YR3/1黒褐色シルト | 黄褐色土ブロック含みフカフカやわらかい。 |
| 4 10YR4/5褐色粘土質シルト | 柱穴掘り方理土。 |



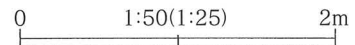
(n-n')

- | | |
|-----------------|---------|
| 1 10YR3/2黒褐色シルト | 褐色土粒含む。 |
|-----------------|---------|



(o-o')

- | | |
|-----------------|-------------|
| 1 10YR3/2黒褐色シルト | 褐色土粒を全体に含む。 |
| 2 10YR2/2黒褐色シルト | 褐色土粒含む。 |



第14図 第2号住居跡 (2)

〔土製品〕羽口の先端部破片が1点出土した。

〔鉄製品〕刀子が2点出土している。

時期 灰白色火山灰の堆積状況やカマド等から出土する土器の特徴から、9世紀末～10世紀初頭の年代が想定される。

第3号住居跡 (H28住)

遺構 (第15・16図、写真図版6)

〔位置・重複〕平坦部北西端の調査区境、H28区付近に位置する。南西約10mの距離には、第2号住居状遺構がある。遺構間の重複はないが、南西隅がわずかに調査区外に延びている。

〔検出面・状況〕第II層下位で確認された。プラン内の灰白色火山灰はごく微量観察されるのみである。

〔平面形〕方形をなすが、北東壁が崩落しており若干歪んでいる。

〔規模〕4.94m×5.08m 〔壁高〕57cm～71cm

〔埋土〕自然堆積で15層に分層した。全体に黒褐色土を基調とするが、下位ほど焼土粒や黄褐色土粒の混入が多い。上述のとおり、灰白色火山灰は1層に小ブロックで入るだけである。壁際には第Ⅲ・Ⅳ層起源の地山崩落土が堆積している。

〔壁〕いずれも床面から緩やかに外反気味に立ち上がる。

〔床面〕ほぼ平坦で、第IV層を床面とする。貼床は施されていない。

〔カマド〕第1・2号住居跡のそれに似た構造であるが、煙道・煙出し部にあまり礫が用いられていない点で異なる。煙道・煙出し部は、斜面の傾斜に向かって掘り込まれており、底面までかなり深さがあった。

<位置>北東壁中央からやや東寄り <煙道方位>N-40° -E

<本体>残存状況は良好である。左袖には芯材の大きい礫が3個並べて据えられ、その後シルト質土で被覆し構築している。対して、右側の袖は芯材が小さく礫自体が脆い。天井部崩落土下には、28cm×30cmの不整形の焼土が形成されているが、厚さは最大で10cmほどである。それより煙道側のカマド奥壁には、支脚として置かれたと思われる土師器の坏・甕が重なった状態で出土した。この支脚と燃焼部焼土には10cmあまりの差があり、使用時の効率はあまり良くなかったものと思われる。

<煙道・煙出し部>掘り込み式の煙道で、全長は約130cm、礫はほとんど用いられない。底面はほぼ水平に煙出しまで延びている。煙出し孔の底面は掘り下げられていないが、検出面からの深さは150cmを測る。煙出しが斜面方向に向いていることから、雨水等の住居内への流入は避けられなかったであろう。

〔柱穴〕主柱穴となるPP1～PP4、補助柱となる可能性のあるPP5、その他2個の計7個が検出された。柱穴は長方形に配置されるが、内2本 (PP2・PP4) は壁際に寄る。この間が出入り口となる可能性がある。

〔土坑〕東隅にPit1が確認され、平面形はほぼ円形をなす。貯蔵穴と思われる。

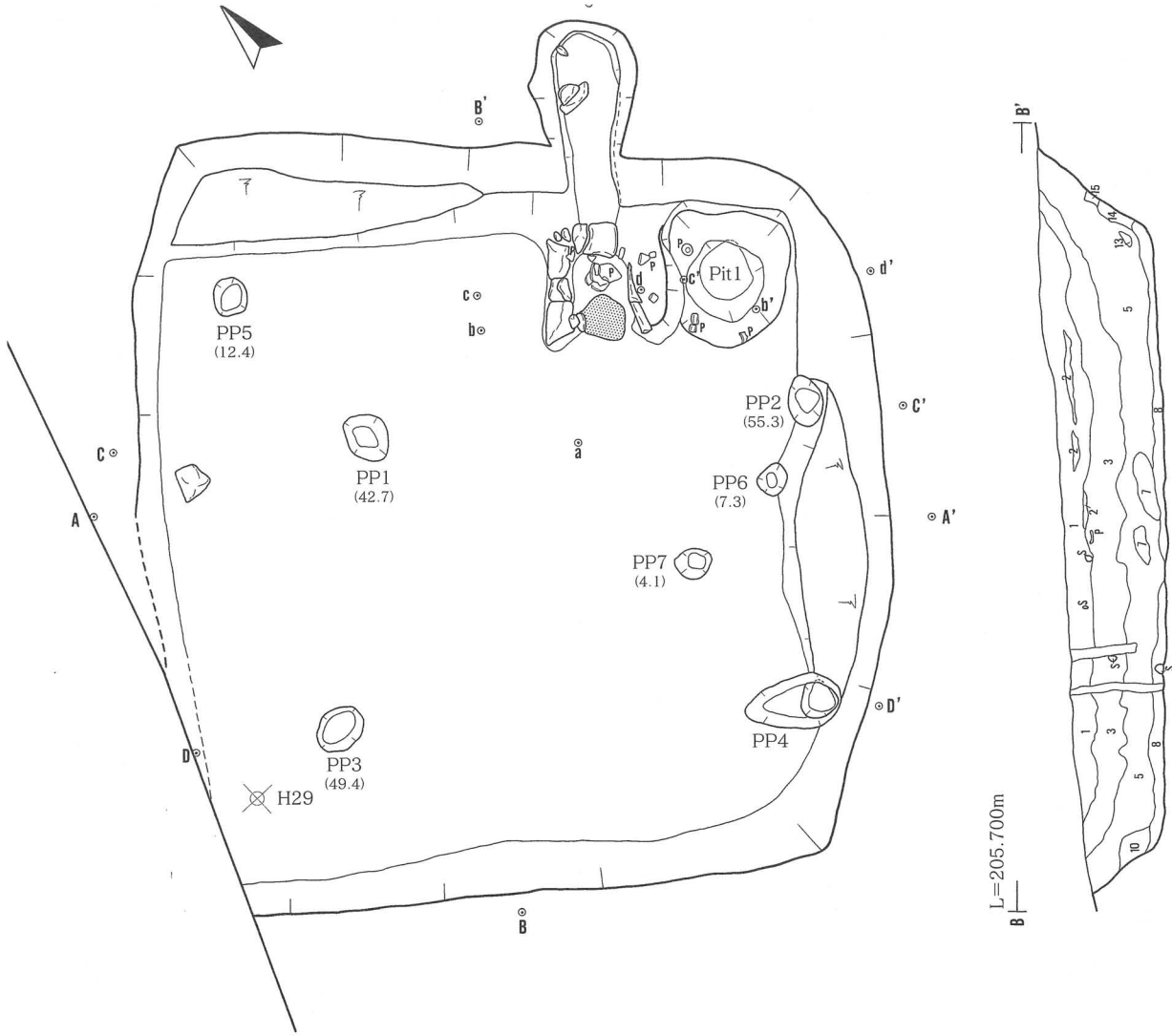
〔周溝〕確認できない。

〔その他〕埋土に含まれる円礫は、中コンテナ1箱分出土した。

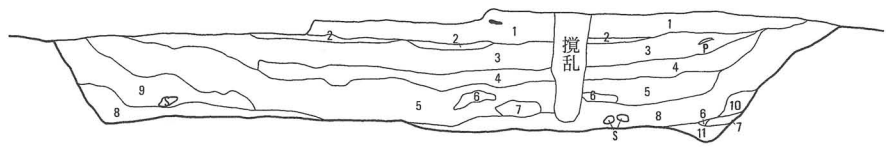
遺物 (第68～72図、写真図版43～45)

〔出土状況〕遺物はカマド周辺とPit1から多く出土した。遺物の総量は大コンテナ1箱である。掲載遺物は全部で61点である。

〔土器〕土師器坏・甕、須恵器坏・大甕・壺・平瓶が出土している。須恵器の坏が目立つ。平瓶 (221) は、



L=205.700m
A

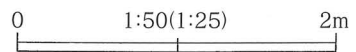
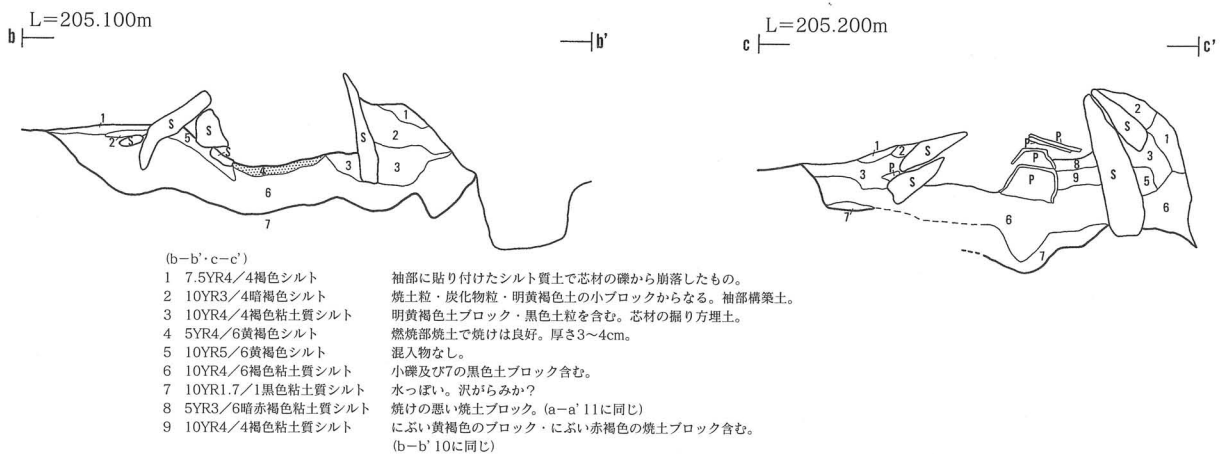
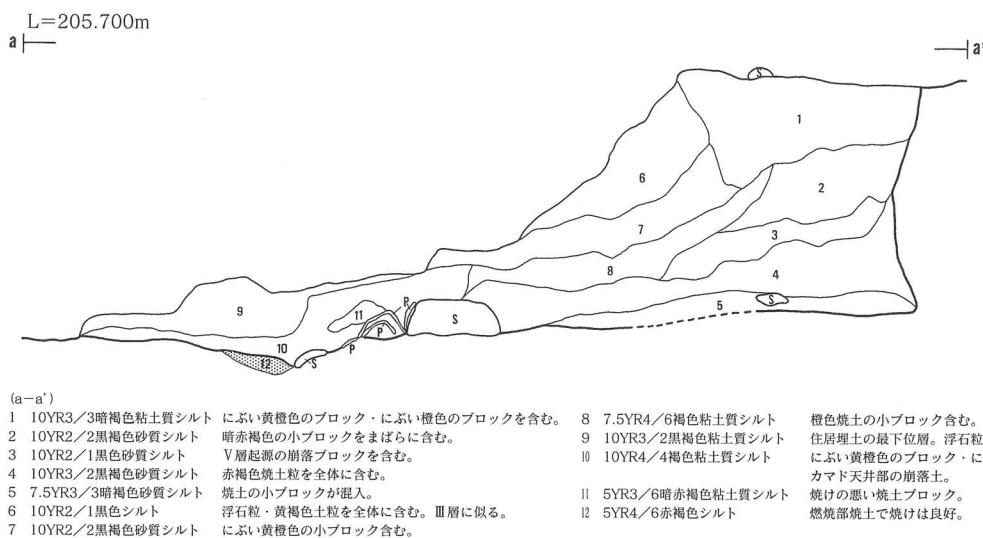
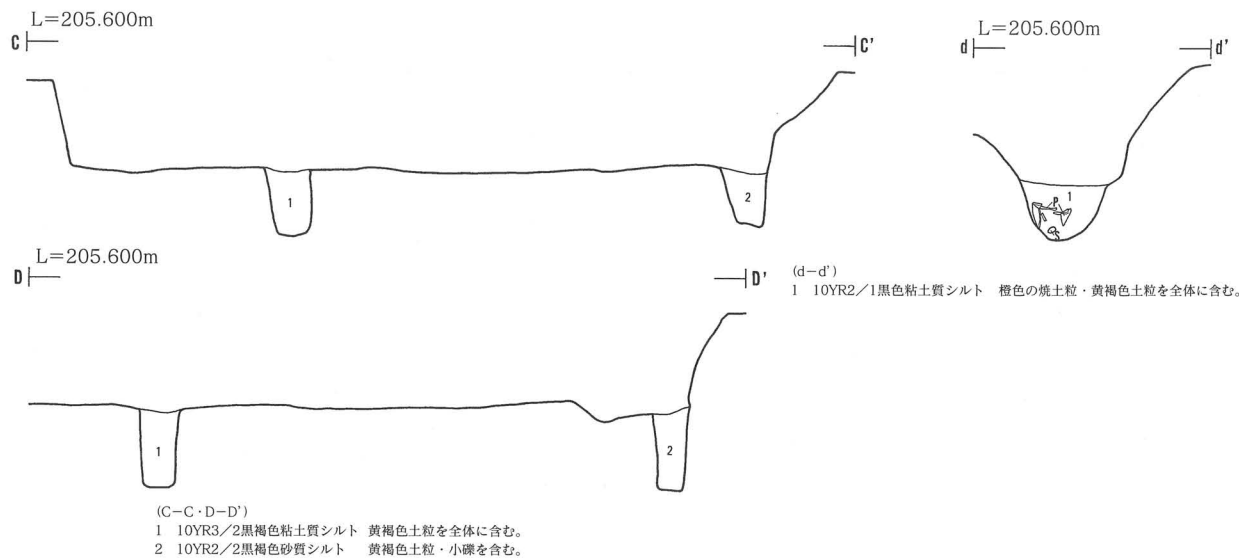


- (A-A'・B-B')
- 1 10YR3/2黒褐色シルト
 - 2 10YR2/1黒色シルト
 - 3 10YR2/1黒色シルト
 - 4 10YR2/2黒褐色シルト
 - 5 10YR2/2黒褐色シルト
 - 6 10YR5/6黄褐色粘土質シルト
 - 7 10YR2/2黒褐色シルト
 - 8 10YR3/2黒褐色粘土質シルト
 - 9 10YR2/3黒褐色粘土質シルト
 - 10 10YR2/2黒褐色粘土質シルト
 - 11 10YR3/2黒褐色年度
 - 12 7.5YR5/6明褐色シルト
 - 13 5YR4/6赤褐色シルト
 - 14 10YR4/6赤褐色粘土質シルト
 - 15 10YR2/3黒褐色シルト

- To-aの小ブロック含む。
- 炭化材に起因すると思われる黒色土。炭化材含む。
- にぶい黄褐色土の小ブロック・オレンジパミス含む。
- オレンジパミス・焼土粒含む。
- 褐色土小ブロック・浮石粒を全体に含む。
- 浮石粒を含む。
- 黄褐色土小ブロック含む。
- 浮石粒・炭化物・橙色焼土粒を含む。
- 8に似るか少し明るめの色調。
- II or III層起源の崩落土。
- 周溝 (Pit?) 埋土。
- 橙色焼土粒をまばらに含む。
- 焼土ブロック。
- 地山崩落土。
- V層起源崩落土。

0 1:50 2m

第15図 第3号住居跡 (1)



第16図 第3号住居跡 (2)

カマド周辺とPit1から出土した破片が接合したもので、わずかに頸部の立ち上がりを残している。この底部の内面には所々墨が付着しており、破損品を墨液等の容器に転用したものと考えられる。

土師器坏の内黒・非内黒の割合はやや非内黒が多いか、という程度である。墨書土器は5点、刻書土器と思われるものは2点出土した。刻書土器としたものは、土師器坏の底部外面にあるもの(171)と同じ内黒の坏の内面に数状の線がみられるもの(174)である。

〔土製品〕〔鉄製品〕出土していない。

時期 カマド・貯蔵穴等から出土する土器の特徴から、9世紀末～10世紀初頭の年代が与えられる。ただし、灰白色火山灰の堆積が第1号・2号住居跡ほど顕著でないことから、廃絶した時期に多少の差は認められる可能性がある。

第4号住居跡 (J36住)

遺構 (第17・18図、写真図版7・8)

〔位置・重複〕 平坦部南西側、本遺構のほぼ真ん中にJ37区のグリッド杭がある。第3号住居状遺構とは北東に2mの距離をもち、また北東・南東・南西の3辺それぞれに平行して、方形土坑4基が住居を取り囲むように存在している。遺構間の重複はない。

〔検出面・状況〕 第II層が本来の検出面であるが、南側はそれが浅いため部分的にIII層上面での確認となった。黒褐色土の方形プランで検出されたが、灰白色火山灰の混入はごく微量であった。カマドの煙出しに伴う礫や、煙道状の施設に埋め込まれた礫も検出の手がかりとなった。

〔平面形〕 方形基調だが、カマドが設置される南東壁がやや外側に張り出している。

〔規模〕 6.90m×7.00m 〔壁高〕 45cm～59cm

〔埋土〕 自然堆積層で8層に分けられた。上位の黒褐色土と下位のその間に黒色土を挟んでいる。灰白色火山灰は壁際に堆積した4層中に確認されたが、火山灰降下直前に廃絶した住居の可能性が高い。

〔壁〕 いずれも床面から急傾斜で立ち上がる。第II層黒褐色土が薄いため、壁際の地山崩落は少ない。

〔床面〕 ほぼ平坦で第IV層を床面とする。図示していないが、貼床はほぼ全体に施されていた。

〔カマド〕 本遺構の四辺いずれにも煙道状のものが見られるが、精査の結果、南東壁にある礫を伴うものがカマドに伴う通常の煙道であった。ここでは南東壁のカマドについてのみ記述し、他の3つは付属施設扱い(煙道状施設と仮称)とする。

<位置> 南東壁中央と東隅のほぼ中間部 <煙道方位> N-135° -E

<本体> 左右の袖には芯材となる礫が据えられておらず、シルト質土の積み上げだけで構築されていたものと思われるが、その残りは悪い。燃焼部焼土は60cm×63cmほどの拡がりをもち、厚さは最大で4cm程度、焼けは良好である。奥壁には支脚らしき土師器甕が置かれている。遺物はこのカマド周辺からも大量に出土した。

<煙道・煙出し部> 煙道は、いったん大きめに土を掘り貫いた後に、礫を組んでから土を戻すといった作業を行って構築したものと思われる。全長は220cmを測り、煙道の煙出し寄りと煙出し内には崩れた礫が入り込んでいた。底面は、燃焼部付近から緩やかに上がりいったんくぼんだ後、再び立ち上がって煙出しに至る。

煙出しの深さは78cm、煙道最深部のそれは110cmである。

〔煙道状施設〕 上述のとおり、カマドが設けられている南東壁以外の3辺に確認された付属施設を、その形状から煙道状施設と呼び記述する。煙道状施設1は南西壁に検出した。全長は約200cmである。住居側は間口

が広くしだいに細くなって煙道様に延びていくが、その両側には礫が配されており、いかにも本集落で確認される住居の煙道そのものである。特徴的なのは、住居側に確認された灰層の拡がりである。付近には焼土は観察されず、でき方もよくわからない。同様の灰の拡がり煙道状施設2にも確認された。細部の形状は異なるものの、同種の施設であることには違いない。こちらの全長は約150cmで、埋土からは底部有孔の小形の耳皿が出土している。煙道状施設3には灰の拡がりが見られないことから、煙道状として扱うのは適切でなかった。調査では確認できなかったが、仮に本遺構が建て替え拡張されたと仮定すれば、建て替え前の煙道とも想定できる。遺構間の重複ではないことだけは確かである。

これらの遺構の性格については、灰層の検出と変わった耳皿の出土がカギとなる。その耳皿を仏具とする向きもあり、そうだとすれば祭祀的な要素を感じざるを得ない。

〔柱穴〕 PP1～PP4が主柱穴である。PP5も補助柱となる可能性があるが、PP2～PP4の間には検出されない。〔土坑〕 合計5基の貯蔵穴と思われるものが見つかった。平面形は円形・楕円形のもので主である。中でもカマド右脇にあるPit3は、構造に特徴があるので詳しく記述する。大きさは78cm×85cmの不整形で、底面の形状から元々は方形基調であったと思われる。床面からの深さはおよそ30cmで、底面の四隅に直径10cm強、深さ15cmほどの小孔を有している。遺物は埋土全体から出土し、完形の土師器坏が数枚出土した。四隅の小孔は何か四つ足の柱状のものが据えられたものと思われるが、例えばテーブルのような台が置かれ祭壇的な使用方をした土坑なのか、あるいは単に床下収納的に機能したものなのか、詳細は不明である。後述するが、この住居からは耳皿等の特殊な遺物が出土したり、灰層を伴う煙道状の施設があるなど、祭壇的な使用を思わせる部分が無いわけではない。なお、Pit5は貼床除去後に確認したものである。

〔周溝〕 各辺それぞれに途切れながら巡る。幅は8cm～20cm前後、深さは10cm程度である。北西壁の周溝は、遺構図ではPit5に切られているようになっているが、周溝のほうが新しい。

〔焼土〕 床面中央ややカマド寄りに1箇所確認された。大きさは40cm×55cm、厚さは8cmほどで、小鍛冶等の作業の結果形成されたものと思われる。

〔その他〕 埋土に含まれる円礫は、大コンテナ1箱出土した。規模の割には少ない印象である。

遺物 (第73～78図、写真図版46～49)

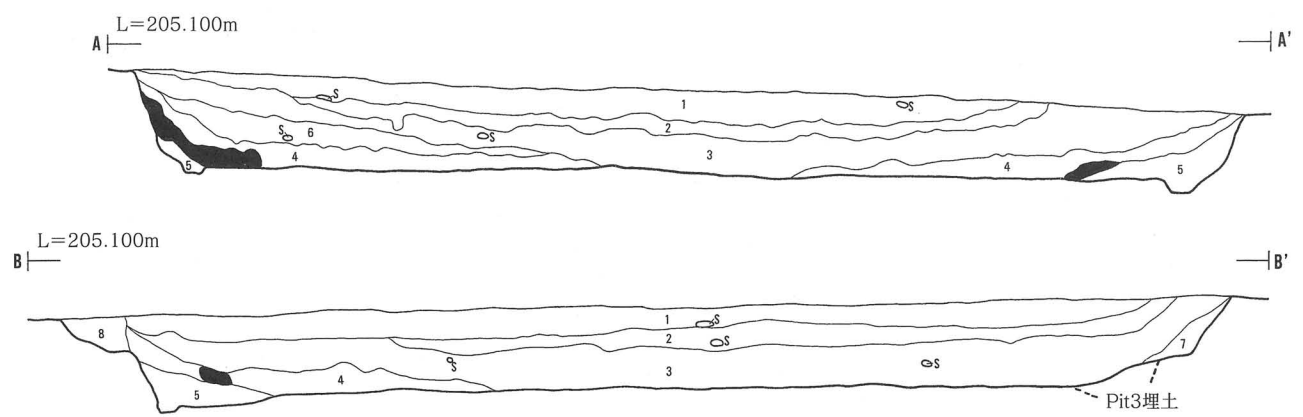
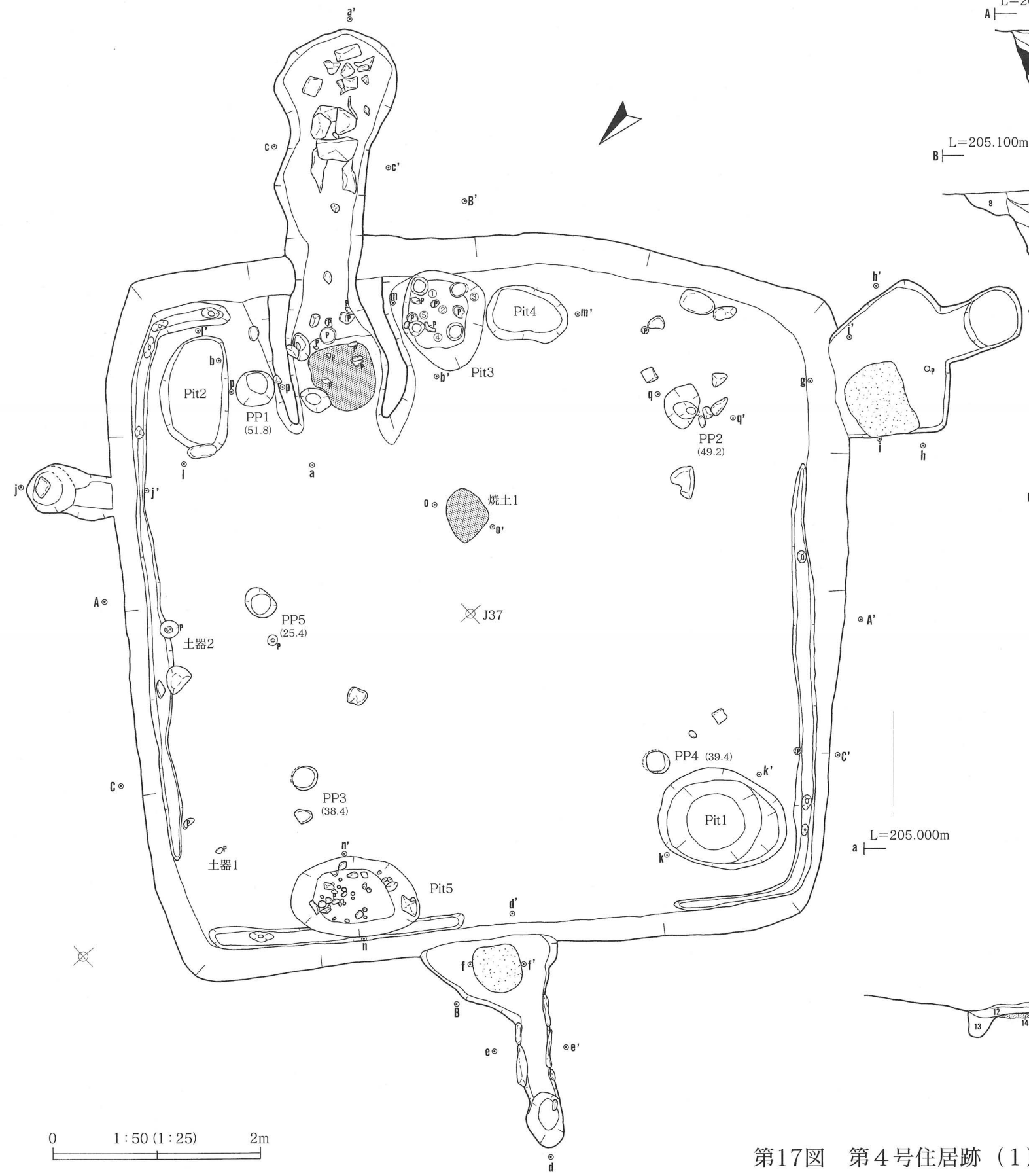
〔出土状況〕 遺物は、埋土を中心に貯蔵穴・カマド周辺・貼床から出土している。遺物の総量は大コンテナ2箱である。出土遺物は77点掲載した。

〔土器・土製品〕 土師器坏・甕・壺、須恵器坏・甕・長頸壺・大甕が出土した。土師器坏の内黒・非内黒の割合はやや非内黒のほうが多いか。墨書土器は5点、刻書土器は2点の出土をみた。墨書はすべて土師器坏に、刻書は2点とも土師器のロクロ甕に見られる。耳皿(283・284)の底部の孔は、いずれも焼成前に開けられたもので、煙道状施設と埋土からそれぞれ出土した。体部にはリング状の張り出しが全周するが、若干角度が異なっている。

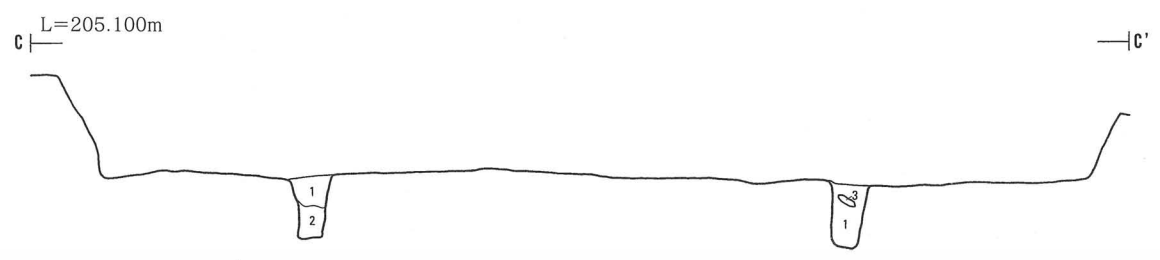
〔石器・石製品〕 縄文時代の石皿(297)の一部と、凹みを有する鉄床石(298)が出土した。

〔鉄製品〕 角釘1点と刀子4点が出土している。いずれも欠損品である。

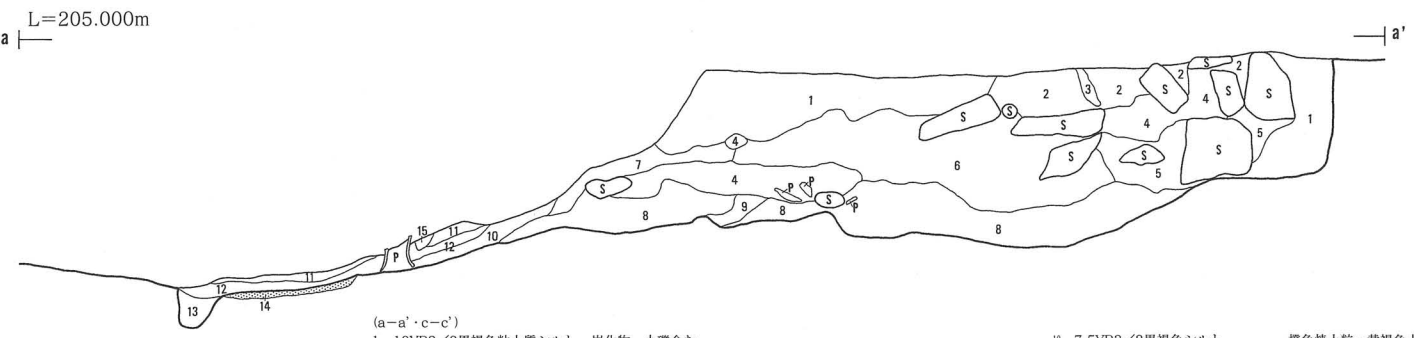
時期 カマド・貯蔵穴等から出土する土器の特徴と灰白色火山灰の堆積状況から、9世紀末～10世紀初頭の年代が想定される。火山灰の堆積状況から多少遡る可能性もある。煙道状の施設や特殊な土坑、耳皿など祭祀的な施設も兼ねていた可能性が高い。



- (A-A'・B-B')
- | | |
|--------------------|---------------------------------------------------------|
| 1 10YR2/2黒褐色シルト | 粒径5~30mmほどの小礫・オレンジバミス含む。 |
| 2 10YR2/1黒色シルト | オレンジバミスを含み、1より黒味がある。小礫は混じらない。 |
| 3 10YR2/3黒褐色シルト | オレンジバミス・To-aの極小ブロック含む。 |
| 4 10YR2/2黒褐色シルト | To-aブロックを豊富に含む。中央寄りにはTo-a小ブロック。
(10~20mm)・炭化物粒が混入する。 |
| 5 10YR2/1黒色シルト | 黄褐色土の小ブロック含む。 |
| 6 10YR3/4暗褐色粘土質シルト | 褐色土ブロック・炭化物・小礫を含む。他には観察されない層。 |
| 7 10YR2/2黒褐色シルト | II・III層起源の崩落土で、小礫を含む。 |
| 8 10YR3/3暗褐色シルト | 煙道部手前の土坑?の覆土。オレンジバミス・To-a小ブロック含む。 |

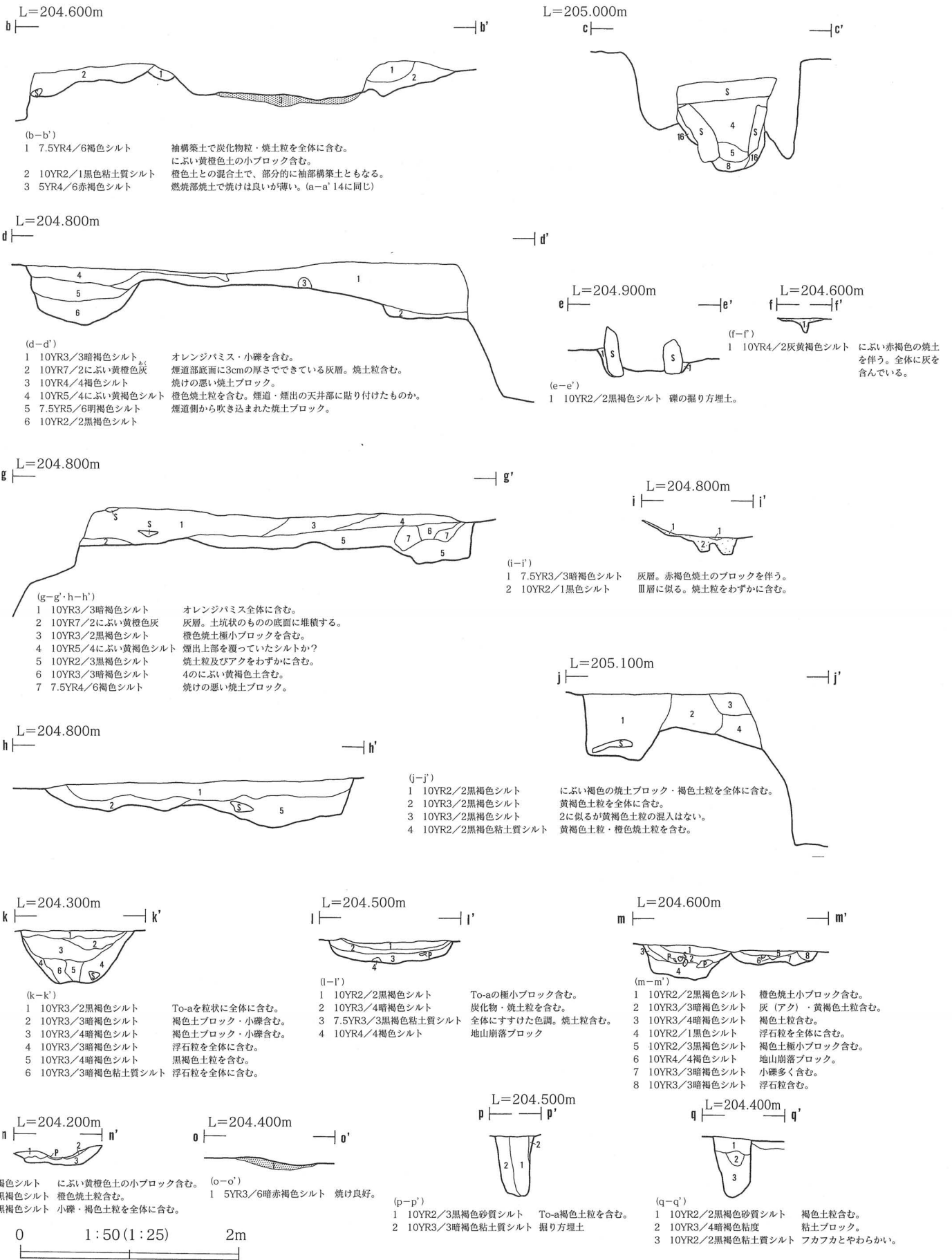


- (C-C')
- | | |
|--------------------|----------------|
| 1 10YR3/2黒褐色シルト | To-aの極小ブロック含む。 |
| 2 10YR3/3暗褐色粘土質シルト | 黒褐色土粒含む。 |
| 3 10YR3/4暗褐色シルト | 地山崩落ブロック。 |



- (a-a'・c-c')
- | | | | |
|--------------------|---------------------------------|----------------------|-----------------------|
| 1 10YR2/2黒褐色粘土質シルト | 炭化物・小礫含む。 | 10 7.5YR3/2黒褐色シルト | 褐色焼土粒・黄褐色土粒を含む。 |
| 2 10YR3/3暗褐色粘土質シルト | 黄褐色土粒・焼土粒含む。 | 11 7.5YR2/3黒褐色砂質シルト | カマド天井部の崩落土。炭化物を全体に含む。 |
| 3 10YR2/1黒色粘土質シルト | 黄褐色土粒を全体に含む。 | 12 5YR4/4にぶい赤褐色砂質シルト | 降り積もった天井部内壁の焼土。 |
| 4 10YR4/4褐色粘土質シルト | 煙道の壁面に貼られた黄褐色シルト。下部にこり(炭化物のため)。 | 13 7.5YR2/3黒褐色砂質シルト | 貼り床掘り方理土。 |
| 5 10YR3/2黒褐色粘土質シルト | すすけた色調の焼土粒含む。 | 14 5YR4/6赤褐色シルト | 燃焼部焼土で焼けは良いが薄い。 |
| 6 10YR3/2黒褐色粘土質シルト | 褐色焼土粒・黄褐色土粒小ブロックまばらに含む。 | 15 5YR5/8明赤褐色 | 焼土ブロック。 |
| 7 10YR2/2黒褐色粘土質シルト | にぶい黄褐色土粒を全体に含む。 | 16 10YR3/3暗褐色粘土質シルト | 褐色土粒を含む礫の掘り方理土。 |
| 8 10YR3/3暗褐色粘土質シルト | 炭化物粒を全体に含む青黒い。 | | |
| 9 10YR4/4褐色粘土 | 地山崩落ブロック。 | | |

第17図 第4号住居跡 (1)



第18図 第4号住居跡 (2)

第5号住居跡 (L35住)

遺構 (第19・20図、写真図版9)

〔位置・重複〕平坦部中央やや西寄りのL35区周辺に位置する。第3号住居状遺構とは西に約2mの距離を置き、第6号住居跡とは重複関係にある。本遺構の煙道が第6号住居跡に切られる状況である。

〔検出面・状況〕第II層が検出面である。黒褐色土の方形プラン内に、灰白色火山灰の堆積が認められた。第6号住居跡の検出を完了するまでは、何度検出を試みても煙道・煙出しは確認できなかった。重複はないと決めてかかっていたためである。

〔平面形〕長方形で主軸方向にわずかに長い。若干ゆがんでいる。

〔規模〕4.17m×4.98m 〔壁高〕43cm～71cm

〔埋土〕11層に分層される自然堆積層で、全体に黒褐色土・黒色土を基調とする。灰白色火山灰は2層中に、円礫は4層中に多く認められる。下位ほど炭化物や焼土粒の混入が多い。

〔壁〕いずれも床面から急傾斜で立ち上がり、中でも南西壁はほぼ直立している。

〔床面〕大きく緩やかな凹凸は認められるが平坦で、第IV層を床面とする。そのままでは第IV層中の礫が邪魔になるためか、床面のほとんどは貼床処理されている。

〔カマド〕煙道・煙出し部は新しくつくられた住居により壊されたが、両部の底面がわずかに残っていた。

<位置>南東壁中央からやや西寄り <煙道方位>N-128°-E

<本体>本体は良好に残っていた。これも左右の袖には芯材の礫が内側に傾けて据えられ、それをシルト質土で被覆して構築している。その間にある燃焼部焼土は、35cm×42cmほどの不整形をなし厚さは最大で8cmを測る。カマドの奥壁には柱穴状の小土坑(PP5)があるが、本施設に伴うものか不明である。支脚はない。

<煙道・煙出し部>煙道の構造は削り貫き式と思われる。上述のとおり、煙道から煙出しにかけての底面が残るのみである。全長は2m前後と思われる。煙道の底面は、PP5付近から煙出しに向かって急傾斜で下がっているが、最深部の深さは163cmを測る。煙出しの直径は不明である。

〔柱穴〕位置的にはPP1が主柱穴となりそうだが、他の位置に確認されていないため不明である。PP2・PP3は性格がわからない。PP4はPit1に伴うものとした。

〔土坑〕カマド南西脇にPit1、南隅にPit2の2基が確認された。いずれも不整形で遺物を伴っており、貯蔵穴に類するものと思われる。〔周溝〕検出されなかった。

〔焼土〕床面中央部やや東寄りに焼土が形成されていた。それは、径50cm×70cm、厚さ4cmほどの規模で、小鍛冶等の作業によるものと推定される。しかし、それを裏付ける鍛造剥片などは出土しなかった。

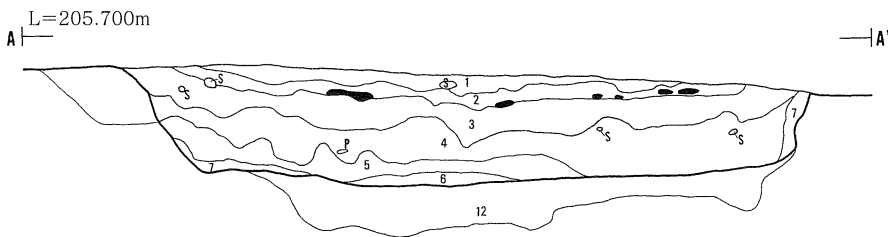
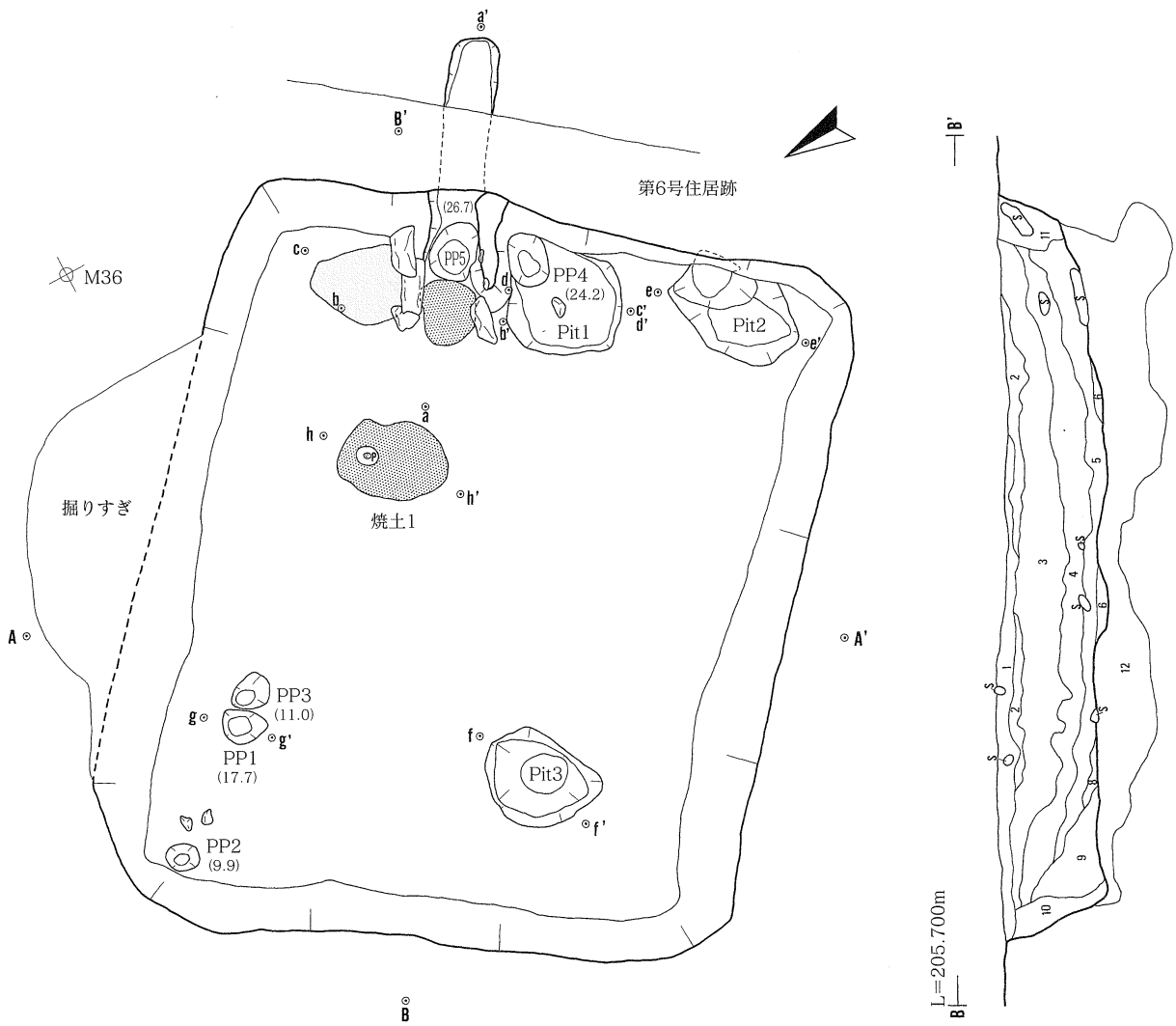
〔その他〕埋土に含まれる円礫は、大コンテナ2箱弱出土している。

遺物 (第79～82図、写真図版49・50)

〔出土状況〕遺物は、埋土を中心に検出面・貼床内からも出土している。遺物の総量は大コンテナ1箱、掲載した遺物は41点である。

〔土器〕土師器坏・甕・壺・把手付土器、須恵器坏・甕・大甕・壺があり、土師器の坏の完形品が比較的多い。土師器坏の内黒・非内黒の割合はほぼ半々である。特徴のある遺物としては、ロクロ使用の土師器甕で内面が黒色処理されるもの(332)や、内外面に黒色処理が施される土師器の壺(334)などもある。把手付土器(335)は、柄の先端部分の破片で全体がミガキ込まれている。墨書土器は7点したが、刻書はない。

〔石器・石製品〕縄文時代に所属する石皿(340)1点と、鉄床石と思われる安山岩質の礫2点(341・342)



(A-A'・B-B')

- 1 10YR2/3黒褐色シルト
- 2 10YR2/2黒褐色シルト
- 3 10YR2/2黒褐色シルト
- 4 10YR2/3黒褐色シルト
- 5 10YR2/2黒褐色粘土質シルト
- 6 10YR2/1黒色粘土質シルト
- 7 10YR2/3黒褐色シルト
- 8 10YR2/3黒褐色シルト
- 9 10YR2/3黒褐色シルト
- 10 10YR1.7/1黒色シルト
- 11 10YR1.7/1黒色シルト
- 12 一部貼り床と思われる。

- オレンジパミス・To-aをわずかに含む。小礫混入。
To-aブロック・焼土粒を含む。
- オレンジパミスを含み。炭化物粒・To-aは少量。
オレンジパミスを全体に含む。炭化物粒含む。円礫多数混入。
- オレンジパミスまばらに含む。上位層より黒味帯びる。
- 貼り床掘り方埋土。明黄褐色の粘土ブロック含む。
黄褐色土粒を含む地山崩落土。
- 焼土小ブロック含む。
- 焼土粒まばらに含む。
- 焼土粒・地山崩落ブロック含む。
- 住居が埋まりきってから入れられた台石。焼土粒わずかに含む。

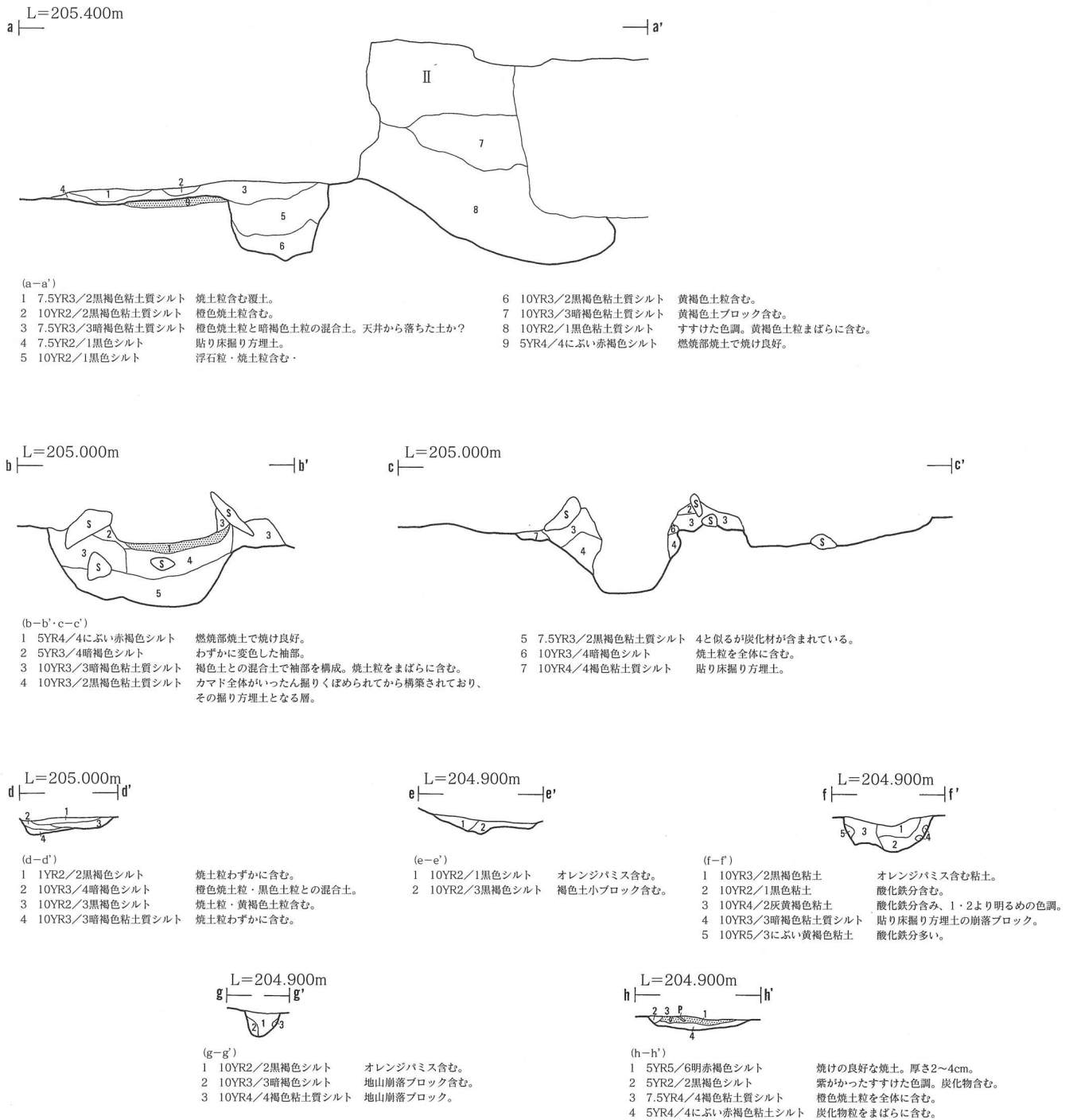
0 1:50 2m

第19図 第5号住居跡(1)

が、いずれも埋土から出土している。

〔鉄製品〕 曲がった角釘が1点出土している。

時期 カマド・貯蔵穴等から出土する土器の特徴と灰白色火山灰の堆積状況から、9世紀末～10世紀初頭の年代が想定される。



第20図 第5号住居跡 (2)

第6号住居跡 (L37住)

遺構 (第21・22図、写真図版10)

〔位置・重複〕 平埧部中央M37・N37区周辺に位置する。第5・第8号住居跡とは重複関係にあり、いずれよりも本遺構のほうが新しい。

〔検出面・状況〕 本遺構は、平面プランに火山灰の混入が認められず、第II層中では確認できない部分もあったため、III層上面まで検出面を下げている。

〔平面形〕 方形基調であるが、若干歪んでいる。〔規模〕 7.08m×8.30m 〔壁高〕 28cm～50cm

〔埋土〕 14層に分層された。自然堆積層で、黒褐色土を主体とする。灰白色火山灰はごく微量のブロックが5・13層に観察されるだけである。また、下位ほど炭化物や焼土粒の混入が目立つ。

〔壁〕 いずれの壁も床面から緩やかに外傾して立ち上がる。

〔床面〕 緩やかな凹凸が認められ、床面は部分的に貼床処理されている。第IV層を床面とする。

〔カマド〕 煙道および煙出しの一部は、検出面を下げた際に壊してしまった。煙道が緩やかに立ち上がっていくタイプのカマドだったものと思われる。

<位置> 南東壁中央からやや東隅寄り <煙道方位> N-136° -E

<本体> 残存状況は良好で、本体の幅1.3mと規模も大きい。左右の袖には芯材に礫が据えられておらず、黄褐色シルト質土の積み上げだけでつくられている。燃焼部焼土は、50cm×87cmの不整形に形成され、厚さは最大で10cmである。焼け具合は良好である。崩落した天井部の上には「カヤ」の拡がり確認されている。

<煙道・煙出し部> 煙出しの一部のみ残存する。煙道は掘り込み式であったと思われる。その底面はカマド本体奥にかけて緩やかに立ち上がるが、煙道部分は削平され不明である。推定される全長は1.2m前後と短めで、煙出し底面には掘り込みが認められない。

〔柱穴〕 位置的に支柱穴と思われるものは、PP1・PP2・PP8・PP6である。柱穴間距離はPP1・PP2間は350cm、PP1・PP8間は415cmを測る。他の柱穴状としたものは、各コーナー付近に多く見受けられるが、性格は不明である。

〔土坑〕 全部で6基確認できた。貯蔵穴と思われるものは、カマド左にある円形のPit4、南東壁にある楕円形のPit5などで、Pit6は貼床除去時に確認されたこれらよりも古い土坑である。Pit2・Pit3については次に記述する。

〔ロクロピット〕 この二つについては、ロクロ回転台を据えたロクロピットと思われる。Pit2は直径42cm、深さ50cmで、心棒を入れたと思われる小孔は直径10cmである。その部分の埋土はフカフカと軟らかい。Pit3は直径約50cm、深さ46cm、小孔は直径10cm前後で、両方とも様相が似ている。また、他の報告例(久慈市鼻館跡・北上市煤孫遺跡など)をみても、大きさや住居内の検出地点などに共通点があることから、このように判断した。素材となる粘土は確認できなかった。

〔周溝〕 一部途切れながら巡る。幅は10cm～25cm、深さは10cm程度である。北東壁の中央部が途切れているが、出入り口になる可能性もある。

〔その他〕 円礫は直径10cm前後のものが20ヶほど出土しているだけで、規模の割に量が少ない。

遺物 (第82～90図、写真図版51～54)

〔出土状況〕 遺物は、埋土を中心にカマド周辺や各Pit類、貼床内から大量に出土した。遺物の総量は大コンテナ2箱弱の出土をみた。掲載した遺物は92点である。

〔土器〕土師器坏・甕類・手づくね土器・耳皿、須恵器坏・壺・甕類が出土している。土師器坏の内黒・非内黒の割合は、ほぼ半々である。その中には、高台付のものもある。土師器甕は、器厚のあるいわゆるナタケズリ調整される非ロクロ成形のものが多い。耳皿は2点（415・416）出土した。いずれも内外面ともヘラミガキ調整されているものである。墨書土器は10点、刻書土器は4点出土した。前者はいずれも土師器の坏に書かれるものであるが、判読できないものが多い。後者には、土師器甕の頸部に「奈」と刻まれるもの（405）があり、また379のような文字と言えない落書きのようなものや「一万」の逆さ文字とも判断できるもの（393）など、文字資料が豊富に見つかっている。

〔石器・石製品〕縄文時代？の磨石（428）、手持ち砥石の欠損品2点（429・430）が出土している。砥石は本遺構からしか出土しなかった。

〔鉄製品〕5点出土した。鎌の一部や刀子、角釘、錫杖状鉄製品に似た捻りの入る製品がある。

時期 カマド・貯蔵穴等から出土する土器の特徴や灰白色火山灰の堆積状況から、9世紀末～10世紀初頭の年代が想定される。また、ロクロピットが確認されたことにより、往時に土器工房としても機能した住居と考えられる。

第7号住居跡（L40住）

遺構（第23～25図、写真図版11）

〔位置・重複〕平坦部南端のほぼ中央、L41グリッド付近にあり、第4号住居とは北西に約16m、第6号住居跡とは北に13mほどの距離を置く。全体の遺構配置からみると、本遺構の周辺には近接する遺構がほとんどない。遺構間の重複も見られないが、遺構西側がサイロにより攪乱を受けている。

〔検出面・状況〕この周辺は第Ⅱ層が薄く、本遺構は第Ⅲ層上面で確認された。黒色土のプランに、灰白色火山灰がわずかに認められた。

〔平面形〕長方形をなし、わずかに主軸方向に長い。東側はやや張り出す。

〔規模〕（4.70）m×5.28m 〔壁高〕34cm～57cm

〔埋土〕10層に分層された。自然堆積層で上位と下位は黒色土、その中間は黒褐色土からなり、全体的に炭化物や焼土粒の混入が多い。灰白色火山灰は1層中にごくわずかに見られるだけである。

〔壁〕南壁が急傾斜で立ち上がるが、その他は比較的緩やかな立ち上がりをもつ。

〔床面〕第Ⅳ層を床面とし、大きな凹凸がある。貼床は施されていない。

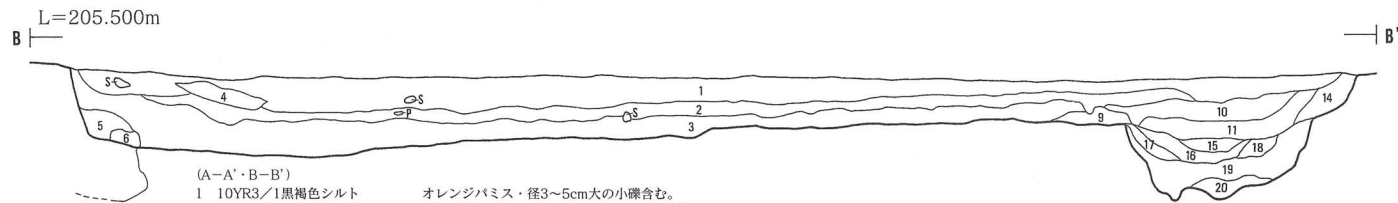
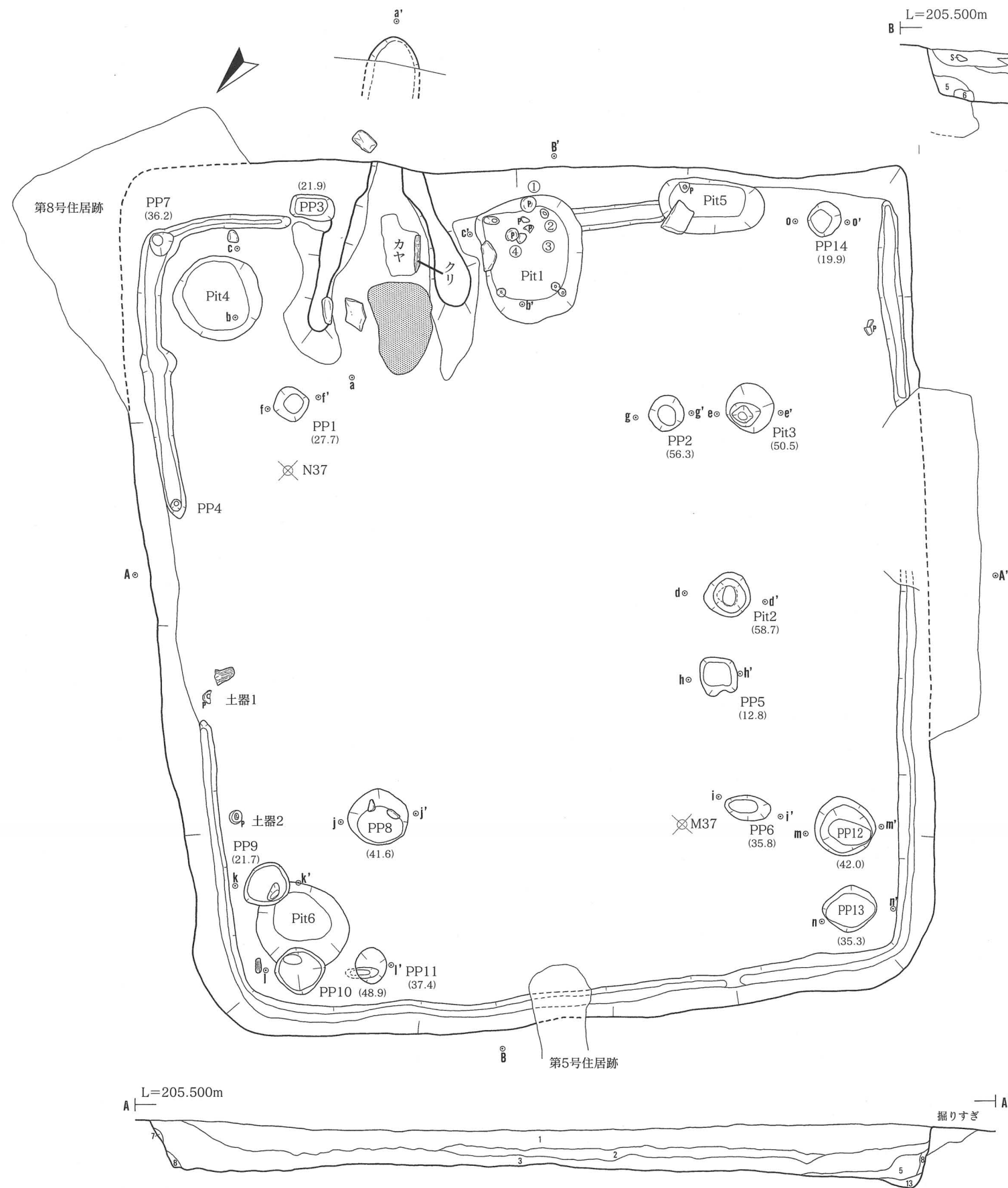
〔カマド〕本体・煙道部とも残存状況は良好であった。煙道に礫が配されないタイプである。

<位置>北東壁中央からやや東寄り <煙道方位>N-22°-E

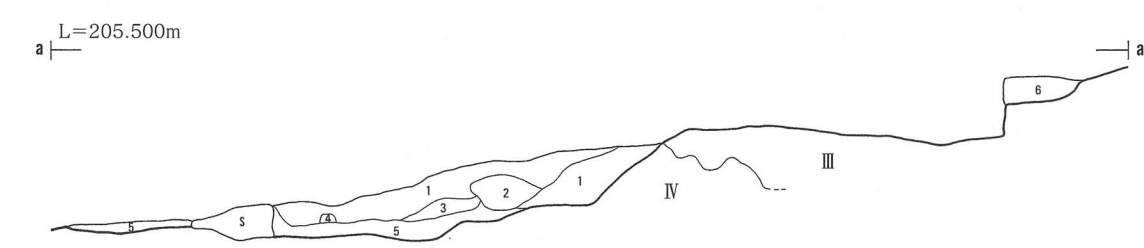
<本体>左右の袖には芯材の礫が数個ずつ据えられ、右袖には被覆したシルト質土が明瞭に残る。天井部下には、35cm×40cmあまりの焼土が形成されており、厚さは6cm前後である。カマド奥壁には、支脚の礫が置かれている。

<煙道・煙出し部>掘り込み式の煙道で、全長は約180cmを測る。底面は奥壁付近から緩やかに上がっていき、煙出し部で急激に掘り込まれているが、その検出面からの深さは55cmほどである。いずれも埋土にはカマド側から吹き込まれた焼土や炭化物が多く含まれている。

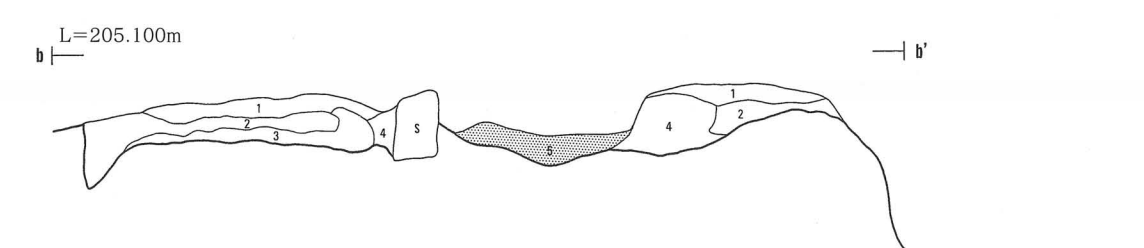
〔柱穴〕支柱穴はPP1～PP4である。これらは長方形に配置されているが、PP3・PP4は南壁際にありここが出入り口となる可能性がある。PP3とPP4の柱穴間距離は167cm、PP2とPP4のそれは340cmである。その



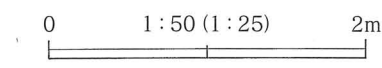
- (A-A'・B-B')
- | | | | |
|---------------------|-----------------------------------------------|---------------------|----------------------|
| 1 10YR3/1黒褐色シルト | オレンジパミス・径3~5cmの小礫含む。 | | |
| 2 10YR2/2黒褐色シルト | 1と3の間にある黒色土層でパミスの混入少ない。 | | |
| 3 10YR3/2黒褐色粘土質シルト | パミスの混入わずか。径5~10mmの小礫含む。 | | |
| 4 10YR3/2黒褐色粘土質シルト | にぶい黄褐色の小ブロック・オレンジパミス含む。 | | |
| 5 10YR2/1黒色シルト | To-aの小ブロックをわずかに含む。 | | |
| 6 7.5YR4/4褐色シルト | 焼けの悪い焼土ブロック。 | | |
| 7 10YR2/2黒褐色シルト | II層起源の崩落土。 | | |
| 8 10YR2/1黒色シルト | III層起源の崩落土。 | | |
| 9 10YR3/2黒褐色粘土質シルト | 褐色焼土粒・黄褐色土粒の混合土。 | | |
| 10 10YR2/2黒褐色砂質シルト | オレンジパミス・浮石粒・炭化物粒を全体に含む。 | | |
| 11 10YR2/1黒色シルト | To-aの極小ブロック・褐色焼土粒・褐色土小ブロック含む。5に似る。 | | |
| 12 10YR3/3暗褐色粘土質シルト | 焼土粒・にぶい黄褐色土ブロックを含む。 | | |
| 13 10YR2/2黒褐色粘土質シルト | To-aの極小ブロック・焼土粒を含む貼り床掘り方埋土。 | | |
| 14 10YR2/3黒褐色シルト | 焼土ブロック・褐色土小ブロック含む。 | | |
| 15 10YR2/1黒色シルト | 土器片・焼土粒・炭化物粒を含む。カマドから流れ込んだ崩落土。北側にも大きく入り込んでいる。 | | |
| | | 16 7.5YR4/4褐色シルト | これも15に同じだが、焼土粒の混入多い。 |
| | | 17 10YR3/2黒褐色粘土質シルト | 炭化物粒・焼土粒含む。 |
| | | 18 10YR2/3黒褐色粘土質シルト | 褐色土粒・赤褐色焼土粒を全体に含む。 |
| | | 19 10YR2/1黒色粘土質シルト | 土器片を多く含む。 |
| | | 20 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト | 褐色焼土小ブロックを含む。 |



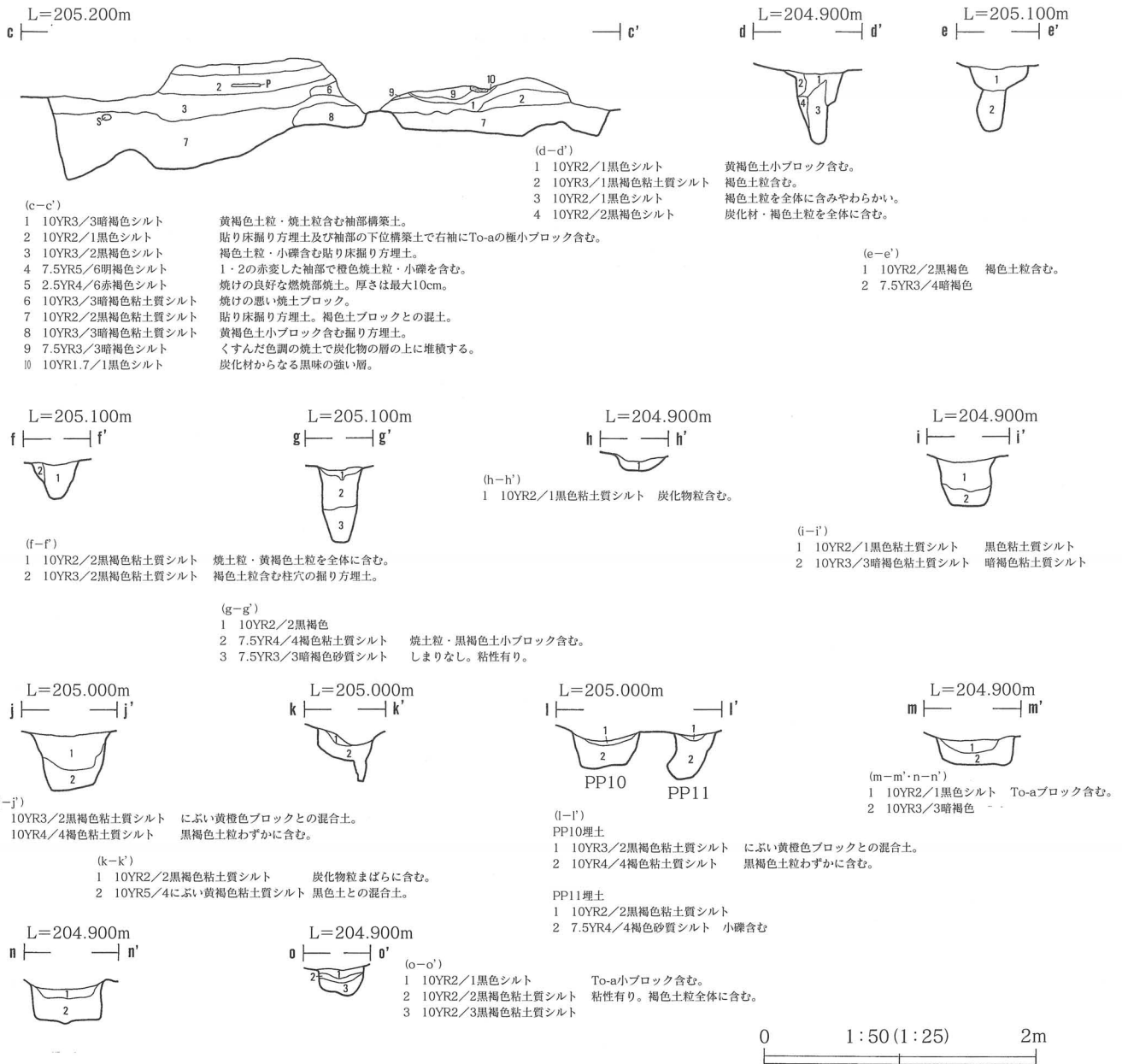
- (a-a')
- | | |
|--------------------|---------------------------------|
| 1 10YR3/3暗褐色粘土質シルト | 小礫含む。 |
| 2 10YR3/2黒褐色シルト | 炭化物粒・焼土粒を全体に含む。 |
| 3 10YR3/4暗褐色粘土質シルト | 炭化物粒を下に含む。 |
| 4 7.5YR4/4褐色シルト | 焼土ブロック。 |
| 5 10YR3/3暗褐色粘土質シルト | 貼り床掘り方埋土。明黄褐色土小ブロック・黒色土小ブロック含む。 |



- (b-b')
- | | |
|--------------------|--------------------------------------|
| 1 10YR3/3暗褐色シルト | 黄褐色土粒・焼土粒含む袖部構築土。 |
| 2 10YR2/1黒色シルト | 貼り床掘り方埋土及び袖部の下位構築土で右袖にTo-aの極小ブロック含む。 |
| 3 10YR3/2黒褐色シルト | 褐色土粒・小礫含む貼り床掘り方埋土。 |
| 4 7.5YR5/6明褐色シルト | 1・2の赤変した袖部で褐色焼土粒・小礫を含む。 |
| 5 2.5YR4/6赤褐色シルト | 焼けの良い燃焼部焼土。厚さは最大10cm。 |
| 6 10YR3/3暗褐色粘土質シルト | 焼けの悪い焼土ブロック。 |
| 7 10YR2/2黒褐色粘土質シルト | 貼り床掘り方埋土。褐色土ブロックとの混土。 |
| 8 10YR3/3暗褐色粘土質シルト | 黄褐色土小ブロック含む掘り方埋土。 |
| 9 7.5YR3/3暗褐色シルト | くすんだ色調の焼土で炭化物の層の上に堆積する。 |
| 10 10YR1.7/1黒色シルト | 炭化材からなる黒味の強い層。 |



第21図 第6号住居跡 (1)



第22図 第6号住居跡(2)

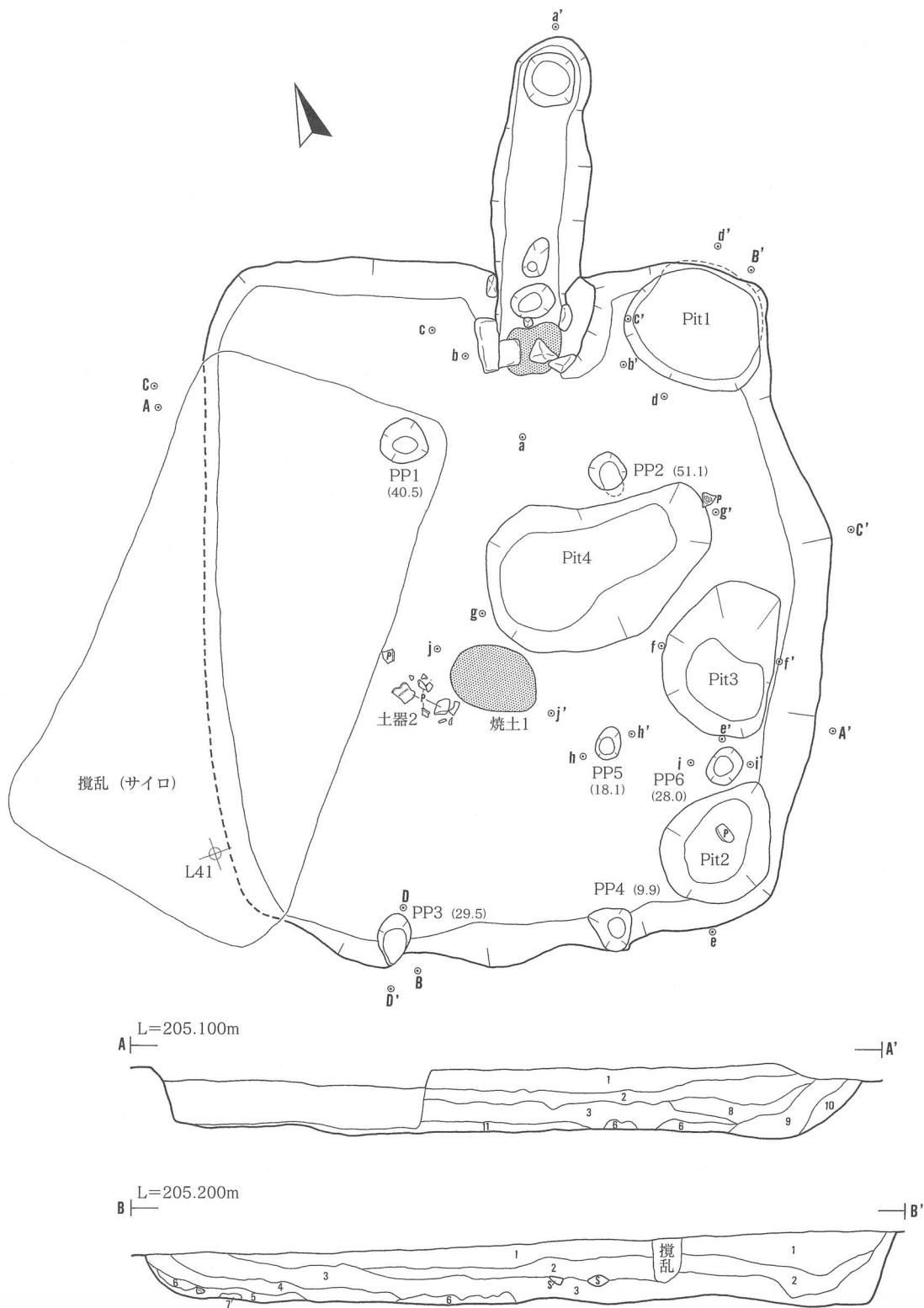
他の柱穴状のものは性格がわからない。

〔土坑〕北東隅にPit1、南隅にPit2、東壁中央付近にPit3、焼土1の東側にPit4が確認された。Pit1～Pit3は貯蔵穴の類、Pit4は焼土との関連が考えられる長楕円形の土坑で、小鍛冶等の作業に使われたものと考えられる。〔周溝〕検出されなかった。

〔焼土(炉)〕床面中央やや南寄りに49cm×67cmの楕円形をなす焼土が形成されていた。厚さは最大で4cm程度である。先述のように、小鍛冶等の作業によりできたものと考えられる。ここからも鍛造剥片は出土していない。

〔その他〕埋土に含まれる円礫の出土量はチェックしかねた。この他、第24図に示したように、焼失に伴う焼土と炭化材が床面直上に確認された。炭化材の樹種は第24図内に示したとおりである。

遺物(第90・91図、写真図版51～54)



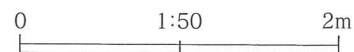
(A-A'・B-B')

- 1 10YR2/1黒色シルト
- 2 10YR3/2黒褐色シルト
- 3 10YR2/1黒色シルト
- 4 10YR1.7/1黒色シルト
- 5 10YR3/3暗褐色シルト
- 6 7.5YR4/6褐色シルト

To-aの小ブロック・オレンジパミスまばらに含む。
 オレンジパミス・浮石粒・焼土粒を全体に含む。
 褐色土粒もわずかに含んでいる。
 オレンジパミス・浮石粒を含み、橙色の焼土ブロックが混入する。
 オレンジパミス・焼土粒を含む。
 橙色焼土ブロック含む。
 焼土時に形成された焼土ブロック。

- 7 10YR1.7/1黒色シルト
- 8 10YR2/2黒褐色シルト
- 9 10YR3/2黒褐色シルト
- 10 10YR2/3黒褐色シルト
- 11 10YR2/3黒褐色粘土質シルト

炭化物を含むため黒味を帯びる。黒褐色土との混合土。
 にぶい黄褐色土粒・炭化物粒・焼土粒を含む。
 明黄褐色土ブロック・橙色焼土ブロック・黒色土粒を含む。
 オレンジパミス・黄褐色土粒をまばらに含む。
 貼り床掘り方埋土。



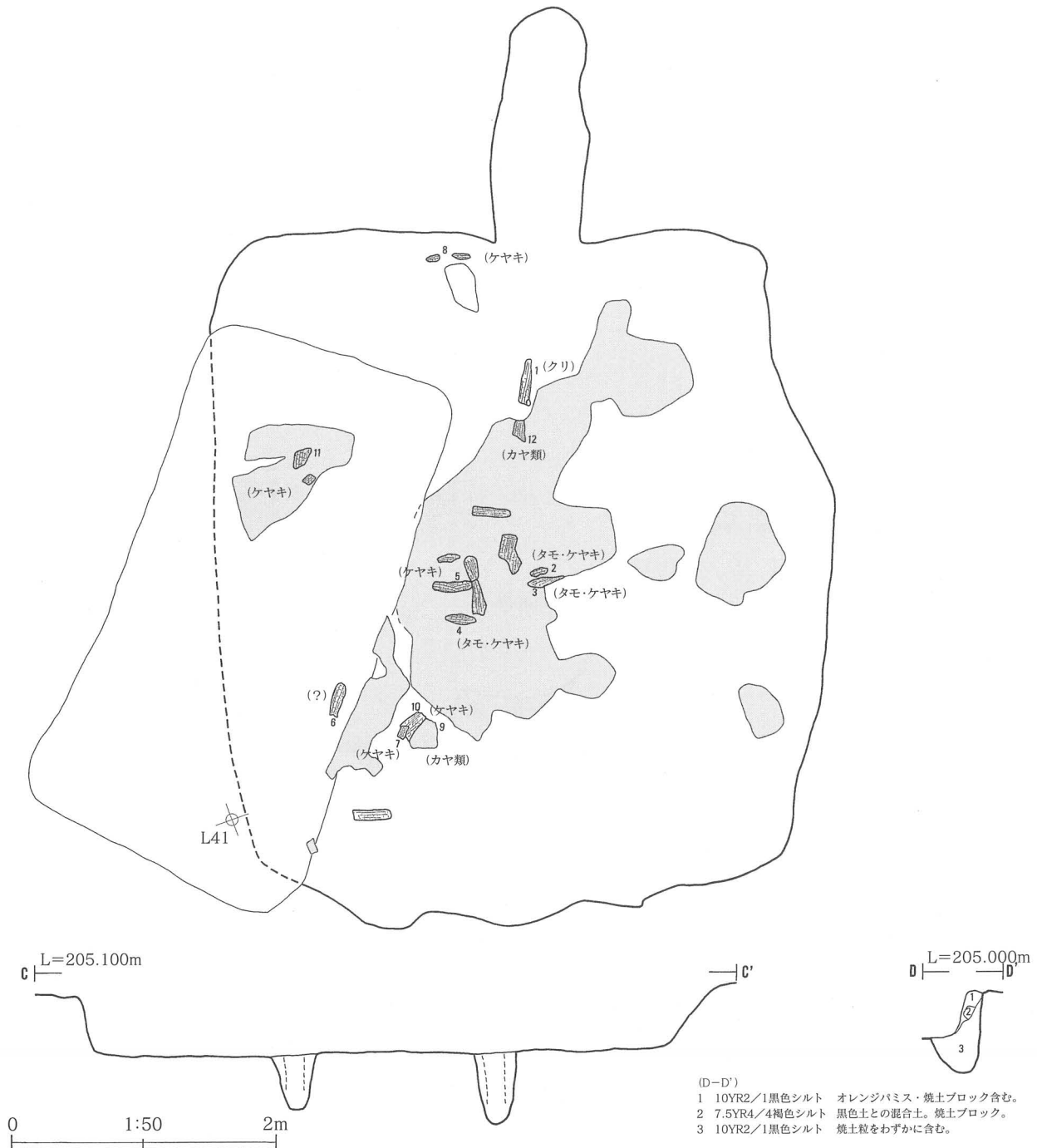
第23図 第7号住居跡 (1)

〔出土状況〕 遺物は全体的に少なく、遺物の総量は中コンテナ1箱弱である。掲載遺物は11点である。

〔土器〕 土師器と須恵器の坏・甕が出土しているが、土師器の坏は全体的に少ない。438は大形の鉢とした。体部下端と底部は回転ヘラケズリ調整されている。土師器坏の内黒・非内黒の割合はほぼ半々で、非内黒の坏の底部径が大きいのが特徴である。墨書土器は1点（440）出土したが、判読できない。

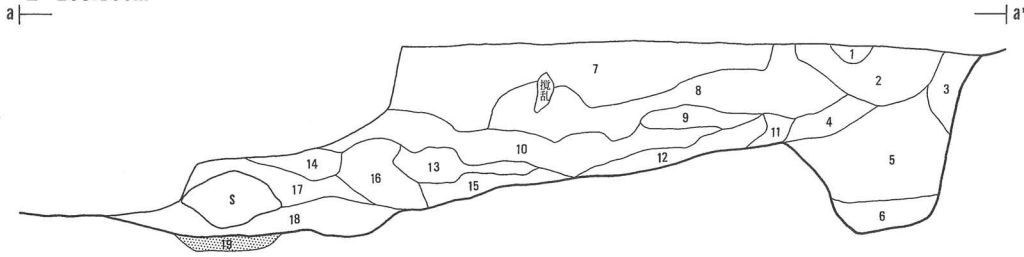
〔土製品〕〔鉄製品〕ともに出土していない。

時期 出土した土器の特徴から、9世紀末以前の年代（前回報告第II期）を想定した。今回本遺跡で確認された住居群の中では、一段階古い時期にあたるものと思われる。



第24図 第7号住居跡（2）

L=205.100m



(a-a')

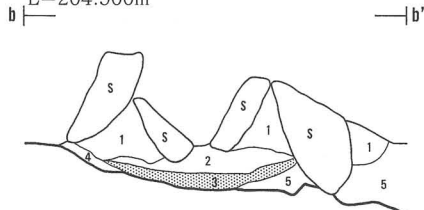
- 1 5YR3/2黒褐色シルト
- 2 10YR2/2黒褐色シルト
- 3 10YR2/1黒色シルト
- 4 7.5YR3/3暗褐色シルト
- 5 7.5YR2/3極暗褐色シルト
- 6 7.5YR1.7/1黒色シルト
- 7 10YR2/2黒褐色シルト
- 8 10YR3/3暗褐色粘土質シルト
- 9 7.5YR2/1黒色シルト
- 10 7.5YR2/1黒褐色粘土質シルト

すすけた色調
炭化物粒・焼土粒含む。
V層起源崩落土。
暗赤褐色焼土粒を全体に含む。
暗赤褐色焼土粒を全体に含む。
炭化物がらみで青黒い。
オレンジパミス・焼土粒含む。
煙道部の上に貼られた粘土質土。
焼土粒含む。
8の暗褐色土極小ブロック含む。

- 11 7.5YR2/1黒色粘土質シルト
- 12 7.5YR3/3暗褐色粘土質シルト
- 13 10YR4/4褐色粘土質シルト
- 14 7.5YR3/4暗褐色シルト
- 15 7.5YR3/4暗褐色シルト
- 16 7.5YR3/4暗褐色シルト
- 17 10YR2/1黒色シルト
- 18 5YR4/4にぶい赤褐色粘土質シルト
- 19 5YR4/8赤褐色シルト

暗褐色土粒含む。
橙色焼土粒を全体に含む。
橙色焼土粒含む天井部崩落土。
黒色土ブロック含む。
吹き込まれた焼土。
橙色焼土粒をまばらに含む。
赤褐色焼土小ブロック含む。
燃焼部焼土直上の焼土層。
燃焼部焼土で焼け良好。(b-b' 3に同じ)

L=204.900m

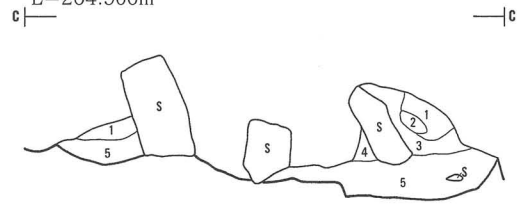


(b-b')

- 1 7.5YR1.7/1黒色シルト
- 2 7.5YR4/6褐色シルト
- 3 5YR4/8赤褐色シルト
- 4 7.5YR2/2黒褐色粘土質シルト
- 5 7.5YR2/1黒色シルト

暗褐色の焼土小ブロック含む。
天井部から落ちた焼土で明るい色調。
燃焼部焼土で焼け良好。(a-a' 19に同じ)
礫(芯材)の掘り方理土。
貼り床掘り方理土。橙色焼土粒含む。

L=204.900m

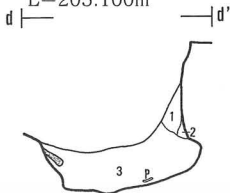


(c-c')

- 1 5YR4/6赤褐色シルト
- 2 7.5YR2/1黒色シルト
- 3 7.5YR2/3極暗褐色粘土質シルト
- 4 5YR3/4暗赤褐色粘土質シルト
- 5 7.5YR2/1黒色粘土質シルト

袖部が波熟した部分。(焼失時か?)
炭化材を含み青黒い。
礫に被覆したシルト質土で焼土小ブロックを含む。
礫内側の焼土ブロック。
貼り床掘り方理土で橙色焼土粒を含む。

L=205.100m

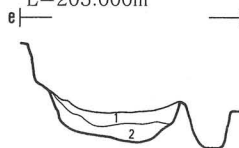


(d-d')

- 1 10YR2/1黒色シルト
- 2 10YR3/3暗褐色シルト
- 3 2.5YR2/1黒色

オレンジパミス・小礫含む。
地山崩落土。
炭化材を多く含む青黒い。

L=205.000m

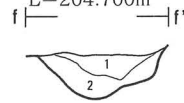


(e-e')

- 1 10YR3/3暗褐色粘土質シルト
- 2 10YR2/2黒褐色粘土質シルト

橙色焼土粒・黄褐色土粒を含む。
明黄褐色土粒を全体に含む。

L=204.700m

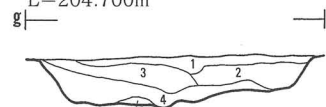


(f-f')

- 1 10YR3/2黒褐色シルト
- 2 10YR2/1黒色シルト

橙色焼土粒・黄褐色土粒を含む。
明黄褐色土粒を全体に含む。

L=204.700m



(g-g')

- 1 10YR2/2黒褐色粘土質シルト
- 2 10YR3/2黒褐色粘土質シルト
- 3 10YR2/3黒褐色粘土質シルト
- 4 10YR2/1黒色粘土質シルト
- 5 10YR5/4にぶい黄褐色粘土

浮石粒を全体に含む。
黄褐色土粒をまばらに含む。
赤褐色焼土小ブロック・褐色土粒を含む。
焼土粒・暗褐色土小ブロックを含む。
粘土ブロック。

L=204.700m



(h-h')

- 1 10YR4/6褐色粘土質シルト
- 2 10YR4/4褐色粘土質シルト

浮石粒含む。
小礫含む。

L=204.700m

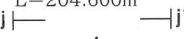


(i-i')

- 1 10YR3/1黒褐色シルト

黄褐色土粒を含む。

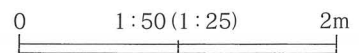
L=204.600m



(j-j')

- 1 5YR4/6赤褐色シルト

焼けは良好。



第25図 第7号住居跡 (3)

第8号住居跡 (N36住)

遺構 (第26図、写真図版56)

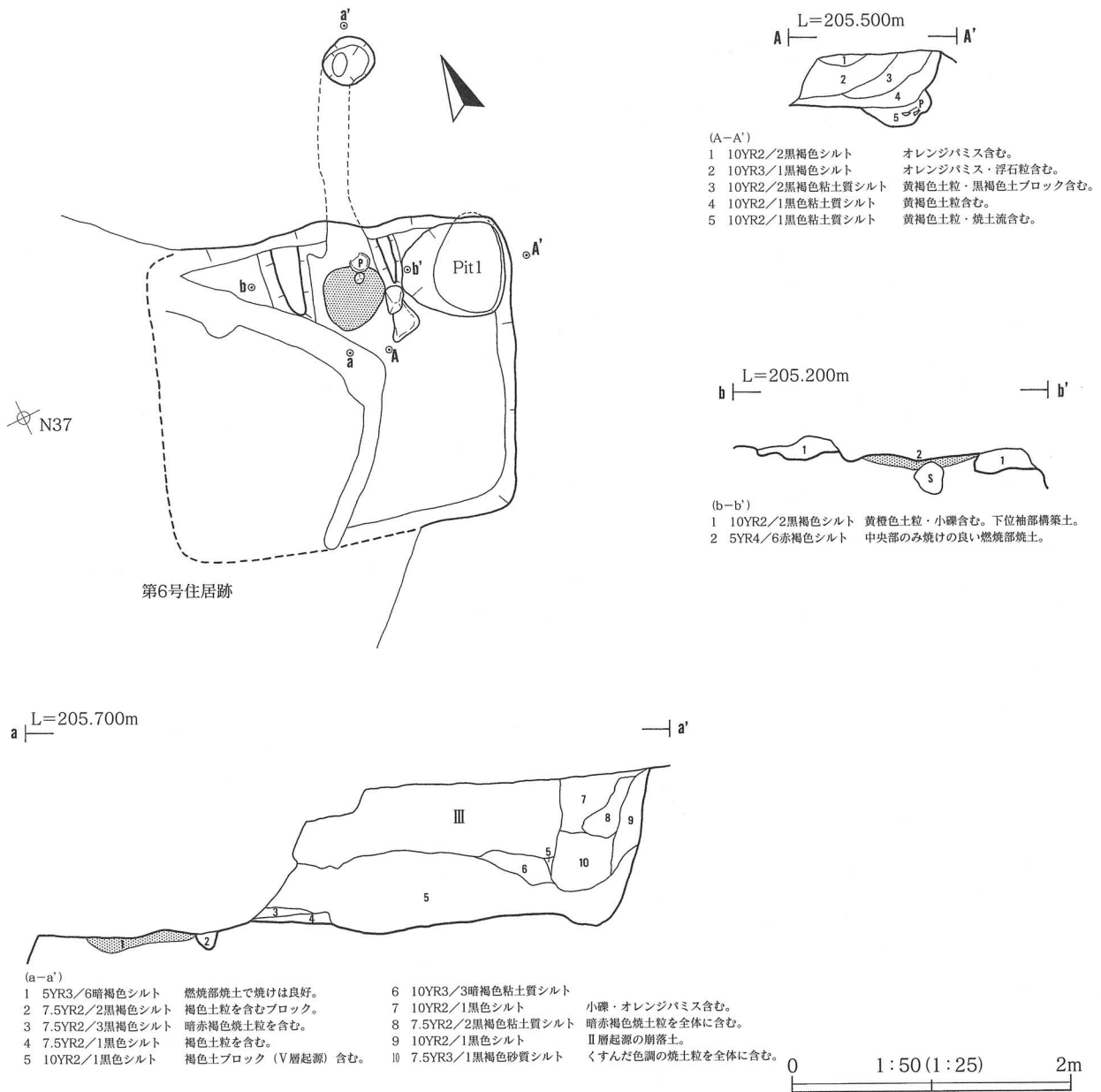
〔位置・重複〕 平坦部中央にあり、第6号住居跡の東隅部分と重複している。本遺構のほうが古い。N37グリッド付近に位置し、その東約5mには第10号住居跡がある。

〔検出面・状況〕 当初は重複に気づかず、第6号住居跡の精査時に第II層下面で検出した。平面プランは押さえずに精査した。

〔平面形〕 主軸方向が短い長方形をなしていたものと思われる。

〔規模〕 2.16m×? 〔壁高〕 37cm

〔埋土〕 4層に分層される自然堆積層である。まず壁際に黒色土、その後は黒褐色土が堆積する。灰白色火山灰は認められない。〔壁〕 急傾斜で立ち上がる。〔床面〕 第IV層を床面とする。貼床はない。



第26図 第8号住居跡

〔カマド〕第6号住居跡に左袖の一部が壊されているが、それ以外は本体・煙道部ともよく残っている。

〈位置〉北東壁中央からやや東寄りか。 〈煙道方位〉N-12° -E

〈本体〉左右の袖はシルト質土を積み上げて構築されるが、右袖手前側には礫が据えられている。燃焼部焼土は42cm×45cmの範囲に形成され、厚さは4cm前後を測る。焼土の奥壁側には支脚の礫が置かれ、そばから土師器の坏が1点出土した。

〈煙道・煙出し部〉煙道部はほぼ水平に煙出しに向かって削り抜かれ、全長はおよそ135cmを測る。煙出し部の底面は、煙道のそれよりも若干低められている。深さは45cmである。

〔柱穴〕確認されない。〔土坑〕カマド右側の北東隅にPit1を検出した。貯蔵穴と思われる。

〔周溝〕検出されなかった。

〔その他〕埋土には円礫がほとんど含まれていなかった。

遺物 (第92図、写真図版56)

〔出土状況〕全体的に出土遺物は少ないが、完形に近い土師器の坏が5点出土し、それらを掲載した。この他は、土師器坏の細片がわずかに出土しているだけである。

〔土器〕土師器甕は出土しなかった。墨書土器は1点(458)出土している。

〔土製品〕〔鉄製品〕ともに出土していない。

時期 出土した土器の特徴および第6号住居跡との重複関係から、9世紀末以前(前回報告第II期)と考えられる。

第9号住居跡 (N39住)

遺構 (第27図、写真図版13)

〔位置・重複〕平坦部中央からわずかに南東寄りのO39グリッド付近に位置する。第6号住居状遺構に隣接、第11号住居跡とは南東に約6mの距離がある。第17号土坑と南東壁で重複するが、本遺構のほうが新しい。

〔検出面・状況〕第II層で検出した。黒褐色土の検出プランの輪郭に、わずかに灰白色火山灰を含んでいた。

〔平面形〕隅丸方形をなす。〔規模〕3.03m×3.20m 〔壁高〕41cm~50cm

〔埋土〕13層に分層された。全体は黒褐色土と黒色土からなる自然堆積層で、上位に炭化物を含む焼けの悪い焼土層が堆積する。灰白色火山灰は埋没が始まる早い段階で堆積した様相である。

〔壁〕北西壁以外は急傾斜で立ち上がっている。〔床面〕第IV層を床面とし、貼床は施されない。

〔カマド〕削り抜き式の煙道を有する。残りは良い。

〈位置〉南東壁中央からやや東隅寄りに位置する。 〈煙道方位〉N-115° -E

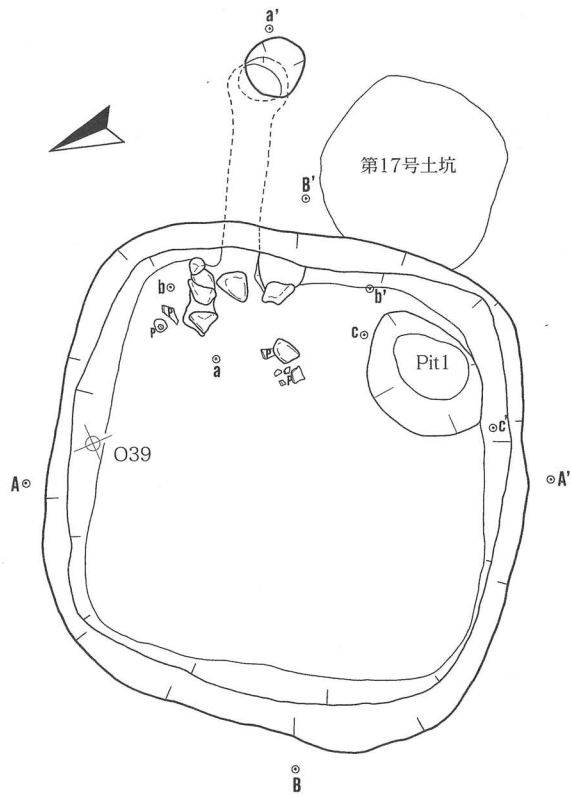
〈本体〉袖部は芯材の礫とシルト質土を貼り付けて構築したと思われるが、右袖は精査時にシルト質土を剥がしてしまっている。本体内には袖から崩落した礫を含むが、その下に燃焼部焼土は形成されていない。

〈煙道・煙出し部〉煙道部は、比較的急に煙出しに向かって削り抜かれて下がり、そのまま煙出しに続く。埋土には火山灰のブロックを部分的に含んでいる。煙道の全長はおよそ120cm、煙出し部の底面までの深さは72cmである。〔柱穴〕確認されない。

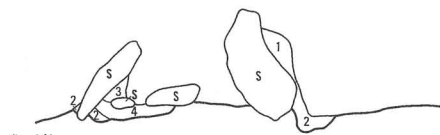
〔土坑〕カマド右側の南隅に深さ33cmのPit1を確認した。貯蔵穴に類する土坑であろう。

〔周溝〕検出されなかった。

〔その他〕埋土からは円礫20ヶあまりが出土している。

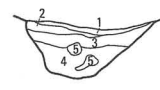


L=205.400m
b|-----|b'

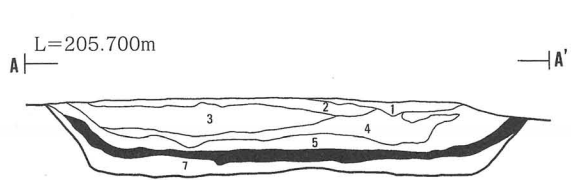


- (b-b')
- | | | |
|---|-------------------|----------------|
| 1 | 10YR4/4褐色シルト | 芯材の礫に貼り付けたシルト。 |
| 2 | 10YR3/3暗褐色シルト | 礫の掘り方埋土。 |
| 3 | 7.5YR4/4褐色シルト | To-aの極小ブロック含む。 |
| 4 | 7.5YR3/2黒褐色粘土質シルト | 貼り床掘り方埋土。 |

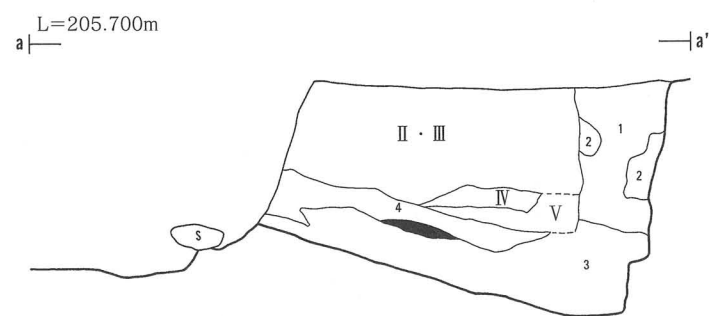
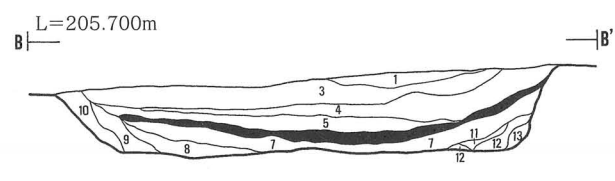
L=205.200m
c|-----|c'



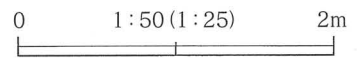
- (c-c')
- | | | |
|---|-------------------|---------------------------|
| 1 | 7.5YR4/3褐色シルト | にぶい赤褐色焼土粒・黄褐色粘土を全体に含む。 |
| 2 | 10YR3/3暗褐色粘土質シルト | 小礫を含む。 |
| 3 | 7.5YR4/4褐色粘土質シルト | 黒色土小ブロック含む。 |
| 4 | 7.5YR4/6褐色粘土質シルト | 黒色土小ブロック・浮石粒わずかに含み、やわらかい。 |
| 5 | 10YR6/6明黄褐色粘土質シルト | 4を一部に含む。 |



- (A-A'・B-B')
- | | | |
|----|--------------------|---------------------------|
| 1 | 10YR3/2黒褐色シルト | 炭化物粒・焼土粒・To-a, or 灰層含む。 |
| 2 | 7.5YR4/4褐色シルト | 炭化物を含む焼けの悪い焼土。 |
| 3 | 10YR2/1黒色シルト | To-aの極小～径20mm次のブロックを含む。 |
| 4 | 10YR2/2黒褐色シルト | 3のTo-aブロックと焼土粒を全体に含む。 |
| 5 | 10YR1.7/1黒色シルト | To-aの極小ブロック含む。 |
| 6 | 10YR8/2灰白色To-a | 層中央灰色を呈する。 |
| 7 | 7.5YR1.7/1黒色粘土質シルト | オレンジバミスを全体に含む。 |
| 8 | 7.5YR2/2黒褐色シルト | 橙色焼土粒を全体に含む。 |
| 9 | 10YR2/1黒色シルト | To-aの細粒をわずかに含む。 |
| 10 | 10YR2/2黒褐色シルト | II・III層起源の崩落土。 |
| 11 | 10YR4/6褐色粘土質シルト | 天井部の崩落土か？ |
| 12 | 10YR2/1黒色シルト | カマドの覆土。にぶい赤褐色の焼土ブロック含む。 |
| 13 | 10YR2/3黒褐色粘土質シルト | 明黄褐色の地山ブロック・赤褐色焼土ブロックを含む。 |



- (a-a')
- | | | |
|---|---------------|-----------------|
| 1 | 10YR3/3暗褐色シルト | 黒褐色土ブロック含む。 |
| 2 | 10YR2/2黒褐色シルト | II層起源崩落土。 |
| 3 | 7.5YR2/1黒色シルト | すすけた色調。 |
| 4 | 10YR2/1黒色シルト | To-aの大小ブロックを含む。 |



第27図 第9号住居跡

遺物 (第92図、写真図版56)

〔出土状況〕 出土遺物は少なく、4点掲載したのみである。全体量はビニール袋1袋程度である。

〔土器〕 土師器坏・甕、須恵器の坏が出土している。墨書・刻書は見あたらない。

〔土製品〕〔鉄製品〕ともに出土していない。

時期 出土した土器の特徴、および灰白色火山灰の堆積状況から、9世紀末～10世紀はじめにかけて存在した住居跡と思われる。

第10号住居跡 (O36住)

遺構 (第28・29図、写真図版14)

〔位置・重複〕 平坦部中央から北東寄りのP37グリッド付近にあり、第12号住居跡とは南東に約5mの距離を置く。第8号住居跡とも南西方向にほぼ同じくらいの距離がある。遺構間の重複は認められない。

〔検出面・状況〕 検出面は第Ⅱ層である。状況は、黒褐色土の方形プランに灰白色火山灰の粒子が混入していたため、輪郭が白っぽく見えた。

〔平面形〕 方形でやや隅丸をなす。〔規模〕 4.70m×5.04m 〔壁高〕 32cm～58cm

〔埋土〕 5層に分層された。黒褐色土と黒色土からなる自然堆積層である。灰白色火山灰は1層と2層の間にブロック状に堆積している。

〔壁〕 いずれの壁も急傾斜で立ち上がる。〔床面〕 第Ⅳ層を床面とし、貼床は施されていない。

〔カマド〕 掘り込み式の煙道で、本体は袖が不明瞭である。残存状況が悪く、人為的に壊されている可能性がある。

〈位置〉 南東壁の東隅寄りにある。 〈煙道方位〉 N-135° -E

〈本体〉 破壊されているためか、残りが悪い。左袖部に芯材の礫と被覆されたシルト質土がわずかに残るだけであり、右袖部分には芯材の礫を抜き取りような痕跡があった。燃烧部焼土は23cm×30cmの範囲に拡がり、焼けは良好だが厚さは3cm程度と薄い。

〈煙道・煙出し部〉 両側に礫を伴わない掘り込み式の煙道で、底面は波打ちながら煙出しにかけて緩やかに上がる。煙道の全長は約1mである。また、煙出しの深さは14cmと浅く、雨水などの流入を防ぐ掘り込みは認められない。

〔柱穴〕 位置的に主柱穴はPP1～PP4と思われ、方形に配されている。柱穴間距離は、PP1～PP2が173cm、PP1～PP3が195cmで、主軸方向に幾分長い。PP5～PP7は性格が不明のものである。

〔土坑〕 検出されない。〔周溝〕 途切れながら巡るが、部分的に存在したのか。

〔その他〕 埋土中の円礫は中コンテナ1箱分出土した。層位は第2層からのものが多い。

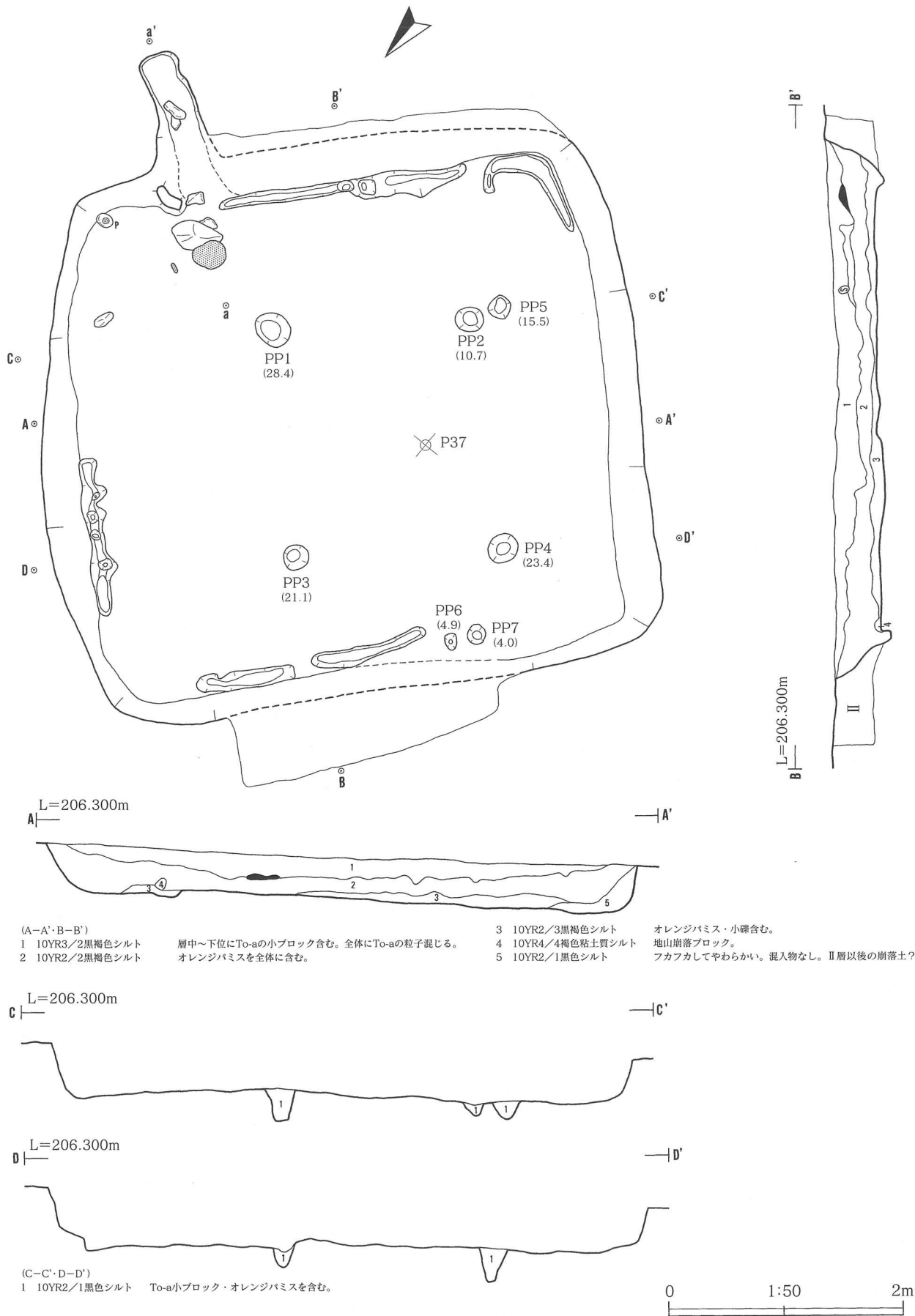
遺物 (第93図、写真図版56)

〔出土状況〕 出土遺物は少なく、全体量はビニール袋1袋程度である。遺物は7点掲載した。

〔土器〕 土師器坏・甕、須恵器壺・大甕が出土した。458は「出」あるいは「山山」と重ねられた文字が体部に六文字書かれた墨書土器である。文字の大きさは様々であるが、一文字だけ他の五文字と違って大きく運筆も異なっている。これ以外の五文字は記号化しており、これらが意味するところを考えなければならない。

〔土製品〕 出土していない。〔鉄製品〕 刀子の欠損品が出土している。

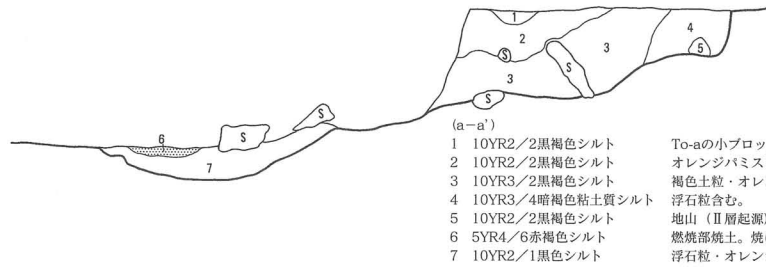
時期 出土した土器の特徴や灰白色火山灰の堆積状況から、9世紀末～10世紀はじめにかけて存在した住居跡と推定される。



第28図 第10号住居跡 (1)

L=206.300m
a|

|a'



第29図 第10号住居跡 (2)

第11号住居跡 (O40住)

遺構 (第30・31図、写真図版15)

〔位置・重複〕 平坦部中央から南東側のP40グリッド付近に位置する。第10号住居跡、第12～16号住居跡とはそれぞれ10m以上の距離を置く。遺構間の重複は認められない。

〔検出面・状況〕 検出面は第II層で、黒色土の方形プランに灰白色火山灰のブロックが含まれていた。

〔平面形〕 主軸方向に長い長方形だがわずかに歪んでいる。〔規模〕 3.37m×3.90m 〔壁高〕 30cm～40cm

〔埋土〕 黒色土の単層で、灰白色火山灰のブロックを最上部に含む自然堆積層である。

〔壁〕 いずれの壁も直立気味に立ち上がる。

〔床面〕 掘り込みが浅く第III層を床面とする。小さな凹凸が認められるが、貼床は施されていない。

〔カマド〕 掘り込み式の煙道を持つ。残りが悪く、これも人為的に壊された様相を呈する。

〈位置〉 南東壁の南隅寄りにある。 〈煙道方位〉 N-135° -E

〈本体〉 袖部に芯材の礫はなく、シルト質土の高まりがわずかに残るだけである。燃焼部焼土は直径12cm、厚さ数cm程度しか発達しない。

〈煙道・煙出し部〉 掘り込み式の煙道で一部に礫が配される。埋土には崩れた礫も認められる。底面は緩やかに上がり、その後水平に延びて煙出しへ続く。煙出し部は大きく掘り込まれるが、その深さは46cmである。

〔柱穴〕 主柱穴は四隅にあるPP1～PP4と思われる。方形に配されるが、このような柱穴配置の住居は他には確認されなかった。上屋の構造に違いがあったものか。柱穴間距離は、PP1～PP2が260cm、PP1～PP3が320cmである。PP5～PP8は性格が不明のもの、PP9は貯蔵穴にはならないと思われたので柱穴状の小土坑とした。

〔土坑〕 〔周溝〕 ともに検出されない。〔その他〕 円礫は十数個出土したのみである。

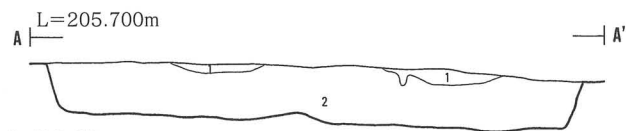
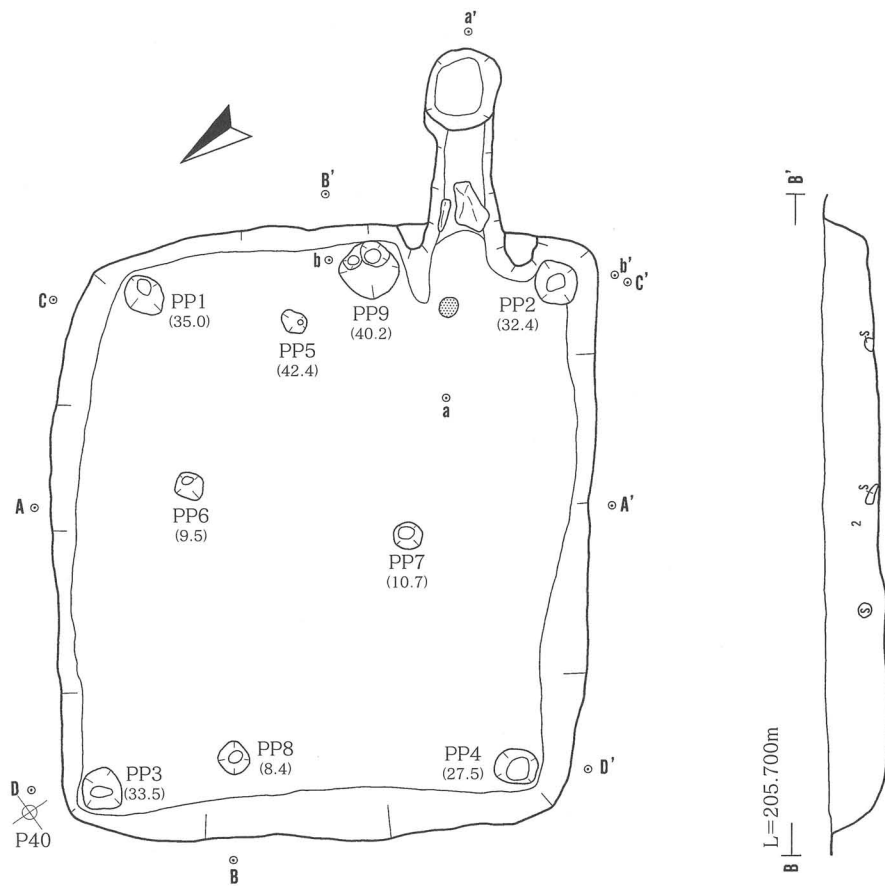
遺物 (第94図、写真図版57)

〔出土状況〕 出土遺物の総量は小コンテナ1箱弱で、主に住居埋土、煙道内から出土した。8点掲載した。

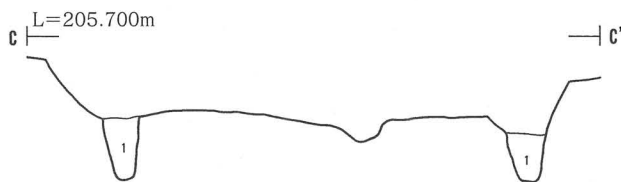
〔土器〕 土師器杯・甕・小形の鉢、須恵器杯が出土した。墨書・刻書土器はみられない。

〔土製品〕 〔鉄製品〕 いずれも出土していない。

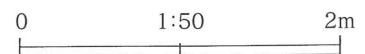
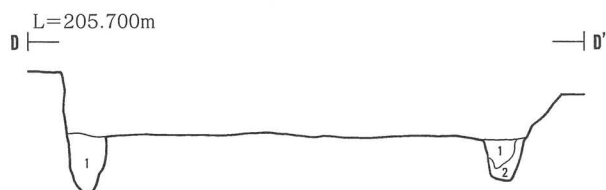
時期 出土した土器の特徴や灰白色火山灰の堆積状況から、9世紀末以前に存在した住居跡と推定される。



- (A-A'・B-B')
- 1 10YR7/1灰白色To-a 2の混入微量。
 - 2 10YR2/1黒色シルト オレンジハミスまばらに含む。礫混入少ない。

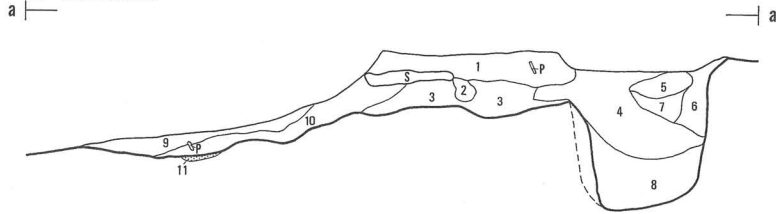


- (C-C'・D-D')
- 1 10YR2/1黒色粘土質シルト 明黄褐色土粒・褐色土粒含む。
 - 2 10YR3/4暗褐色粘土質シルト II層起源の崩落ブロック含む。



第30図 第11号住居跡 (1)

L=205.600m

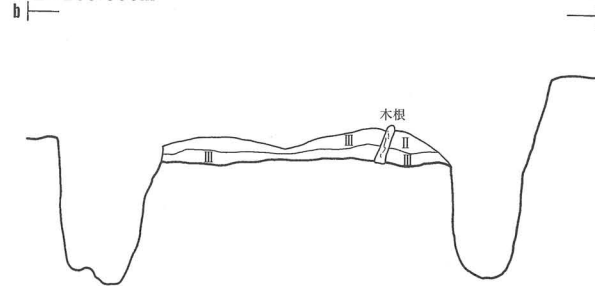


(a-a'・b-b')

- 1 10YR2/1黒色シルト
- 2 10YR3/3暗褐色粘土質シルト
- 3 10YR2/1黒色シルト
- 4 7.5YR2/1黒色シルト
- 5 10YR6/4にふい黄褐色粘土質シルト
- 6 10YR2/1黒色シルト
- 7 7.5YR2/2黒褐色シルト
- 8 10YR3/1黒褐色シルト
- 9 10YR2/2黒褐色シルト
- 10 7.5YR3/3暗褐色シルト
- 11 5YR5/8明赤褐色シルト

- To-aの細粒・黄褐色土粒含む。
- 天井部崩落土。
- オレンジパミス・黄褐色土粒を全体に含む。
- 橙色焼土粒・灰黄褐色土の小ブロック含む。
- 黒褐色土・焼土粒含む。
- II層起源崩落土。
- 暗褐色土の小ブロック含む。
- オレンジパミスわずかに含む。
- 焼土粒をまばらに含む。
- 明黄褐色土ブロックを含む天井部から落ちた焼土。
- 焼けの悪い焼土。厚さもほとんどない。

L=205.600m



第31図 第11号住居跡 (2)

第12号住居跡 (Q37住)

遺構 (第32・33図、写真図版16)

〔位置・重複〕平坦部東寄りのR38グリッド付近、第10号住居跡と第13号住居跡の間に位置する。前者とは北西に4m、後者とは東に2.5mの距離を置く。

〔検出面・状況〕第II層下面から第III層で検出した。黒褐色土の方形プランに灰白色火山灰の拡がりで見つかった。黄褐色に近い色調の火山灰も観察されたが、給源を別にするものかは調査時には判断できなかった。

〔平面形〕隅丸方形をなす。〔規模〕4.21m×4.23m 〔壁高〕47cm~66cm

〔埋土〕10層に分層される自然堆積層である。数枚の黒褐色土と黒色土、壁際に堆積する地山崩落土からなる。1・2層中には灰白色火山灰をブロックで含み、3層には例の円礫を多く含んでいる。

〔壁〕いずれの壁も急傾斜で立ち上がる。〔床面〕第IV層を床面とする。ほぼ平坦である。

〔カマド〕比較的によく残っている。割り抜き式の煙道を有する。

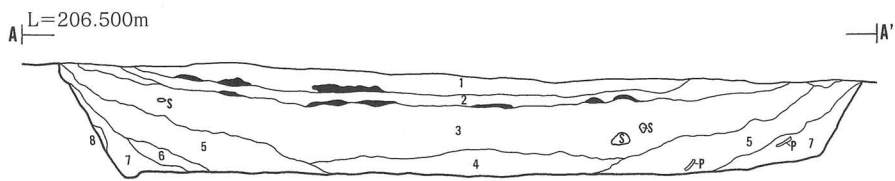
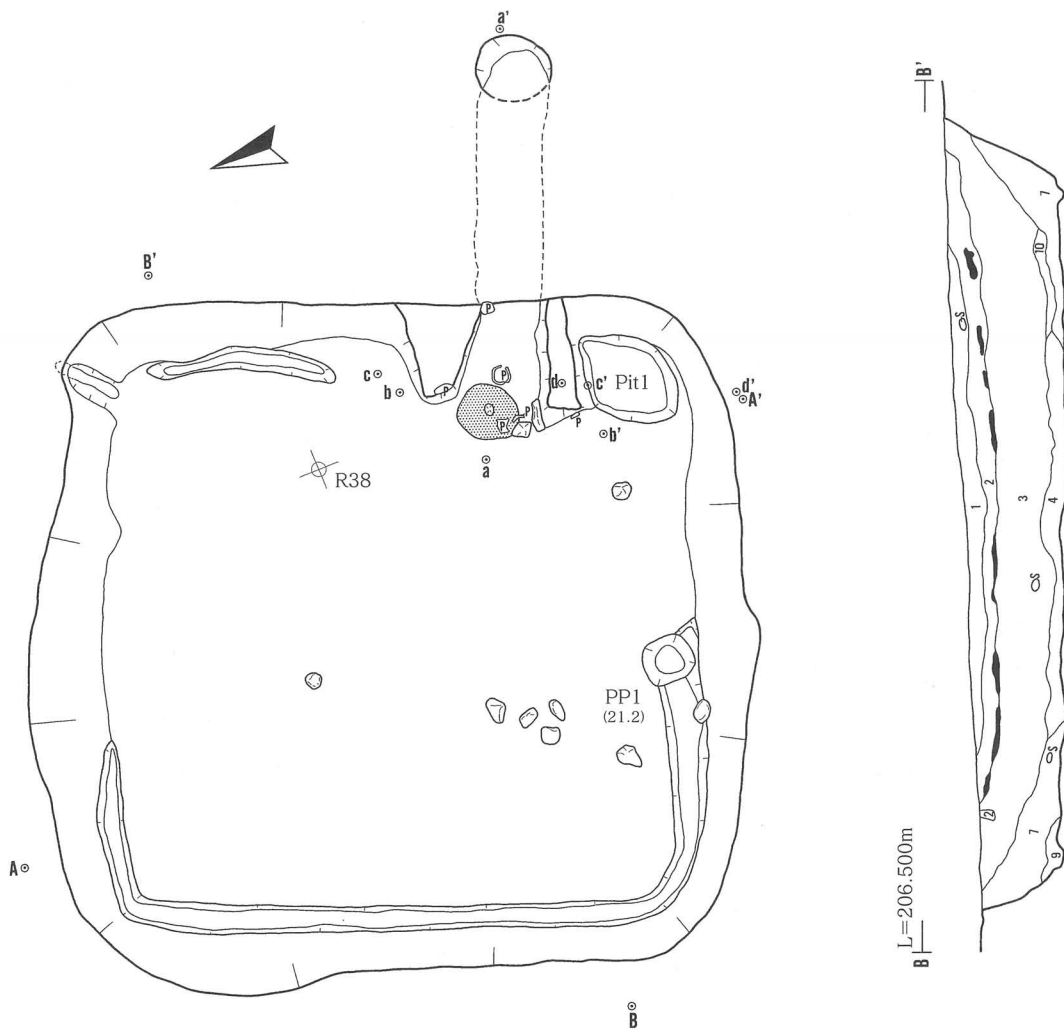
<位置>南東壁の南隅寄りにある。 <煙道方位>N-113° -E

<本体> 焚き口側の右袖に芯材の礫が1個据えられるが、左袖は被覆したシルト質土が残るのみである。燃焼部焼土は直径36cmにわたって形成され、厚さは最大で7cmに及ぶ。この焼土から奥壁側には、支脚の土師器甕が置かれている。

<煙道・煙出し部> 割り抜き式の煙道で、全長は170cmを測る。底面はほぼ水平に延び、煙出し部で深く掘り込まれるが、深さは86cmである。埋土には焼土ブロックや炭化物粒が多く含まれている。

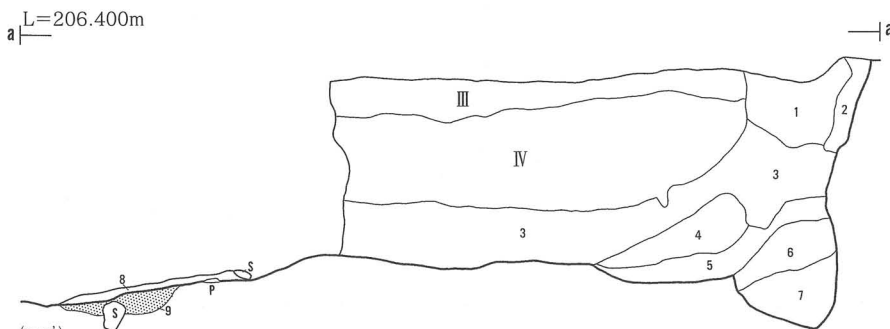
〔柱穴〕柱穴状のもの (PP1) が1個検出されたが、柱穴にはならない。

〔土坑〕南隅に貯蔵穴と思われる土坑が1基確認された。深さは13cmである。また、北隅には住居の外側に細



(A-A'・B-B')

- | | | | |
|-----------------|-------------------------------------|------------------|---------------|
| 1 10YR2/2黒褐色シルト | 本来は2と同一と思われる。褐色焼土粒?を含むTo-aが層下部にも堆積。 | 6 10YR3/2黒褐色シルト | 5に似るが若干黒味帯びる。 |
| 2 10YR3/2黒褐色シルト | 層下部にTo-aを含む(レンズ状) | 7 10YR2/1黒色シルト | オレンジパミス含まず。 |
| 3 10YR2/2黒褐色シルト | オレンジパミス・炭化物粒・径20~100mm大の円礫含む。 | 8 10YR3/3暗褐色シルト | 地山崩落ブロック。 |
| 4 10YR2/2黒褐色シルト | オレンジパミスを3より多く含む。 | 9 10YR2/1黒色シルト | 焼土粒・炭化物粒含む。 |
| 5 10YR2/2黒褐色シルト | オレンジパミスの混入は3より少ない。 | 10 10YR3/3暗褐色シルト | 焼土粒含み、赤味帯びる。 |



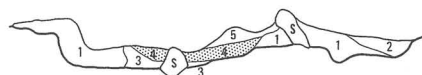
(a-a')

- | | | | |
|------------------|----------------------------|--------------------|-------------------------|
| 1 10YR2/2黒褐色シルト | にぶい黄褐色のブロック・褐色焼土粒・炭化物粒を含む。 | 6 5YR4/4にぶい赤褐色シルト | ふき込まれた焼土ブロック。 |
| 2 10YR2/2黒褐色シルト | II層起源の崩落土。 | 7 5YR2/2黒褐色シルト | |
| 3 10YR2/1黒色シルト | 褐色土粒・暗赤褐色焼土粒をまばらに含む。 | 8 5YR3/6暗赤褐色粘土質シルト | 燃焼部上の焼土で焼けは弱い。 |
| 4 10YR3/4暗褐色シルト | 煙出から落ち込んだブロック? | 9 5YR3/6暗赤褐色シルト | 燃焼部焼土で焼けは良好。(b-b' 4に同じ) |
| 5 7.5YR3/2黒褐色シルト | 暗赤褐色焼土粒をまばらに含む。 | | |

0 1:50 (1:25) 2m

第32図 第12号住居跡 (1)

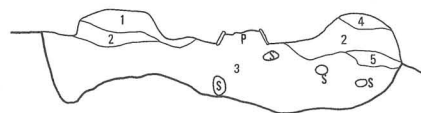
L=205.800m
b |-----| b'



(b-b')

- | | |
|--------------------|---------------------------|
| 1 10YR3/3明褐色粘土質シルト | 黒褐色土のブロック・焼土粒を全体に含む袖部構築土。 |
| 2 10YR5/4にぶい黄褐色粘土 | 貼り床の一部か？ |
| 3 10YR4/4褐色シルト | 貼り床掘り方土土。 |
| 4 5YR3/6暗赤褐色シルト | 燃焼部焼土で焼けは良好。 |
| 5 5YR4/6赤褐色シルト | 燃焼部上にある焼土層。 |

L=205.900m
c |-----| c'



(c-c')

- | | |
|--------------------|----------------------|
| 1 10YR3/3暗褐色粘土質シルト | 黒褐色土ブロック・小礫含む。袖部構築土。 |
| 2 10YR3/4暗褐色粘土質シルト | 黒褐色土粒を含む。袖部構築土。 |
| 3 10YR4/4褐色シルト | 酸化鉄分・小礫含む。 |
| 4 10YR4/6赤褐色シルト | 被熱箇所か？ |
| 5 10YR2/2黒褐色シルト | 貼り床掘り方土土。 |

L=206.300m
d |-----| d'



(d-d')

- | | |
|-----------------------|---------------|
| 1 10YR2/2黒褐色シルト | 黄褐色土粒を全体に含む。 |
| 2 10YR3/4暗褐色粘土質シルト | 橙色焼土粒をまばらに含む。 |
| 3 10YR6/4にぶい黄褐色粘土質シルト | 暗赤褐色焼土粒含む。 |
| 4 10YR4/4褐色粘土質シルト | V層起源の崩落ブロック。 |

0 1:50 (1:25) 2m

第33図 第12号住居跡 (2)

長く掘り込まれる箇所があるが、用途は不明である。右側の周溝と関係があるものかもしれない。

〔周溝〕北西壁から他の2辺の一部、カマド左の壁際に巡る。PP1も周溝に関連するものか？

〔その他〕埋土に含まれる円礫は中コンテナ1箱分である。

遺物 (第94・95図、写真図版57・58)

〔出土状況〕遺物の総量は小コンテナ1箱弱である。住居埋土、煙道などから出土した。15点掲載した。

〔土器〕土師器坏・甕類、須恵器坏・壺・甕類が出土した。477・478は底部外面にムシロ底を残している土師器の甕である。墨書土器・刻書土器は出土していない。

〔土製品〕出土していない。

〔鉄製品〕先端部等を欠く雁又鎌が1点出土している。

時期 出土した土器の特徴や灰白色火山灰の堆積状況から、9世紀末以前に存在した住居跡と推定される。

第13号住居跡 (R38住)

遺構 (第34図、写真図版17)

〔位置・重複〕平坦部東寄りに位置し、S38区のグリッド杭が本遺構内の北側にある。第12号住居跡とは西に3m、第16号住居跡とは1mばかりの距離があるが、間隔的に第16号住居跡とは同時存在し得ないと思われる。

〔検出面・状況〕第II層下面から第III層上面で検出した。方形のプランに灰白色火山灰が混入していたため、全体に白っぽく見えた。

〔平面形〕歪な方形で、主軸方向に若干長い。〔規模〕3.40m×3.85m 〔壁高〕39cm~60cm

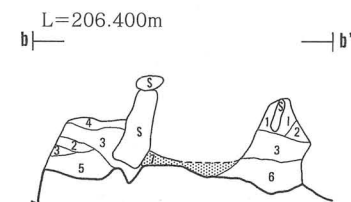
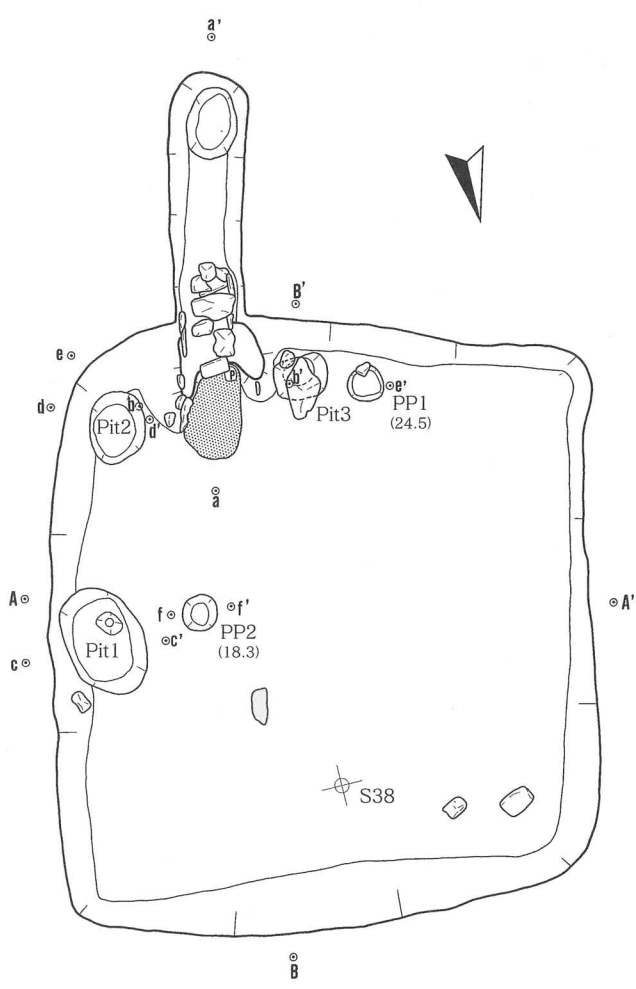
〔埋土〕9層に分層される自然堆積層で、上位は黒褐色土、中位から下位にかけては黒色土からなる。1層中には灰白色火山灰が含まれ、層全体が白味がかっている。

〔壁〕東壁・西壁は急傾斜で、南壁・北壁は比較的緩やかに立ち上がる。

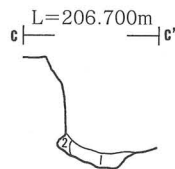
〔床面〕第IV層を床面とし、全体にほぼ平らな床面である。また、一部に貼床が施されている。

〔カマド〕当初は、煙道の上部に見られる礫群付近が煙出しと思っていたが、精査の結果、煙道はさらに南側に延びた。

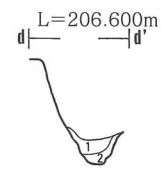
<位置>南壁の東隅寄りにある。 <煙道方位>N-160° -W



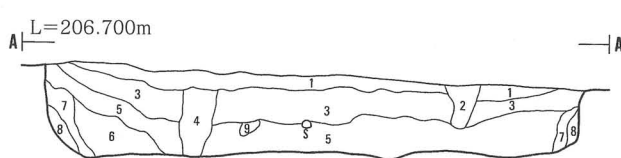
- (b-b')
- 1 10YR3/3暗褐色シルト 橙色焼土粒をまばらに含む。
 - 2 10YR2/1黒色シルト 明黄褐色土粒をまばらに含む。
 - 3 7.5YR3/3暗褐色粘土質シルト 暗赤褐色焼土粒を含む。
 - 4 7.5YR2/2黒褐色粘土質シルト 明黄褐色土小ブロックとの混合土。
 - 5 10YR4/4褐色粘土 小礫含む。貼り床掘り方？
 - 6 10YR3/2黒褐色粘土質シルト 貼り床掘り方埋土と思われる。貼り床はカマド周辺のみ。
 - 7 5YR4/6赤褐色シルト 燃焼部焼土。焼け良好。



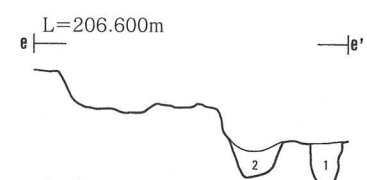
- (c-c')
- 1 7.5YR3/3暗褐色砂質シルト 明赤褐色焼土粒・橙色焼土粒含む。
 - 2 7.5YR3/2黒褐色砂質シルト 地山崩落ブロック含む。



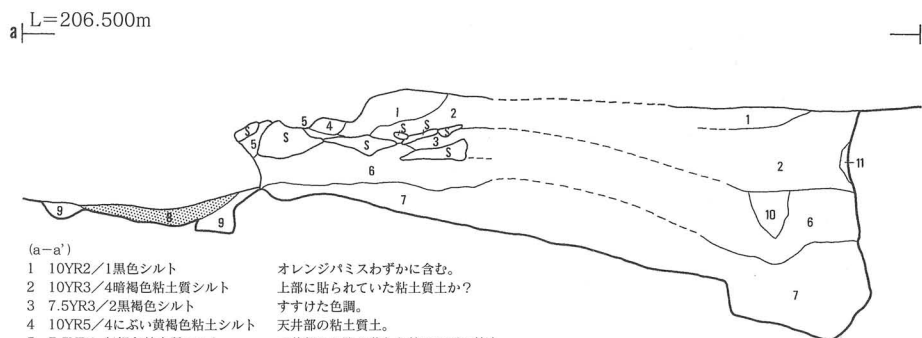
- (d-d')
- 1 7.5YR3/3暗褐色砂質シルト 炭化物粒・焼土粒を含む。



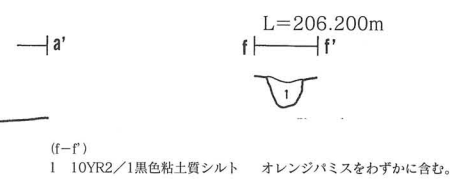
- (A-A'・B-B')
- 1 10YR2/2黒褐色シルト To-aブロックを含み、白っぽい。
 - 2 10YR2/1黒色シルト To-aの極小ブロックを含む。
 - 3 10YR2/1黒色シルト オレンジパミス全体を含む。粒径10mm前後のパミスを含む。
 - 4 10YR2/2黒褐色シルト To-aの極小ブロックをわずかに含む。
 - 5 10YR2/2黒褐色シルト 4よりオレンジパミスの流入少ない。
 - 6 10YR1.7/1黒色シルト オレンジパミスをおおむね含む。
 - 7 10YR2/1黒色シルト オレンジパミスを含むII or III層起源の崩落土。
 - 8 10YR2/1黒色シルト IV層起源の崩落土。
 - 9 7.5YR2/2黒褐色シルト 焼土粒を全体に含むブロック。



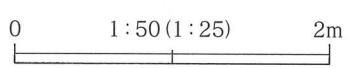
- (e-e')
- 1 10YR2/1黒色粘土質シルト オレンジパミスをおおむね含む。
 - 2 7.5YR3/3暗褐色砂質シルト 炭化物粒・焼土粒を含む。



- (a-a')
- 1 10YR2/1黒色シルト オレンジパミスをおおむね含む。
 - 2 10YR3/4暗褐色粘土質シルト 上部に貼られている粘土質土か？
 - 3 7.5YR3/2黒褐色シルト すすけた色調。
 - 4 10YR5/4にぶい黄褐色粘土シルト 天井部の粘土質土。
 - 5 7.5YR4/4褐色粘土質シルト 天井部から降り落ちた焼けの悪い焼土。
 - 6 7.5YR2/2黒褐色シルト 浮石粒・焼土粒を全体に含む、すすけた色調。
 - 7 7.5YR3/2黒褐色シルト 橙色焼土粒・黄褐色土粒を全体に含む。
 - 8 5YR4/6赤褐色シルト 燃焼部焼土で焼けは良好。
 - 9 10YR3/3暗褐色シルト 貼り床掘り方埋土。
 - 10 10YR3/4暗褐色粘土質シルト 焼土粒をまばらに含む。
 - 11 10YR4/4褐色粘土質シルト V層起源崩落土。



- (f-f')
- 1 10YR2/1黒色粘土質シルト オレンジパミスをおおむね含む。



第34図 第13号住居跡

<本体>一連の煙道に続く礫は、左袖の内側にも袖石として確認できた。右袖はシルト質土のみでつくられている。燃烧部焼土は34cm×60cmの楕円形に発達し、厚さは最大で4cmを測る。支脚は認められない。

<煙道・煙出し部>掘り込み式の煙道で、既述のようにカマド側には礫が配され、天井部も礫でわたされている。全長は150cmあまりで、煙道底面は緩やかに下り、煙出し部で急に深く掘り込まれる。深さは73cmほどである。埋土は、全体に吹き込まれた焼土や炭化物粒ですすけている。

〔柱穴〕柱穴状のものが2個検出されたが、柱穴にはならないと思われる。

〔土坑〕東壁際の中央とカマドの両脇に、合計3基の貯蔵穴が確認された。いずれも小さめであるが、位置から土坑として扱った。〔周溝〕検出されない。〔その他〕埋土に含まれる円礫はほとんどなかった。

遺物 (第96図、写真図版58)

〔出土状況〕遺物の総量は小コンテナ1箱に満たない。カマドや煙道、Pit1から出土した。6点掲載した。

〔土器〕土師器坏・甕、須恵器坏が出土している。墨書・刻書土器は出土していない。

〔土製品〕〔鉄製品〕ともに出土していない。

時期 出土した土器の特徴や灰白色火山灰の堆積状況から、9世紀末以前に存在した住居跡と推定される。

第14号住居跡 (R40住)

遺構 (第35・36図、写真図版18)

〔位置・重複〕平坦部東端のS41グリッド付近、第15号住居跡と第16号住居跡のちょうど中間に位置する。その距離はおよそ10mである。遺構間の重複は認められないが、トレンチャーによる耕作により住居南東側が攪乱されている。

〔検出面・状況〕第II層では確認できず、検出面を若干下げた際に、第III層上面で黒褐色土の方形プランが確認された。灰白色火山灰はプランの際にわずかに認められた。

〔平面形〕隅丸方形をなすが若干歪む。〔規模〕4.70m×4.95m 〔壁高〕39cm～58cm

〔埋土〕7層に分層される自然堆積層である。上位は黒色土、中位以下は黒褐色土を主体とし、灰白色火山灰は3層下部の床面直上に観察される。これ以前に壁際に堆積した黒色土中には焼土等を含んでいる。

〔壁〕いずれの壁も緩やかに立ち上がる。

〔床面〕第IV層を床面とし全体的に平坦である。床面の直上に礫が散乱するが、カマドの袖に使われたものかは不明である。

〔カマド〕残存状態は良いが、トレンチャーにより断ち切られるところが数ヶ所ある。

<位置>南東壁の東隅寄りにある。 <煙道方位>N-130° -E

<本体>本体周辺に袖の芯材に使われたと思われる礫が散乱する。原位置を保つものにはシルト質土が貼り付けられている。天井部の崩落土下には燃烧部焼土が直径35cmあまりに形成され、厚さは最大で4cmである。焼土奥には、支脚の礫が1個置かれている。

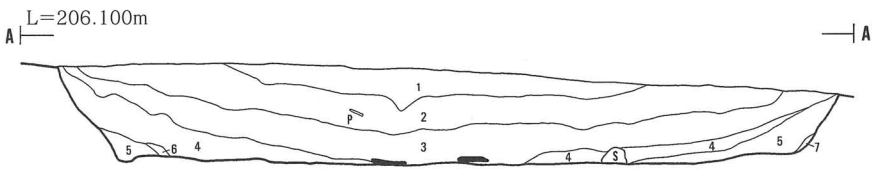
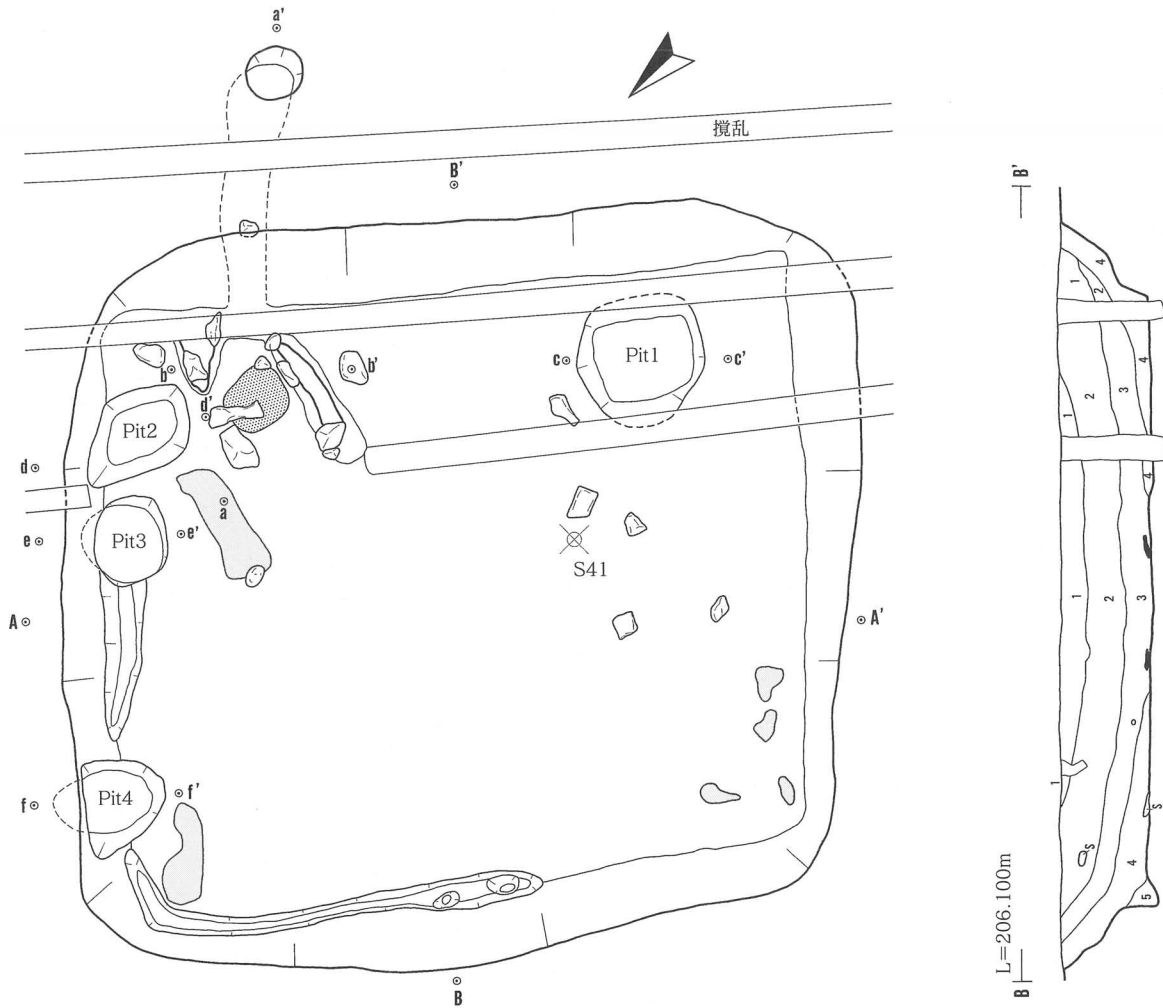
<煙道・煙出し部>第V層を削り抜く煙道で、全長は150cmあまりである。底面は、凹凸を持ちながら煙出し部まで緩やかに下がる。煙出しは特に掘り下げられていないが、検出面からの深さは80cmもある。

〔柱穴〕柱穴および柱穴状のものは検出されなかった。

〔土坑〕南隅のPit1は、深さ17cmの貯蔵穴である。北東壁際に並ぶPit2～4もその類と思われる。

〔周溝〕北東壁際のPit3とPit4の間と後者から北西壁にかけての一部に認められた。小穴を伴う部分がある。

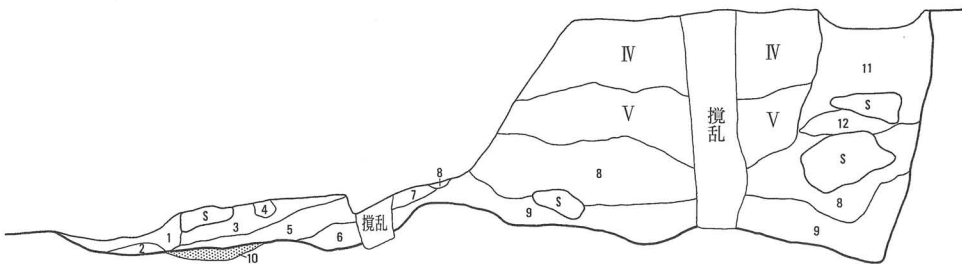
〔その他〕埋土に含まれる円礫は中コンテナ1箱分である。



(A-A'・B-B')

- | | |
|--------------------|------------------------------------|
| 1 10YR2/1黒色シルト | オレンジパミス・小礫含む。 |
| 2 10YR2/2黒褐色粘土質シルト | オレンジパミス含む、1より色調明るめ。 |
| 3 10YR3/2黒褐色粘土質シルト | To-aの極小ブロックを20%前後含む。きっちりとした層をなさない。 |
| 4 10YR2/1黒色粘土質シルト | オレンジパミス・赤褐色焼土粒をまばらに含む。 |
| 5 10YR1.7/1黒色シルト | 焼土粒わずかに含む。 |
| 6 10YR2/2黒褐色粘土質シルト | IV層起源崩落土。 |
| 7 5YR4/6赤褐色シルト | 焼土ブロック |

L=206.100m

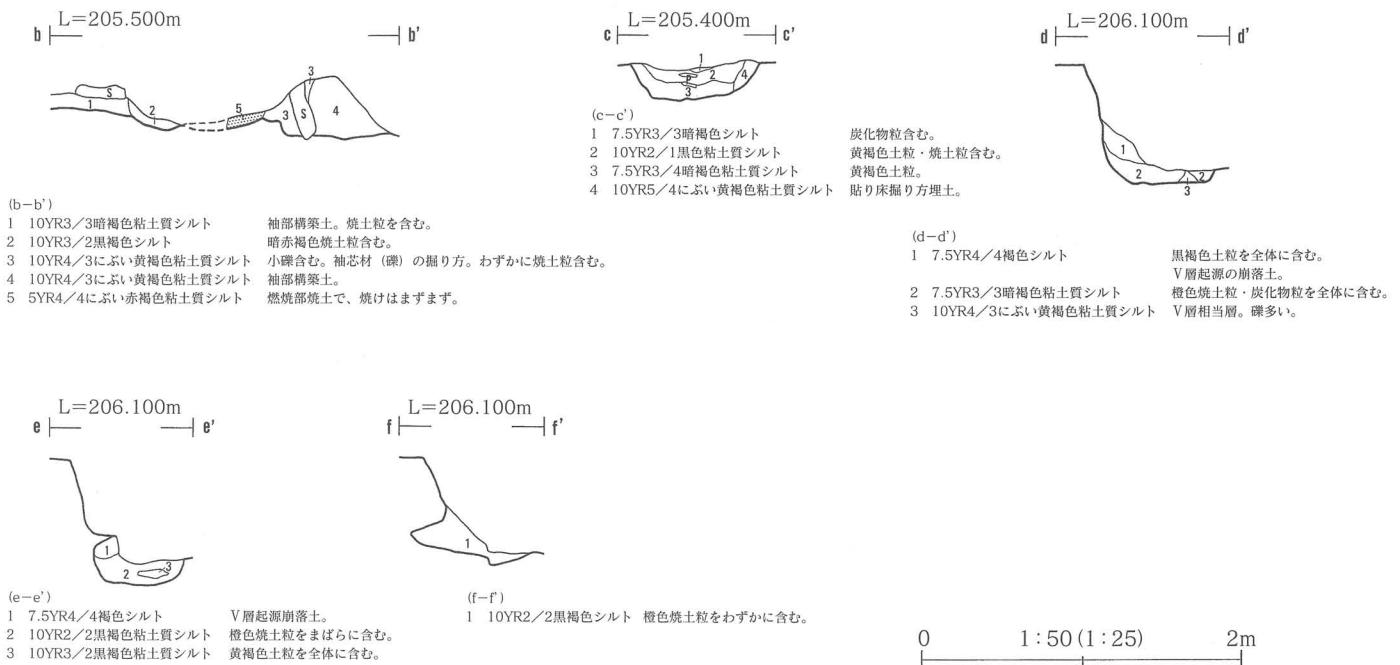


(a-a')

- | | | | |
|----------------------|--------------------------------|-------------------|----------------------|
| 1 7.5YR3/2黒褐色粘土質シルト | 貼り床掘り方理土。 | 9 7.5YR3/2黒褐色シルト | 煙道部下位覆土。くすんだ色調。 |
| 2 7.5YR3/4暗褐色砂質シルト | 焼土粒をわずかに含む。 | 10 5YR3/6暗赤褐色シルト | 燃焼部焼土で焼けは良好。厚さ3~4cm。 |
| 3 7.5YR4/4褐色粘土質シルト | 天井部の崩落土で暗赤褐色焼土粒を含む。 | 11 10YR2/2黒褐色シルト | 黄褐色土粒含む。 |
| 4 10YR2/1黒色シルト | 褐色土粒を全体に含む。 | 12 7.5YR3/4暗褐色シルト | V層起源の崩落ブロック。 |
| 5 5YR4/4にぶい赤褐色粘土質シルト | 炭化物粒・赤褐色焼土小ブロック含む。天井部から落ちた焼土層。 | | |
| 6 10YR4/4褐色粘土質シルト | 貼り床掘り方理土? | | |
| 7 7.5YR3/4暗褐色粘土質シルト | くすんだ色合いの焼土粒含む。 | | |
| 8 5YR2/3極暗赤褐色シルト | 褐色土粒を含む煙道覆土。 | | |

0 1:50 (1:25) 2m

第35図 第14号住居跡 (1)



第36図 第14号住居跡 (2)

遺物 (第96・97図、写真図版58)

〔出土状況〕 総量は中コンテナ1箱程度である。住居埋土、煙道などから出土した。13点掲載した。

〔土器〕 土師器坏・甕、須恵器壺・大甕が出土している。土師器の坏が多い。墨書土器は2点 (511・512)、刻書土器は1点 (513) 出土した。

〔土製品〕 出土していない。〔鉄製品〕 両端を欠く鉄鏃が1点出土した。

時期 出土した土器の特徴と灰白色火山灰の堆積状況から、9世紀末～10世紀初めにかけて存在した住居跡と考えられる。

第15号住居跡 (R42住)

遺構 (第37・38図、写真図版19)

〔位置・重複〕 平坦部南東端のS43グリッド付近に位置し、第7号住居跡遺構とはおよそ9mの距離を置く。第14号住居跡同様、幅70cm前後のトレンチャー痕が全体に入っている。遺構間の切り合いはない。

〔検出面・状況〕 これも第Ⅲ層上面で検出した。状況は第14号住居跡と同じである。

〔平面形〕 方形であるが、平行四辺形状に歪む。〔規模〕 3.79m×4.01m 〔壁高〕 29cm～52cm

〔埋土〕 5層に分層される自然堆積層である。2枚の黒褐色土がを主体で、壁際に灰白色火山灰をわずかに含む黒色土が堆積する。〔壁〕 いずれの壁も急傾斜で立ち上がる。

〔床面〕 第Ⅳ層を床面とし、細かい凹凸がある。貼床は部分的にしか認められない。

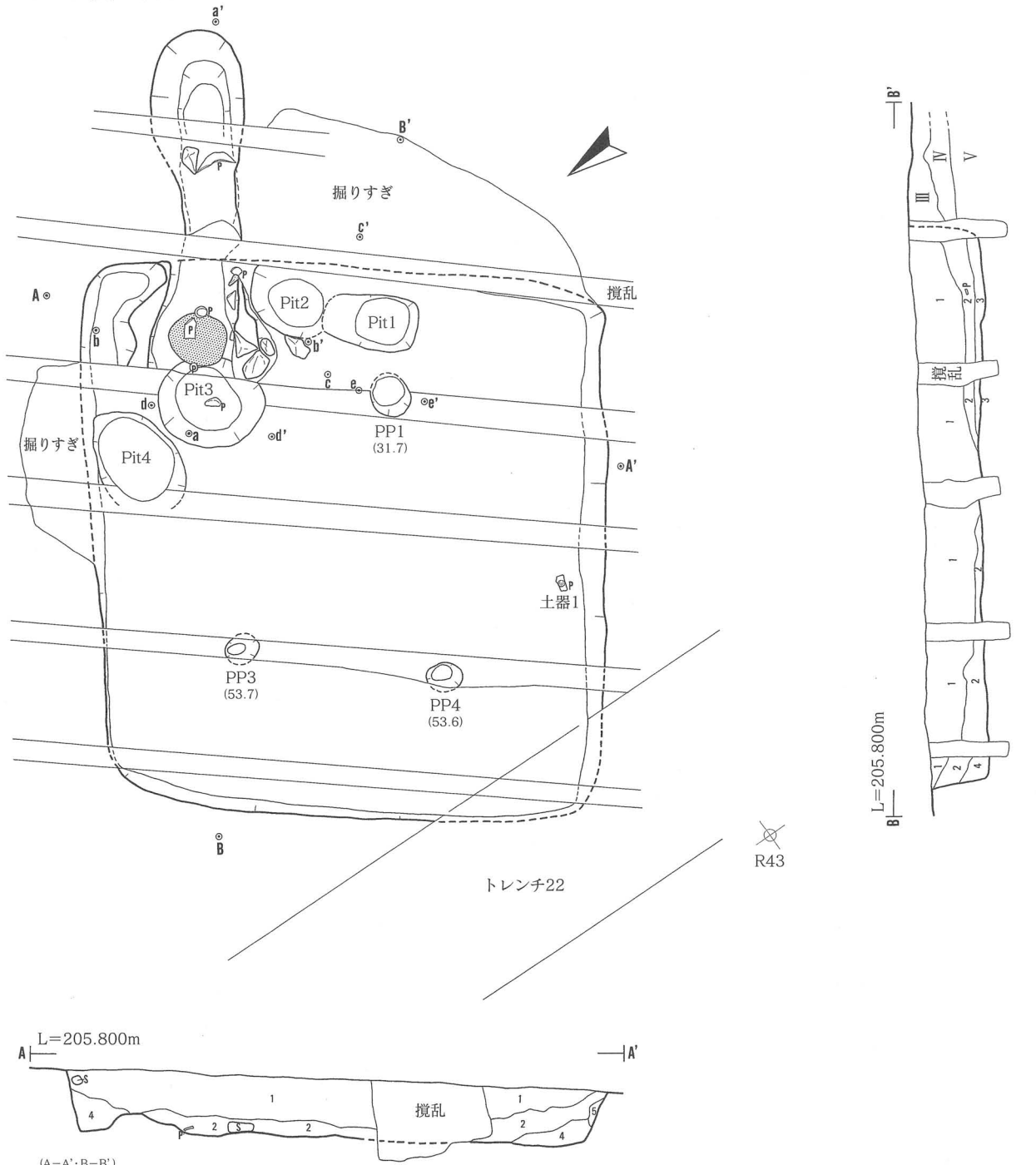
〔カマド〕 煙道上部に須恵器大甕の破片を確認した。これもトレンチャーの攪乱により一部破壊されているが、カマド本体・煙道部とも良く残っている。

〈位置〉 南東壁の東隅に寄る。〈煙道方位〉 N-130° - E

〈本体〉 右袖は芯材の礫が数個残る。左側には礫がなく、黄褐色のシルト質土の高まりのみが観察された。燃

焼部焼土は直径40cmほどに形成され焼けも良好である。焼土の厚さは最大で4cmである。支脚には土師器の坏が据えられていた。

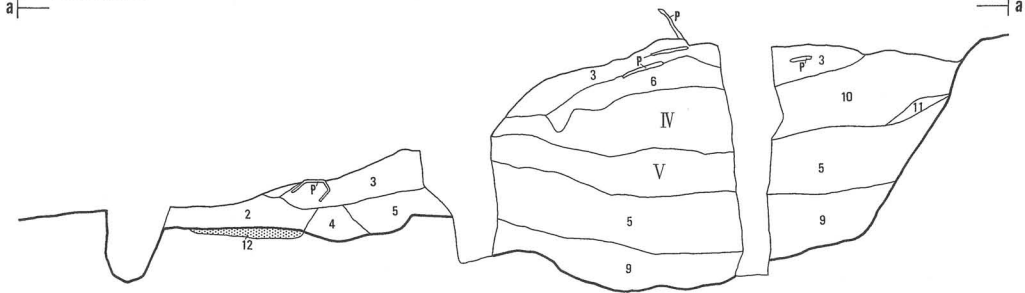
<煙道・煙出し部>これも第V層以下を削り抜く全長150cmあまりの煙道である。第IV層の上には、上述のように遺物や焼土粒・炭化物粒を含む黄褐色土があり、煙道上部に何らかの手が加えられていた可能性がある。煙道底面は中間部が最も低められ、徐々に煙出しに向けて上がっていく。最深部の深さは78cmである。



- (A-A'・B-B')
- | | |
|---------------------|--------------------------------|
| 1 10YR2/2黒褐色シルト | オレンジハリスを全体に含む。 |
| 2 10YR3/2黒褐色粘土質シルト | To-aの小ブロック・焼土粒を含む。 |
| 3 7.5YR3/2黒褐色粘土質シルト | にぶい黄褐色土・橙色焼土粒・炭化物を含む。貼り床掘り方埋土。 |
| 4 10YR2/1黒色シルト | To-aの極小ブロック・焼土粒を含む。 |
| 5 10YR3/3暗褐色粘土質シルト | IV層(漸移層)起源の崩落ブロック。 |

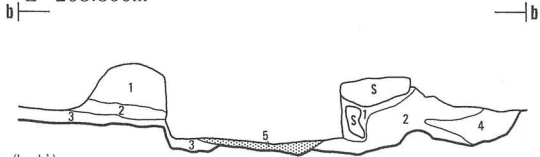
第37図 第15号住居跡(1)

L=205.800m



- (a-a')
- | | |
|---------------------|--------------------------------------------------------|
| 1 7.5YR2/2黒褐色シルト | 焼土粒を含む。 |
| 2 7.5YR4/6褐色粘土質シルト | 天井部の崩落土。焼土粒を全体に含む。 |
| 3 7.5YR3/2黒褐色粘土質シルト | 明褐色焼土ブロック・炭化物粒を全体に含む。 |
| 4 7.5YR3/4暗褐色粘土質シルト | 橙色焼土極小ブロック・暗赤褐色焼土粒を含む。 |
| 5 7.5YR2/1黒色シルト | 褐色土ブロック・暗赤褐色小ブロック・To-aの小ブロック含む。
煙道覆土か煙道最上部に貼られたシルト。 |
| 6 10YR2/2黒褐色シルト | 暗赤褐色焼土ブロックを含む。 |
| 9 10YR3/3暗褐色シルト | 褐色土粒を全体に含む。 |
| 10 10YR2/1黒色シルト | To-aのブロックを含む黒色土。 |
| 11 10YR5/3にぶい黄褐色シルト | 焼土粒全体に混じる。 |
| 12 5YR4/6赤褐色シルト | 燃焼部焼土で焼けは良好。 |

L=205.500m



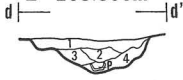
- (b-b')
- | | |
|------------------|-------------------------------------|
| 1 10YR2/2黒褐色シルト | 明褐色焼土小ブロック・橙色焼土ブロックを含む袖部構築土。 |
| 2 10YR3/3暗褐色シルト | 赤褐色焼土粒を含む袖部構築土(下位)。 |
| 3 7.5YR3/4暗褐色シルト | 貼り床掘り方理土で焼土粒を含む。 |
| 4 10YR2/3黒褐色シルト | 貼り床掘り方理土で焼土粒を含む。 |
| 5 5YR4/6赤褐色シルト | 燃焼部焼土で焼けは良好。厚さは3cm程度。(カマダたて断面12に同じ) |

L=205.500m



- (c-c')
- | | |
|-----------------------|-----------------------|
| 1 7.5YR3/2黒褐色シルト | にぶい黄褐色土粒・小礫を含みくすんだ色調。 |
| 2 10YR4/3にぶい黄褐色粘土質シルト | 貼り床掘り方理土か? |

L=205.300m

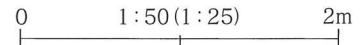


- (d-d')
- | | |
|--------------------|--------------------------|
| 1 10YR2/2黒褐色シルト | 褐色土粒・焼土粒・炭化物を含む貼り床掘り方理土。 |
| 2 10YR3/4暗褐色シルト | To-aブロック・焼土粒・炭化物を含む。 |
| 3 10YR3/2黒褐色粘土質シルト | 焼土粒を含む。 |
| 4 10YR2/1黒色シルト | 褐色土粒・焼土粒を全体に含む。 |

L=205.300m



- (e-e')
- | | |
|--------------------|------------------|
| 1 10YR2/1黒色粘土質シルト | 黄褐色土小ブロックを全体に含む。 |
| 2 10YR2/2黒褐色粘土質シルト | 小礫を全体に含む。 |



第38図 第15号住居跡 (2)

〔柱穴〕 主柱穴となるPP1・PP3・PP4の3個が確認された。それぞれの柱穴間距離は、PP1・PP4間が215cm、PP3・PP4間が155cmである。

〔土坑〕 住居使用時の土坑は、カマド右のPit1・Pit2、北東壁際にあるPit4の3基でいずれも貯蔵穴と思われる。Pit3は貼床除去時に確認された土坑で、本遺構が使われる以前のものである。

〔周溝〕 確認されていない。

〔その他〕 埋土には、粒径50~150mmの円礫が20個ほど(小コンテナ1箱)含まれていた。

遺物 (第97~100図、写真図版59・60)

〔出土状況〕 出土した総量は中コンテナ1箱強で、主に住居埋土およびカマド関連施設から出土した。掲載した遺物は33点である。

〔土器〕土師器坏・甕、須恵器壺・大甕の破片が出土している。土師器の坏が目立つが、内黒と非内黒の割合は若干後者が多いようである。縄文土器も出土したが、早期の貝殻文土器1点を含み数片である。墨書土器は3点(514・518・523)、刻書土器は1点(516)出土した。この刻書土器は支脚として使われていたもので「三」と判読できる。〔土製品〕〔鉄製品〕ともに出土しなかった。

時期 出土した土器の特徴と灰白色火山灰の堆積状況から、9世紀末～10世紀初めにかけて存在した住居跡と考えられる。第14号住居跡とは同時存在した様相である。

第16号住居跡 (S38住)

遺構 (第39図、写真図版20)

〔位置・重複〕平坦部北東端T39グリッド付近に位置し、北西側で第13号住居跡と隣接する。遺構間の重複は認められない。

〔検出面・状況〕これも本来の検出面である第Ⅱ層を下げすぎ、第Ⅲ層上面で検出した。灰白色火山灰は、プランの際にのみわずかに観察された。

〔平面形〕方形基調であるが、歪みが大きい。〔規模〕3.55m×3.97m 〔壁高〕17cm～36cm

〔埋土〕10層に分層されたが、大きくは黒褐色土と黒色土の二層からなる自然堆積層である。床面に近づくほど焼土や焼土粒の混じりが多くなる。

〔壁〕北西壁と北東壁は急傾斜で立ち上がり、南西壁は緩やかである。南東壁は崩落が著しく不明である。〔床面〕第Ⅳ層を床面とし、全体的に細かい凹凸がある。一部貼床されている。

〔カマド〕本体は、上述した焼土下に確認された。煙道は検出面を下げすぎたことにより、掘り込みか割り抜きかの別が判断できない。

〈位置〉南東壁の東隅にかなり寄っている。〈煙道方位〉N-148°-E

〈本体〉両袖が残るが、被覆したシルト質土の高まりが確認されたにすぎない。土器片も袖に入れられている。燃焼部焼土は40cm×56cmにわたって形成され、厚さは最大で5cmである。本体中央部には、支脚として土師器の甕が据えられている。

〈煙道・煙出し部〉直径25cm、深さ45cmの煙出し穴のみを残す。

〔柱穴〕南隅にPP1、西隅そばにPP2の2個確認された。柱穴間距離は343cmであるが2個しか確認できず、主柱穴となるかは不明である。

〔土坑〕西隅にある楕円形のPit1、南西壁南寄りのPit2の2基検出した。Pit1の底面には厚さ9cmあまりの焼土が形成されていた。何らかの作業用の土坑か、祭祀に関連するものかと思われる。Pit2は貯蔵穴か。

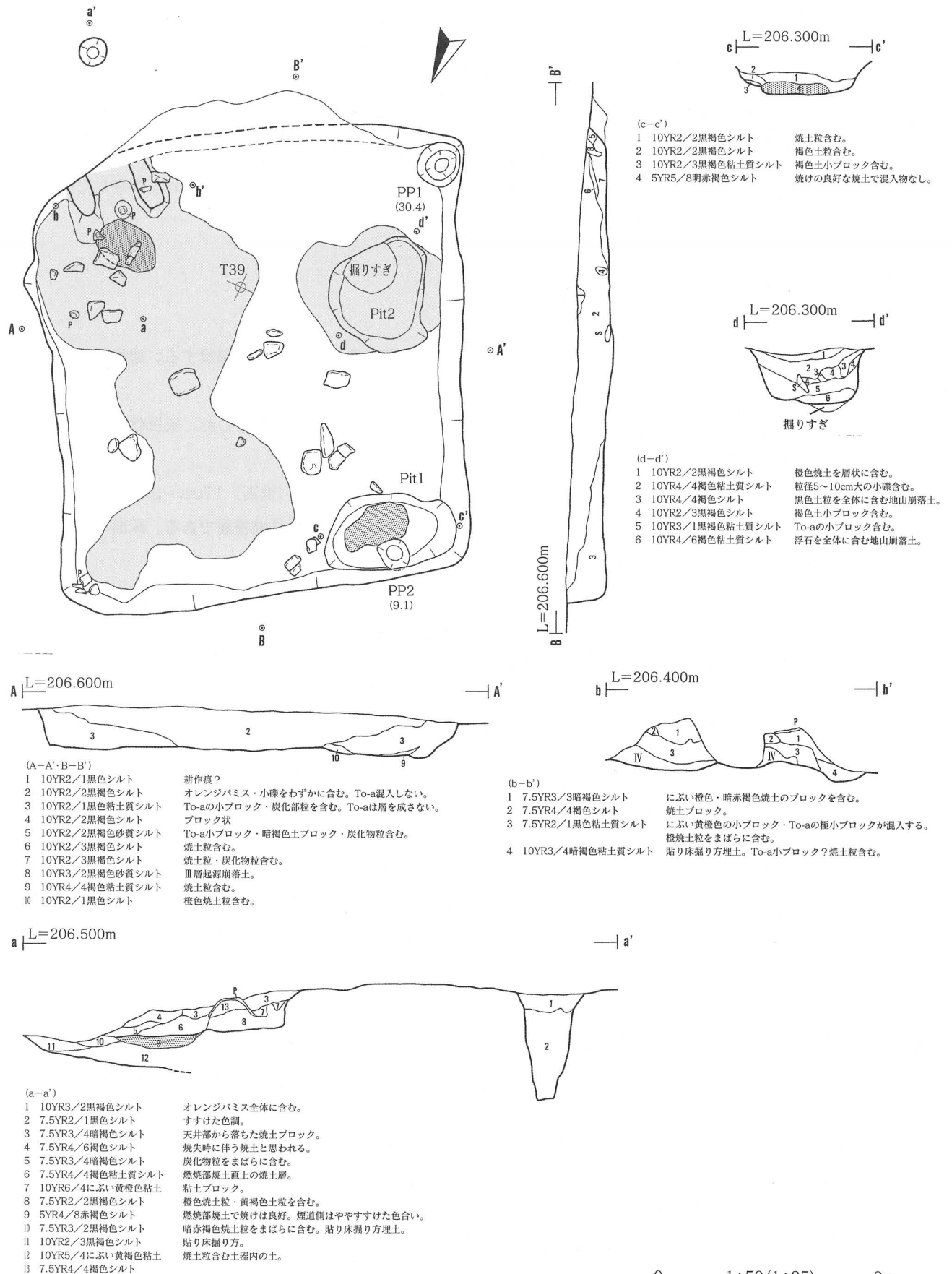
〔周溝〕確認されていない。

〔焼土〕住居の東側ほぼ半分には、家屋の焼失により形成されたものと思われる焼土が分布する。厚さは数cmであるが、かなり広範囲に認められる。しかし、それに伴う炭化材が確認されておらず、焼失住居であるかどうかの判断は難しい。灰も一部に確認されており、普通の焼失の仕方ではない可能性もある。

〔その他〕埋土には、円礫が小コンテナ1/2箱ほど含まれていた。

遺物 (第100～102図、写真図版61・62)

〔出土状況〕出土した遺物の総量は、中コンテナ1箱弱である。主に住居埋土およびカマド関連施設、Pit類から出土した。掲載した遺物は24点である。



第39図 第16号住居跡

〔土器〕土師器坏・甕、須恵器坏・壺・甕類の破片が出土している。土師器坏の内黒と非内黒の割合は、ほぼ半々である。墨書はいずれも坏に見られるが、全部で5点出土した。545・546は非内黒坏の同一個体であるが、いわゆる長文墨書土器とか多文字の墨書土器と言われるものである。积文は545が「弟／弟□〔在カ〕」、546が「□〔署カ〕□／□（記号カ）愚□」である。

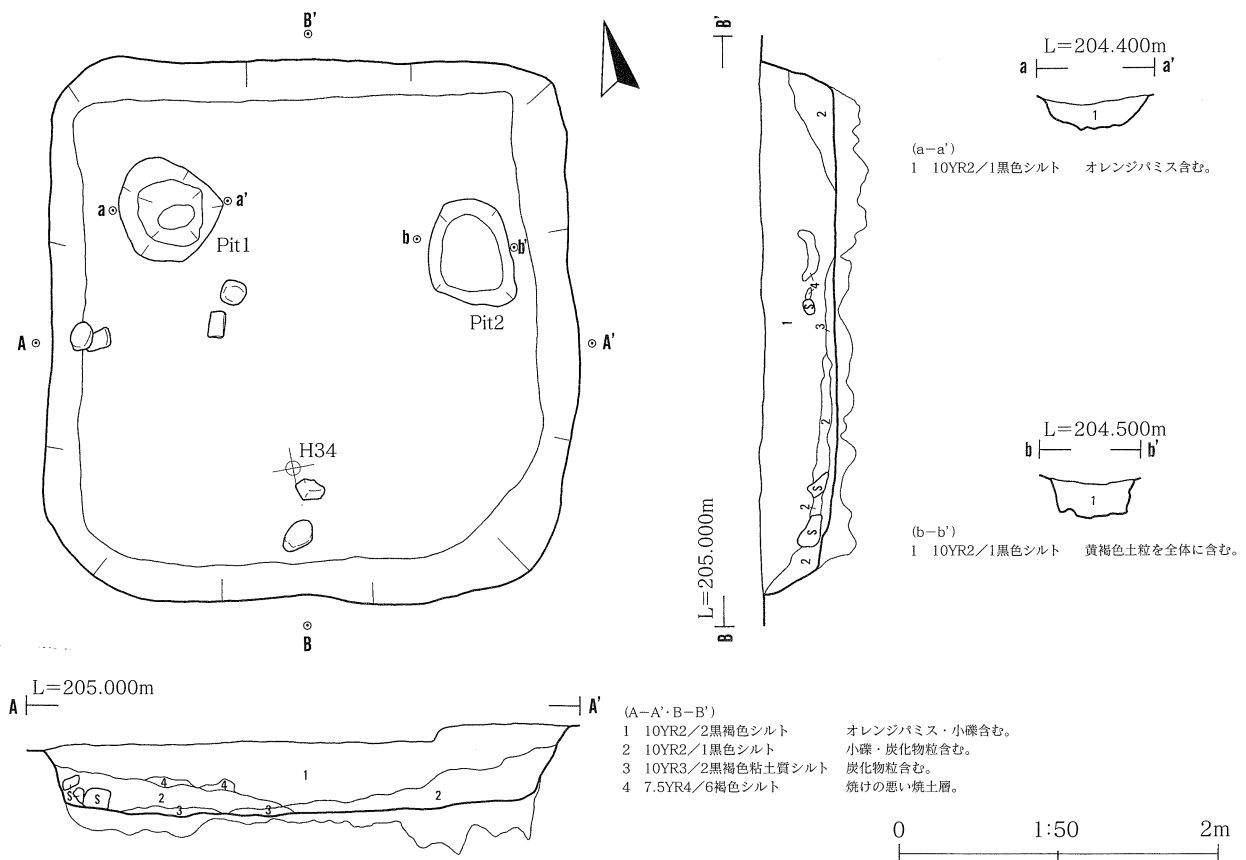
〔土製品〕羽口（561）が1点出土した。還元面はドットで示した。562は内外面が丁寧にヘラミガキされる台か？器種が特定できずここで扱った。

〔鉄製品〕種不明の鉄製品が1点出土した。

時期 出土した土器の特徴と灰白色火山灰の堆積状況から、9世紀末～10世紀初めにかけて存在した住居跡と考えられる。床面近くに広がる焼土、底面に焼土を伴う土坑、多文字の墨書土器など、祭祀に関連する特殊な住居跡の可能性はある。

2. 住居状遺構

標準的な住居跡ほどの規模を持ち、カマド施設を持たないものを住居状遺構とした。7棟検出している。重複のあるものや壊されているものも含め、平面形はいずれも隅丸方形と思われる。土坑を有するもの（第1号住居状遺構）、床面に焼土が形成されているもの（第7号住居状遺構）、周溝を伴うもの（第4号住居状遺構）といった特徴がある。検出された地点は、1棟が斜面部裾で、残り6棟は南側平坦部である。これらの中には、ひとまわり規模が小さい土坑とともに、大形住居跡を囲むように配置されるものもある。



第40図 第1号住居状遺構

第1号住居状遺構 (G33住居状)

遺構 (第40図、写真図版21)

〔位置・検出面〕 平坦部西側、G33区に位置する。第1号住居跡と第2号住居跡の間にあり、前者とは北西に6m、後者とは南に3.5mの距離がある。検出面は、第II層である。

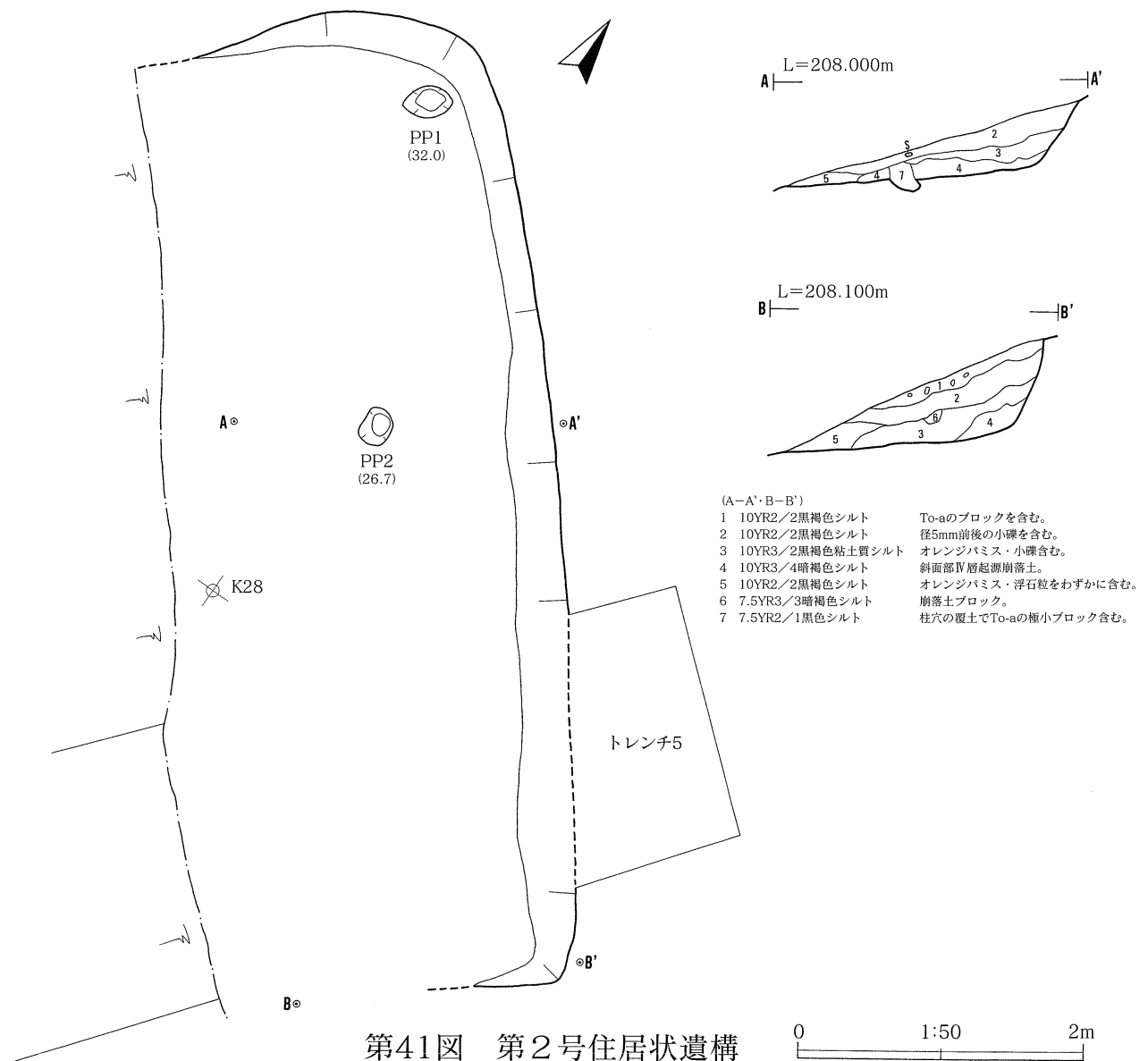
〔埋土〕 上位は小礫を含む黒褐色土、中位から下位にかけては炭化物を含む黒色土・黒褐色土からなる自然堆積層である。中位には、焼けの悪い焼土ブロックが混入する。また、床面や床面直上付近には、径が15～20cm程度の礫が観察された。

〔平面形〕 隅丸方形 (規模) 3.40×3.32m

〔壁〕 緩く外傾あるいは外反して立ち上がる。壁高は33～45cmである。

〔床面〕 第V層を床面とし、中央付近がわずかに凹むがほぼ平坦である。全体に貼床が施され、その厚さは数cmから深いところで30cmを測る。〔柱穴〕 検出されなかった。

〔土坑〕 北西隅から1基 (Pit 1) 東壁際北寄りから1基 (Pit 2) の計2基検出された。Pit 1は、規模67×



63cmの不整形円形を呈し、深さは最大で18cmを測る。埋土はオレンジパミスを含む黒色土である。Pit 2は、規模64×52cmの不整形、深さは最大で23cmを測る。いずれも貯蔵穴に類するものと思われる。

〔遺構の性格〕 何らかの作業場（工房）として使われていたものと思われる。

遺物は土師器の細片が数点出土したのみである。

時期 埋土の状況、出土遺物から平安時代に属する遺構と考えられる。

第2号住居状遺構（J 27住居状）

遺構（第41図、写真図版22）

〔位置・検出面〕 斜面部裾のJ 27区に位置し、標高は207.8～208.3mである。第3号住居跡とは南西に10mの距離がある。斜面部第Ⅲ層で確認されたものであるが、調査以前の試掘トレンチにより、遺構の北東から南西にかけての壁の一部が失われ、また斜面下（南西側）は、全体のおよそ3分の2程度が崩落により確認できなかった。したがって、カマドの有無は不明であるが、住居状遺構として扱うことにした。

〔埋土〕 上位は十和田a火山灰のブロックを含む黒褐色土、中位は炭化物粒を含む黒色土、中位から下位にかけては、第Ⅲ層起源と思われる暗褐色の崩落土や黒褐色土からなる自然堆積層である。

〔平面形〕 隅丸の方形基調と思われる。〔規模〕 6.84m×？

〔壁〕 残存する斜面側の壁は緩やかに外傾して立ち上がる。その壁高は58cmである。

〔床面〕 斜面部第Ⅶ層を床面とし、わずかに斜面下方に傾斜している。

〔柱穴〕 北側隅（PP1）と中央部北寄り（PP2）に1個ずつ確認された。PP2の埋土には十和田a火山灰の極小ブロックを含んでいる。

〔遺構の性格〕 本体の多くを失っており不明な点が多いが、比較的傾斜の急な斜面地にあることから、居住施設あるいは作業場・工房などとして、常時使用するのには適さないと思われる。物見櫓的な使われ方を想定してみたが、根拠はない。

遺物は土師器の細片が数点出土したが、掲載していない。

時期 埋土の状況、出土した遺物から、平安時代（9世紀後半～10世紀初頭）に属するものと思われる。

第3号住居状遺構（K 36住居状）

遺構（第42図、写真図版23）

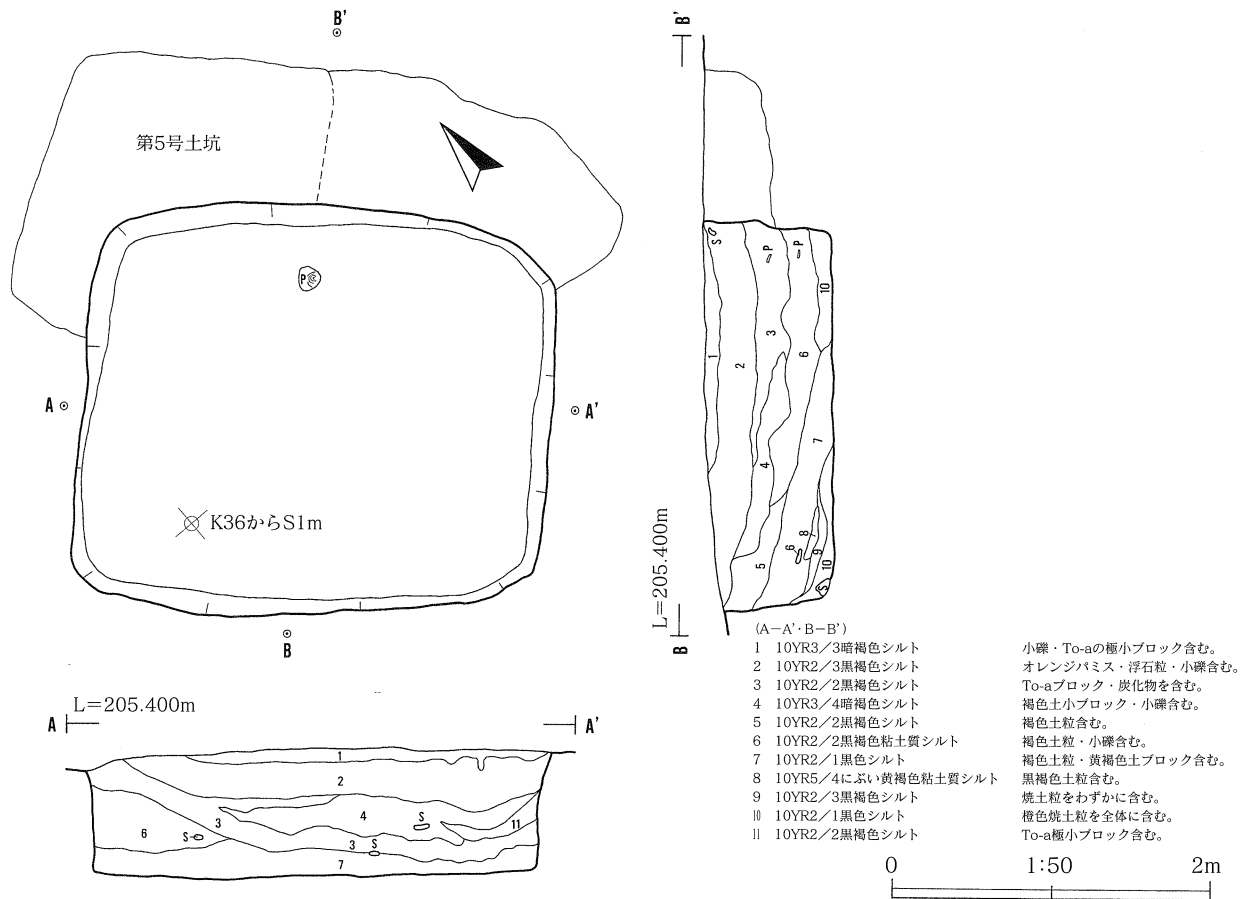
〔位置・重複・検出面〕 平坦部中央からやや西寄り、K 36区に位置する。大形住居跡である第4号竪穴住居跡の北東に2.2mの距離にあり、軸方向をほぼ同じにしている。第Ⅱ層上面で、重複する第5号土坑とともに確認されたが、新旧関係は本遺構のほうが新しい。

〔埋土〕 11層に分層され、中位に円礫を含む。上位から中位にかけては暗褐色土と黒褐色土が主体で、下位は黒色土から構成される。十和田a火山灰は、上位の暗褐色土と中位の黒褐色土中に小さなブロックを含んでいる。堆積状況は人為的な様相をみせている。〔平面形〕 不整形隅丸方形 〔規模〕 2.88×2.54m

〔壁〕 いずれの壁も直立して立ち上がる。壁高は64～80cmである。

〔床面〕 小さな凹凸はあるがほぼ平坦で、第Ⅴ層を床面とする。〔柱穴・土坑〕 確認されなかった。

〔遺構の性格〕 何らかの作業場（工房）、あるいは墨書や刻書を有することから、呪いなどの儀式が行われた遺構であった可能性がある。



第42図 第3号住居状遺構

遺物 (第104図、写真図版62)

埋土から、土師器の坏・甕類、須恵器の坏・大甕が出土しており、13点掲載した。墨書土器は1点、刻書土器は2点出土している。

時期 埋土の状況、出土した遺物から、平安時代（9世紀後半～10世紀初頭）に属するものと思われる。

第4号住居状遺構 (M35住居状)

遺構 (第43図、写真図版24)

〔位置・検出面〕平坦部ほぼ中央、M35区に位置し、第5号住居跡の北東約30cmの距離に隣接している。これも住居跡と軸方向を同じにしているが、同時に存在したとするとあまりに近接しすぎている。検出面は第II層で、不明瞭な十和田a火山灰の輪郭でプランを想定し精査したが、北側にあった窪地に堆積した火山灰を本遺構のプランと誤認し、かなりの大ききで北側と東側を掘りすぎてしまっている。

〔埋土〕上位は、十和田a火山灰が混じる黒褐色土とレンズ状に堆積する火山灰を主体とする灰白色土層、中位は焼土粒・炭化物を含む黒褐色土、下位は黒色土と黒褐色土からなる。

〔平面形〕方形と思われる。〔規模〕一部掘り過ぎがあり、推定4.20×3.80mほどと思われる。

〔壁〕緩く外傾し立ち上がる。壁高は38～65cmである。

〔床面〕第V層を床面とするほぼ平坦な床面である。〔柱穴・土坑〕検出されなかった。

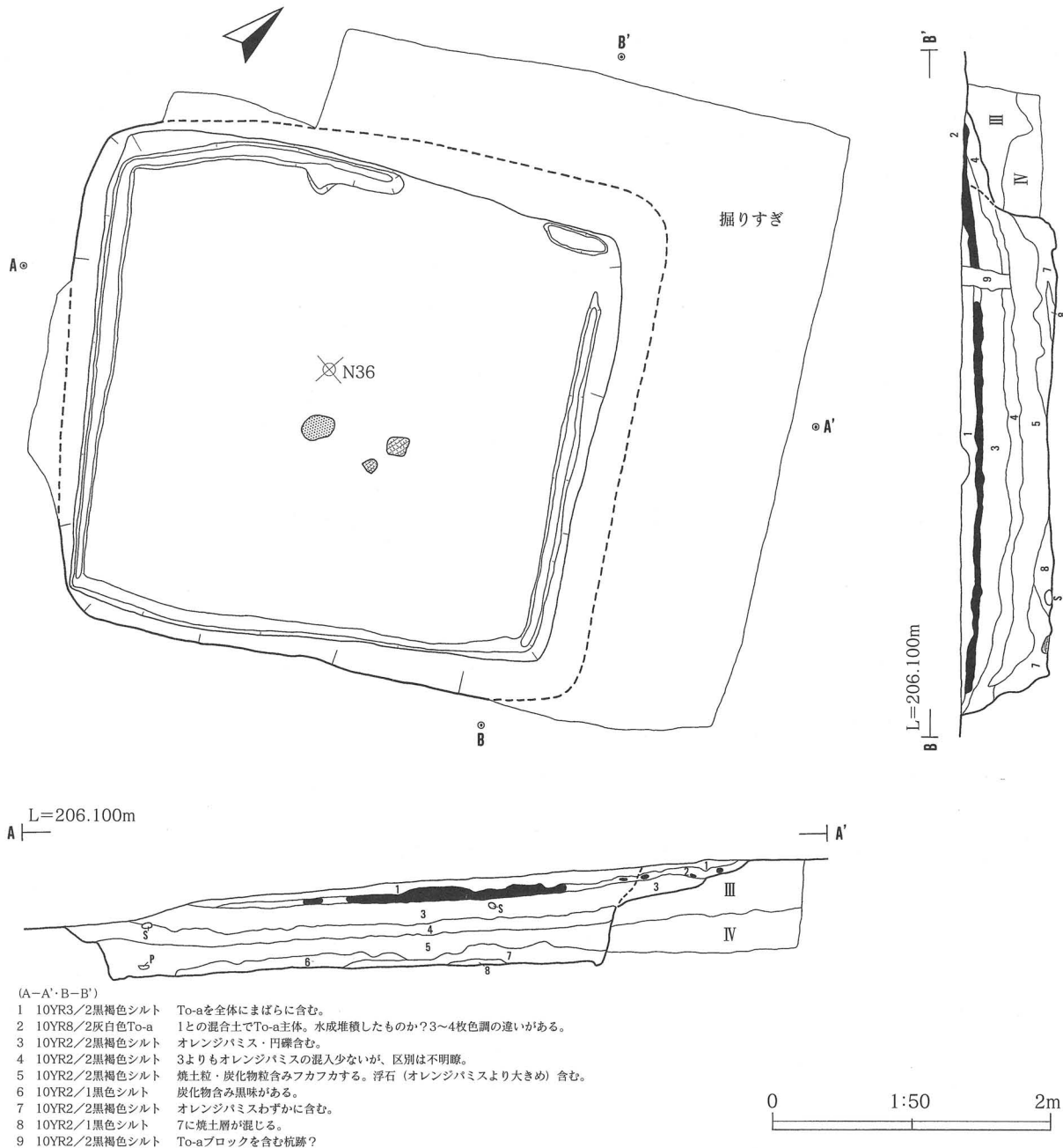
[周溝] 北側のコーナー付近を除き、壁際をほぼ全周する。幅10cm前後、深さは5cm程度である。

[その他] 中央付近から楕円形を呈する焼土が1基検出された。規模は27×18cmで、厚さは2cm程度である。その東側には炭化材も確認された。

[遺構の性格] 床面に焼土が確認されており、小鍛冶等の作業場（工房）の可能性はある。今回、7棟の住居状遺構が確認されているが、周溝を有するものは本遺構だけであり、住居のつくりという点では他のものと異なるものかもしれない。

遺物は土師器の坏が数点出土したのみである。

時期 埋土の状況、出土した遺物から、平安時代（9世紀後半～10世紀初頭）に属するものと思われる。



第43図 第4号住居状遺構

第5号住居状遺構（N37住居状）

遺構（第44図、写真図版25）

〔位置・重複・検出面〕平坦部中央からわずかに東に寄ったN37区に位置し、第6号住居跡の南東約2mの距離にある。第6号住居状遺構と重複していたが、本遺構の検出面は第II層で、この段階では重複関係にあることを把握できていなかった。重複する第6号住居状遺構は、第IV層上面まで検出面を下げた段階で確認されたものであり、よって新旧関係は本遺構の方が新しいと思われる。

〔埋土〕12層に分層されたが、人為的な堆積状況である。上位は黒褐色土を主体とし、中位から下位にかけては黒色土を基調とする。全体に十和田a火山灰の小ブロックを含んでいるが、火山灰のレンズ状の堆積層は見られない。

〔平面形〕隅丸方形（規模）3.08×3.16m

〔壁〕直立して立ち上がるが、北東壁は比較的緩やかである。壁高は76～85cmである。

〔床面〕第V層を床面とし、中央部がやや高い。小さな凹凸がある。

〔柱穴・土坑〕検出されなかった。

〔遺構の性格〕作業場（工房）の可能性があるが、人為的に埋め戻されるなど、他の同種の遺構とは異なる面もあることから、使われ方の違いも想定される。

遺物は、埋土からわずかに土師器の細片が数点出土しただけである。

時期 埋土の状況から、平安時代（9世紀後半～10世紀初頭）に属するものと思われる。

第6号住居状遺構（N38住居状）

遺構（第44図、写真図版26）

〔位置・重複・検出面〕第5号住居状遺構に示したとおりである。本遺構の方が第6号よりも古い。本来は第II層面で検出可能な遺構と思われる。

〔埋土〕黒色土の単層に暗褐色の地山崩落ブロックを含む。

〔平面形〕不整形と思われる。（規模）3.26×3.92m

〔壁〕緩く外傾し立ち上がるものと思われる。壁高は7～16cmである。

〔床面〕第V層を床面とし、緩く波打つ。〔柱穴・土坑〕検出されなかった。

〔遺構の性格〕作業場（工房）の可能性があるが、裏付けるものに乏しい。

遺物（第105図、写真図版63）

埋土から、土師器坏・甕の破片が数点出土したが、1点掲載した。

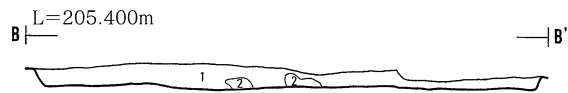
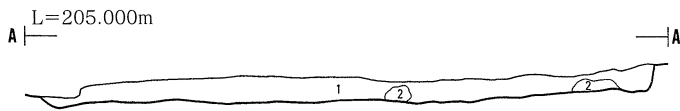
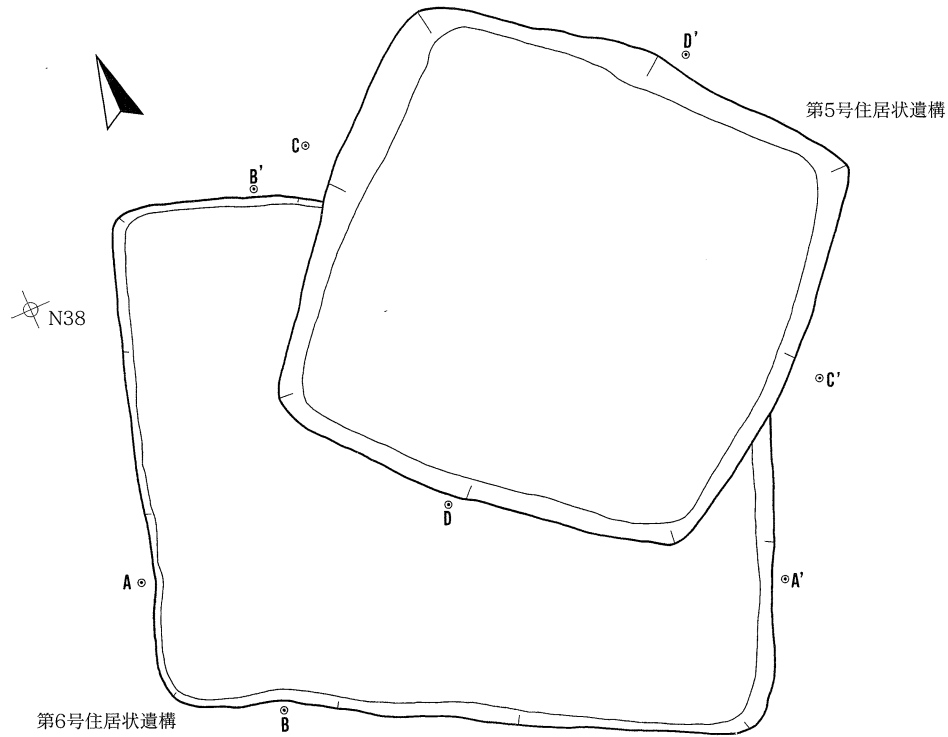
時期 出土遺物から、平安時代に属する遺構と思われる。

第7号住居状遺構（O42住居状）

遺構（第45図、写真図版27）

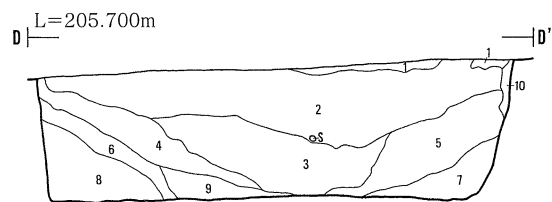
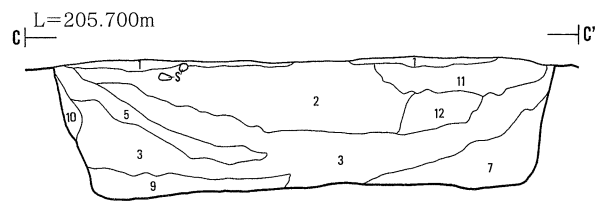
〔位置・検出面〕平坦部南東隅O42区に位置する。平坦部にある住居状遺構の中では、他の住居跡と最も離れており、第15号住居跡とは東に8.7mの距離がある。第IV層まで下げた状況で検出された遺構であるが、第II・第III層の段階で検出できたかは不明である。

〔埋土〕黒色土の単層に、第IV層起源の崩落ブロック、焼土粒を含む。



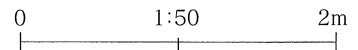
(A-A'·B-B')

1 10YR2/1黒色シルト オレンジバミスまばらに含む。
 2 10YR3/3暗褐色粘土質シルト IV層起源のブロック。

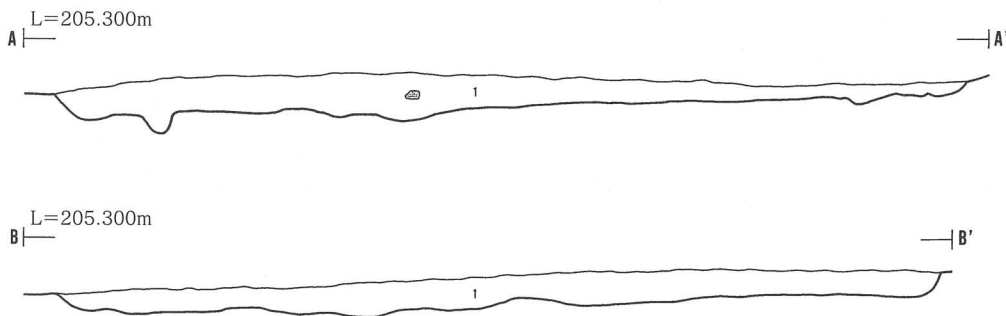
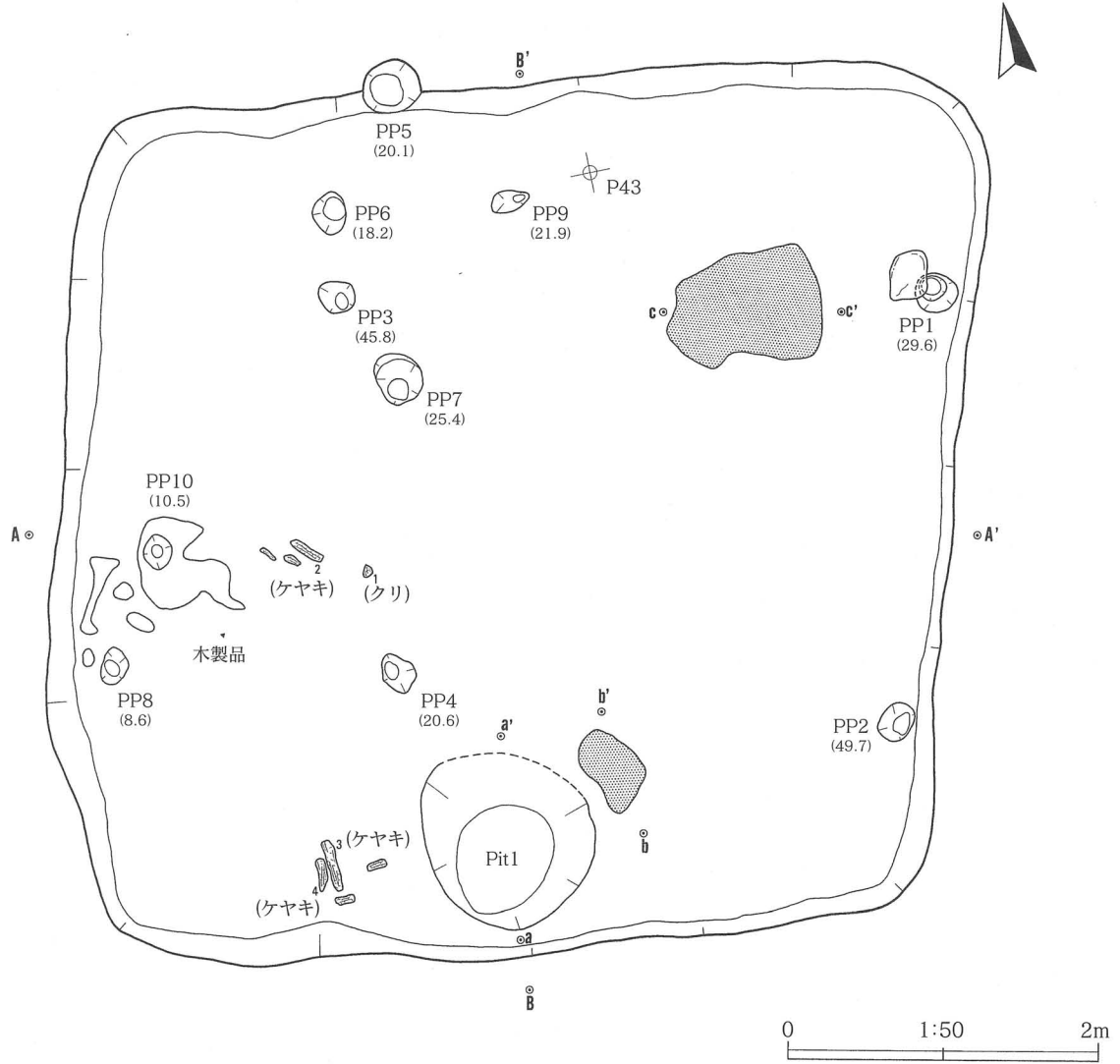


(C-C'·D-D')

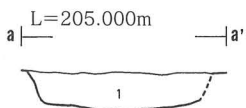
1 10YR3/2黒褐色シルト 黄褐色土粒を全体に含む。
 2 10YR2/2黒褐色シルト To-aの小ブロック・オレンジバミス・浮石粒を含む。
 3 10YR2/1黒色粘土質シルト 2の混入物に加え褐色土小ブロック含む。
 4 10YR2/1黒色粘土質シルト To-aブロックわずかに入る。オレンジバミス・浮石粒を全体に含む。
 5 10YR2/1黒色粘土質シルト To-aブロック・オレンジバミス・浮石粒を含む。4より黒味あり。
 6 10YR2/1黒色粘土質シルト To-aブロック含まず。オレンジバミス・浮石粒を含む。
 7 10YR1.7/1黒色粘土質シルト To-aブロックと明黄褐色土の小ブロック含む。
 8 10YR3/2黒褐色粘土質シルト To-a極小ブロック・オレンジバミス・浮石粒を含む。
 9 10YR3/3暗褐色粘土質シルト 褐色土と黒褐色土の混合土で小礫を含む。
 10 10YR2/2黒褐色シルト II層起源の崩落土。
 11 10YR2/2黒褐色粘土質シルト To-a小ブロック・褐色土ブロック全体に含む。
 12 10YR2/1黒色粘土質シルト To-a小ブロック・褐色土ブロック・浮石粒を全体に含む。



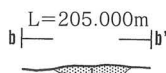
第44図 第5・6号住居状遺構



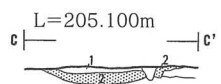
(A-A'・B-B')
 1 10YR2/1黒色シルト オレンジバミスをまばらに含む。焼土粒及びそのブロックを含む箇所あり。



(a-a')
 1 10YR2/1黒色シルト オレンジバミスをまばらに含む。



(b-b')
 1 7.5YR4/6褐色シルト 中央部以外は焼け悪い。橙色焼土粒を含むのみ。



(c-c')
 1 7.5YR3/2黒褐色シルト 焼土粒・炭化材片含む。
 2 5YR4/6赤褐色シルト 焼けの良い焼土層。小鍛冶関連か？

第45図 第7号住居状遺構

〔平面形〕 不整隅丸方形 〔規模〕 5.74×5.60m

〔壁〕 残存している状況では、緩く外傾し立ち上がっている。壁高は13～18cmである。

〔床面〕 第V層を床面とする。全体に凹凸がある。

〔柱穴〕 PP1～PP10の10個検出されたが、主柱穴となり得るものはPP1～PP4である。柱穴の配置は2個が東壁際に配され、もう2個は中央わずかに西寄りにある。各柱穴間の距離はPP1とPP2間が2.82m、PP2とPP4間が3.31m、PP4とPP3間が2.38m、PP3とPP1間が3.78mである。この他については、性格は不明である。

〔土坑〕 南壁中央から1基（Pit1）検出された。北側に一部掘りすぎがあり、規模は径108cm前後と推定される。深さは最大で22cmである。

〔その他〕 焼土が、Pit1の北東側から1基（焼土1）、北東隅付近から1基（焼土2）、いずれも床面に検出された。焼土1は規模31×49cm、厚さ9cmを測る。不整長方形を呈し焼けは良好である。焼土2は規模69×100cm、厚さ8cmである。形状は不整長方形で、中央部以外は焼けが悪い。この二つは炉的な使用により形成された焼土である。また、西壁中央部には焼失に伴う焼土ブロックがあり、その中から炭化した木製椀1点（三片）が出土した。

遺物（第105図、写真図版63・64）

埋土から土師器の坏・甕、須恵器の大甕が数点ずつ、この他に前述した木製椀が1点出土した。7点掲載した。

時期 出土遺物から、平安時代（9世紀～10世紀初頭）に属するものと考えられる。

（飯坂・濱田）

3. 土坑

調査区北側の尾根部から1基、南向き斜面部から1基、平坦部から18基の計20基検出された。縄文時代に属するものは、尾根部から検出された1基のみで、他の19基はいずれも平安時代に属するものと思われる。

平面形は、円形、隅丸方形、長方形の3つに大別される。そのうち、長方形のものは、形状から墓壇の可能性があり、隅丸方形を呈するものは、一辺が2m前後と比較的大形のもので、貯蔵施設あるいは作業場の可能性を考えている。

第1号土坑（O15土坑）

遺構（第46図、写真図版28）

〔位置・検出面〕 北側尾根部標高223.0mの調査区北端、O15区に位置する。調査区境から検出されており、残りの約半分は調査区北西側にある。検出面は第VII層である。

〔埋土〕 11層に分層される自然堆積である。上位から中位にかけては黒色土・黒褐色土を主体とし、それ以下はVII層起源の褐色あるいは暗褐色の崩落土からなる。

〔平面形〕 円形と思われる。 〔規模〕 1.97m×？ 〔深さ〕 101cm

〔壁〕 底面から直立して立ち上がり、中ほどから外傾する。

〔底面〕 ほぼ平坦で、第VII層下位を底面とする。

〔遺構の性格〕 食料貯蔵用の土坑と思われる。

遺物は出土していない。

時期 検出された層位および形状から縄文時代の遺構と考えられるが、出土遺物がなく詳細な時期は不明である。

第2号土坑 (H37土坑)

遺構 (第46図、写真図版28)

〔位置・検出面〕 調査区南西寄りの境界付近、H37区に位置し第4号住居跡南カマドの西側2mほどにある。第Ⅳ層で確認したが、本来は第Ⅱ層で検出すべきものである。

〔埋土〕 黒褐色土の単層であるが、検出面を下げすぎており、遺構上部は削られているものと思われる。

〔平面形〕 隅丸方形 〔規模〕 2.12×2.50m 〔深さ〕 14cm

〔壁〕 緩く外傾して立ち上がるものと思われる。

〔底面〕 わずかに凹凸があり、傾斜に沿った底面をもつ。第Ⅴ層を底面とする。

〔遺構の性格〕 貯蔵用の土坑かと思われるが、詳細は不明である。

遺物 (第106図、写真図版64)

〔出土状況〕 埋土から土師器坏・甕、須恵器の大甕などの破片が数点ずつ出土した。中から3点掲載した。

時期 出土遺物から、平安時代(9世紀中頃～10世紀初頭)の遺構と考えられる。

第3号土坑 (I33土坑)

遺構 (第46図、写真図版28)

〔位置・検出面〕 調査区平坦部西側、I33区に位置する。平坦部の中ではあまり遺構が確認されていない区域で、最寄りの遺構(第1号住居状遺構)までは西に7.5mの距離がある。第Ⅳ層で検出したが、第2号土坑同様、第Ⅱ層で精査すべき遺構と思われる。

〔埋土〕 黒色土の単層である。遺構上部は大きく削り取られている。

〔平面形〕 長方形 〔規模〕 0.59×1.04m 〔深さ〕 6cm

〔壁〕 ほとんど立たず不明である。 〔底面〕 第Ⅴ層を底面とし、地形に沿って波打つ。

〔遺構の性格〕 形状からは墓壇の可能性があるが、詳細は不明である。

遺物は出土していない。

時期 古代に属する可能性があるが、時期は不明である。

第4号土坑 (J38土坑)

遺構 (第46図、写真図版28)

〔位置・検出面〕 調査区南端西寄り、J38区に位置し、第4号住居跡の南東約2.5mに隣接する。検出面は第Ⅲ層である。

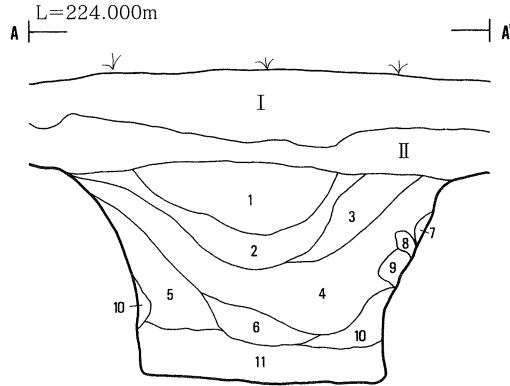
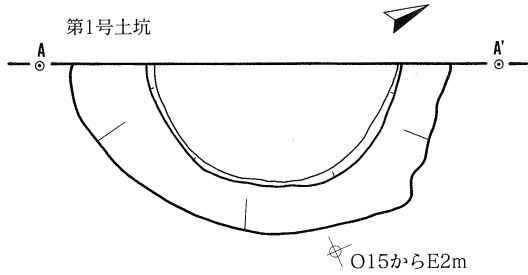
〔埋土〕 9層に分層され、全体に黒褐色土を主体とする。3層上部に十和田a火山灰が薄く堆積しているが、量の多寡はあるにしろ、その上下層にも火山灰は万遍なく観察される。自然堆積である。

〔平面形〕 隅丸方形 〔規模〕 1.89×2.06m 〔深さ〕 51cm

〔壁〕 底面から直立気味に立ち上がる。 〔底面〕 第Ⅴ層を底面とし、ほぼ平坦である。

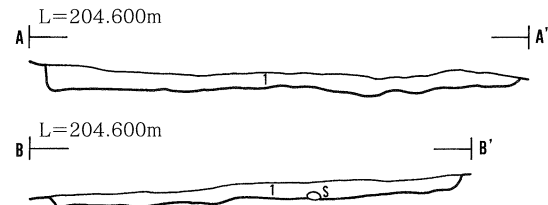
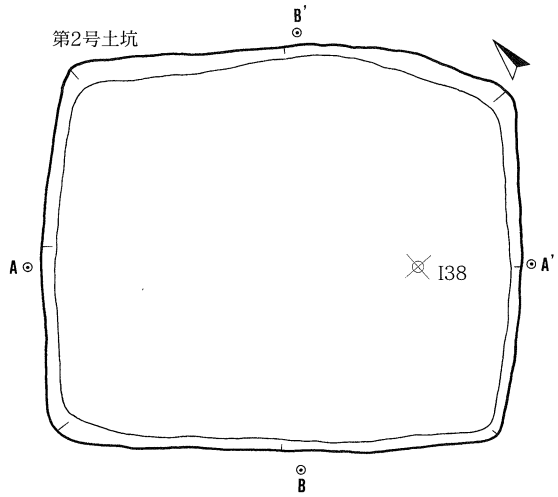
〔その他〕 北東壁際に柱穴状の小土坑が1基確認された。規模は径25cm、深さは10cm前後である。

〔遺構の性格〕 貯蔵用の土坑、もしくは何らかの作業場的な用途かと思われる。第4号住居跡との関連も考えられるが、それを裏付ける資料に乏しい。



1号土坑 (O15土坑)

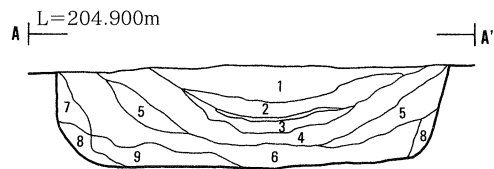
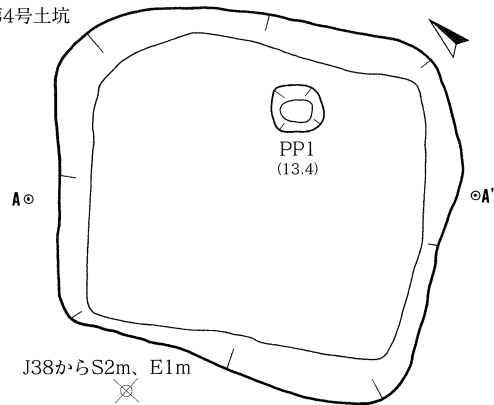
- (A-A')
- | | |
|---------------------|----------------------------------|
| 1 10YR2/1黒色シルト | オレンジパミスまばらに含む。 |
| 2 10YR2/2黒褐色シルト | オレンジパミス全体に含む。褐色土小ブロック含む。 |
| 3 10YR3/4暗褐色シルト | 黒褐色土粒少量含む。 |
| 4 10YR2/3黒褐色シルト | 褐色土粒・浮石含む。 |
| 5 10YR3/3暗褐色粘土質シルト | 地山崩落ブロック (Ⅶ層) 浮石をわずかに含む。 |
| 6 10YR3/3暗褐色粘土質シルト | 浮石含み5より黒味帯びる。 |
| 7 10YR3/4暗褐色シルト | 地山崩落土 (Ⅳ層起源)。 |
| 8 7.5YR4/6褐色粘土質シルト | Ⅶ層起源崩落ブロック。 |
| 9 10YR3/3暗褐色シルト | 褐色土粒混じるブロック。 |
| 10 10YR4/6褐色粘土質シルト | Ⅶ層起源の崩落土で黒色土のブロック含む。 |
| 11 10YR3/3暗褐色粘土質シルト | フカフカしている。黒褐色土粒・褐色土粒 (ブロック) が混じる。 |



2号土坑 (H37土坑)

- (A-A'・B-B')
- | | |
|-----------------|-----------------|
| 1 10YR2/2黒褐色シルト | オレンジパミスをまばらに含む。 |
|-----------------|-----------------|

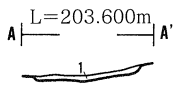
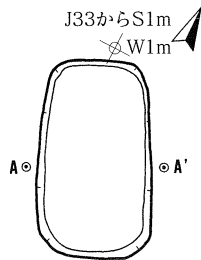
第4号土坑



4号土坑 (J38土坑)

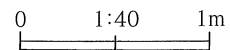
- (A-A')
- | | |
|--------------------|-----------------------------|
| 1 10YR3/2黒褐色シルト | To-a極小ブロック・オレンジパミスを少量含む。 |
| 2 10YR3/3暗褐色シルト | To-aのブロックは1より多め。炭化物粒含む。 |
| 3 10YR6/3にぶい黄褐色 | To-aを層状に含む。 |
| 4 10YR3/3暗褐色シルト | To-aの粒子を全体に含み自味がかる。 |
| 5 10YR3/2黒褐色シルト | To-aよりもオレンジパミスが目立つ。 |
| 6 10YR2/2黒褐色シルト | 炭化物粒・オレンジパミス・To-aの粒子を全体に含む。 |
| 7 10YR3/2黒褐色シルト | Ⅱ層起源の崩落土。 |
| 8 10YR2/3黒褐色シルト | Ⅲ層起源 (Ⅳ層も?) の崩落土。 |
| 9 10YR2/2黒褐色粘土質シルト | 小礫・オレンジパミス少量含む。 |

第3号土坑



3号土坑 (I33土坑)

- (A-A')
- | | |
|----------------|-----------------|
| 1 10YR2/1黒色シルト | オレンジパミス上層に微量含む。 |
|----------------|-----------------|



第46図 土坑 (1)

遺物 (第106図、写真図版64)

〔出土状況〕埋土の上位を中心に土師器・須恵器の坏・甕が大量に出土した。その中から7点掲載した。

時期 出土遺物から、平安時代(9世紀中頃～10世紀初頭)の遺構と考えられる。

第5号土坑 (K35土坑)

遺構 (第47図、写真図版29)

〔位置・重複・検出面〕平坦部中央からやや西寄り、K35区に位置する。第3号住居状遺構と重複関係にあるが、その第3号住居状遺構の精査時には重複に気づかずにいたものである。よって、新旧は明確ではないが、本遺構のほうが古いものと思われる。検出面は第II層である。

〔埋土〕2層に分層された。黒褐色土と黒色土からなり、十和田a火山灰は含んでいない。

〔平面形〕隅丸方形と思われる。〔規模〕1.82m×? 〔深さ〕43cm

〔壁〕底面から直立気味に立ち上がる。〔底面〕第V層を底面とし、細かい凹凸がある。

〔その他〕東隅に土坑(Pit1)が1基確認された。規模は33×44cm、深さは15cm程度で、性格は不明である。

〔遺構の性格〕貯蔵用の土坑、もしくは何らかの作業場的な用途かと思われる。

遺物 (第107図、写真図版64)

〔出土状況〕埋土から土師器坏・甕が数点出土しているが、3点掲載した。

時期 出土遺物の特徴から、平安時代(9世紀中頃～10世紀初頭)の遺構と考えられる。

第6号土坑 (K37土坑)

遺構 (第47図、写真図版29)

〔位置・検出面〕平坦部中央からやや西寄りのK37区に位置し、第4号住居跡とは1.8mほどの距離がある。検出面は第II層である。

〔埋土〕上位は十和田a火山灰の小ブロックを含む黒褐色土、中位は厚い暗褐色土、下位は黒色土が堆積している。6層に分層される自然堆積である。

〔平面形〕隅丸方形 〔規模〕1.88×2.05m 〔深さ〕68cm

〔壁〕緩やかに外傾して立ち上がる。〔底面〕第V層を底面とする。細かい凹凸があるが平坦である。

〔付属施設〕北西側のコーナーが東側に横穴状に抉り込まれ、その底面には灰とわずかに焼土のブロックが観察された。用途を具体的に示すことはできないが、何らかの施設として使っていたものと考えられる。

〔遺構の性格〕横穴状の遺構の存在から、何らかの作業場的な場所、あるいは祭壇等が設置されていた遺構の可能性があるが、断定できない。

遺物 (第107図、写真図版64・65)

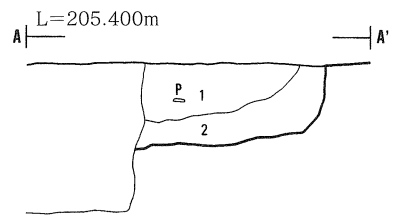
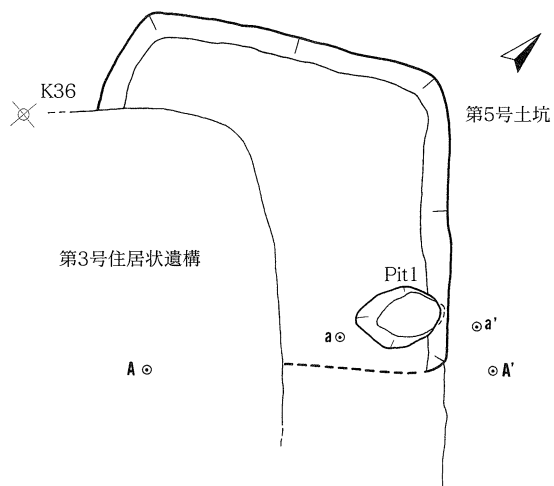
〔出土状況〕埋土から土師器坏・甕、須恵器の壺・甕類が出土している。12点掲載した。

時期 出土遺物の特徴から、平安時代(9世紀中頃～10世紀初頭)の遺構と考えられる。

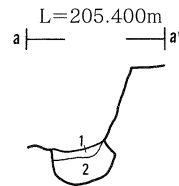
第7号土坑 (K39土坑)

遺構 (第47図、写真図版29)

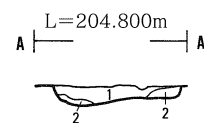
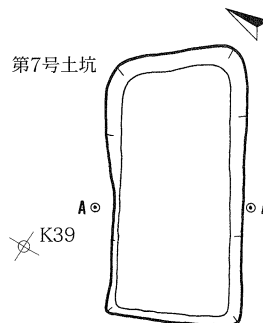
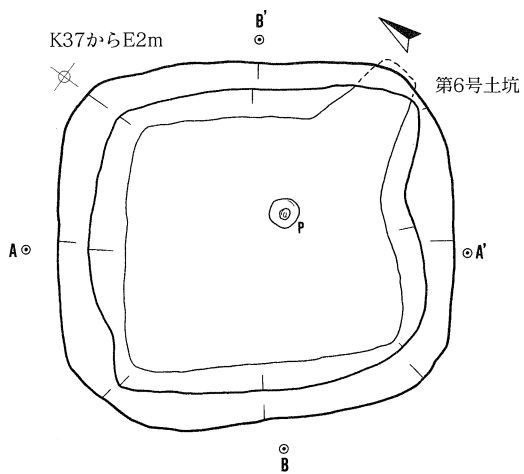
〔位置・検出面〕平坦部中央の南寄りのK39区、第4号住居跡と第7号住居跡のほぼ中間に位置する。第IV層



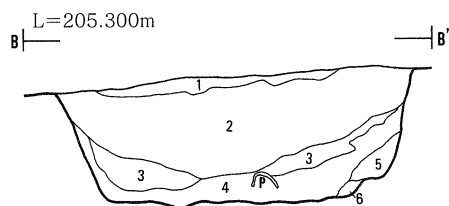
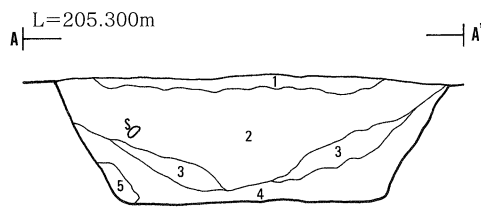
5号土坑 (K35土坑)
 (A-A')
 1 10YR2/2黒褐色シルト オレンジパミス含む。
 2 10YR3/1黒褐色シルト 1より黒味あり。



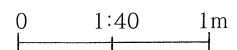
(a-a')
 1 10YR2/2黒褐色シルト 黄褐色土粒含む。
 2 10YR2/1黒色粘土質シルト



7号土坑 (K39土坑)
 (A-A')
 1 10YR2/1黒色シルト オレンジパミス含む。
 2 10YR2/3黒褐色シルト 浮石粒含む。



6号土坑 (K37土坑)
 (A-A'・B-B')
 1 10YR3/2黒褐色シルト To-aの小ブロック含む。
 2 10YR3/3暗褐色シルト オレンジパミス・浮石粒・小礫含む。
 3 10YR2/2黒褐色粘土質シルト オレンジパミス・浮石粒含む。
 4 10YR2/1黒色シルト オレンジパミスわずかに含む。
 5 10YR2/2黒褐色シルト IV層起源の崩落土。
 6 10YR3/4暗褐色粘土質シルト V層起源の崩落ブロック。



第47図 土坑 (2)

上面で検出したが、本来の検出面は第Ⅱ層と思われる。

〔埋土〕 黒色土と黒褐色土の2層に分けられた。自然堆積と思われる。

〔平面形〕 長方形 〔規模〕 0.67×1.49m 〔深さ〕 10cm

〔壁〕 直立して立ち上がるが、上部が削られているため、全体としては不明である。

〔底面〕 第Ⅴ層を底面とし、大きい凹凸がある。

〔遺構の性格〕 形状から、墓壇の可能性はあるが不明である。

遺物 (第108図、写真図版65)

〔出土状況〕 土師器坏が1点出土した。

時期 出土遺物の特徴などから、平安時代(9世紀中頃～10世紀初頭)の遺構と考えられる。

第8号土坑 (L31土坑)

遺構 (第48図、写真図版29)

〔位置・検出面〕 調査区中央部、斜面と平坦部のとの変換点付近、L31区に位置する。第Ⅲ層下～第Ⅳ層上面で第10号・第11号土坑とともに検出された。これらは、本来は第Ⅱ層～第Ⅲ層が検出面となる遺構である。

〔埋土〕 黒色土を主体とし、それに第Ⅴ層起源の崩落土を含んでいた。炭化材が部分的に観察される。

〔平面形〕 不整隅丸方形 〔規模〕 2.20×2.32m 〔深さ〕 36cm

〔壁〕 直立気味に立ち上がるが、上部が削られているため、全体としては不明である。

〔底面〕 第Ⅴ層を底面とし、東西方向に数cmの段差がある。

〔遺構の性格〕 貯蔵用の土坑、もしくは何らかの作業場的な用途かと思われる。

遺物 (第108図、写真図版65)

〔出土状況〕 わずかではあるが、埋土から土師器の坏・甕が出土した。

時期 出土遺物の特徴などから、平安時代(9世紀中頃～10世紀初頭)の遺構と考えられる。

第9号土坑 (N31土坑)

遺構 (第48図、写真図版30)

〔位置・検出面〕 斜面部中央、平坦部との変換点付近のN31区に位置する。この北東約1.5mには第6号焼土があるが関連は不明である。本遺構は、重機により第Ⅲ層相当層以下を除去作業中に、層厚確認のためのトレンチで確認されたもので、その際に遺構のほぼ半分を壊してしまっている。検出面は第Ⅲ層上面である。

〔埋土〕 黒褐色土の単層で、底面付近に炭化物が厚さ数cm確認された。

〔平面形〕 円形と思われる 〔規模〕 1.27m×? 〔深さ〕 48cm

〔壁〕 緩やかに外傾して立ち上がる。斜面上位は第Ⅲ・Ⅶ層、下位は第Ⅲ層を壁とする。

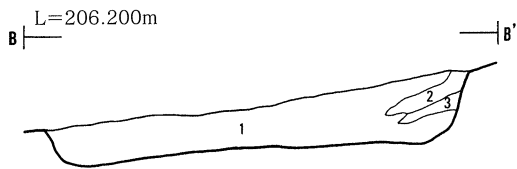
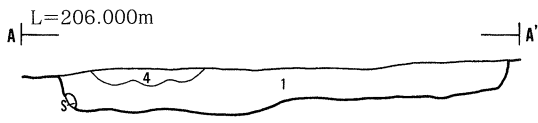
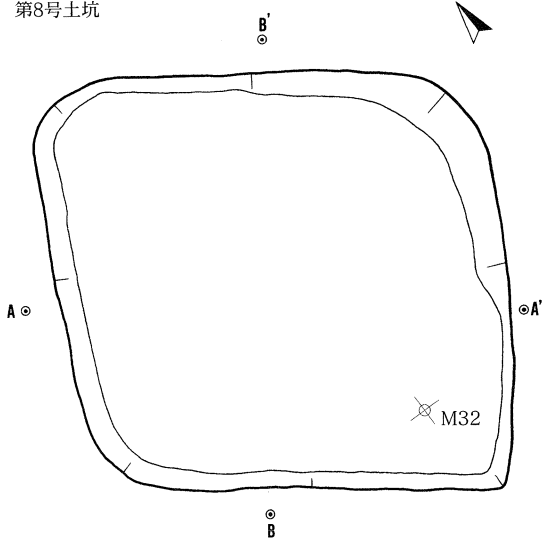
〔底面〕 斜面上位は第Ⅶ層、斜面下位は第Ⅲ層を底面とする。わずかに波打つ。

〔遺構の性格〕 底面に炭化材が見られることから、鍛冶などに関連する貯蔵用土坑の可能性はあるが、詳細は不明である。

遺物は出土しなかった。

時期 出土遺物はないが、ほぼ同じ等高線上に平安時代の遺物を出す焼土が数基あることなどから、平安時代(9世紀中頃～10世紀初頭)の遺構と考えておきたい。

第8号土坑

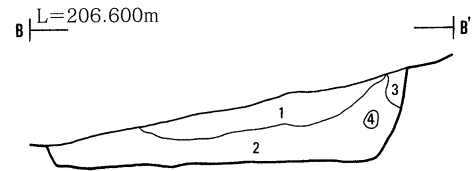
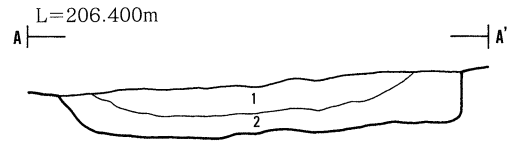
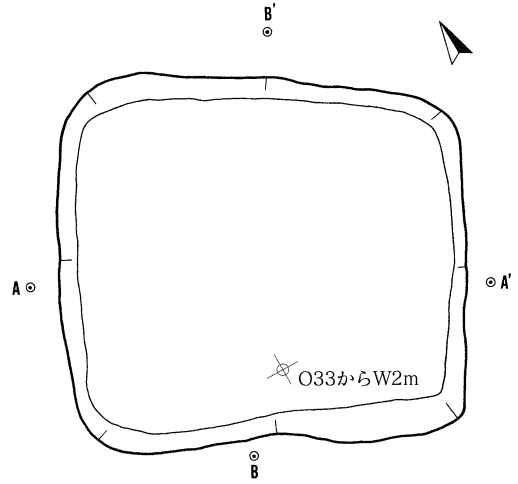


8号土坑 (L31土坑)

(A-A'・B-B')

- | | |
|-------------------|-----------------|
| 1 10YR2/2黒褐色シルト | 炭化材片含む。 |
| 2 10YR2/1黒色シルト | V層起源褐色土粒含む。 |
| 3 10YR4/4褐色粘土質シルト | V層起源崩落土で、2も混じる。 |
| 4 10YR2/2黒褐色シルト | 小礫及び黄褐色土粒含む。 |

第10号土坑

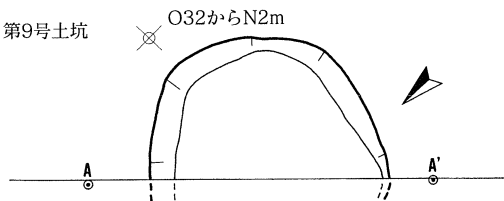


10号土坑 (N32土坑)

(A-A'・B-B')

- | | |
|---------------------|--------------------|
| 1 10YR2/2黒褐色シルト | オレンジパミス含む。 |
| 2 10YR2/2黒褐色シルト | オレンジパミス含む。褐色土粒も含む。 |
| 3 10YR3/2黒褐色シルト | 褐色土粒及びその小ブロック含む。 |
| 4 10YR1.7/1黒色粘土質シルト | 黒色土ブロック。 |

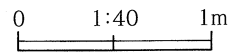
第9号土坑



9号土坑 (N31土坑)

(A-A')

- 1 10YR3/2黒褐色シルト 小礫・浮石粒含む。層下位(底面)に炭化物の層あり。



第48図 土坑 (3)

第10号土坑 (N32土坑)

遺構 (第48図、写真図版30)

〔位置・検出面〕 調査区のほぼ中央、斜面と平坦部のとの変換点付近、N32区にある。同一規模・同一形状の第8号土坑とは北西に約8m、第11号土坑とは南に3mの距離がある。これは、第Ⅱ層～Ⅲ層が検出面となる遺構であるが、第Ⅳ層で検出した。

〔埋土〕 褐色土粒を含む黒褐色土を主体とする自然堆積層からなる。

〔平面形〕 隅丸方形 〔規模〕 1.90×2.12m 〔深さ〕 26cm

〔壁〕 北側は緩く外傾し、南側は直立気味に立ち上がる。

〔底面〕 第Ⅴ層を底面とし、わずかに凹凸がみられる。

〔遺構の性格〕 貯蔵用の土坑、もしくは何らかの作業場的な用途かと思われる。

遺物は出土しなかった。

時期 形状などから、平安時代(9世紀中頃～10世紀初頭)の遺構と考えられる。

第11号土坑 (N33土坑)

遺構 (第49図、写真図版30)

〔位置・検出面〕 調査区のほぼ中央、第10号土坑の南約3mにある。第Ⅳ層で検出した。

〔埋土〕 上位は十和田a火山灰の細粒を含む黒色土、それ以下は黒色土・黒褐色土から構成される。いずれも自然堆積である。

〔平面形〕 不整隅丸方形 〔規模〕 2.16×2.43m 〔深さ〕 30cm 〔壁〕 いずれの壁も直立気味に立ち上がる。

〔底面〕 第Ⅴ層を底面とし、部分的に凹みがみられるところがある。それ以外はほぼ平坦である。

〔遺構の性格〕 貯蔵用の土坑、もしくは何らかの作業場的な用途かと思われる。

遺物は出土しなかった。

時期 形状などから、平安時代(9世紀中頃～10世紀初頭)の遺構と考えられる。

第12号土坑 (N34土坑)

遺構 (第49図、写真図版30)

〔位置・検出面〕 平坦部中央北寄りのN34区に位置し、この北西側約2.0mには第11号土坑が、南側には焼土遺構が3基ある。検出面は第Ⅱ層である。

〔埋土〕 2層に分層される。上位は焼土粒・炭化物粒を含む黒褐色土、下位は十和田a火山灰の小ブロックを含む黒色土からなる。

〔平面形〕 不整楕円形 〔規模〕 0.80×1.18m 〔深さ〕 41cm

〔壁〕 外傾して立ち上がる。 〔底面〕 第Ⅳ層を底面とし、ほぼ平坦である。

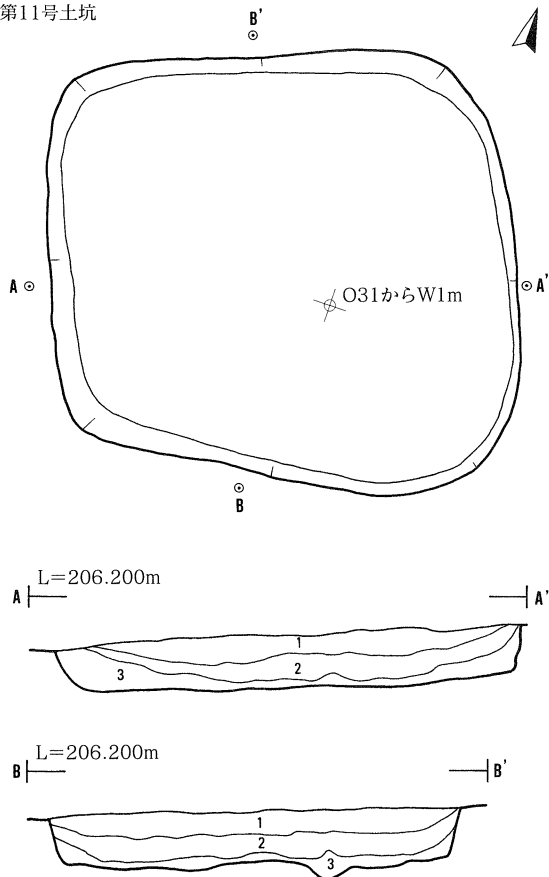
〔遺構の性格〕 不明である。

遺物 (第108図、写真図版65)

〔出土状況〕 土師器の甕の破片が数点出土した。うち、1点を掲載した。

時期 出土遺物の特徴や埋土に火山灰が観察されることから、平安時代(9世紀中頃～10世紀初頭)の遺構としておく。

第11号土坑

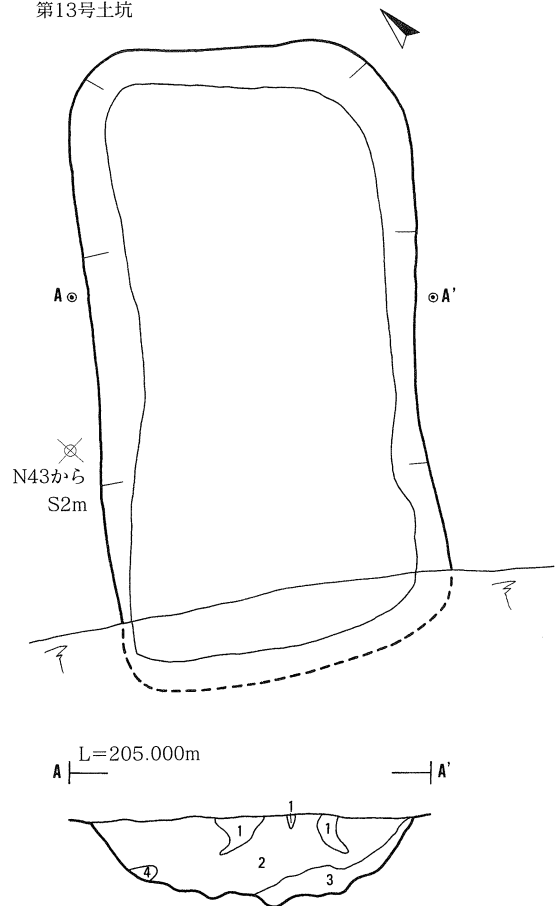


11号土坑 (N33土坑)

(A-A'・B-B')

- 1 10YR2/1黒色シルト To-aの細粒・オレンジバミス・焼土ブロック含む。
- 2 10YR1.7/1黒色粘土質シルト オレンジバミス・褐色土粒含む。
- 3 10YR3/2黒褐色粘土質シルト 褐色土極小ブロック含む。

第13号土坑

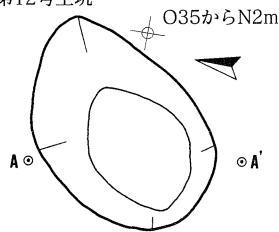


13号土坑 (N43土坑)

(A-A')

- 1 10YR2/1黒色シルト 草木根痕。
- 2 10YR2/2黒褐色シルト To-aの極小ブロック・褐色土粒を含む。
- 3 10YR2/2黒褐色シルト 2より若干黒味を帯びる。
- 4 10YR2/3黒褐色シルト V層起源崩落土。

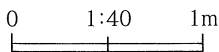
第12号土坑



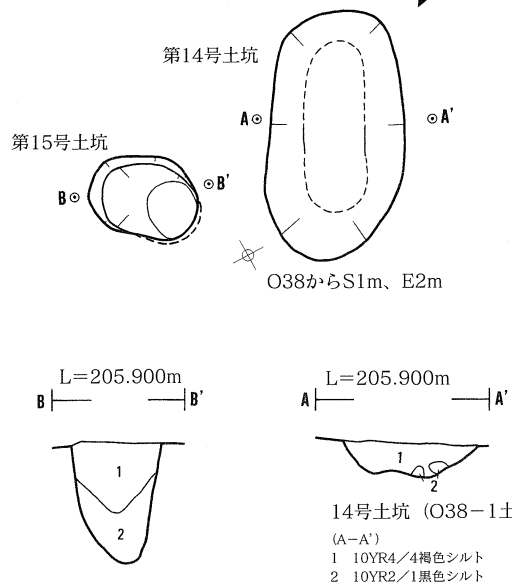
12号土坑 (N34土坑)

(A-A')

- 1 7.5YR2/2黒褐色シルト 全体に赤褐色焼土粒・炭化物粒を含む。
- 2 10YR2/1黒色シルト To-aの極小ブロック・粒子を全体に含む。



第14号土坑



14号土坑 (O38-1土坑)

(A-A')

- 1 10YR4/4褐色シルト
- 2 10YR2/1黒色シルト

15号土坑 (O38-2土坑)

(B-B')

- 1 10YR2/3黒褐色シルト 細かい黄褐色土ブロック状に含む。To-a下位に混入。
- 2 10YR3/1黒褐色シルト オレンジバミスまばらに含む。

第49図 土坑 (4)

第13号土坑（N43土坑）

遺構（第49図、写真図版31）

〔位置・検出面〕 調査区南端部東寄りのN43区、遺跡の最南端部に位置する。遺構南側は、事業地内ではあったが、農道の法面にかかるおそれがあったため、あとわずかのところで全範囲を精査することができなかった。第7号住居状遺構と隣接するが、東方向に5mほどの距離がある。検出面は第Ⅳ層であるが、第Ⅱ層で確認すべき遺構と思われる。

〔埋土〕 黒褐色土を主体とし、部分的に第Ⅳ層起源の崩落土、十和田 a 火山灰の極小ブロック、褐色土粒を含んでいる。

〔平面形〕 隅丸長方形 〔規模〕 1.74×(3.20) m 〔深さ〕 47cm

〔壁〕 底面から緩やかに外傾しながら立ち上がる。 〔底面〕 第Ⅴ層を底面とし、細かい凹凸が明瞭である。

〔遺構の性格〕 形状から墓壇の可能性があるが、埋め戻された様子は見受けられず、規模も二回りぐらい大きい。底面の凹凸も気になるが、その理由はわからなかった。性格については不明としておく。

遺物（第108図、写真図版65）

〔出土状況〕 埋土から土師器片が数点出土している。3点掲載した。

時期 出土遺物の特徴から、平安時代（9世紀中頃～10世紀初頭）の遺構と考えられる。

第14号土坑（O38-1土坑）

遺構（第49図、写真図版31）

〔位置・検出面〕 平坦部中央東寄り、O38区に位置する。第15号土坑とは南に40cmの距離がある。検出面は第Ⅱ層である。

〔埋土〕 褐色土の単層で、黒色土の小ブロックを含む。

〔平面形〕 長楕円形。 〔規模〕 0.70×1.30m 〔深さ〕 19cm 〔壁〕 緩やかに外傾して立ち上がる。

〔底面〕 第Ⅲ層を底面とする。土層観察用ベルト以外の壁・底面は掘りすぎている。

〔遺構の性格〕 不明である。

遺物は出土していない。

時期 検出面から、平安時代の遺構としておく。

第15号土坑（O38-2土坑）

遺構（第49図、写真図版31）

〔位置・検出面〕 第14号土坑と40cmほどの距離をおく。検出面は第Ⅱ層である。

〔埋土〕 黒褐色土からなるが、2層に分層された。上位層に十和田 a 火山灰の小ブロックを含んでいる。

〔平面形〕 円形 〔規模〕 0.41×0.57m 〔深さ〕 64cm

〔壁〕 直立気味に立ち上がる。〔底面〕 第Ⅴ層を底面とする。

〔遺構の性格〕 大きめの柱穴ほどの規模であるが土坑として扱った。性格は不明である。

遺物は出土していない。

時期 埋土に火山灰を含むことから、平安時代の遺構としておく。

第16号土坑（O39土坑）

遺構（第50図、写真図版31）

〔位置・検出面〕平坦部中央東寄りのO39区、第9号住居跡と第11号住居跡のほぼ中間に位置する。検出面は第II層である。

〔埋土〕最上位の黒色土とそれ以下の黒褐色土からなるが、黒色土中には十和田a火山灰を含んでいる。

〔平面形〕楕円形 〔規模〕0.96×1.31m 〔深さ〕40cm

〔壁〕外傾して立ち上がる。〔底面〕第IV層を底面とし、ほぼ平坦である。〔遺構の性格〕不明である。

遺物（第108図、写真図版65）

〔出土状況〕須恵器の甕類の破片が出土した。量はさほどではない。

時期 出土遺物や埋土に火山灰を含む点から、平安時代の遺構と思われる。

第17号土坑（O39-3土坑）

遺構（第50図、写真図版32）

〔位置・重複・検出面〕平坦部中央からやや南東寄りのO39区に位置し、第9号住居跡の南東壁に重複して確認された。本遺構が切られていることから、住居跡よりも古い。検出面は第II層である。

〔埋土〕6層に分層された。上位から中位にかけては炭化物や焼土粒を含む黒褐色土を主体とし、それ以下は、十和田a火山灰を含む黒色土、焼土粒を含む暗褐色土、厚さ数cmの灰層、灰を含む黒褐色土などから構成される。底面は焼けの悪い焼土が形成されている。〔平面形〕不整形円形 〔規模〕1.12m×? 〔深さ〕30cm

〔壁〕南東壁の状況は、底面から緩やかに外傾しながら立ち上がっている。

〔底面〕第IV層を底面とし、ほぼ平坦である。前述のとおり、35×45cmほどの焼土が観察されるが、厚さは6cm程度で、わずかに灰も含んでいる。

〔遺構の性格〕検出された20基の土坑のうち、唯一底面に焼土が形成されているものである。第6号住居跡で確認されているロクロピットとの関連から、土坑内の焼土の発達も底面のみであったり、焼け具合も悪いなど根拠とするには弱い部分はあるが、ここでは土器焼成遺構の可能性を示しておきたい。

遺物（第108図、写真図版65）

〔出土状況〕埋土から土師器の坏・甕が数点と手持ち砥石の細片1点（不掲載）が出土した。2点掲載した。

時期 出土遺物の特徴から、平安時代（9世紀中頃～10世紀初頭）の遺構と考えられる。

第18号土坑（P41土坑）

遺構（第50図、写真図版32）

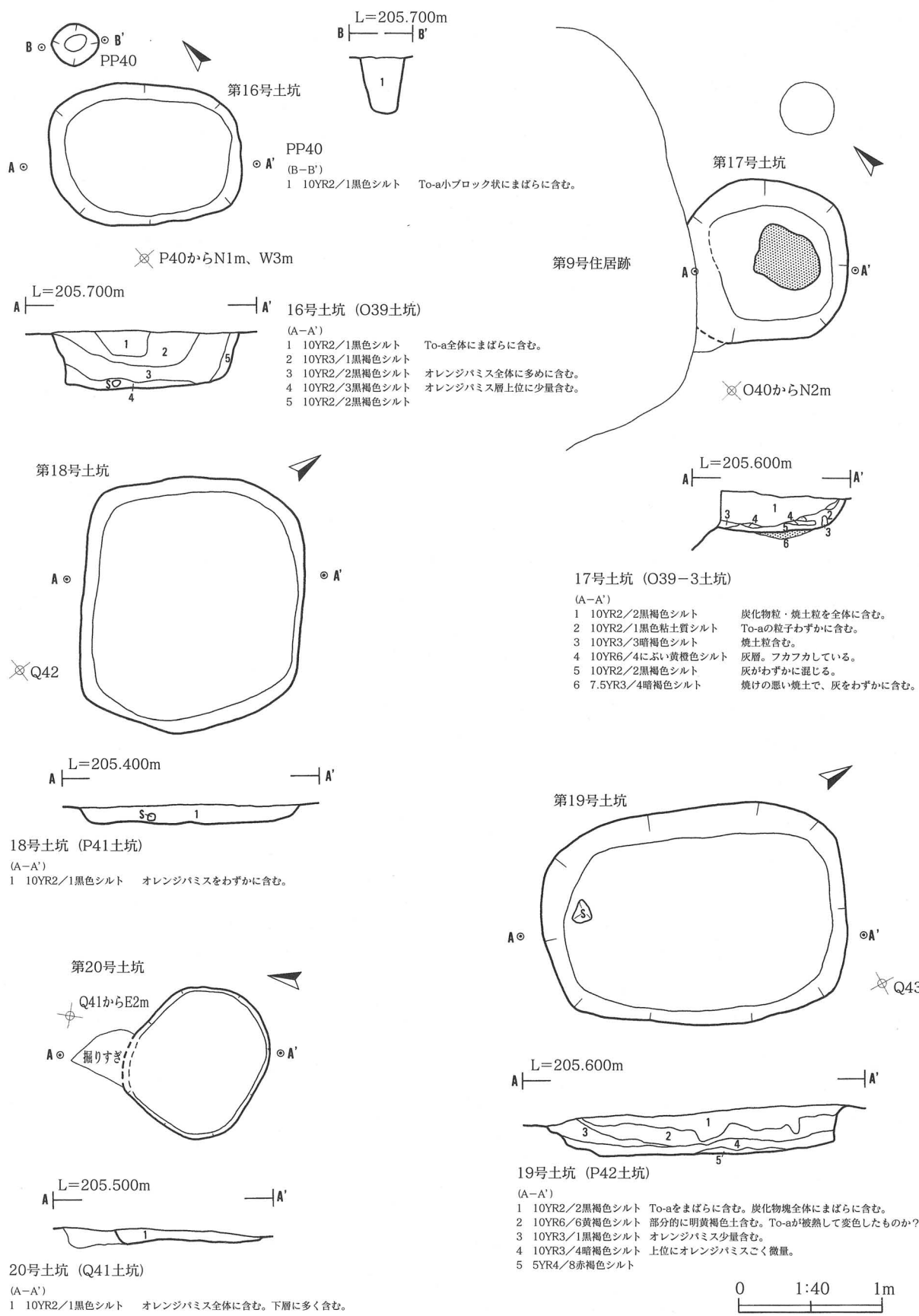
〔位置・検出面〕調査区平坦部南東側のP41区に位置し、第20号土坑とは南西方向に約2mの距離がある。検出面は第IV層であるが、第II層～第III層の段階で検出すべきものである。十和田a火山灰の入りが少ないためか、第II層面では確認できなかった。

〔埋土〕黒色土の単層で、オレンジパミスをまばらに含んでいる。

〔平面形〕隅丸方形 〔規模〕1.54×1.76m 〔深さ〕13cm

〔壁〕緩やかに外傾して立ち上がる。〔底面〕第V層を底面とし、ほぼ平坦である。

〔遺構の性格〕貯蔵用もしくは何らかの作業場的な用途と思われる土坑としておく。



第50図 土坑 (5)

遺物は出土しなかった。

時期 出土遺物もなく検出面も定かではないが、平安時代の遺構としておく。

第19号土坑（P42土坑）

遺構（第50図、写真図版32）

〔位置・検出面〕 調査区平坦部南東隅のP42区に位置する。第7号住居状遺構とは南西に約1.4mの距離がある。検出面は第Ⅲ層上面である。

〔埋土〕 5層に分層された。上位は十和田a火山灰・炭化物を含む黒色土、中位は炭化物を含む明黄褐色土（十和田a火山灰が赤っぽく変色したものか？）と黒褐色土、下位は暗褐色土と焼けの悪い焼土から構成される。人為的に埋め戻された様相である。

〔平面形〕 隅丸長方形 〔規模〕 1.30×2.12m 〔深さ〕 31cm

〔壁〕 北東壁は直立して外傾し、南西壁は底面から緩やかに段差をもって立ち上がっている。

〔底面〕 第Ⅴ層を底面とし、底面自体はほぼ平坦である。南西壁際には、径10～15cmほどの礫が一つ置かれていた。

〔遺構の性格〕 後述するが、出土遺物や埋土の状況、形状から墓壇の可能性はある。埋土に火山灰がうっすら変色したような箇所が見受けられるが、被熱によるものかは判断できなかった。

遺物（第108・109図、写真図版65）

〔出土状況〕 埋土からは土師器の坏・甕類、黒曜石製のスクレーパーが出土した。7点図示している。

時期 出土遺物の特徴から、平安時代（9世紀中頃～10世紀初頭）の遺構と考えられる。

第20号土坑（Q41土坑）

遺構（第50図、写真図版32）

〔位置・検出面〕 平坦部南東側のQ41区に位置する。第Ⅳ層で検出したが、これも本来第Ⅱ層～第Ⅲ層の段階で検出すべきものである。

〔埋土〕 黒色土の単層で、オレンジパミスを含む。

〔平面形〕 不整円形 〔規模〕 1.30×1.37m 〔深さ〕 15cm

〔壁〕 北側の壁を掘りすぎている。壁は外傾して立ち上がる。〔底面〕 第Ⅴ層を底面とし、ほぼ平坦である。

〔遺構の性格〕 不明である。

遺物は出土しなかった。

時期 出土遺物もなく詳細な時期は不明だが、平安時代に属する可能性がある。

（飯坂・濱田）

4 . 焼土遺構

焼土遺構は全部で10基検出した。検出箇所と時代は、尾根部で縄文時代のものが1基、斜面部で平安時代と思われるものが4基、平坦部で平安時代のものが4基と現代のものが1基である。

第1号焼土遺構 (K28焼土)

遺構 (第51図、写真図版33)

〔位置・検出面〕 斜面部裾のK28区、第2号住居状遺構の南東約2mに位置する。第Ⅲ層中で検出した。

〔焼成〕 第Ⅲ層が赤褐色に変色し、焼け具合も良好な現地性焼土である。

〔平面形〕 不整形円形 〔規模〕 47×48cm 〔厚さ〕 7～11cm

遺物は出土しなかった。

時期 検出状況から、平安時代に属するものと思われる。

第2号焼土遺構 (M35焼土)

遺構 (第51図、写真図版33)

〔位置・検出面〕 平坦部中央北寄りM35区にあり、第4号住居状遺構の北に第3号・第4号焼土遺構とともに検出された。検出面は第Ⅱ層上面である。

〔焼成〕 第Ⅱ層が橙色に変色するが焼けは悪い。現地性焼土である。

〔平面形〕 不整形 〔規模〕 20×52cm 〔厚さ〕 3cm前後

遺物は出土しなかった。

時期 検出状況から、平安時代に属するものと思われる。

第3号焼土遺構 (N35-1焼土)

遺構 (第51図、写真図版33)

〔位置・検出面〕 平坦部中央北寄りN35区にある。検出面は第Ⅱ層上面である。

〔焼成〕 第Ⅱ層が橙色に変色し、焼けも良好な現地性焼土である。 〔平面形〕 不整形 〔規模〕 41×48cm

〔厚さ〕 2～3cm

遺物は出土しなかった。

時期 検出状況から、平安時代に属するものと思われる。

第4号焼土遺構 (N35-2焼土)

遺構 (第51図、写真図版33)

〔位置・検出面〕 平坦部中央北寄りN35区にある。検出面は第Ⅱ層上面である。

〔焼成〕 第Ⅱ層が橙色に変色するが、焼けはあまり良くない現地性焼土である。

〔平面形〕 L字形 〔規模〕 幅10～15cm、長さ70cm前後 〔厚さ〕 3cm前後

遺物は出土しなかった。

時期 検出状況から、平安時代に属するものと思われる。

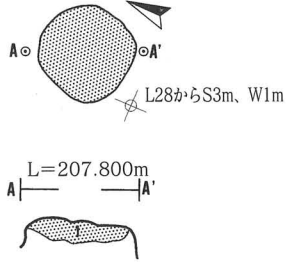
第5号焼土遺構 (N41焼土)

遺構 (第51図、写真図版34)

〔位置・検出面〕 平坦部南東寄りのN41区にある。隣接する遺構はない。検出面は第Ⅱ層上面である。

〔焼成〕 第Ⅱ層が暗褐色に変色するが、焼けはあまり良くない。投げ込まれたものか。

第1号焼土

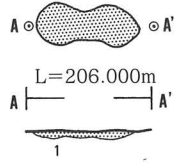


1号焼土 (N27焼土)

(A-A')
1 5YR4/6赤褐色シルト 焼けはやや良好。

N35からS1m

第2号焼土

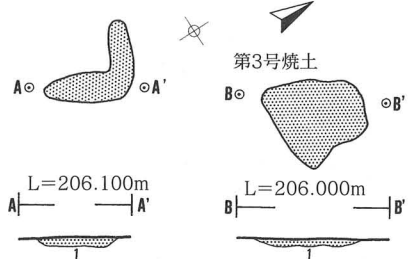


2号焼土 (M35焼土)

(A-A')
1 7.5YR7/6橙色シルト 黒褐色の植物痕をブロックで含む。時期は不明。発達悪い。

第4号焼土

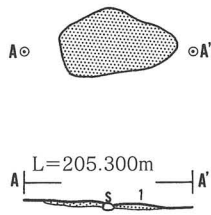
N35からS1m、E2m



3号焼土 (N35-1焼土) ・ 4号焼土 (N35-2焼土)

(A-A'・B-B')
1 7.5YR7/6橙色シルト 黒褐色の植物痕をブロックで含む。時期は不明。A-A'は発達悪い。

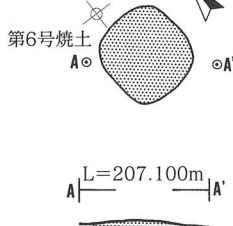
第5号焼土



5号焼土 (N41焼土)

(A-A')
1 7.5YR3/4暗褐色シルト 投げ込まれた焼土か? 焼け悪い。

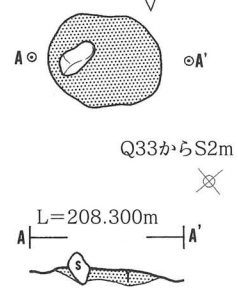
O31からS1m、E1m



6号焼土 (O31焼土)

(A-A')
1 10YR2/2黒褐色シルト 炭化物・にぶい赤褐色土のブロック含む。

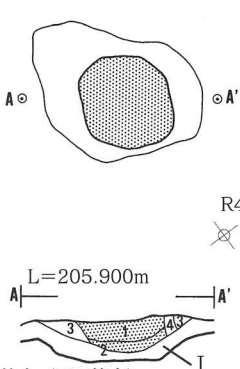
第7号焼土



7号焼土 (Q33焼土)

(A-A')
1 5YR4/8赤褐色シルト 土師器片を含む焼土。礫より東側の焼けが良好。

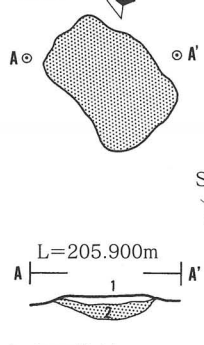
第8号焼土



8号焼土 (S35焼土)

(A-A')
1 5YR5/8明赤褐色シルト 捨てられたようなしまりのない焼土。
2 5YR4/8赤褐色シルト 1と異なる焼けの良い焼土。
3 10YR3/4暗褐色シルト にぶい黄褐色土・焼土粒を含む。
4 10YR2/2黒褐色シルト 3の小ブロック・焼土粒含む。

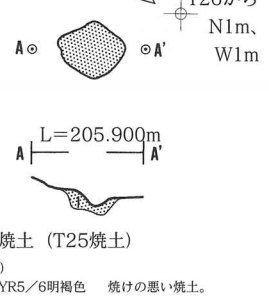
第9号焼土



9号焼土 (S35焼土)

(A-A')
1 10YR2/2黒褐色シルト 焼土粒・炭化物粒を全体に含む。
2 5YR4/8赤褐色シルト 焼けは良好。

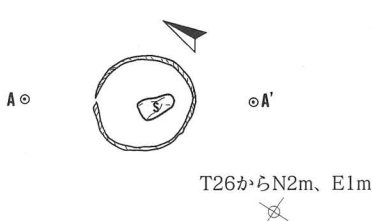
第10号焼土



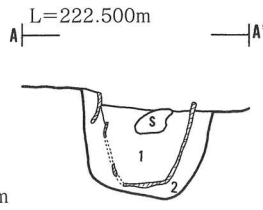
10号焼土 (T25焼土)

(A-A')
1 7.5YR5/6明褐色 焼けの悪い焼土。

第1号土器埋設遺構

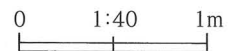


T26からN2m、E1m



1号土器埋設遺構 (T25埋設土器)

(A-A')
1 10YR4/4褐色シルト V層よりはくすんだ色合い。
2 10YR4/6褐色シルト V層との区別は不明瞭。土器の掘り方。



第51図 焼土遺構・土器埋設遺構

〔平面形〕 不整形 〔規模〕 37×62cm 〔厚さ〕 2cm前後

遺物は出土しなかった。

時期 検出状況から、平安時代に属するものと思われる。

第6号焼土遺構（O31焼土）

遺構（第51図、写真図版34）

〔位置・検出面〕 斜面部O31区にあり、第9号土坑の北東約1.5mに位置する。検出面は第Ⅲ層中である。

〔焼成〕 第Ⅲ層がにぶい赤褐色に変色する部分があるのみで、焼けは良くない。炭化物が混入している。

〔平面形〕 ほぼ円形 〔規模〕 44×46cm 〔厚さ〕 4cm前後

遺物は出土しなかった。

時期 検出状況から、平安時代に属するものと思われる。

第7号焼土遺構（Q33焼土）

遺構（第51図、写真図版34）

〔位置・検出面〕 斜面部Q33区にある。検出面は第Ⅲ層中である。

〔焼成〕 赤褐色に変色し、西側に礫を伴う。焼けは良好である。

〔平面形〕 ほぼ円形 〔規模〕 50×58cm 〔厚さ〕 8cm前後

遺物（第109図、写真図版65）

〔出土状況〕 焼土の周辺から土師器の坏・甕が数点出土した。2点掲載した。

時期 出土遺物・検出状況から、平安時代に属する焼土遺構である。

第8号焼土遺構（R43焼土）

遺構（第51図、写真図版34）

〔位置・検出面〕 平坦部南東端のR43区に位置する。第15号住居跡の範囲内にあるが、検出面は第Ⅰ層耕作土中である。

〔焼成〕 現地性のものと他で焼かれ投げ込まれたものが混在している。また、焼土の周りを囲むように、黄褐色の土が広がっている。どのような構造の施設なのかは不明である。

〔平面形〕 ほぼ円形 〔規模〕 47×48cm 〔厚さ〕 10cm前後

遺物は出土しなかった

時期 検出状況から、現代の焼土遺構である。

第9号焼土遺構（S35焼土）

遺構（第51図、写真図版35）

〔位置・検出面〕 斜面部南東端S35区にある。検出面は第Ⅲ層中である。

〔焼成〕 第Ⅲ層が赤褐色に変色し、焼けも良好な現地性の焼土である。

〔平面形〕 隅丸長方形 〔規模〕 46×70cm 〔厚さ〕 8cm前後

遺物 〔出土状況〕 焼土の周辺から土師器の坏が1点出土したが、細片のため掲載しなかった。

時期 出土遺物・検出状況から、平安時代に属する焼土遺構である。

第10号焼土遺構 (T25焼土)

遺構 (第51図、写真図版35)

〔位置・検出面〕尾根部東端T25区にあり、第1号土器埋設遺構の南約2mに位置する。

〔焼成〕第Ⅶ層が明褐色に変色しているが、焼けが悪く不明瞭であった。現地性の焼土であるが炉のものではなかった。

〔平面形〕ほぼ円形 〔規模〕26×28cm 〔厚さ〕5～8cm

遺物は出土しなかった

時期 検出状況から、縄文時代の焼土遺構と思われる。

(濱田)

5 . 柱穴

柱穴は、J32区から南東側のM34区にかけての一群と、第4号住居跡の南東側I37区・J37区付近にある一群の、大きく二つにまとまって検出された。これらは、いずれも第Ⅱ層以下を掘り下げた段階、第Ⅳ層の上面で確認したものであるが、本来は古代の遺構検出面で精査すべきものである。これら柱穴群の中には、数個が列をなすような箇所も見受けられたが、建物を構成するには至らず、また柱列として報告すべきものもないと判断した。よって、個々の柱穴については、表2に計測値等を入れた一覧表を、第52・53図に実測図を掲載し報告のすべてとする。(写真図版35)

(濱田)

6 . 土器埋設遺構

土器埋設遺構は、尾根部東端で1基確認された。時期は縄文時代中期末葉である。本遺構の西側、約2mに第10号焼土があるが、それとの関連は不明である。

第1号土器埋設遺構 (S25土器埋設遺構)

遺構 (第51図、写真図版35)

〔位置・検出面〕尾根部東端のS25区にあり、第Ⅰ・Ⅳ層を除去後、第Ⅶ層上面で検出した。

〔規模など〕深鉢形の土器が直径約35cm、深さ23cmの掘り方に正位に埋め込んであった。土器の内部には拳大の礫が一個入っている。

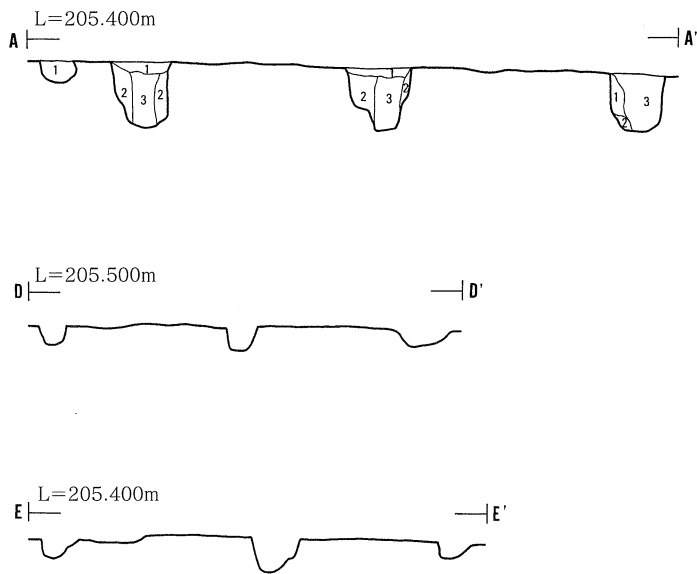
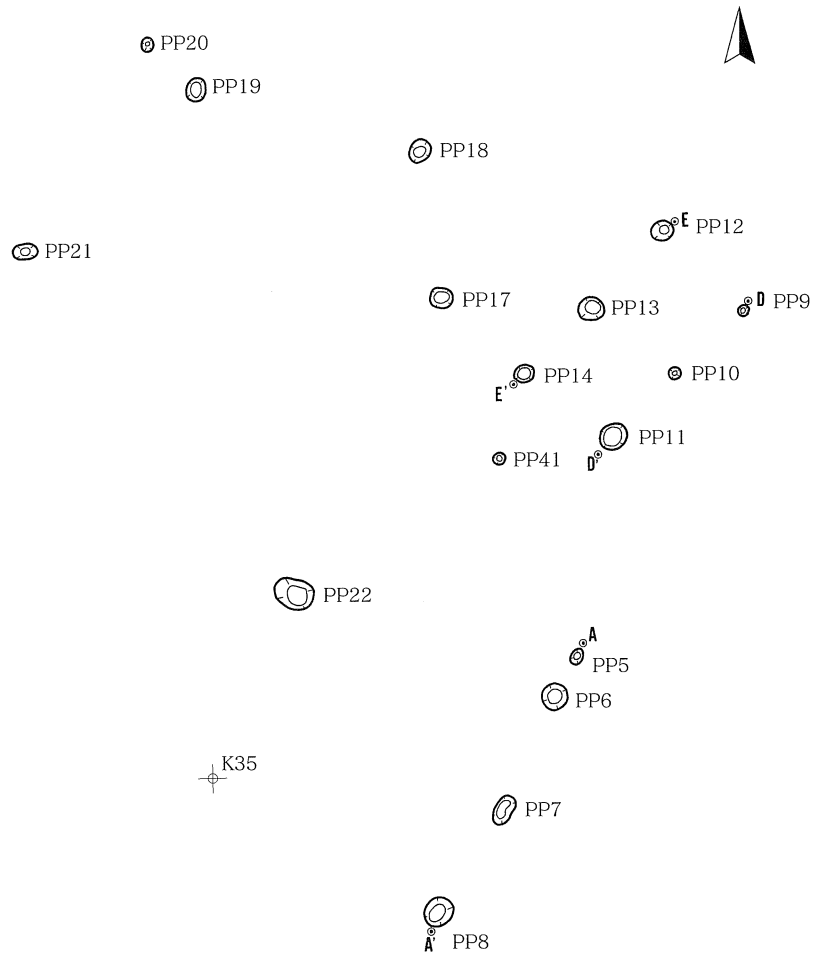
〔遺構の性格〕土器内に礫を伴うことから、幼胎児の墓の可能性はあるが断定はできない。

遺物 (第109図、写真図版65)

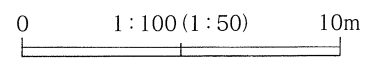
いわゆるキャリパー形の深鉢で、口縁は緩やかに波打ち、平行沈線、横位の列点が全周している。地文は単軸絡条体による燃糸文である。

時期 埋設された土器の特徴から、縄文時代中期末葉の遺構と思われる。

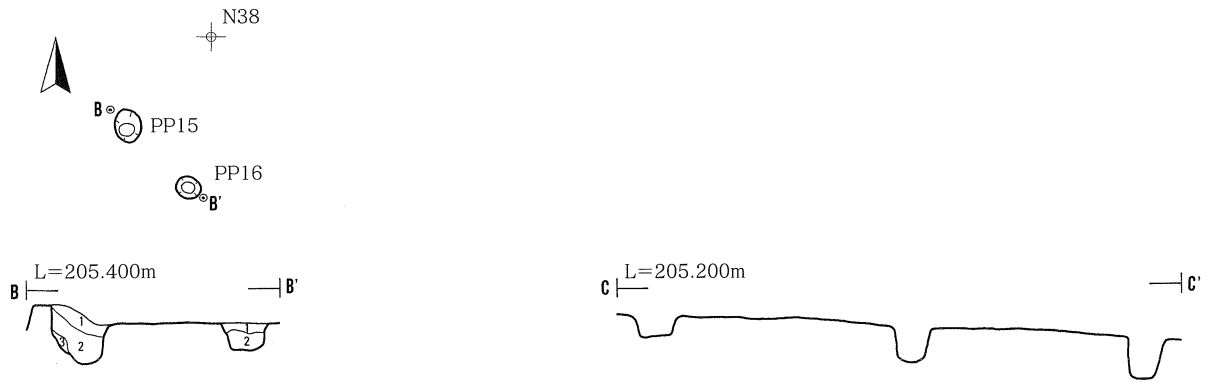
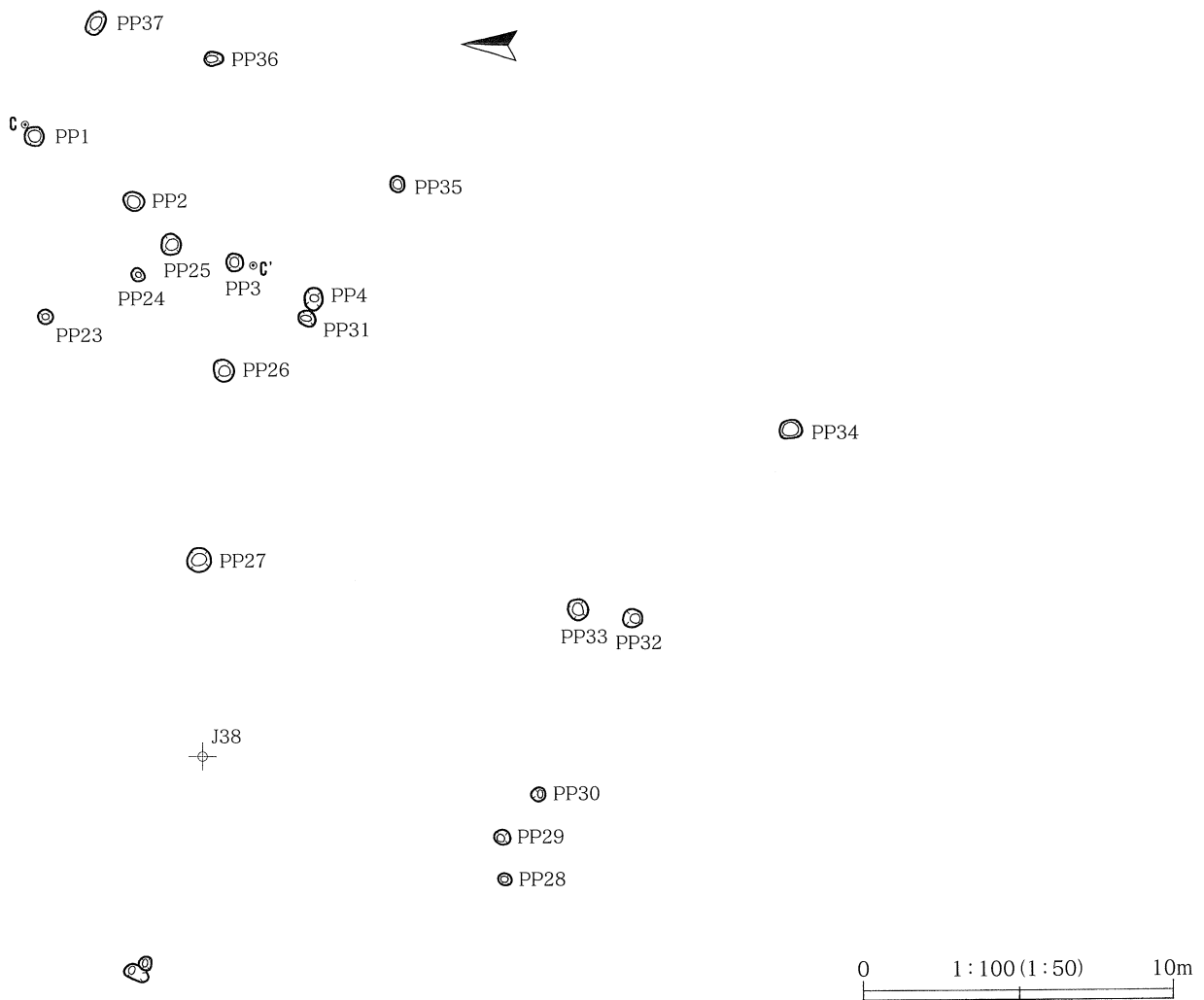
(濱田)



- (A-A')
- P5 1 10YR3/1黒褐色シルト To-aの極小ブロック含む。
 - P6 1 10YR2/1黒色シルト 黄褐色土粒含む。
 - 2 10YR2/2黒褐色粘土質シルト 黄褐色土ブロック含む。
 - 3 10YR2/1黒色シルト 柱痕。
 - P7 1 10YR2/2黒褐色シルト 黄褐色土ブロック含む。
 - 2 10YR3/2黒褐色粘土質シルト 黄褐色土の粘土粒を含む柱穴掘り方埋土。
 - 3 10YR2/1黒色シルト 柱痕。
 - P8 1 10YR2/3黒褐色シルト 黄褐色土ブロック含む。
 - 2 10YR2/2黒褐色粘土質シルト V層起源崩落土。
 - 3 10YR2/1黒色シルト 褐色土小ブロック含む。



第52図 柱穴 (1)

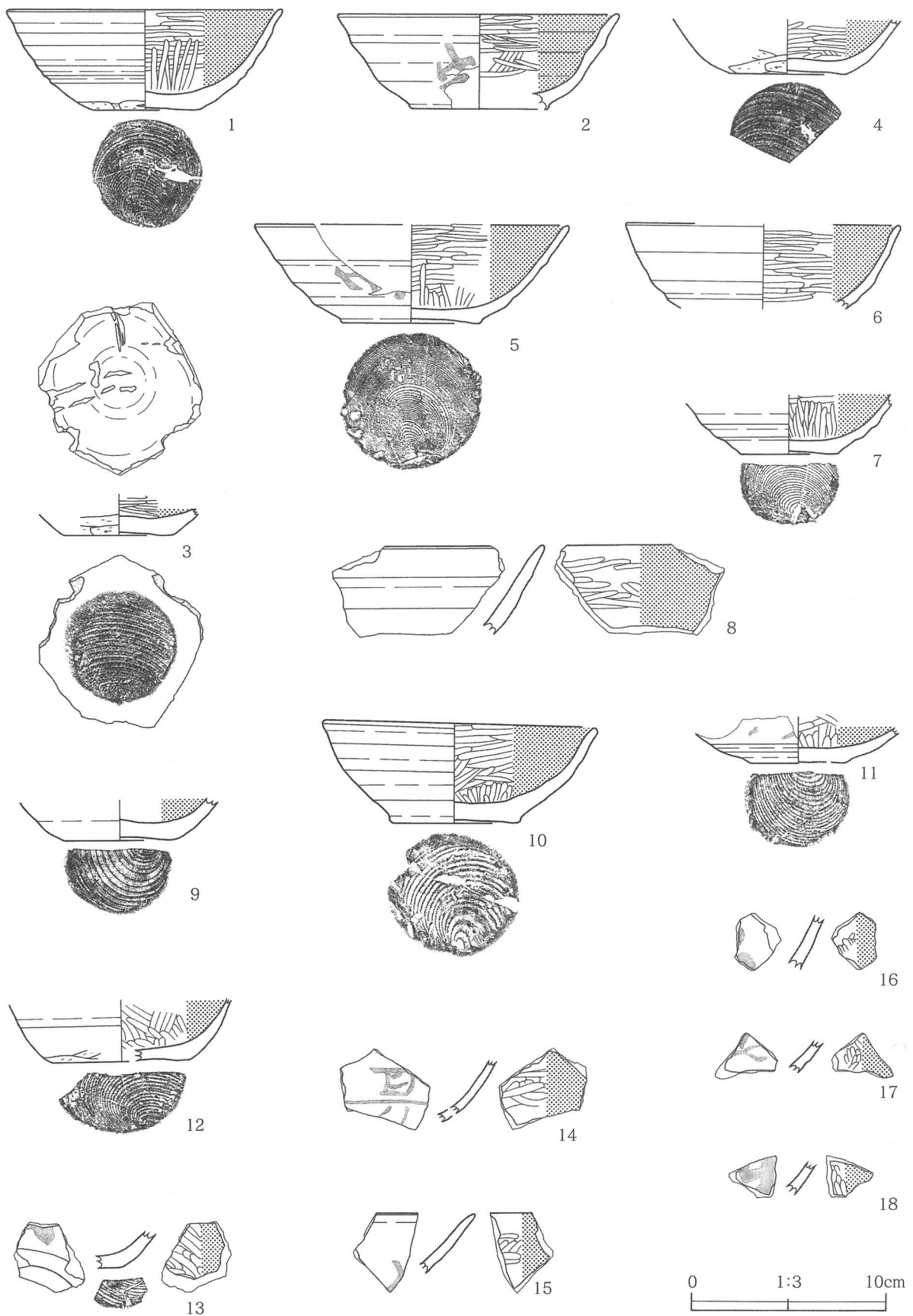


- (B-B')
- P15
- | | | |
|---|---------------|-------------------------|
| 1 | 10YR3/2黒褐色シルト | To-a小ブロック含む。 |
| 2 | 10YR2/2黒褐色シルト | To-aの小ブロックを含みフカフカやわらかい。 |
| 3 | 10YR2/2黒褐色シルト | To-aの細粒・褐色土ブロック含む。 |
- P16
- | | | |
|---|---------------|----------------|
| 1 | 10YR2/2黒褐色シルト | To-aの極小ブロック含む。 |
| 2 | 10YR2/3黒褐色シルト | 小礫含む。 |

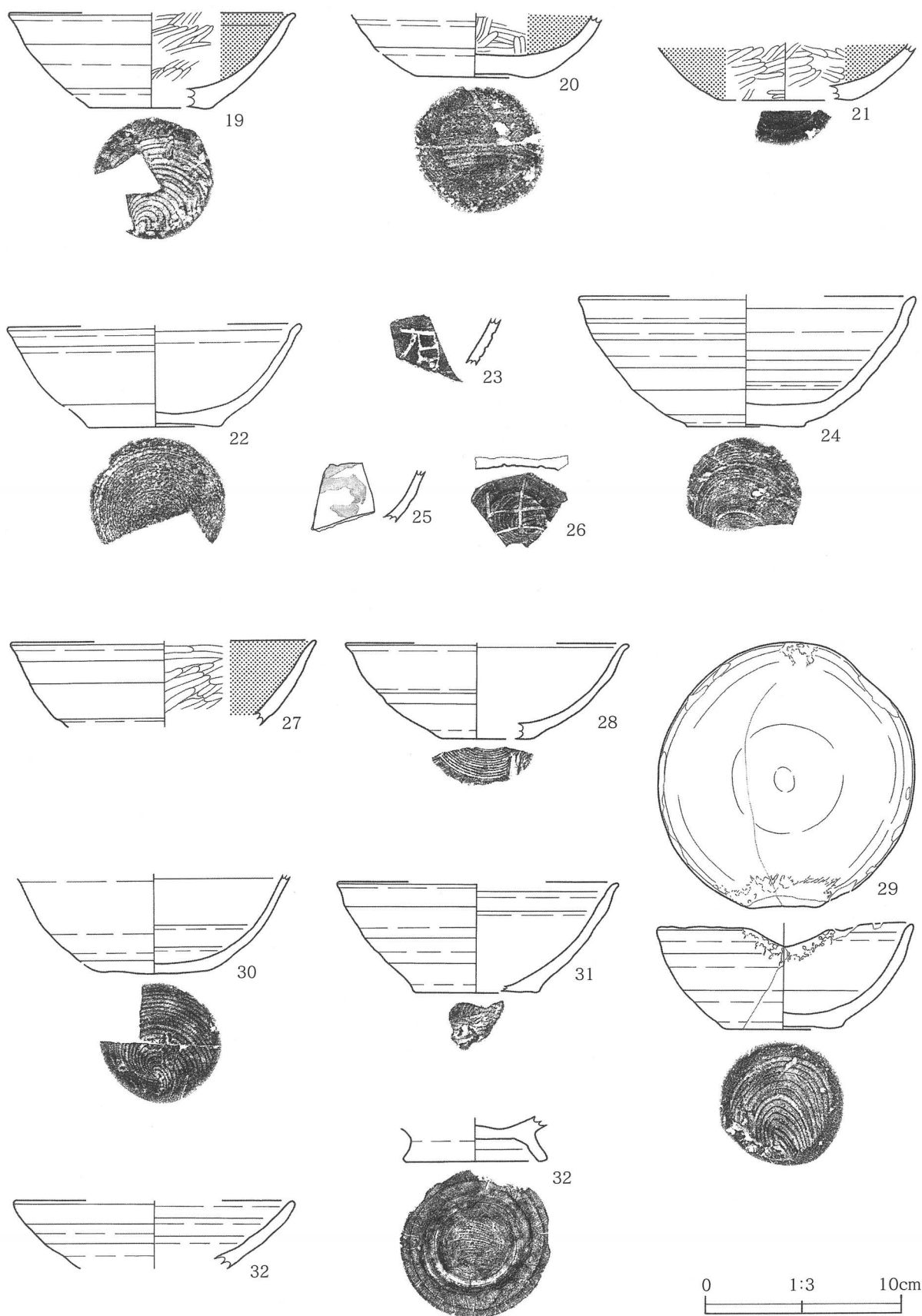
第53図 柱穴 (2)

表2 柱穴観察表

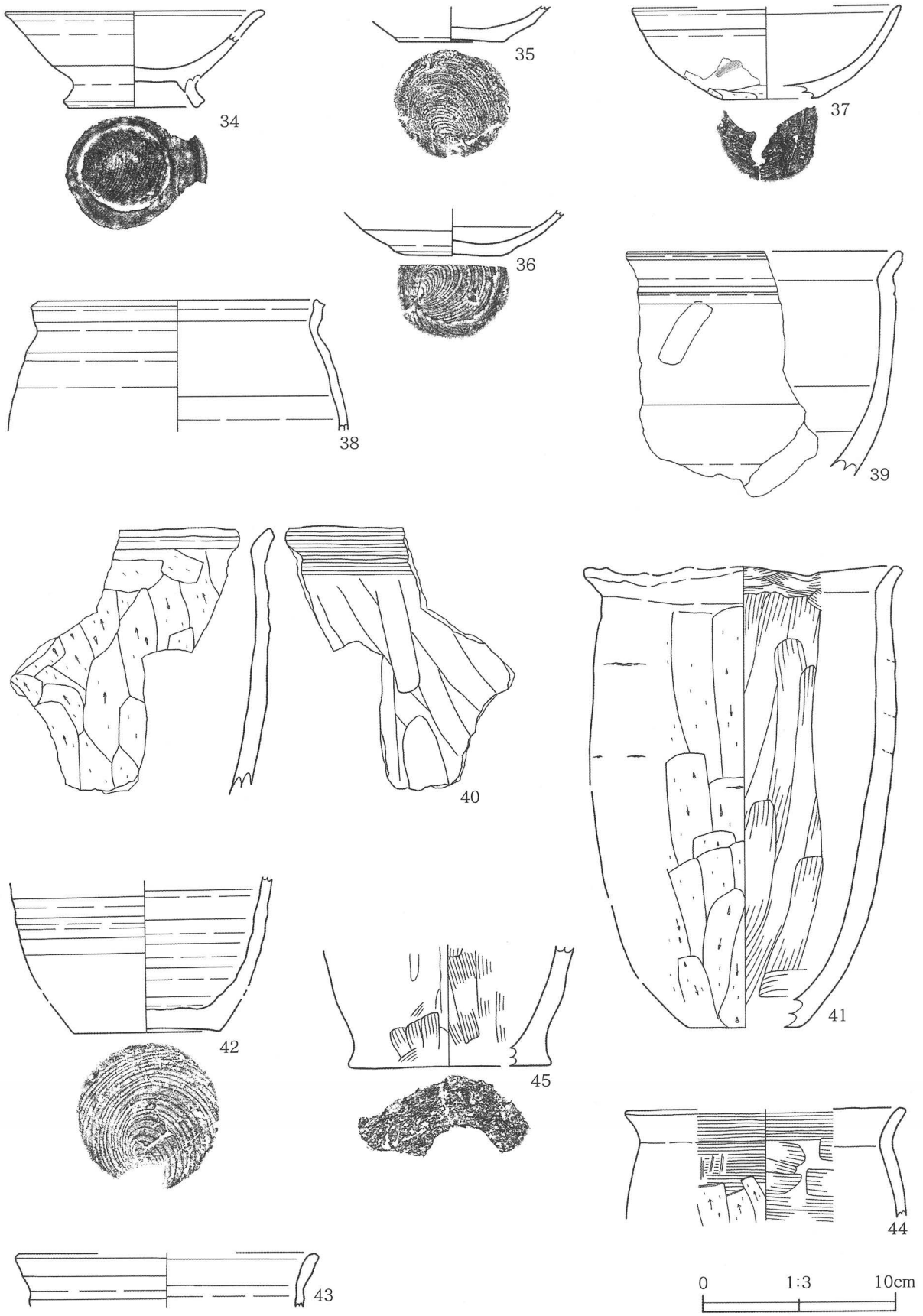
番号	規模(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)
P1	30×30	17.6	204.806
P2	32×31	28.9	204.585
P3	32×29	32.5	204.442
P4	39×31	36.3	204.333
P5	28×18	20.2	205.021
P6	42×40	50.6	204.712
P7	48×28	48.1	204.689
P8	48×46	49.4	204.620
P9	18×17	15.2	205.088
P10	21×18	19.0	205.010
P11	44×42	12.7	205.060
P12	42×30	15.2	205.040
P13	38×31	27.3	204.923
P14	42×38	13.4	205.022
P15	52×39	46.0	204.655
P16	41×34	15.8	204.972
P17	37×31	11.6	205.044
P18	40×33	12.2	205.006
P19	44×29	26.6	204.829
P20	20×20	19.8	204.850
P21	39×26	12.4	204.820
P22	66×50	39.6	204.667
P23	23×22	31.7	204.527
P24	23×21	13.5	204.693
P25	36×34	27.7	204.555
P26	36×34	28.6	204.423
P27	39×38	16.9	204.437
P28	20×20	21.3	204.138
P29	26×21	31.6	204.084
P30	23×21	17.9	204.220
P31	27×24	34.9	204.345
P32	31×31	22.6	204.320
P33	38×32	11.5	204.405
P34	37×29	34.1	204.186
P35	25×20	9.0	204.618
P36	30×25	19.3	204.774
P37	40×30	37.8	204.657
P38	42×26	21.6	204.287
P39	25×22	14.8	204.359
P40	32×28	39.0	205.146
P41	21×17	12.1	205.020



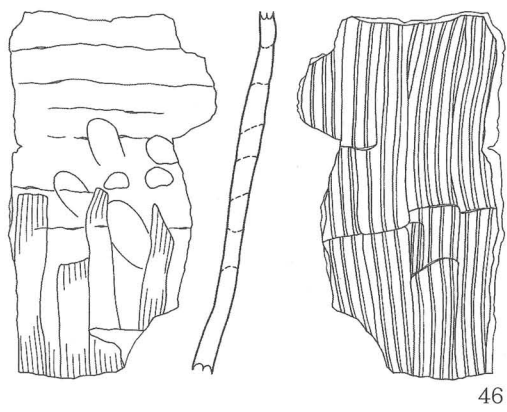
第54図 遺構内出土遺物 (1)



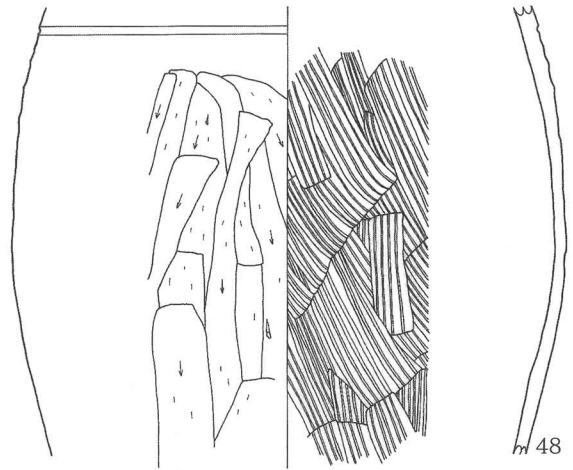
第55図 遺構内出土遺物 (2)



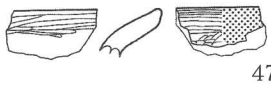
第56図 遺構内出土遺物 (3)



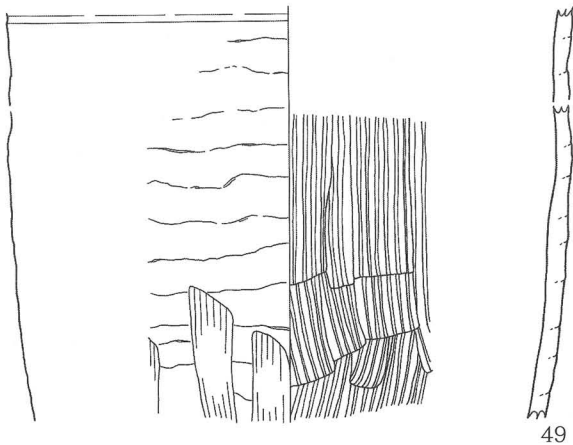
46



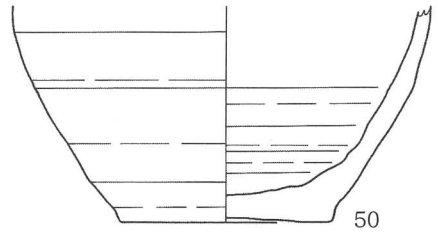
48



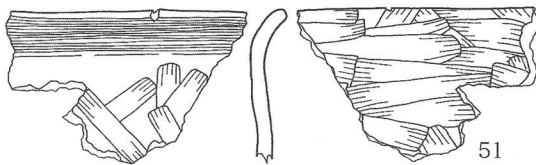
47



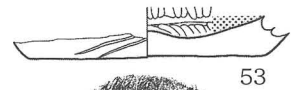
49



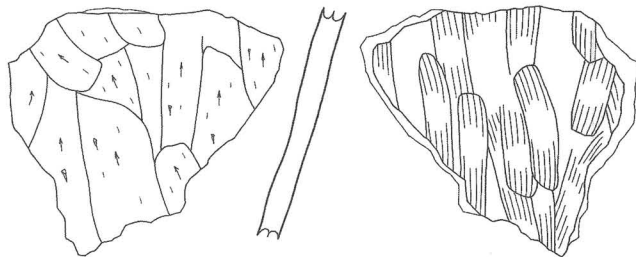
50



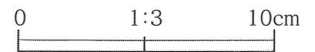
51



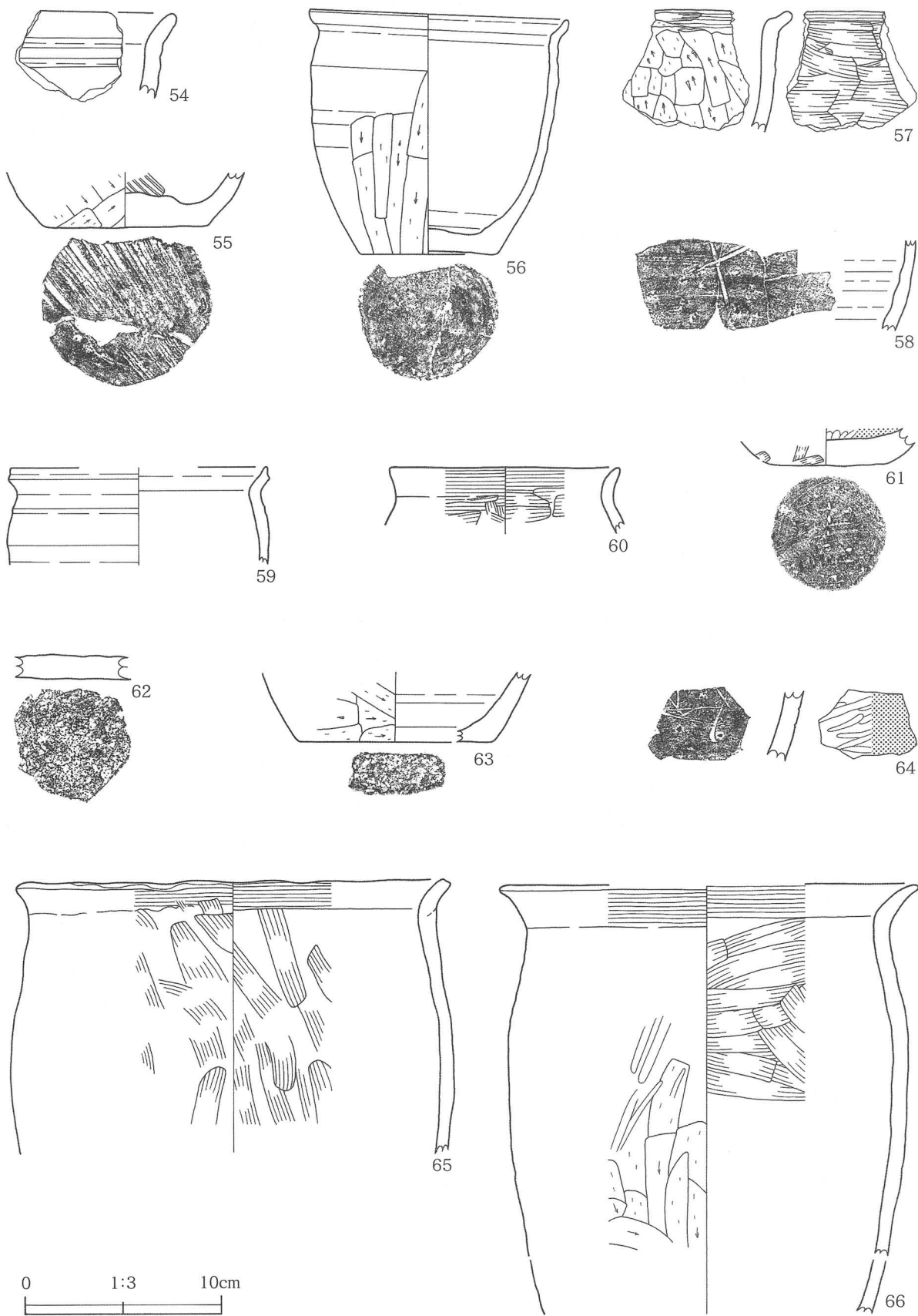
53



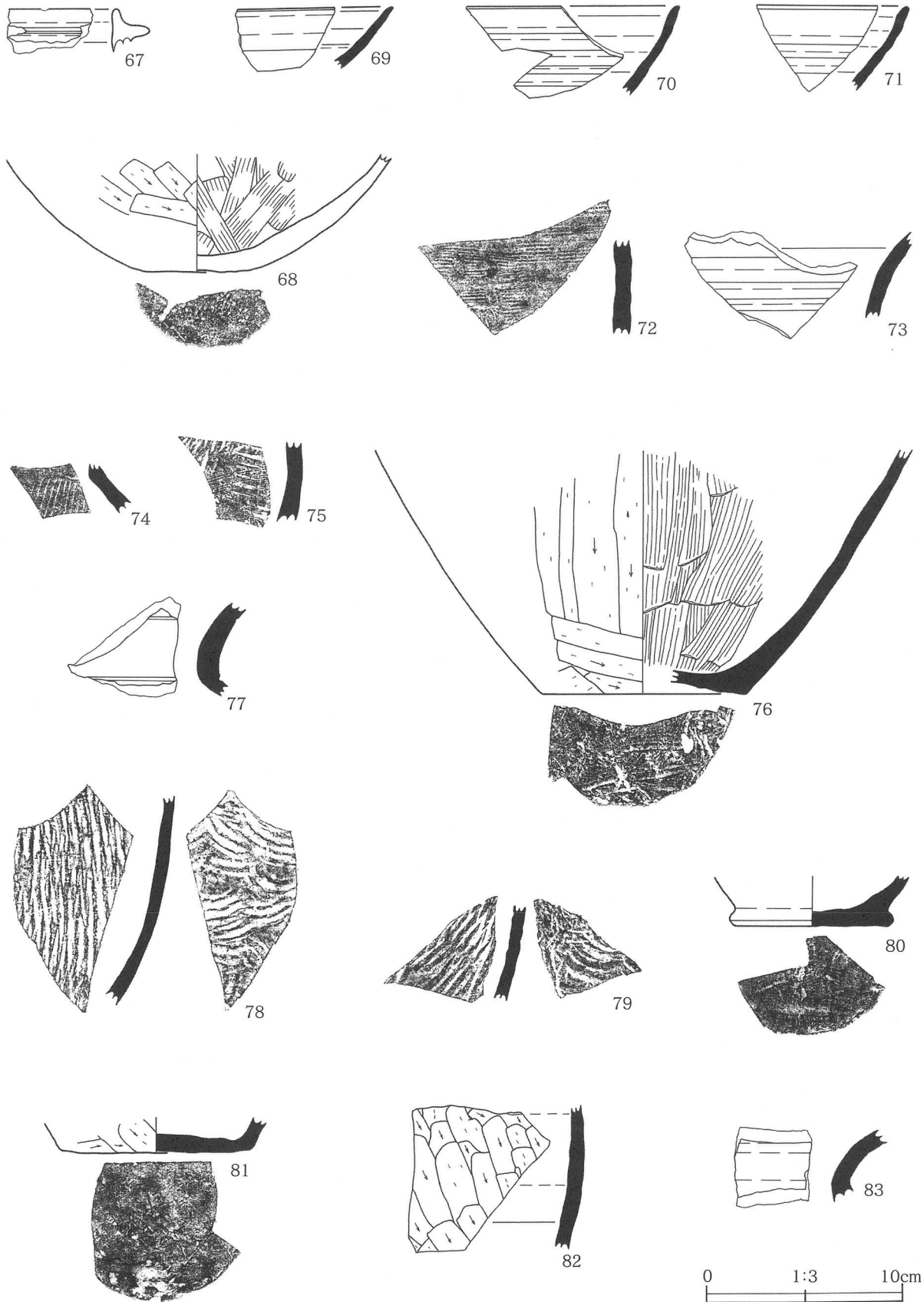
52



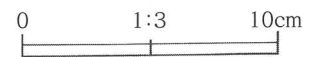
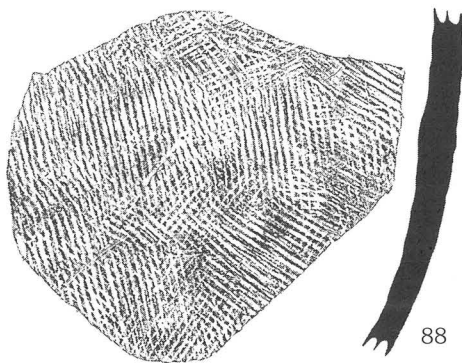
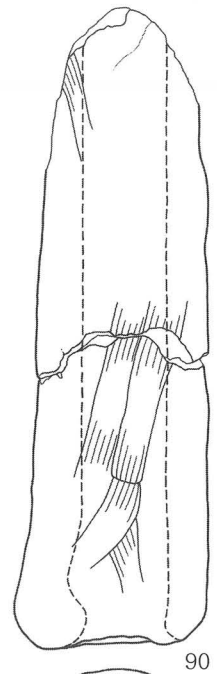
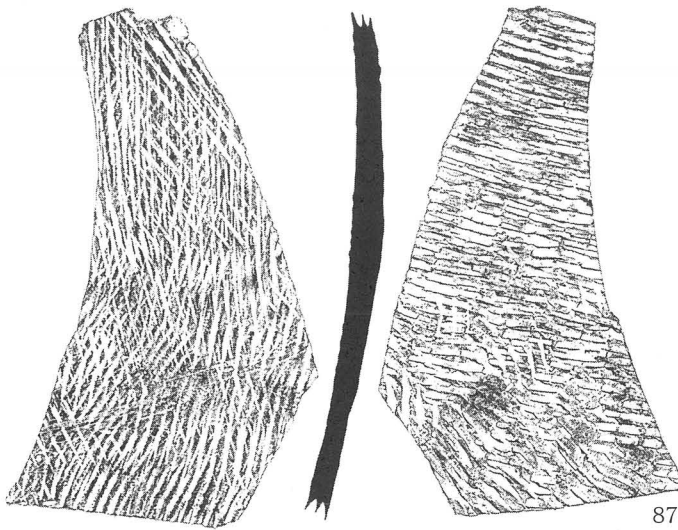
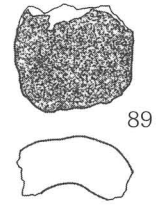
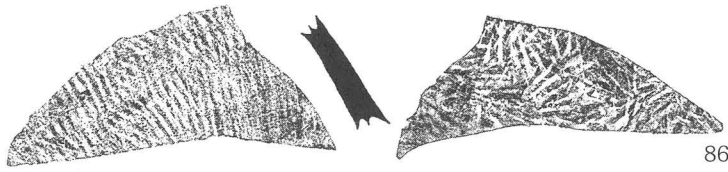
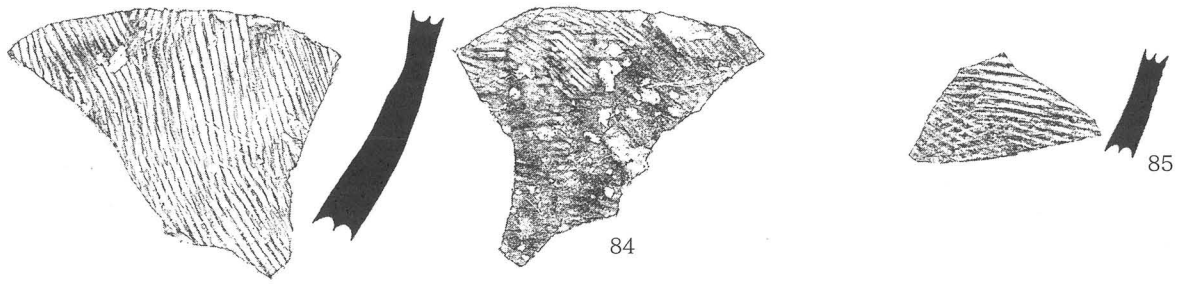
第57図 遺構内出土遺物 (4)



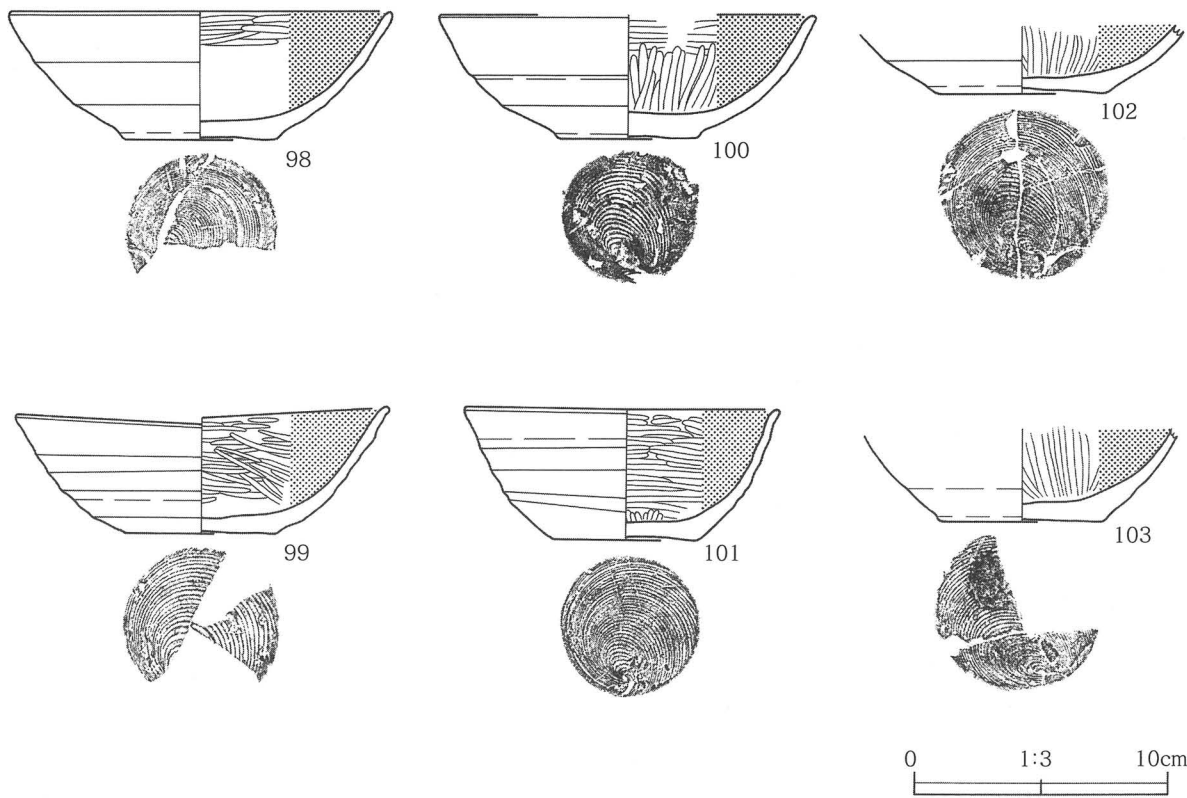
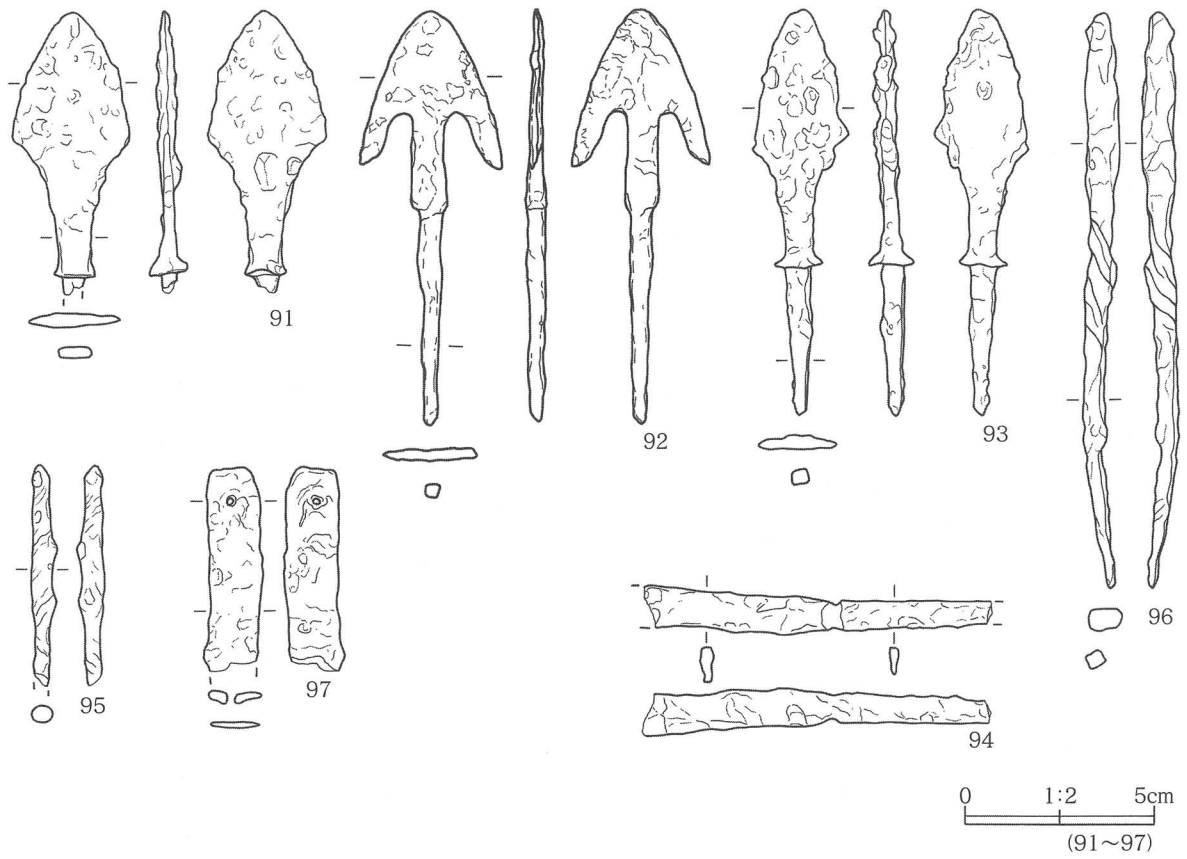
第58図 遺構内出土遺物 (5)



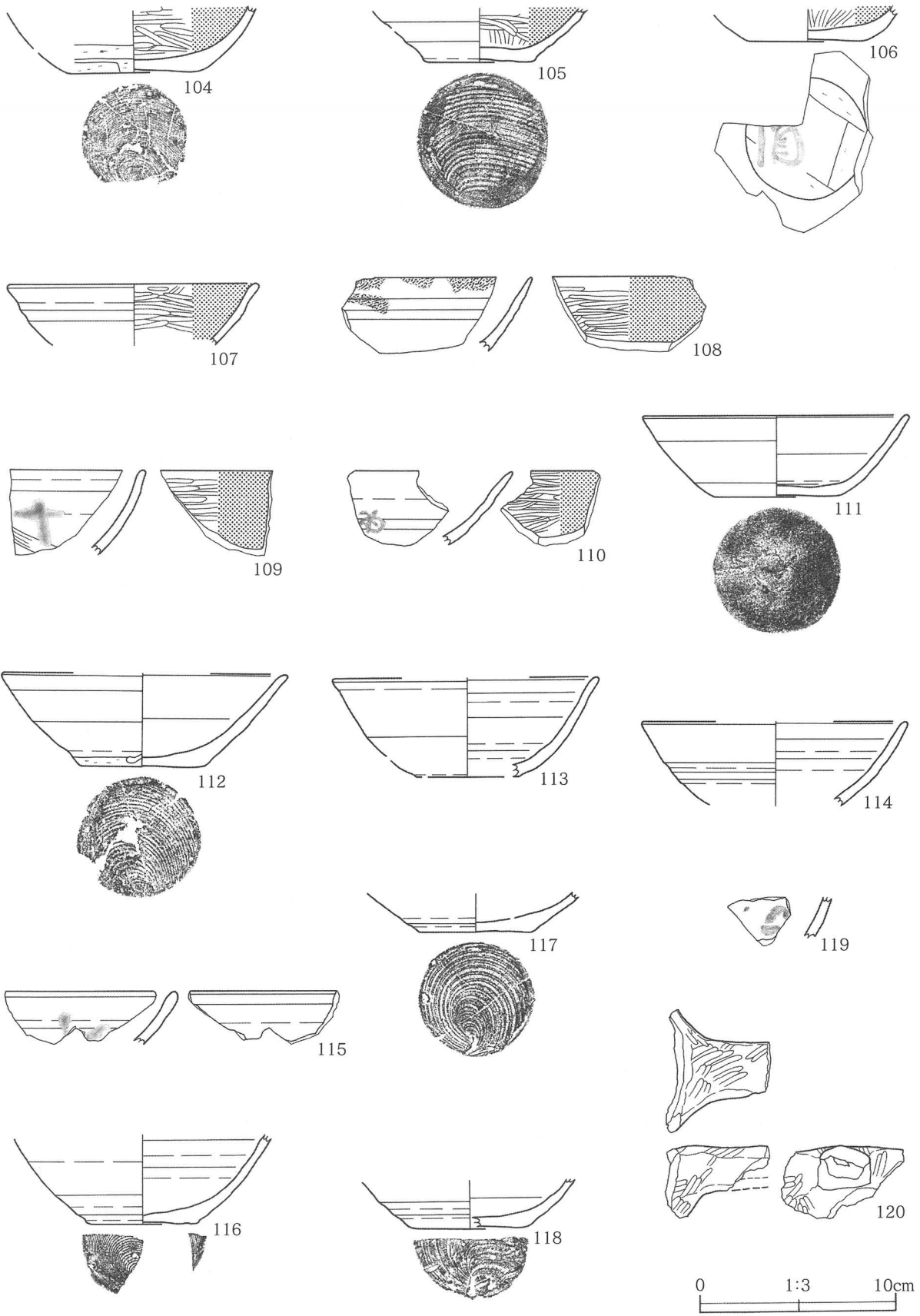
第59図 遺構内出土遺物 (6)



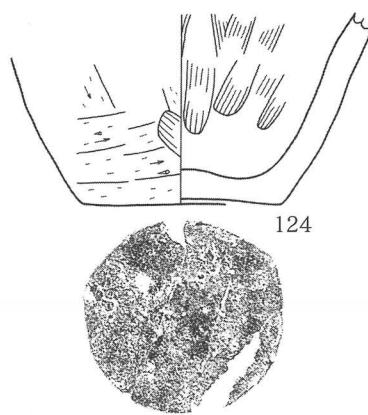
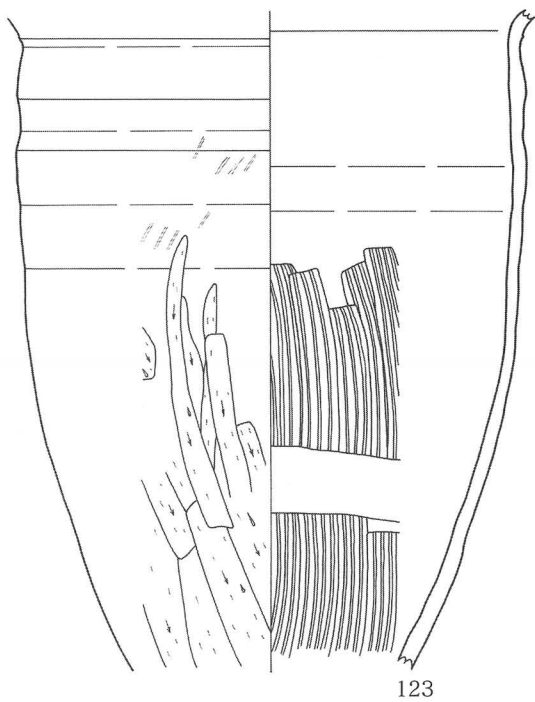
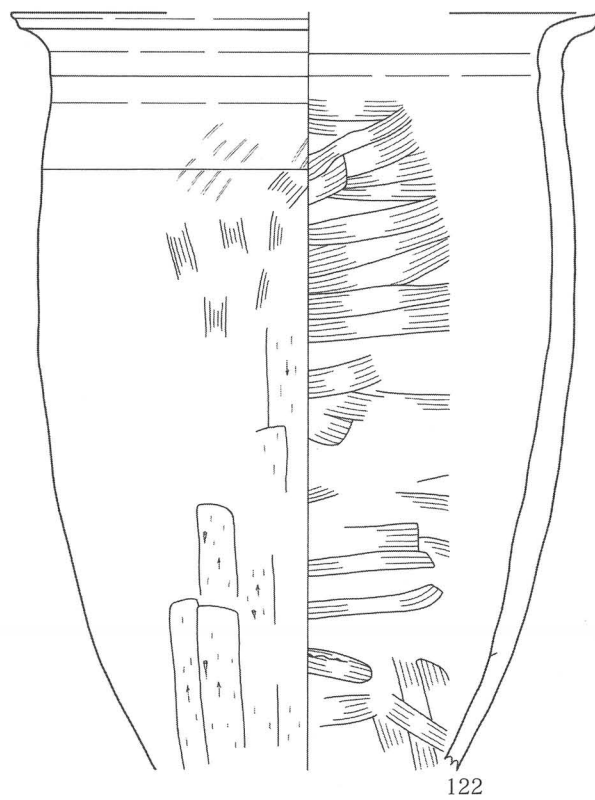
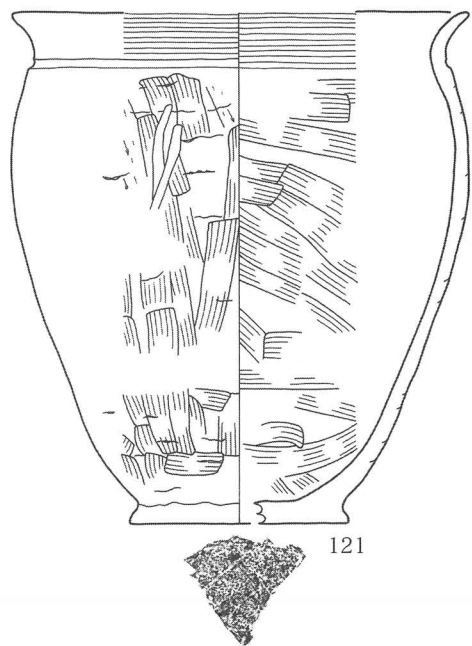
第60図 遺構内出土遺物 (7)



第61図 遺構内出土遺物 (8)

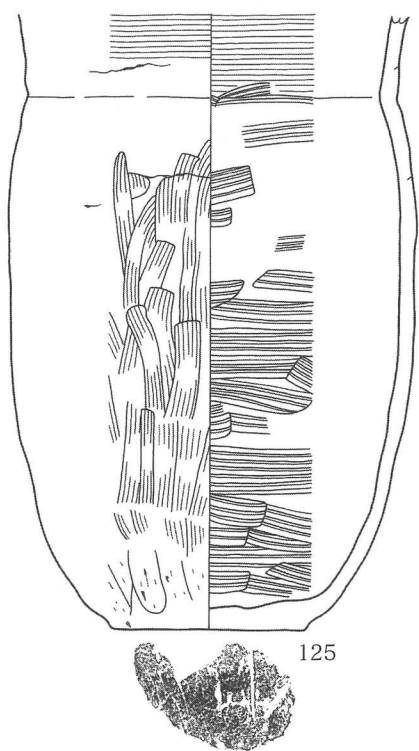


第62図 遺構内出土遺物 (9)

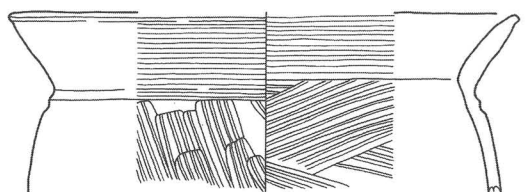


0 1:3 10cm

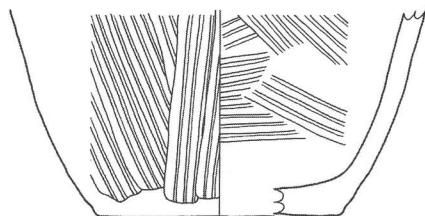
第63図 遺構内出土遺物 (10)



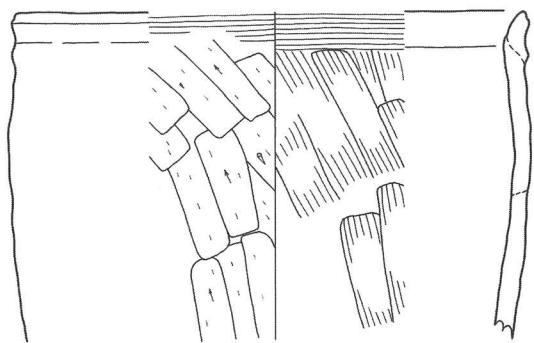
125



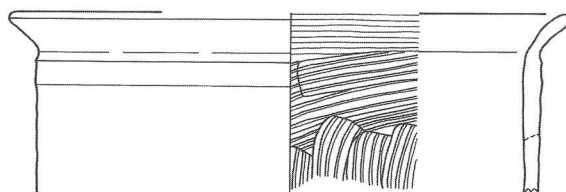
126a



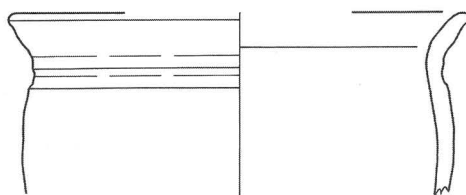
126b



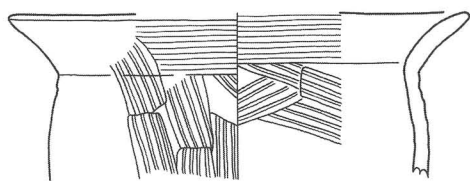
127



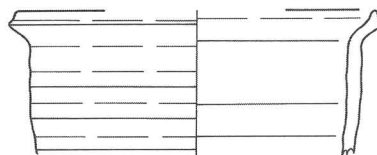
128



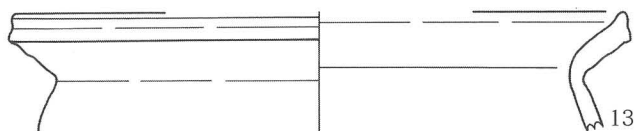
130



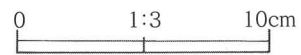
129



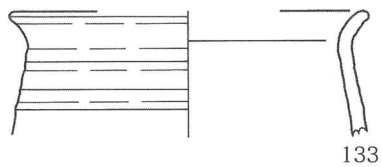
132



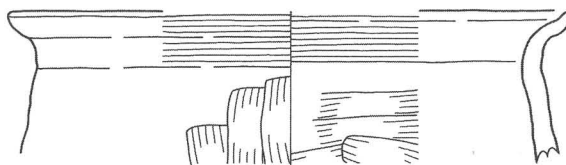
131



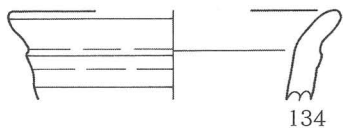
第64図 遺構内出土遺物 (11)



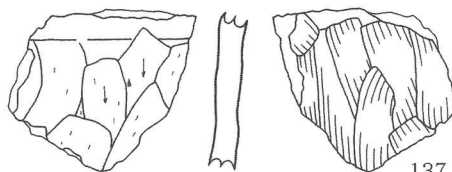
133



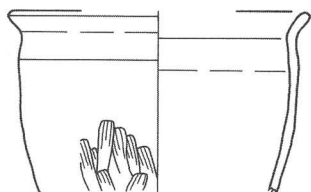
135



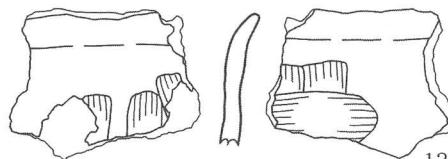
134



137



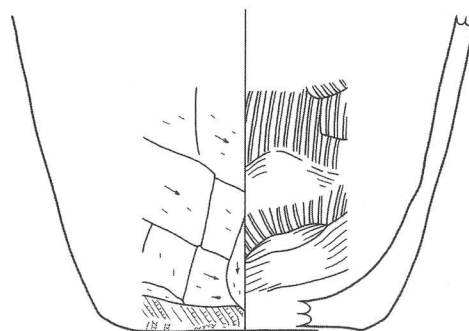
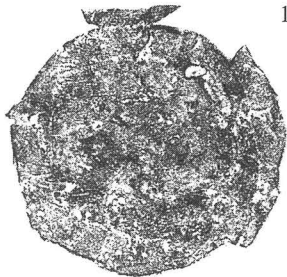
136



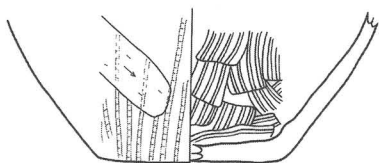
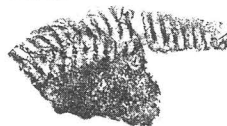
138



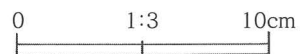
139



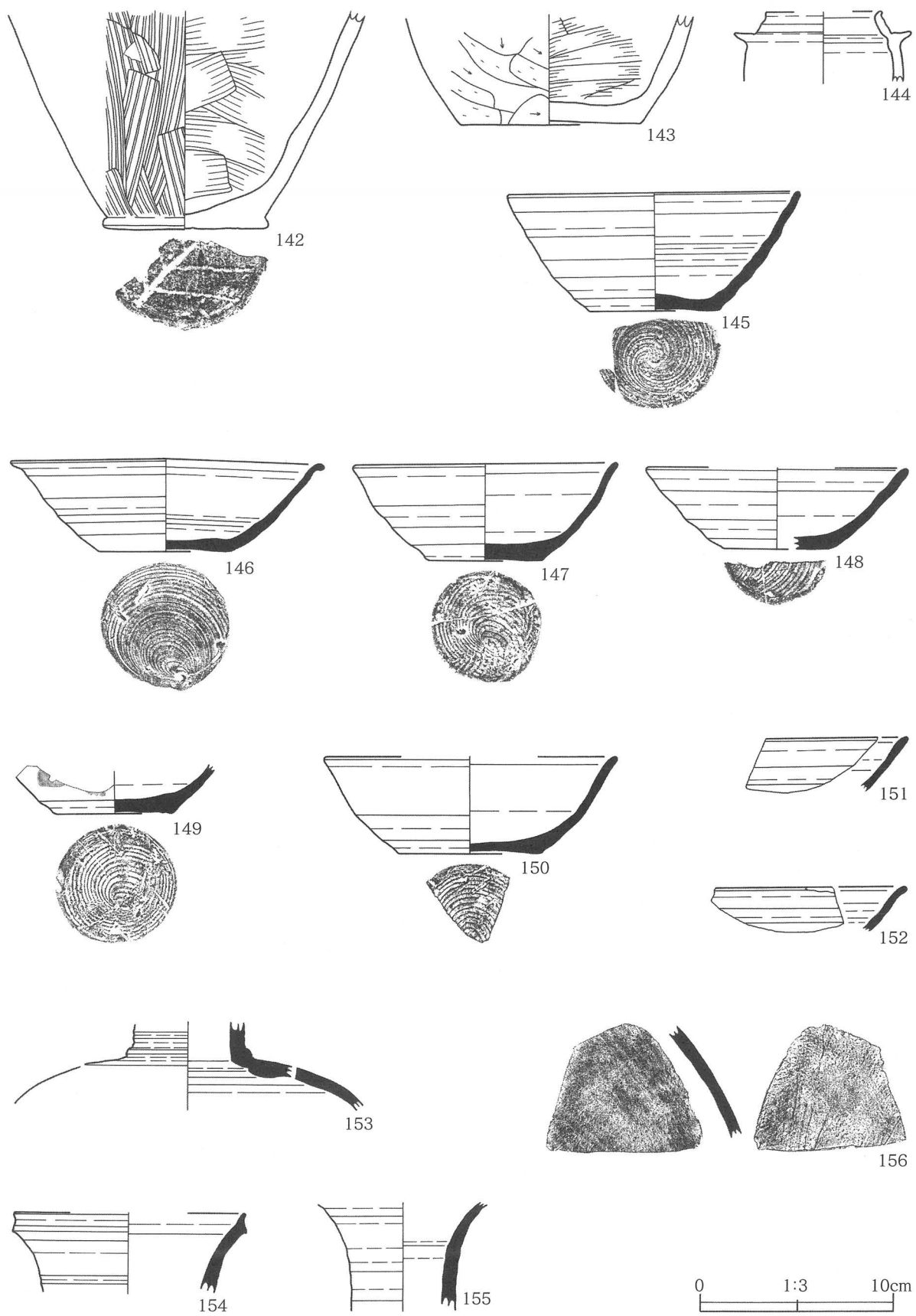
140



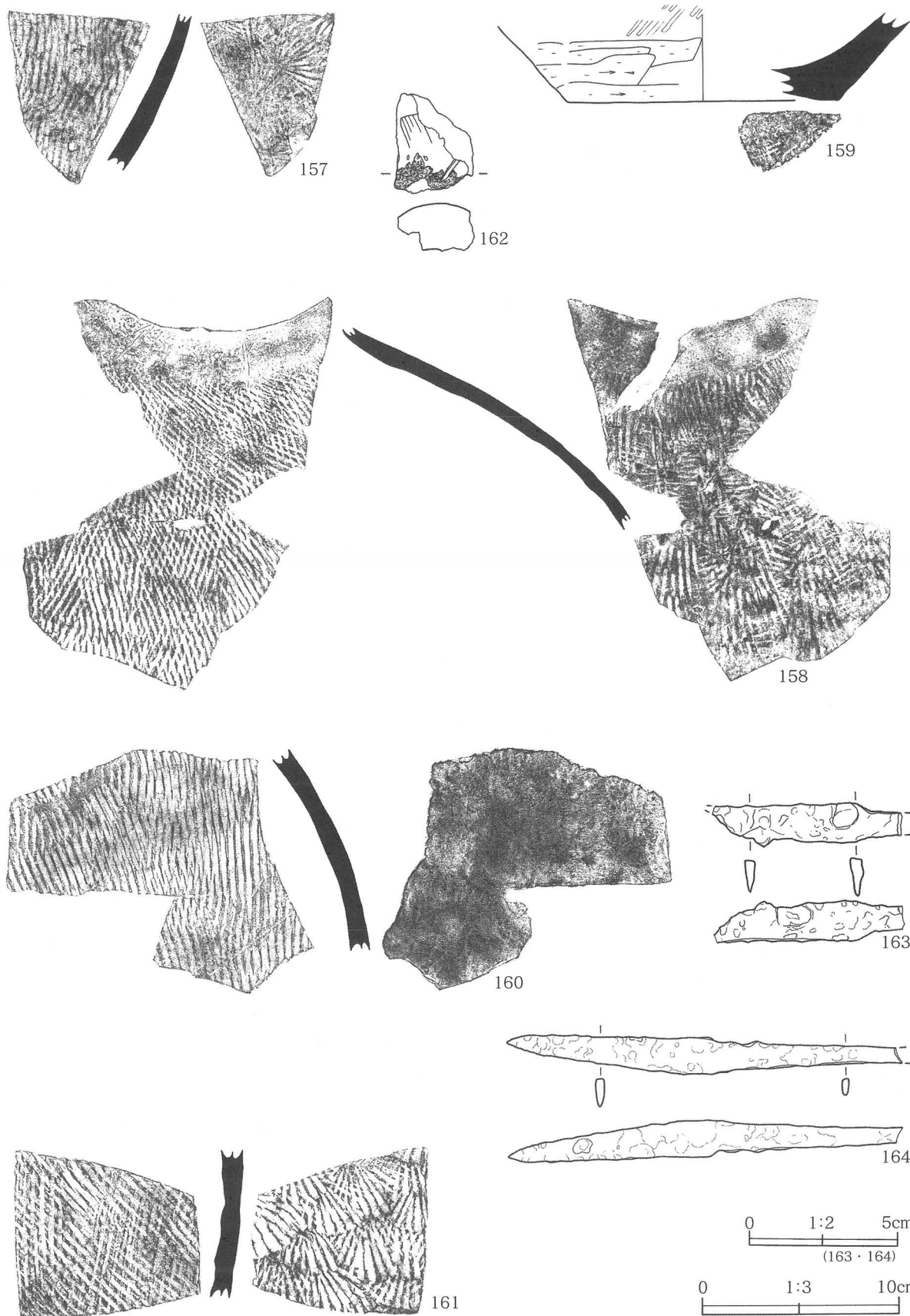
141



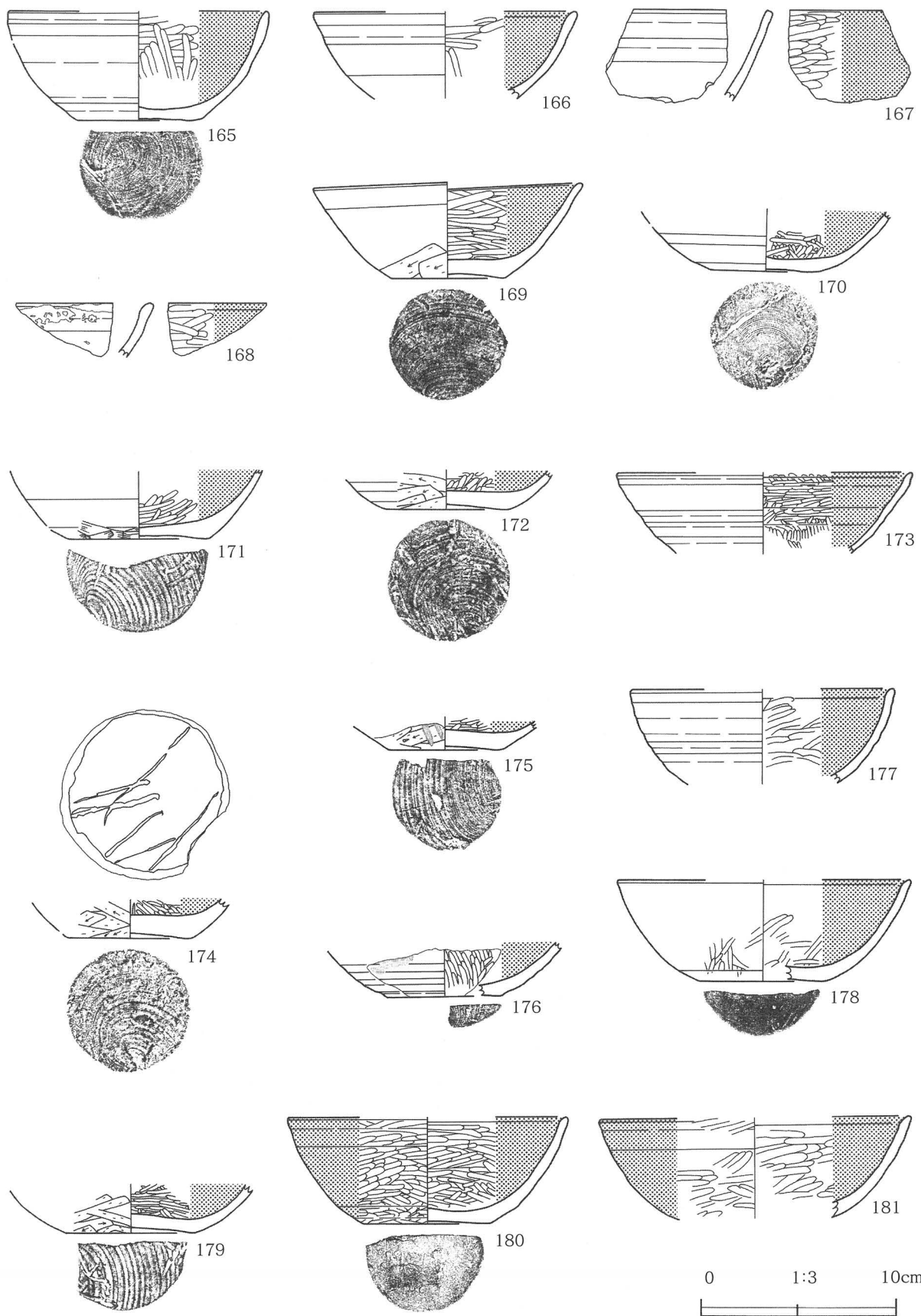
第65図 遺構内出土遺物 (12)



第66図 遺構内出土遺物 (13)

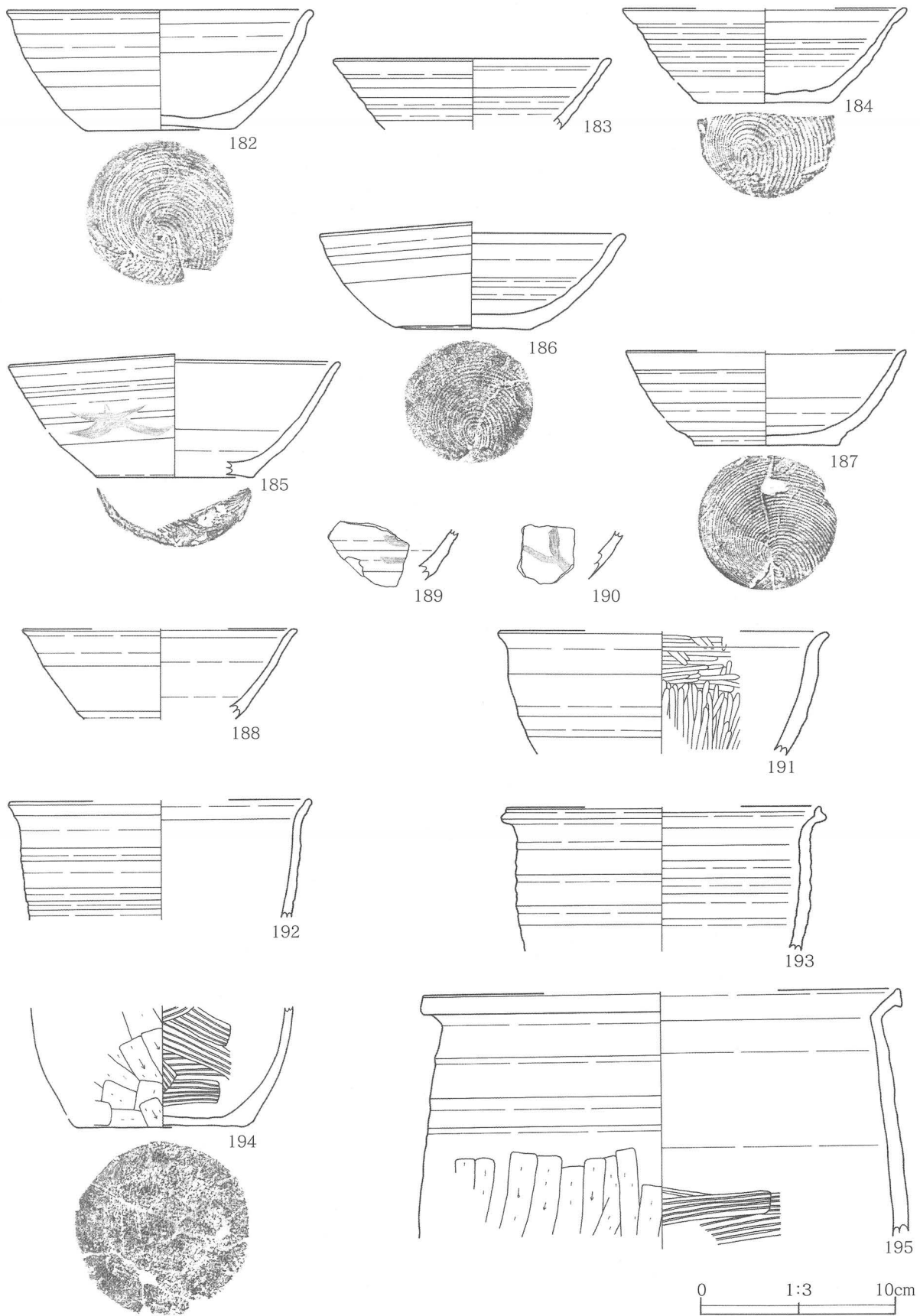


第67図 遺構内出土遺物 (14)

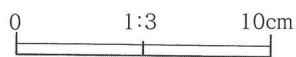
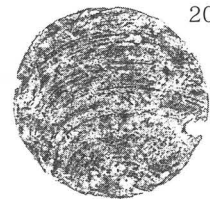
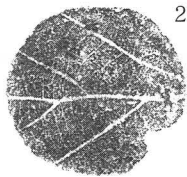
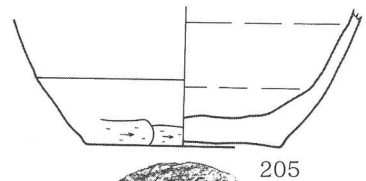
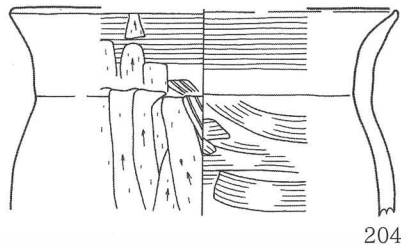
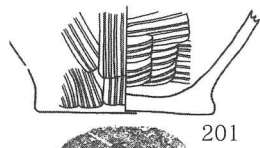
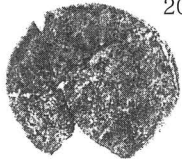
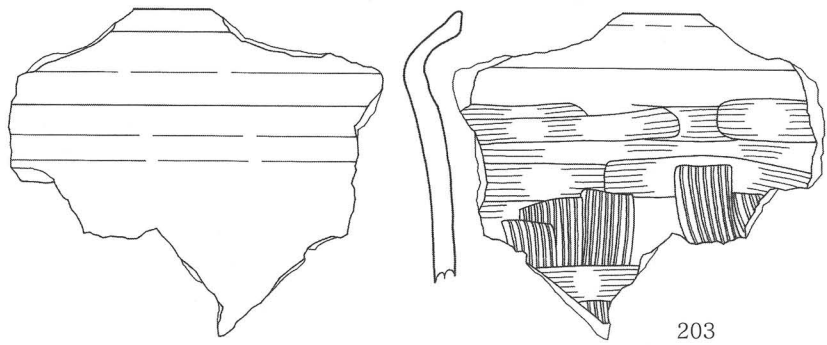
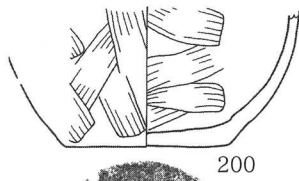
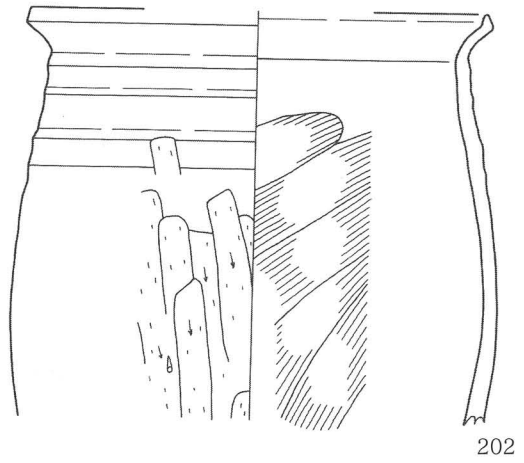
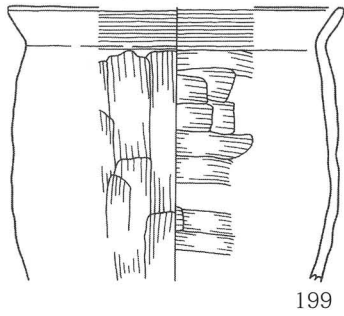
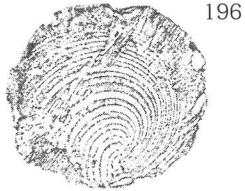
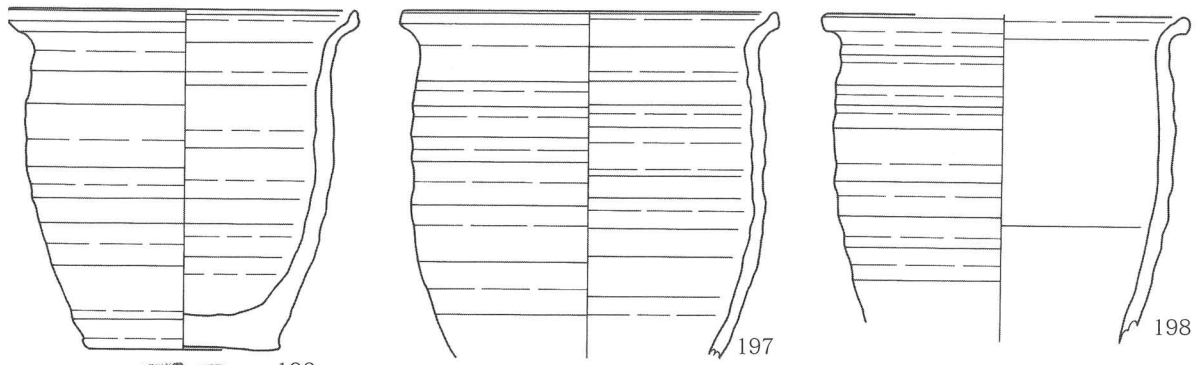


0 1:3 10cm

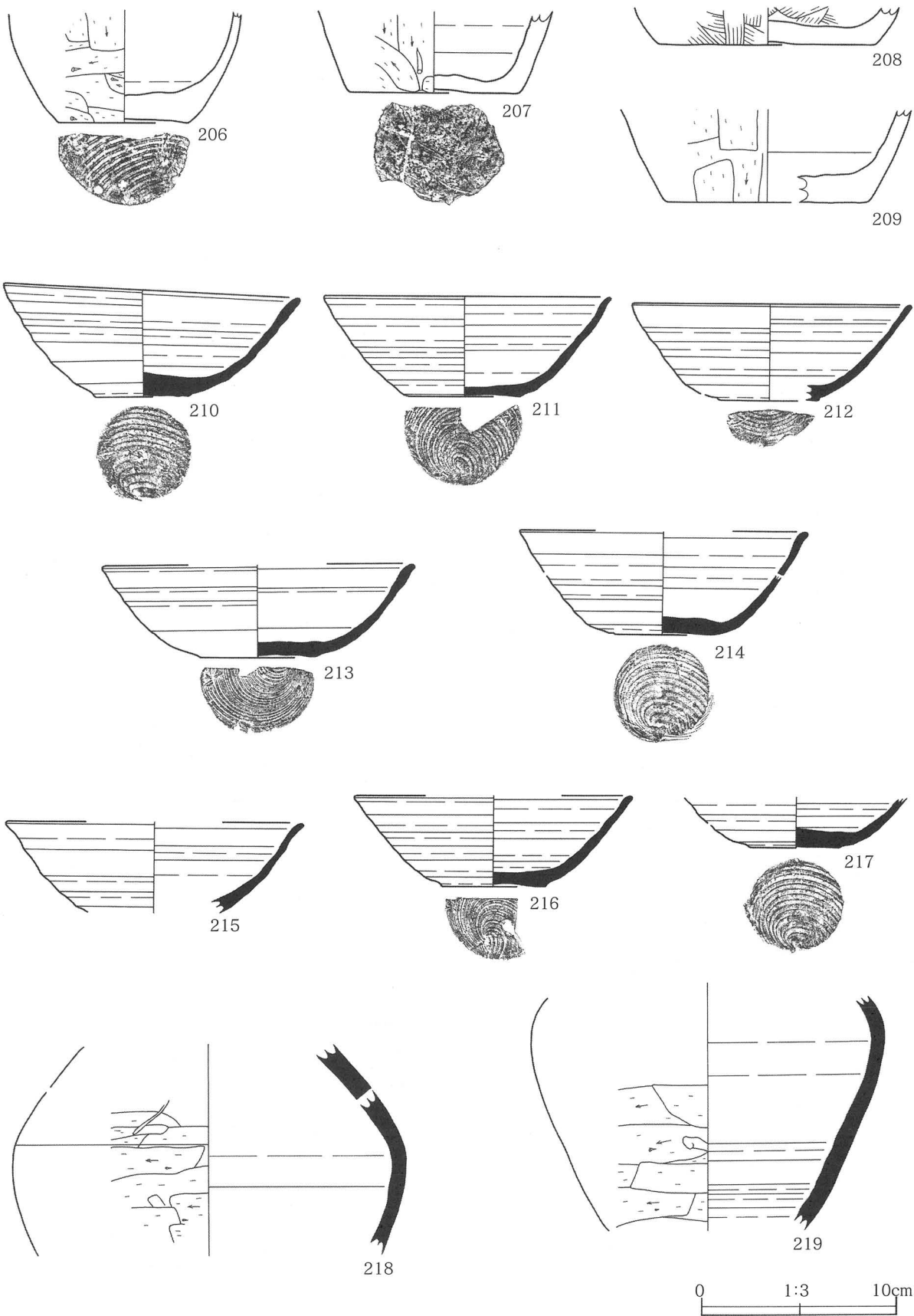
第68図 遺構内出土遺物 (15)



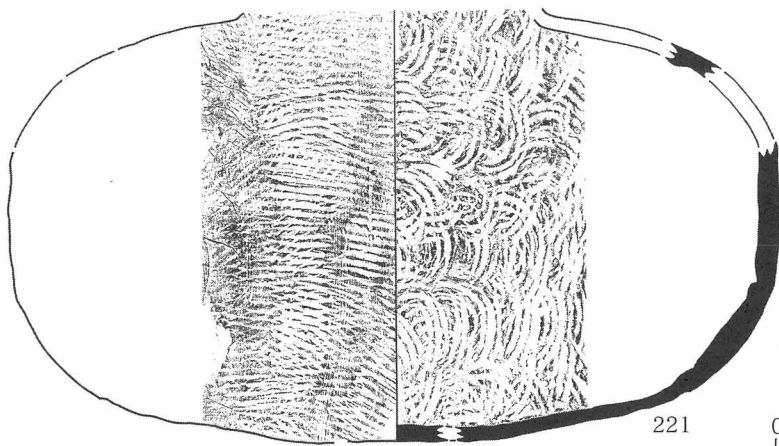
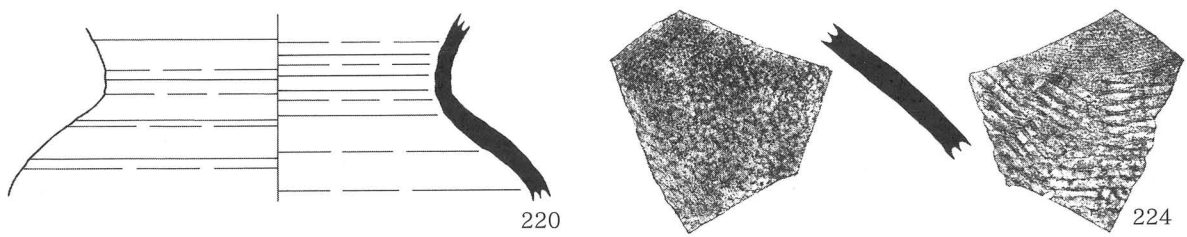
第69図 遺構内出土遺物 (16)



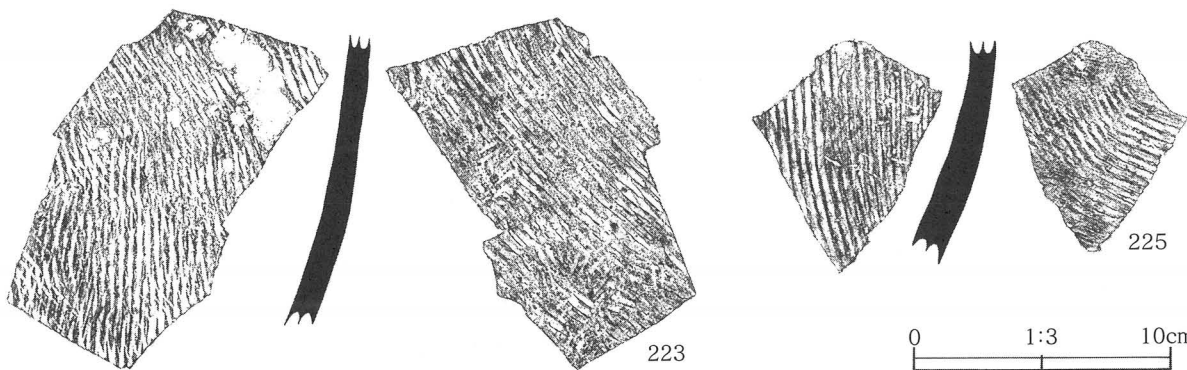
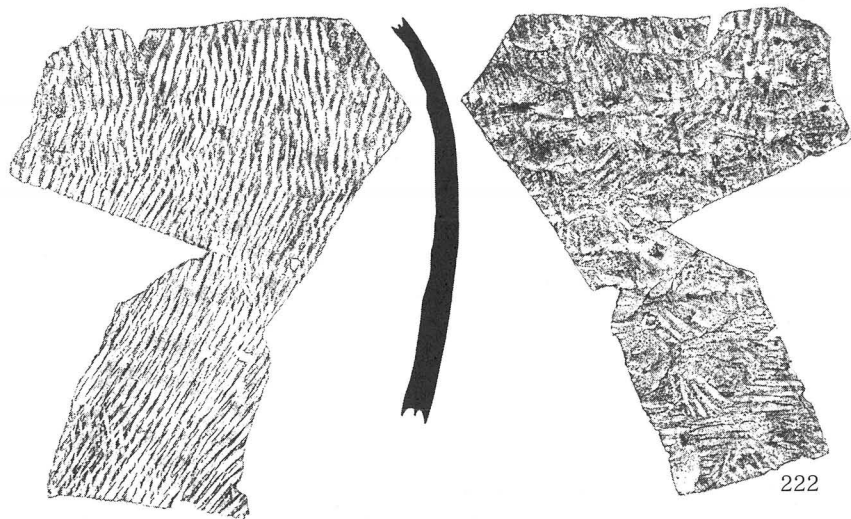
第70図 遺構内出土遺物 (17)



第71図 遺構内出土遺物 (18)

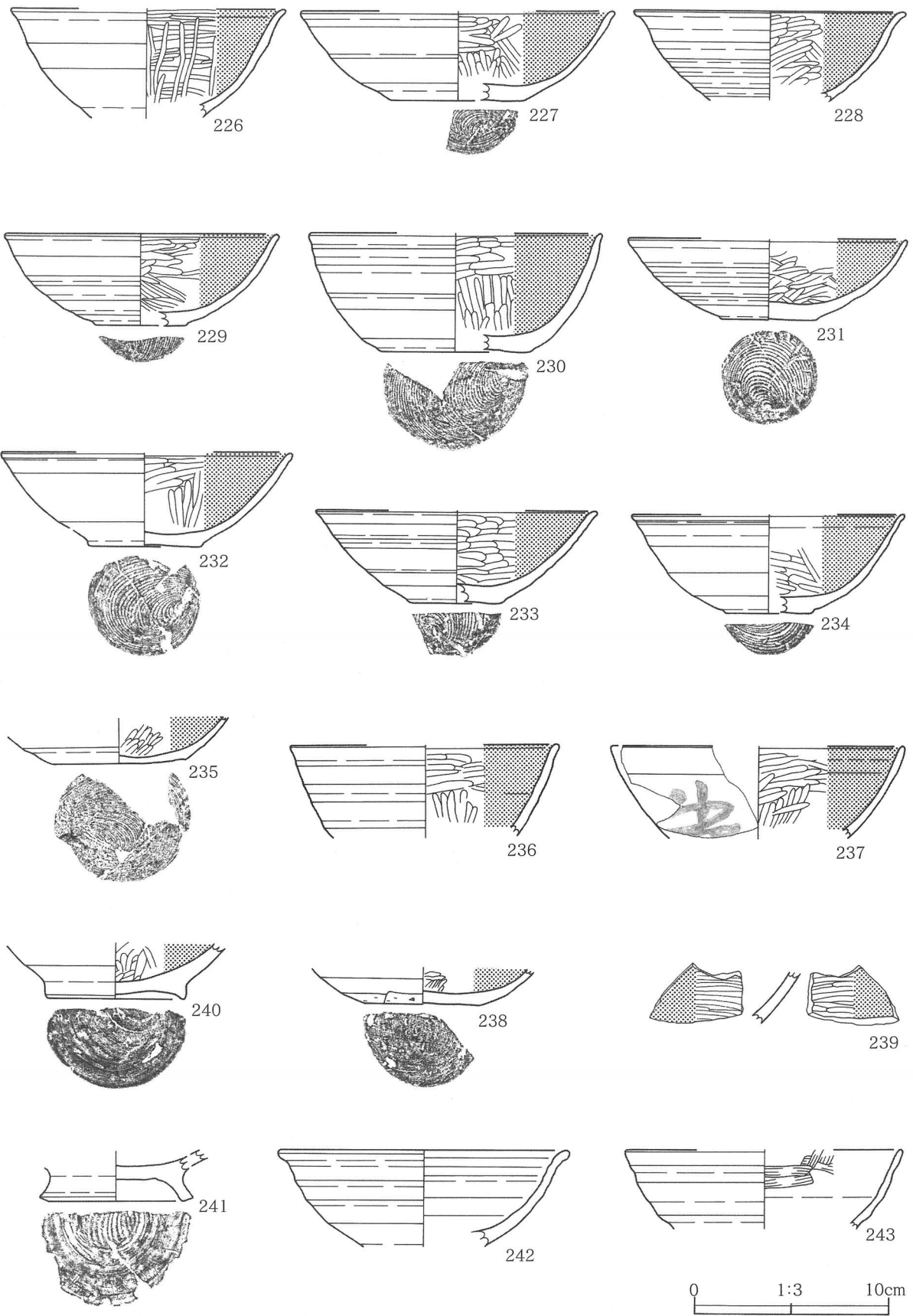


0 1:4 10cm
(221)

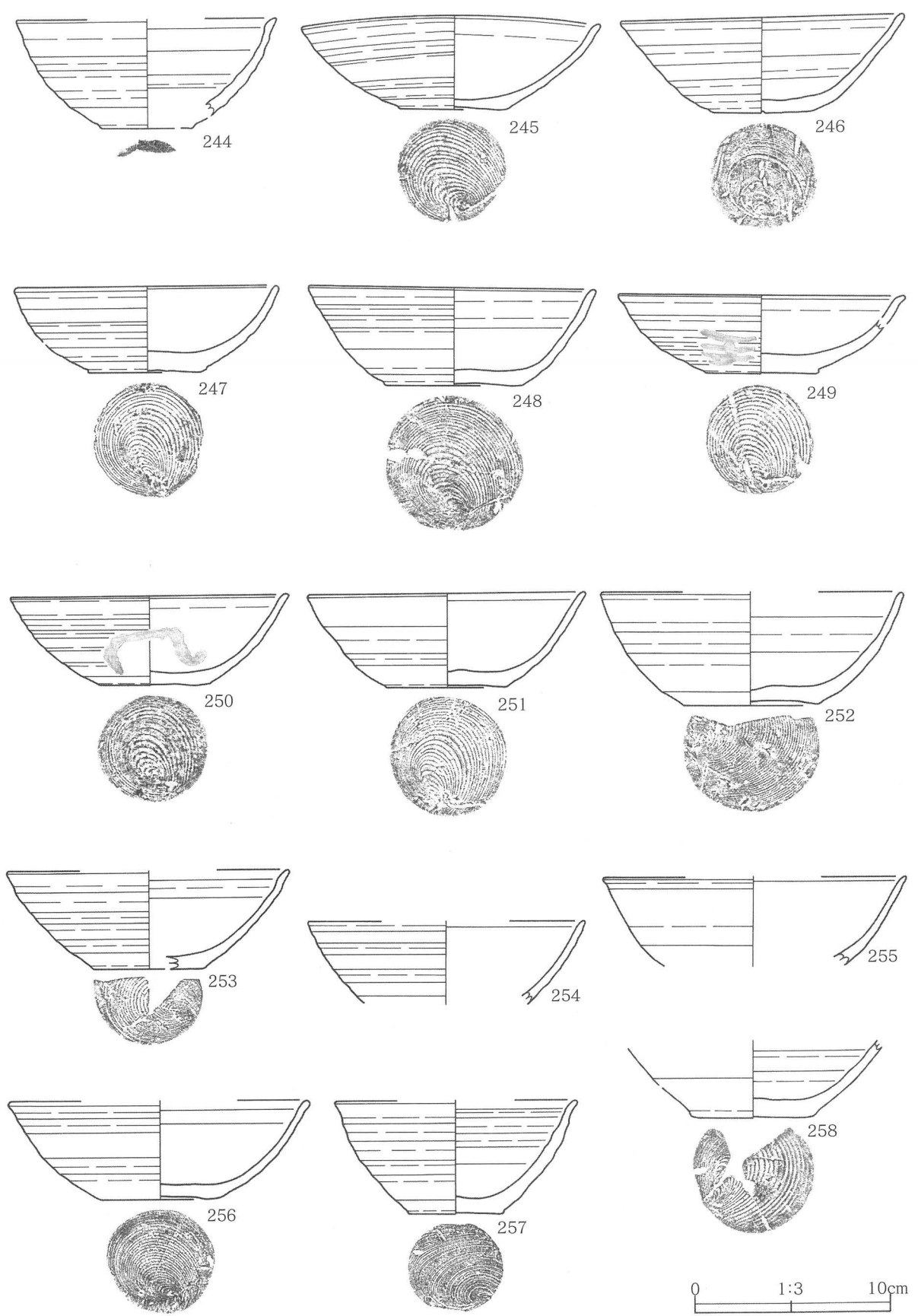


0 1:3 10cm

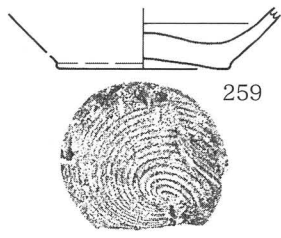
第72図 遺構内出土遺物 (19)



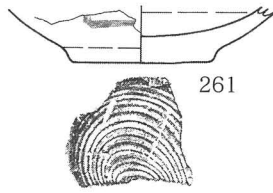
第73図 遺構内出土遺物 (20)



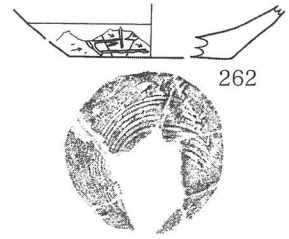
第74図 遺構内出土遺物 (21)



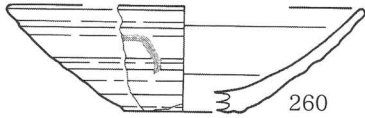
259



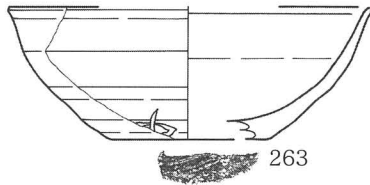
261



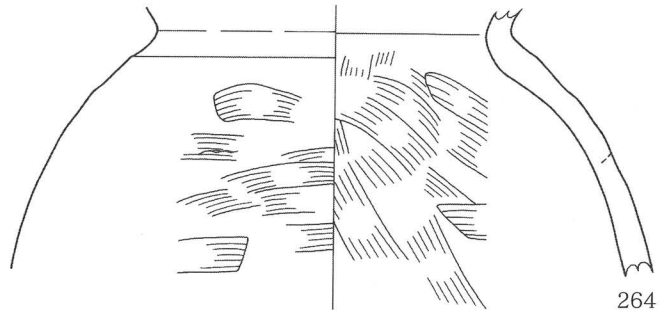
262



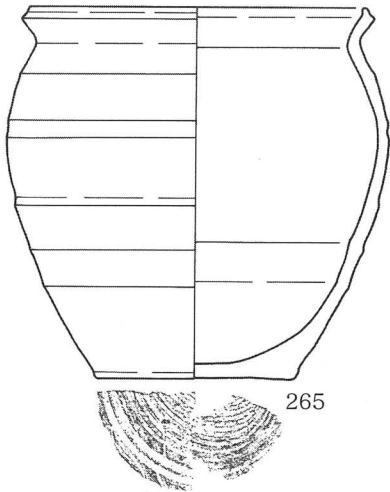
260



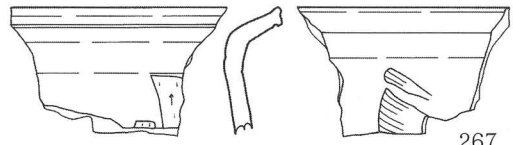
263



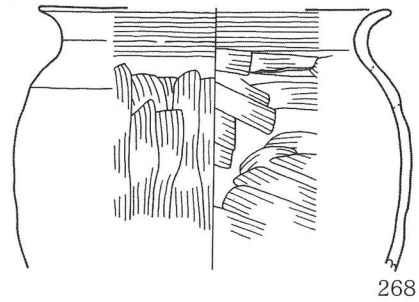
264



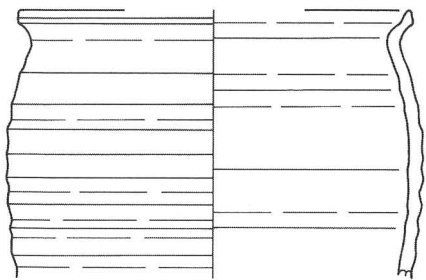
265



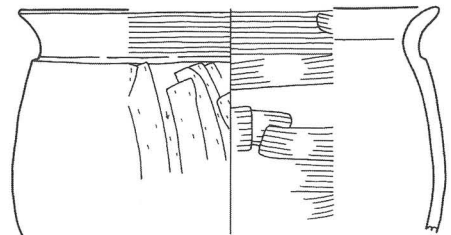
267



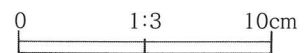
268



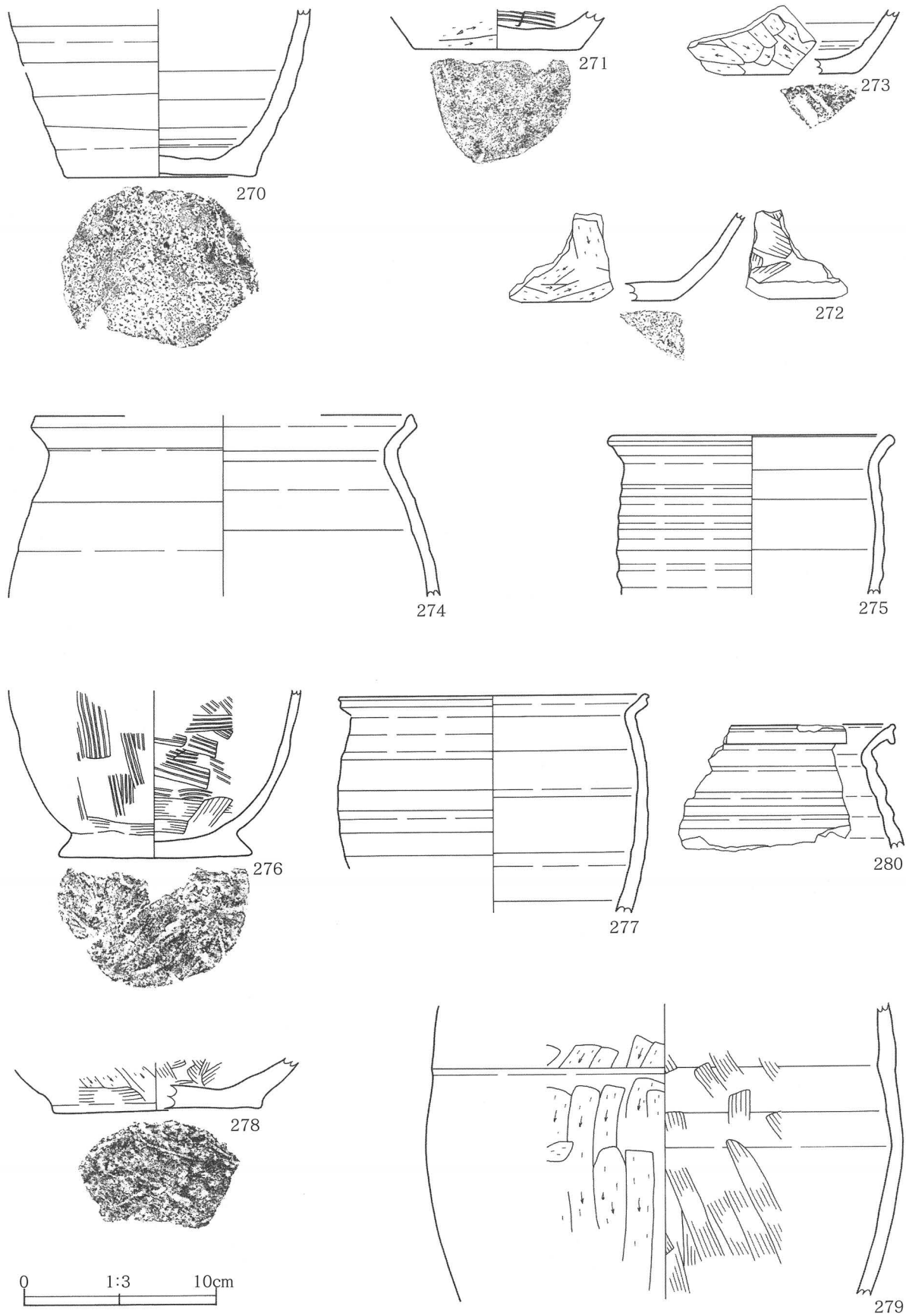
266



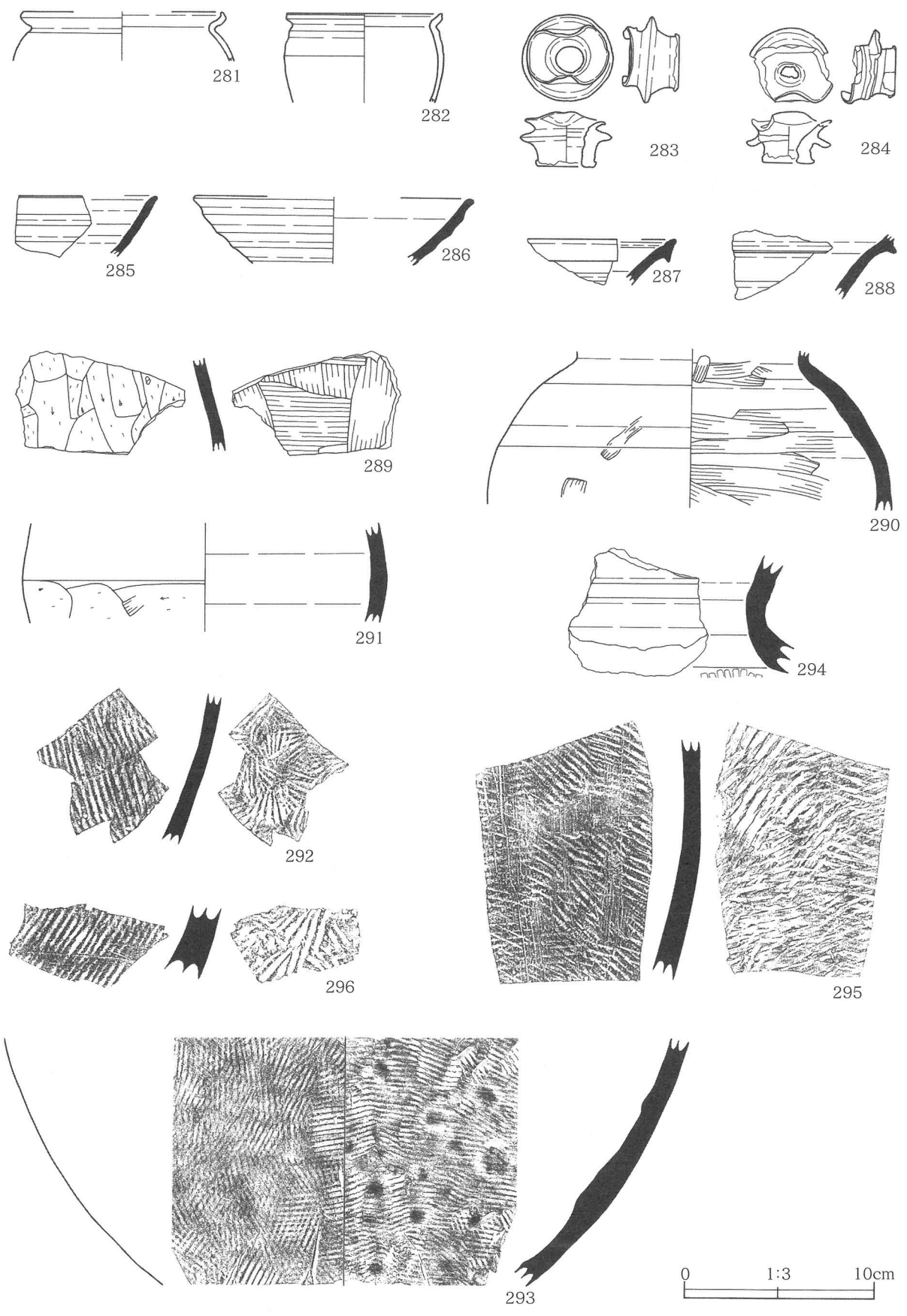
269



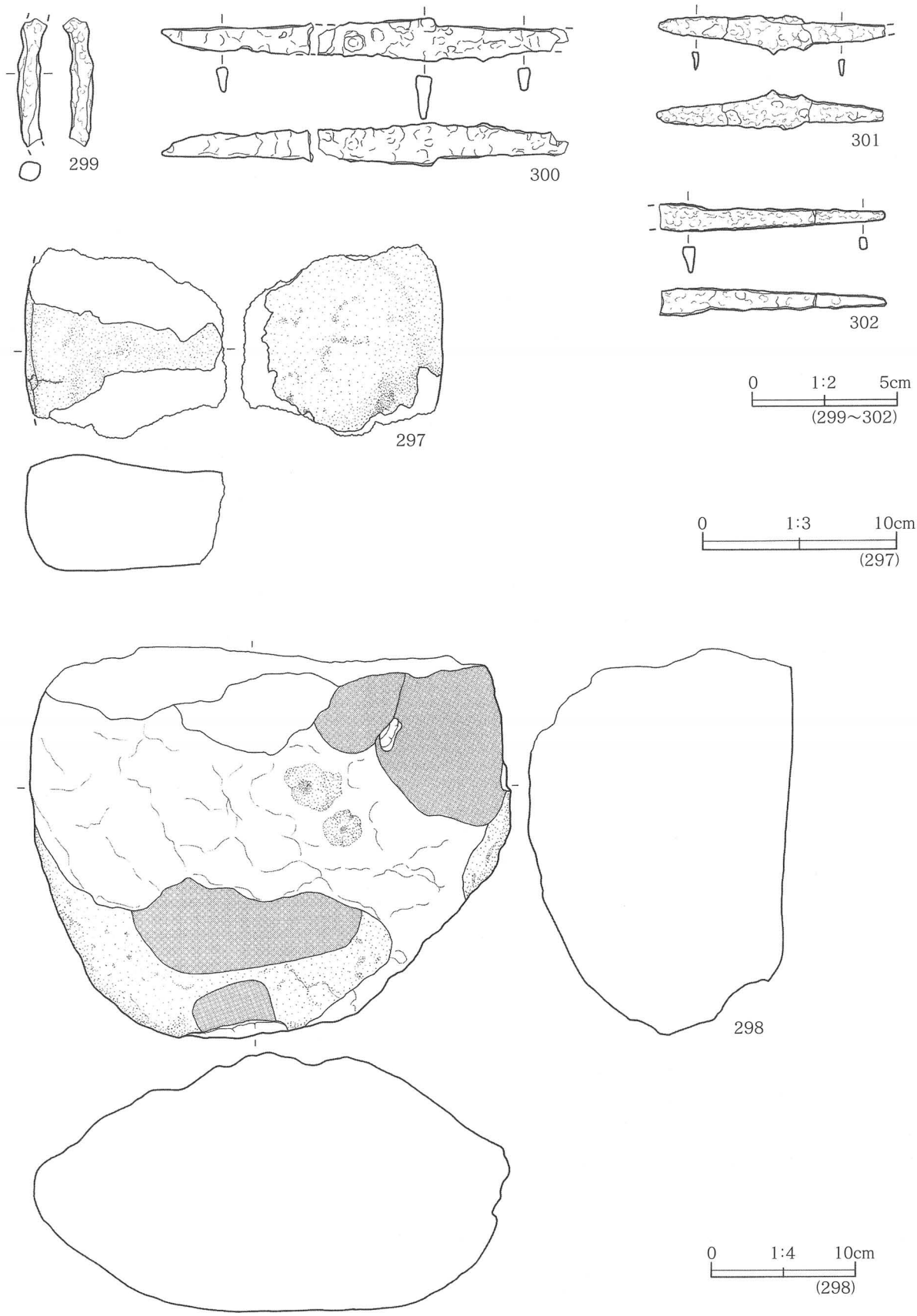
第75図 遺構内出土遺物 (22)



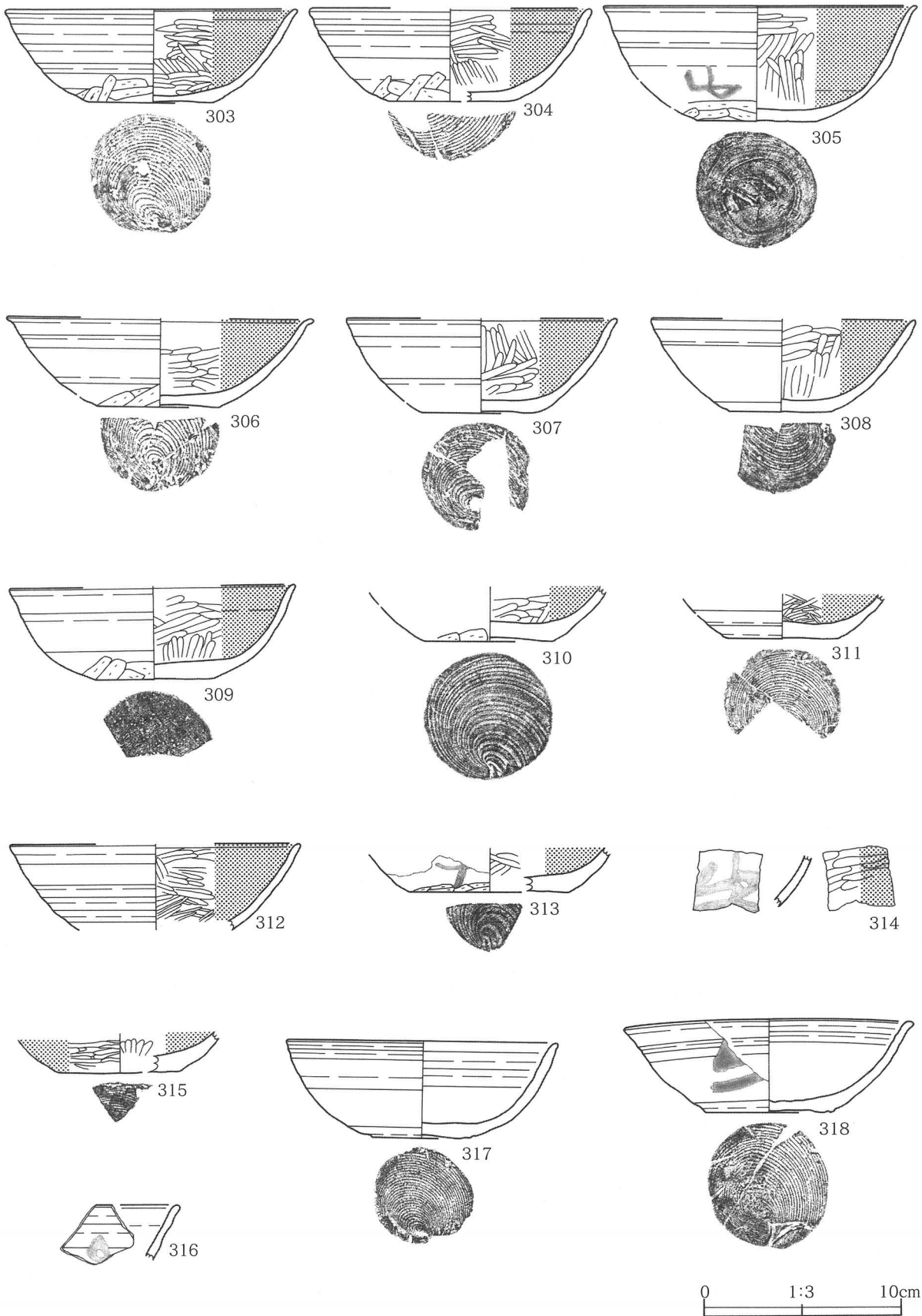
第76図 遺構内出土遺物 (23)



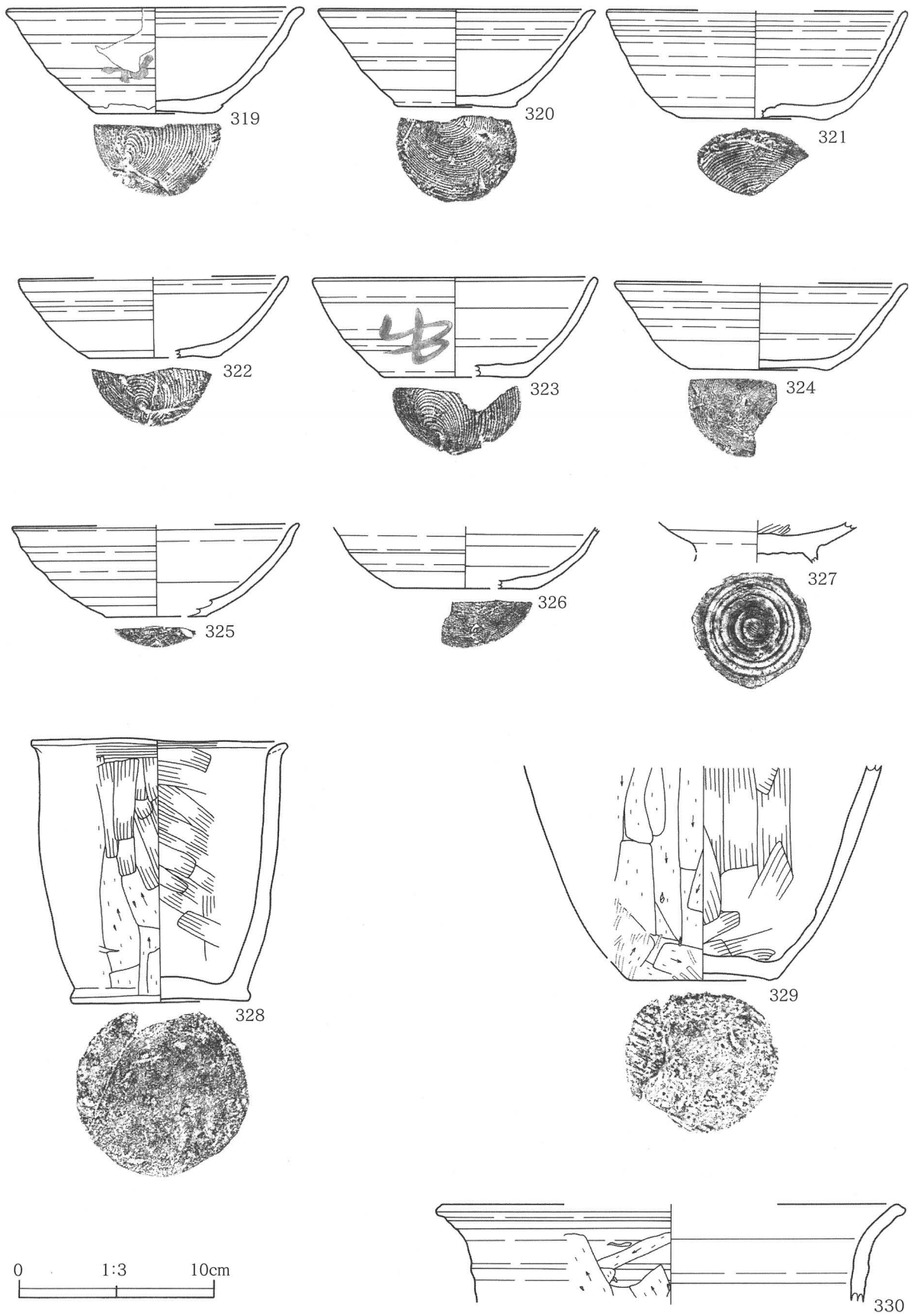
第77図 遺構内出土遺物 (24)



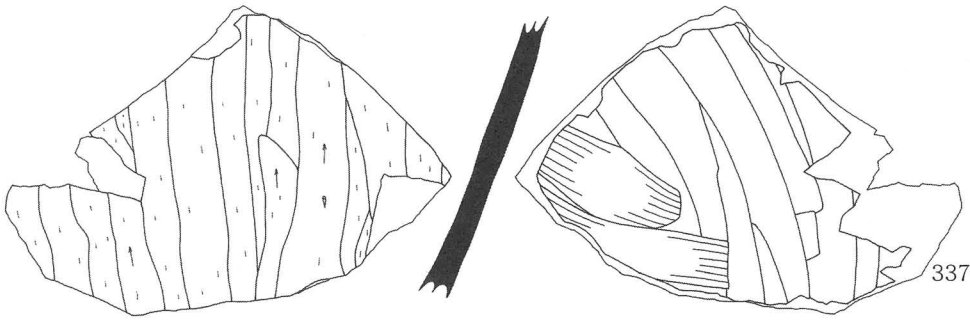
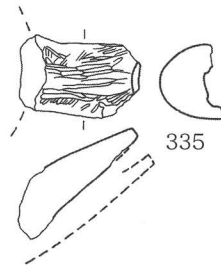
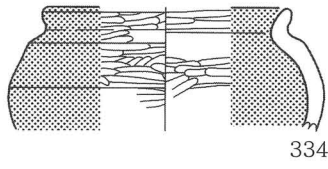
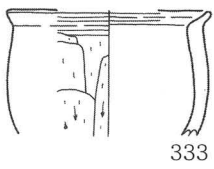
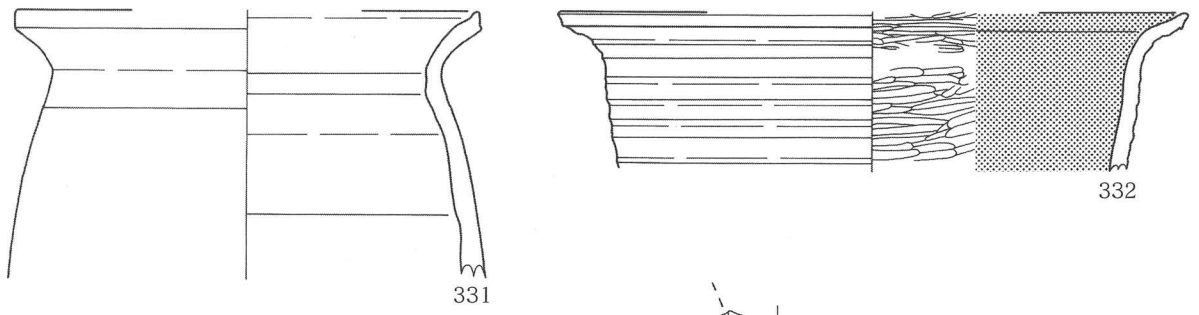
第78図 遺構内出土遺物 (25)



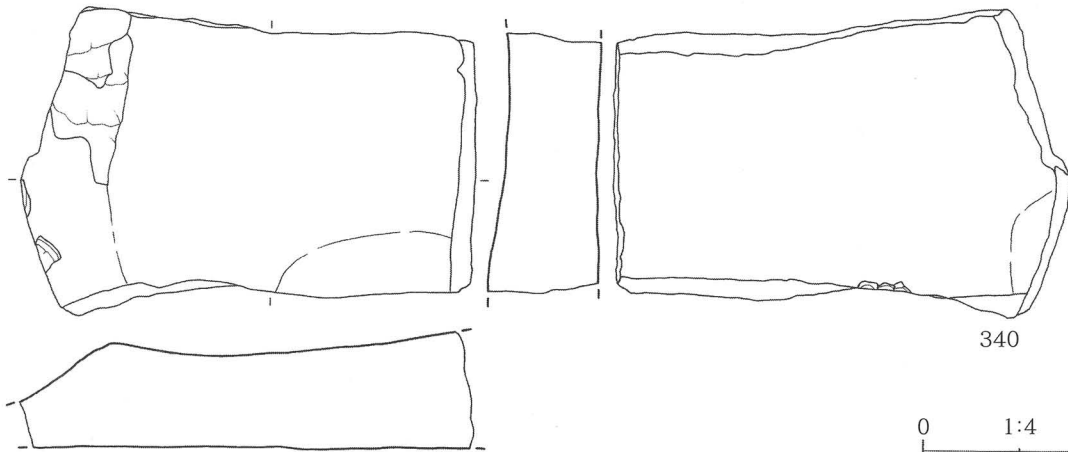
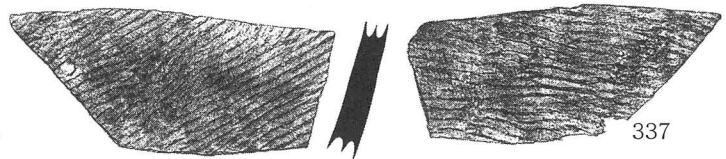
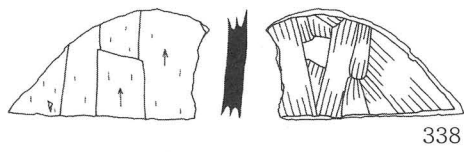
第79図 遺構内出土遺物 (26)



第80図 遺構内出土遺物 (27)

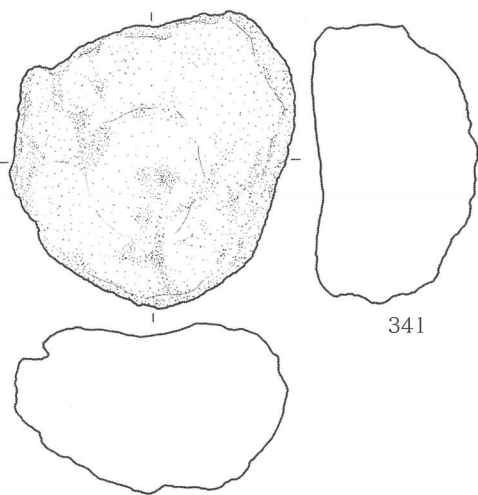


0 1:3 10cm

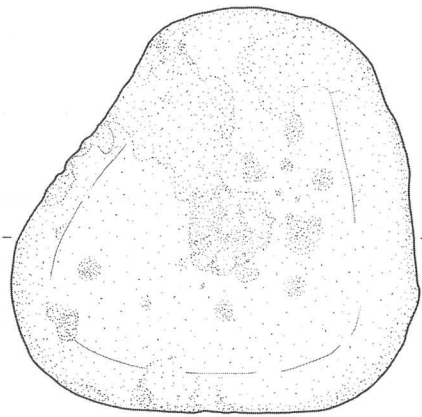


0 1:4 10cm
(340)

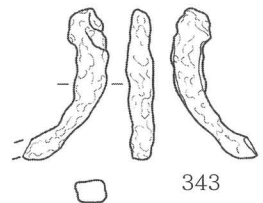
第81図 遺構内出土遺物 (28)



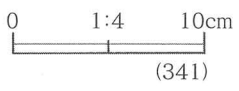
341



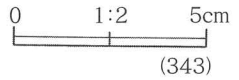
342



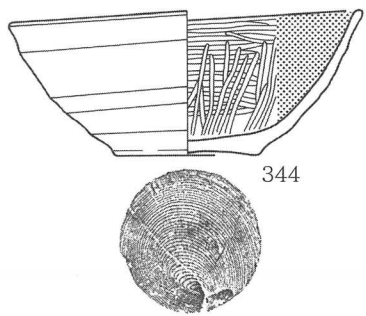
343



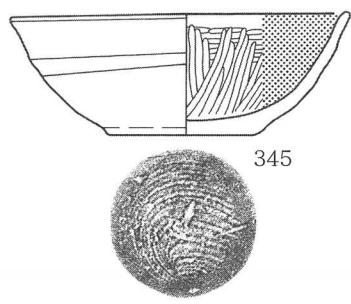
(341)



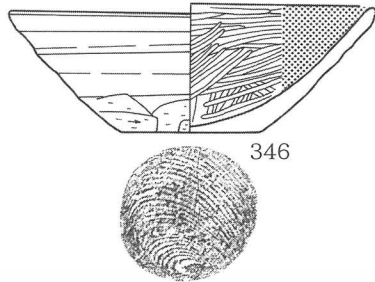
(343)



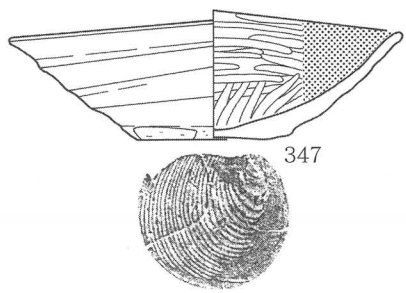
344



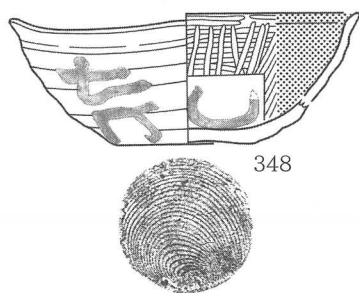
345



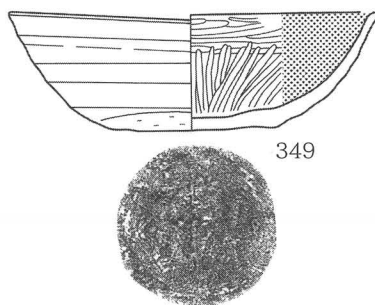
346



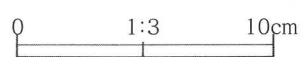
347



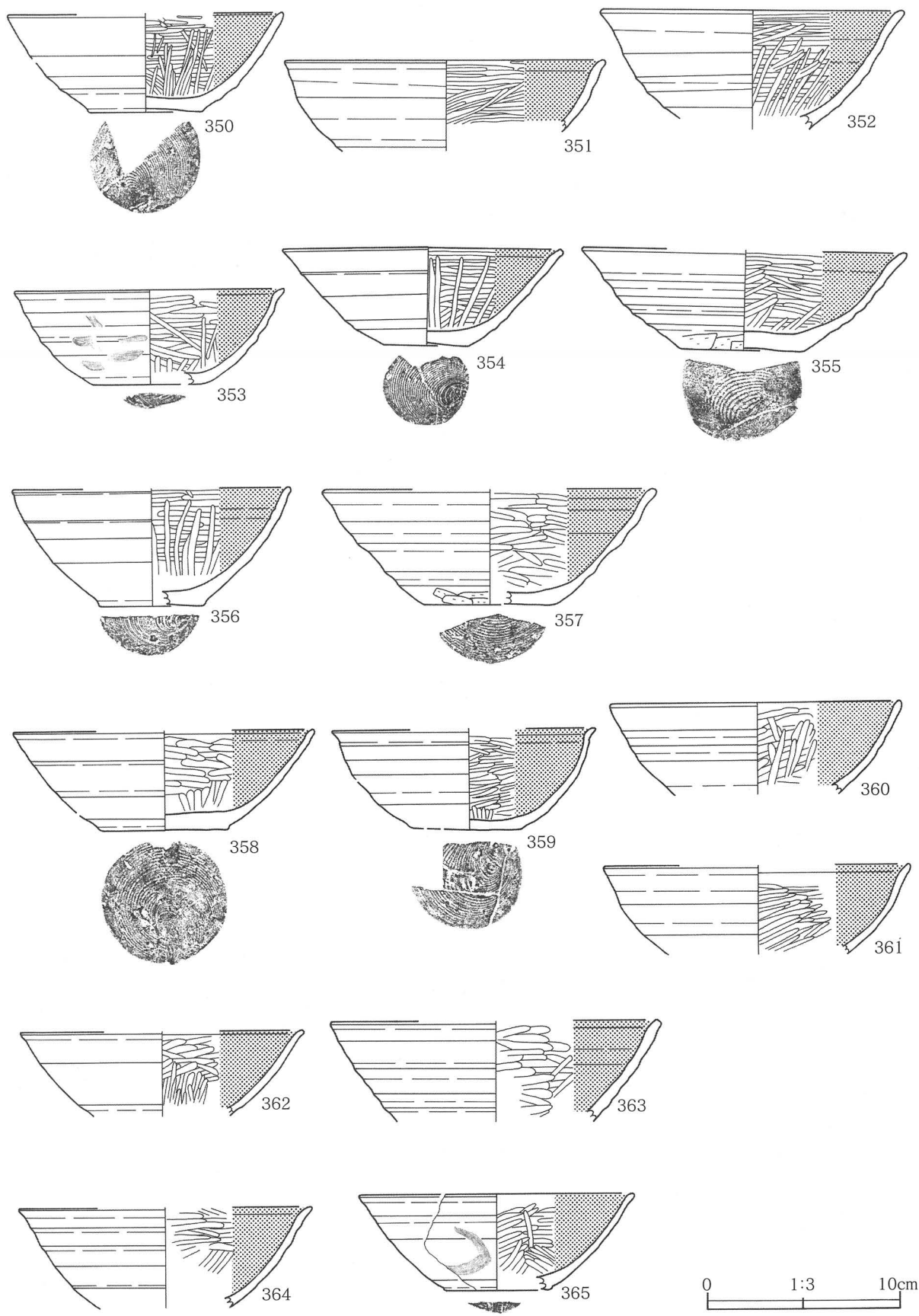
348



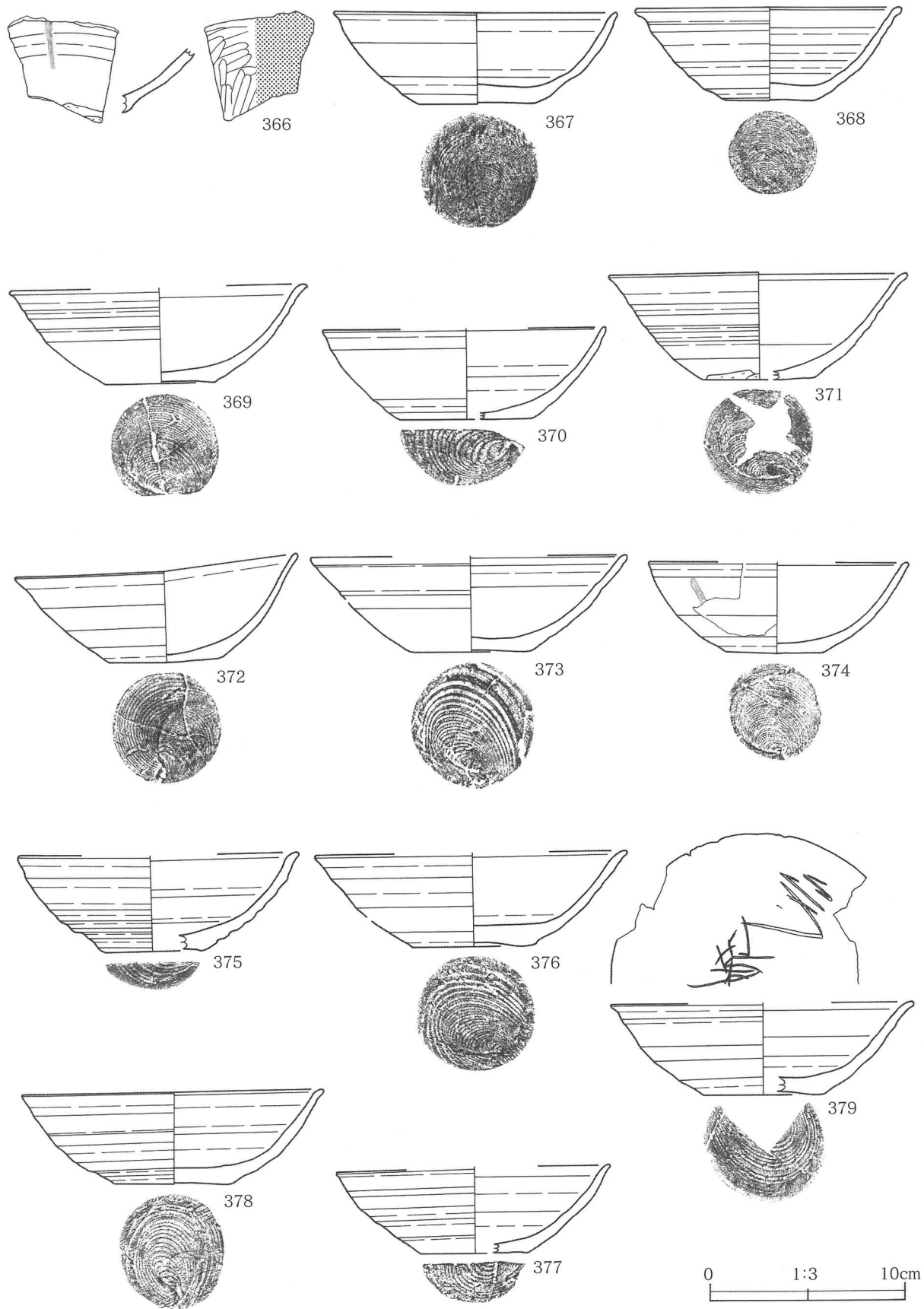
349



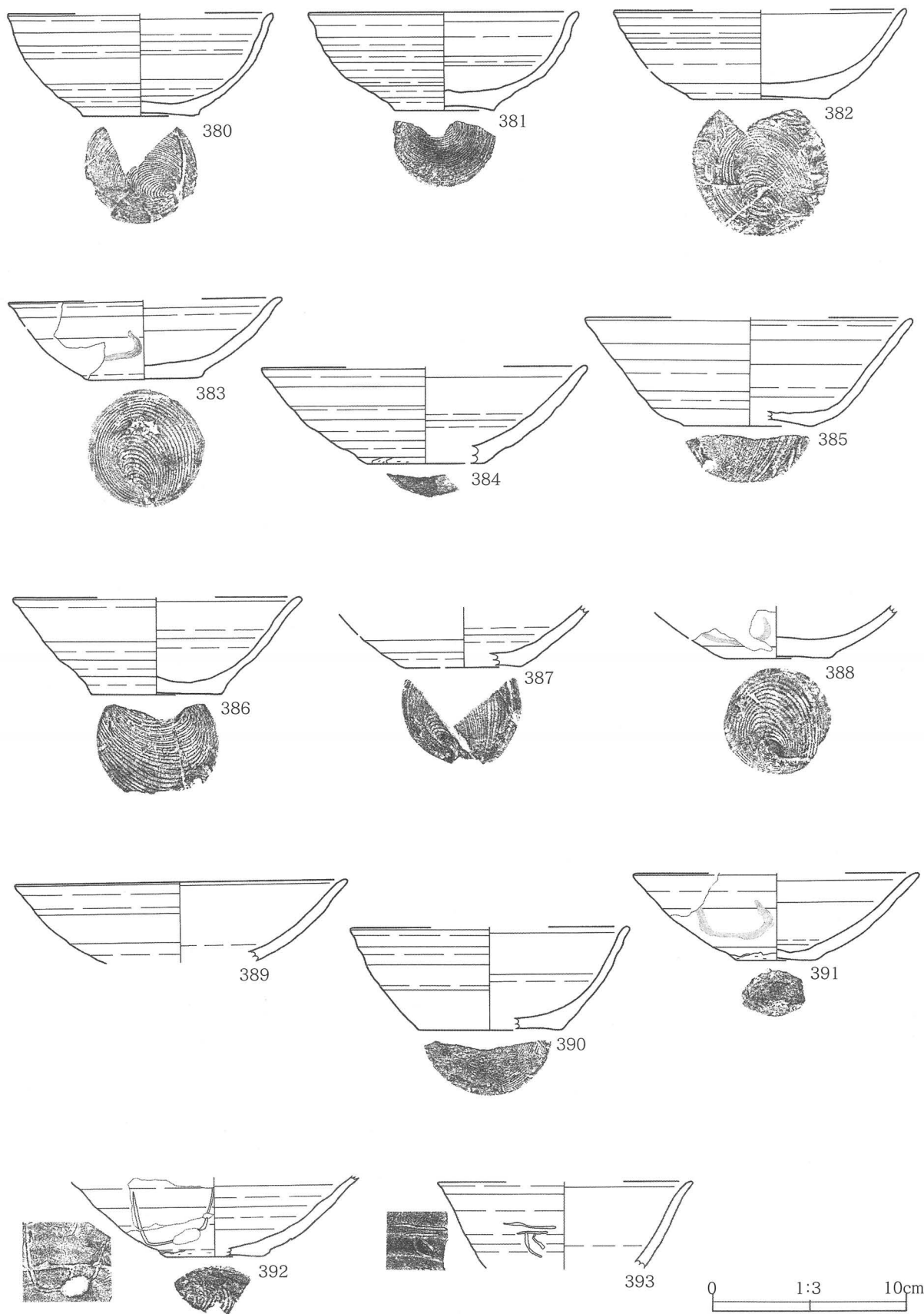
第82図 遺構内出土遺物 (29)



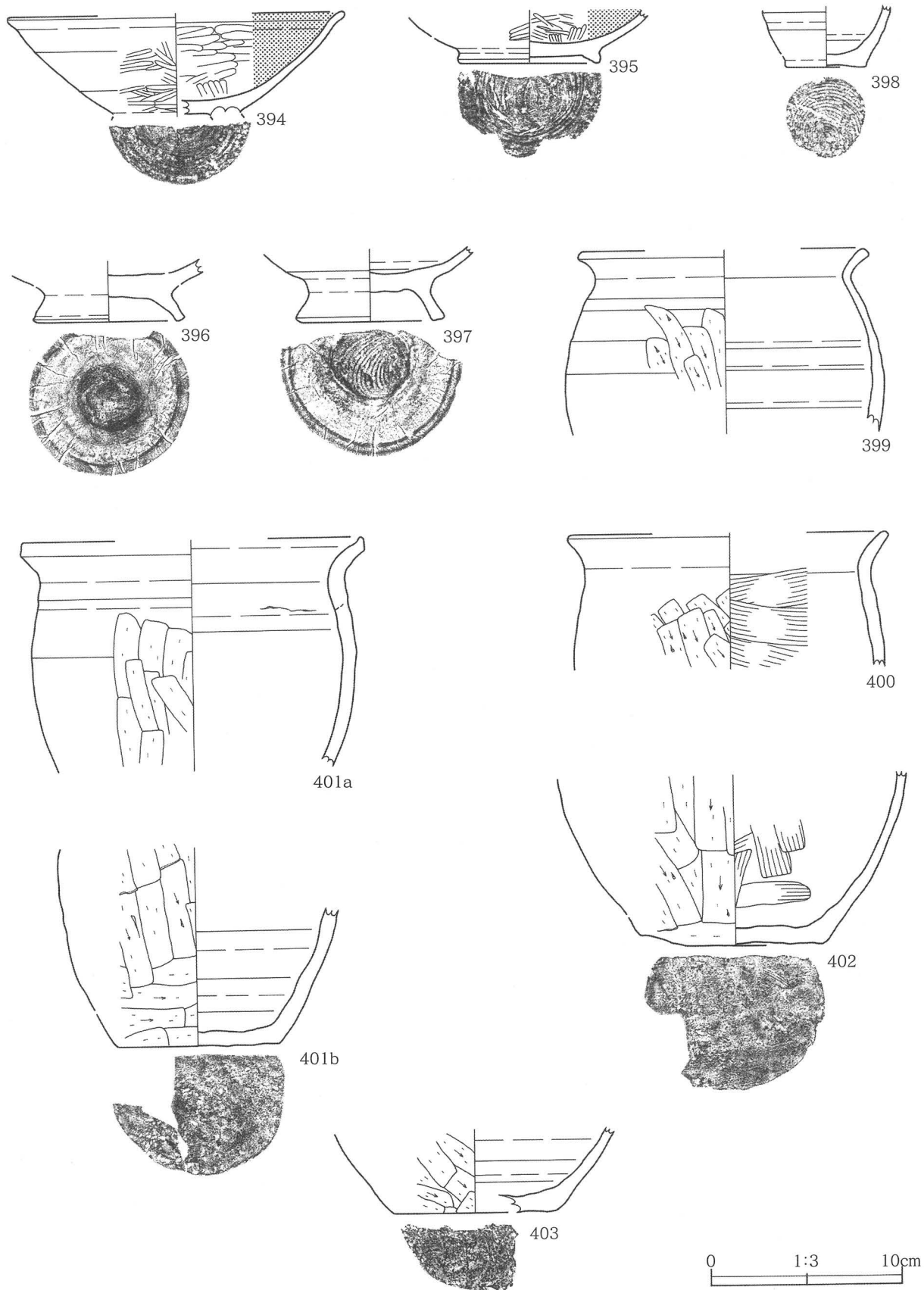
第83図 遺構内出土遺物 (30)



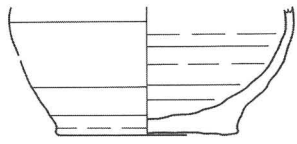
第84図 遺構内出土遺物 (31)



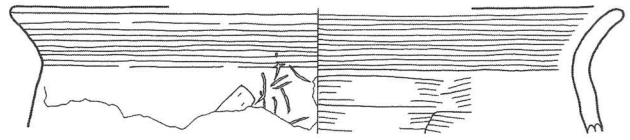
第85図 遺構内出土遺物 (32)



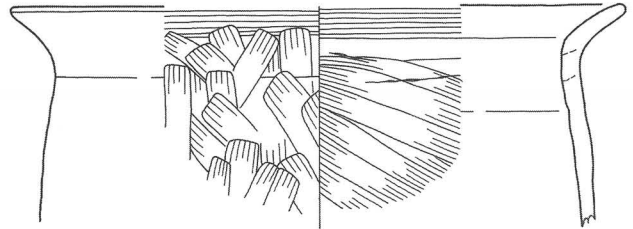
第86図 遺構内出土遺物 (33)



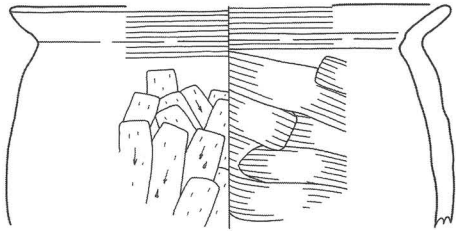
404



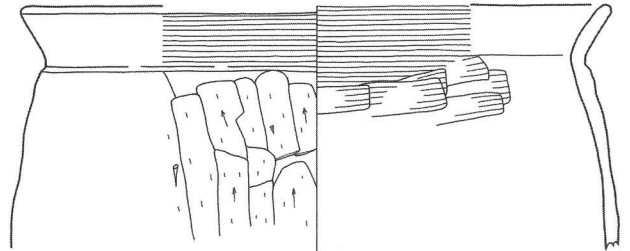
405



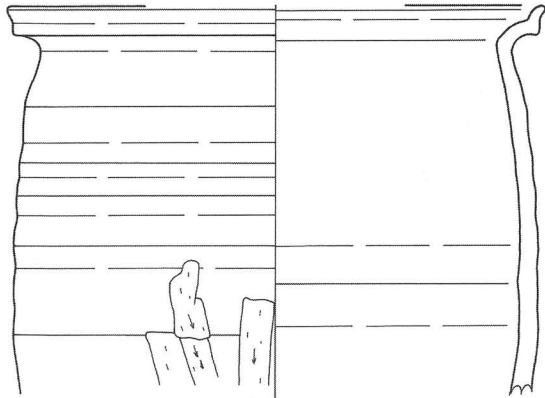
406



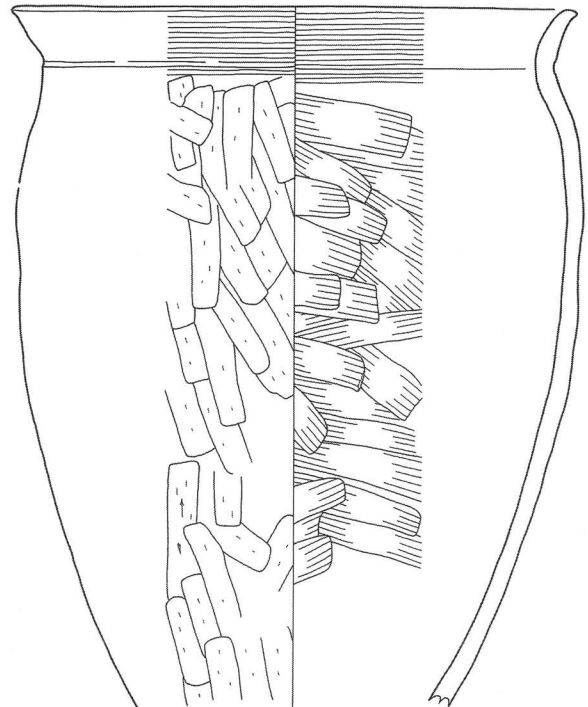
407



408



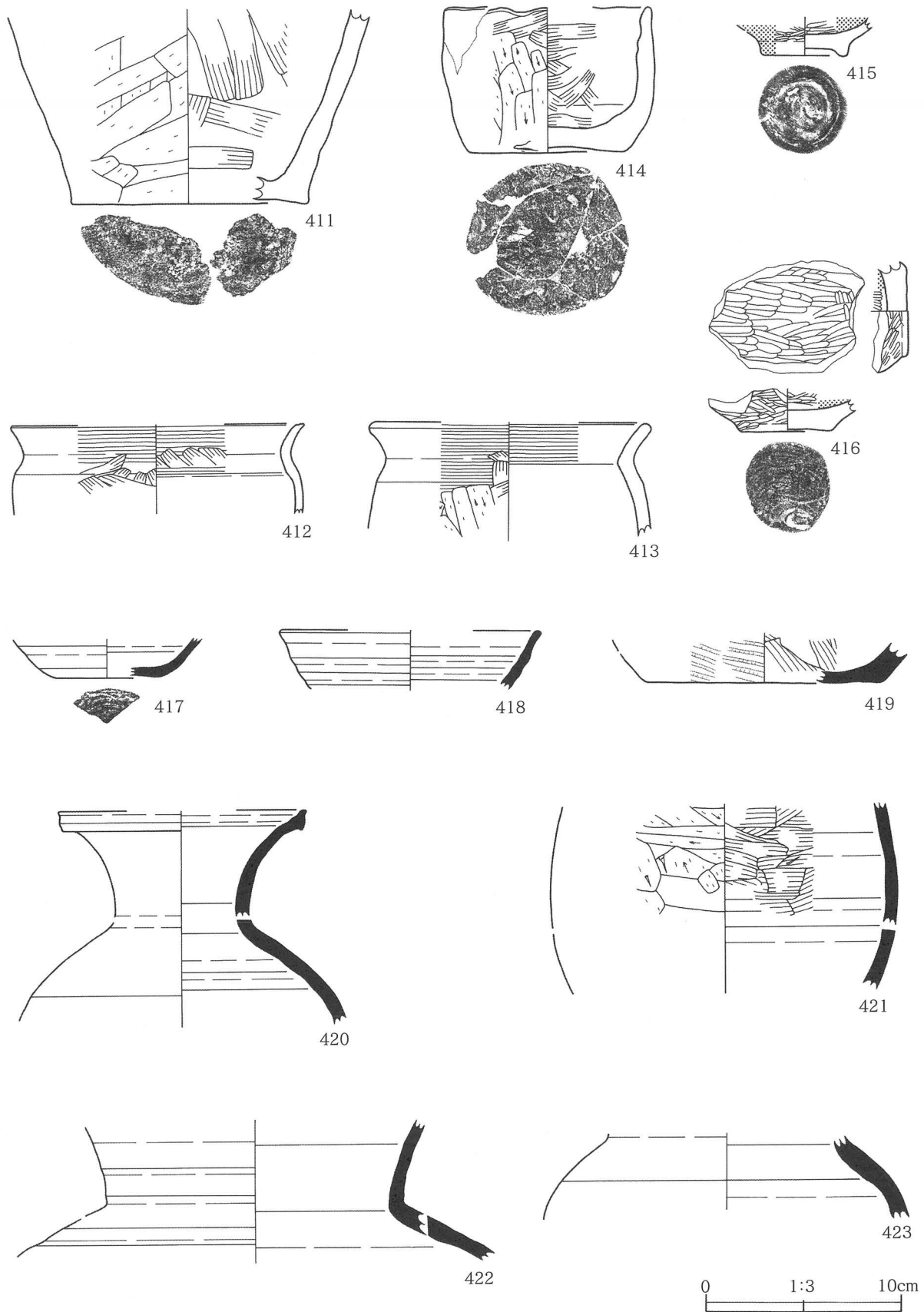
409



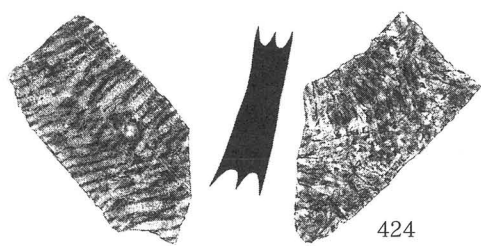
410

0 1:3 10cm

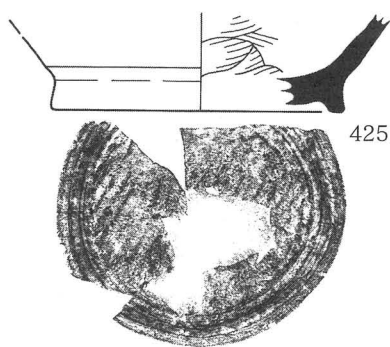
第87図 遺構内出土遺物 (34)



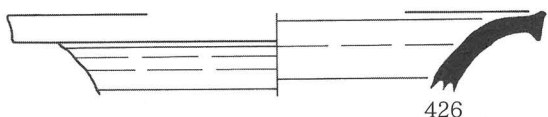
第88図 遺構内出土遺物 (35)



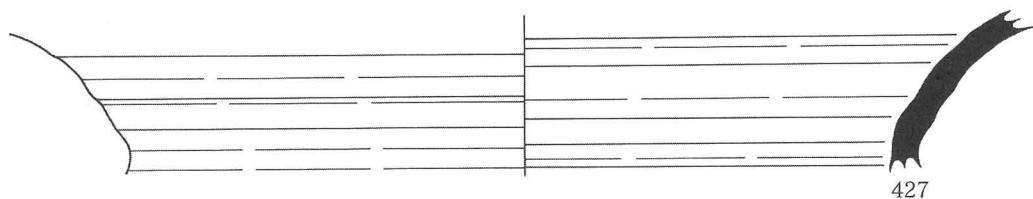
424



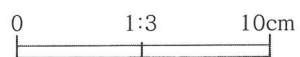
425



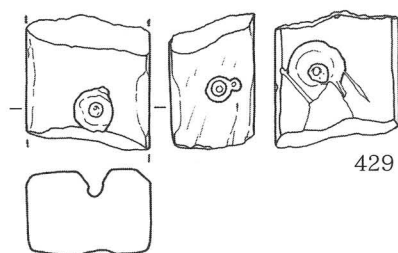
426



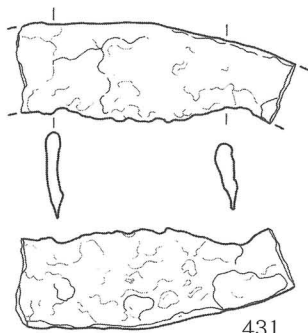
427



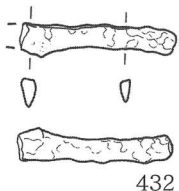
428



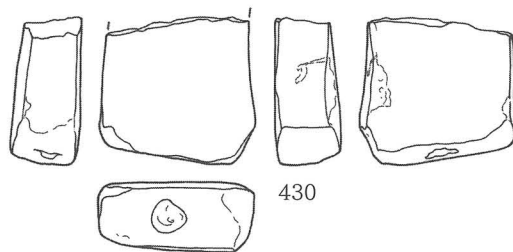
429



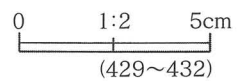
431



432

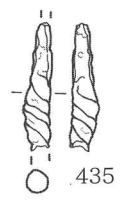
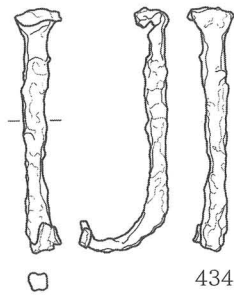
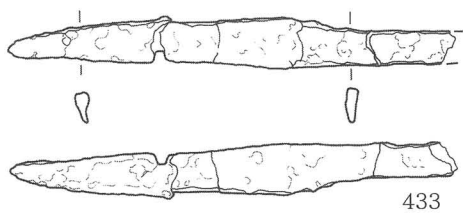


430

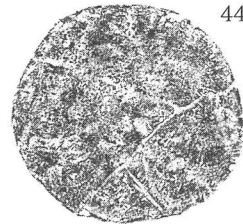
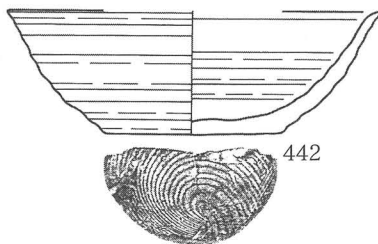
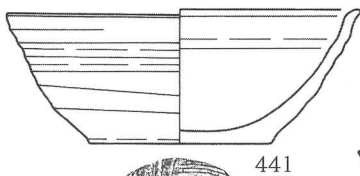
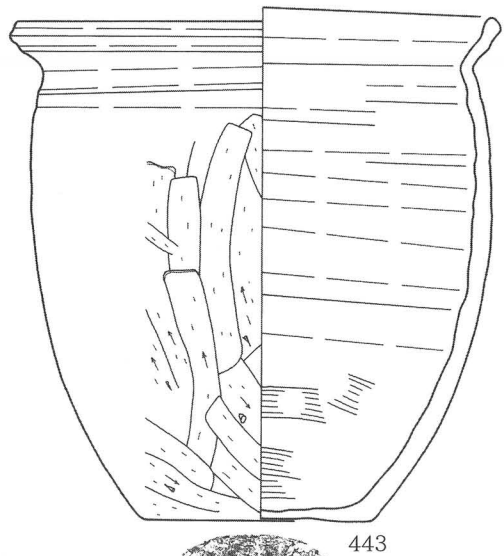
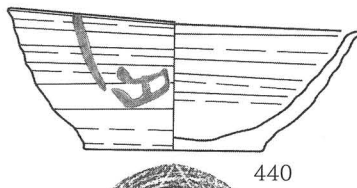
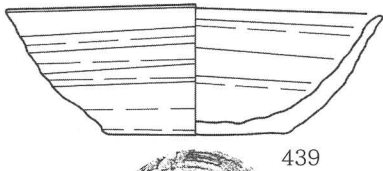
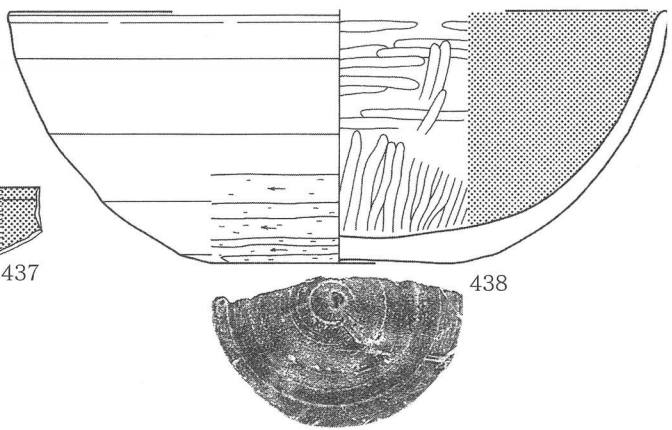
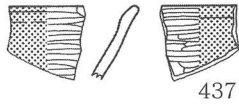
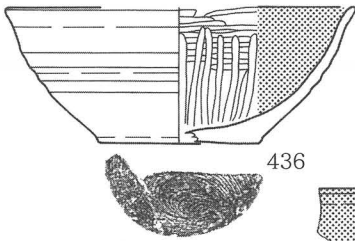


(429~432)

第89図 遺構内出土遺物 (36)

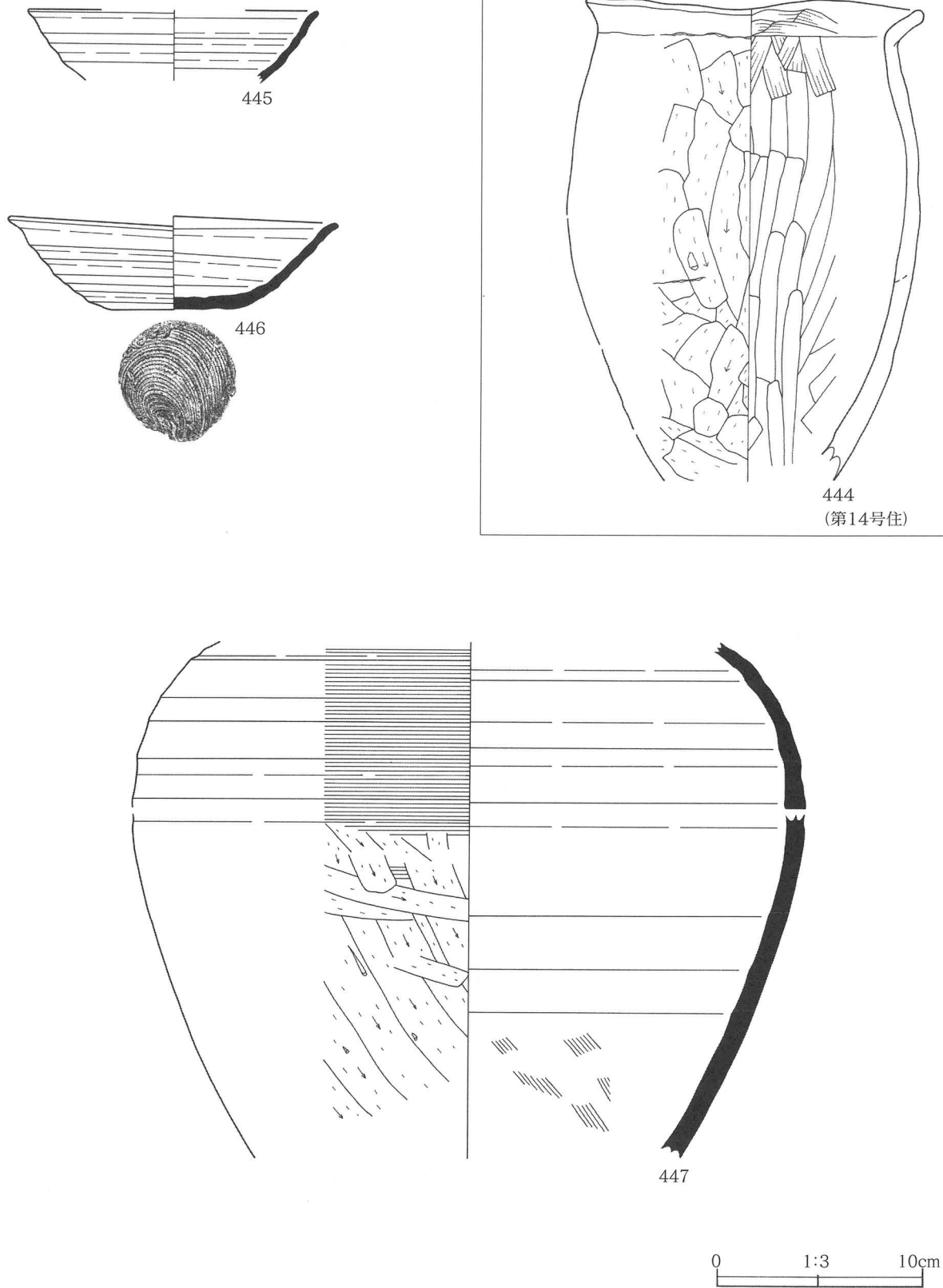


0 1:2 5cm
(433~435)

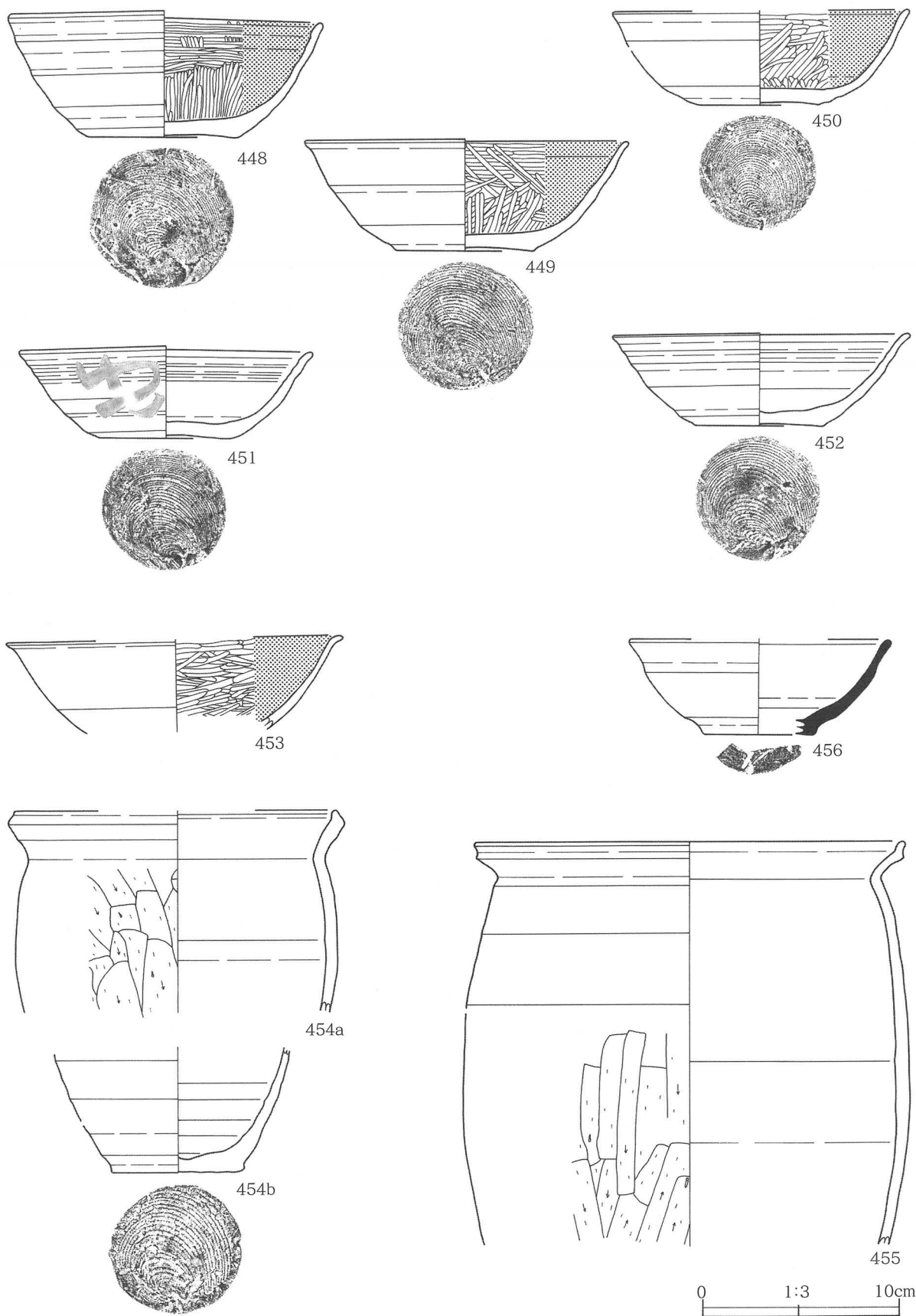


0 1:3 10cm

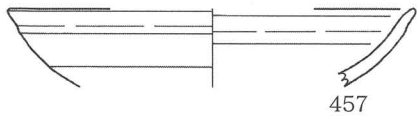
第90図 遺構内出土遺物 (37)



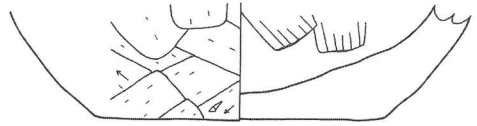
第91図 遺構内出土遺物 (38)



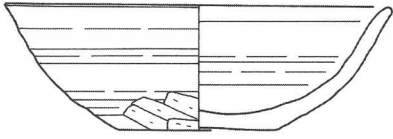
第92図 遺構内出土遺物 (39)



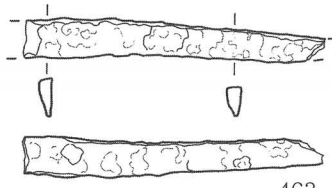
457



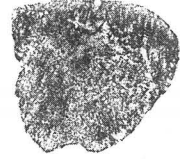
459



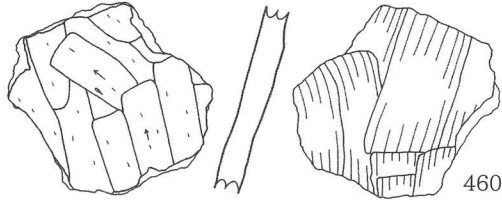
458



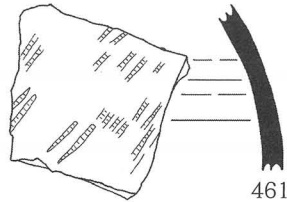
463



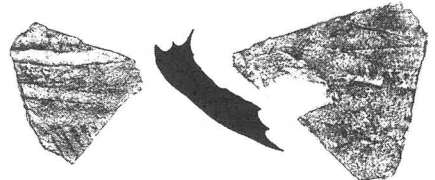
0 1:2 5cm
(463)



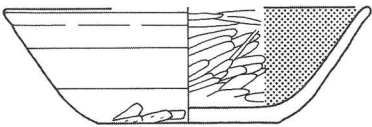
460



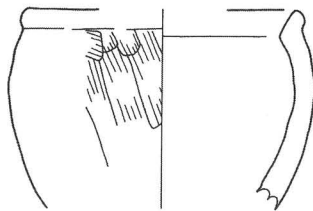
461



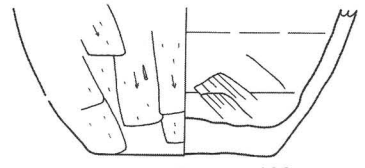
462



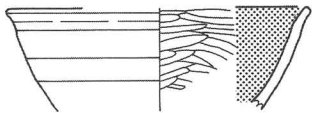
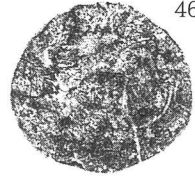
464



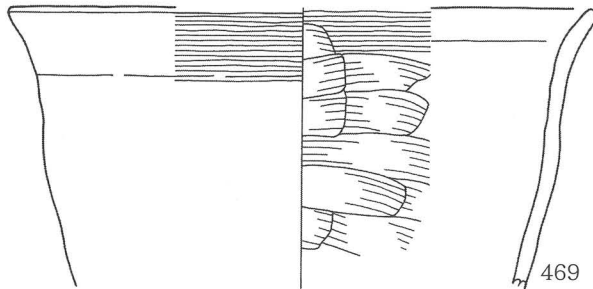
467



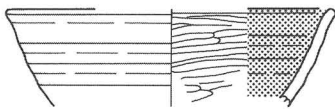
468



465



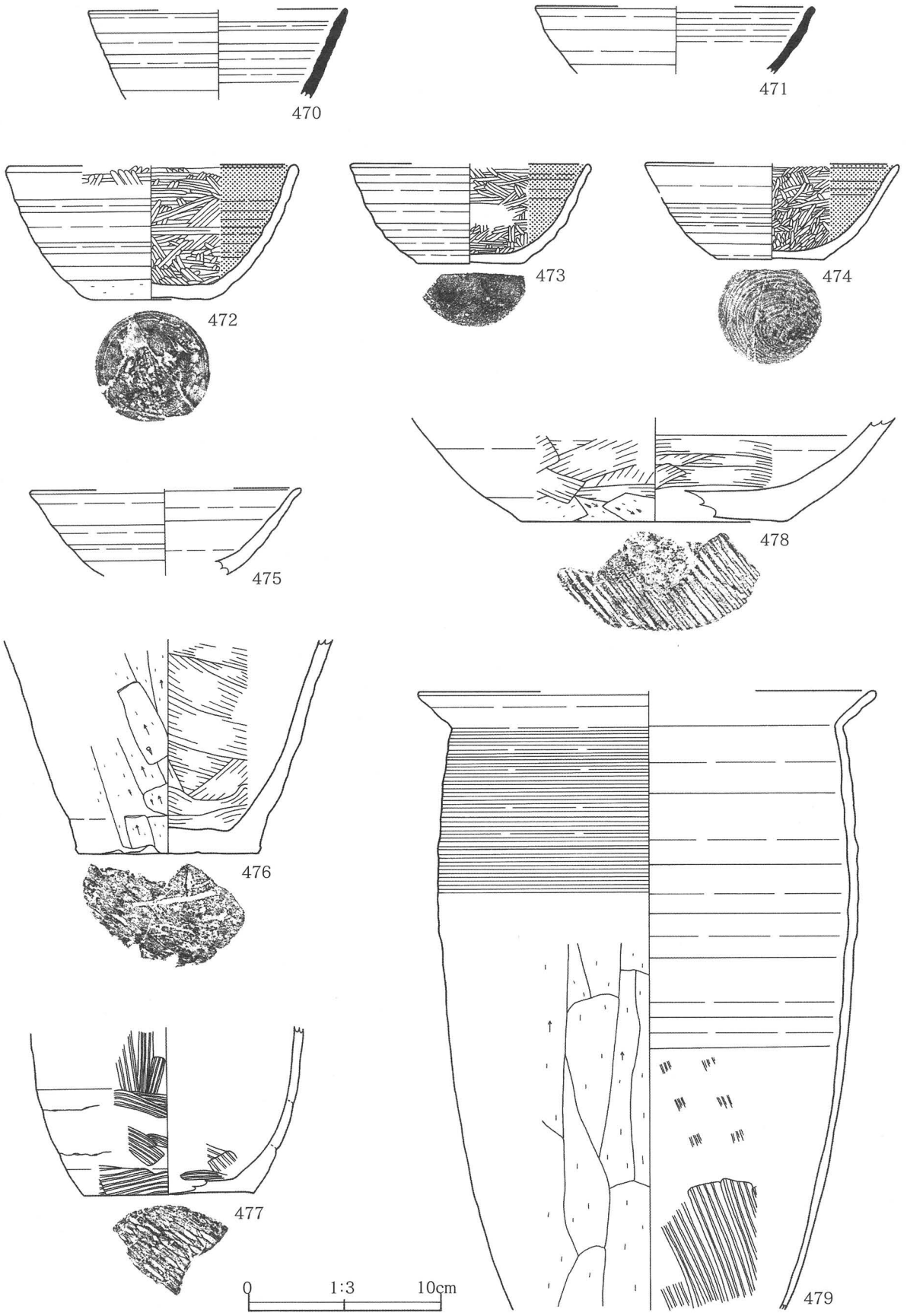
469



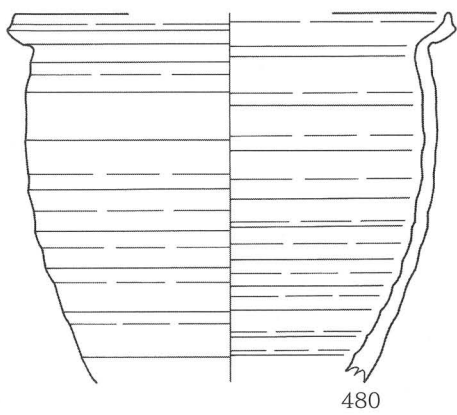
466

0 1:3 10cm

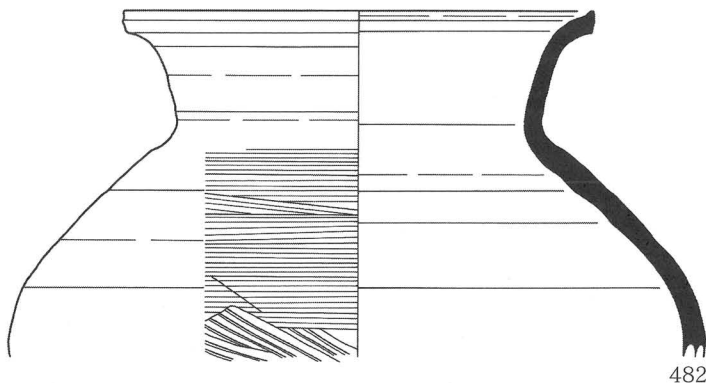
第93図 遺構内出土遺物 (40)



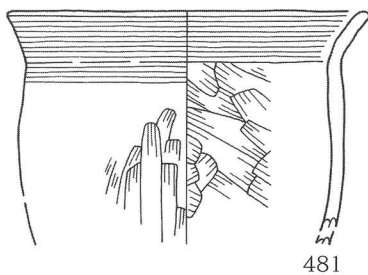
第94図 遺構内出土遺物 (41)



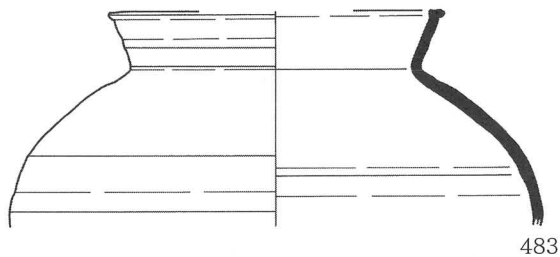
480



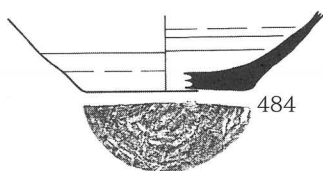
482



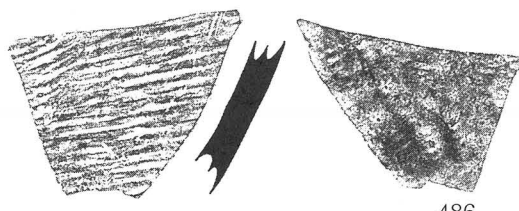
481



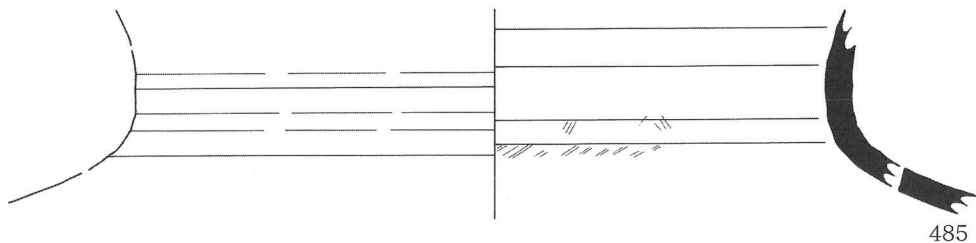
483



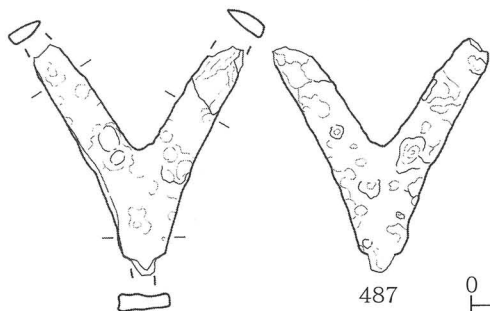
484



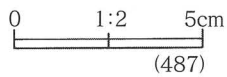
486



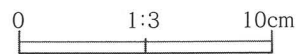
485



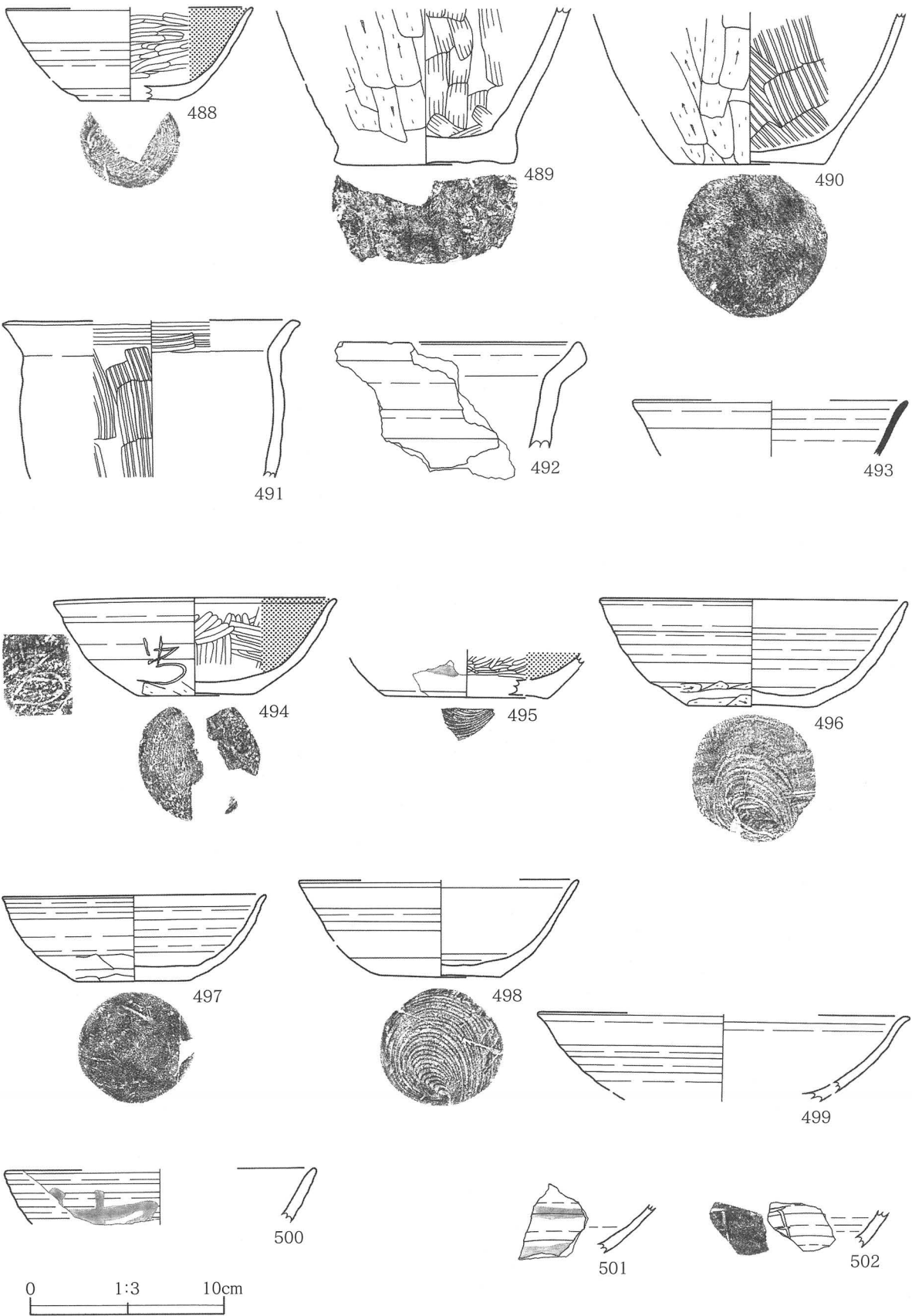
487



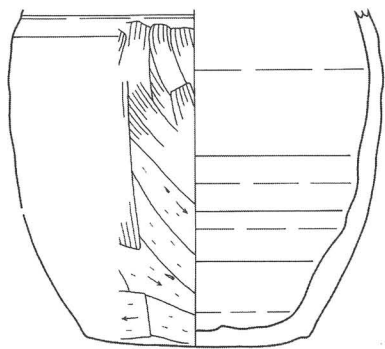
(487)



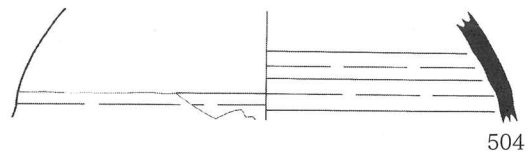
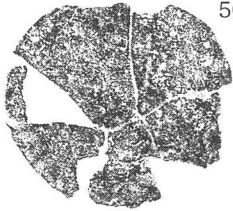
第95図 遺構内出土遺物 (42)



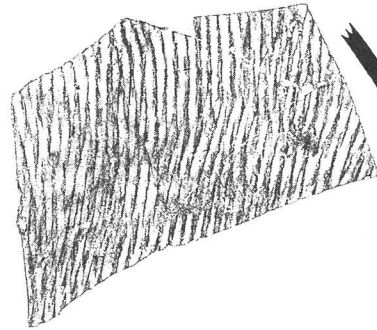
第96図 遺構内出土遺物 (43)



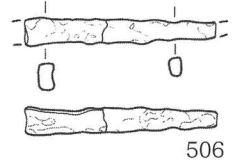
503



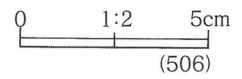
504



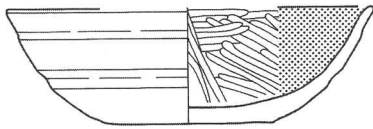
505



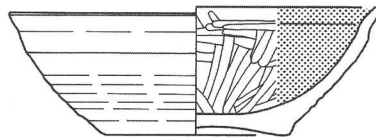
506



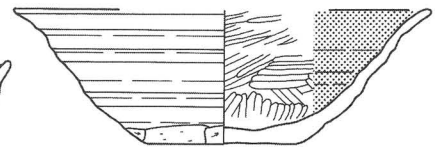
(506)



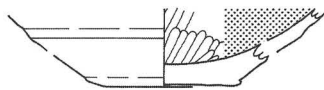
507



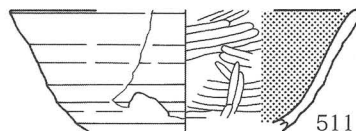
508



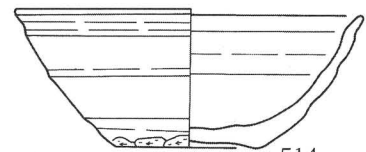
509



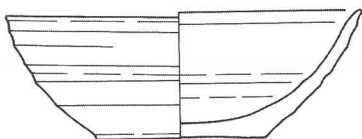
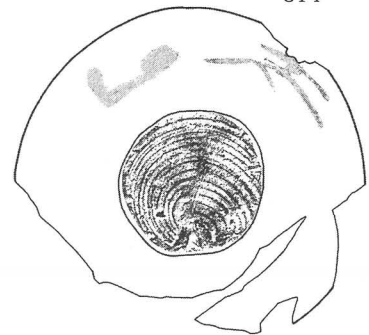
510



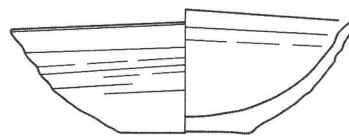
511



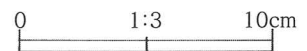
514



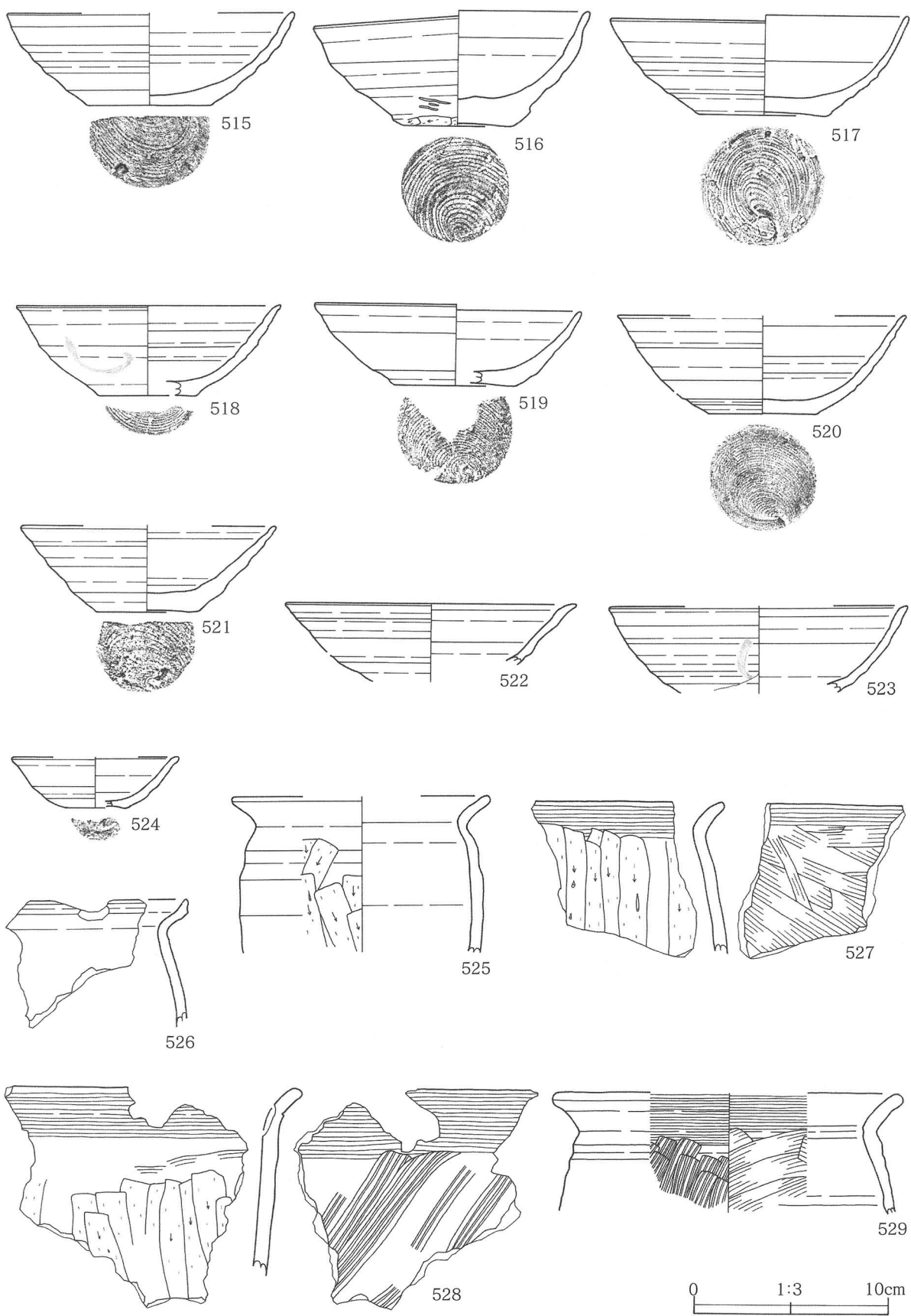
512



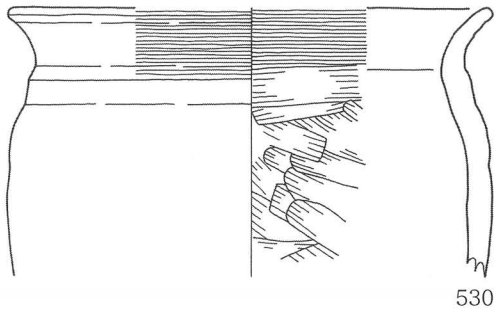
513



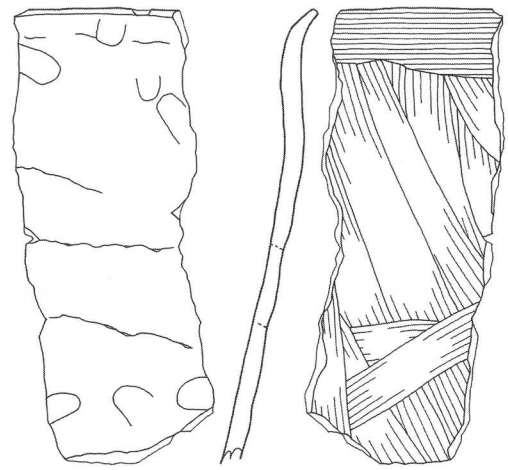
第97図 遺構内出土遺物 (44)



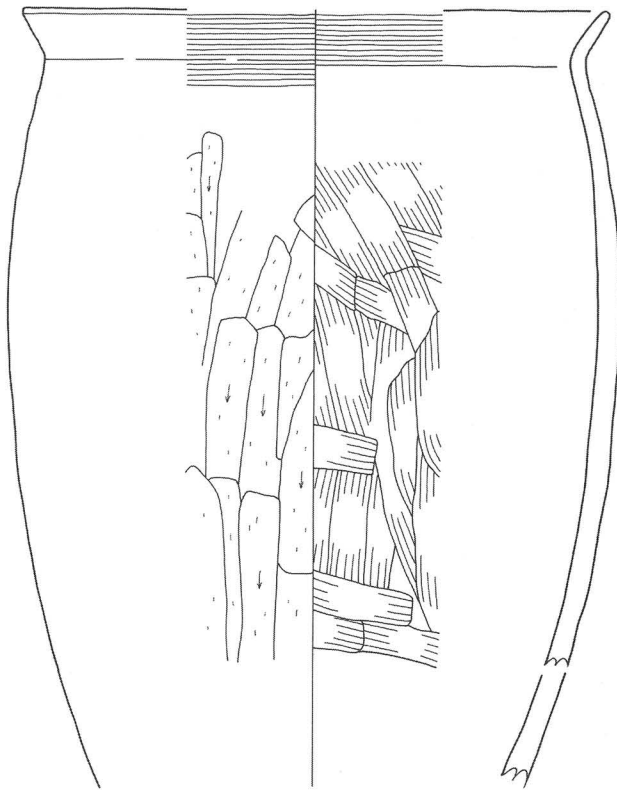
第98図 遺構内出土遺物 (45)



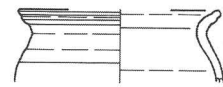
530



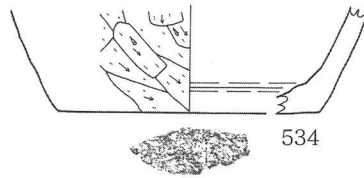
531



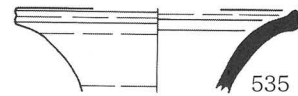
532



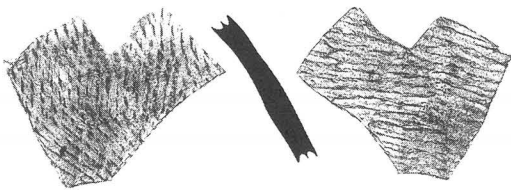
533



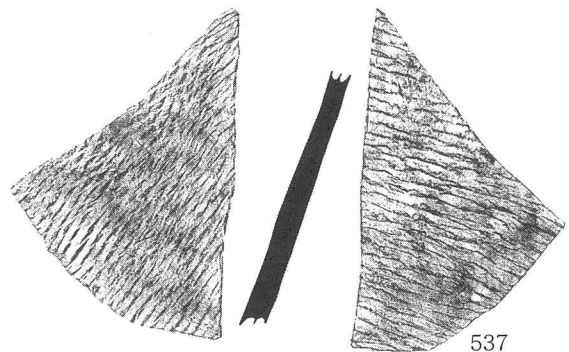
534



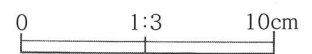
535



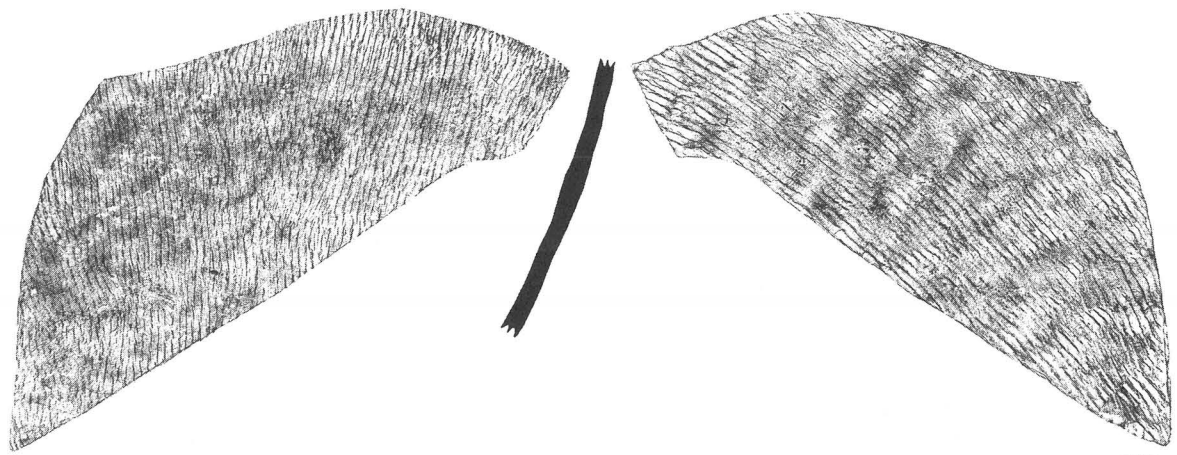
536



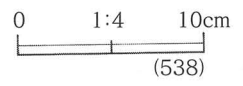
537



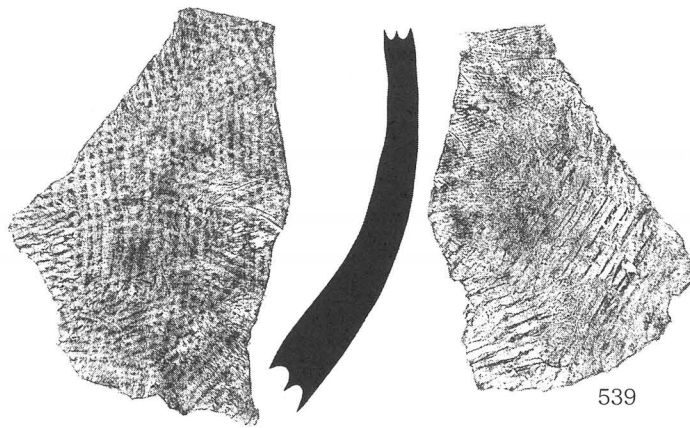
第99図 遺構内出土遺物 (46)



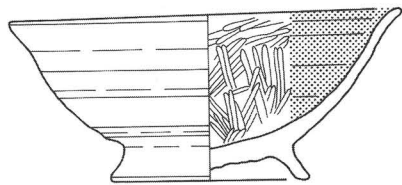
538



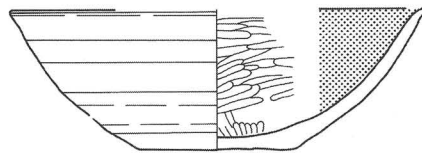
(538)



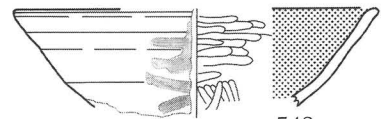
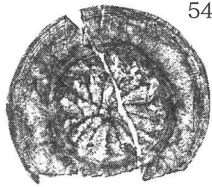
539



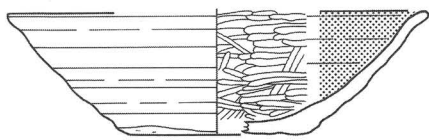
540



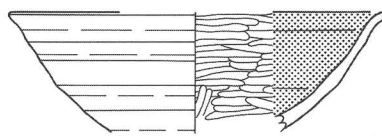
541



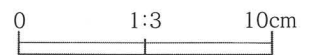
542



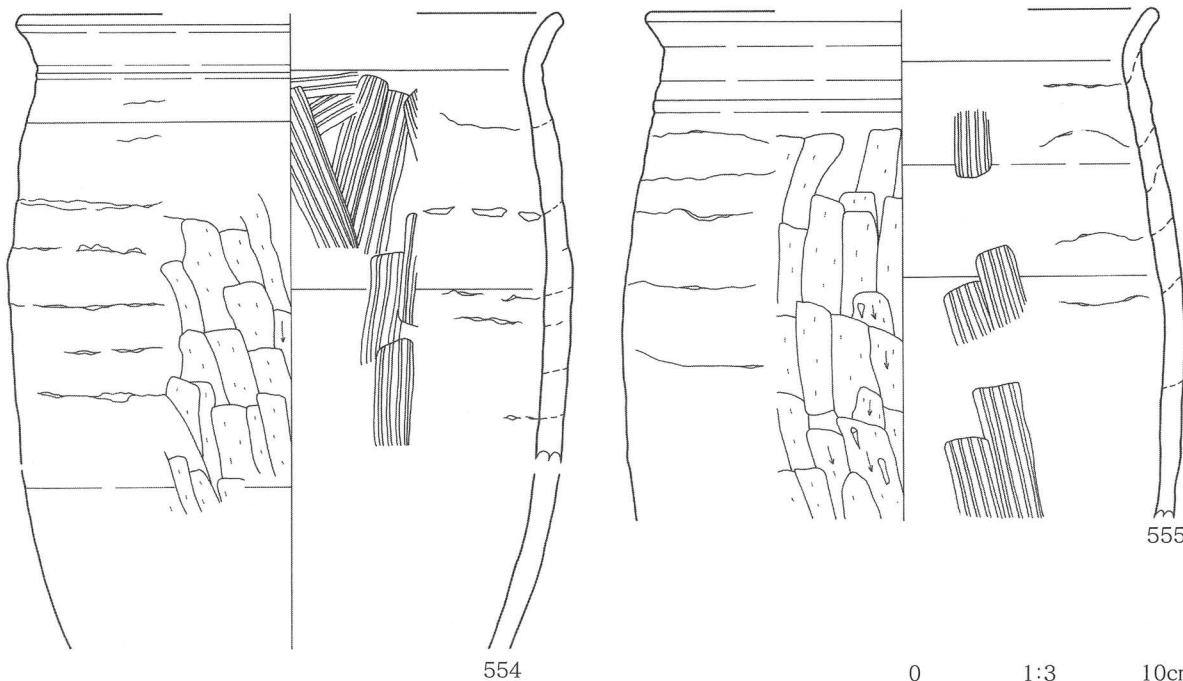
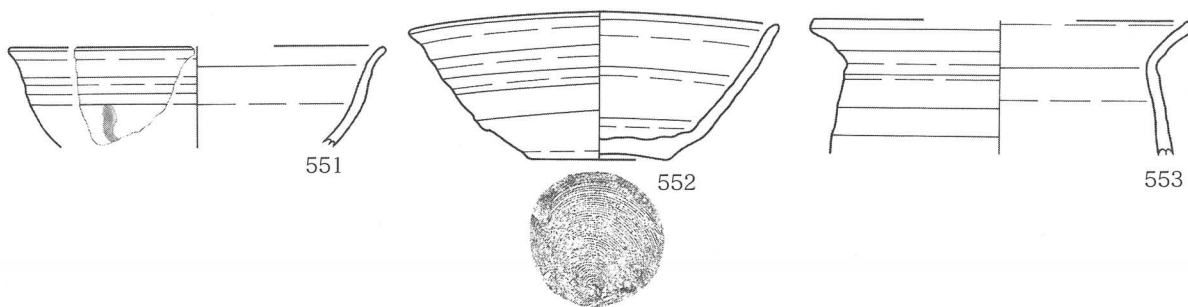
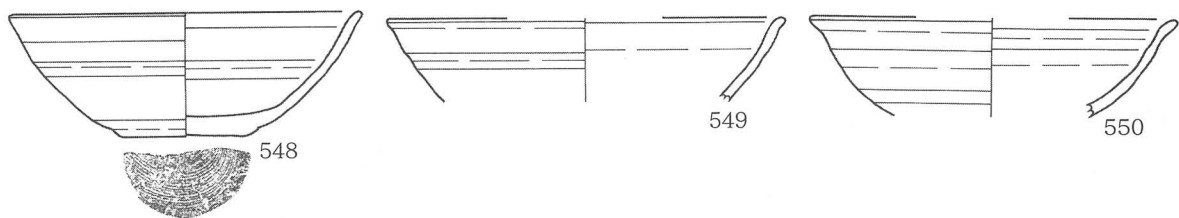
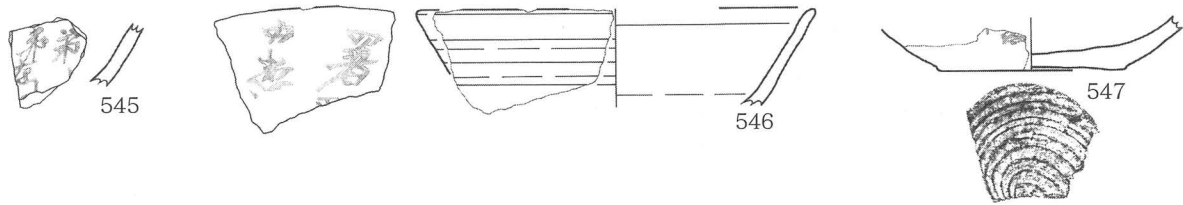
543



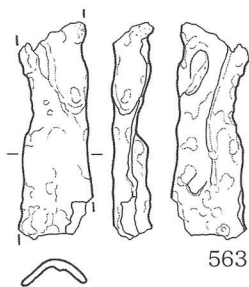
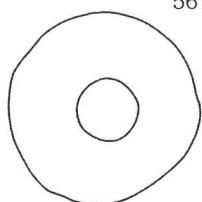
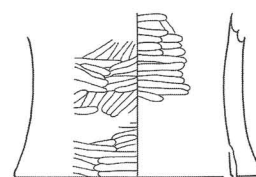
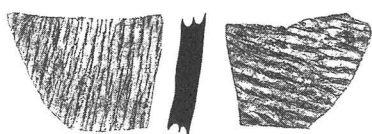
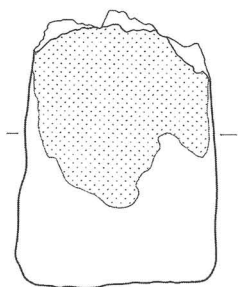
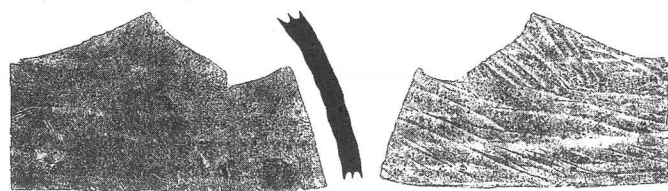
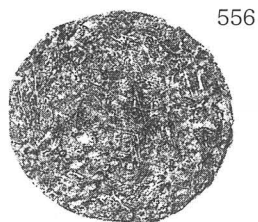
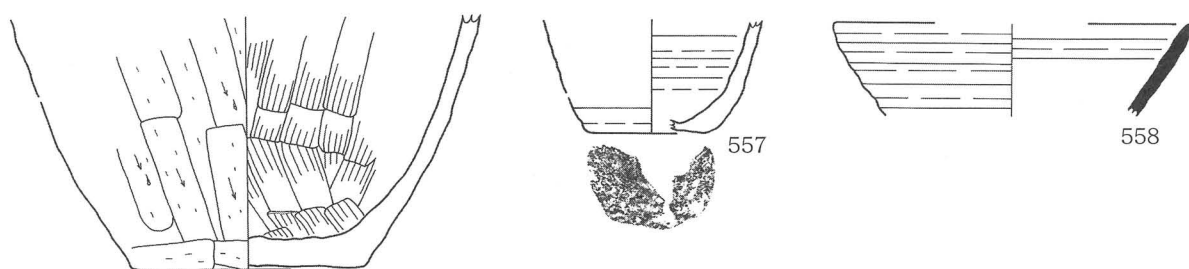
544



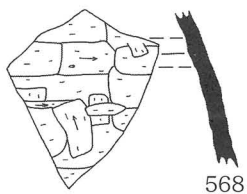
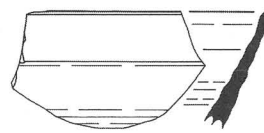
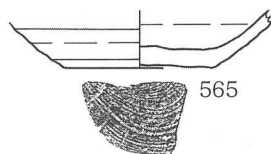
第100図 遺構内出土遺物 (47)



第101図 遺構内出土遺物 (48)

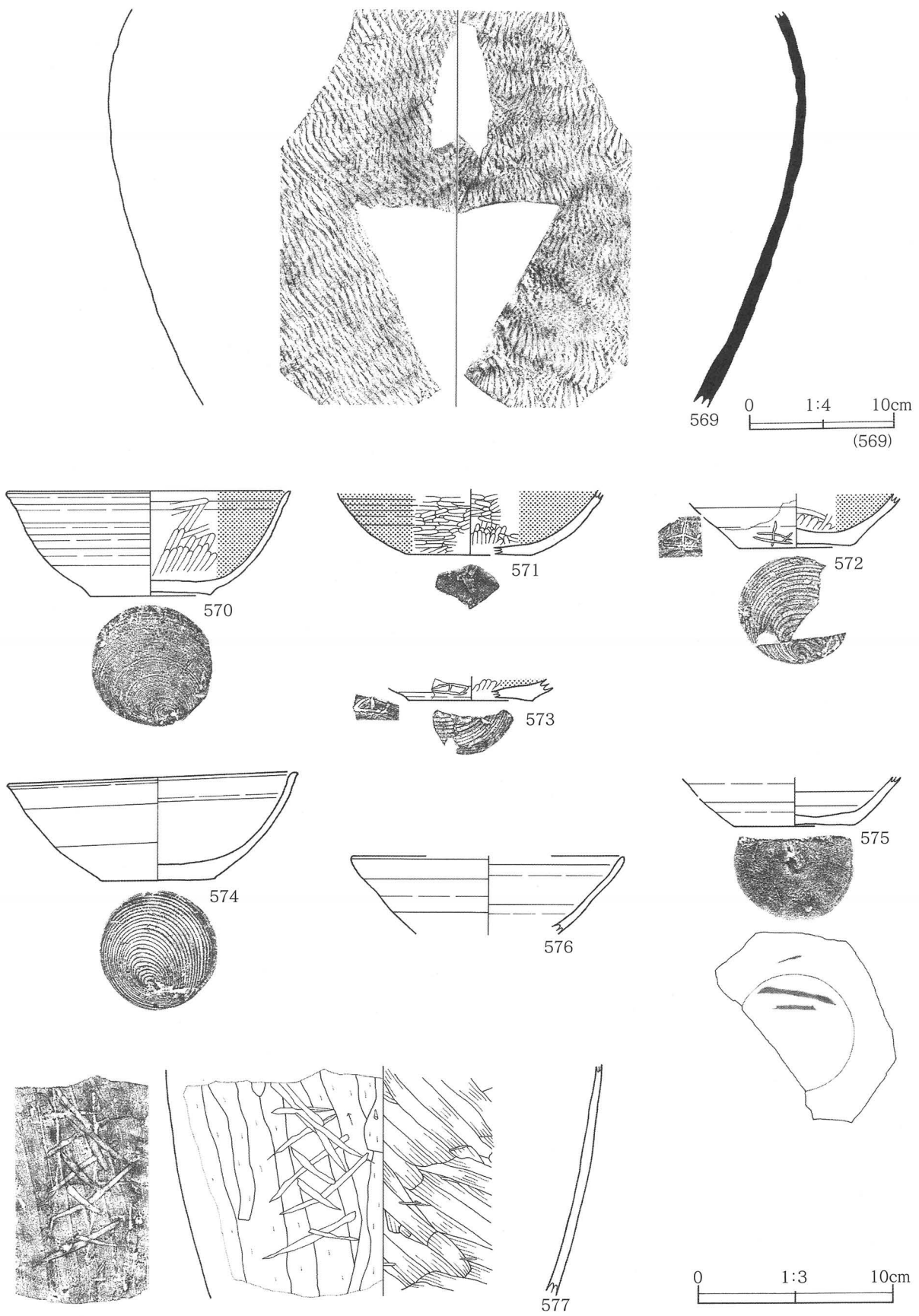


0 1:2 5cm
(563)

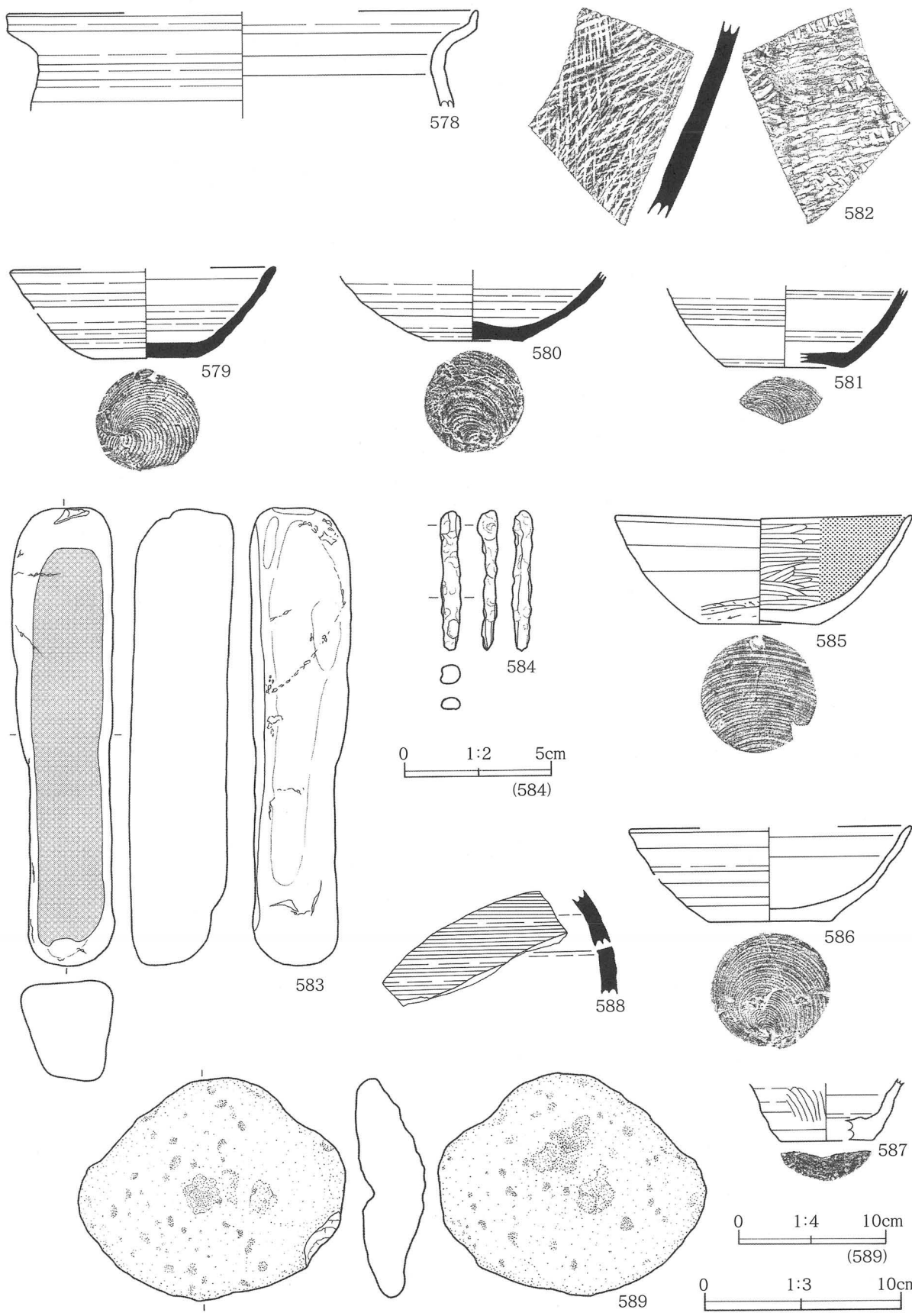


0 1:3 10cm

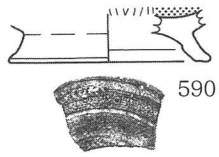
第102図 遺構内出土遺物 (49)



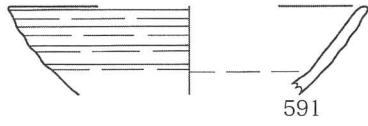
第103図 遺構内出土遺物 (50)



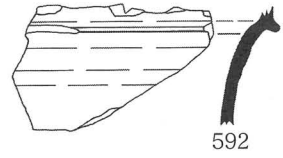
第104図 遺構内出土遺物 (51)



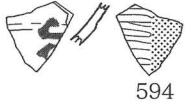
590



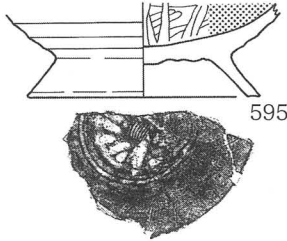
591



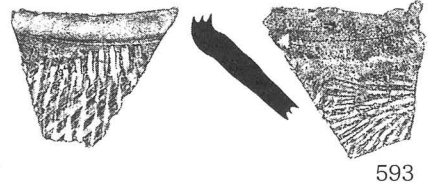
592



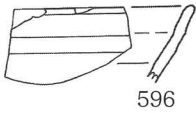
594



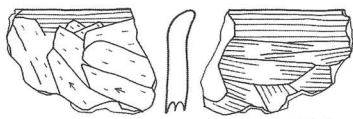
595



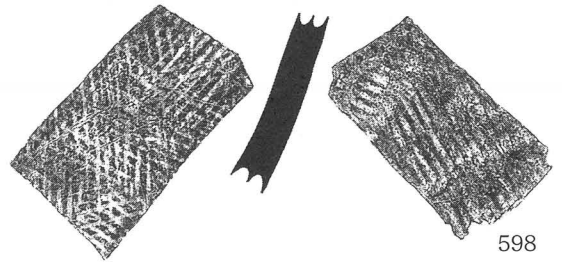
593



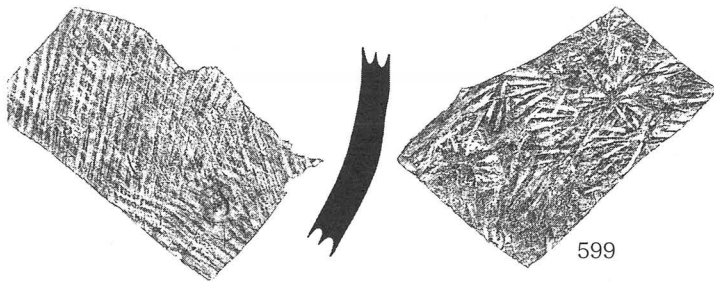
596



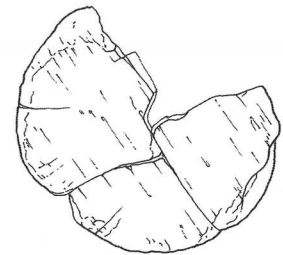
597



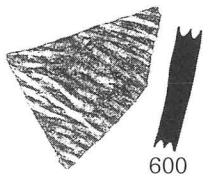
598



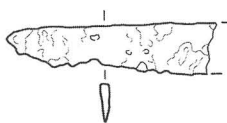
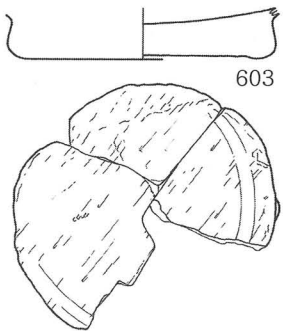
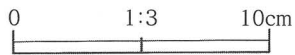
599



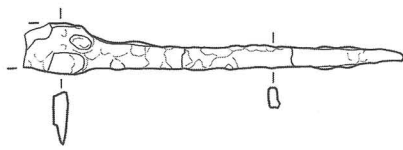
603



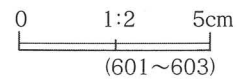
600



601

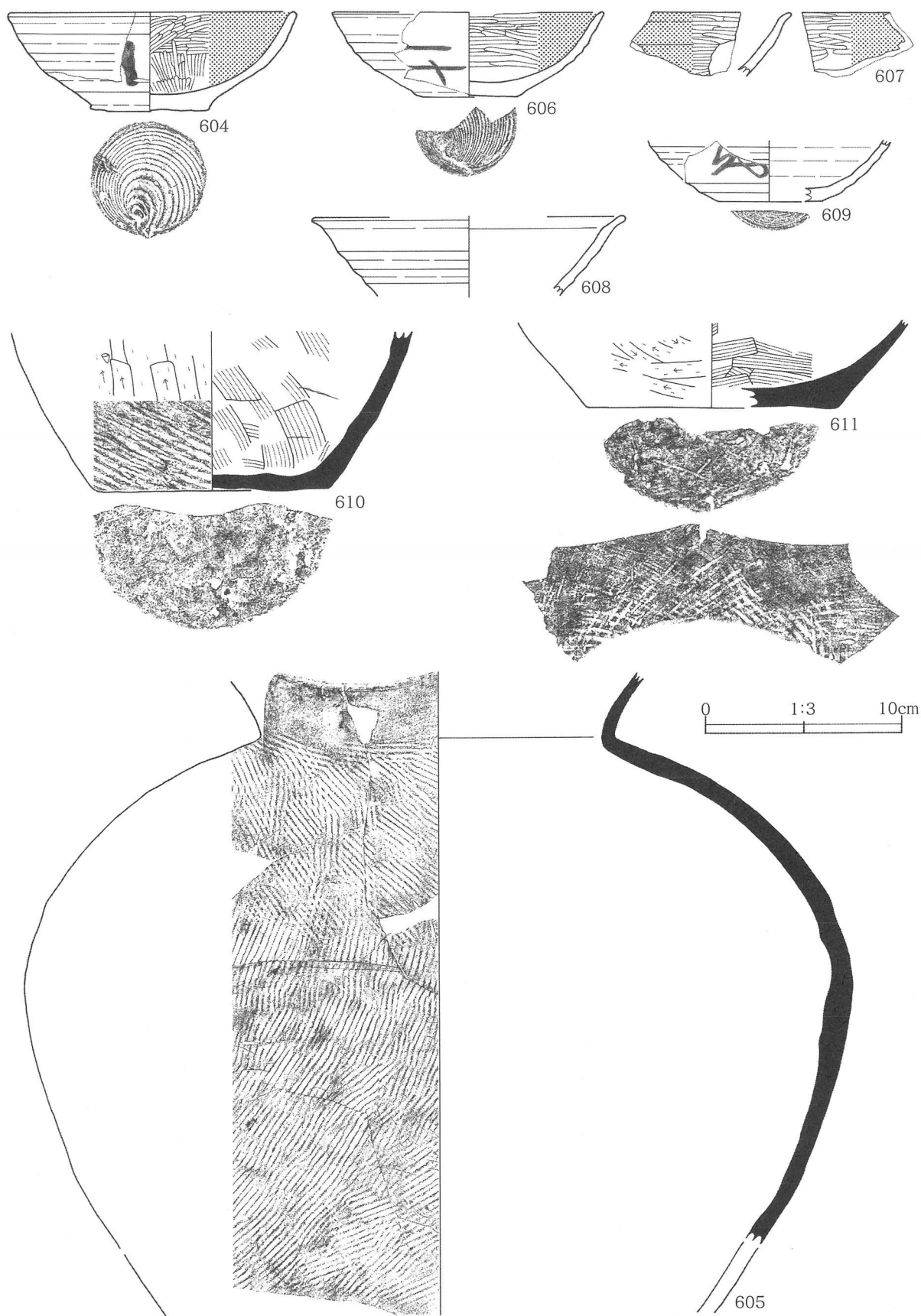


602

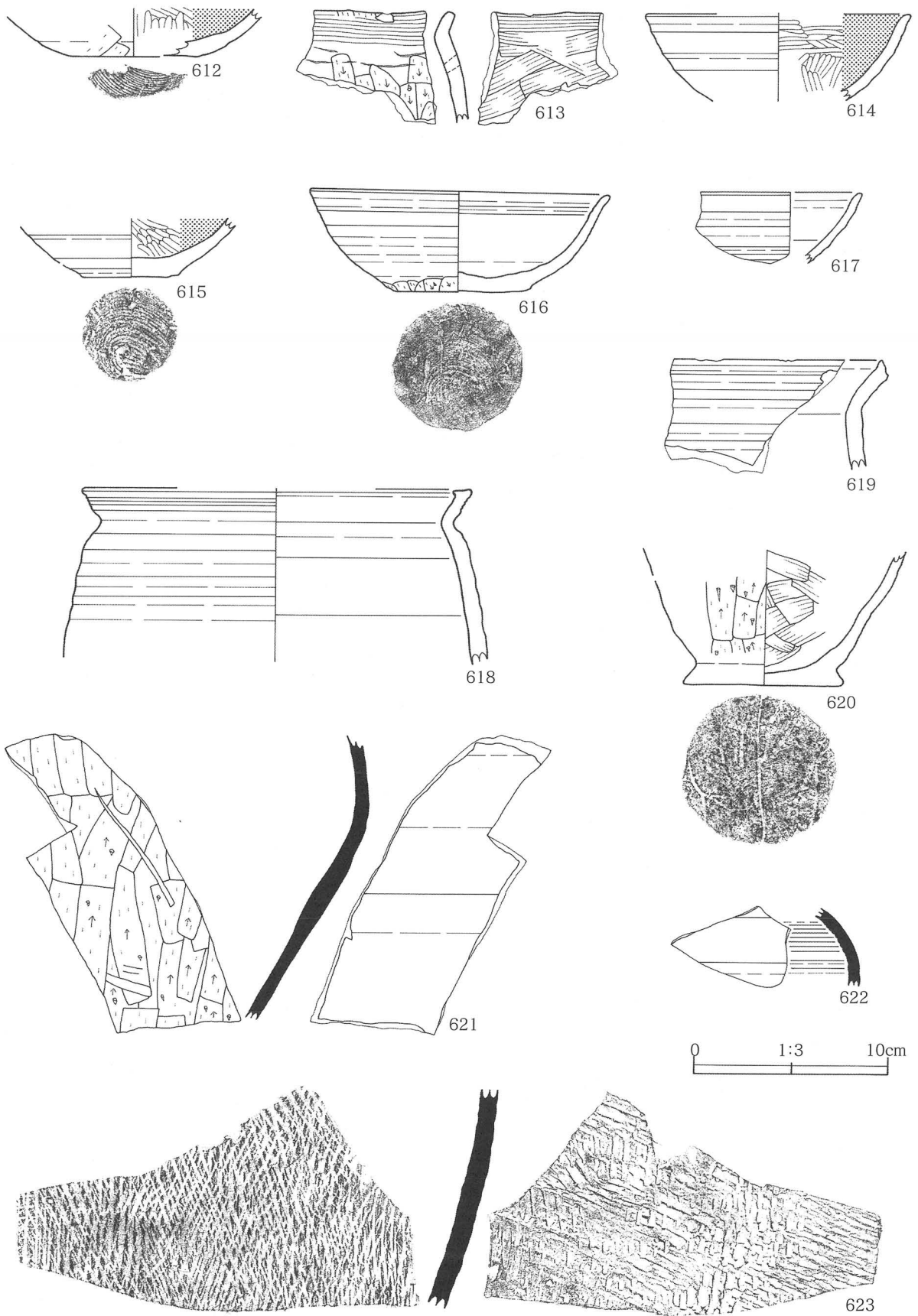


(601~603)

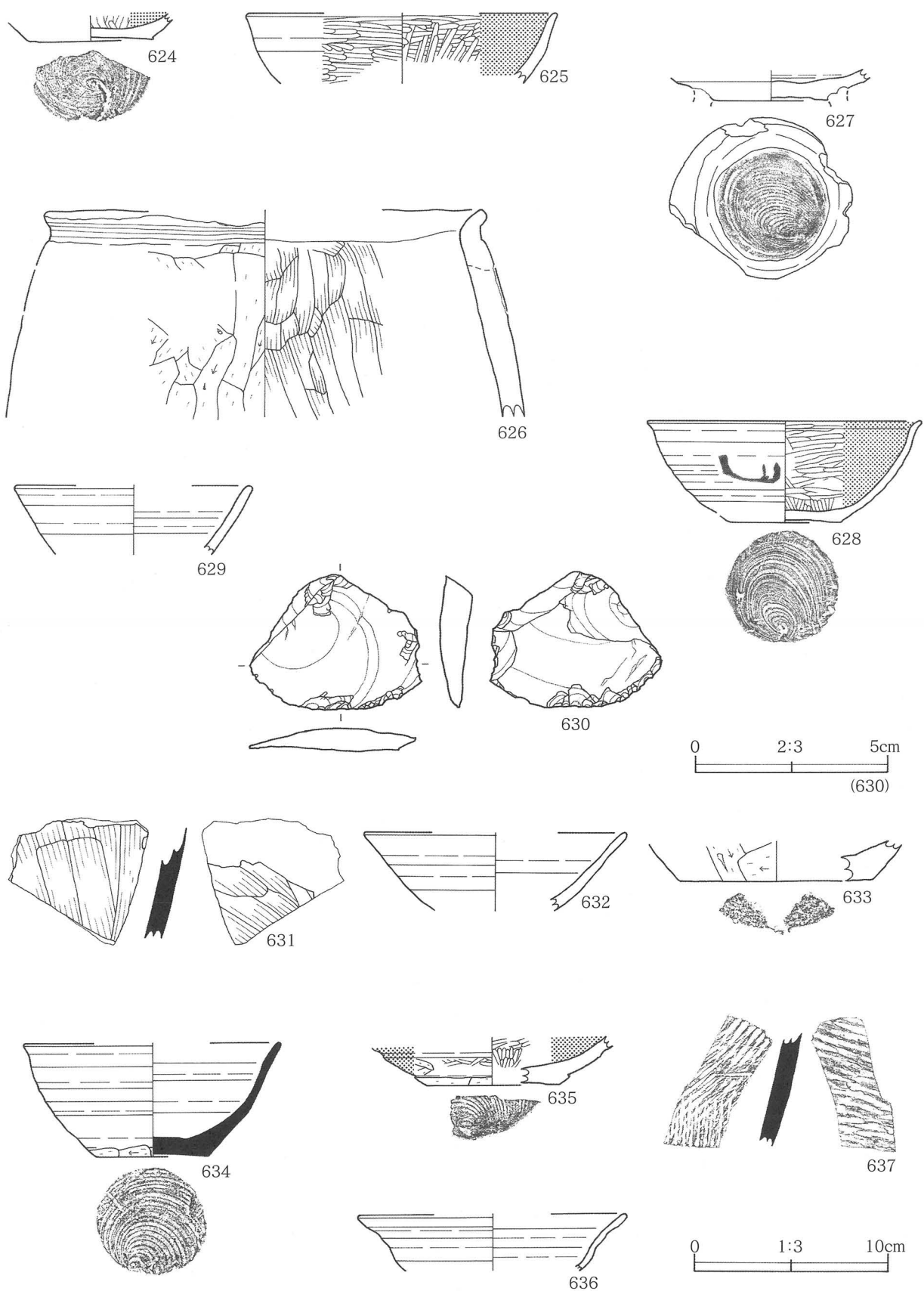
第105図 遺構内出土遺物 (52)



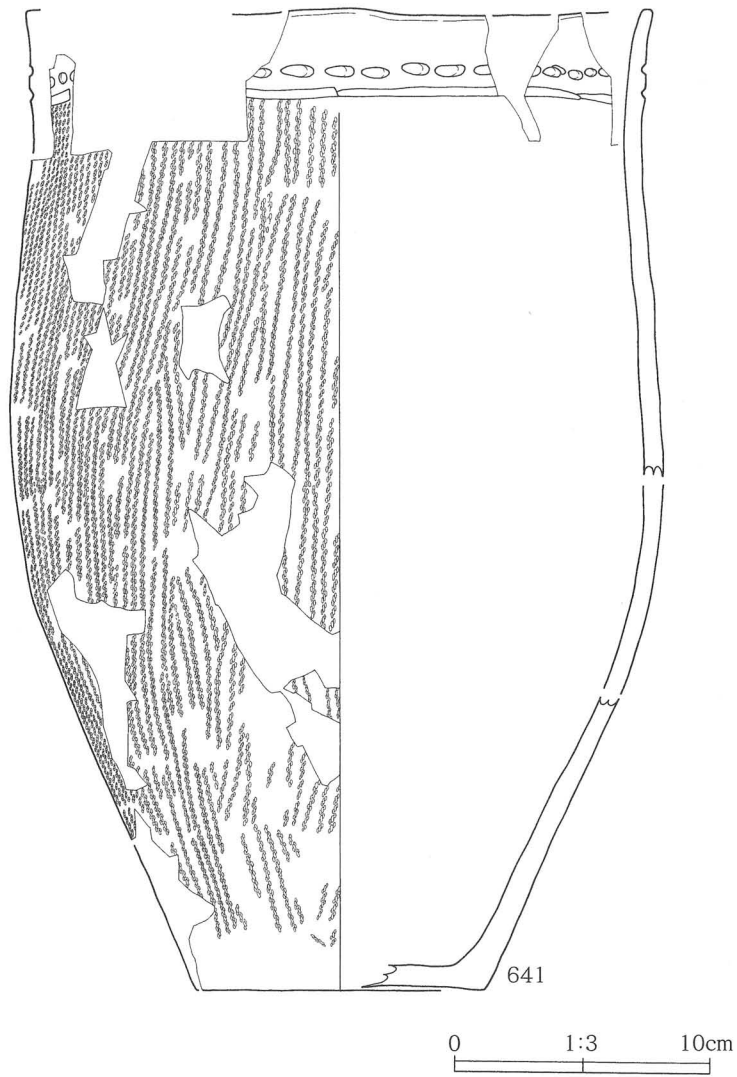
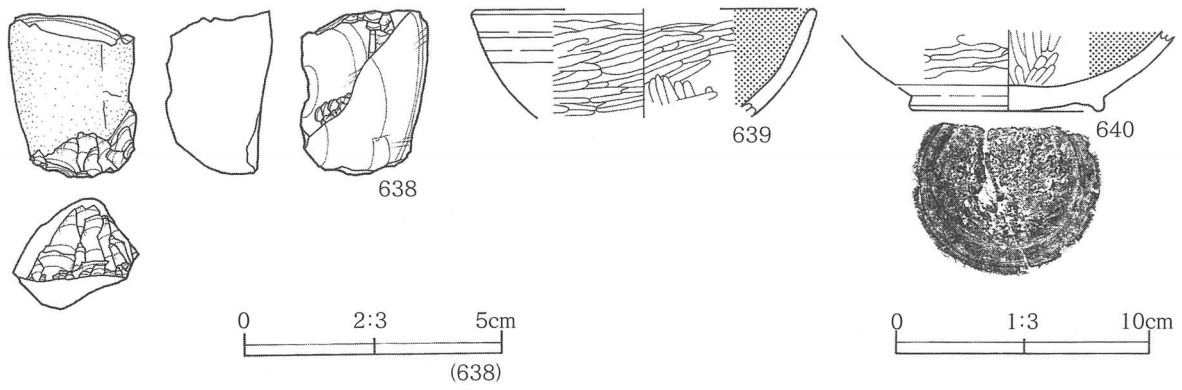
第106図 遺構内出土遺物 (53)



第107図 遺構内出土遺物 (54)



第108図 遺構内出土遺物 (55)



第109図 遺構内出土遺物 (56)

V 遺構外出土遺物

遺構外から出土した遺物の総数は、大コンテナ4箱弱である。土器は縄文時代早期・中期・後期・晩期に所属するもの、平安時代の土師器、須恵器がそれぞれ大1箱ずつ、石器類は中コンテナ1箱である。土製品には、縄文時代の円盤状土製品1点、腕輪1点、ミニチュア土器1点がある。石器類の内訳は、剥片石器・フレイク等が30点あまり、礫石器では縄文時代の磨製石斧・石皿・磨石が各1点ずつ出土した。また、金属製品では、平安時代と思われる鉄製品が4点、銭貨は1点で、「天聖元寶」（初鑄1023年）が出土した。

掲載した遺物は、土師器・須恵器（1001～1053）53点、金属製品（1054～1058）5点、剥片石器（1059～1066）8点（うち3点は古代に所属）、礫石器（1067～1069）3点、縄文時代の土器（1070～1142）73点・土製品（1143～1145）3点の計145点である。主体となる平安時代の遺物から、掲載順に記述する。

1 . 平安時代の遺物（第110～114図）

1001～1015は内黒の土師器坏、1016～1024は非内黒の坏である。これらからは、墨書土器・刻書土器を中心に選択、掲載した。1007・1008の2点の刻書以外は、いずれも破片の墨書資料であるが、文字の全体を窺い知ることはできない。1007・1008は、明らかに文字ではなくヘラ記号である。

1025～1039は土師器の甕で、ロクロ成形されているものは、1025・1028・1030・1038などである。また、1025・1028・1031・1034・1039は、内黒の甕で外面に細線が数条見られる破片である。中には同一個体も有りそうである。観察される細線は、記号とは捉えがたい。1033は体部下端に4条の細線が垂下するものである。1026・1027・1032・1035の4点は砂底土器である。

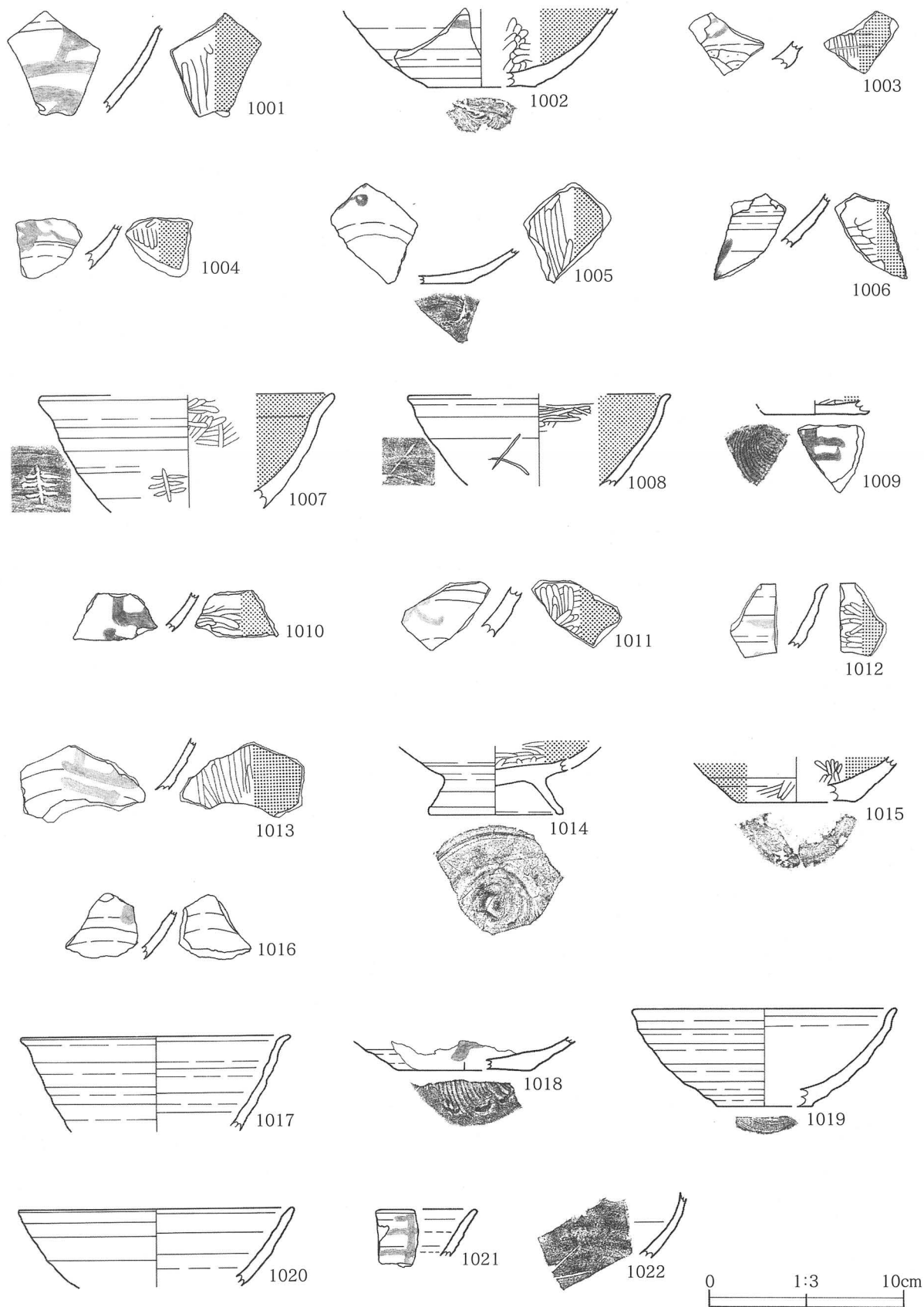
遺構外から出土した須恵器の器種には、坏（1040・1041）、壺（1042～1047）、甕類（1048～1053）がある。掲載にあたっては口縁部や頸部、底部等の破片を選んだが、それぞれ体部破片も多く出土している。二つの坏はかなりプロポーシオンが異なる個体で、時期差もあろうかと思われるもの。1049の底部には、焼成前にあけられた直径5mmほどの孔を有する。何らかの意味があるものか。1080には器表に貼り付く突帯がある個体である。

金属製品は、雁又鋸の基部（1054）、先端を欠く角釘（1055）、種類不明とした棒状の製品（1056）、やりがんな状の反りを持つ製品などが出土した。いずれも周辺にある住居に伴う遺物であろう。銭貨については上述のとおりである。

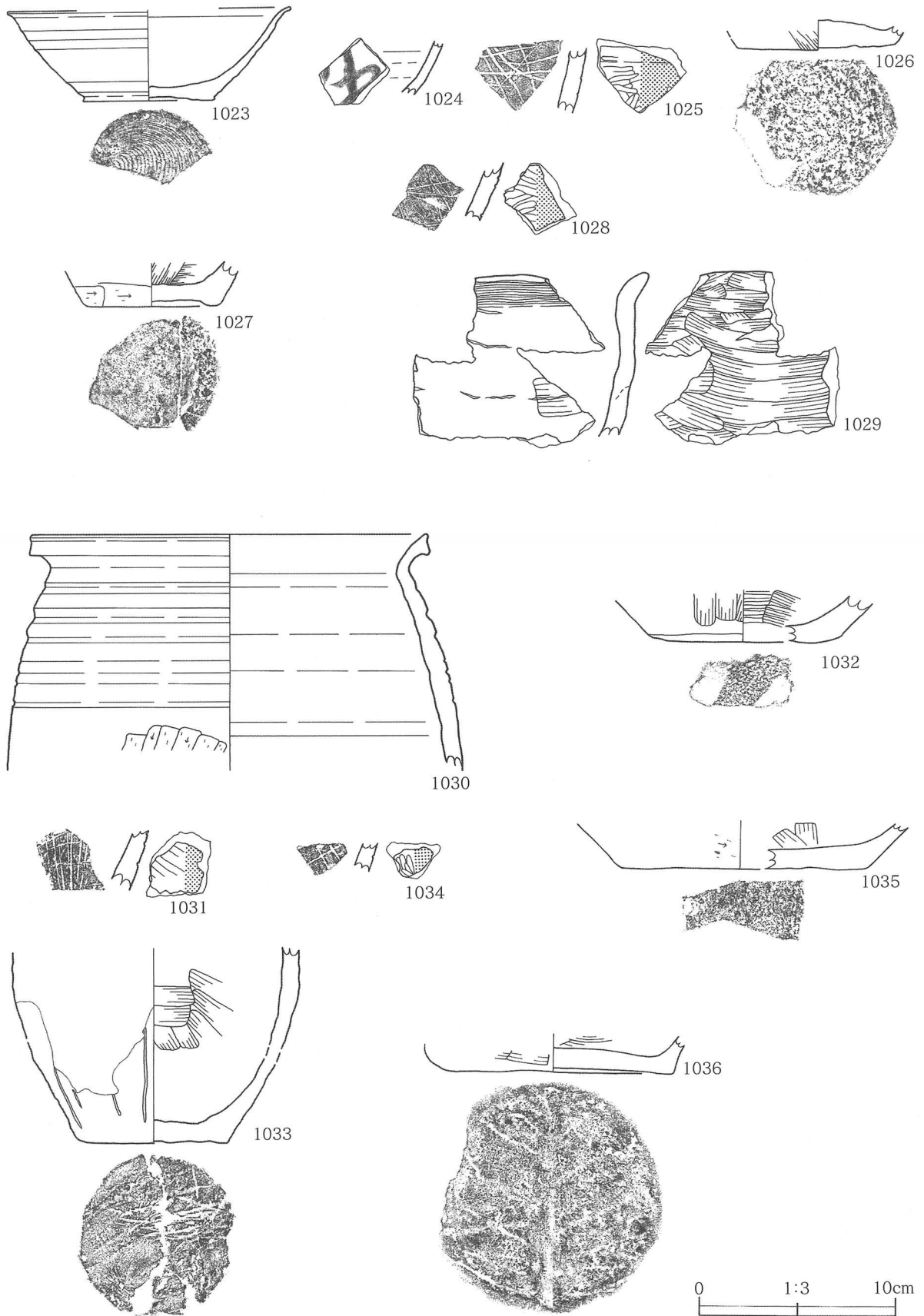
最後に石器であるが、黒曜石製の搔器が2点、細部加工されたフレイクが1点出土した。1064は円形搔器で、刃部がほぼ全周しているもの。1065は円形の素材の一部に刃部加工が施されるものである。1066も二辺に刃部が作り出されているように見える。これらは、古墳時代において皮なめし用の石器と言われているが、果たして平安期まで石器を用いたか、という問題が残る遺物である。

2 . 縄文時代の遺物（第114～118図）

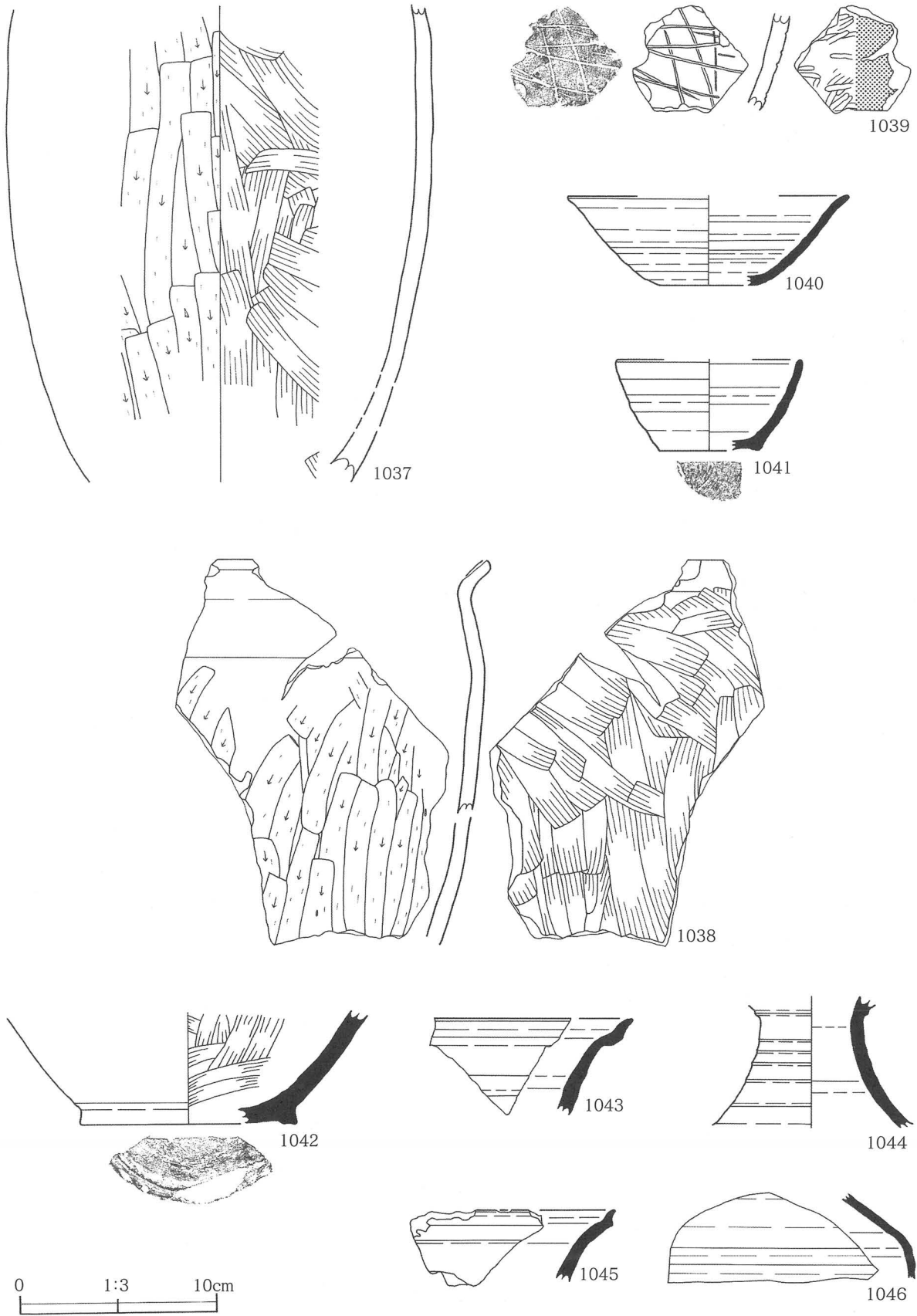
縄文時代に属する剥片石器は5点出土した。いずれも頁岩製で、内訳は、石鏃（1059・1060）2点、石匙（1061～1063）3点である。礫石器では、磨石（1067）、安山岩製の石皿（1068）、磨製石斧（1069）が出土しているが、1167の磨石は古代に属する可能性もある。この他は、フレイク・チップ類が30点あまり出土したのみで、全体的に縄文時代の石器は少ない。



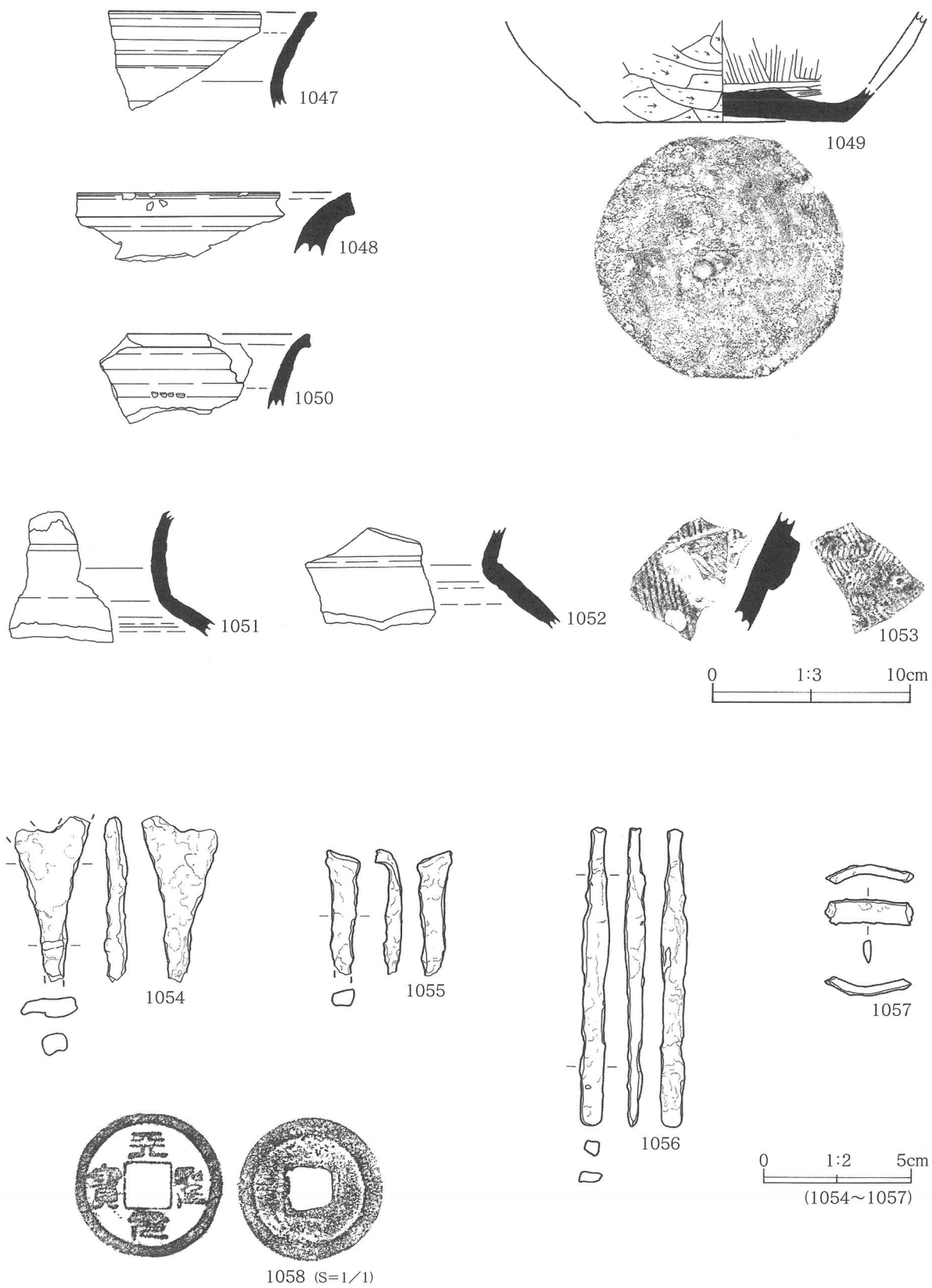
第110図 遺構外出土遺物 (1)



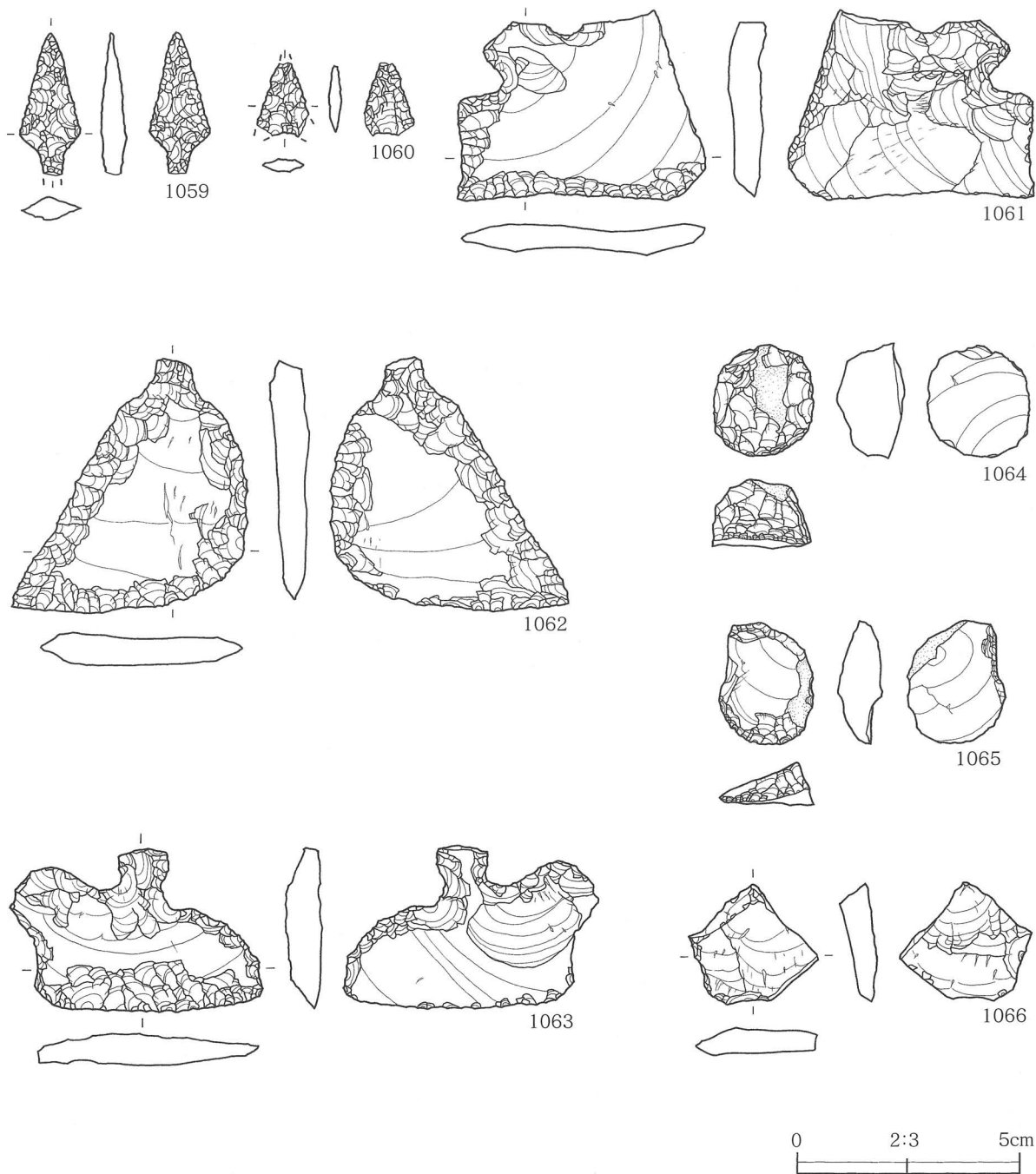
第111図 遺構外出土遺物 (2)



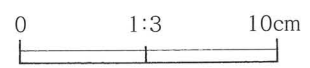
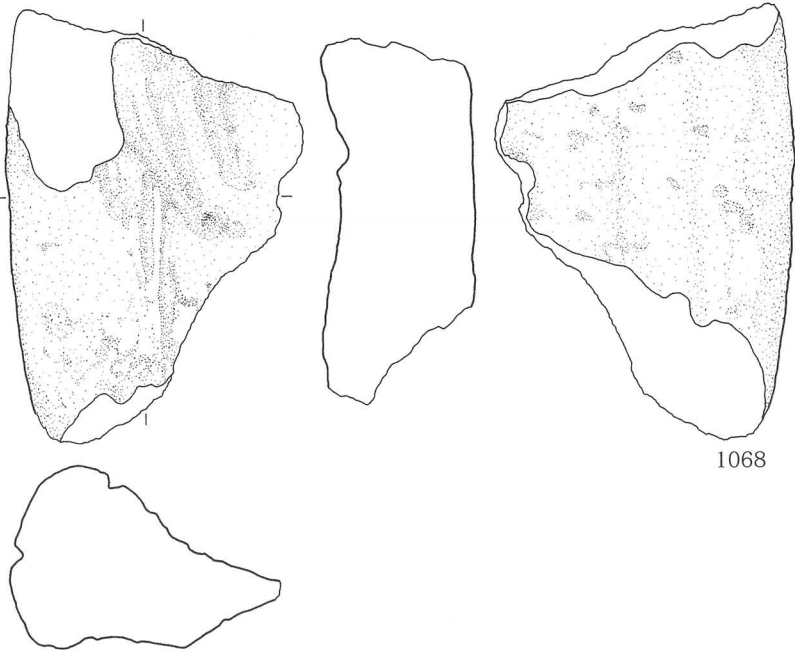
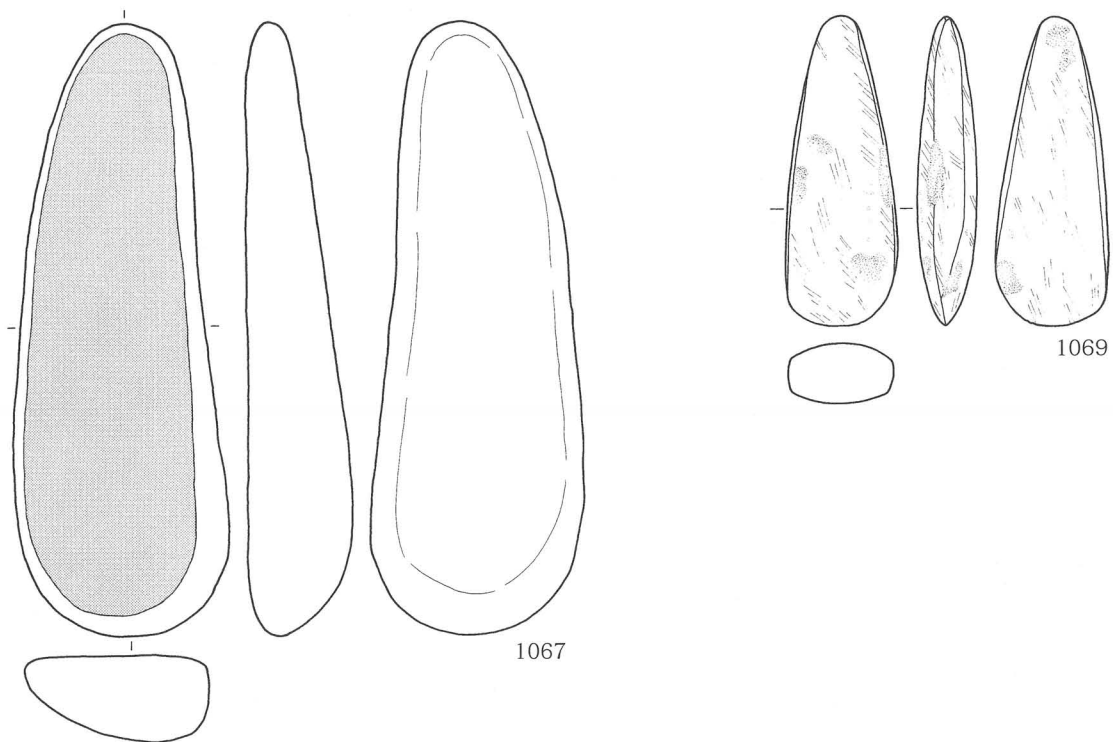
第112図 遺構外出土遺物 (3)



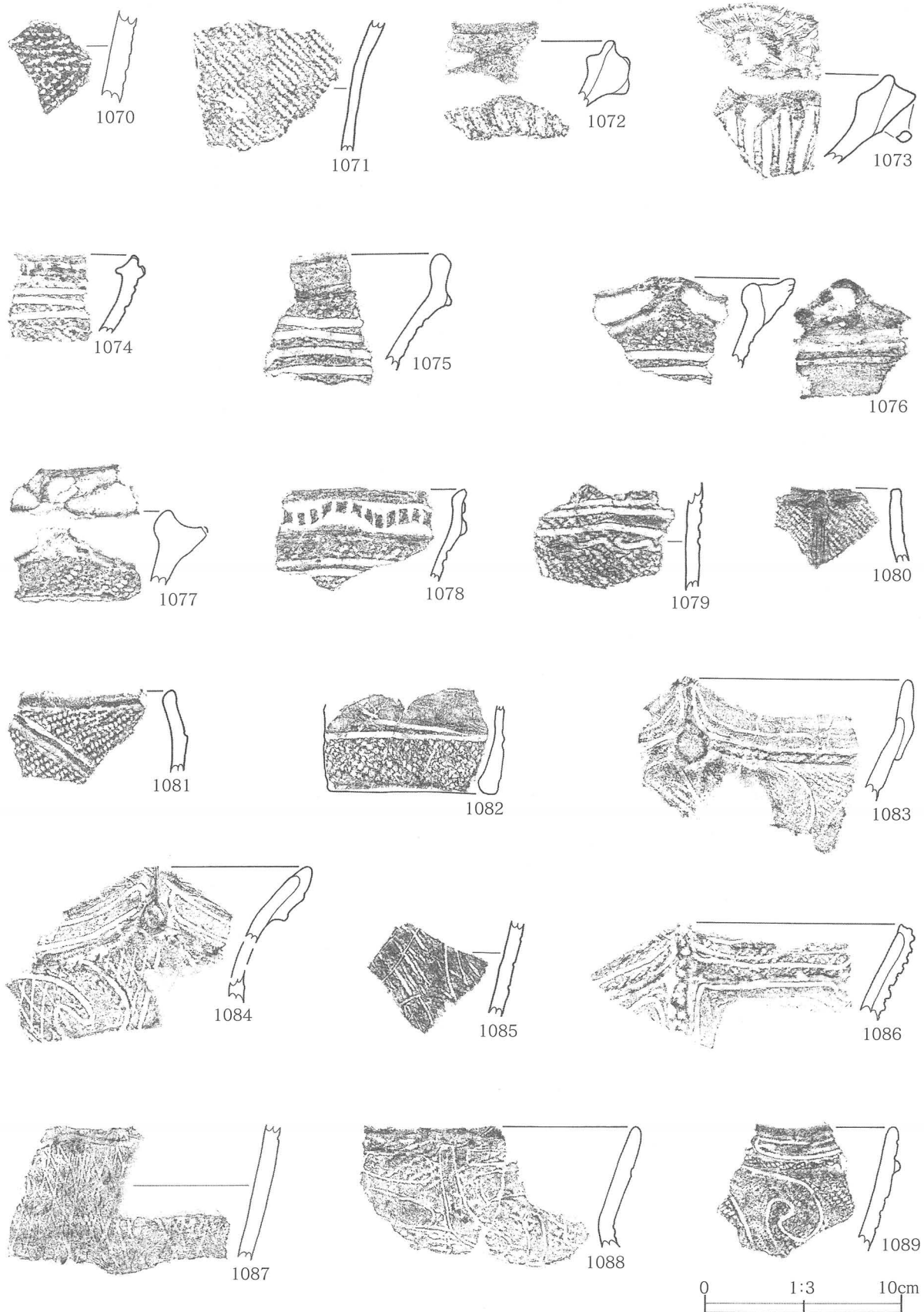
第113図 遺構外出土遺物 (4)



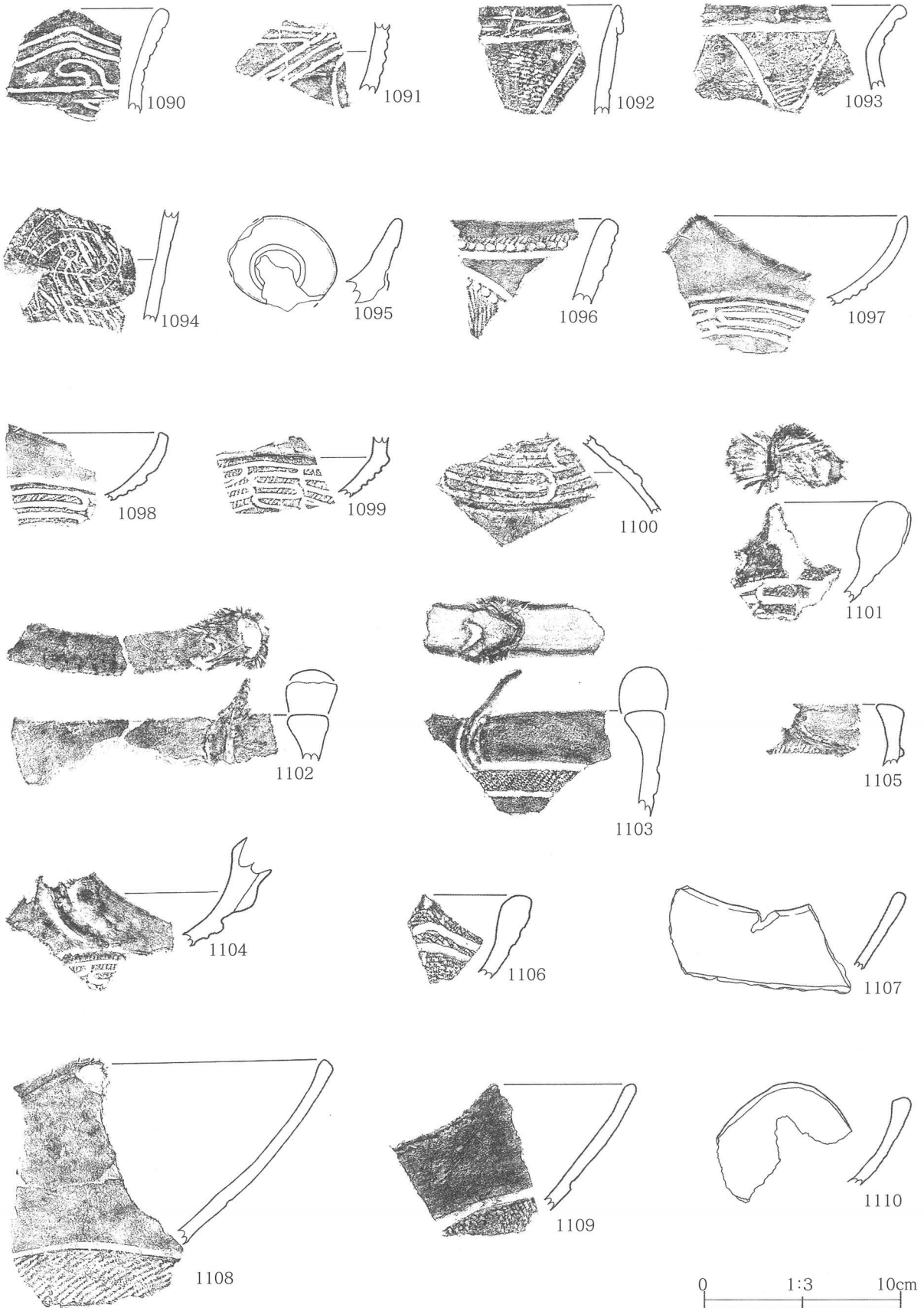
第114図 遺構外出土遺物 (5)



第115図 遺構外出土遺物 (6)



第116図 遺構外出土遺物 (7)



第117図 遺構外出土遺物 (8)



第118図 遺構外出土遺物 (9)



第119図 遺構外出土遺物 (10)

土器は、次の①～⑥の概ね6つの時期に大別される。⑦は時期不明の一群である。

- ①早期中葉 (1070) 1070は胴部破片で、2方向に貝殻複縁文が施されている。寺の沢式相当と思われる。
- ②中期前葉～中葉 (1072～1082) 概ね大木7式・大木8a式に属するものである。4単位の波状口縁あるいは平縁、口縁部の内湾、隆・沈線による区画、粘土紐貼付などの特徴を有する一群である。
- ③後期初頭～前葉 (1083～1094) いわゆる前十腰内と十腰内1式に相当すると思われる一群である。折り返し口縁、口縁への粘土紐貼付、方形文様や渦巻き文様の連結などの特徴をもつものである。
- ④後期中葉 (1095～1117) 十腰内2式と十腰内3式に属すると思われるものを一括した。大きく開く口縁部、波状縁と平縁、平行沈線文、沈線に沿う円形刺突、口唇部に連続する刻み目などが特徴として挙げられる。1113は、櫛歯状の縦位文様が見られるもので、ここに属するものか明らかでない。
- ⑤後期後葉 (1118～1123) 十腰内4式・十腰内5式相当と思われる一群である。胴部文様である入組文・木葉状文、襷掛け状文、連結する带状文、貼瘤などが特徴である。
- ⑥晩期前葉～中葉 (1124～1130) 三叉文系の文様が主体となる大洞B式と、それから派生した羊歯状文・連続する珠文などを主体とする大洞BC式、いずれも雲形文を主体とする大洞C1・大洞C2式のいずれかに属する一群である。器種には鉢・壺・注口形が見られる。
- ⑦時期不明 (1071・1131～1142) 詳細な時期がわからないものを一括した。1132～1135の鉢類、1137の注口形は、いずれも晩期後葉に属するか？1142は部分的に赤色顔料が付着している。

土製品は、直径4cmあまりの土製円盤 (1143)、腕輪の破片 (1144)、ミニチュア土器 (1145) が出土した。1144は内面外面ともきれいに磨かれ、推定される直径は9cm前後である。1145は天地が定かでない。

表3-1 遺物観察表(遺構内)

※1 法量の数値で数字の前に付く-は推定値、〈〉は現存値である。 ※2 分類で()は土師器の分類である。

番号	遺構名	出土地点	種類	器種	外面調整(口/体部)	内面調整(口/体部)	口径	底径	器高	底面	胎土	分類	備考
1	1号住	Q1埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ・下端再調整	ハラミガキ/ハラミガキ	14.4	5.4	5.3	一部再調整		A I a2	内黒、外面黒斑
2	1号住	Q1埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ハラミガキ/ハラミガキ	14.6	-6.9	4.9	回転糸切		A I b1	墨書「オ」、内黒とび
3	1号住	Q1埋土	土師器	坏	ロクロ・下端再調整	ハラミガキ	-	5.6	<2.1>	静止糸切		A I a2	内黒、人為的な欠け、内面に跡あり
4	1号住	Q1埋土	土師器	坏	ロクロ・下端再調整	ハラミガキ	-	-6	<2.7>	静止糸切		A I a2	内黒
5	1号住	Q2埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ハラミガキ/ハラミガキ	-16.2	6.9	5.1	回転糸切		A I b1	内黒、墨書「？」
6	1号住	Q1埋土	土師器	坏	ロクロ/	ハラミガキ/	-14.1	-	<4.4>			A I	内黒
7	1号住	Q2埋土	土師器	坏	ロクロ/	ハラミガキ	-	5	<2.9>	回転糸切		A I b2	内黒
8	1号住	Q2埋土	土師器	坏	ロクロ/	ハラミガキ/	-	-	-			A I	内黒、器表荒れ
9	1号住	Q2埋土	土師器	坏	ロクロ	ハラミガキ?	-	5.6	<2.1>	静止糸切?		A I b2	内黒とび?
10	1号住	Q2・ベルト埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ハラミガキ/ハラミガキ	14.1	6.6	5.1	回転糸切		A I b1	内黒
11	1号住	南北ベルト	土師器	坏	ロクロ	ハラミガキ	-	4.8	<2.3>	回転糸切		A I b2	内黒、墨書「？」
12	1号住	Q4埋土	土師器	坏	ロクロ・下端ハラケズリ	ハラミガキ	-	6.9	<3.1>	回転糸切		A I a1	内黒とび
13	1号住	Q4埋土	土師器	坏	ロクロ	ハラミガキ	-	-	-	回転糸切		A I	内黒、墨書「？」
14	1号住	Q4埋土	土師器	坏	ロクロ	ハラミガキ	-	-	-		金雲母	A I	内黒、墨書「百万」
15	1号住	Q4埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ハラミガキ/ハラミガキ	-	-	-			A I	内黒、墨書「？」
16	1号住	検出面	土師器	坏	ロクロ	ハラミガキ	-	-	-			A I	内黒、墨書「？」
17	1号住	検出面	土師器	坏	ロクロ	ハラミガキ	-	-	-			A I	内黒、墨書「？」
18	1号住	検出面	土師器	坏	ロクロ	ハラミガキ	-	-	-			A I	内黒、墨書「？」
19	1号住	南ベルトQ3・Q埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ハラミガキ/ハラミガキ	-14.7	6	4.9	回転糸切		A I b2	底部に黒斑、内黒とび
20	1号住	Q4埋土	土師器	坏	ロクロ	ハラミガキ	-	6	<3.3>	再調整		A I b2	内面あばた状のくぼみ
21	1号住	東西ベルト	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	-	-6.6	<3>	磨盤ハミ料		A I b1	内外面内黒
22	1号住	カマド	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	-15	6.6	5.3	回転糸切	金雲母	A II b1	
23	1号住	Q2埋土	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	-	-	-			A II	焼成後刻書「有」
24	1号住	Pit1埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-17.4	6	6.6			A II b2	
25	1号住	東西ベルト	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	-	-	-			A II	墨書「？」
26	1号住	東西ベルト	土師器	坏	ロクロ		-	-	-	回転糸切		A II	刻書「オ」焼成前
27	1号住	Q3埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ハラミガキ/ハラミガキ	-15.8	-	<5.7>			A I	
28	1号住	Q3埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-14.5	-4.5	4.8			A II b2	口縁部に軽い段
29	1号住	床上50cm	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	13.2	6	5.4			A II b2	灯明皿、ゆがみ
30	1号住	Q4埋土	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	-	5.4	<5.1>		金雲母	A II b2	

番号	遺構名	出土地点	種類	器種	外面調整(口/体部)	内面調整(口/体部)	口径	底径	器高	底面	胎土	分類	備考
31	1号住	Q4埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-14.4	-6.3	5.7	-	金雲母	A IIb1	
32	1号住	Q4埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-14.4	-	<3.6>	回転糸切	小磯多	A II	
33	1号住	Q2埋土	土師器	坏(高台付)	/ロクロ	/ロクロ	-	7.2	<2.1>	回転糸切		A IIc	高台付
34	1号住	土器1	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	13.5	6.6	5.1	回転糸切		A IIc	高台付
35	1号住	Q1埋土	(須)	坏	/ロクロ	/ロクロ	-	-5.4	<1.8>	回転糸切		A IIb2	還元不足
36	1号住	Q2埋土	(須)	坏	/ロクロ	/ロクロ	-	5.2	<2.4>	-		A IIb2	還元不足
37	1号住	東西ベルト	(須)	坏	ロクロ/ヘラケズリ	ロクロ/ロクロ	-13.8	4.8	4.8	高台		A IIa2	還元不足、墨書「?」
38	1号住	カマド・埋土	土師器	甕	ロクロ	ロクロ	14.3	-	<6.6>	縁線跡		(A II)	
39	1号住	左袖・Pit1	土師器	甕	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-	-	-	回転糸切		(A II)	
40	1号住	煙道内	土師器	甕	ヨコナデ/ヘラケズリ	ヨコナデ/ナデ(指)	-	-	-	回転糸切		(A I)	
41	1号住	カマド・Pit1	土師器	甕	輪轆痕/ナタケズリ	ヘラケズリ/ヘラケズリ	16.5	-5.7	23.9	再調整		(A I c)	
42	1号住	Pit1	土師器	甕	/ロクロ	/ロクロ	-	7.5	<7.8>			(A IIb)	
43	1号住	Pit1	土師器	甕	ロクロ	ロクロ	-15.6	-	<8>			(A II)	
44	1号住	Q1埋土	土師器	甕	ヨコナデ/ヘラケズリ	ヨコナデ/ヨコナデ	-14.7	-	<5.7>			(A I b)	
45	1号住	Q2埋土	土師器	甕	/ナデ	/ヘラナデ	-	-10.3	6.6			(A I b)	粗いつくり
46	1号住	Q3埋土	土師器	甕	/ヘラケズリ(下端)	/ハケメ	-	-	-	回転糸切		(A I)	外面輪種痕明瞭
47	1号住	検出面	土師器	甕	ヨコナデ・ミガキ/	ヘラミガキ/	-	-	-			(A I)	内黒甕
48	1号住	左袖・埋土	土師器	甕	ヨコナデ/ヘラケズリ	ハケメ	-	-	-			(A IIa)	
49	1号住	煙道内	土師器	甕	/ナデ	ハケメ	-	-	-			(A IIa)	
50	1号住	カマド・Pit1・右袖内	土師器	甕	/ロクロ	/ロクロ	-	8.3	<8.7>			(A IIb)	
51	1号住	Pit1	土師器	甕	ヨコナデ/ナデ	ヨコナデ/ヘラナデ	-	-	-			(A I b)	
52	1号住	Q2埋土	土師器	甕	/ヘラケズリ	/ナデ	-	-	-			(A I b)	器表灰色
53	1号住	Q2埋土	土師器	甕	/ヘラケズリ	/ヘラミガキ	-	9.3	<1.5>			(A I)	内黒甕の底部
54	1号住	Q3埋土	土師器	甕	ロクロ→ヨコナデ?/	ヨコナデ/	-	-	-	回転糸切		(A II)	
55	1号住	Q3埋土	土師器	甕	/ヘラケズリ	/ハケメ	-	-	-			(A I c)	
56	1号住	カマド・埋土	土師器	甕	ヨコナデ/ロクロ→ヘラケズリ	ロクロ	13.2	6.9	12.3			(A IIa)	
57	1号住	カマド	土師器	甕	ヨコナデ/ヘラケズリ	ヨコナデ/ヘラナデ	-	-	-	跡なし		(A I b)	
58	1号住	Pit1・埋土	土師器	甕	/ロクロ	/ロクロ	-	-	-			(A II)	刻書「+」焼成前
59	1号住	Q2埋土	土師器	甕	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-13	-	<5.1>	直線状の線あり		(A II)	赤焼き
60	1号住	Q2埋土	土師器	甕	ヨコナデ/ヘラナデ	ヨコナデ/ナデ	11.7	-	<3>			(A I)	

番号	遺構名	出土地点	種類	器種	外面調整(口/体部)	内面調整(口/体部)	口径	底径	器高	底面	胎土	分類	備考
61	1号住	東西バルト	土師器	甕	/ハラナデ	/ハラミガキ	-	5.4	<1.9>	-		(A I)	内黒甕
62	1号住	Q3埋土	土師器	甕	-	-	-	-	-	砂底		?	
63	1号住	Q4埋土	土師器	甕	/ハラケズリ	/ナデ	-	9.9	<4.2>	砂底		(A II)	
64	1号住	Q2埋土	土師器	甕	/不明	/ハラミガキ	-	-	-	-		(A II)	内黒甕、外面に焼成前の刻書「?」
65	1号住	土器2	土師器	甕	ナデ/ナデ	ナデ/ナデ	22	-	<13.8>	-		(A I)	外面器表に付着物
66	1号住	土器4・Q2埋土	土師器	甕	ヨコナデ/ナデ・下端ハラケズリ	ヨコナデ/ハラナデ・ナデ	-21.3	-	<23.6>	-		(A I b)	
67	1号住	Q3埋土	土師器	羽釜	ロクロ/	ロクロ/	-	-	-	-		-	
68	1号住	南北バルト	土師器	壺?	/ハラケズリ	/ナデ	-	5.1	<6>	なし		A	体部下端との境不明瞭、特殊な器形
69	1号住	Q2埋土	須恵器	坏	ロクロ	ロクロ	-	-	-	-		B	
70	1号住	Q3埋土	須恵器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-	-	-	-		B	
71	1号住	Q3埋土	須恵器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-	-	-	-		B	
72	1号住	Q3埋土	須恵器	壺	/カキメ	/カキメ	-	-	-	-		B	
73	1号住	Q3・東西バルト埋土	須恵器	壺	/ロクロ	/ロクロ	-	-	-	-		B	
74	1号住	Q3埋土	須恵器	壺	/ロクロ	/ロクロ	-	-	-	-		B	
75	1号住	Q3埋土	須恵器	甕	/タタキメ	/ロクロ	-	-	-	-		B	
76	1号住	煙道内	須恵器	甕	ハラケズリ	カキメ	-	10.5	<12.6>	-		B	
77	1号住	Q1埋土	須恵器	甕	ロクロ	ロクロ	-	-	-	-		B	
78	1号住	Q2埋土	須恵器	甕	/タタキメ	/当て具痕(半円状)	-	-	-	-		B	
79	1号住	東西バルト	須恵器	甕	/タタキメ	/当て具痕(半円)	-	-	-	-		B	
80	1号住	Q3埋土・H31・H32II層	須恵器	甕	ロクロ	ロクロ	-	7.8	<2.6>	-		B	
81	1号住	Q3埋土	須恵器	甕	/ハラケズリ	/ナデ	-	9.7	<1.8>	-		B	
82	1号住	Q3埋土	須恵器	甕	/ハラケズリ	/ロクロ	-	-	-	-		B	
83	1号住	Q3埋土	須恵器	甕	/ロクロ	/ロクロ	-	-	-	-		B	
84	1号住	Q2埋土	須恵器	大甕	/タタキメ	/当て具痕(細い)	-	-	-	-		B	
85	1号住	東西バルト	須恵器	大甕	/タタキメ	-	-	-	-	-		B	
86	1号住	Q3埋土	須恵器	大甕	/タタキメ	/当て具痕	-	-	-	-		B	
87	1号住	土器3	須恵器	大甕	/タタキメ	/当て具痕	-	-	-	-		B	
88	1号住	Q4埋土	須恵器	大甕	/タタキメ	/当て具痕	-	-	-	-		B	
89	1号住	Q1埋土To-a下	土製品	羽口	長さ<4.2cm>		-	-	-	-		B	支脚転用
90	1号住	カマド内	土製品	羽口	長さ<25.5cm>、直径6.6cm、内径3.3cm		-	-	-	-			支脚転用

番号	遺構名	出土地点	種類	器種	外面調整(口/体部)	内面調整(口/体部)	口径	底径	器高	底面	胎土	分類	備考
91	1号住	埋土上位	鉄製品	鉄鎌	長さ:7.5cm、幅:0.8~3.1cm、厚さ:0.35cm、重さ:21.4g								
92	1号住	Q4埋土To-a下	鉄製品	鉄鎌	長さ:10.9cm、幅:0.3~3.8cm、厚さ:0.2~0.4cm、重さ:15.9g								
93	1号住	埋土上位	鉄製品	鉄鎌	長さ:10.7cm、幅:0.3~2.5cm、厚さ:0.35cm、重さ:20.2g								
94	1号住	Q4埋土	鉄製品	刀子	長さ:-9.1cm、幅:0.6~0.9cm、厚さ:0.2cm、重さ:8.6g								捻り
95	1号住	Q2床面	鉄製品	釘?	長さ:-5.9cm、幅:0.5cm、厚さ:0.5cm、重さ:4.2g								捻り、錫杖状鉄製品?
96	1号住	Q3埋土To-a下	鉄製品	未製品	長さ:15.3cm、幅:0.9cm、厚さ:0.5cm、重さ:18.4g								孔あり
97	1号住	Q1埋土To-a下	鉄製品	金具?	長さ:-5.2cm、幅:1.4cm、厚さ:0.3cm、重さ:4.4g								
98	2号住	Q1埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ハラミガキ/ハラミガキ	15.3	6	5.1	回転糸切		A I b2	内黒
99	2号住	Q1埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ハラミガキ/ハラミガキ	14.7	6	4.6	回転糸切		A I b2	内黒
100	2号住	Q4埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ハラミガキ/ハラミガキ	-15	5.4	5	回転糸切		A I b2	内黒
101	2号住	Q3・ベルト埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ハラミガキ/ハラミガキ	12.4	5.7	5.2	回転糸切		A I b2	内黒、器高有り、口径小
102	2号住	Q3埋土	土師器	坏	/ロクロ	/ハラミガキ	-	6.6	<2.7>	回転糸切		A I b1	内黒
103	2号住	Q1・Q2埋土	土師器	坏	/ロクロ	/ハラミガキ	-	6.3	<3.6>	回転糸切		A I b1	内黒、墨書「?」
104	2号住	土器3	土師器	坏	/ロクロ・下端ヘラケズリ	/ハラミガキ	-	6.6	<3.3>	静止糸切		A I a2	内黒
105	2号住	Q2埋土	土師器	坏	/ロクロ	/ハラミガキ	-	5.4	<2.9>	回転糸切		A I b1	内黒
106	2号住	Q3埋土	土師器	坏	/ロクロ	/ハラミガキ	-	6	<1.6>	回転糸切		A I b2	墨書(底部)「?」「酒カ」
107	2号住	Q2埋土・攪乱	土師器	坏	ロクロ/	ハラミガキ/	12.9	-	<3.0>	-		A I	
108	2号住	ベルト・埋土	土師器	坏	ロクロ/	ハラミガキ/	-	-	-	-		A I	灯明皿?油煙
109	2号住	Q3埋土	土師器	坏	ロクロ/	ハラミガキ/	-	-	-	-		A I	墨書「十」
110	2号住	Q1埋土	土師器	坏	ロクロ/	ハラミガキ/	-	-	-	-		A I	墨書「?」
111	2号住	Q2・貼床・床面	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	13.5	6.3	4.2	ナデ		A II b1	糸切り痕無
112	2号住	Q1埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-14.7	6.3	4.6	回転糸切		A II a1	
113	2号住	Q2埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ		-13.5	-5.1	5.1	-	しっとり	A II b2	
114	2号住	Q3埋土	土師器	坏	ロクロ/	ロクロ/	-13.5	-	<4.4>	-	しっとり	A II	
115	2号住	Q2埋土	土師器	坏	ロクロ/	ロクロ/	-	-	-	-		A II	墨書「?」
116	2号住	Q2埋土	土師器	坏	/ロクロ	/ロクロ	-	5.7	<4.5>	回転糸切		A II b2	
117	2号住	Q2・Q3埋土	土師器	坏	/ロクロ	/ロクロ	-	5.7	<2.1>	回転糸切		A II b2	
118	2号住	Q4埋土	土師器	坏	/ロクロ	/ロクロ	-	5.7	<2.5>	回転糸切		A II b2	内面に付着物
119	2号住	Q3埋土	土師器	坏	/ロクロ	/ロクロ	-	-	-	-		A II	墨書「?」
120	2号住	Q1埋土	土師器	把手付	ミガキ	-	-	-	-	-		-	

番号	遺構名	出土地点	種類	器種	外面調整(口/体部)	内面調整(口/体部)	口径	底径	器高	底面	胎土	分類	備考	
121	2号住	Q1~3埋土	土師器	甕	ヨコナデ/ヘラケズリ	ヨコナデ/ヘラナデ?	-17.7	-8.5	20.4	-	(A I)	(A I)	赤焼き、外面にヘラの縞(備成前刻書)	
122	2号住	Q1埋土	土師器	甕	ヨコナデ/ヘラケズリ	ヨコナデ/ヘラナデ	-23.4	-	<30.0>	-	(A II a)	(A II a)	赤焼き	
123	2号住	土器2	土師器	甕	/ヘラケズリ	/ヨコナデ・ハケメ	-	-	<26.1>	-	(A II a)	(A II a)	赤焼き	
124	2号住	土器2、カマド内	土師器	甕	/ヘラケズリ・ナデ	/ヘラナデ?	-	7.8	<6.9>	痕なし	(A I b)	(A I b)		
125	2号住	支脚・煙道内	土師器	甕	ヨコナデ/ヘラケズリ	ヨコナデ/ハケメ	-	7.8	<24.5>	-	(A I b)	(A I b)	刻書「一」焼成前	
126	2号住	Q1・Q2・P1埋土	土師器	甕	ヨコナデ/ハケメ	ハケメ/ハケメ	-20.1	-	-	痕なし	(A I)	(A I)	a・b体あり	
127	2号住	Q1埋土	土師器	甕	ヨコナデ・ヘラケズリ/ヘラケズリ	ヨコナデ/ヘラナデ	-20.4	-	<13.2>	-	(A I b)	(A I b)	口唇短い	
128	2号住	Q1・Q4埋土	土師器	甕	ロクロ/ロクロ	ヨコナデ/ハケメ	-22.2	-	<6.9>	-	(A II)	(A II)	赤焼き	
129	2号住	Q3埋土	土師器	甕	ヨコナデ/ハケメ	ヨコナデ/ハケメ	-18.3	-	<6.6>	-	(A I)	(A I)		
130	2号住	右袖内	土師器	甕	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-18	-	<7.5>	-	(A II)	(A II)		
131	2号住	右袖内	土師器	甕	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-24.3	-	<4.5>	-	(A II)	(A II)	赤焼き	
132	2号住	Q3埋土	土師器	甕	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-14.1	-	<5.7>	-	(A II)	(A II)	赤焼き	
133	2号住	Q1埋土	土師器	甕	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-14.1	-	<4.8>	-	(A II)	(A II)	赤焼き	
134	2号住	Q1埋土	土師器	甕	ロクロ/	ロクロ/	-13.1	-	<3.6>	-	(A II)	(A II)	赤焼き	
135	2号住	Q2埋土	土師器	甕	ヨコナデ/ヘラナデ	ヨコナデ/ヘラナデ	-22.2	-	<6.0>	-	(A I)	(A I)		
136	2号住	Q1埋土	土師器	甕	ロクロ/ヘラナデ	ロクロ/ロクロ	-11.7	-	<7.2>	-	(A II a)	(A II a)		
137	2号住	Q1埋土	土師器	甕	/ヘラケズリ	/ヘラナデ	-	-	-	-	(A I b)	(A I b)	粗雑で軽い	
138	2号住	ヘルト埋土	土師器	甕	ナデ/ナデ	ナデ/ナデ	-	-	-	-	(A I)	(A I)	粗雑で口縁短い	
139	2号住	Q1埋土	土師器	甕	/ヘラケズリ	/ナデ	-	12.6	<5.1>	痕なし	(A I b)	(A I b)		
140	2号住	Q2・カマド内・攪乱	土師器	甕	/下端にタタキメ	/ハケメ	-	9	<12.3>	砂底?	(A I b)	(A I b)		
141	2号住	Q1埋土	土師器	甕	/タタキメ	/ハケメ	-	6.6	<5.4>	一部タタキ	(A I b)	(A I b)		
142	2号住	Q2・バルト	土師器	甕	/ハケメ	/ヘラナデ	-	8.4	<11.1>	木葉痕	(A I)	(A I)	外面下端張り出し	
143	2号住	Q2埋土	土師器	甕	/ヘラケズリ	/ヘラナデ	-	9.3	<5.6>	砂底	金雲母	(A I b)	(A I b)	
144	2号住	Q1埋土	土師器	羽釜	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	6	-	<3.6>	-	-	-	外面に炭化物付着	
145	2号住	Q2埋土	須恵器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	15	6.6	6	回転糸切	B1	B1		
146	2号住	土器1	須恵器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	16.2	6.6	4.8	回転糸切	B1	B1		
147	2号住	Q3埋土	須恵器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	13.5	6	5.1	回転糸切	B2	B2		
148	2号住	Q2埋土	須恵器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-13.5	5.4	<5.4>	回転糸切	B2	B2		
149	2号住	カマド内、攪乱	須恵器	坏	/ロクロ	/ロクロ	-	6	<2.7>	回転糸切	B2	B2	墨書「?」	
150	2号住	カマド右焼土	須恵器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-15	7.2	5.1	回転糸切	B1	B1		

番号	遺構名	出土地点	種類	器種	外面調整(口/体部)	内面調整(口/体部)	口径	底径	器高	底面	胎土	分類	備考
151	2号住	床面・貼床	須恵器	坏	ロクロ/	ロクロ/	-	-	-	-		B	
152	2号住	Q4埋土	須恵器	坏	ロクロ/	ロクロ/	-	-	-	-		B	
153	2号住	Q3埋土	須恵器	長頸壺	/突起・自然釉	/ナデ	-	-	<4.5>			B	
154	2号住	Q2埋土	須恵器	長頸壺	ロクロ/	ロクロ/	-12	-	<4.2>			B	
155	2号住	煙出付近II層	須恵器	長頸壺	ロクロ/	ロクロ/	-	-	<5.7>			B	
156	2号住	Q3埋土	須恵器	壺?	/タタキメ	/ナデ	-	-	-			B	
157	2号住	Q3埋土	須恵器	甕	/タタキメ	/当て具痕	-	-	-			B	
158	2号住	Q1埋土	須恵器	大甕	/タタキメ	/当て具痕	-	-	-			B	
159	2号住	Q1・Q2・攪乱	須恵器	大甕	/タタキメ・ハラケズリ	/ナデ	-	-13.8	<5.1>	自然釉		B	
160	2号住	Q3埋土	須恵器	大甕	/タタキメ	/当て具痕	-	-	-			B	
161	2号住	Q3埋土	須恵器	大甕	/タタキメ	/当て具痕	-	-	-			B	
162	2号住	Q1埋土	土製品	羽口	長さ:-5.1cm、幅:-5.4cm、厚さ:2.4cm								
163	2号住	Q2埋土	鉄製品	刀子	長さ:-6.4cm、幅:1.3cm、厚さ:0.1~0.3cm、重さ:8.6g								
164	2号住	Q1埋土	鉄製品	刀子	長さ:-13.5cm、幅:0.5~1.3cm、厚さ:0.1~0.3cm、重さ:14.6g								
165	3号住	Pt1埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ハラミガキ/ハラミガキ	-13.5	6	5.7	回転糸切		A I b2	内黒
166	3号住	Pt1埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ハラミガキ/ハラミガキ	-13.5	-	<4.5>	-		A I	内黒
167	3号住	Pt1埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ハラミガキ/ハラミガキ	-	-	-			A I	内黒
168	3号住	Pt1埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ハラミガキ/ハラミガキ	-	-	-			A I	内黒、内外面油煙付着
169	3号住	ベルト・Q2・Q3	土師器	坏	ロクロ/ロクロ下端ハラケズリ	ハラミガキ/ハラミガキ	13.8	5.9	4.9	静止糸切		A I a2	内黒
170	3号住	ベルト	土師器	坏	/ロクロ	/ハラミガキ	-	5.4	<4.5>	回転糸切		A I b2	内黒
171	3号住	検出面	土師器	坏	/ロクロ	/ハラミガキ	-	7.2	<3.5>	回転糸切		A I b1	内黒、底部に刻み?
172	3号住	ベルト	土師器	坏	/ロクロ下端ハラケズリ	ハラミガキ/ハラミガキ	-	6	<1.8>	回転糸切		A I b2	内黒
173	3号住	検出面	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ハラミガキ/ハラミガキ	-15.3	-	<4.2>	-		A I	内黒
174	3号住	Q2埋土	土師器	坏	/下端ハラケズリ	/ハラミガキ	-	6.3	<1.9>	回転糸切		A I a1	内黒、内面に焼成後のキズあり
175	3号住	検出面	土師器	坏	/下端ハラケズリ	/ハラミガキ	-	5.7	<1.5>	静止糸切		A I a2	内黒、墨書「?」
176	3号住	Q1	土師器	坏	/ロクロ	/ハラミガキ	-	6	<2.4>	回転糸切		A I b2	内黒、墨書「?」
177	3号住	土器2 (Pt1東側)	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ(ハラミガキ?)	-13.8	-	<4.8>			A I	内黒
178	3号住	土器2 (Pt1東側)	土師器	坏	ロクロ/ロクロ 下端再調整	ロクロ/ロクロ	-15	-6.3	5.4	回転糸切		A I b1	内黒
179	3号住	ベルト	土師器	坏	/下端ハラケズリ	/ハラミガキ	-	6.4	<2.4>	回転糸切		A I a1	内黒、底部外面刻書「?」焼成前
180	3号住	Q3	土師器	坏	ハラミガキ/ハラミガキ	ハラミガキ/ハラミガキ	-14.4	6.6	<5.4>	細線ハラミガキ		A I /1	内外面黒色処理

番号	遺構名	出土地点	種類	器種	外面調整(口/体部)	内面調整(口/体部)	口径	底径	器高	底面	胎土	分類	備考
181	3号住	左袖内	土師器	坏	ハラミガキ/ハラミガキ	ハラミガキ/ハラミガキ	-16.2	-	<5.4>	-	-	A I	内外面黒色処理
182	3号住	カマド(支脚)	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	15.7	7.5	6.3	回転糸切	金雲母	A II b1	
183	3号住	Pt1埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-14.4	-	<3.6>			A II	
184	3号住	土器2 (Pt1東側)	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-14.7	6.9	4.8	回転糸切		A II b1	
185	3号住	ベルト・Q4埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	17.1	-8.1	6.3	回転糸切		A II b1	墨書「?」[大カ]
186	3号住	Q1・Q3・検出面	土師器	坏	ロクロ/ロクロ下端再調整	ロクロ/ロクロ	15.6	6.3	5.6	回転糸切	ざらつき	A II b1	
187	3号住	Q2・Q3埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-14.4	7.3	4.8	回転糸切	しっとり	A II b1	
188	3号住	Q4埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-14.3	-	<4.5>	-	-	A II	
189	3号住	Q3	土師器	坏	/ロクロ	/ロクロ	-	-	-	-	-	A II	墨書「?」
190	3号住	Q1埋土	土師器	坏	/ロクロ	/ロクロ	-	-	-	-	-	A II	墨書「?」
191	3号住	Q2	土師器	坏(碗)	ロクロ/ロクロ	ハラミガキ/ハラミガキ	-16.9	-	<6.3>	-	-	A II	器高あり、鍋?
192	3号住	カマド右袖・Pt1	土師器	甕	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-15.6	-	<6.0>	-	-	(A II)	赤焼き
193	3号住	Q2・禮出・右袖	土師器	甕	ロクロ/ハガレ	ロクロ/ロクロ	-16.2	-	<7.5>	-	-	(A II)	赤焼き
194	3号住	右袖1	土師器	甕	/ハラケズリ	/ハケメ	-	8.7	<6.1>	砂底		(A I?)	赤焼き
195	3号住	埋土上位	土師器	甕	ロクロ/ロクロ・ハラケズリ	ロクロ/ハケメ	-24.6	-	<12.9>	-	金雲母	(A II a)	赤焼き
196	3号住	カマド内土器3	土師器	甕	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	13.8	7.5	13.5	回転糸切		(A II b)	赤焼き
197	3号住	カマド内土器3	土師器	甕	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	14.7	-	<13.6>	-	-	(A II b)	赤焼き
198	3号住	Pt1埋土	土師器	甕	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	14.4	-	<12.9>	-	-	(A II b)	赤焼き
199	3号住	Pt1埋土	土師器	甕	ヨコナデ/ハラナデ	ヨコナデ/ハラナデ	-13.2	-	<11.1>	-	-	(A I)	
200	3号住	カマド内1	土師器	甕	/ハラナデ	/ハラナデ	-	6.4	<5.4>	痕なし		(A I)	
201	3号住	土器1・Pt1北側	土師器	甕	/ハケメ	/ハケメ	-	7	<3.9>	木葉痕		(A I)	底部外面張り出し
202	3号住	Pt1埋土	土師器	甕	ロクロ/ハラケズリ	ロクロ/ナデ	-18.1	-	<16.5>	-	-	(A II a)	
203	3号住	Q2埋土	土師器	甕	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ハケメ・ナデ	-	-	-	-	-	(A II)	
204	3号住	Q4埋土	土師器	甕	ヨコナデ/ハラケズリ	ヨコナデ/ハラナデ	-15.3	-	<8.3>	-	-	(A I b)	
205	3号住	ベルト	土師器	甕	/ロクロ	/ロクロ	-	7.5	<5.4>	静止糸切		(A II)	赤焼き
206	3号住	Q4埋土	土師器	甕	/ハラケズリ	/ロクロ	-	6.7	<5.7>	静止糸切		(A II a)	赤焼き
207	3号住	Q1埋土	土師器	甕	/ハラケズリ	/ロクロ	-	8.7	<4.2>	痕なし		(A II a)	
208	3号住	Q3埋土	土師器	甕	/ナデ?	/ナデ?	-	11.1	<1.8>	砂底		(A I)	
209	3号住	Q1埋土	土師器	甕	/ハラケズリ	/ロクロ?	-	-10.2	<4.8>	砂底		(A II a)	
210	3号住	Q2・Q3・ベルト埋土	須恵器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	15.3	4.8	6.3	回転糸切		B2	回転弱

番号	遺構名	出土地点	種類	器種	外面調整(口/体部)	内面調整(口/体部)	口径	底径	器高	底面	胎土	分類	備考
211	3号住	Q3・Q4・検出面	須恵器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	14.7	5.7	5.4	回転糸切		B2	
212	3号住	Q3・Q2埋土	須恵器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	14.4	-5.1	5.1	回転糸切		B2	
213	3号住	右袖内Q2・Pit埋土	須恵器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-15.9	6	4.8	回転糸切		B2	内外面火瘻
214	3号住	ベルトQ3・Q4埋土	須恵器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-14.7	5.1	5.4	回転糸切		B2	
215	3号住	Q3	須恵器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-15.3	5.7	<4.5>	-		B	
216	3号住	Q1・Q3・検出面	須恵器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	14.4	5.3	4.6	回転糸切		B2	
217	3号住	Q3	須恵器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-	4.5	<2.7>	回転糸切		B2	
218	3号住	Q2	須恵器	壺	/ハラケズリ	/ロクロ	-	-	-			B	
219	3号住	Q1埋土	須恵器	壺	/ハラケズリ		-	-	-			B	217と218同一個体か?
220	3号住	ベルト内	須恵器	壺	/ロクロ	/ロクロ	-	-	-			B	
221	3号住	Pit1・カマド	須恵器	横瓶	/タタキメ	/当て具痕	-	-	<17.1>			B	最大幅30.3cm
222	3号住	Q1・ベルト・検出面	須恵器	大甕	/タタキメ	/当て具痕	-	-	-			B	
223	3号住	Q1・Q4埋土	須恵器	大甕	/タタキメ	/当て具痕	-	-	-			B	
224	3号住	Q4埋土下位	須恵器	大甕	/自然釉	/当て具痕	-	-	-			B	
225	3号住	検出面	須恵器	大甕	/タタキメ	/当て具痕	-	-	-			B	
226	4号住	南カマド	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ハラミガキ/ハラミガキ	-14.1	-	<5.7>	-		AI	内黒
227	4号住	Pit3土器2	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ハラミガキ/ハラミガキ	-16.2	-6.6	4.5	回転糸切	金雲母	AIb1	内黒
228	4号住	Pit3土器4	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ハラミガキ/ハラミガキ	-14.1	-	<4.5>	-		AI	内黒
229	4号住	床直土器1	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ハラミガキ/ハラミガキ	14.1	-4.6	4.8	回転糸切		AIb2	内黒
230	4号住	Q2・貼床	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ハラミガキ/ハラミガキ	-15	-7.5	6.2	回転糸切		AIb1	内黒
231	4号住	Q1埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ハラミガキ/ハラミガキ	-14.4	4.8	4.2	回転糸切		AIb2	内黒
232	4号住	Q1埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ハラミガキ/ハラミガキ	-15	5.7	4.8	回転糸切		AIb2	内黒
233	4号住	Q3埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ハラミガキ/ハラミガキ	-14.4	-4.6	4.8	回転糸切		AIb2	内黒
234	4号住	Pit1・Q2埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ハラミガキ/ハラミガキ	-14.1	-4.5	5.1	回転糸切		AIb2	内黒
235	4号住	Q3埋土	土師器	坏	/ロクロ	/ハラミガキ	-	5.1	<2.4>	回転糸切		AIb2	内黒
236	4号住	貼床	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ハラミガキ/ハラミガキ	-13.1	-	<4.8>			AI	内黒
237	4号住	Q1埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ハラミガキ/ハラミガキ	-15	-	<4.8>			AI	内黒、墨書「劣」
238	4号住	Q2埋土	土師器	坏	/ハラケズリ・ロクロ	/ハラミガキ	-	5.7	<1.8>	?	金雲母	AIc	内黒
239	4号住	南カマド	土師器	坏	/ハラミガキ	/ハラミガキ	-	-	-			AIb2	内外面黒色処理
240	4号住	Q3埋土	土師器	坏 <small>(高台付)</small>	/ロクロ	/ハラミガキ	-	7.2	<3.0>		金雲母	AIc	内黒、高台付

番号	遺構名	出土地点	種類	器種	外面調整(口/体部)	内面調整(口/体部)	口径	底径	器高	底面	胎土	分類	備考
241	4号住	Q2埋土	土師器	坏(高台付)	/ロクロ	/ロクロ	-	6.9	<2.7>	回転糸切	しっとり	A Ic	高台付
242	4号住	東カマド	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	15	-	<4.9>	-		A II	
243	4号住	南カマド	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ヘラナデ?/ロクロ	-14.4	-	<4.0>			A II	
244	4号住	Q3埋土・南カマド	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-13.5	-4.8	5.7	-		A II b2	
245	4号住	床直土器2	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	15.3	5.4	4.8	回転糸切		A II b2	
246	4号住	Pit3土器・Q埋土・床直	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	14.7	4.8	5.1	回転糸切		A II b2	
247	4号住	Pit3土器5	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	13.5	5.7	4.5	回転糸切	金雲母	A II b2	
248	4号住	Pit5埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	15	6.9	5.1	回転糸切		A II b1	
249	4号住	Pit3土器3	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	14.7	5.7	4	回転糸切	金雲母	A II b2	墨書「主」
250	4号住	Q1北側	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	14.4	5.4	4.6	回転糸切		A II b2	墨書「几」
251	4号住	貼床	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	14.4	6.3	4.8	回転糸切		A II b1	口縁打ち欠き?
252	4号住	貼床	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-15.6	6.9	6	回転糸切		A II b1	
253	4号住	貼床	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-14.7	-5.7	5.1	回転糸切		A II b2	
254	4号住	Q3埋土・南ベルト	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-14.4	-	<4.2>	-		A II	
255	4号住	Q3埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-15.6	-	<4.6>	-	金雲母	A II	
256	4号住	貼床・Q3埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-15.6	6	5.1	回転糸切		A II b2	
257	4号住	Q3・Q4	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-12.6	4.8	5.8	回転糸切		A II b2	器高あり底径小
258	4号住	Q1埋土	土師器	坏	/ロクロ	/ロクロ	-	6	<3.9>	回転糸切		A II b2	
259	4号住	貼床	土師器	坏	/ロクロ	/ロクロ	-	6.7	<2.4>	回転糸切		A II b1	内面に墨痕?
260	4号住	Q3埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-14.1	-4.6	4.2	回転糸切		A II b2	墨書「?」[几カ]
261	4号住	Q2埋土	土師器	坏	/ロクロ	/ロクロ	-	-5.4	<2.2>	回転糸切		A II b2	墨書「?」
262	4号住	北ベルト・Q1・床面	土師器	坏	/ロクロ・下端ヘラナズリ再調整	/ロクロ	-	6.3	<2.1>	回転糸切		A II a1	刻書「?」焼成前
263	4号住	Q3埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-14.4	-6.2	5.1	回転糸切		A II b2	刻書「?」焼成前
264	4号住	東カマド	土師器	壺	/ヘラナデ	/ヘラナデ	-	-	-	-		A	
265	4号住	貼床	土師器	甕	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	13.2	7.8	14.7	回転糸切?		(A II b)	赤焼き
266	4号住	貼床	土師器	甕	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-15.3	-	<10.5>	-		(A II)	赤焼き
267	4号住	Q2埋土	土師器	甕	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-	-	-	-		(A II a)	赤焼き
268	4号住	ベルト埋土	土師器	甕	ヨコナデ/ヘラナデ?	ヨコナデ/ヘラナデ	-13.8	-	<12.0>			(A I b)	非ロクロ
269	4号住	Q1埋土	土師器	甕	ヨコナデ/ヘラナズリ	ヨコナデ/ヘラナデ?	-16.5	-	<9.0>			(A I b)	非ロクロ
270	4号住	Q2・東カマド	土師器	甕	/ロクロ	/ロクロ	-	9.9	<8.7>	砂底		(A II b)	赤焼き

番号	遺構名	出土地点	種類	器種	外面調整(口/体部)	内面調整(口/体部)	口径	底径	器高	底面	胎土	分類	備考
271	4号住	Q3埋土	土師器	甕	/ハラケズリ	/ハケメ	-	-8.7	<2.1>	砂底		(A I)	非ロクロ?
272	4号住	東西ベルト	土師器	甕	/ハラケズリ	/ナデ	-	-	-	砂底		(A II b)	非ロクロ
273	4号住	Q2埋土	土師器	甕	/ハラケズリ	/ロクロ	-	-	-	砂底		(A II c)	
274	4号住	貼床	土師器	甕	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-19.5	-	<9.6>	-		(A II)	赤焼き
275	4号住	Pit3埋土	土師器	甕	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	14.7	-	<8.2>	-		(A II)	赤焼き
276	4号住	床面	土師器	甕	/ハケメ	/ハケメ	-	10	<8.7>	回転糸切		(A I)	内黒
277	4号住	東カマド支脚・埋土内	土師器	甕	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	15.9	-	<11.2>			(A II)	赤焼き
278	4号住	東カマド	土師器	甕	/ハラナデ	/ナデ	-	-10.5	<2.7>	痕なし		(A II)	
279	4号住	東・南カマド接合	土師器	甕	ヨコナデ/ハラケズリ	ヨコナデ/ハラナデ(ナデ)	-	-	-			(A II a)	
280	4号住	南カマド・貼床内	土師器	甕	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-	-	-			(A II)	体部上に沈線状の段
281	4号住	貼床	土師器	甕(極小)	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	10.5	-	<2.5>	-		(A II b)	赤焼き
282	4号住	Q1埋土	土師器	甕(極小)	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	8.1	-	<4.5>	-		(A II b)	赤焼き
283	4号住	南カマド埋土内	土製品	小形皿?	ロクロ成形		4.2	3	8.8			-	仏具の可能性?
284	4号住	Q3埋土	土製品	小形皿?	ロクロ成形		-	-2.7	2.7			-	仏具の可能性?
285	4号住	南カマド	須恵器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-	-	-			B	
286	4号住	Q2埋土	須恵器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-14.7	-	<3.6>			B	
287	4号住	貼床	須恵器	長頸壺	ロクロ/	ロクロ/	-	-	-			B	
288	4号住	貼床	須恵器	長頸壺	ロクロ/	ロクロ/	-	-	-			B	
289	4号住	貼床	須恵器	壺?	/ハラケズリ?	/カキメ	-	-	-			B	
290	4号住	Q2埋土	須恵器	壺	/ロクロ	/カキメ	-	-	-			B	
291	4号住	Q3埋土	須恵器	壺	/ロクロ	/カキメ	-	-	-			B	
292	4号住	Q3埋土	須恵器	壺	/タタキメ	/カキメ	-	-	-			B	
293	4号住	貼床	須恵器	大甕	/タタキメ	/カキメ/当て具痕	-	-	-			B	
294	4号住	Q2埋土	須恵器	大甕	/ロクロ	/カキメ/当て具痕	-	-	-			B	
295	4号住	Q2埋土	須恵器	大甕	/タタキメ	/当て具痕	-	-	-			B	
296	4号住	Q4埋土	須恵器	大甕	/タタキメ	/当て具痕	-	-	-			B	
297	4号住	床面	石器	石皿	長さ:-9.9cm、幅:-10.2cm、厚さ:6.0cm、重さ:509g								転用?
298	4号住	床面	石器	鉄砧石	長さ:26.8cm、幅:34.8cm、厚さ:18.0cm、重さ:11.8kg								安山岩 第四紀火山
299	4号住	東西ベルト	鉄製品	釘	長さ:-4.3cm、幅:0.65cm、厚さ:0.6cm、重さ:6.9g								安山岩 第四紀火山
300	4号住	Pit3埋土	鉄製品	刀子	長さ:-13.5cm、幅:0.3~1.5cm、厚さ:0.3cm、重さ:17.7g								

番号	遺構名	出土地点	種類	器種	外面調整(口/体部)	内面調整(口/体部)	口径	底径	高さ	底面	胎土	分類	備考
301	4号住	Q4埋土	鉄製品	刀子	長さ:7.8cm、幅0.5~1.2cm、厚さ0.2~0.4cm、重さ5.3g								
302	4号住	カマド	鉄製品	刀子	長さ:7.7cm、幅0.3~0.8cm、厚さ0.2~0.4cm、重さ5.3g								
303	5号住	Q4-Q2To-a下・ベルト	土師器	坏	ロクロ/ロクロ下端ヘラケズリ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	-15	6.3	4.8	回転糸切		A I a1	内黒、底部に焼成前の孔
304	5号住	ベルト・Q3埋土下	土師器	坏	ロクロ/ロクロ下端ヘラケズリ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	-14.4	-6	4.8	回転糸切		A I a2	内黒
305	5号住	カマド袖・貼床	土師器	坏	ロクロ/ロクロ下端ヘラケズリ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	15.9	6	6	縞織(羽子)		A I a2	内黒、墨書「?」[「カ」]
306	5号住	Q3埋土下	土師器	坏	ロクロ/ロクロ下端ヘラケズリ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	-15.3	6.3	4.5	回転糸切		A I a1	内黒
307	5号住	Q3埋土下	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	-13.8	5.7	4.8	回転糸切		A I b2	内黒
308	5号住	Q3埋土下	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	-13.5	5.1	4.8	回転糸切		A I b2	内黒
309	5号住	Q2To-a下	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	-14.7	5.7	4.8	ヘラケズリ	金雲母	A I a2	内黒
310	5号住	貼床	土師器	坏	/ロクロ	/ヘラミガキ	-	6.4	<2.8>	回転糸切		A I a1	内黒
311	5号住	貼床内・埋土	土師器	坏	/ロクロ	/ヘラミガキ	-	5.7	<2.1>	回転糸切		A I b2	内黒
312	5号住	ベルト埋土上	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	-15	-	<4.5>	-		A I	内黒
313	5号住	Q3埋土下	土師器	坏	/ロクロ下端ヘラケズリ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	-	-8.1	<2.4>	回転糸切		A I a1	内黒、墨書「?」
314	5号住	Q3埋土下	土師器	坏	/ロクロ	/ヘラミガキ	-	-	-	-		A I	内黒、墨書「カ」
315	5号住	ベルト埋土下	土師器	坏	/ヘラミガキ	/ヘラミガキ	-	-6.3	<2.1>	縞織(羽子)		A I	内外面黒色処理
316	5号住	埋土下	土師器	坏	ロクロ/	ロクロ/	-	-	-	-		A II	墨書「?」
317	5号住	焼土1内	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	13.8	4.7	5.1	回転糸切		A II b2	
318	5号住	Q3埋土下・東西ベルト	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	14.7	6.6	4.8	回転糸切		A II b1	墨書「?」[「カ」]、ゆがみ
319	5号住	Q3・ベルト埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	15.3	6	5.5	回転糸切		A II b2	墨書「?」
320	5号住	Q3埋土下	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	14.2	6	5.1	回転糸切		A II b2	外面に粘土粒付着
321	5号住	Q3埋土下	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-15.6	7.5	5.7	回転糸切		A II b1	
322	5号住	Q4埋土・検出面	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-13.8	-6.3	4.2	回転糸切		A II b1	
323	5号住	Q3埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	14.7	7.2	5.1	回転糸切		A II b1	墨書「カ」付(羽子)皿、底部の欠け入為?
324	5号住	Q3埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-15	7.2	4.5	回転糸切		A II b1	
325	5号住	Q2埋土To-a下	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-14.7	-5.1	4.8	回転糸切		A II b2	
326	5号住	カマド袖	土師器	坏	/ロクロ	/ロクロ	-	6.9	<3.3>	回転糸切	金雲母	A II b2	底部内面に墨痕
327	5号住	Q4埋土上	土師器	坏 <small>(高出)</small>	/ロクロ	/ロクロ	-	-	<2.1>	縞織(羽子)		A II c	高台付
328	5号住	Q3埋土下・ベルト	土師器	甕	ヨコナデ/ヘラナデ	ヨコナデ/ヘラナデ	13.2	9	13.8	痕なし		(A I c)	非ロクロ
329	5号住	Q3・Q4埋土	土師器	甕	/ヘラケズリ	/ヘラナデ	-	7.5	<11.4>	砂底		(A I c)	体部外面にタタキメ
330	5号住	To-a下埋土	土師器	甕	ヨコナデ/ヘラケズリ	ヨコナデ/ナデ	-23.5	-	<5.1>	-		(A II a)	337・338同一?

番号	遺構名	出土地点	種類	器種	外面調整(口/体部)	内面調整(口/体部)	口径	底径	器高	底面	胎土	分類	備考
331	5号住	東西ベルト埋土下	土師器	甕	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-18.3	-	<10.8>	-		(AII)	赤焼き
332	5号住	ベルト埋土	土師器	甕	ロクロ/ロクロ	ハラミガキ/ハラミガキ	-24.7	-	<6.3>	-		(AII)	ロクロ甕の内黒
333	5号住	Q3埋土下・ベルト	土師器	甕(極小)	ヨコナデ/ハラケズリ	ヨコナデ/ナデ	-8.1	-	<4.9>	-		(A Ib)	非ロクロ
334	5号住	Q3埋土・東西ベルト	土師器	壺	ハラミガキ/ハラミガキ	ハラミガキ/ハラミガキ	9.6	-	<4.8>	-		A	内外面黒色処理の壺
335	5号住	検出面	土師器	把手付	ハラミガキ	-	-	-	-	-		-	-
336	5号住	Q3埋土下	須恵器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-	-	-	-		B	-
337	5号住	カマド袖・貼床・ベルト	須恵器	甕	/ハラケズリ	/ナデ・ハラケズリ	-	-	-	-		B	-
338	5号住	Q2埋土To-a下	須恵器	壺?	/ハラケズリ	/ナデ	-	-	-	-		B	-
339	5号住	Q3埋土下	須恵器	大甕	/タタキメ	/当て具痕	-	-	-	-		B	-
340	5号住	南北ベルト	石器	石皿	長さ:-16.4cm、幅:-24.0cm、厚さ:7.6cm、重さ:4112.4g								安山岩 奥羽山脈
341	5号住	床面	石器	鉄砧石	長さ:16.0cm、幅:14.4cm、厚さ:9.2cm、重さ:1264.7kg								安山岩 第四紀火山
342	5号住	床面	石器	鉄砧石	長さ:15.9cm、幅:15.9cm、厚さ:7.8cm、重さ:1562.3g								安山岩 第四紀火山
343	5号住	Q3埋土To-a下	鉄製品	釘	長さ:-4.0cm、幅:0.7cm、厚さ:0.5cm、重さ:5.3g								
344	6号住	土器1	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ハラミガキ/ハラミガキ	14.1	5.7	5.7	回転糸切		AI b2	内黒、人為的な欠け?
345	6号住	Pit1埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ハラミガキ/ハラミガキ	13.2	5.6	4.8	回転糸切		AI b2	内黒
346	6号住	土器2	土師器	坏	ロクロ/ロクロ下端ハラケズリ	ハラミガキ/ハラミガキ	14.4	5.5	5.1	回転糸切		AI a2	内黒
347	6号住	Pit1・Q4埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ハラミガキ/ハラミガキ	15.6	5.4	5.1	回転糸切		AI a2	内黒、大きなゆがみ
348	6号住	Q4埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ハラミガキ/ハラミガキ	13.8	5.1	5.1	回転糸切		AI b2	内黒、墨書「七万/口」[九カ]
349	6号住	Pit1埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ下端ハラケズリ	ハラミガキ/ハラミガキ	14.4	6.3	4.8	ハラケズリ		AI a1	内黒
350	6号住	Q3埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ハラミガキ/ハラミガキ	-14.4	6	5.1	回転糸切		AI b2	内黒
351	6号住	Q1埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ハラミガキ/ハラミガキ	-16.5	-	<4.8>	-		AI	内黒
352	6号住	Q1埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ハラミガキ/ハラミガキ	15.7	-	<6.3>	-		AI	内黒
353	6号住	貼床内・PP10	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ハラミガキ/ハラミガキ	14.1	-5.7	4.8	-		AI b2	内黒、墨書「?」
354	6号住	Pit1・土器2・土器3	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ハラミガキ/ハラミガキ	14.4	4.5	5.1	回転糸切		AI b2	内黒、底径小
355	6号住	右袖内	土師器	坏	ロクロ/ロクロ下端ハラケズリ	ハラミガキ/ハラミガキ	-16.8	6.3	5.1	回転糸切		AI a1	内黒
356	6号住	Q3埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ハラミガキ/ハラミガキ	14.4	5.4	6.1	回転糸切		AI b2	内黒
357	6号住	Q3埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ハラミガキ/ハラミガキ	-17.2	6.6	6	回転糸切		AI a1	内黒
358	6号住	Q4埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ハラミガキ/ハラミガキ	15.6	6.6	5.1	回転糸切		AI b1	内黒
359	6号住	Q3埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ハラミガキ/ハラミガキ	-13.8	-5.7	5.2	回転糸切		AI b2	内黒
360	6号住	Pit1埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ハラミガキ/ハラミガキ	15	-	<4.8>	-		AI	内黒

番号	遺構名	出土地点	種類	器種	外面調整(口/体部)	内面調整(口/体部)	口径	底径	器高	底面	胎土	分類	備考
361	6号住	Q1埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ハラミガキ/ハラミガキ	-15.9	-	<4.8>	-		A I	内黒
362	6号住	Pt1埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ハラミガキ/ハラミガキ	-14.6	-	<4.5>	-		A I	内黒
363	6号住	Q3埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ハラミガキ/ハラミガキ	-17.1	-	<5.2>	-		A I	内黒
364	6号住	Q2埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ハラミガキ/ハラミガキ	-15.3	-	<5.3>	-		A I	内黒
365	6号住	北東壁際	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ハラミガキ/ハラミガキ	-14.3	-5.6	5.1	回転糸切		A I b2	内黒、墨書「?」[几カ]
366	6号住	北東壁際	土師器	坏	/ロクロ	/ハラミガキ	-	-	-	-		A I	内黒、墨書「?」
367	6号住	Pt1土器1	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	14.7	6	4.8	回転糸切		A II b2	赤焼き
368	6号住	Pt1土器4	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	14	4.5	4.8	回転糸切		A II b2	赤焼き、底径小
369	6号住	Pt1埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-15.5	5.7	5.1	回転糸切	金雲母	A II b2	赤焼き
370	6号住	右袖内	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-14.7	6.9	4.8	回転糸切		A II b1	赤焼き
371	6号住	Q3埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	15.5	5.7	5.7	回転糸切		A II a2	赤焼き
372	6号住	Q3埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	14.7	5.7	4.8	回転糸切		A II b2	赤焼き
373	6号住	Q2埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-16.5	6	5.1	回転糸切		A II b1	赤焼き
374	6号住	Pt1埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-13.5	4.8	4.8	回転糸切	金雲母	A II b2	赤焼き、墨書「?」
375	6号住	Pt1埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-14.6	-5.1	4.9	回転糸切		A II b2	赤焼き、外面に段
376	6号住	Q4埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-16.2	6.3	4.8	回転糸切		A II b1	赤焼き
377	6号住	Q3埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-14.2	-5.6	4.5	回転糸切		A II b2	赤焼き
378	6号住	Q3埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	15.6	6	4.7	回転糸切		A II b2	赤焼き
379	6号住	Q3埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-15.6	6	4.8	回転糸切		A II b2	赤焼き、外面に段 赤焼き、外面に墨、底面に黒點?、磨滅
380	6号住	Q3埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-13.8	6	5.4	回転糸切		A II b2	赤焼き
381	6号住	Q2埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	13.8	5.1	5.1	回転糸切		A II b2	赤焼き
382	6号住	Q4埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-15	7	4.5	回転糸切		A II b1	赤焼き
383	6号住	貼床内	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-14.1	6	4.2	回転糸切		A II b2	赤焼き、墨書「?」[几カ]
384	6号住	Pt1埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-16.6	-6	5.1	回転糸切		A II a2	赤焼き
385	6号住	Q4埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-16.8	-6.6	5.6	回転糸切		A II b1	赤焼き
386	6号住	Q3・Pt1埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-15	6.6	4.9	回転糸切	砂粒多	A II b1	赤焼き
387	6号住	Q1埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-	-6	<3.1>	回転糸切		A II b2	赤焼き
388	6号住	Q3埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-	-5.4	<2.7>	回転糸切		A II b1	赤焼き、墨書「?」[几カ]
389	6号住	カマド・左袖内	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	17.1	-	<3.9>	-		A II	赤焼き、大口径
390	6号住	Q1埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-14.4	-7.5	5.4	回転糸切		A II b1	赤焼き、外面煤付着

番号	遺構名	出土地点	種類	器種	外面調整(口/体部)	内面調整(口/体部)	口径	底径	器高	底面	胎土	分類	備考
391	6号住	埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-14.7	-4.2	4.5	再調整		A II a2	赤焼き、墨書「凡」
392	6号住	貼床内	土師器	坏	/ロクロ	/ロクロ	-	-5.1	<4.0>	回転糸切		A II a2	赤焼き、刻書「凡」焼成前
393	6号住	Q4埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-13	-	<4.5>	-		A II	赤焼き、刻書「一万」左文字
394	6号住	Q1埋土	土師器	坏(高台付)	ロクロ・ハラミガキ/ロクロ・ハラミガキ	ハラミガキ/ハラミガキ	-17.5	-	<5.3>	高台付		A I c	内黒、外面非黒色処理でミガキ
395	6号住	Q1埋土	土師器	坏(高台付)	/ロクロ	/ハラミガキ	-	7.5	<2.7>	脈絡調整		A I c	内黒
396	6号住	Q1埋土	土師器	坏(高台付)	/ロクロ	/ロクロ	-	7.5	<3.3>	脈絡調整	金雲母	A I c	赤焼き
397	6号住	貼床内	土師器	坏(高台付)	/ロクロ	/ロクロ	-	7	<3.9>	脈絡調整		A I c	赤焼き
398	6号住	Q1・Q3埋土	土師器	甕(小)	/ロクロ	/ロクロ	-	4.2	<3.1>	回転糸切		(A II)	赤焼き
399	6号住	Pt1埋土	土師器	甕	ロクロ/ハラケズリ	ロクロ/ロクロ	-14.7	-	<9.9>	-		(A II a)	赤焼き
400	6号住	Pt1	土師器	甕	ヨコナデ/ハラケズリ	ナデ/ハラナデ	16.5	-	<6.9>	-		(A II a)	
401	6号住	Q3埋土・Pt1	土師器	甕	ロクロ/ハラケズリ	ロクロ/ロクロ	17.7	8.4	<12.0>	痕なし		(A II a)	a・b体、赤焼き
402	6号住	Q1・Q3埋土	土師器	甕	/ハラケズリ	/ナデ	-	9.3	<9.0>	痕なし		(A I b)	
403	6号住	Q3埋土	土師器	甕	/ハラケズリ	/ロクロ	-	-8.4	<4.4>	砂底		(A II)	
404	6号住	Q3埋土	土師器	甕	/ロクロ	/ロクロ	-	7	<5.1>	回転糸切		(A II)	赤焼き
405	6号住	Q4埋土	土師器	甕	ヨコナデ/ナデ	ヨコナデ/ハラナデ	-24	-	<5.3>	-		(A I b)	刻書「？」焼成前
406	6号住	Q3埋土	土師器	甕	ナデ/ナデ	ヨコナデ/ハラナデ	-24.2	-	<8.7>	-	金雲母	(A I)	
407	6号住	Pt1	土師器	甕	ヨコナデ/ハラケズリ	ヨコナデ/ナデ	-17.2	-	<8.7>	-		(A I b)	
408	6号住		土師器	甕	ヨコナデ/ハラケズリ	ヨコナデ/ナデ	-23.1	-	<9.6>	回転糸切		(A I b)	内黒
409	6号住	Pt1	土師器	甕	ロクロ/ロクロ・ハラケズリ	ロクロ/ロクロ	-21	-	<15.6>	-		(A II a)	赤焼き
410	6号住	Q3埋土	土師器	甕	ヨコナデ/ハラケズリ	ヨコナデ/ハラナデ	22.2	-	27.8	-		(A I b)	非ロクロ
411	6号住	Q4埋土	土師器	甕	/ナデ	/ナデ	-	-12.2	<9.9>	痕なし		(A II a)	
412	6号住	Q4埋土	土師器	甕	ヨコナデ/ハラケズリ	ヨコナデ/ハラナデ?	-15	-	<4.5>	-		(A I b)	
413	6号住	Q3埋土	土師器	甕	ロクロ/ハラケズリ	ロクロ/ロクロ	-13.9	-	<5.7>	-		(A I b)	赤焼き
414	6号住	Q3・Q4・ベルト埋土	土師器	手づくね	ハラケズリ/ハラケズリ・ナデ	ナデ/ナデ	-10.5	7.9	7.5	痕なし		(A I b)	粗雑
415	6号住	貼床内	土師器	耳皿	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-	4.5	<1.9>	台付		-	内外面黒色
416	6号住		土師器	耳皿	ロクロ・ハラミガキ	ロクロ・ハラミガキ	-	4.6	<2.2>			-	内外面黒色
417	6号住	Q3埋土	土師器	坏	/ロクロ	/ロクロ	-	-5.4	<2.1>			B2	
418	6号住	Q2埋土	須恵器	坏	ロクロ/	ロクロ/	-13.5	-	<3.0>			B	
419	6号住	Q4埋土	須恵器	壺?	/タキメ	/カキメ	-	12	<2.5>			B	
420	6号住	Q4埋土	須恵器	壺	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	12.8	-	<11.1>			B	

番号	遺構名	出土地点	種類	器種	外面調整(口/体部)	内面調整(口/体部)	口径	底径	器高	底面	胎土	分類	備考
421	6号住	Q2埋土	須恵器	壺	/ロクロ・ハラケズリ	/カキメ	-	-	-			B	
422	6号住	Q3埋土	須恵器	壺	/ロクロ	/ロクロ	-	-	-			B	
423	6号住	Q4埋土	須恵器	壺	/ロクロ	/ロクロ	-	-	-			B	
424	6号住	Q2埋土	須恵器	壺	/タタキメ	/当て具痕	-	-	-			B	
425	6号住	Q3埋土	須恵器	甕?	/ロクロ	/ナデ	-	11.6	<3.9>			B	
426	6号住	Q4埋土	須恵器	甕	ロクロ/	ロクロ/	21.3	-	<3.3>			B	
427	6号住	Q2埋土	須恵器	大甕	/ロクロ	/ロクロ	-	-	-			B	
428	6号住	埋土	石器	磨石	長さ:-7.8cm、幅:-5.4cm、厚さ:6.3cm、重さ:276g								安山岩 第四紀火山
429	6号住	検出面	石器	砥石	長さ:-2.6cm、幅:3.2cm、厚さ:2.2cm、重さ:43.8g								手持ち、凝灰岩 奥羽山脈
430	6号住	Q2埋土	石器	砥石	長さ:-3.8cm、幅:4.0cm、厚さ:1.8cm、重さ:41.9g								手持ち、凝灰岩 奥羽山脈
431	6号住	鉄製品	鉄製品	鎌	長さ:-7.3cm、幅:1.7~2.4cm、厚さ:0.2~0.4cm、重さ:20.7g								
432	6号住	鉄製品	鉄製品	刀子	長さ:-4.0cm、幅:0.6~0.9cm、厚さ:0.1~0.3cm、重さ:2.4g								
433	6号住	鉄製品	鉄製品	刀子	長さ:-11.7cm、幅:0.2~1.4cm、厚さ:0.2~0.4cm、重さ:8.8g								
434	6号住	鉄製品	鉄製品	釘	長さ:6.4cm、幅:0.5~1.2cm、厚さ:0.4cm、重さ:6.8g								
435	6号住	鉄製品	鉄製品	釘	長さ:-3.4cm、幅:0.3~0.7cm、厚さ:0.5cm、重さ:1.8g								
436	7号住	Q2・Q3・Q4	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ハラミガキ/ハラミガキ	-13.8	6.3	5.4	回転糸切		A I bl	内黒
437	7号住	煙道内	土師器	坏	ロクロ・ハラミガキ/	ハラミガキ?/	-	-	-	-		A I	内黒?とび
438	7号住	Q3・Q4・ベルト	土師器	坏(椀)	ロクロ/ロクロ下端回転ハラケズリ	ハラミガキ/ハラミガキ	-25.9	9.6	9.9	回転ハラケズリ		A I al	内黒、超大型
439	7号住	Pit1埋土・煙道内	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	14.7	7.2	5.1	回転糸切		A II bl	赤焼き、内外面油煙
440	7号住	Q3埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	14.1	7.2	5.7	回転糸切		A II bl	赤焼き、墨書「中」
441	7号住	ベルト・焼土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	14.1	7.1	5.4	回転糸切		A II bl	赤焼き
442	7号住	Q3埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	14.7	6.9	4.8	回転糸切		A II bl	赤焼き
443	7号住	土器1・焼土内	土師器	甕	ロクロ/ハラケズリ	ロクロ/ナデ	19.2	9	20	痕なし		(A II a)	赤焼き
444	14号住	埋土	土師器	甕	ナデ/ハラケズリ	ハラナデ?/ハラナデ・ナデ	16.5	-	<24.0>	-		(A I c)	ナタケズリ、14号住出土遺物
445	7号住	Q3埋土	須恵器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-14.4	-	<3.6>	-		B	
446	7号住	Pit1埋土	須恵器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	14.8	6	4.6	回転糸切		B2	
447	7号住	Q1・Q3・Q4・焼土内	須恵器	甕	/カキメ・ハラケズリ	/カキメ・ロクロナデ	-	-	<25.8>	-		B	
448	8号住	Pit1埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ハラミガキ/ハラミガキ	14.7	7.8	6.6	回転糸切		A I bl	内黒
449	8号住	Pit1埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ハラミガキ/ハラミガキ	16.6	6.9	5.9	回転糸切		A I bl	内黒
450	8号住	煙道内	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ハラミガキ/ハラミガキ	-15.3	6.3	5	回転糸切		A I bl	内黒

番号	遺構名	出土地点	種類	器種	外面調整(口/体部)	内面調整(口/体部)	口径	底径	器高	底面	胎土	分類	備考
451	8号住	カマド内	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	15	6.6	4.8	-		A II b1	赤焼き、墨書「糸」
452	8号住	P11埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	15.3	6.6	4.8	回転糸切		A II b1	外面に煤付着
453	9号住	Q4埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ハラミガキ/ハラミガキ	-17.4	-	<4.8>	-		A I	内黒
454	9号住	カマド右袖	土師器	甕	ロクロ/ハラケズリ	ロクロ/ロクロ	-16.5	6.9	<10.5>	回転糸切		(A II a)	赤焼き、a・b体
455	9号住	煙道・Q2・Q4	土師器	甕	ロクロ/ハラケズリ	ロクロ/ロクロ	22.2	-	<20.7>	-		(A II a)	赤焼き
456	9号住	Q1・Q4埋土	須恵器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-13.5	-5.7	4.9	回転糸切		B2	
457	10号住	ベルト	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-16.2	-	<3.0>	-		A II	赤焼き
458	10号住	土器1	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	15.3	6	4.9	ハラケズリ		A II a2	墨書「糸」/中×5]六文字
459	10号住	Q3埋土	土師器	甕	/ナタケズリ	/ハラナデ・ナデ	-	-11.1	<4.6>	痕なし		(A I c)	非ロクロか?
460	10号住	Q3埋土	土師器	甕	/ナタケズリ	/ナデ	-	-	-	-		(A I b)	軽くて粗雑
461	10号住	Q2埋土	須恵器	壺	/タタキメ・ロクロ	/ロクロ	-	-	-	-		B	
462	10号住	Q4埋土	須恵器	大甕	/タタキメ	/ロクロナデ	-	-	-	-		B	
463	10号住	床面	鉄製品	刀子	長さ:-7.8cm、幅:0.7~1.0cm、厚さ:0.1~0.3cm、重さ:9.9g								
464	11号住	Q1埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ下端ハラケズリ	ハラミガキ/ハラミガキ	-14.4	7.2	4.5	細線ハケ		A I a1	内黒
465	11号住	埋土・検出面	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ハラミガキ/ハラミガキ	-12.1	-	<3.9>	-		A I	内黒
466	11号住	カマド・煙道内	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ハラミガキ/ハラミガキ	-13.2	-	<3.9>	-		A I	内黒とび
467	11号住	埋土	土師器	鉢?	ヨコナデ/ナデ	ヨコナデ/ナデ	-11.1	-	<8.1>	-		A I	
468	11号住	Q3埋土	土師器	甕	/ハラケズリ	/ハラナデ?	-	-6.9	<6.0>	ナデ痕		(A I c)	
469	11号住	煙出埋土	土師器	甕	ヨコナデ/ハラケズリ	ヨコナデ/ナデ	-23.1	-	<11.1>	-		(A I)	
470	11号住	Q1埋土	須恵器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-13.2	-	<4.5>	-		B	
471	11号住	Q3埋土	須恵器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-14.2	-	<3.3>	-		B	
472	12号住	Q2埋土・ベルト下	土師器	坏	ロクロ/ロクロ下端ハラケズリ・ハラミガキ	ハラミガキ/ハラミガキ	-15	6	6.9	腫線ハケ		A I a2	内黒
473	12号住	Q2埋土・ベルト下	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ハラミガキ/ハラミガキ	-12.5	-5.6	5.1	ハラミガキ		A I b2	内黒
474	12号住	カマド内No1	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ハラミガキ/ハラミガキ	-13.2	5.6	4.8	回転糸切		A I b2	内黒とび
475	12号住	カマド周辺床面・跣床	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-14.1	-	<4.5>	-		A II	赤焼き
476	12号住	Q2埋土下	土師器	甕	/ハラケズリ	/ハラナデ	-	-9.3	<11.1>	痕なし		(A II a)	非ロクロ
477	12号住	床面・埋土	土師器	甕	/ハケメ	/ナデ	-	-8.7	<8.7>	ムシロ底		(A I)	非ロクロ
478	12号住	床面・ベルト	土師器	甕	/ハラナデ	/ナデ	-	-13.5	<5.4>	-		(A II)	非ロクロ
479	12号住	カマド周辺右袖土器1	土師器	甕	ロクロ/ハケメ?ハラケズリ	ロクロ/ロクロ・ハケメ	-23.7	-	<32.1>	-		(A II a)	
480	12号住	カマド内No1	土師器	甕	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-17.1	-	<14.7>	-		(A II b)	赤焼き

番号	遺構名	出土地点	種類	器種	外面調整(口/体部)	内面調整(口/体部)	口径	底径	器高	底面	胎土	分類	備考
481	12号住	カマド内No1	土師器	甕	ヨコナデ/ナデ	ヨコナデ/ハラナデ	14.2	-	<9.1>			(A I)	非ロクロ、支脚土器
482	12号住	ベルト下駄床表面	須恵器	壺	/カキメ	/ロクロ	18.4	-	<15.3>			B	
483	12号住	埋土	須恵器	壺	ロクロ/ロクロ(自然釉)	ロクロ/ロクロ	-13.2	-	<8.4>			B	
484	12号住	ベルト下	須恵器	坏	/ロクロ	/ロクロ	-	-6.6	<3.0>	再調整		B	
485	12号住	埋土上	須恵器	大甕	/ロクロ	/ロクロ	-	-	<8.1>	-		B	
486	12号住	Q1埋土上	須恵器	大甕	/タキメ	/ナデ	-	-	-	-		B	
487	12号住	床面	鉄製品	雁又鎌	長さ:-6.2cm、幅:-5.5cm、厚さ:0.3~0.5cm、重さ:20.5g								
488	13号住	Q4埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ハラミガキ/ハラミガキ	-12.6	5.1	4.8	回転糸切		A I b2	内黒
489	13号住	カマド前・カマド土器1	土師器	甕	/ハラケズリ	/ハラナデ	-	-9.1	<8.1>	痕なし		A I c	非ロクロ
490	13号住	カマド内土器1	土師器	甕	/ナケズリ	/ハケメ	-	7.7	<7.8>	痕なし		A II a	非ロクロ
491	13号住	Pt1埋土	土師器	甕	ヨコナデ/ハケメ	ヨコナデ・ハケメ/ナデ	-15.3	-	<7.9>	-		A I	非ロクロ
492	13号住	煙道内	土師器	甕	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-	-	<6.9>	-	小礫多	A II	赤焼き
493	13号住	カマド付近	須恵器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-14.1	-	<2.9>	-		B	
494	14号住	床面・Q2・ベルト	土師器	坏	ロクロ/ロクロ下端ハラケズリ	ハラミガキ/ハラミガキ	14.6	6	<5.0>	回転糸切再調整		A I b2	内黒、刻書「舟」焼成前刻書
495	14号住	埋土	土師器	坏	/ロクロ	ロクロ/	-	-8.2	<2.4>	回転糸切		A I b1	内黒、墨書「？」
496	14号住	煙出底面	土師器	坏	ロクロ/ロクロ下端ハラケズリ	ロクロ/ロクロ	15.8	6.4	5.4	回転糸切再調整		A II a1	赤焼き
497	14号住	Q1埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ下端ハラケズリ	ロクロ/ロクロ	13.7	6	4.3	回転糸切再調整		A II a2	赤焼き
498	14号住	Q2埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-14.4	6.3	5.1	回転糸切		A II b1	赤焼き
499	14号住	Q2埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-16.2	-	<4.5>	-		A II	赤焼き
500	14号住	カマド周辺	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-16.2	-	<2.7>	-		A II	赤焼き、墨書「舟」、458と接合
501	14号住	Q2埋土	土師器	坏	/ロクロ	/ロクロ	-	-	-	-		A II	赤焼き、墨書「？」
502	14号住	カマド内	土師器	坏	/ロクロ	/ロクロ	-	-	-	-		A II	赤焼き、刻書「？」焼成前
503	14号住	Q1~Q4埋土	土師器	甕	/ロクロ・ハラケズリ・ハラナデ	ロクロ	-	9	<13.5>			(A II a)	
504	14号住	Q3埋土	須恵器	壺	/ロクロ	/ロクロ	-	-	<4.5>			B	
505	14号住	Q1~Q4埋土	須恵器	大甕	/タキメ	/ナデ	-	-	-	-		B	b体
506	14号住	Q3埋土	鉄製品	刀子	長さ:-5.1cm、幅:0.4~0.7cm、厚さ:0.4cm、重さ:3.3g								
507	15号住	煙出・カマド・貼床	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ハラミガキ/ハラミガキ	-14.4	6.3	4.7	ハラミガキ		A I a1	内黒
508	15号住	Pt3埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ハラミガキ/ハラミガキ	14.7	7.3	5.1	静止糸切?		A I b1	内黒
509	15号住	Q1埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ下端ハラケズリ	ハラミガキ/ハラミガキ	-16.5	6	5.1	回転糸切再調整		A I a2	内黒
510	15号住	土器1	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ハラミガキ/ハラミガキ	-	5.4	<3.0>	回転糸切		A I b1	内黒

番号	遺構名	出土地点	種類	器種	外面調整(口/体部)	内面調整(口/体部)	口径	底径	器高	底面	胎土	分類	備考
511	15号住	Q4埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ハラミガキ/ハラミガキ	-13.8	-	<4.8>	-		A I	内黒
512	15号住	右袖内	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	14.1	6.8	5.1	回転糸切		A II b1	赤焼き
513	15号住	支脚土器	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	13.8	5.1	4.8	回転糸切	しっとり	A II b2	赤焼き、ゆがみ
514	15号住	カマド・Q2	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	13.8	5.7	5.6	回転糸切		A II a2	赤焼き、墨書「凡/?」
515	15号住	カマド・貼床	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-15	6.3	4.8	回転糸切		A II b1	孔あり
516	15号住	支脚土器	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	14.1	5.7	6	回転糸切		A II a2	赤焼き、刻書「三」焼成後
517	15号住	Pt3・埋土・煙道内	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	15.4	6.6	5.3	回転糸切		A II b1	赤焼き
518	15号住	煙道内・Q1埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	13.8	-5.1	4.6	回転糸切		A II b2	赤焼き、墨書「凡」
519	15号住	Q4埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	13.8	6.3	4.3	回転糸切		A II b1	赤焼き
520	15号住	埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-15	5.6	5.1	回転糸切	金雲母	A II b2	赤焼き
521	15号住	Q1埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-13.2	5.3	4.5	回転糸切		A II b2	赤焼き
522	15号住	Q4埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-15	-	<4.0>	-		A II	赤焼き
523	15号住	Q2埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-15.3	-	<4.5>	-		A II	赤焼き、墨書「?」[「凡カ」]
524	15号住	Q4埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-8.7	3	2.7	回転糸切調整		A II	赤焼き、小さい
525	15号住	カマド内	土師器	甕	ロクロ/ハラケズリ	ロクロ/ロクロ	-13.2	-	<8.1>	-		(A II a)	赤焼き
526	15号住	右袖内	土師器	甕	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-	-	<6.6>	-		(A II)	赤焼き
527	15号住	ベルト内	土師器	甕	ヨコナデ/ハラケズリ	ヨコナデ/ナデ	-	-	<7.8>	-		(A I b)	非ロクロ
528	15号住	ベルト	土師器	甕	ヨコナデ/ハラケズリ	ヨコナデ/ハケメ	-	-	<11.4>	-		(A I b)	
529	15号住	Q4埋土	土師器	甕	ヨコナデ/ハケメ	ヨコナデ/ナデ	-18	-	<6.1>	-		(A I)	非ロクロ
530	15号住	Pt2埋土・Pt1底面	土師器	甕	ヨコナデ/ナデ	ヨコナデ/ハラナデ	-19.2	-	<10.8>	-		(A I)	非ロクロ
531	15号住	Pt4埋土	土師器	甕	ナデ/ナデ	ヨコナデ/ハラナデ	-	-	<18.0>	-		(A I)	非ロクロ、口唇短い
532	15号住	土器2	土師器	甕	ヨコナデ/ハラナデ	ヨコナデ/ハラナデ・ナデ	-23.3	-	<30.9>	-		(A I b)	非ロクロ
533	15号住	Q2埋土	土師器	甕(極小)	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-8.1	-	<3.0>	-		(A II)	
534	15号住	Q1埋土	土師器	甕?	/ハラケズリ	/?	-	-10.4	<4.2>	砂底		(A II a)	ロクロ
535	15号住	Q4埋土	須恵器	壺	ロクロ	ロクロ	-11.1	-	<3.3>			B	
536	15号住	ベルト	須恵器	大甕	/タタキメ	/当て具痕	-	-	-			B	
537	15号住	ベルト	須恵器	大甕	/タタキメ	/当て具痕	-	-	-			B	
538	15号住	煙道検出面	須恵器	大甕	/タタキメ	/当て具痕	-	-	-			B	
539	15号住	Q3埋土	須恵器	大甕	/タタキメ	/当て具痕、カキメ	-	-	-			B	
540	16号住	土器2	土師器	垢詰付	ロクロ/ロクロ	ハラミガキ/ハラミガキ	15.6	7.9	6.6	高台付		A I c	内黒

番号	遺構名	出土地点	種類	器種	外面調整(口/体部)	内面調整(口/体部)	口径	底径	器高	底面	胎土	分類	備考
541	16号住	Q2~Q4	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ハラミガキ/ハラミガキ	-16.5	6.3	5.4	回転糸切		A I b1	内黒
542	16号住	Q1埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ハラミガキ/ハラミガキ	-15.9	-	<3.9>	-		A I	内黒、墨書「弟?」
543	16号住	Q3埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ下端ハラケズリ	ハラミガキ/ハラミガキ	-16.6	-7	4.8	再調整		A I a1	内黒
544	16号住	カマド周辺	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ハラミガキ/ハラミガキ	-15	-	<4.8>	-		A I	内黒
545	16号住	埋土	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	-	-	<2.4>	-		A II	多文字墨書「弟カ・在カ」
546	16号住	埋土	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	-15.6	-	<3.9>	-		A II	多文字墨書「愚カ」、545と同筆か?
547	16号住	埋土	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	-	-7.2	<2.1>	回転糸切		A II b1	墨書「?」
548	16号住	貼床・Q1埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	13.8	4.8	4.8	回転糸切		A II b2	赤焼き
549	16号住	Q3・Pit2	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-15.6	-	<3.3>	-		A II	赤焼き
550	16号住	Pit1埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-14.6	-	<3.9>	-		A II	赤焼き
551	16号住	東側焼土内	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-14.9	-	<3.9>	-		A II	赤焼き、墨書「?」
552	16号住	土器1	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	14.6	5.4	5.9	回転糸切		A II b2	赤焼き、内外面油煙、灯明皿、ゆがみ
553	16号住	Q2埋土	土師器	甕	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-15	-	<5.4>	-		(A II)	
554	16号住	Q1・Q2・カマド内	土師器	甕	ロクロ/ハラケズリ	ロクロ/ハケメ	-21.3	-	<25.2>	-		(A II a)	外面輪積痕明瞭
555	16号住	右袖・Q4・Pit2埋土	土師器	甕	ロクロ/ハラケズリ	ロクロ/ハケメ	-20.1	-	<20.4>	-		(A II a)	外面輪積痕明瞭
556	16号住	支脚土器	土師器	甕	/ハラケズリ	/ハラナデ	-	9.1	<10.1>	痕なし	小礫多	(A I c)	
557	16号住	ベルト	土師器	甕	/ナデ	/ナデ	-	4.5	<4.5>	痕なし		(A II b)	
558	16号住	Q1埋土	須恵器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-14.1	-	<3.6>	-		B	
559	16号住	Pit2埋土	須恵器	壺	/ロクロ	/ハラケズリ	-	-	-	-		B	
560	16号住	Pit2埋土	須恵器	甕	/タタキメ	/当て具痕	-	-	-	-		B	
561	16号住	東側焼土内	土製品	羽口	長さ:10.8cm、直径7.5cm、内径2.4cm								
562	16号住		土製品	支脚?	ハラミガキ	ハラミガキ	-	9.7	<6.6>			-	
563	16号住	埋土上位	鉄製品	不明	長さ:-5.6cm、幅:1.7cm、厚さ:0.2cm、重さ:10.5g								
564	1号住状	Q3埋土	土師器	坏	/ロクロ下端ハラケズリ	/ハラミガキ	-	6	<2.6>	回転糸切		A I a2	内黒
565	1号住状	検出面	土師器	坏	/ロクロ	/ロクロ	-	-5.8	<2.4>	回転糸切		A II b2	赤焼き
566	1号住状	Q1・Q2埋土	須恵器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-	-	<4.5>	-		B	
567	1号住状	検出面	須恵器	坏	/ロクロ	/ロクロ	-	-6	<1.3>	回転糸切再調整		B2	
568	1号住状	Q3埋土	須恵器	壺?	/ハラケズリ	/ロクロ	-	-	<6.3>	-		B	
569	1号住状	埋土	須恵器	大甕	/タタキメ	/当て具痕	-	-	<20.7>	-		B	
570	3号住状	ベルト・Q3・Q4埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ハラミガキ/ハラミガキ	14.7	6.1	5.4	回転糸切		A I b2	内黒

番号	遺構名	出土地点	種類	器種	外面調整(口/体部)	内面調整(口/体部)	口径	底径	器高	底面	胎土	分類	備考
571	3号住状	Q3埋土	土師器	坏	/ハラミガキ	/ハラミガキ	-	6.3	<3.4>	ハラミガキ		A I	内外面黒色処理
572	3号住状	Q1埋土	土師器	坏	/ロクロ	/ロクロ	-	-5.7	<2.7>	回転糸切		A I b2	赤焼き、下端に刻書「中」焼成前
573	3号住状	Q1埋土	土師器	坏	/ロクロ	/ロクロ	-	-6.5	<1.2>	回転糸切		A II b2	赤焼き、下端に刻書「？」焼成前
574	3号住状	床直・Q2・Q4	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	15	6	5.7	回転糸切		A II	赤焼き
575	3号住状	Q3埋土	土師器	坏	/ロクロ	/ロクロ	-	6	<2.6>	ナデ		A II b2	赤焼き、墨書「二」一文字?
576	3号住状	壁際埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-14.1	-	<4.0>	-		A II	赤焼き
577	3号住状	壁際埋土	土師器	甕	/ハラナデ	/ハラナデ	-	-	<12.0>	-		(A I b)	外面に「××××」焼成前刻書
578	3号住状	Q1埋土	土師器	甕	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-24.3	-	<4.9>	-		(A II)	赤焼き
579	3号住状	壁際・Q3埋土	須恵器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-13.5	5.4	<4.7>	回転糸切		B2	
580	3号住状	ベルト・Q4	須恵器	坏	/ロクロ	/ロクロ	-	4.6	<3.6>	回転糸切		B2	
581	3号住状	Q4埋土	須恵器	坏	/ロクロ	/ロクロ	-	-6	<5.2>	回転糸切		B2	
582	3号住状	Q4埋土	須恵器	大甕	/タタキメ	/当て具痕	-	-	-	-		B	
583	3号住状	埋土	石器	砥石	長さ:23.7cm、幅:5.1cm、厚さ:4.8cm、重さ:1133.4g								砂岩 奥羽山脈
584	3号住状	埋土	鉄製品	刀子	長さ:4.9cm、幅:0.6cm、厚さ:0.4~0.6cm、重さ:2.7g								
585	4号住状	No1	土師器	坏	ロクロ/ロクロ下端ハラケズリ	ハラミガキ/ハラミガキ	15.3	6	5.7	静止糸切		A I a2	内黒
586	4号住状	Q4埋土下	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-14.4	6.3	4.8	回転糸切		A II b1	赤焼き
587	4号住状	Q4埋土下	土師器	甕(極小)	/ロクロ	/ロクロ	-	4.7	<3.1>	回転糸切		(A II)	
588	4号住状	Q3埋土下	須恵器	壺?	/タタキメ	/ロクロ	-	-	<5.2>	-		B	
589	4号住状	床面	石器	鉄砧石	長さ:15.2cm、幅:18.1cm、厚さ:2.6cm、重さ:1208.4g								安山岩 奥羽山脈
590	5号住状	Q1埋土	土師器	坏(高附)	/ロクロ	/ハラミガキ	-	-7.9	<2.1>	-		A I c	内黒
591	5号住状	Q1・Q3埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-14.1	-	<3.3>	-		A II	赤焼き
592	5号住状	Q2・Q3埋土	須恵器	甕	ロクロ/	ロクロ/	-	-	<4.8>	-		B	
593	5号住状	ベルト内	須恵器	甕	/タタキメ	/当て具痕	-	-	-	-		B	
594	6号住状	埋土	土師器	坏	/ロクロ	/ハラミガキ	-	-	-	-		A I	内黒、墨書「？」
595	7号住状	Q4埋土	土師器	坏(高附)	/ロクロ	/ハラミガキ	-	9.1	<3.6>	回転糸切後貼付		A I c	内黒
596	7号住状	Q3埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-	-	<3.0>	-		A II	赤焼き
597	7号住状	Q3埋土	土師器	甕	ヨコナデ/ハラケズリ	ヨコナデ/ナデ	-	-	-	-		(A I c)	非ロクロ
598	7号住状	Q3埋土	須恵器	大甕	/タタキメ	/当て具痕	-	-	-	-		B	
599	7号住状	Q4埋土	須恵器	大甕	/タタキメ	/当て具痕	-	-	-	-		B	
600	7号住状	Q4埋土	須恵器	大甕	/タタキメ	/当て具痕	-	-	-	-		B	

番号	遺構名	出土地点	種類	器種	外面調整(口/体部)	内面調整(口/体部)	口径	底径	器高	底面	胎土	分類	備考
601	7号住状 Q4埋土		鉄製品	刀子	長さ:-5.5cm、幅:0.3~1.3cm、厚さ:0.2cm、重さ:5.3g			9.9	<2.1>			-	
602	7号住状 Q4埋土		鉄製品	刀子	長さ:-10.0cm、幅:0.3~1.3cm、厚さ:0.1~0.3cm、重さ:6.5g			6	5.1	回転糸切		A I b2	内黒、墨書「?」
603	7号住状 床面		木製品	椀									
604	2号土坑 埋土		土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ハラミガキ/ハラミガキ	14.9						
605	2号土坑 埋土		須恵器	大甕	/タタキメ								
606	4号土坑 埋土	ベルト埋土	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ハラミガキ/ハラミガキ	-13.9	4.8	<4.4>	回転糸切		A I b2	器面に膨れ、最大径42.3cm
607	4号土坑 埋土	ベルト内	土師器	坏	ハラミガキ/ハラミガキ	ハラミガキ/ハラミガキ					金雲母	A I	内黒、墨書「?」
608	4号土坑 埋土	埋土(南)	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-14.7		<4.2>			A II	赤焼き
609	4号土坑 埋土	埋土(南)	土師器	坏	/ロクロ	/ロクロ		-5.1	<3.1>	回転糸切		A II b2	赤焼き、墨書「?」
610	4号土坑 埋土	埋土(北)	須恵器	甕	/タタキメ・ハラケズリ	/カキメ		12	<8.4>			B	
611	4号土坑 埋土	埋土(北)	須恵器	甕	/タタキメ・ハラケズリ	/カキメ		-12.6	<4.5>			B	
612	5号土坑 埋土	ベルト北西	土師器	坏	/ロクロ	/ハラミガキ		-6.6	<2.4>	回転糸切		A I a2	内黒
613	5号土坑 埋土	ベルト南東	土師器	甕	ヨコナデ/ハラケズリ	ヨコナデ/ナデ						(A I c)	非ロクロ
614	6号土坑 埋土	ベルト内	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ハラミガキ/ハラミガキ	-13.8		<4.5>			A I	内黒
615	6号土坑 埋土	ベルト内	土師器	坏	/ロクロ	/ハラミガキ		-4.5	<3.0>	回転糸切		A I b2	内黒
616	6号土坑 床直		土師器	坏	ロクロ/ロクロ下端ハラケズリ	ロクロ/ロクロ	15.3	6.6	5.4	回転糸切		A II a1	
617	6号土坑 埋土	ベルト内	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ			<3.6>			A II	赤焼き
618	6号土坑 Q2埋土		土師器	甕	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-20.1		<9.1>			(A II)	赤焼き
619	6号土坑 埋土	ベルト内	土師器	甕	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ			<5.7>			(A II)	赤焼き
620	6号土坑 埋土	ベルト内	土師器	甕	/ハラケズリ	/ハラナデ		8.3	<7.2>	木葉痕		(A I b)	非ロクロ
621	6号土坑 Q1埋土		須恵器	壺?	/ハラケズリ	/ナデ			<15.0>			B	
622	6号土坑 Q3埋土		須恵器	壺	/ロクロ	/ロクロ			<3.9>			B	
623	6号土坑 埋土	ベルト内	須恵器	大甕	/タタキメ	/当て具痕						B	
624	7号土坑 埋土		土師器	坏	/ロクロ	/ハラミガキ		-6.3	<1.5>	回転糸切	金雲母	A I b1	内黒
625	8号土坑 埋土	埋土Q4	土師器	坏	/ロクロ	/ハラミガキ	-16.2		<3.6>			A I	内黒
626	12号土坑 埋土		土師器	甕	ヨコナデ/ハラケズリ	ヨコナデ/ハラナデ・ナデ	-23.1		<10.9>			(A I c)	非ロクロ、口縁短小
627	13号土坑 埋土		土師器	坏(高台付)	/ロクロ	/ナデ			<1.5>	回転糸切	しっとり	A II c	赤焼き
628	13号土坑 埋土	ベルト	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ハラミガキ/ハラミガキ	14.3	5.7	5.2	回転糸切		A I b2	内黒、墨書「○」
629	13号土坑 埋土		土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-13.6		<3.6>			A II	赤焼き
630	13号土坑 埋土		石	搔器	長さ:7.0cm、幅:8.7cm、厚さ:1.6cm、重さ:12.5g								頁岩 奥羽山脈

番号	遺構名	出土地点	種類	器種	外面調整(口/体部)	内面調整(口/体部)	口径	底径	器高	底面	胎土	分類	備考
631	16号土坑	埋土	須恵器	甕	/ハラケズリ	/ナデ	-	-	-	-	-	B	
632	17号土坑	埋土(北)	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-13.8	-	<4.0>	-	しつとり	AII	赤焼き
633	17号土坑	埋土	土師器	甕	/ハラケズリ	/?	-	-9.9	<2.1>	-	-	(AII)	
634	19号土坑	焼土上	須恵器	坏	ロクロ/ロクロ下端ハラケズリ	ロクロ/ロクロ	-13.5	6	5.9	回転糸切		B2	生焼け?
635	19号土坑	焼土上	土師器	坏	/ロクロ・ハラミガキ, 下端ハラケズリ	/ハラミガキ	-	-6.9	<2.4>	回転糸切		AI	内黒
636	19号土坑	焼土上	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-14.1	-	<3.0>	-	-	AII	赤焼き
637	19号土坑	焼土上	須恵器	大甕	/タタキメ	/当て具痕	-	-	-	-	-	B	
638	19号土坑	埋土	石器	搔器	長さ:3.3cm、幅:2.4cm、厚さ:1.8cm、重さ:17.1g								黒曜石(湯ノ倉産?)
639	7号焼土	検出面	土師器	坏	ロクロ・ハラミガキ	ロクロ・ハラミガキ	-13.5	-	<4.2>	-	-	AII	内黒
640	7号焼土	検出面	土師器	坏(高台付)	ロクロ・ハラミガキ	ロクロ・ハラミガキ	-	7.5	<3.3>	不明	-	A I c	内黒、670と同一
641	1号土坑		縄文土器	深鉢	沈線、透刺突、燃糸文(準輪縁条体)	ミガキ	-24.6	-11.4	39			-	中期未葉

表3-2 遺物観察表(遺構外)

番号	遺構名	出土地点	種類	器種	外面調整(口/体部)	内面調整(口/体部)	口径	底径	器高	底面	胎土	分類	備考
1001	T15	II層	土師器	坏	/ロクロ	/ハラミガキ	-	-	-	-	金雲母	A I	内黒、墨書「？」
1002	T15		土師器	坏	/ロクロ	/ハラミガキ	-	-5.5	<4>	回転糸切		A I b2	内黒、墨書「？」
1003	G31区	II層	土師器	坏	/ロクロ	/ハラミガキ	-	-	-	-		A I	内黒、墨書「？」筆細い
1004	G36区	II層	土師器	坏	/ロクロ	/ハラミガキ	-	-	-	-		A I	内黒、墨書「？」
1005	I31区	II層検出面	土師器	坏	/ロクロ	/ハラミガキ	-	-	-	回転糸切		A I	内黒、墨書「？」筆細い
1006	K32区	III層	土師器	坏	/ロクロ	/ハラミガキ	-	-	-	-		A I	内黒、墨書「？」
1007	K34区	II層上	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ハラミガキ/ハラミガキ	-15.2	-	<5.7>	-		A I	内黒、刻書焼成前「○」
1008	L41区	II層上位	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ハラミガキ/ハラミガキ	-13.5	-	<4.8>	-		A I	内黒、刻書「×」
1009	M37区	II層検出面	土師器	坏	-	/ハラミガキ	-	-5.1	<0.6>	回転糸切		A I	内黒、墨書底部「？」
1010	M39区	III層	土師器	坏	/ロクロ	/ハラミガキ	-	-	-	-		A I	内黒、墨書「山山」?
1011	N34区	I層	土師器	坏	/ロクロ	/ハラミガキ	-	-	-	-		A I	内黒、墨書「？」
1012	N区	III層	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ハラミガキ/ハラミガキ	-	-	-	-		A I	内黒、墨書「？」
1013	Q38区	II層検出面	土師器	坏	/ロクロ	/ハラミガキ	-	-	-	-		A I	内黒、墨書「？」
1014	R43区	II層	土師器	坏 <small>(高胎)</small>	/ロクロ	/ハラミガキ	-	-7	<3.5>	高台付		A I C	内黒
1015	G31区	II層	土師器	坏	/ハラミガキ	/ハラミガキ	-	-6	<2.4>	ハラミガキ		A I b2	内外面黒色処理
1016	T16		土師器	坏	/ロクロ	/ロクロ	-	-	-	-		A II	赤焼き、墨書「？」
1017	I30区	I~II層	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	14	-	<5>	-		A II	赤焼き
1018	J8-3区	II層検出面	土師器	坏	/ロクロ	/ロクロ	-	-6.8	<1.8>	回転糸切		A II b1	赤焼き
1019	K34-L39区	II層	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	13.5	-4.8	5.1	回転糸切		A II b2	赤焼き
1020	L40-M39区	II層検出面	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	14.1	-	<5.6>	-		A II	赤焼き
1021	L40区	I~II層	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-	-	-	-		A II	赤焼き、墨書「○」?
1022	L40区	I~II層	土師器	坏	/ロクロ	/ロクロ	-	-	-	-		A II	赤焼き、刻書「？」
1023	M35区	I層	土師器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-14.6	6.6	4.7	回転糸切		A II b1	赤焼き
1024	M41区	II層	土師器	坏	/ロクロ	/ロクロ	-	-	-	-		A II	赤焼き、墨書「山山」
1025	G30-32区	I~II層	土師器	甕	/ハラケズリ	/ハラミガキ	-	-	-	-		(A II?)	刻書「？」
1026	G30-32区	II層	土師器	甕	/ハラナデ	/ナデ	-	8.1	<1.5>	砂底		?	
1027	H35区	II層	土師器	甕	/ハラケズリ	/ナデ	-	-6.6	<2.3>	砂底		(A II?)	低い高台風
1028	J33区	II層	土師器	甕	/ハラケズリ?	/ハラミガキ	-	-	-	-		(A II?)	内黒とび、刻書「？」
1029	K33-34区	II層	土師器	甕	ナデ/ナデ	ナデ/ナデ	-	-	-	-		(A I)	非ロクロ
1030	K38区	II層	土師器	甕	ロクロ/ハラケズリ	ロクロ/ロクロ	20.3	-	<12>	-		(A II a)	赤焼き

番号	遺構名	出土地点	種類	器種	外面調整(口/体部)	内面調整(口/体部)	口径	底径	器高	底面	胎土	分類	備考
1031	M39区	II層検出面	土師器	甕	-	/ハラミガキ	-	-	-			(AII?)	内黒、刻書「？」
1032	N34区	I層	土師器	甕	/ナデ	/ハケメ	-	-7.5	<2.7>	砂底		(AI)	
1033	N35区	II層	土師器	甕	/ハラケズリ?	/ハラナデ	-	7.5	<10>	刻書		(AII?)	底部外面に刻書「？」
1034	N36区	?	土師器	甕	-	/ハラミガキ?	-	-	-			(AII?)	内黒、刻書「？」
1035	P36区	II層検出面	土師器	甕	/ハラケズリ	/ハラナデ	-	-12.3	<2.4>	砂底		(AI)	
1036	R40区	II層下	土師器	甕	/ナデ	/ナデ	-	11.7	<2>	木葉痕		(AI)	内外面に墨痕
1037	S42区	III層	土師器	甕	/ハラケズリ	/ハラナデ	-	-	<24.5>	-		(AIb)	非ロクロ
1038	S42区	III層	土師器	甕	/ロクロ・ハラケズリ	/ハラナデ	-	-	<19.8>			(AIIa)	赤焼き
1039	T5		土師器	甕	/ハラケズリ	/ハラミガキ	-	-	-			(AII?)	刻書(ランダムな縦横線)
1040	I38区	I層	須恵器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-14.4	-4.9	1.5	再調整		B2	
1041	L38区	II層検出面	須恵器	坏	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-9.6	-5.1	4.6	回転糸切		B2	
1042	G30~32	I~II層	須恵器	壺	/ロクロ	/ハラナデ	-	-11.1	<5.7>			B	
1043	H34区	II層検出面	須恵器	壺	ロクロ/	ロクロ/	-	-	-			B	
1044	H34区	II層検出面	須恵器	壺	ロクロ/	ロクロ/	-	-	-			B	
1045	H35区	II層	須恵器	壺	ロクロ/	ロクロ/	-	-	-			B	
1046	P39区	II層	須恵器	壺	/自然釉	/ロクロ	-	-	-			B	
1047	L39区	II層検出面	須恵器	壺?	/ロクロ	/カキメ	-	-	-			B	
1048	M42区	I~II層	須恵器	大甕	ロクロ/	ロクロ/	-	-	-			B	
1049	M42区	I~II層	須恵器	大甕	/ハラケズリ	/ナデ	-	12.6	<5.1>			B	底部に焼成前の孔
1050	K39区	II層検出面	須恵器	甕	ロクロ/	ロクロ/	-	-	-			B	
1051	L39区	II層	須恵器	甕	ロクロ・カキメ/	ロクロ/	-	-	-			B	
1052	O37区	II層	須恵器	甕	/ロクロ	/ロクロ	-	-	-			B	
1053	N?区	?	須恵器	甕	/タキメ	/当て具痕	-	-	-			B	
1054	M36区	I層	鉄製品	雁又鎌	長さ:-5.6cm、幅:2.5cm、厚さ:2.5cm、重さ:14.6g								
1055	M37区	II層	鉄製品	釘	長さ:-4.2cm、幅:0.7cm、厚さ:0.7cm、重さ:4.8g								
1056	T4		鉄製品	不明	長さ:10cm、幅:0.4~0.8cm、厚さ:0.5cm、重さ:11.7g								
1057	G35区	I~II層	鉄製品	刀子	長さ:-2.9cm、幅:0.9cm、厚さ:0.2cm、重さ:2g								
1058	Ti仲埜		金属	銭貨	直径:2.4cm、重さ:2.4g								天聖元寶(初鑄1023年)
1059	N38区		石器	石鎌	長さ:-4.4cm、最大幅:1.8cm、最大厚:0.6cm、重さ:1.5g								頁岩 奥羽山脈
1060	N38区	II層	石器	石鎌	長さ:-2.2cm、最大幅:-1.7cm、最大厚:0.3cm、重さ:0.6g								頁岩 奥羽山脈

番号	遺構名	出土地点	種類	器種	法量・文様ほか	分類	備考
1061	O42区	Ⅲ層下	石器	石匙	長さ:5.8cm,最大幅:7.6cm,最大厚:1cm,重さ:23.7g		頁岩 奥羽山脈
1062	H34区	Ⅲ層下	石器	石匙	長さ:7.6cm,最大幅:7cm,最大厚:1cm,重さ:23.8g		頁岩 奥羽山脈
1063	N38区	Ⅱ層	石器	石匙	長さ:5cm,最大幅:7.6cm,最大厚:1cm,重さ:17g		頁岩 奥羽山脈
1064	平形竈裏		石器	円形搔器	長さ:3.4cm,最大幅:3cm,厚さ:2cm,重さ:10.1g		黒曜石(湯ノ倉産?)
1065	M36区	Ⅱ層	石器	搔器	長さ:3.8cm,最大幅:2.9cm,最大厚:1.4cm,重さ:4.6g		黒曜石(湯ノ倉産?)
1066	T9		石器	Rフレ	長さ:3.6cm,最大幅:3.9cm,最大厚:0.9cm,重さ:5g		黒曜石(湯ノ倉産?)
1067	S41区	Ⅲ層	石器	磨石	長さ:24.3cm,最大幅:8.4cm,最大厚:4cm,重さ:1033.2g		砂岩 北上山地
1068	Q44区	Ⅲ層下	石器	石皿	長さ:-17.1cm,幅:-11.6cm,厚さ:7.2cm,重さ:415.3g		安山岩 第四紀火山
1069	J33区	Ⅱ層	石器	磨製石斧	長さ:12.2cm,幅:4.2cm,厚さ:2.4cm,重さ:181.9g		閃緑岩 北上山地
1070	R42住	Ⅳ層か?	縄文	深鉢	貝殻文	①	Vまとめ2縄文時代の遺物の分類
1071	L36区	Ⅱ層中	縄文	深鉢	LR縄文、補修孔?	⑦	
1072	G38区	Q3埋土	縄文	深鉢	沈線、突起	②	
1073	L33区	Ⅱ層検出面	縄文	深鉢	平行沈線、有孔	②	
1074	L40-4区	Ⅱ層	縄文	深鉢	刻み、粘土紐貼付、平行沈線、無節	②	
1075	O35住	Q3埋土	縄文	深鉢	沈線、隆帯	②	
1076	P35区	Ⅱ層	縄文	深鉢	突起、平行沈線	②	
1077	O36住	Q1埋土	縄文	深鉢	粘土紐貼付、RL縄文	②	
1078	M38区	床面	縄文	深鉢	粘土紐貼付、刻目、平行沈線	②	
1079	M38区	Ⅲ層下	縄文	深鉢	平行沈線、連鎖沈線	②	
1080	M41区	Ⅱ層	縄文	壺	LR縄文、ナデ?	②	
1081	K33区	Ⅱ層	縄文	深鉢	粘土紐貼付、折り返し口縁	②	
1082	G34住	Q2埋土	縄文	高坏?	無節R、沈線、ミガキ	②	
1083	R44区	Ⅲ層	縄文	深鉢	曲線文、粘土紐貼付	③	
1084	T42区	Ⅲ層	縄文	深鉢	折り返し口縁、網目状燃糸文、沈線	③	
1085	M42区	Ⅲ層	縄文	深鉢	沈線、燃糸文	③	
1086	Q41区	Ⅲ層下	縄文	深鉢	折り返し口縁、沈線、刺突	③	
1087	S47-4区		縄文	深鉢	網目状燃糸文	③	
1088	R41区	Ⅲ層	縄文	深鉢	曲線文	③	
1089	P44区	Ⅲ層下	縄文	深鉢	沈線による曲線文	③	
1090	R45区	Ⅲ層	縄文	深鉢	曲線文	③	

番号	遺構名	出土地点	種類	器種	文様ほか	分類	備考
1091	S45区	II層	縄文	壺?	平行沈線による区画文	③	
1092	P39区	II層	縄文	深鉢	折り返し口縁、沈線、無節L	③	
1093	S41区	III層	縄文	深鉢	沈線、燃糸文、無節	③	
1094	Q41区	検出面	縄文	深鉢	曲線文、円文	③	
1095	P40区	III層中	縄文	突起	ミガキ、円形突起	④	
1096	S34区	IV層	縄文	深鉢	刺突、沈線、LR縄文	④	
1097	L35住	Q1埋土	縄文	深鉢	波状口縁、入組沈線文	④	
1098	L36区	III層下	縄文	深鉢	波状口縁、入組文?	④	
1099	L37区	III層下	縄文	深鉢	入組文? ミガキ	④	
1100	G35区	II層	縄文	壺	平行沈線	④	
1101	L40住	Q3埋土	縄文	深鉢	山形突起、沈線、入組文	④	
1102	O42住	Q2埋土	縄文	深鉢	突起、ミガキ	④	
1103	N41区	III層	縄文	深鉢	口唇上に突起、平行沈線	④	
1104	M35区	I層	縄文	深鉢	ミガキ、波状口縁、入組文	④	
1105	L36区	古代検出面	縄文	深鉢	ミガキ、LR縄文	④	
1106	J38区		縄文	深鉢	突起、平行沈線	④	
1107	M41区	II層	縄文	深鉢	ミガキ、波状口縁	④	
1108	S40区	II層	縄文	鉢	ミガキ、LR縄文、波状口縁	④	
1109	M42区	III層下位	縄文	深鉢	ミガキ、波状口縁、無節L	④	
1110	O38区	II層検出面	縄文	深鉢	波状口縁、ミガキ	④	
1111	N39区	II層	縄文	深鉢	小突起	④	
1112	L37住	IV層?	縄文	注口	ミガキ	④	
1113	S43-44区	III層	縄文	深鉢	櫛歯状	④	
1114	I34区	II層	縄文	深鉢	波状口縁、刻み目	④	
1115	N41区	-	縄文	深鉢	口唇上に突起、刻み目	④	
1116	L39区	II層検出面	縄文	深鉢	刻み、ミガキ	④	
1117	K39-L39区	III層下	縄文	深鉢	平行沈線、刻み目小突起	④	
1118	M39区	II層検出面	縄文	鉢	刺突、平行沈線、LR縄文	⑤	
1119	M39区	II層	縄文	深鉢	平行沈線、RL縄文、刻目突起	⑤	
1120	M39区	II層検出面	縄文	深鉢	刻目突起、沈線	⑤	

番号	遺構名	出土地点	種類	器種	文様ほか	分類	備考
1121	M39区	Ⅲ層	縄文	深鉢	ボタン状貼付,突起,刻み目	⑤	
1122	Q44区	Ⅲ層下	縄文	鉢	平行沈線、RL縄文、突起	⑤	
1123	Q44区	Ⅲ層下	縄文	深鉢	貼瘤、RL縄文	⑤	
1124	Q37区	Ⅲ層下	縄文	鉢	口唇刻み、三叉文	⑥	
1125	Q32区	Ⅳ層	縄文	鉢	平行沈線、ミガキ	⑥	
1126	M42区	I～II層	縄文	鉢	平行沈線	⑥	
1127	09-3坑 埋土(北)		縄文	鉢	三叉文、RL縄文、沈線	⑥	
1128	K33区	II層	縄文	注口	平行沈線、刺突、ミガキ	⑥	
1129	L35区	-	縄文	鉢	平行沈線、突起	⑥	
1130	S43区	Ⅲ層	縄文	広口壺?	沈線、ミガキ、内面沈線	⑥	
1131	L33区	II層	縄文	台付鉢?	ミガキ	⑦	
1132	L32区	II層検出面	縄文	鉢	平行沈線	⑦	
1133	K39L39区	II・Ⅲ層	縄文	鉢	口唇ミガキ、LR縄文	⑦	
1134	Q32区	Ⅳ層	縄文	鉢	平行沈線、LR縄文	⑦	
1135	Q41区	II層	縄文	壺	LR縄文、沈線	⑦	
1136	O39区	Ⅲ層下	縄文	深鉢	LR縄文	⑦	
1137	M36区	Q2埋土	縄文	注口	ミガキ	⑦	
1138	M39区	Ⅲ層	縄文	注口	ミガキ	⑦	
1139	N34区	I層	縄文	鉢	LR縄文、捺糸文	⑦	
1140	I38区	II層	縄文	小形鉢	刺突、沈線、LR縄文	⑦	
1141	R44区	Ⅲ層	縄文	深鉢	円形刺突、捺糸文	⑦	
1142	H30区	I層	縄文	壺	無文?	?	赤色顔料付着
1143	R45区	Ⅲ層	縄文	土製品	LR縄文		
1144	J39区	I～II層	縄文	腕輪?	ミガキ		
1145	O39区	Ⅲ層下	縄文	土製品?	?		

VI まとめ

1. 遺構

(1) 竪穴住居跡

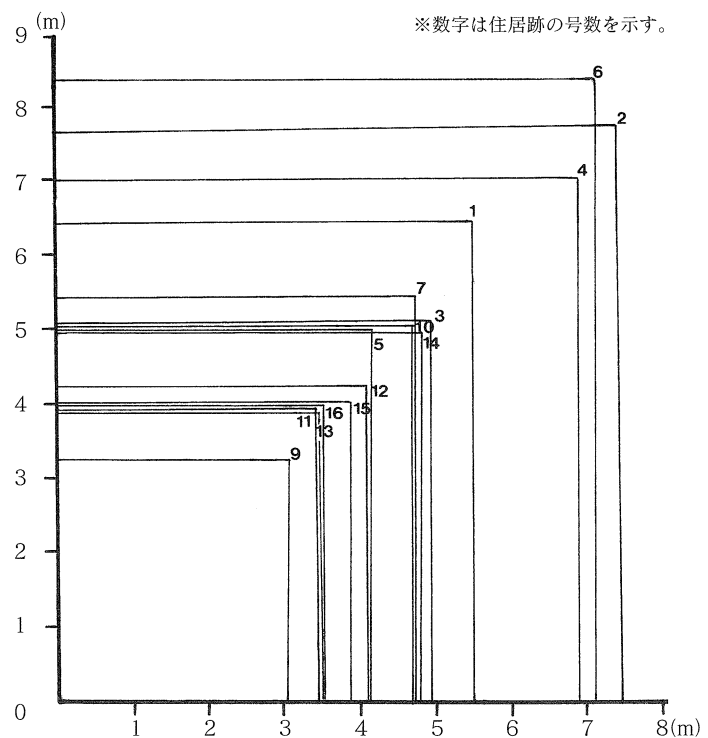
今回16棟の竪穴住居跡が確認され、前回調査時のそれとあわせると、総数は37棟を数えることとなった。これらが、平安期における一連の集落であることはこれまで述べてきたとおりであり、当然その評価は、両調査の結果を総合して判断すべきであるが、ここでは今回の調査で検出した16棟の規模やカマドの詳細、柱穴配置などについて、簡単にまとめることとする。

表4に住居跡の観察一覧を掲載した。平面形は方形基調のものが多く、この他は長方形を呈するものが数棟見られる程度である。規模では、①3～4m前後（小形）6棟、②4～5m前後（中形）4棟、③5～6m前後（大形）3棟、④7m以上（特大）3棟、の四種類に分けられる。④の特大クラスは、本集落の有力者の住む住居であることは疑いようが無い。祭祀的な儀式を執り行っていたと思われる第4号住居跡、土器の製作工房である第6号住居跡のほか、第2号住居跡がこれに該当する。これら3棟が同時に存在し、集落内の中心的役割を担っていたと考えるほうが自然とも思えるが、遺物等からはその確証は見いだせない。

その他の①、②、③のクラスでは、それぞれまとまった占地をするなどの傾向は窺えない。強いて言えば、①・②クラスの小規模住居が東寄りに分布している様相が見受けられることが挙げられるだけである。また、第121図や表4にみるとおり、住居跡の軸方向（煙道方位）もそのほとんどが南東方向にあるなど、遺物や埋土に堆積する火山灰から想定した集落内における存続時期の差（第II期か、第III期か）を判断する材料にはならない。ことカマドに関しても、扁平な礫を袖の芯材や煙道に多用したりしなかったりすることや、煙道構造に掘り込みと削り抜きの違いがあっても、それが即時期差にはつなげて来ないように思われる。支脚の有無や、それが礫か土器かといった点も同様である。

(2) 住居状遺構

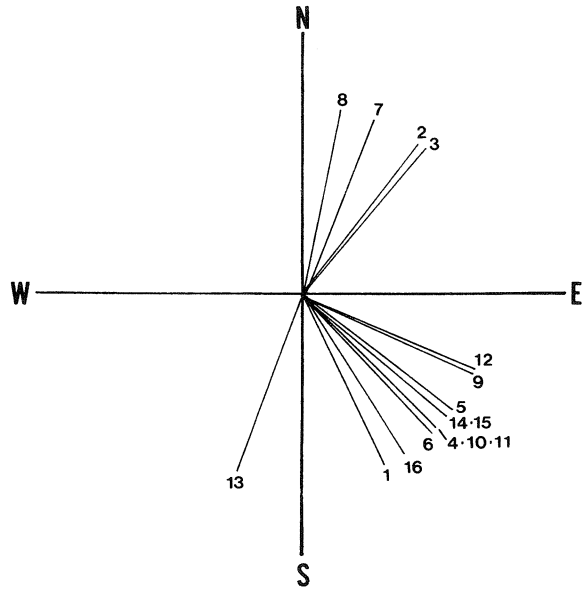
今回確認された住居状遺構は、斜面部裾に1棟、平坦部に6棟の合計7棟で、前回の調査では4棟検出されている。これらの平面形は方形あるいは長方形を基調とし、既述のとおり、竪穴住居跡とほぼ時期を同じくし、集落内にある作業場や小鍛冶等の工房（床面に焼土が形成されるもの—第7号住居状遺構）として利用されたものと思われる。7棟の平面規模をみると、2.5～3m前後・4m前後、5m以上の主に三種に分類される。このうち、最も規模が小さい2.5～3m前後のものについては、大形の方形土抗との境界を明瞭にできたわけではない。



第120図 住居跡長辺・短辺比

住居跡に付属する屋外施設として存在した可能性
がある例としては、①第4号住居跡・第3号住居状
遺構、②第6号住居跡・第4号住居状遺構の二つが
挙げられる。遺構間に、そう想定するに適切な間隔
が空いていることや、二つの遺構の軸方向がほぼ同
じであることなどがその理由である。また、第5
号・第6号住居状遺構の間には重複が認められ、住
居跡同様この遺構にも存続した期間に時期差がある
ことも判明している。

なお、第2号住居状遺構は唯一斜面部に確認され
たもので、他の住居状遺構よりも一段高い場所に位
置することから、作業場などとは少し違った使われ
方をしている施設の可能性があるだろう。例えば、物見
橋的な施設である。



第121図 カマド煙道方位

(3) 土坑

縄文時代に属する1基、平安時代のいずれかの時期に属する19基の計20基が確認された。その平面形状から、円形(楕円形)・方形・長方形の三種に分類される。

円形あるいは楕円形の土坑は8基である。尾根部に検出された第1号土坑は、縄文時代に所属する貯蔵穴と思われるもの。斜面部にある第9号土坑は底面の炭化材から鍛冶関連の土坑と判断した。第9号住居跡と重複する第17号土坑では、底面に焼土が形成されており土器焼成遺構の可能性のあるものである。

長方形を呈するものは、第3号・7号・13号・19号土坑の4基で、形状から墓壙であった可能性があるこ

表4 住居跡一覧表

住居名	平面形	規 模	壁 高	主柱穴	煙道方位 (軸方向)	焼 失	周 溝	土 坑	時 期	備 考
第1号	長方形	Ⓐ 5.57×(6.30)m	51~69cm	3	N-155° -E	×	あり	1	Ⅲ	
第2号	不整形	Ⓑ 7.40×7.78m	35~50cm	3	N-38° -E	×	あり	3?	Ⅲ	
第3号	方形	Ⓐ 4.94×5.08m	51~71cm	4	N-40° -E	×	なし	1	Ⅲ	
第4号	方形基調	Ⓑ 6.90×7.00m	45~59cm	4	N-135° -E	×	あり	5	Ⅲ	祭祀関連施設か?
第5号	長方形	Ⓐ 4.17×4.98m	43~71cm	1	N-128° -E	×	なし	3	Ⅲ	
第6号	方形基調	Ⓑ 7.08×8.30m	28~50cm	4	N-136° -E	×	あり	5	Ⅲ	土器製作工房
第7号	長方形	Ⓐ (4.70)×5.28m	34~57cm	4	N-22° -E	○	なし	4	Ⅱ	小鍛冶に伴う焼土
第8号	長方形	Ⓐ 2.16× ?	37cm	なし	N-12° -E	×	なし	1	Ⅱ	
第9号	隅丸方形	Ⓐ 3.03×3.20m	41~50cm	なし	N-115° -E	×	なし	1	Ⅲ	
第10号	隅丸方形	Ⓐ 4.70×5.04m	32~58cm	4	N-135° -E	×	あり	なし	Ⅲ	
第11号	長方形基調	Ⓐ 3.37×3.90m	30~40cm	4	N-135° -E	×	なし	1?	Ⅱ	
第12号	隅丸方形	Ⓐ 4.21×4.23m	47~66cm	なし	N-113° -E	×	あり	1	Ⅱ	
第13号	方形	Ⓐ 3.40×3.85m	39~60cm	なし	N-200° -E	×	なし	3	Ⅱ	
第14号	隅丸方形	Ⓐ 4.70×4.95m	39~58cm	なし	N-130° -E	×	あり	4	Ⅲ	
第15号	方形基調	Ⓐ 3.79×4.01m	29~52cm	3	N-130° -E	×	なし	3	Ⅲ	
第16号	不整形	Ⓐ 3.55×3.97m	17~36cm	2	N-148° -E	○	なし	2	Ⅲ	祭祀関連施設か?

とを指摘したが、規模や出土遺物の有無などに差異があり、一概には判断できない部分もある。第19号土坑のように、平安時代の土師器とともに黒曜石製のスクレーパーが出土する例もあり、この石器が所属する時期や用途など検討すべき事項も多い。

方形の土坑は、第2号・4号・5号・6号・8号・10号・11号・18号土坑の8基で、貯蔵穴や作業場の用途を想定した。分布を見ると、平坦部の北側にある一群、第4号住居跡の周辺にある一群、の大きく二つに分けられる。あくまでも推測であるが、後者については先に取り上げたように、住居跡に付属した何らかの屋外施設となる可能性がある。第4号住居跡が、祭祀に関連する要素を有することからも、そのことは想像に難くない。

詳しくは後述することになるが、今回の調査では、時期的には9世紀後半から10世紀初頭に存続した集落と、それ以前の9世紀前半から中頃にかけての集落が確認され、それは居住するための竪穴住居跡、作業場であろう住居状遺構、貯蔵施設である土坑、埋葬施設の墓壇というそれぞれの遺構から構成されることが明らかとなった。また、前者に所属すると思われる住居跡が後者の2倍以上となっている（第125図参照）ことから、本集落の平安時代における主体は、9世紀後半から10世紀前半にあったと判断されよう。

表5 カマド一覧表

住居名	カマド位置	カマド袖部	煙道構造	煙道方位	支脚	煙出部の掘り込み	礫組み	備考
第1号	南東壁東隅寄り	芯材に礫・シルト	掘り込み式	N-155° -E	羽口転用	あり	あり	煙道部礫のトンネル
第2号	北東壁ほぼ中央	芯材に礫・シルト	掘り込み式	N-38° -E	土師器甕	あり	あり	礫のトンネル
第3号	北東壁東寄り	芯材に礫・シルト	掘り込み式	N-40° -E	土師器坏・甕	なし	あり	
第4号	南東壁東隅寄り	シルト	掘り込み式	N-135° -E	土師器甕	なし	あり	祭祀関連住居か？
第5号	南東壁西寄り	芯材に礫・シルト	掘り込み式	N-128° -E	なし	あり	なし	
第6号	南東壁東隅寄り	シルト主体	掘り込み式？	N-136° -E	なし	なし	なし	天井部上にカヤ、土器製作工房
第7号	北東壁東寄り	芯材に礫・シルト	掘り込み式	N-22° -E	礫	あり	なし	
第8号	北東壁東寄り	礫・シルト	削り抜き式	N-12° -E	礫	あり	なし	
第9号	南東壁東隅寄り	芯材に礫・シルト	削り抜き式	N-115° -E	なし	あり	なし	
第10号	南東壁東隅寄り	芯材に礫・シルト	掘り込み式	N-135° -E	なし	なし	なし	破壊された？
第11号	南東壁南隅寄り	シルトのみ残る	掘り込み式	N-135° -E	なし	あり	なし	破壊された？
第12号	南東壁南隅寄り	芯材に礫・シルト	削り抜き式	N-113° -E	土師器甕	あり	なし	
第13号	南壁東隅寄り	芯材に礫・シルト	掘り込み式	N-200° -E	なし	あり	あり	一部礫のトンネル
第14号	南東壁東隅寄り	芯材に礫・シルト	削り抜き式	N-130° -E	礫	あり	なし	
第15号	南東壁東隅寄り	芯材に礫・シルト	削り抜き式	N-130° -E	土師器坏刻書あり	なし	なし	
第16号	南東壁東隅寄り	シルト主体	不明	N-148° -E	土師器甕	あり	なし	祭祀関連か？

2. 遺物

今回出土した遺物は、そのほとんどが平安時代の遺構に伴う土師器・須恵器の土器類で、この他に土製品、金属製品、木製品があった。遺構内外から出土したその他の遺物には、縄文土器、石器類、土師器・須恵器、金属製品があり、それらをあわせた総出土量は大コンテナ（容量40ℓ）25箱に及ぶ。このうち、約9割近くは遺構内出土の遺物である。自然遺物は、炭化材サンプル小コンテナ（容量14ℓ）1箱を持ち帰った。

本報告書の掲載にあたっては、土器類は残存状態が良くかつ個々の特徴を示していると思われるものを中心に選別、掲載した。その他の土製品・石器類・金属製品・木製品については、遺構の内外を問わず全点掲載した。内訳は、下表のとおりである。

	遺構内の出土量（出土点数）	遺構外の出土量（出土点数）
土器類	大コンテナ20箱	大コンテナ4箱（うち縄文土器1箱）
土製品	羽口3点・	土製円盤・腕輪・ミニチュア各1点
石器類	製品12点	製品11点、フレイクなど中コンテナ1箱
金属製品	鉄製品26点、鉄滓2点	鉄製品4点、銭貨1点、鉄滓1点
木製品	木製椀1点	なし

(1) 土器の分類

次に、遺物の主体である平安時代の土師器・須恵器の分類を行い、その組成と灰白色火山灰の堆積状況等から、本集落が存在した実年代を想定してみる。分類基準については、今回得られた出土遺物の特徴や内容、想定される年代が前回の調査結果と酷似しており、一連の集落跡になることが明らかであることから、前回の報告の際に設けた基準をそのまま用いることとした（第122図参照）。若干、分類における用語の表現をかえた部分（胴部→体部など）がある。以下に、再度分類基準を示す。

<坏>

A群—土師器（酸化焰焼成されているもの）

I類—ロクロ成形後、内面へラミガキ・黒色処理（内黒）が施されるもの

a種—回転糸切り後、体部下端および底部が再調整されるもの

b種—回転糸切り後、再調整されていないもの

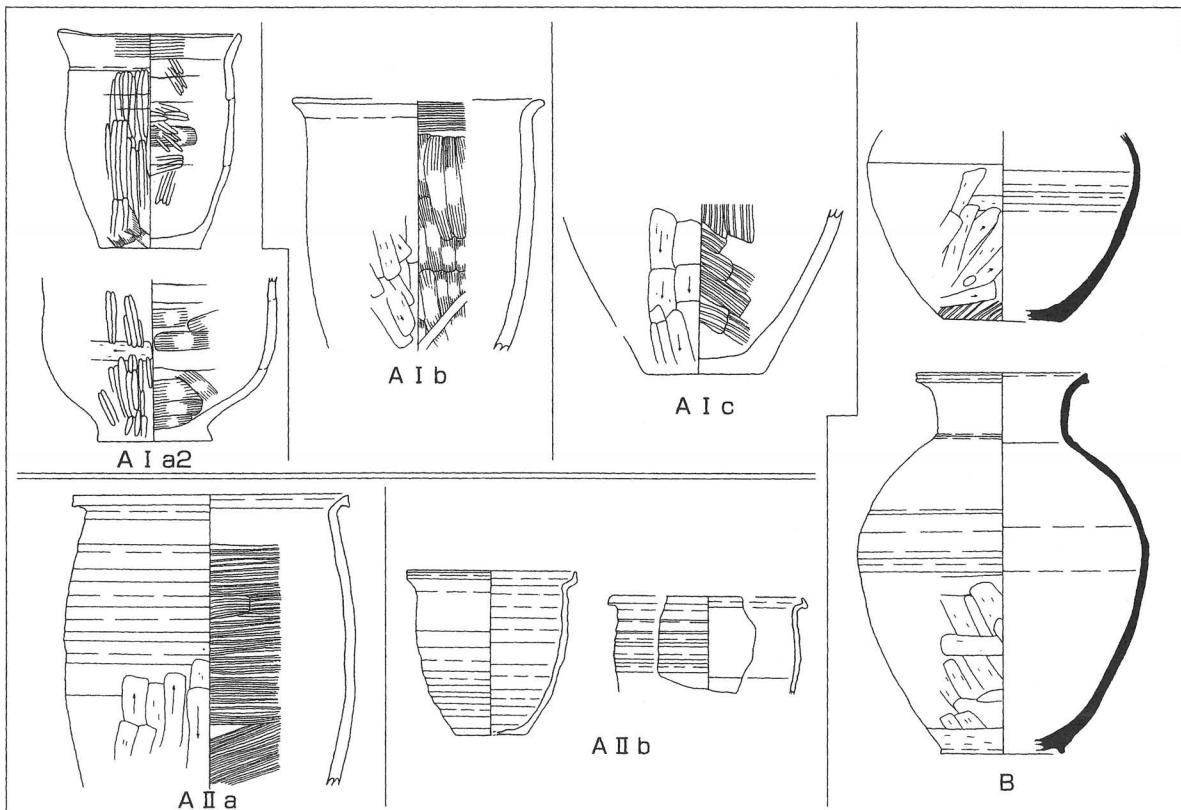
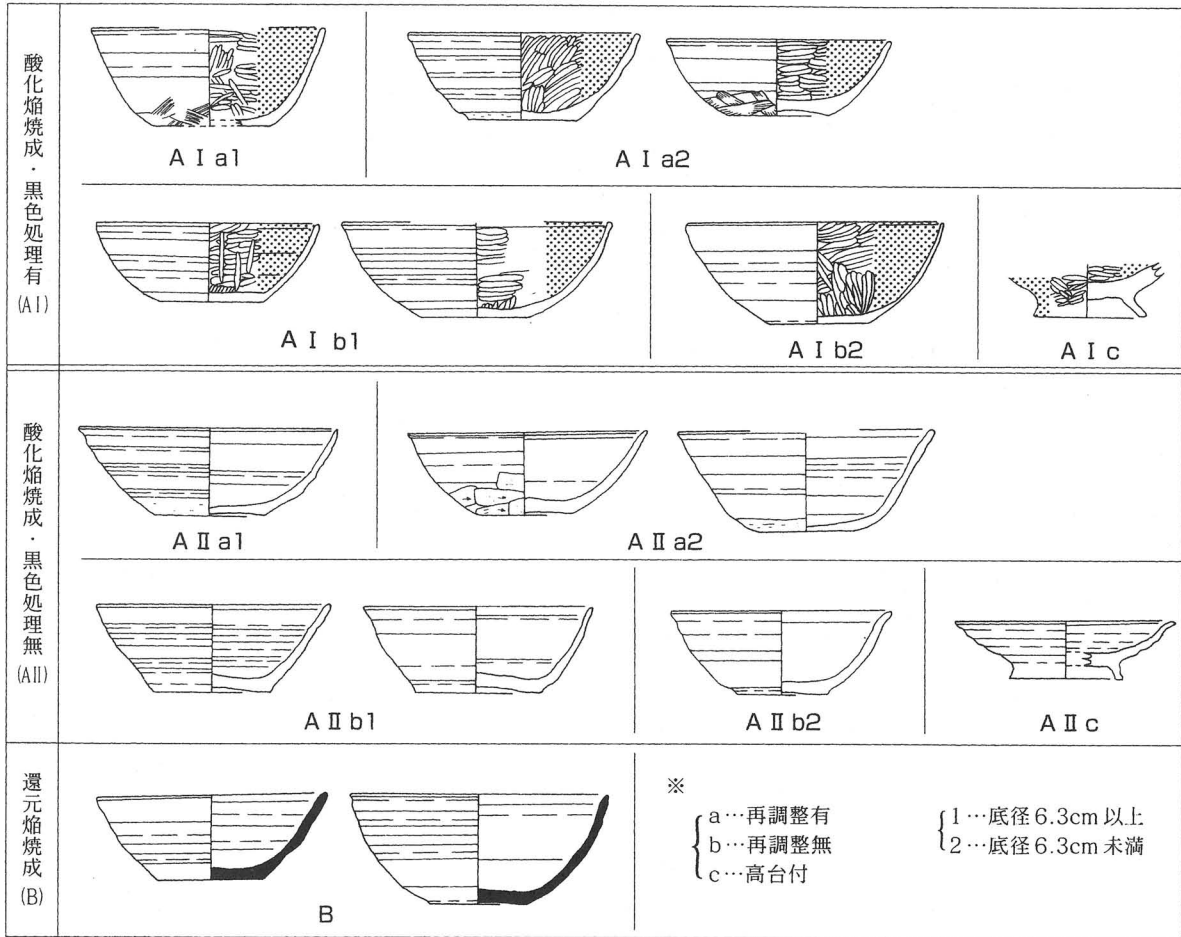
c種—回転糸切り後、高台が付けられているもの

（a種・b種で底径が6.3cm以上のもの1、それ未満のもの2）

II類—ロクロ成形後、内面にへラミガキ・黒色処理（内黒）が施されないもの

a種—回転糸切り後、体部下端および底部が再調整されるもの（いわゆる赤焼き土器以外のもの）

b種—回転糸切り後、再調整されていないもの（いわゆる赤焼き土器）



第122図 土器分類図

c種—回転糸切り後、高台が付けられているもの

(a種・b種で底径が6.3cm以上のもの1、それ未満のもの2)

B群—須恵器 (還元焰焼成されているもの)

<甕>

A群—土師器 (酸化焰焼成されているもの)

I類—ロクロ成形されていないもの

a種—体部の内外面がヘラミガキ調整主体のもの *今回は該当遺物なし

b種—体部の外面がヘラケズリ、内面がヘラナデ・ヘラケズリ調整主体のもの

c種—体部の外面が粗いヘラケズリ調整主体のもの

II類—ロクロ成形されているもの

a種—体部の外面にロクロ痕以外にヘラケズリ等の調整がみられるもの

b種—体部にロクロ痕のみが残るもの。

B群—須恵器 (還元焰焼成されているもの)

<壺・鉢類>

A群—土師器 (酸化焰焼成されているもの)

B群—須恵器 (還元焰焼成されているもの)

表6 遺構別出土土器一覧表

	坏										甕						
	A群										B群	A群					B群
	I類					II類						I類			II類		
	a1	a2	b1	b2	c	a1	a2	b1	b2	c		a	b	c	a	b	
第1号住	1	3	4	5			1	2	6	2	3	—	6	2	3	2	17
第2号住		1	3	5		1		1	4		8	—	8		3		4
第3号住	2	2	2	4				5			8	—	1		5	3	9
第4号住			2	6	3	1		4	13	1	2	—	2		2	5	10
第5号住	4	3		3				5	5	1	1	—	1	2	1		3
第6号住	3	2	1	9	4		4	8	13		2	—	8		5		9
第7号住	1		1					4			2	—			1		1
第8号住			3					2				—					
第9号住											1	—			2		
第10号住							1					—	1	1			2
第11号住	1										2	—		1			
第12号住		1		2							1	—			2	1	4
第13号住				1							1	—			1		
第14号住			1	1		1	1	1				—		1	1		2
第15号住	1	1	2				2	4	4			—	3		2		5
第16号住	1		1		1			1	2		1	—		1	2	1	
第1号住居状		1							1		2	—					2
第2号住居状												—					
第3号住居状				2					2		3	—	1				1
第4号住居状		1						1				—					1
第5号住居状					1							—					
第6号住居状												—					
第7号住居状					1							—		1			3
第4号土坑				1					1			—					
第6号土坑				1		1						—		1			3
第13号土坑				1						1		—					
第19号土坑												—					1
合計	14	15	20	41	10	4	9	38	51	5	37	0	31	10	30	12	77

(2) 遺構別土器組成

上記の基準によって分類された土師器の坏・甕ほかの出土状況を表6にまとめ、遺構毎の土器組成を示した。なお、これは本報告書に掲載した遺物についてのみまとめたもので、不掲載遺物は対象にできなかった。

前回の報告でも、同様の分類を行い遺構毎の土器組成を検討し、その結果第Ⅰ期（8世紀中頃～後半）・第Ⅱ期（9世紀初頭～前半）・第Ⅲ期（9世紀後半～10世紀初頭）の3期にわたる実年代を想定した。今回の調査では、第Ⅰ期に相当する遺物は認められず、いずれもが第Ⅱ期あるいは第Ⅲ期に属するという結果となった。以下に、再び時期毎の様相を記す。

第Ⅱ期（9世紀初頭～前半）は、土師器坏AⅠa・AⅠb・AⅠc・AⅡa・AⅡb、甕AⅠb・AⅡa・AⅡb、B群から構成される一群で、再調整を有するもの（a種）が主体となる。

第Ⅲ期（9世紀後半～10世紀初頭）は、土器構成は基本的に第Ⅱ期と変わらないが、土師器坏においてa種が減少、非内面黒色処理のものが若干増える傾向がある。甕では粗いヘラケズリ（ナタケズリ）調整が見られるものが増える。これら、第Ⅱ期・第Ⅲ期に属する遺構は、それぞれ第124図に示したとおりである。

この他、土師器では甕の底部に砂が付着したいわゆる砂底土器や、耳皿（底部に小孔のある耳皿含む）、把手付土器などが前回と同様出土している。墨書・刻書土器については、100点を超える出土をみた。次項では、特に墨書土器を取り上げてみる。

3. 墨書土器について

芋田Ⅱ遺跡第2次調査では、竪穴住居跡などの遺構外から合計81点、遺構外から24点の墨書土器（刻書を含む）が出土している。それらの積文や墨書部位といった基本的事柄は表7として別掲している。

すでに芋田Ⅱ遺跡第1次調査では20点の墨書土器が出土しており、これを合わせれば芋田Ⅱ遺跡から出土した墨書土器の総計は125点に及ぶ。近年の開発に伴う大規模調査によって1遺跡から出土する文字資料の点数は増える傾向にある。ただ、岩手県に限ってみれば出土する墨書土器の点数が100を超える遺跡はまれである。また、岩手県では盛岡市以南の北上川中流域に立地する遺跡では比較的多く出土する傾向にあるが、芋田Ⅱ遺跡が位置する上流域では墨書土器が出土する遺跡も少なく、点数もそれほど多くない。これらをふまえれば、芋田Ⅱ遺跡から出土した墨書土器は平安時代の北上川上流域の歴史を探る上で貴重な資料群と評価することができよう。ここではそれらのうち数点について検討を加えることにする。

545・546号墨書土器

積文 545号 弟／弟□ [在力]

546号 □ [署カ] □／□ (記号カ) 愚□

墨書の特徴 とともに土師器坏の体部外面に正位で記されている。文字は非常に小さく記されている。545号の第1・2字がともに1.1×1.4cm、第3字が1.0cm四方である。546号は第1字が2.0cm四方とこの中ではやや大きい。第3字は1.7cm四方とやはり小さい部類にはいる。249号が3.0cmであることを考慮すれば、これらの文字はかなり細かく書かれているといえよう。しかも、これらの文字は画数が少なかったり、単純な字形というわけではない。そのため細い筆が使われていたようで、最も細いところで1mm前後となっている。このように細い筆が使われて小さな文字が土器に記されることは集落遺跡ではまれといえる。細い筆で小さな文字を記すにはそれなりの習熟が必要であろうことは想像に難くない。この点からすれば本資料はかなり文

字に習熟していた人物の手によって記されたものであるということができよう。

また、文字が記された土器にも特徴がある。破片のため器形など全体的なことは不明とせざるを得ないが、その色調は灰黄褐色を呈しており、他の墨書土器が黄褐色あるいは黄橙色であることと比較すれば在地の他の土器とは区別できる（誤解のないように断っておけば、545・546が芋田Ⅱ遺跡周辺以外で製作されたといいたいわけではない）。このことから考えると、特に色調が異なる土器を選び、その上で文字を書いたものと推測される。

墨書の内容 8文字が確認されるが、破片であることからその内容は不明である。いわゆる多文字の墨書土器であるが、文を構成しているかどうかは現況からは判断できない。「弟」という文字が2回記されていることに注目すれば習書である可能性は否定できない。ただ、それでも全体的な文字の割付を復元できない以上、可能性の提示にとどまる。判読できた文字は、この「弟」と「愚」だが、いずれも土器に記される文字としては一般的ではない（ちなみに吉村武彦が作成した全国墨書・刻書土器データベース(1)では弟は7例、愚の例は皆無だった）。

本資料の意義 少なくとも8字以上の文字が記されているが残念ながらその内容を明らかにすることはできなかった。けれども記された墨書の特徴から、文字に習熟した人物が芋田Ⅱ遺跡に起居していたことを想起させる。この時期、文字に習熟していた者は、僧侶を除けば官人あるいは官衙と関わりを持つ者といっていよう。とすれば、芋田Ⅱ遺跡は一般集落ではなく、城柵官衙と関わりを持つ遺跡だった可能性が高いといえよう。

458号墨書土器

积文 ㇿ／ㇿ／ㇿ／ㇿ／ㇿ／ㇿ

墨書の特徴 土師器坏の体部外面に正位にて記されている。最初の文字は特に肉太に記されており、1箇所のみㇿとあるのでおそらくこの「文字」が一番初めに書かれたものと推測される。「文字」同士の角度を測ると45°～70°と区々であり、間隔も同様であることから、あらかじめ割付が決められていたわけではないようである。また、ㇿの「文字」はその形がそれぞれ微妙に異なっており、複数人の手によって記されたものと判断される。これらのことから、まずㇿと記された後に何人かの人物がㇿと書き加えたと考えられる。

また、本資料は口縁の一部を欠いたただけの完形品であるが、ㇿと記された部分が割られており、それらの破片を接合したものである。しかも、別々の住居（10号住と14号住）から出土したものであることから廃棄後に破損したわけではなく、廃棄する前に割れたようである。問題はそれが故意か否かであるが、にわかには判断しかねる。ただ、墨書土器は欠損したものが多く、しかもそれは文字が記された部分に多く見られる。このことから、墨書土器は廃棄される際、意図的に文字の部分が破砕されることがあったのではないかとされている（平川南氏のご教示による）。本資料も廃棄前の破損であり、破損部分に文字が記されていることから故意に破砕された可能性が高い。

墨書の内容 ㇿについてはいかなる文字なのか、判読できなかった。芋田Ⅱ遺跡では同様なものが、第1次調査分を含め14点出土しており、芋田Ⅱ遺跡を代表する「文字」といえよう。ㇿについては類似するものが燕沢遺跡（仙台市）から出土している（第124図）。これについては平川南氏が「山マ」と判読している。この「山マ」を、「蝦夷」が「山夷」「田夷」にわけられたことを参考にし、またこの墨書土器が出土する遺跡の多くは平野に突出した台地に位置していることから生業を山中に求めた人々の呼称ではないかとしている。芋田Ⅱ遺跡も北上川の中位段丘に位置しており、燕沢遺跡と同じような立地である。したがって、ㇿが「山マ」

である可能性は高い。しかし、その可能性を残しながら#としておく。

本資料の意義 前項で述べたように、#と記された後、#が何名かによって次々と記されていったという行為が復元され、本資料には最大で6名の人物が文字の筆記に関わっていることになる。では、なぜこのようなことが行われたのだろうか。あえて推測するならば、同朋意識を醸成するためだったのではなかろうか。すなわち、ひとつの土器に同じ「文字」を書き記すということは同じ意識を共有することにつながると考えられるからである。このことに誤りがなければ、本資料は当時の人々の精神活動を探る上で良好な資料となろう。

250号墨書土器

积文 几

墨書土器の特徴 土師器坏の体部外面に正位にて記されている。墨書部分の観察から第74図のように3画にて記されている。このような形の「文字」は、断定できないものまで含めると11点出土しており、芋田II遺跡でこれまで出土した墨書土器の中で最も点数の多い「文字」である。しかし、3棟の竪穴住居跡からしか出土していない。しかも、そのうち6点は6号住からのものである。このように、本資料は偏った出土傾向にあると言えよう。

墨書の内容 几は、おそらく則天文字を模したものと考えられる。則天文字ないしはそれを模した「文字」が記された土器の出土は芋田II遺跡周辺はもちろん岩手県内ではこれまでなかった。

本資料の意義 平川南氏によれば、則天文字の伝播には文書行政に伴う場合と仏典を通じて会得した僧侶によってなされたのではないかとしている（平川南「墨書土器と古代の村落」『墨書土器の研究』所収）。本資料は則天文字そのものではないが、それを模したものであることはほぼ間違いない。とすれば、土器に几と記した人々は則天文字ないしはそれを模したものを実際に目にしていたと考えられる。つまり、官人や僧侶に近い人物が芋田II遺跡にいたことになる。先に芋田II遺跡が城柵官衙と何らかの関わりがあったことを推測したが、ここでもそうしたことが窺われるのである。

注 (1) 明治大学 吉村武彦ゼミのHPで公開されている (<http://www.isc.meij.ac.jp/~yoshimu/>)

表7 墨書(刻書含む)土器一覧表

遺物番号(遺構名)	积文	器種	部位	方向	備考
2(1号住)	𠄎	土師器・坏	体部外面	正位	
5(〳)	□	土師器・坏	体部外面	?	
11(〳)	□	土師器・坏	体部外面	倒位	
13(〳)	□	土師器・坏	体部外面	倒位	墨付
14(〳)	百万	土師器・坏	体部外面	?	
15(〳)	□	土師器・坏	体部外面	?	墨付
16(〳)	□	土師器・坏	体部外面	?	墨付
17(〳)	□	土師器・坏	体部外面	?	
18(〳)	□	土師器・坏	体部外面	?	
23(〳)	有	土師器・坏	体部外面	?	焼成後刻書
25(〳)	□	土師器・坏	体部外面	?	
26(〳)	𠄎	土師器・坏	底部外面		焼成前刻書
37(〳)	□	土師器・坏	体部外面	?	
58(〳)	+	土師器・甕	体部外面	正位	焼成前刻書
64(〳)	□	土師器・甕	体部外面	?	焼成前刻書
103(2号住)	□	土師器・坏	体部外面	?	墨付
106(〳)	□[酒力]	土師器・坏	底部外面		
109(〳)	十	土師器・坏	体部外面	正位	
110(〳)	□	土師器・坏	体部外面	正位	
115(〳)	□	土師器・坏	体部外面	正位	
119(〳)	□	土師器・坏	体部外面	?	墨付
121(〳)		土師器・甕	体部外面		焼成前刻書

遺物番号(遺構名)	積文	器種	部位	方向	備考
125(2号住)	一	土師器・甕	底部外面		焼成前刻書
149(ノ)	□	須恵器・坏	体部外面	?	
175(3号住)	□	土師器・坏	体部外面	?	墨付
176(ノ)	□	土師器・坏	体部外面	?	墨付
179(ノ)	□	土師器・坏	底部外面		焼成前刻書
185(ノ)	□[大カ]	土師器・坏	体部外面	正位	
189(ノ)	□	土師器・坏	体部外面	?	墨付
190(ノ)	□	土師器・坏	体部外面	?	墨付
237(4号住)	ネ	土師器・坏	体部外面	正位	
249(ノ)	主	土師器・坏	体部外面	倒位	
250(ノ)	几	土師器・坏	体部外面	横位	
260(ノ)	□[几カ]	土師器・坏	体部外面	正位	
261(ノ)	□	土師器・坏	体部外面	倒位	墨付
262(ノ)	□	土師器・坏	体部外面	?	焼成前刻書
263(ノ)	□	土師器・坏	体部外面	?	焼成前刻書
305(5号住)	□[ネカ]	土師器・坏	体部外面	正位	
313(ノ)	□	土師器・坏	体部外面	?	墨付
314(ノ)	ネ	土師器・坏	体部外面	?	
316(ノ)	□	土師器・坏	体部外面	?	墨付
318(ノ)	□[ネカ]	土師器・坏	体部外面	正位	
319(ノ)	□	土師器・坏	体部外面	倒位	
323(ノ)	ネ	土師器・坏	体部外面	正位	
348(6号住)	七万/□[几カ]	土師器・坏	体部外面	正位	几は倒位
353(ノ)	□	土師器・坏	体部外面	正位	
365(ノ)	□[几カ]	土師器・坏	体部外面	横位	
366(ノ)	□	土師器・坏	体部外面	正位	
374(ノ)	□	土師器・坏	体部外面	?	
379(ノ)	□	土師器・坏	底部内面		複数の刻線(焼成前)
383(ノ)	□[几カ]	土師器・坏	体部外面	倒位	
388(ノ)	□[几カ]	土師器・坏	体部外面	倒位	
391(ノ)	几	土師器・坏	体部外面	倒位	
392(ノ)	几	土師器・坏	体部外面	倒位	焼成前刻書
393(ノ)	一万	土師器・坏	体部外面	正位	左文字
405(ノ)	□	土師器・甕	頸部外面	正位	焼成前刻書
440(7号住)	中	土師器・坏	体部外面	倒位	
451(8号住)	ネ	土師器・坏	体部外面	正位	
458(10号住)	ネ/中/中/中/中/中	土師器・坏	体部外面	正位	
494(14号住)	ネ	土師器・坏	体部外面	正位	焼成前刻書
495(ノ)	□	土師器・坏	体部外面	?	墨付
501(ノ)	□	土師器・坏	体部外面	?	墨付
502(ノ)	□	土師器・坏	体部外面	?	焼成前刻書
514(15号住)	几/□□	土師器・坏	体部外面	倒位	□□は正位
516(ノ)	三	土師器・坏	体部外面	倒位	焼成後刻書
518(ノ)	几	土師器・坏	体部外面	倒位	
523(ノ)	□[几カ]	土師器・坏	体部外面	倒位	
542(16号住)	ネ□	土師器・坏	体部外面	正位	1次調査No93と同じか
545(ノ)	□[弟カ]/□[弟カ]在□	土師器・坏	体部外面	?	
546(ノ)	□/□□[愚カ]□	土師器・坏	体部外面	正位	No545と同筆か
547(ノ)	□	土師器・坏	体部外面	?	墨付
551(ノ)	□	土師器・坏	体部外面	倒位	墨付
572(3号住状)	井	土師器・坏	体部外面	倒位	焼成前刻書
573(ノ)	□	土師器・坏	体部外面	?	焼成前刻書
575(ノ)	二	土師器・坏	底部外面		
577(ノ)	××××	土師器・甕	体部外面	倒位	焼成前刻書
594(6号住状)	□	土師器・坏	体部外面	正位	
604(2号土坑)	□	土師器・坏	体部外面	正位	墨付
606(4号土坑)	一+	土師器・坏	体部外面	正位	
609(4号土坑)	□	土師器・坏	体部外面	正位	

遺物番号(遺構名)	積文	器種	部位	方向	備考
628(13号土坑)	□	土師器・坏	体部外面	横位	
1001	□□	土師器・坏	体部外面	正位?	
1002	□	土師器・坏	体部外面	?	
1003	□[下カ]	土師器・坏	体部外面	正位	内面に2条の線
1004	□	土師器・坏	体部外面	正位?	
1005	□[○カ]	土師器・坏	体部外面	正位	
1006	□	土師器・坏	体部外面	?	
1007		土師器・坏	体部外面	?	九字の省略形か?
1008	✓	土師器・坏	体部外面	正位	焼成後刻書
1009	□	土師器・坏	底部外面		
1010	□	土師器・坏	体部外面	倒位	
1011	□[大カ]	土師器・坏	体部外面	正位	
1012	□	土師器・坏	体部外面	正位?	
1013	□□	土師器・坏	体部外面	倒位	
1016	□	土師器・坏	体部外面	?	
1018	□	土師器・坏	体部外面	正位	
1021	□	土師器・坏	体部外面	?	
1022	×カ	土師器・坏	体部外面	横位	焼成前刻書
1024	□	土師器・坏	体部外面	?	
1025	□	土師器・甕	体部外面	?	焼成前刻書
1028	□	土師器・甕	体部外面	?	焼成前刻書、九字の変形か?
1031	□	土師器・甕	体部外面	?	焼成後刻書、九字の変形か?
1033		土師器・甕	体部外面	底部外面、倒位?	焼成前刻書
1034	□	土師器・甕	体部外面		焼成後刻書、九字の変形か?
1039	□	土師器・甕	体部外面		焼成後刻書?

4. 芋田Ⅱ遺跡の集落のあり方

今回2回目となる発掘調査によって、芋田Ⅱ遺跡の古代集落の様相はさらに明らかとなり、より具体的な姿を見せつつあるが、以下にそれらについて列挙する。

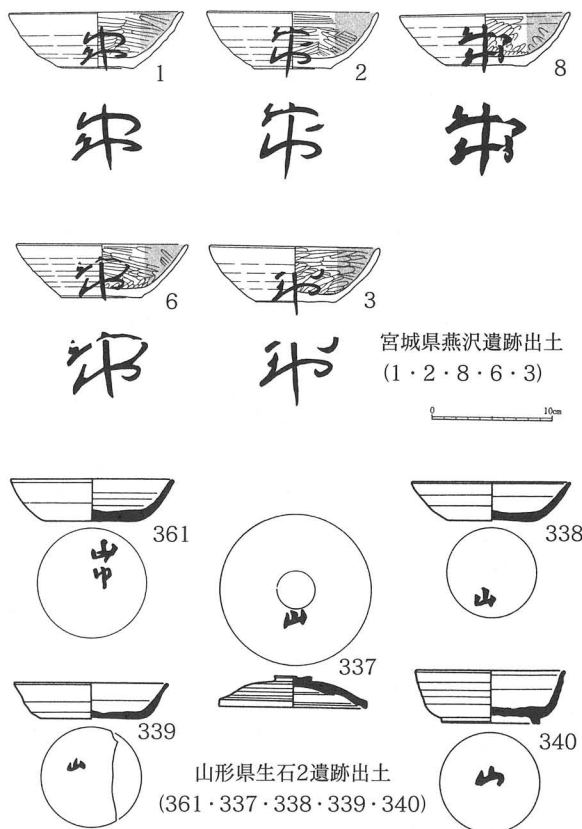
①今回確認された住居跡をはじめとする平安時代の遺構は、前回報告の第Ⅱ期（9世紀前半）・第Ⅲ期（9世紀後半～10世紀初頭）の大きく二時期に属する。（第125図参照）

②芋田Ⅱ遺跡の古代集落は、前回確認されている奈良時代（8世紀半ば～後半）を含む三時期にわたる、総数50棟を超える規模を有すると推定される。

③今回の調査でも、耳皿・墨書土器・刻書土器などが出土したことから、城柵・官衙（志波城・徳丹城）との関連が想定される。

④土器工房を兼ねると思われる住居跡や鍛冶関連の遺物が出土する住居跡、作業場かと思われる住居状遺構・土坑が確認され、集落内における生産活動の一端が明らかになった。

⑤これまであまり類例のない住居に付属する煙道状の施設や、四隅に小孔を伴う特殊な土坑が確認されたこ



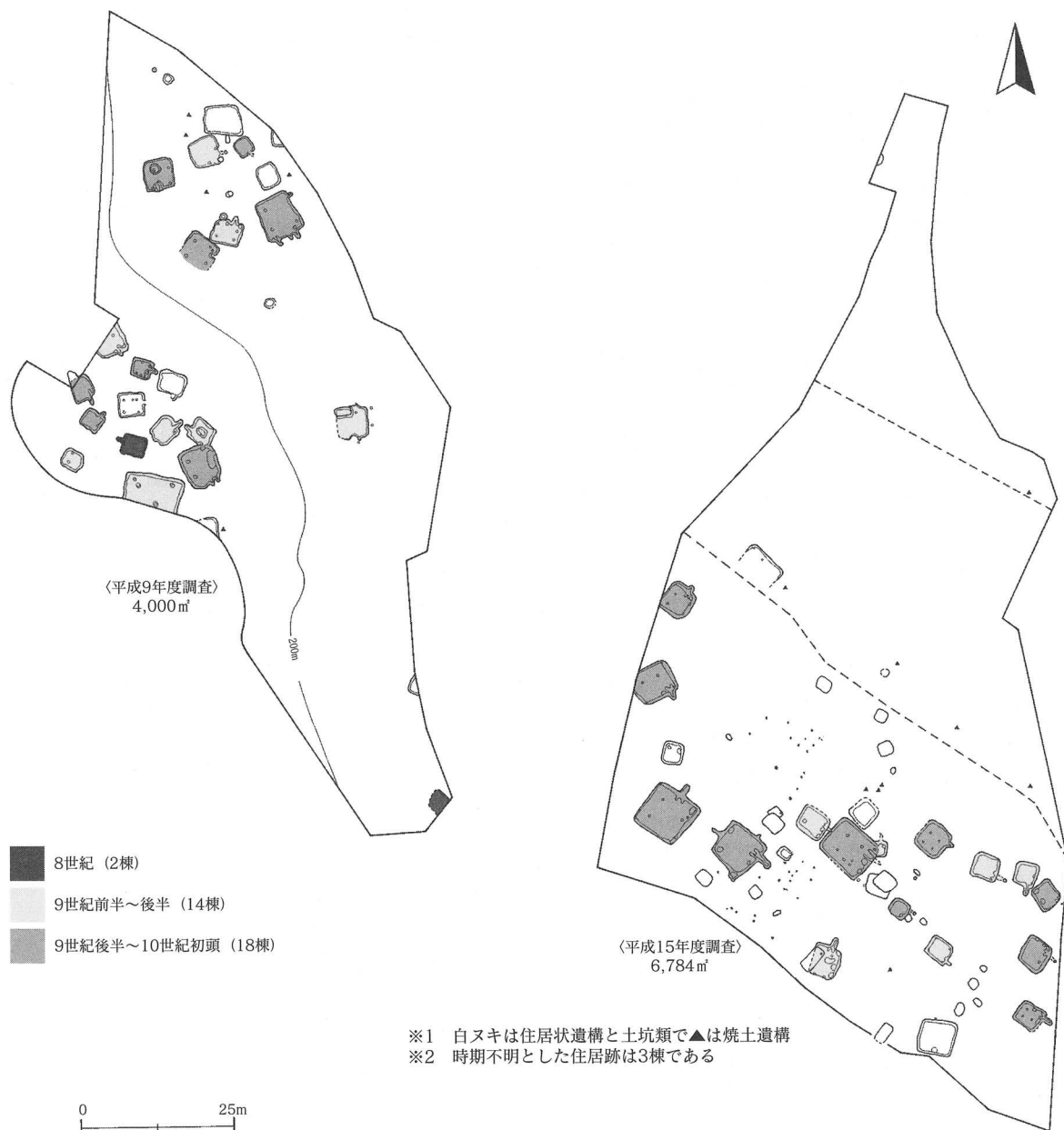
第124図 「山マ」に関わる墨書土器

とから、何か祭祀的な儀式などを行っていた住居が存在した可能性がある。

⑥把手付土器・砂底土器などの遺物が出土していることから、津軽地方など北部地域との流通・交流を思わせる状況もある。また、おびただしい量の須恵器の産地も気にかかる。

以上①・③・⑥は、前回の調査報告書で記載した内容をここで再提示しただけであるが、③の墨書・刻書土器については今回かなりの出土をみ、前回調査のものを含めると、それらの総出土点数は100点を優に超える。さらに、その中には長文（多文字）墨書土器が2点含まれており、このことは集落内にかなり文字に親しんだ識字層がいたことを示唆している。また、県内出土の墨書土器集成（註1）によれば、現在の岩手郡内で確認されている墨書土器のほとんどは、本遺跡から出土したものとの報告がなされている。

次に、まず②についてであるが、50棟という数字は地形的に遺構の拡がりか予想される範囲と、これまで



第125図 集落の変遷

に検出された遺構密度から想定したあくまでも下限の数であり、未調査区の状況次第では、さらに規模の大きな集落となる可能性がある。④・⑤については、今回の調査で得られた本遺跡の新たな特徴・特色として挙げられるもので、集落内に暮らす人々の生活をより具体的に示す内容である。

これまでの調査成果から、上記のような特徴を有する集落は、「一般集落」に対して「拠点集落」などと呼ばれることがある。後者は、在地の有力者に関わる集落として前者とは区別され、周辺地域をとりまとめた官衙的集落として存在したとされる。本遺跡の場合、近くを流れる北上川を含めた交通の要衝という面からも、その条件の一部を満たしてはいるが、平安期の代表的な拠点集落とされる遠野市高瀬Ⅰ・高瀬Ⅱ遺跡とは集落構造に関して決定的な違いがある。高瀬Ⅰ・高瀬Ⅱ遺跡は、出土した墨書土器をはじめとする遺物の特徴などから、地方官衙的性格が強い集落とも言われる（註2）が、先の相違点とは集落を構成する遺構、具体的には掘立柱建物跡の有無である。本遺跡からは、これまで1棟の掘立柱建物跡も確認されておらず、集落の構成要素の中にはこれが加わる可能性はほとんどない。無論、高瀬Ⅰ・高瀬Ⅱ遺跡でもその集落構成には違いがあり、前者は堅穴住居中心の形態が変わらずに発展する集落、後者は次第に掘立柱建物跡のみで構成される集落へ変遷する（註3）とされる。これらが、同時に集落を構成するか否かの問題はあるが、両遺跡とも地域の有力者層が生活する集落であったことは疑いがない。

いずれにせよ、芋田Ⅱ遺跡の古代集落は8世紀後半から10世紀にかけて、現在の岩手郡を中心とする周辺地域の拠点的な集落として存在し、その主体となる時期は、9世紀後半から10世紀初めにあったことが明らかとなった。また、集落内における生産活動や祭祀に関連する発見もあり、「蝦夷集落」のあり方に新たな問題を投げかける遺跡のひとつになるものと思われる。

最後になりましたが、本報告書の作成にあたり、野外調査・室内整理でお世話いただいた作業員・臨時職員の方々に、国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所、玉山村教育委員会には、多くのご協力をいただきました。ここに厚く御礼申し上げます。

註1. 第29回古代史サマーセミナー資料集『奥六郡地域の古代史像～律令国家から王朝国家へ～』「岩手県内出土古代文字資料集成」による。

註2・3. 『墨書土器の研究』「墨書土器と古代の村落」P378～385

<参考文献>

- 稲野彰子 (1995) : 「いわゆるムシロ底について」『北上市立博物館研究報告』 第10号 北上市立博物館
- 群馬県教育委員会 (1992) : 『群馬県出土の墨書・刻書土器集成(2)』
- 齋藤博司 (1989) : 『高瀬Ⅰ遺跡発掘調査報告書』 岩文埋調査報告書第155集 (財) 岩埋文
- 佐藤浩彦 (1998) : 『高瀬Ⅰ・Ⅱ遺跡』 遠野市埋蔵文化財調査報告書第5集 岩手県遠野市教育委員会
- 佐藤浩彦 (2003) : 『大久保遺跡発掘調査報告書』 遠野市埋蔵文化財調査報告書第14集 遠野市教育委員会
- 瀬川司男 (2000) : 「Ⅲ 発掘された文字-墨書土器」『発掘された文字-墨書土器展-』
- 仙台市教育委員会 (1984) : 『燕沢遺跡』 仙台市文化財報告書第62集 仙台市教育委員会
- 高島英之 (2000) : 『古代出土文字資料の研究』 東京堂出版
- 中村 浩 (1999) : 『古墳出土須恵器集成』 第4巻 東日本編Ⅱ 雄山閣出版
- 永井 久美男 (1996) : 『日本出土銭総覧』 兵庫埋蔵銭調査会
- 羽柴直人 (2000) : 『村越 潔先生古稀記念論文集』 弘前大学教育学部考古学研究室OB会
- 濱田 宏 (1999) : 『芋田Ⅱ遺跡発掘調査報告書』 岩文埋調査報告書第304集 (財) 岩埋文
- 平川 南 (2000) : 『墨書土器の研究』 吉川弘文館
- 埋蔵文化財研究会 (1996) : 『第39回埋蔵文化財研究会古代の木製食器-弥生期から平安期にかけての木製食器-』
 <第Ⅱ分冊北海道・東北・関東・中部>
- 三上喜孝 (2003) : 「文献史学からみた墨書土器の機能と役割」『古代官衙・集落と墨書土器-墨書土器の機能と性格をめぐって-』 独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所
- 宮 宏明 (1998) : 「余市大川遺跡出土古代の文字資料をめぐって」『北奥古代文化-仮面・縄文仮面から神楽面-』 第25号
 北奥古代文化研究会
- 村上 拓 (1999) : 『芦名沢Ⅰ遺跡発掘調査報告書』 岩文埋調査報告書第295集 (財) 岩埋文
- 山形県教育委員会 (1986) : 『生石Ⅱ遺跡発掘調査報告書(2)』 山形県埋蔵文化財調査報告書第99集 山形県・山形県教育委員会

付篇

芋田Ⅱ遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

岩手県岩手郡玉山村に所在する芋田遺跡は、北上川左岸の段丘面及び後背山地より伸びる丘陵上に位置している。発掘調査の結果、縄文時代の土器埋設遺構や焼土跡、平安時代の竪穴住居跡や土坑、焼土遺構などが検出されている。また、縄文時代の遺構は丘陵尾根部より、平安時代の遺構は段丘平坦面からと、異なる立地で確認されている。

本報告では、上記の平安時代の遺構より出土した、木製遺物を対象に樹種同定を行い、その種類を明らかにする。

1. 試料

試料は、平安時代の7号住居状遺構から出土した炭化した木製椀1点である。7号住居状遺構は、平面は一辺約5.5m方形を呈し、発掘調査時の所見では工房的な遺構と推定されている。試料の木製椀は、完全に炭化しており、径約10cmの円形を呈する。試料の採取は、調査担当者との協議を行い、3片に割れた試料1片の破断面を対象に行った。

2. 分析方法

木口（横断面）・柁目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

3. 結果

木製椀は、落葉広葉樹のケヤキに同定された。以下に、解剖学的特徴等を記す。

・ケヤキ (*Zelkova serrata* (Thunb.) Makino) ニレ科ケヤキ属

環孔材で、孔圏部は1-2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-6細胞幅、1-50細胞高。放射組織の上下縁辺部を中心に結晶細胞が認められる。

4. 考察

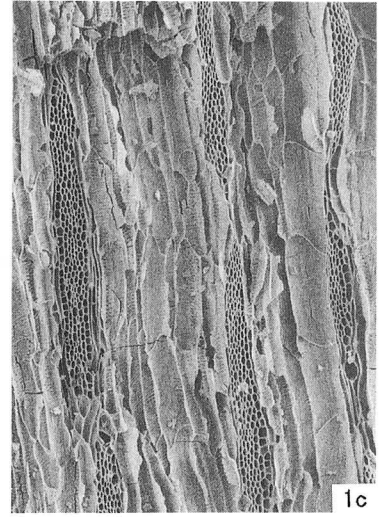
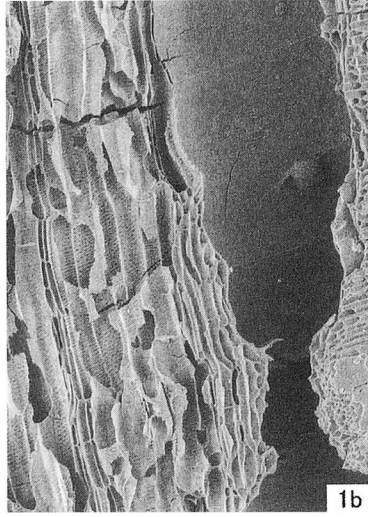
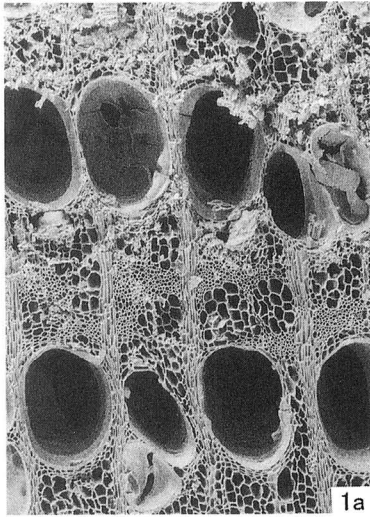
ケヤキは、ブナ属やトチノキとともに椀の材料としてよく確認される種類であり、既存の調査事例でも報告例が多い（島地・伊東,1988）。これらの樹種の利用は、民俗事例における挽物の椀や皿の素材に使用される樹種とも調和している（橋本,1979）。

岩手県内における平安時代の木材利用については、住居構築材と考えられる炭化材の調査により資料の蓄積を行っている。一方、椀等の木製品の木材利用状況については、現段階では類例が少なく樹種の傾向等に言及できない。この点については、当該期の木製品の調査事例を蓄積し、改めて検討したいと考えている。

引用文献

橋本 鉄男、1979、ろくろ（ものと人間の文化史31）、法政大学出版局、444p。
島地 謙・伊東 隆夫（編）、1988、日本の遺跡出土木製品総覧、雄山閣、296p。

図版1 芋田Ⅱ遺跡の炭化材



1. ケヤキ(7号住居状遺構 木製椀)
a: 木口, b: 柁目, c: 板目

200 μ m: a
200 μ m: b, c

写 真 图 版



遺跡遠景



遺跡全景

写真図版1 空中写真



平坦部調査前



平坦部調査中の状況

写真図版 2 平坦部近景



基本層序



斜面部

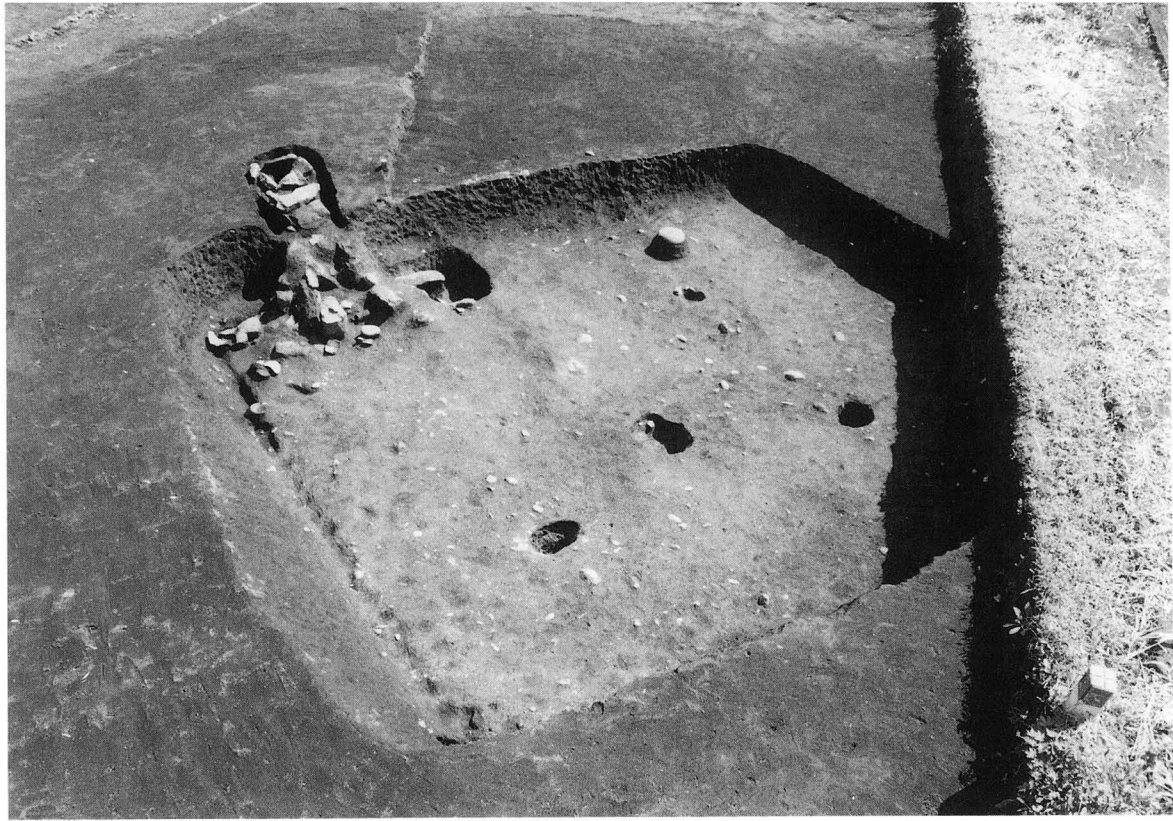


尾根部

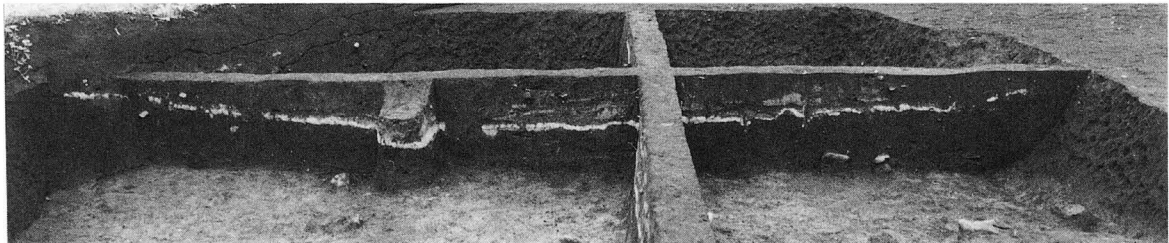


IV層以下の層序

写真図版3 基本層序と調査区各部の全景



全 景



埋 土



カマド全景



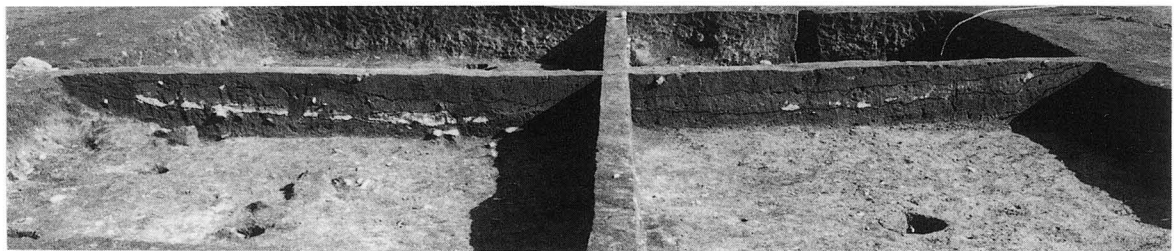
煙道部埋土



Pit 1 埋土



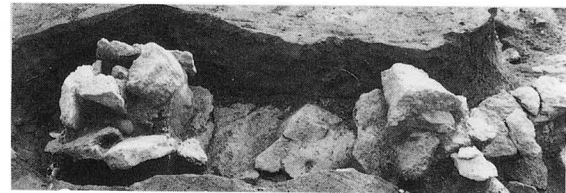
全 景



埋 土



カマド全景



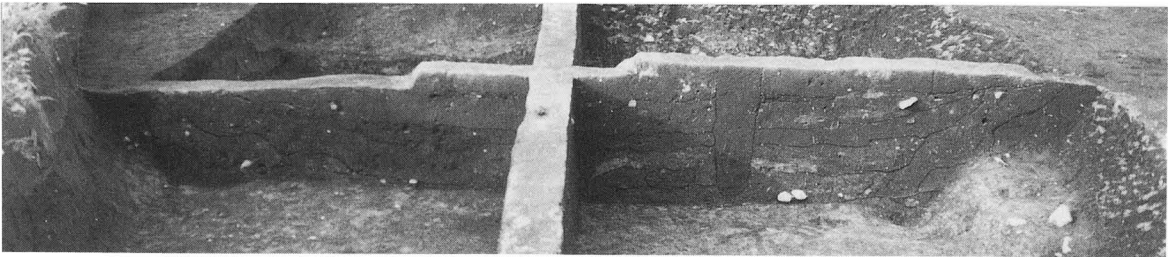
煙出・煙道部 礫組み



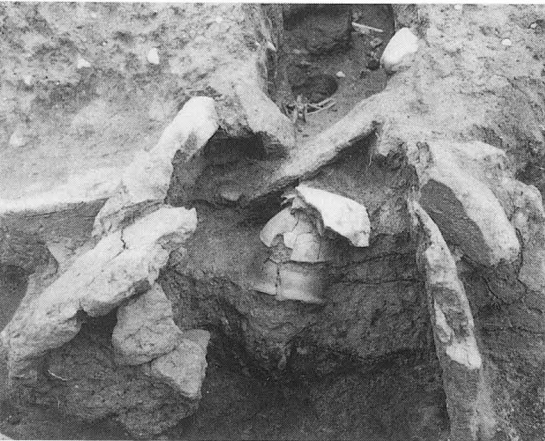
燃烧部焼土 たち割り



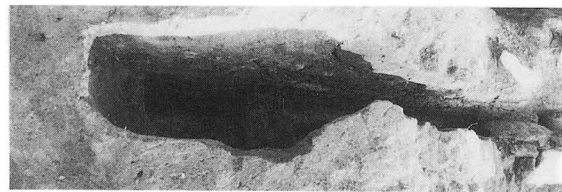
全 景



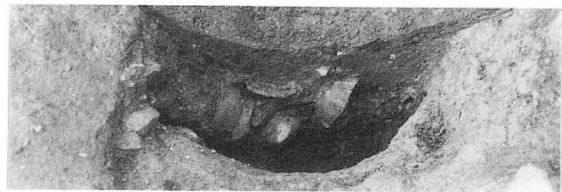
埋 土



カマド袖部 たち割り

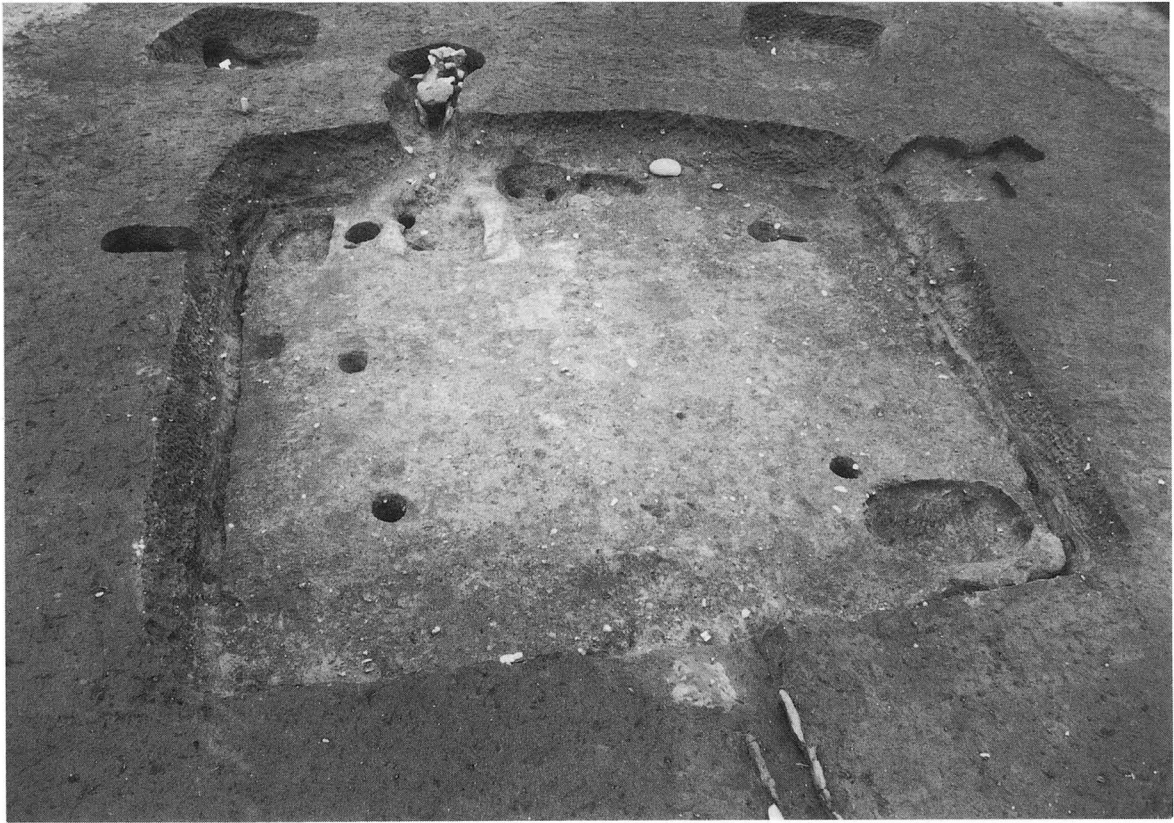


煙道・煙出部埋土

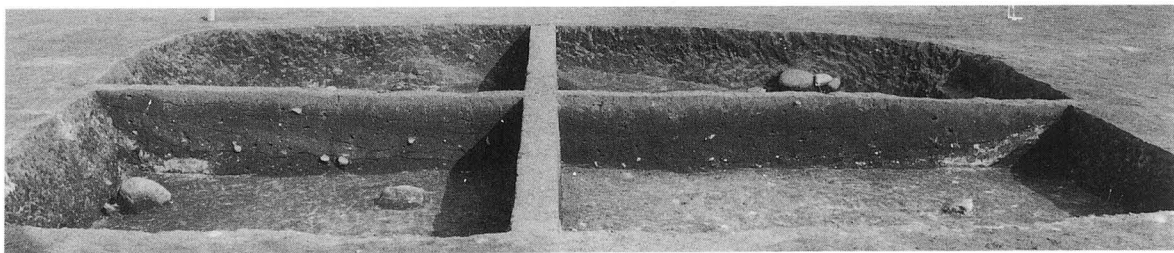


Pit 1 埋土

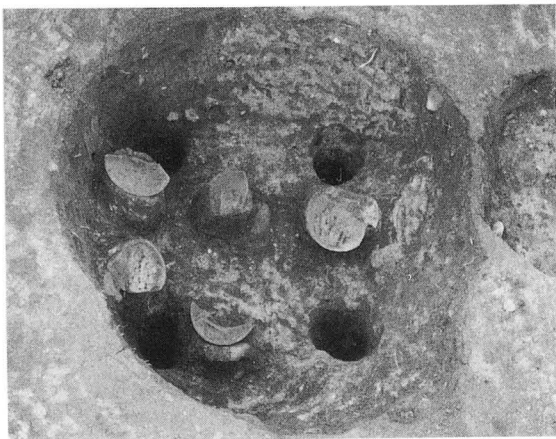
写真図版 6 第 3 号住居跡



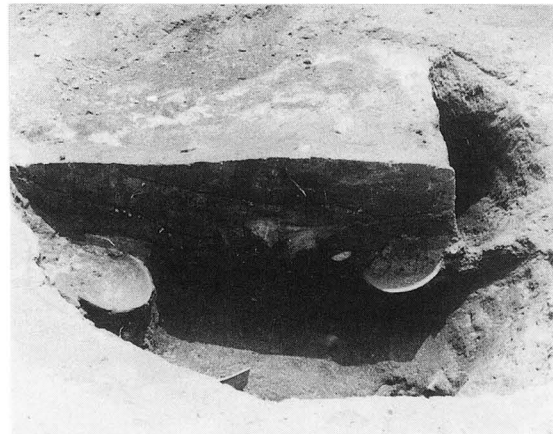
全 景



埋 土



Pit 3 全景

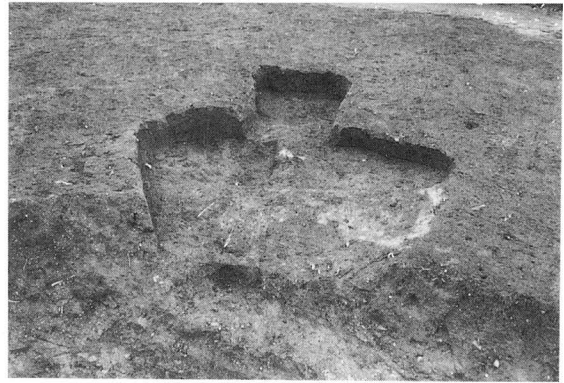


Pit 3 埋土

写真図版 7 第 4 号住居跡 (1)



カマド全景



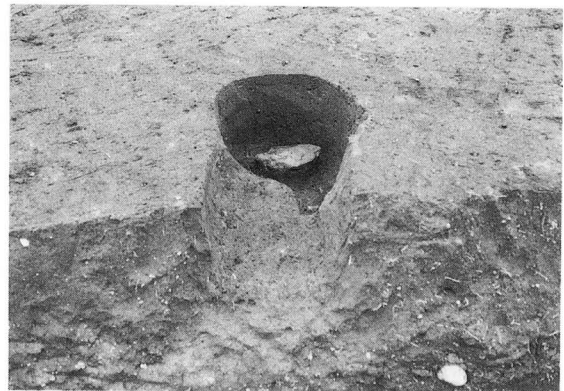
煙道状施設 2



煙道状施設 1



カマド煙出・煙道部 礫組み



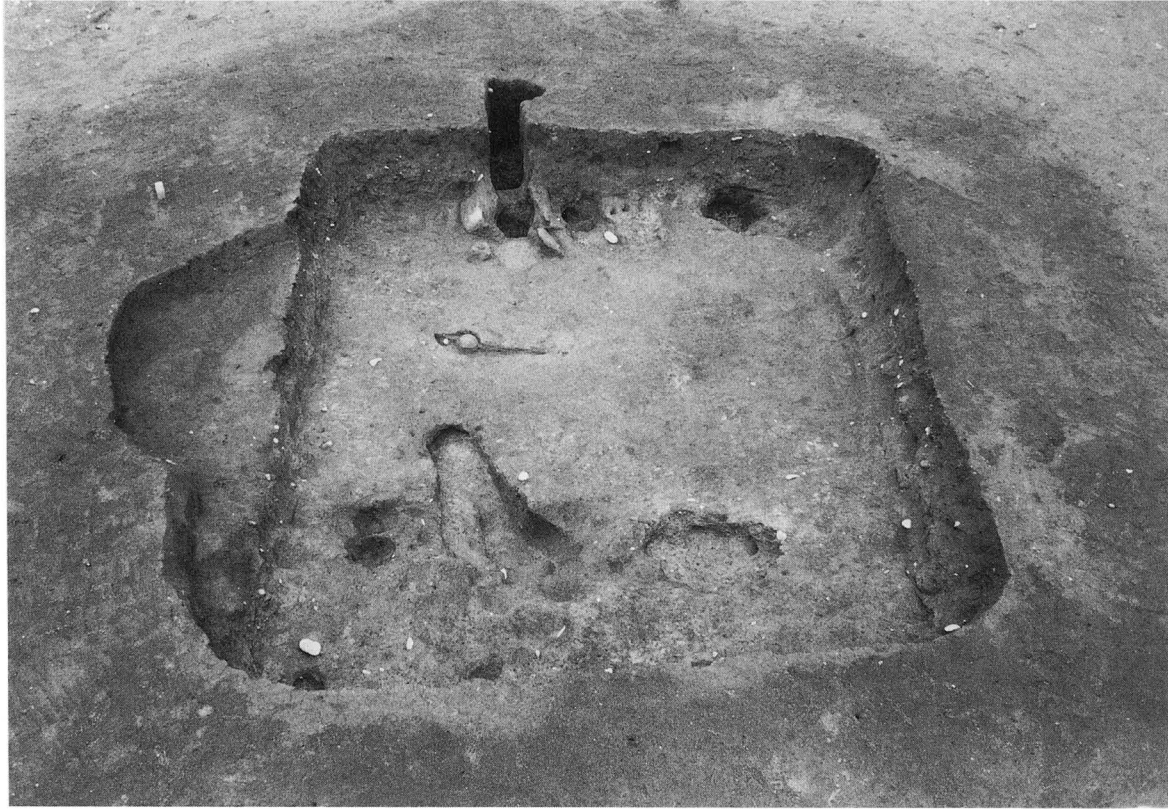
煙道状施設 3



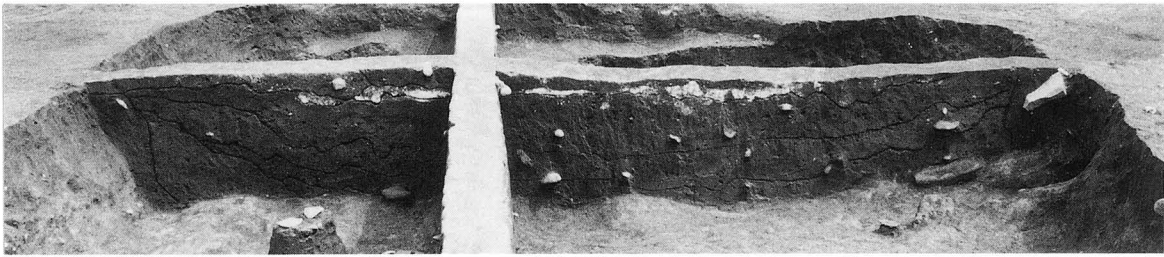
カマド袖部 たち割り



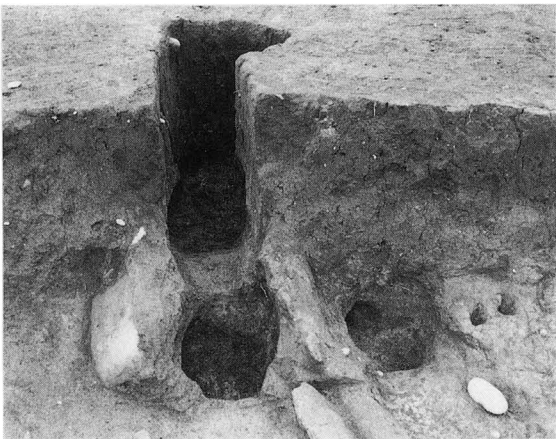
貼床除去後全景



全 景



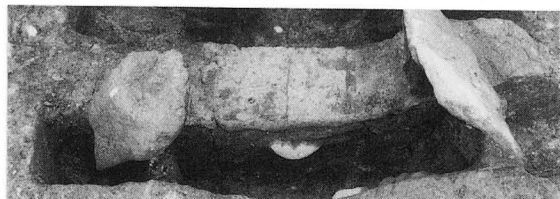
埋 土



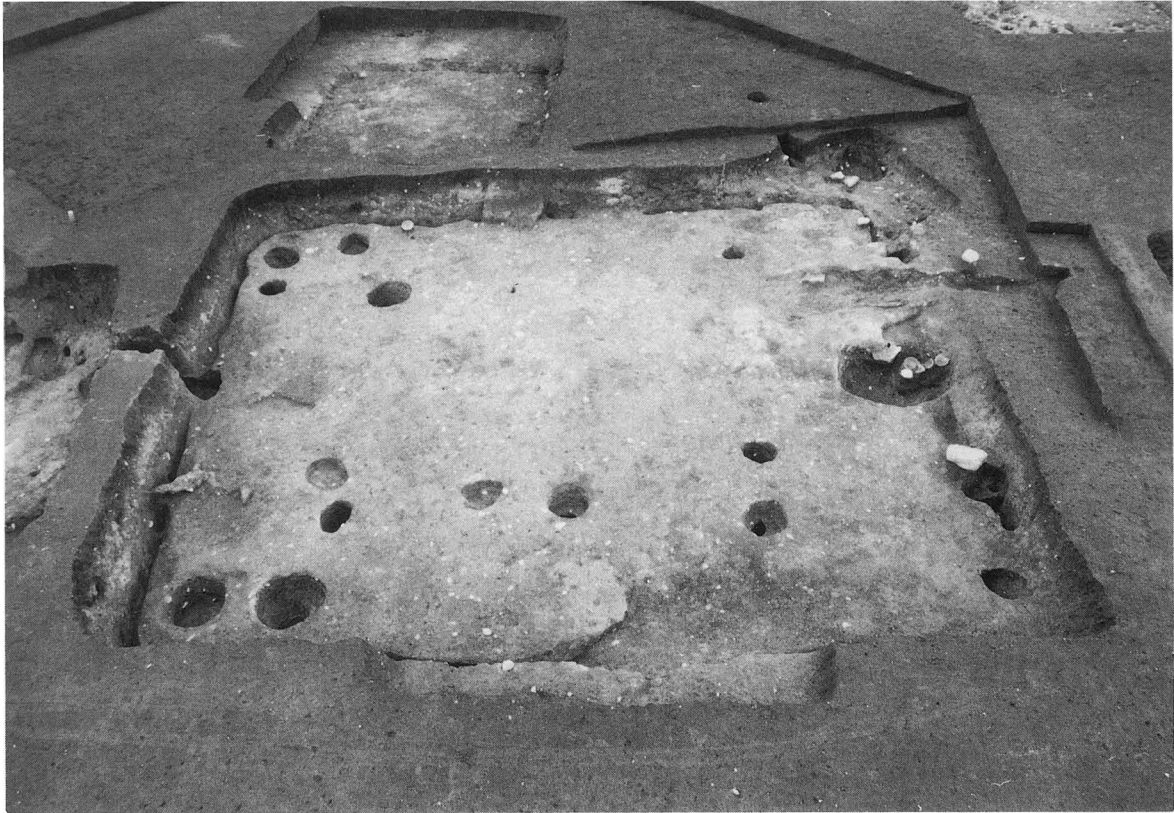
カマド全景



煙道部埋土



燃烧部焼土 たち割り



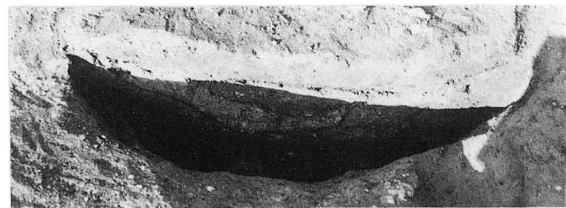
全 景



埋 土



ロクロピット

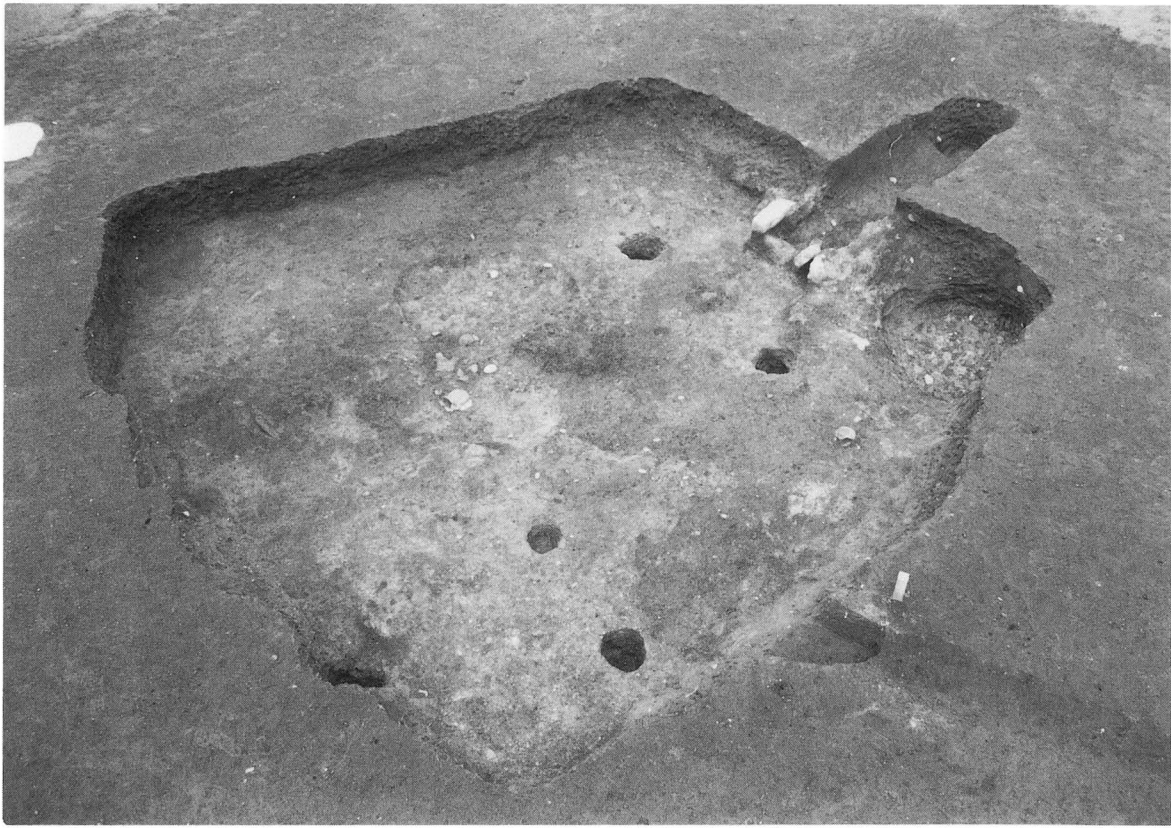


Pit 1 埋土

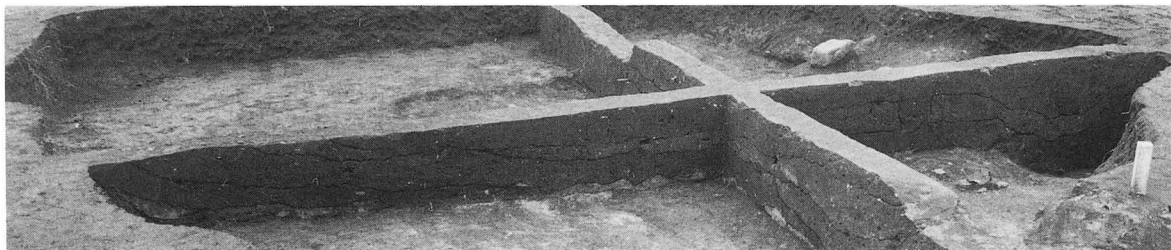


カマド袖部 たち割り

写真図版10 第6号住居跡



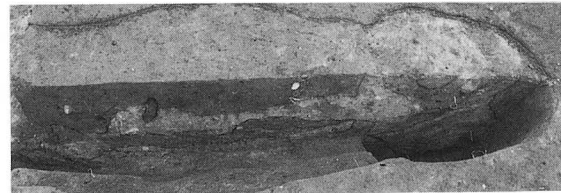
全 景



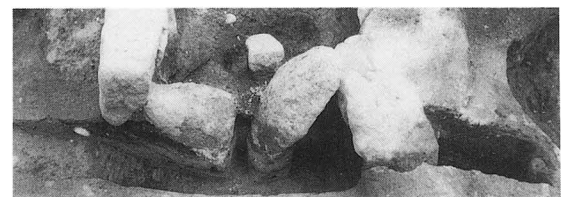
埋 土



焼土 1 ・土器出土状況



煙道・煙出部埋土



燃焼部焼土 たち割り

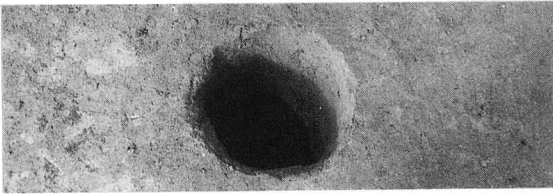
写真図版11 第7号住居跡



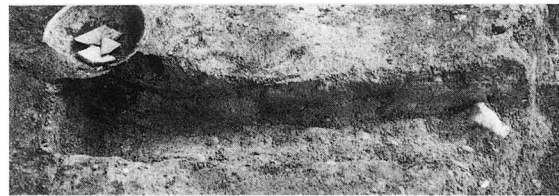
全 景



埋 土



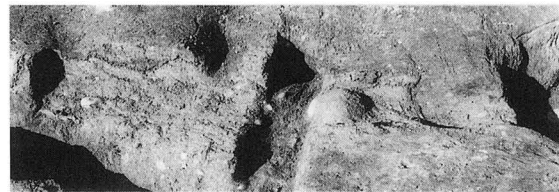
煙 出



燃焼部焼土 たち割り

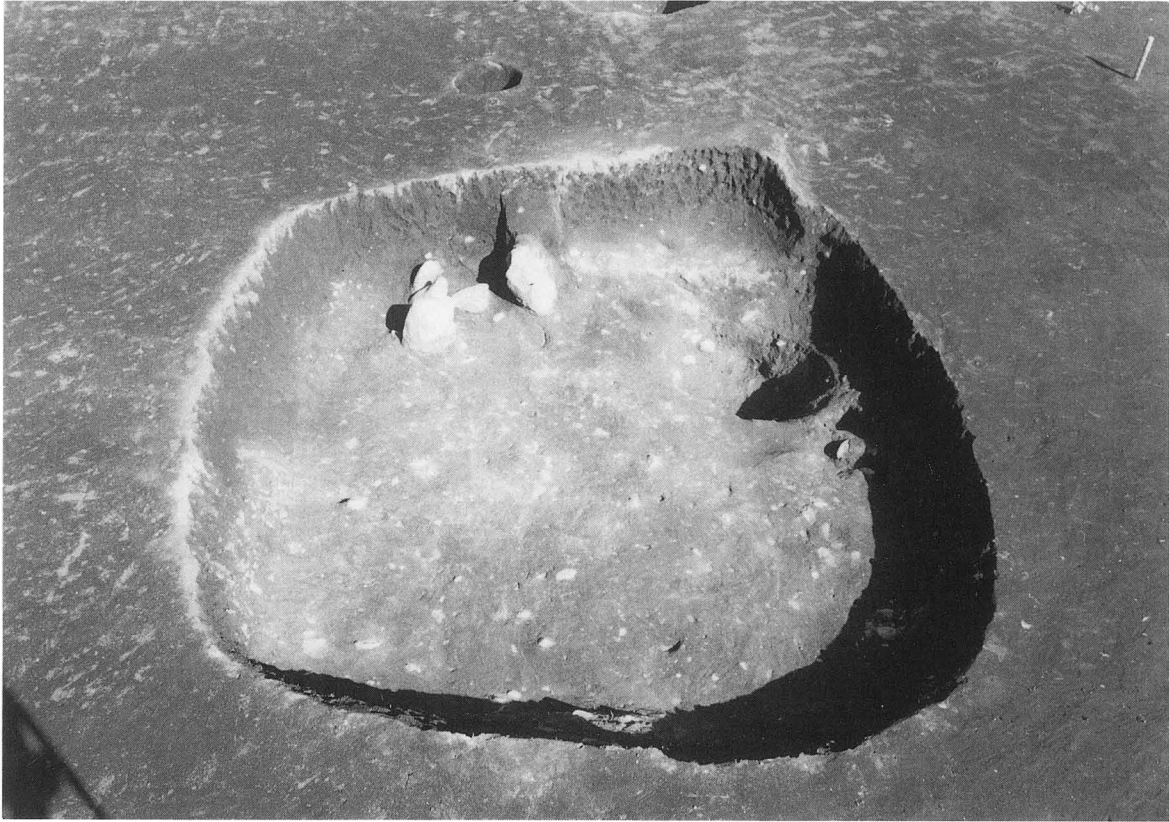


煙道部埋土

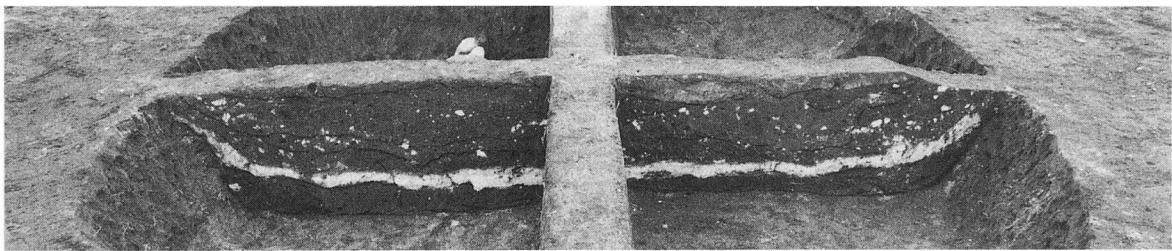


カマド袖部 たち割り

写真図版12 第8号住居跡



全 景



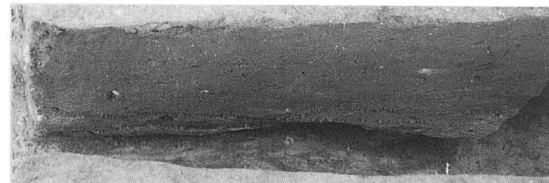
埋 土



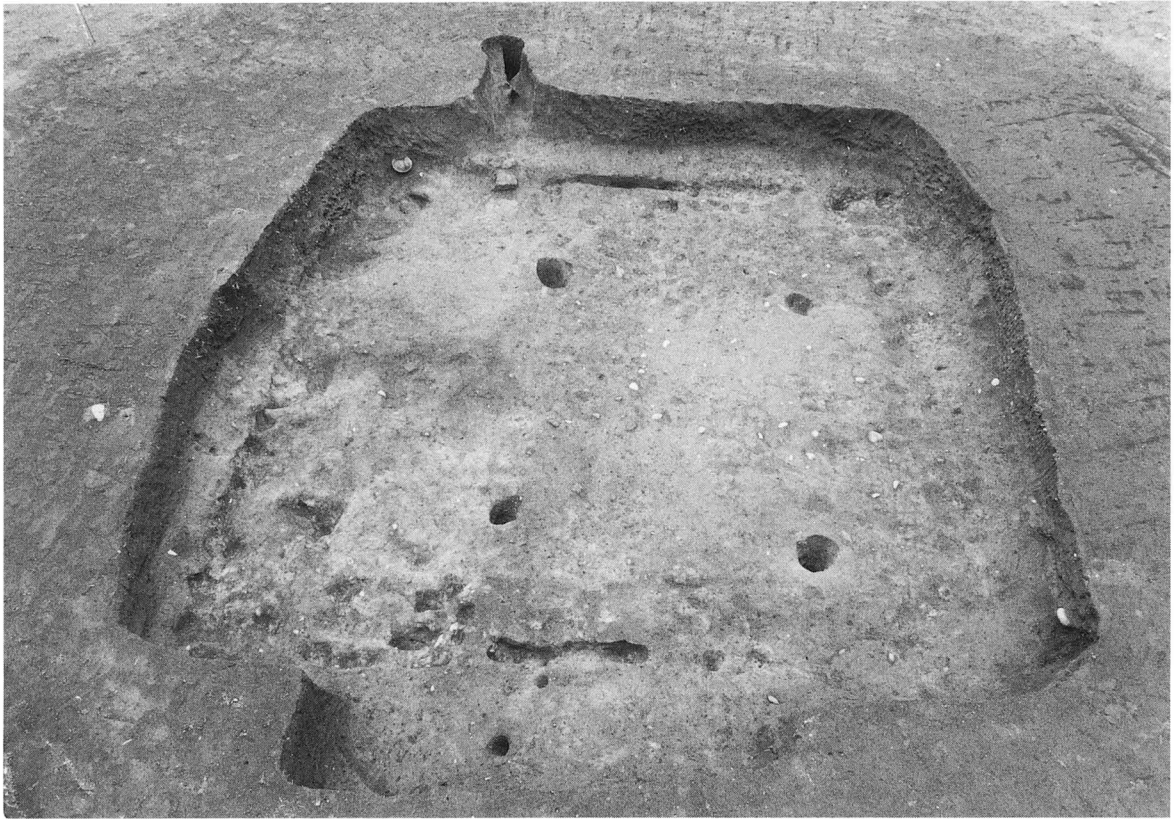
カマド本体部



カマド埋土



煙道部埋土



全 景



埋 土



坏出土状況

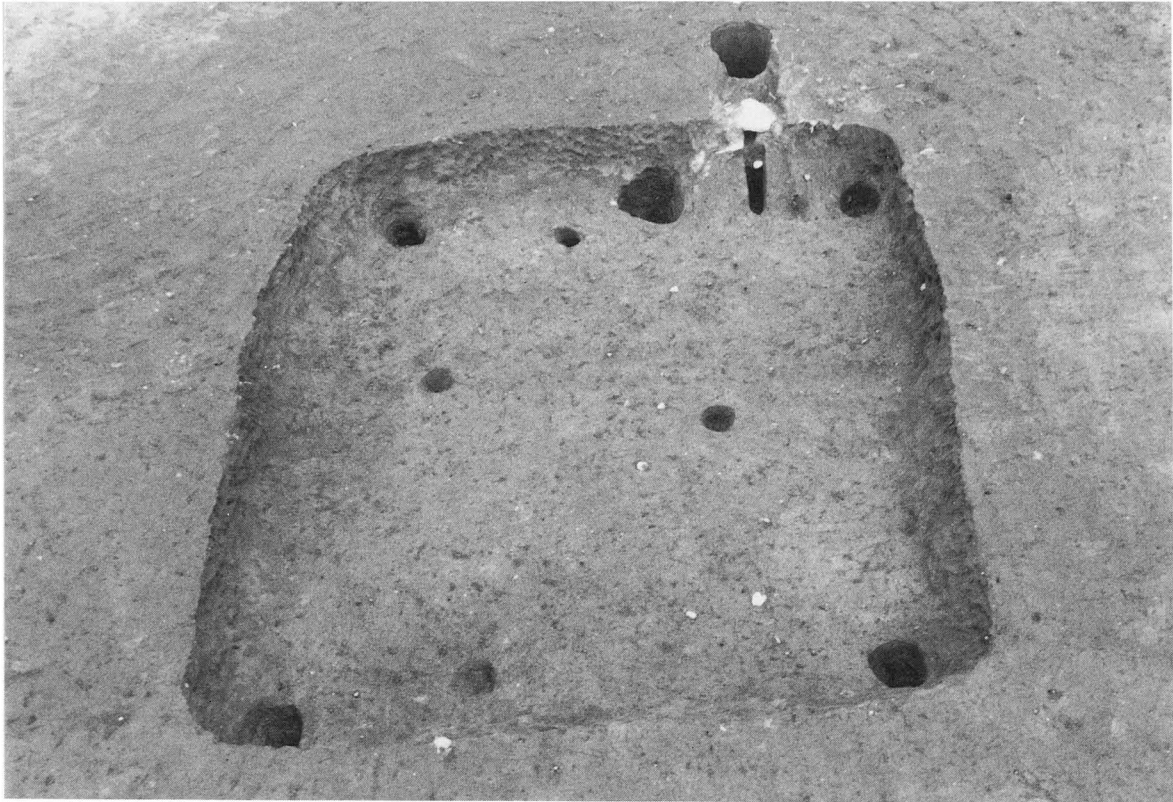


煙出・煙道部埋土

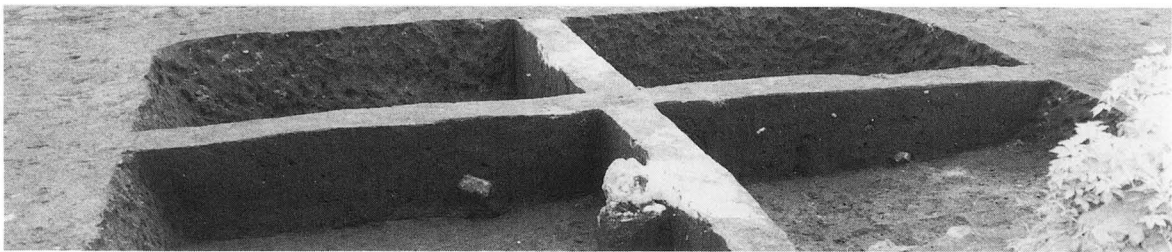


燃烧部焼土 たち割り

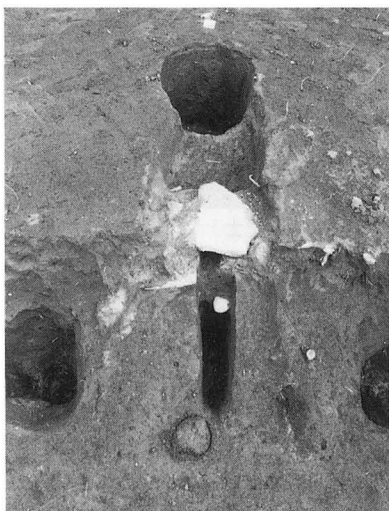
写真図版14 第10号住居跡



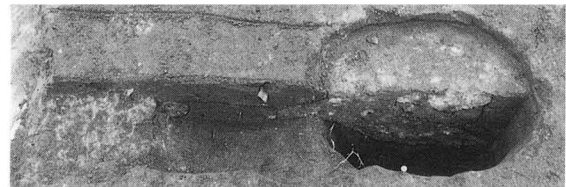
全 景



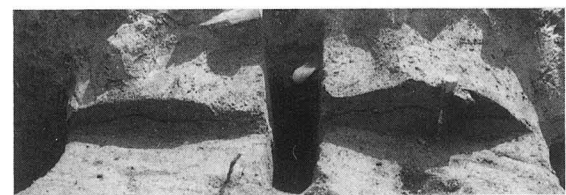
埋 土



カマド全景

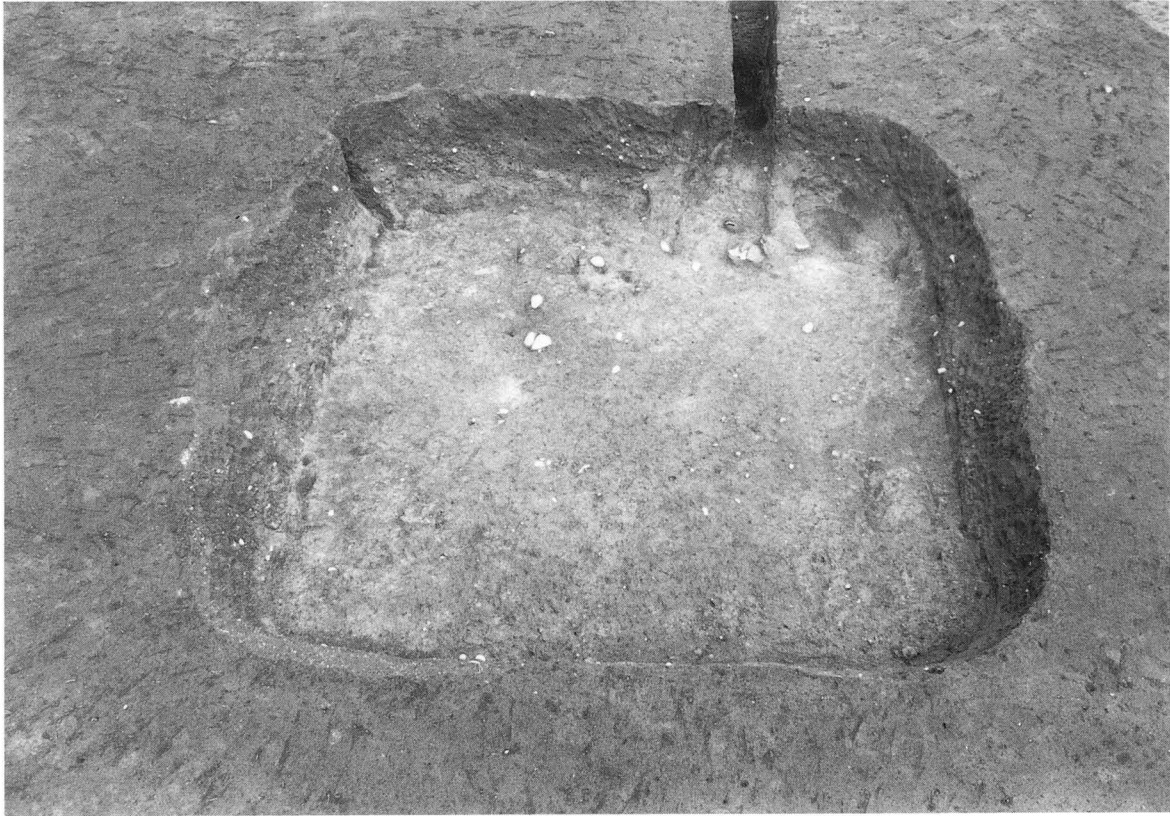


煙道・煙出部埋土

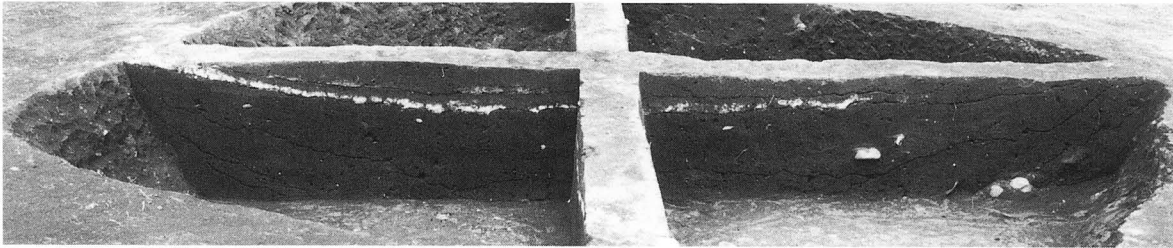


カマド袖部 たち割り

写真図版15 第11号住居跡



全 景



埋 土



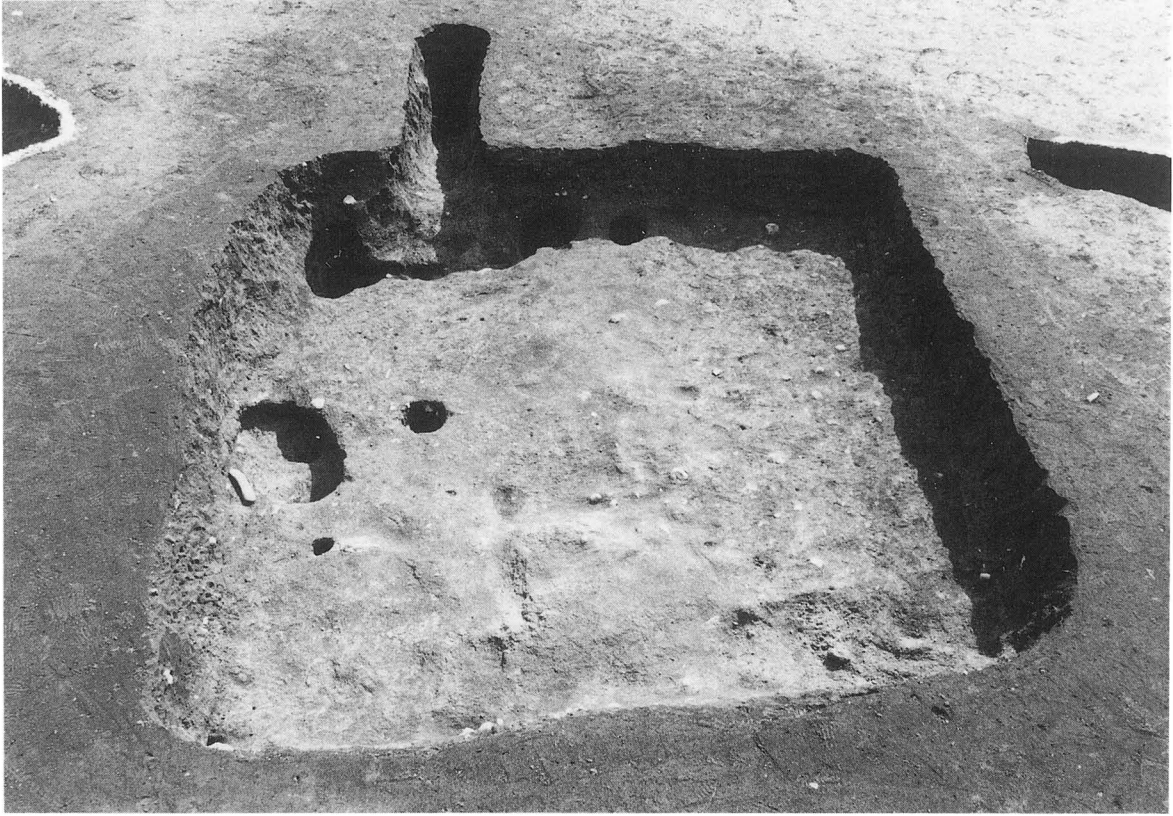
カマド全景



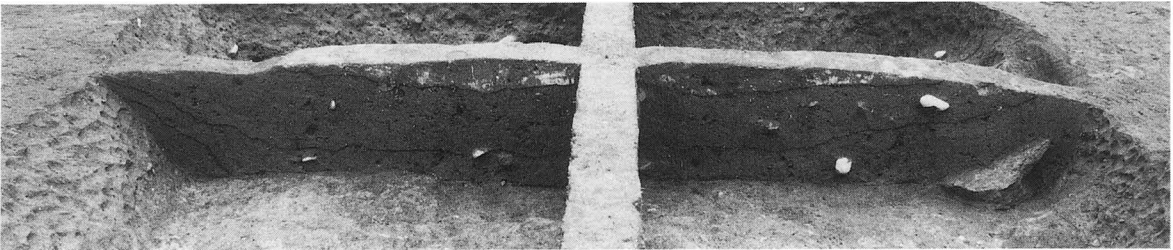
カマド埋土



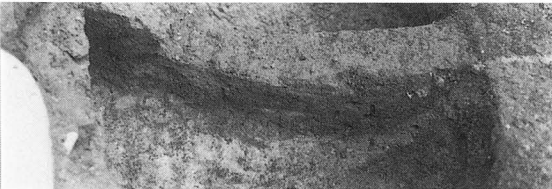
支脚部分でのたち割り



全 景



埋 土



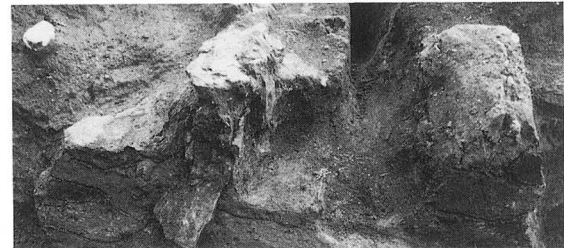
Pit 1 埋土



燃烧部焼土 たち割り

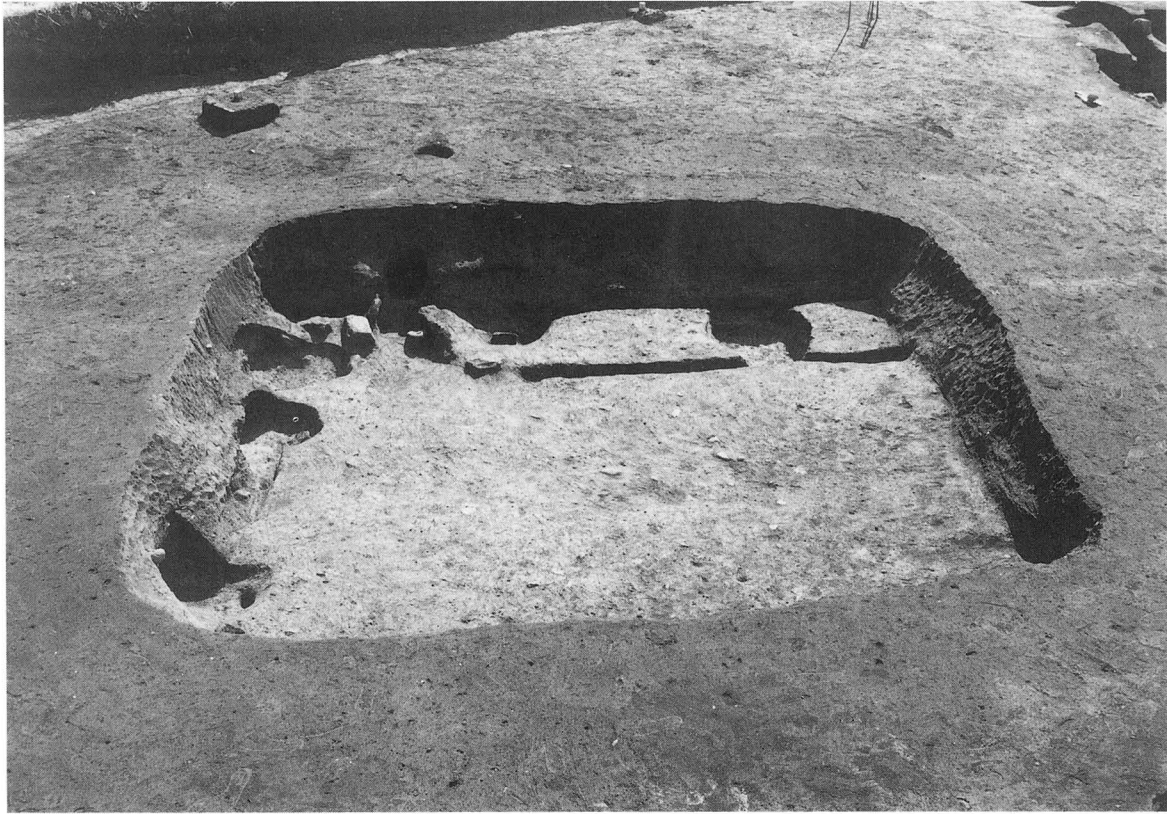


Pit 2 埋土

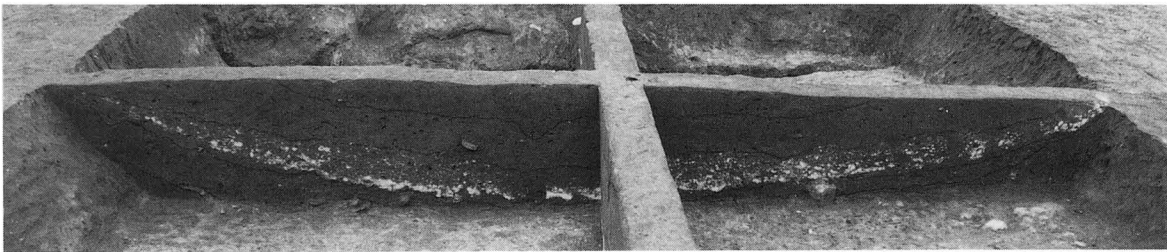


カマド袖部 たち割り

写真図版17 第13号住居跡



全 景



埋 土



カマド全景



カマド埋土

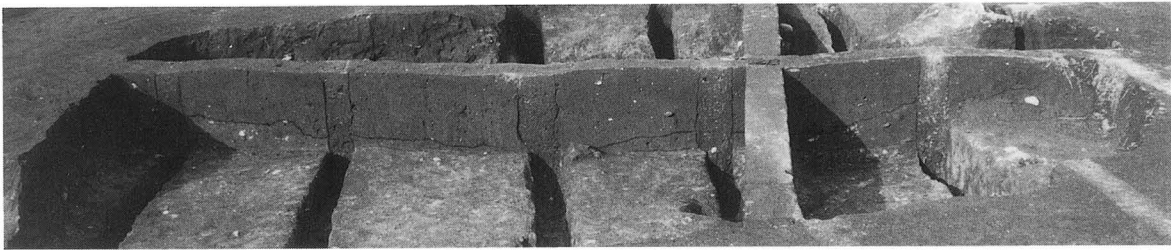


カマド袖部 たち割り

写真図版18 第14号住居跡



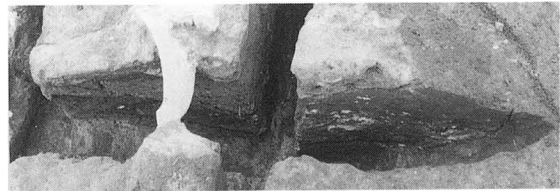
全 景



埋 土



カマド全景



煙道・煙出部埋土

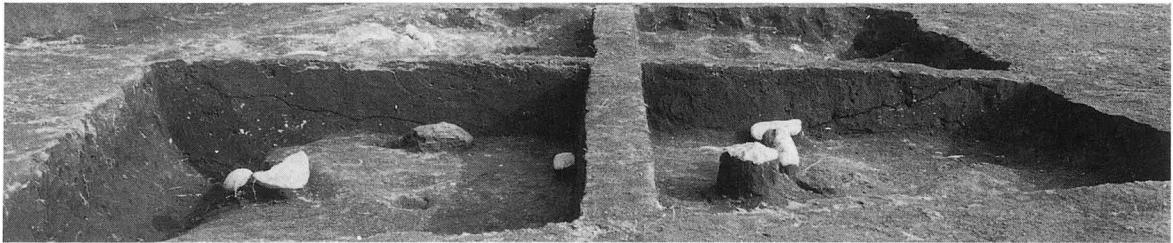


Pit 3 埋土

写真図版19 第15号住居跡



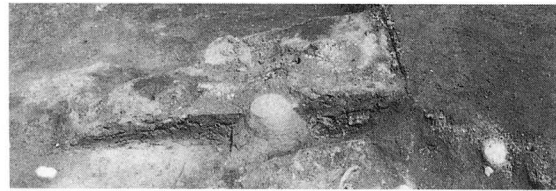
全 景



埋 土



Pit 1 全 景



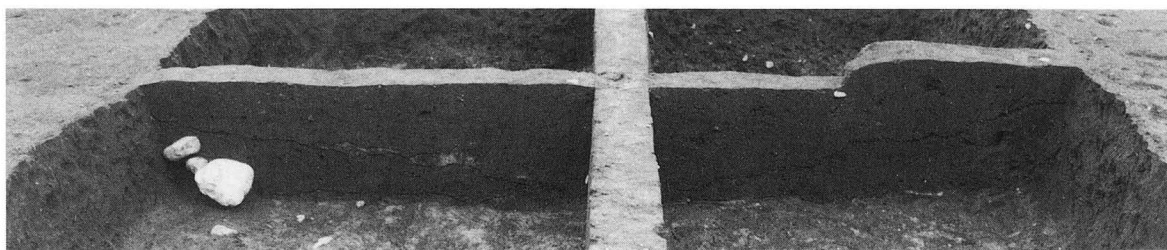
カマド埋土



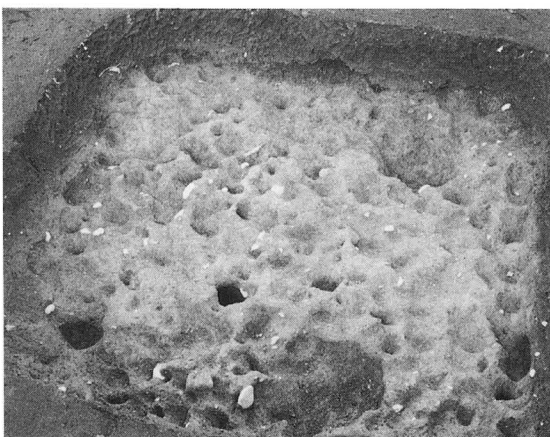
燃烧部焼土 たち割り



全 景



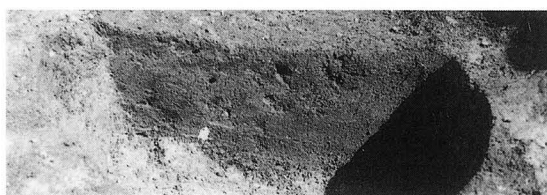
埋 土



貼床除去後全景

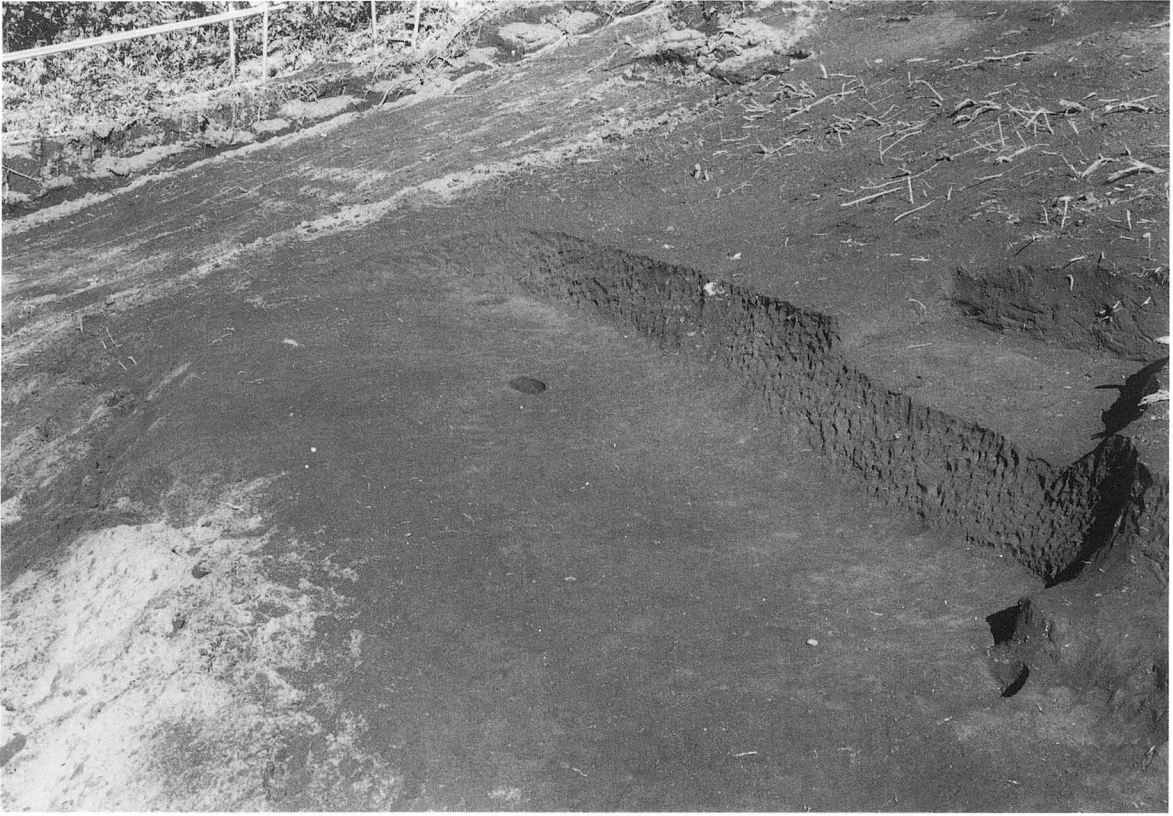


Pit 1 埋土



Pit 2 埋土

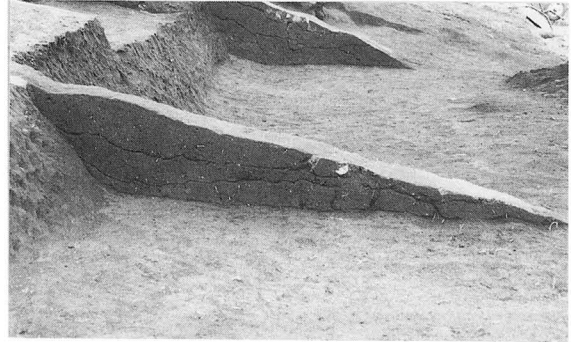
写真図版21 第1号住居状遺構



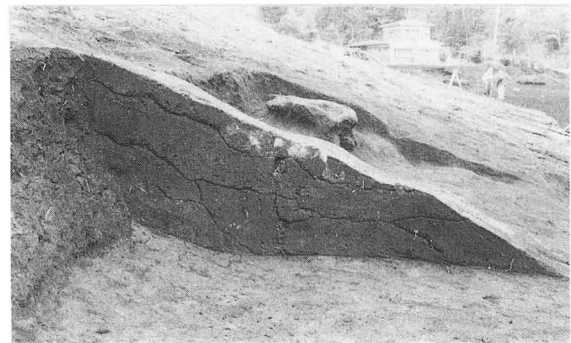
全景 (南→)



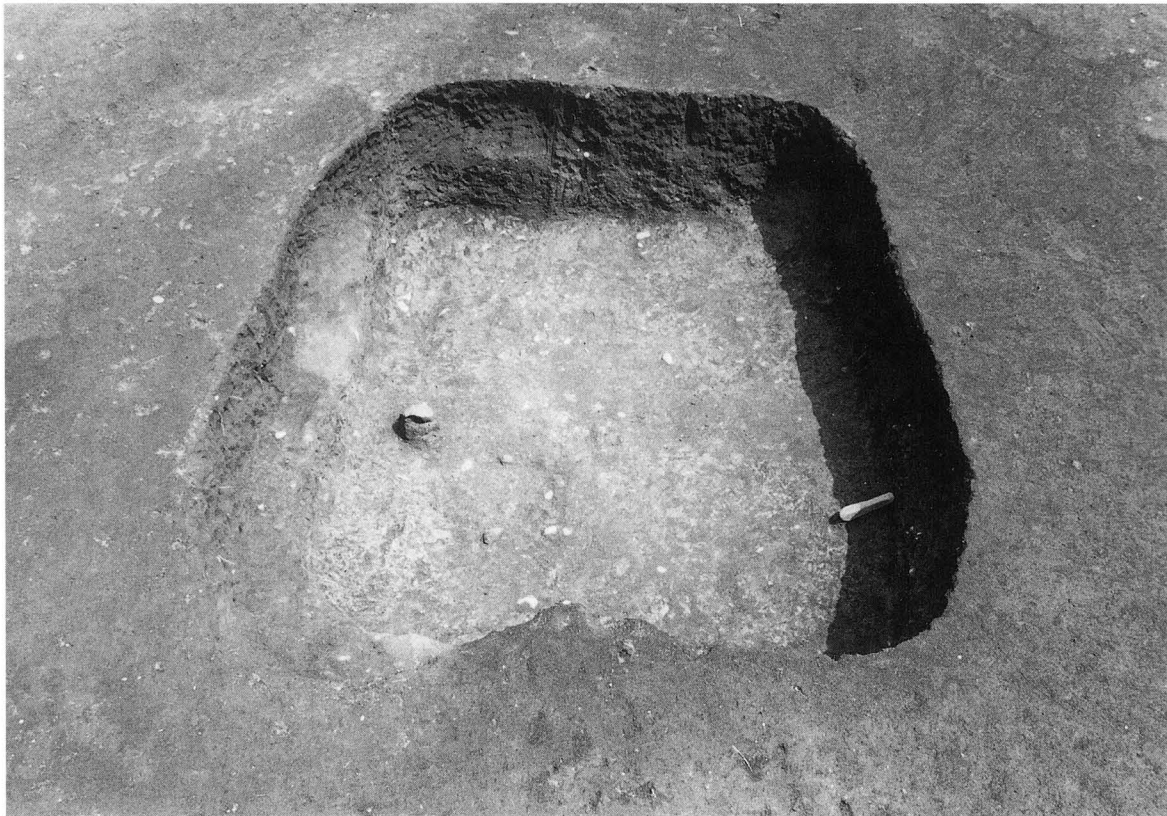
全景 (南東→)



埋土 (1)



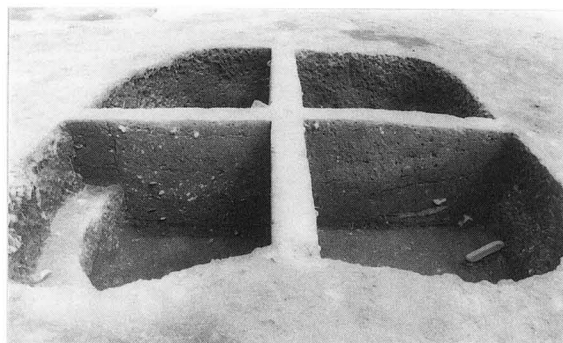
埋土 (2)



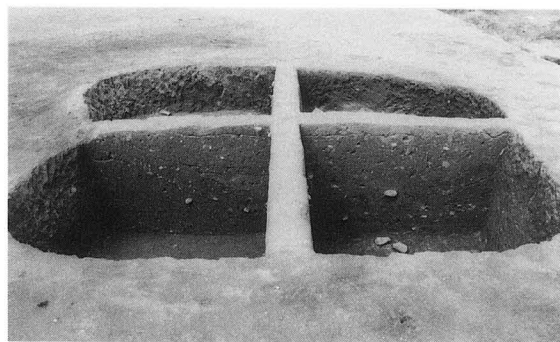
全 景



坏出土状况



埋土 (1)

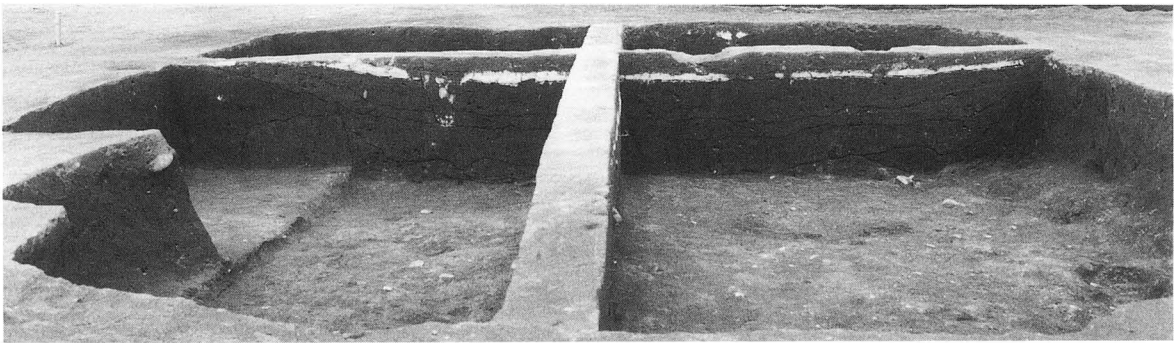


埋土 (2)

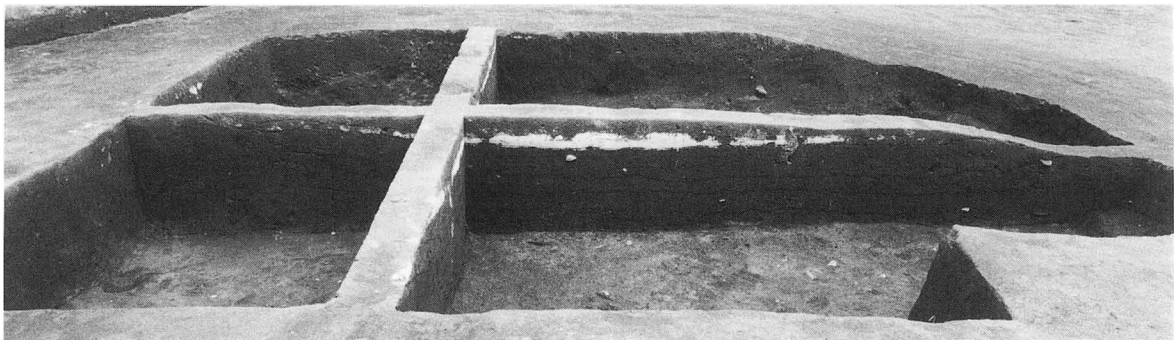
写真図版23 第3号住居状遺構



全 景



埋土 (1)



埋土 (2)

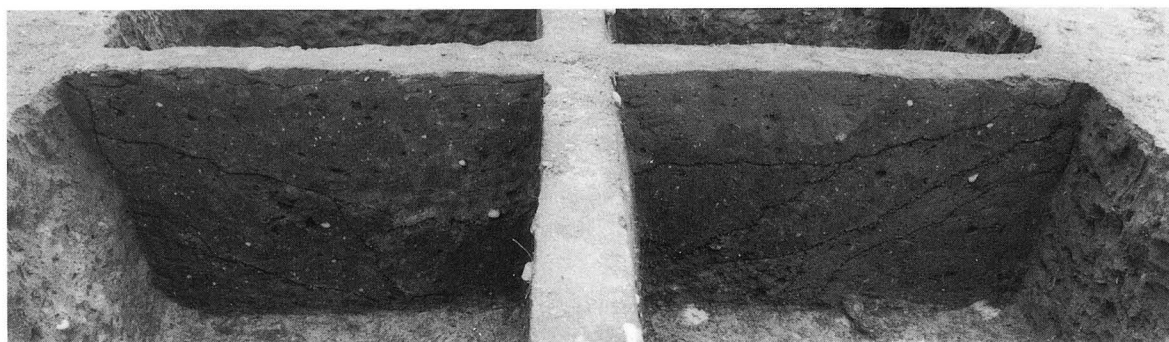
写真図版24 第4号住居状遺構



全 景



埋土 (1)

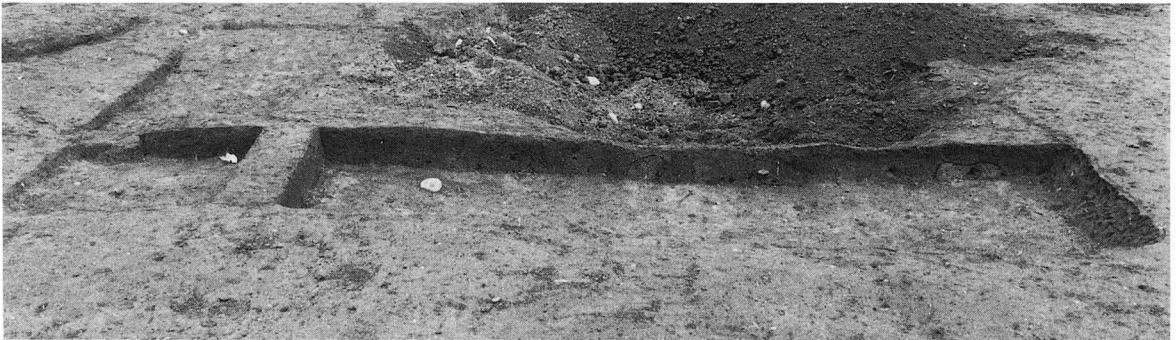


埋土 (2)

写真図版25 第5号住居状遺構



全 景



埋土 (1)

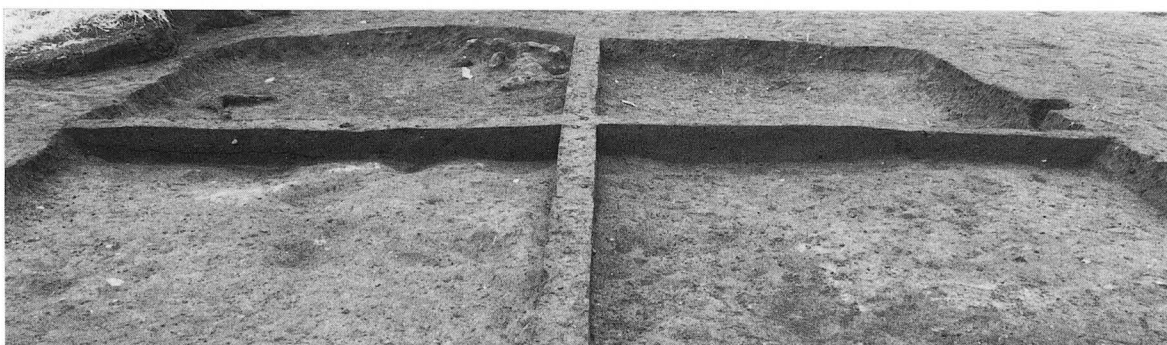


埋土 (2)

写真図版26 第6号住居状遺構



全 景



埋 土



焼土 1 たち割り



焼土 2 たち割り

写真図版27 第7号住居状遺構



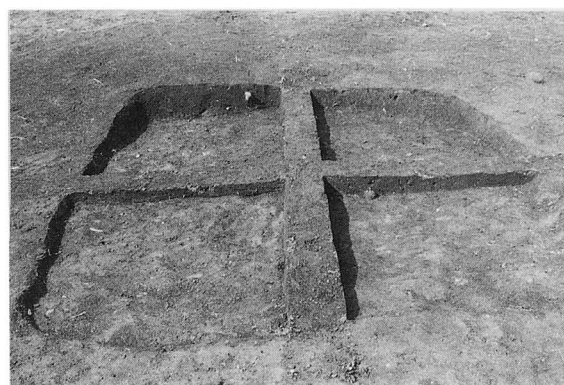
第1号土坑全景



第2号土坑全景



埋土



埋土



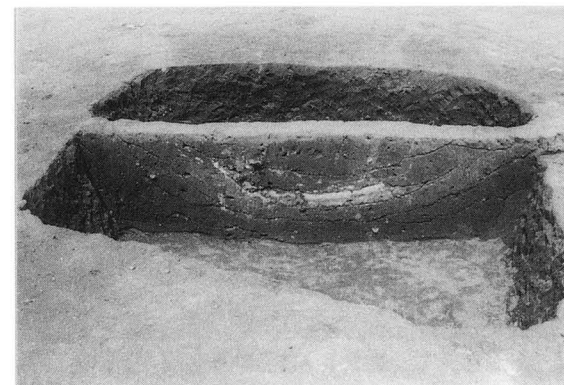
第3号土坑全景



第4号土坑全景



埋土



埋土

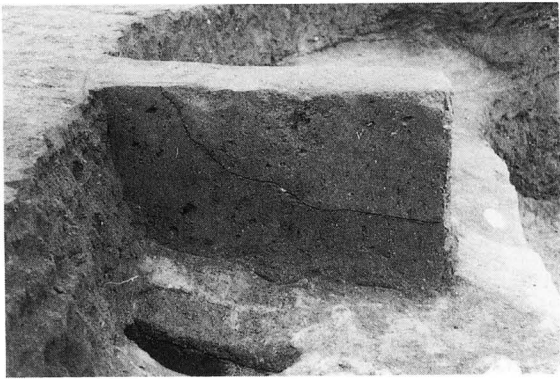
写真图版28 土坑(1)



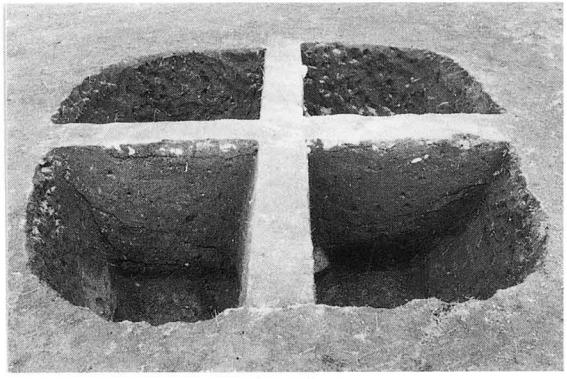
第5号土坑全景



第6号土坑全景



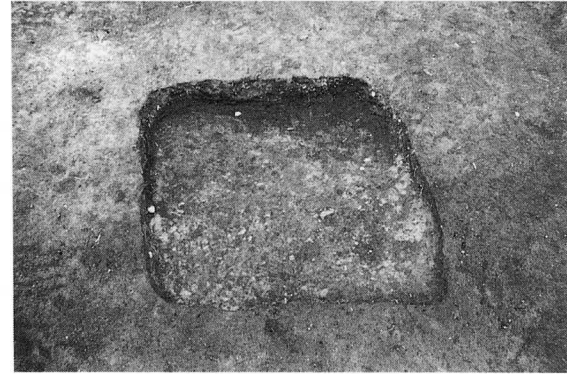
埋土



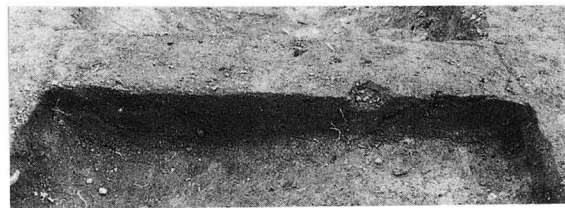
埋土



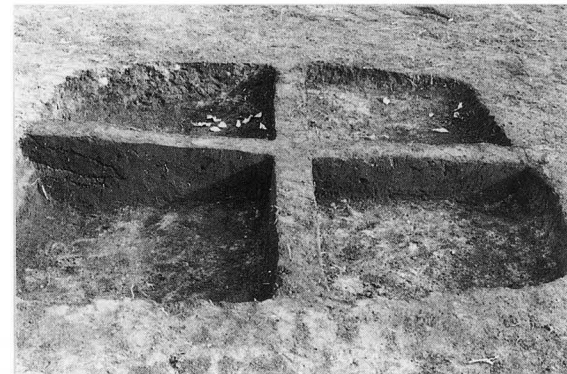
第7号土坑全景



第8号土坑全景

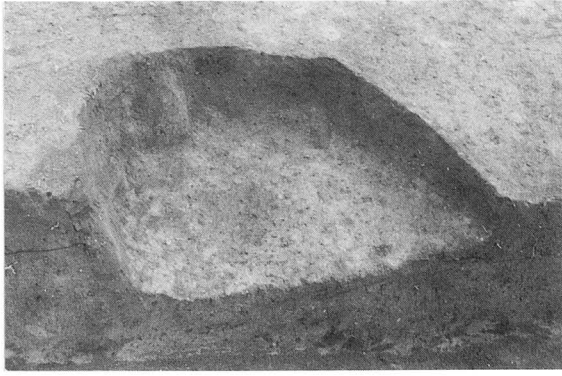


埋土



埋土

写真图版29 土坑(2)



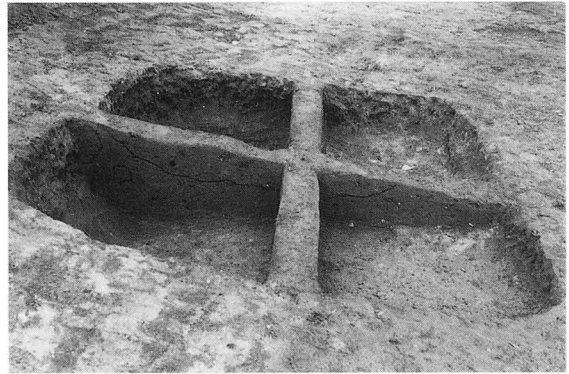
第9号土坑全景



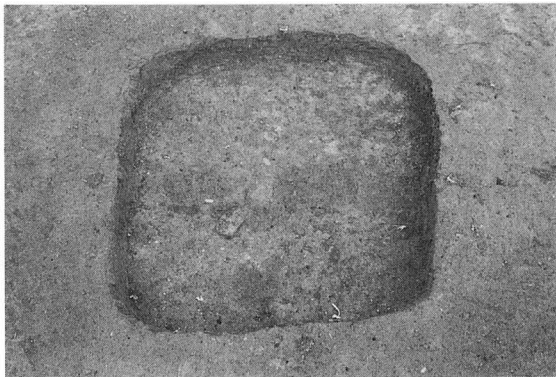
第10号土坑全景



埋土



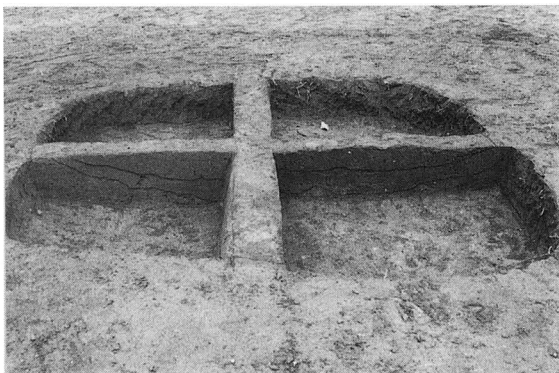
埋土



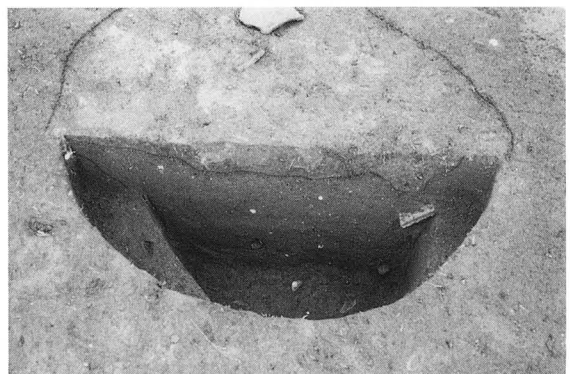
第11号土坑全景



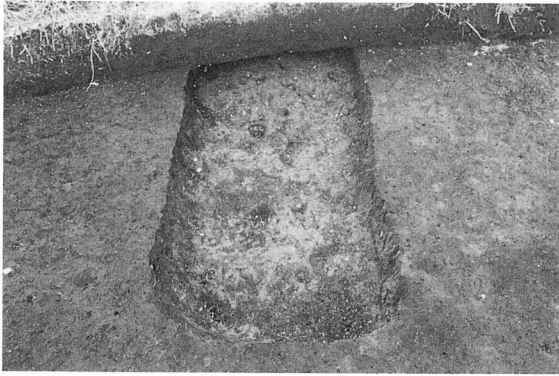
第12号土坑全景



埋土



埋土



第13号土坑全景



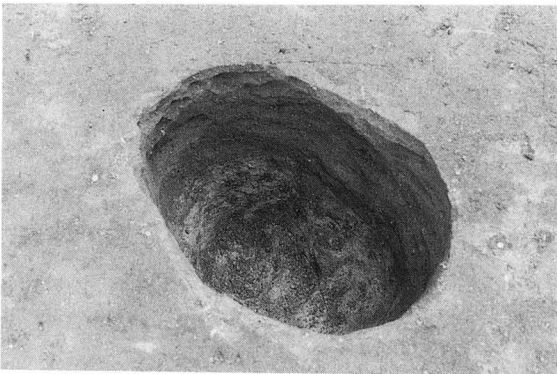
第14号土坑全景



埋土



埋土



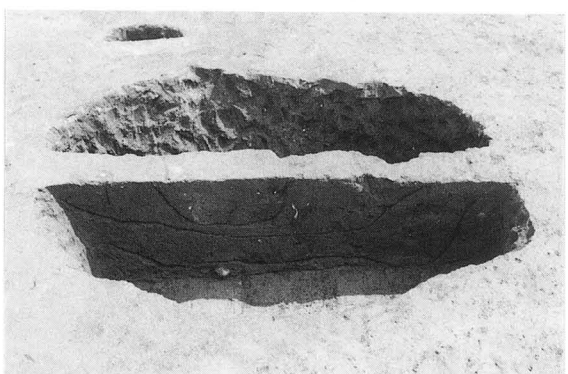
第15号土坑全景



第16号土坑全景



埋土

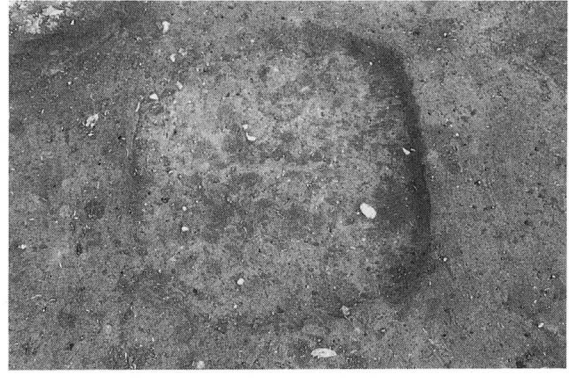


埋土

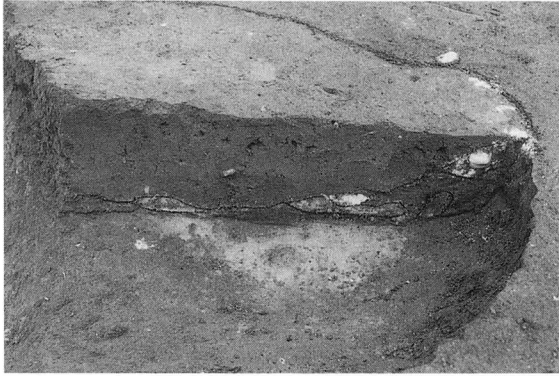
写真图版31 土坑(4)



第17号土坑全景



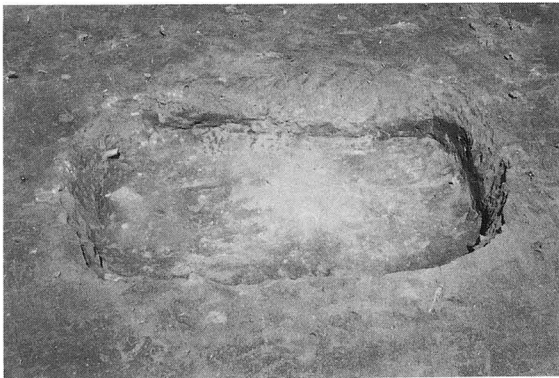
第18号土坑全景



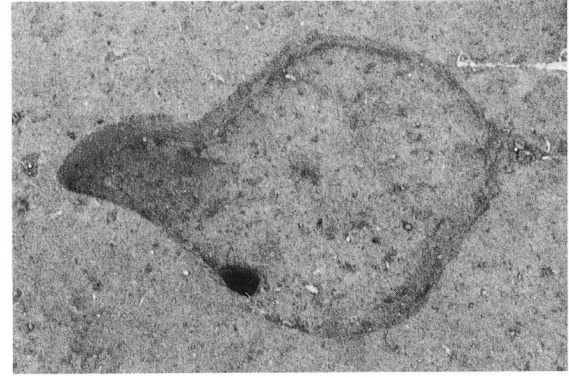
埋土



埋土



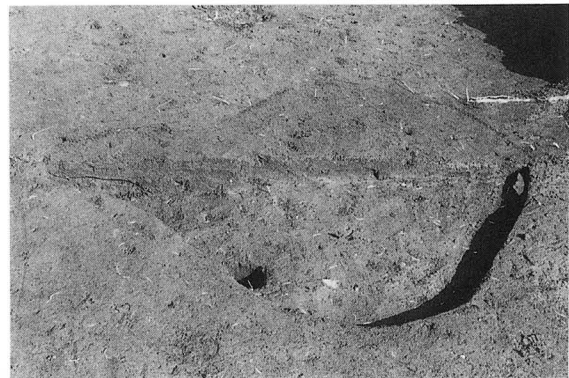
第19号土坑全景



第20号土坑全景



埋土

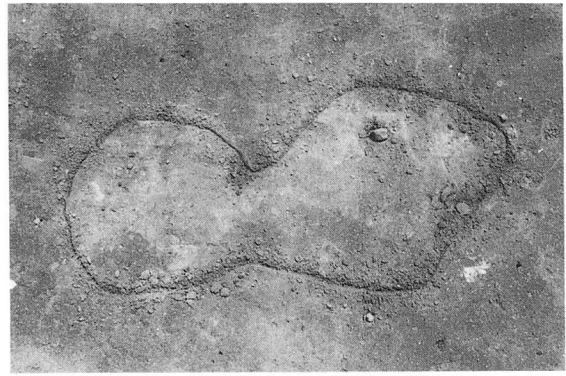


埋土

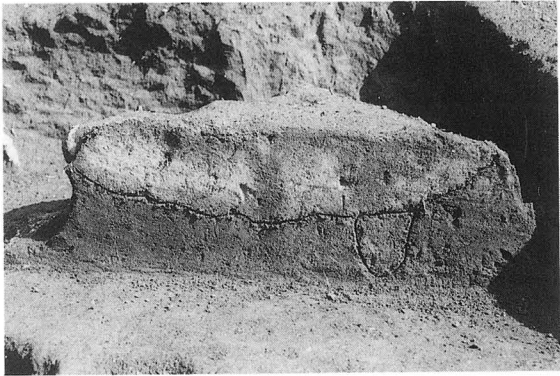
写真图版32 土坑(5)



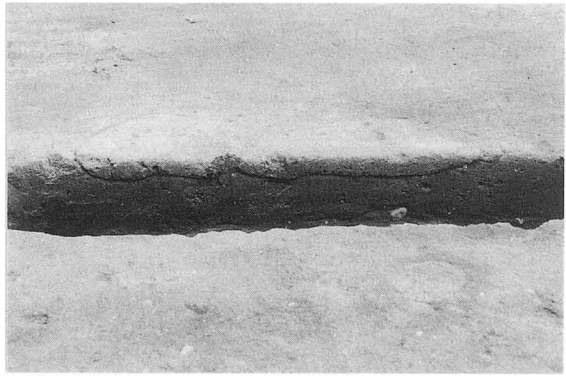
第1号焼土遺構平面



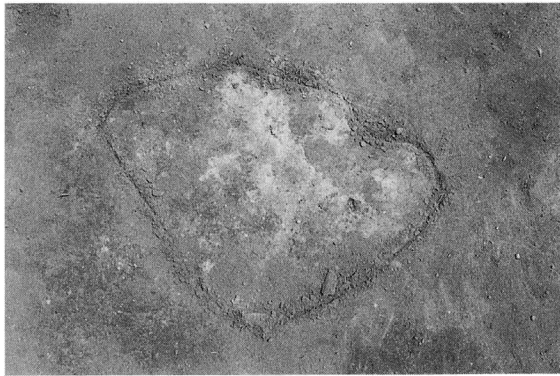
第2号焼土遺構平面



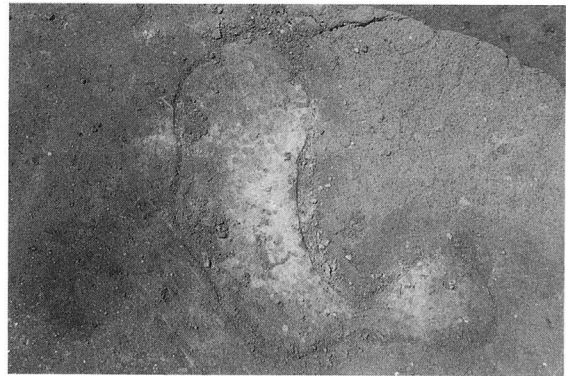
たち割り



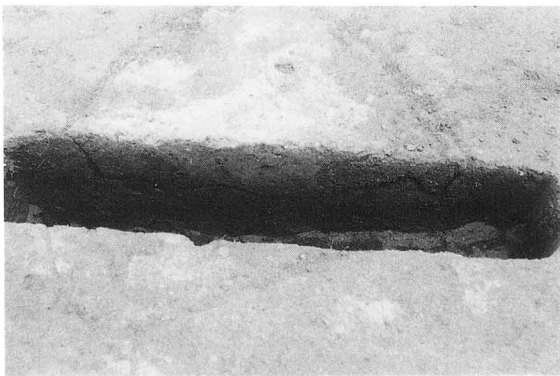
たち割り



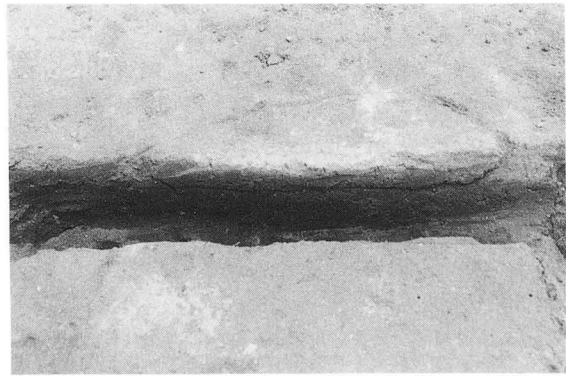
第3号焼土遺構平面



第4号焼土遺構平面

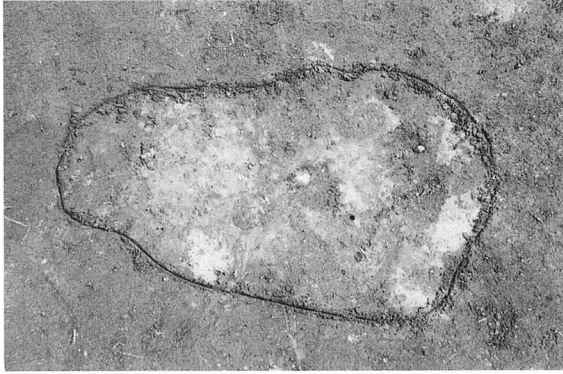


たち割り



たち割り

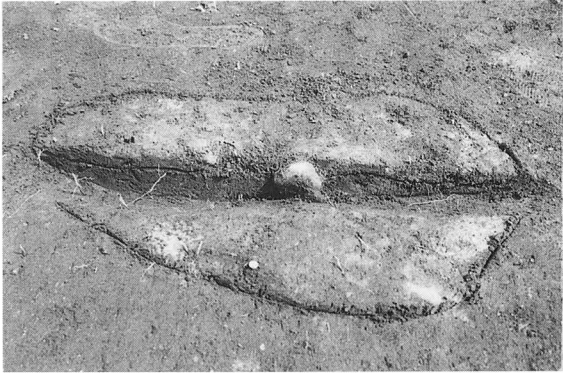
写真図版33 焼土遺構(1)



第5号焼土遺構平面



第6号焼土遺構平面



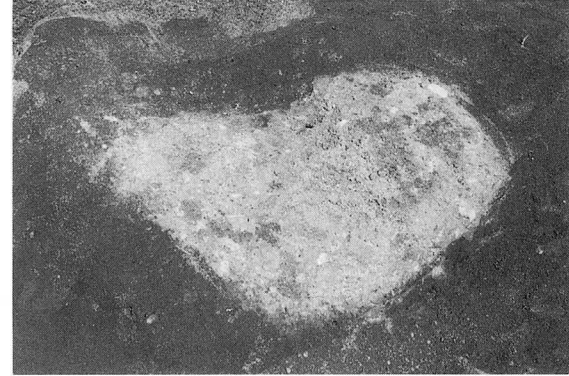
たち割り



たち割り



第7号焼土遺構平面



第8号焼土遺構平面

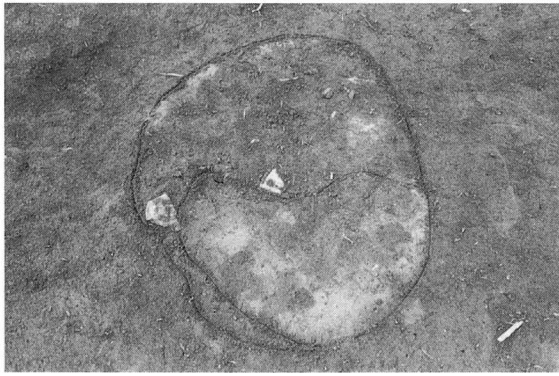


作業風景（屋根部）



たち割り

写真図版34 焼土遺構（2）



第9号焼土遺構平面



第10号焼土遺構平面



たち割り



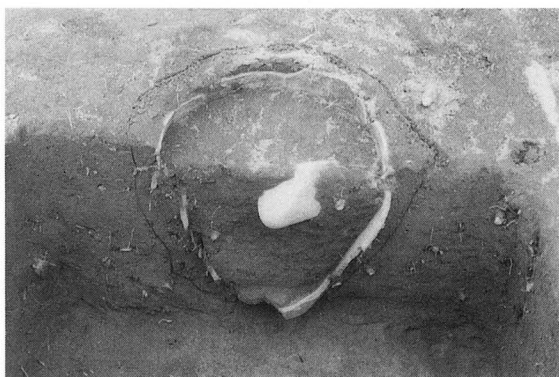
たち割り



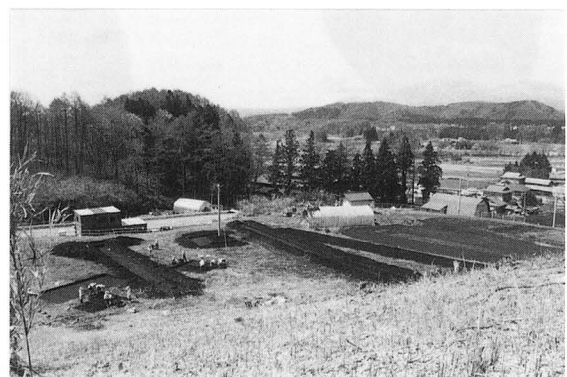
第1号土器埋設遺構検出状況



作業風景（平坦部）

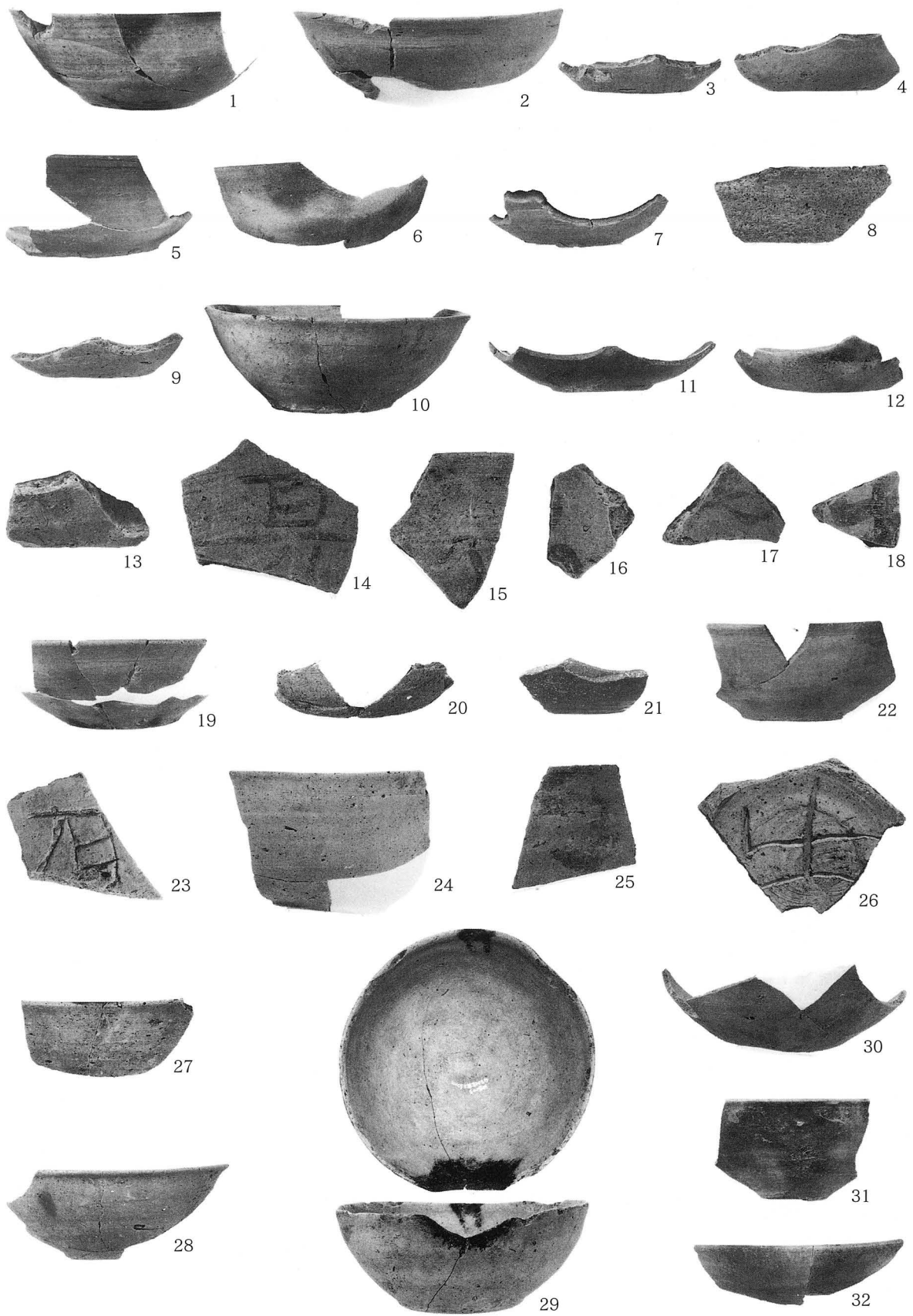


たち割り



尾根部から臨む岩手山

写真図版35 焼土遺構（3）・土器埋設遺構ほか



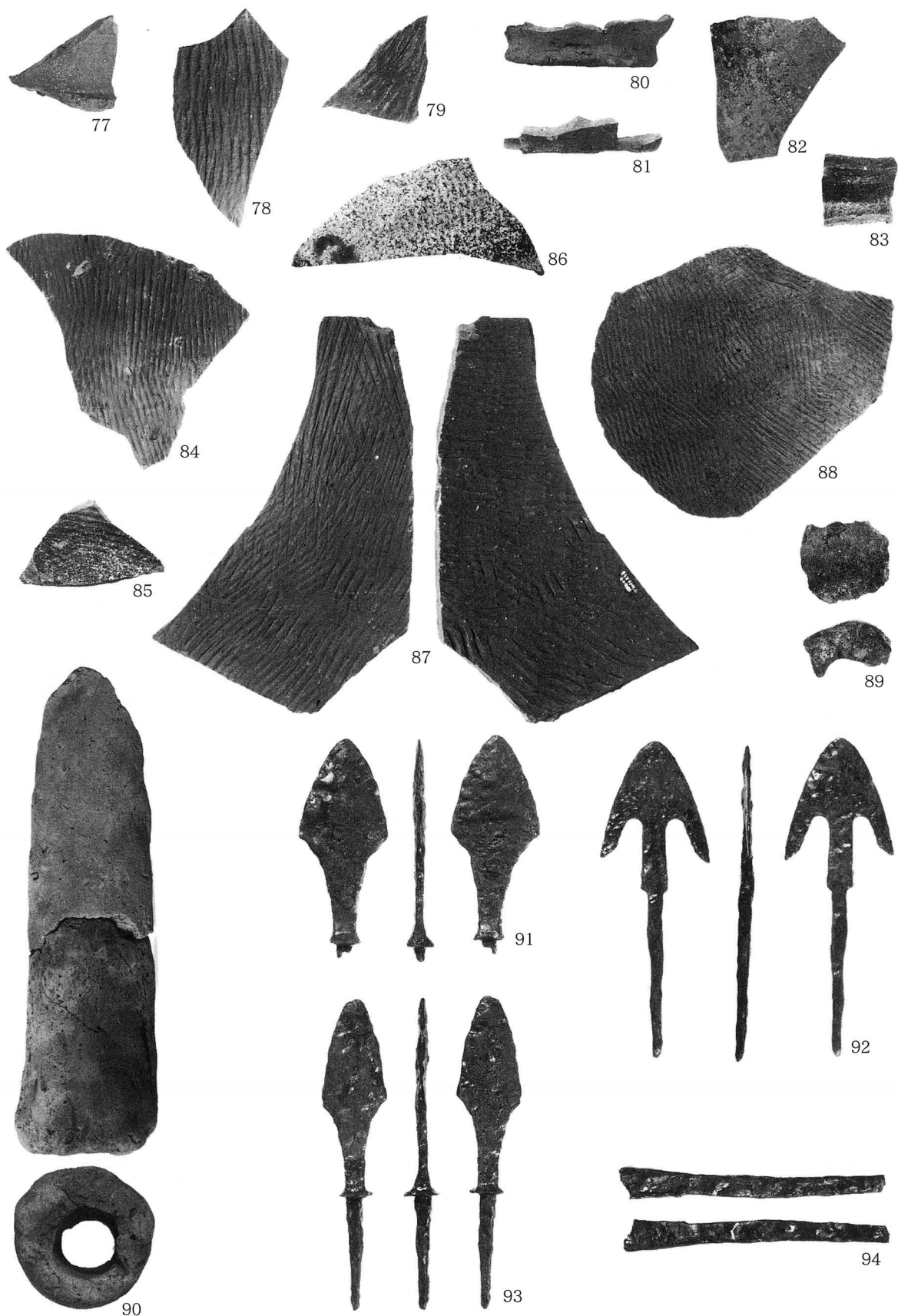
写真図版36 遺構内出土遺物 (1)



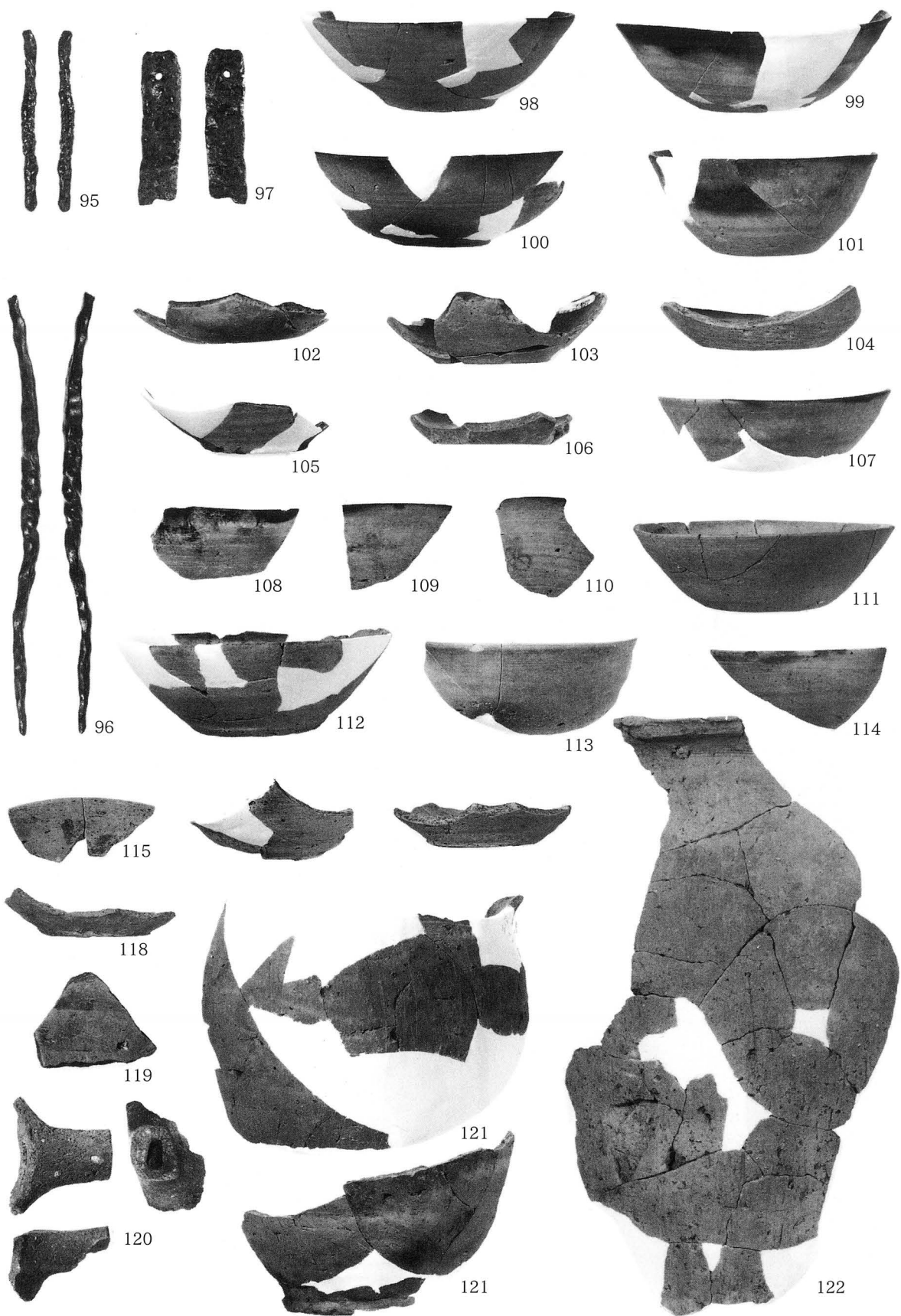
写真図版37 遺構内出土遺物（2）



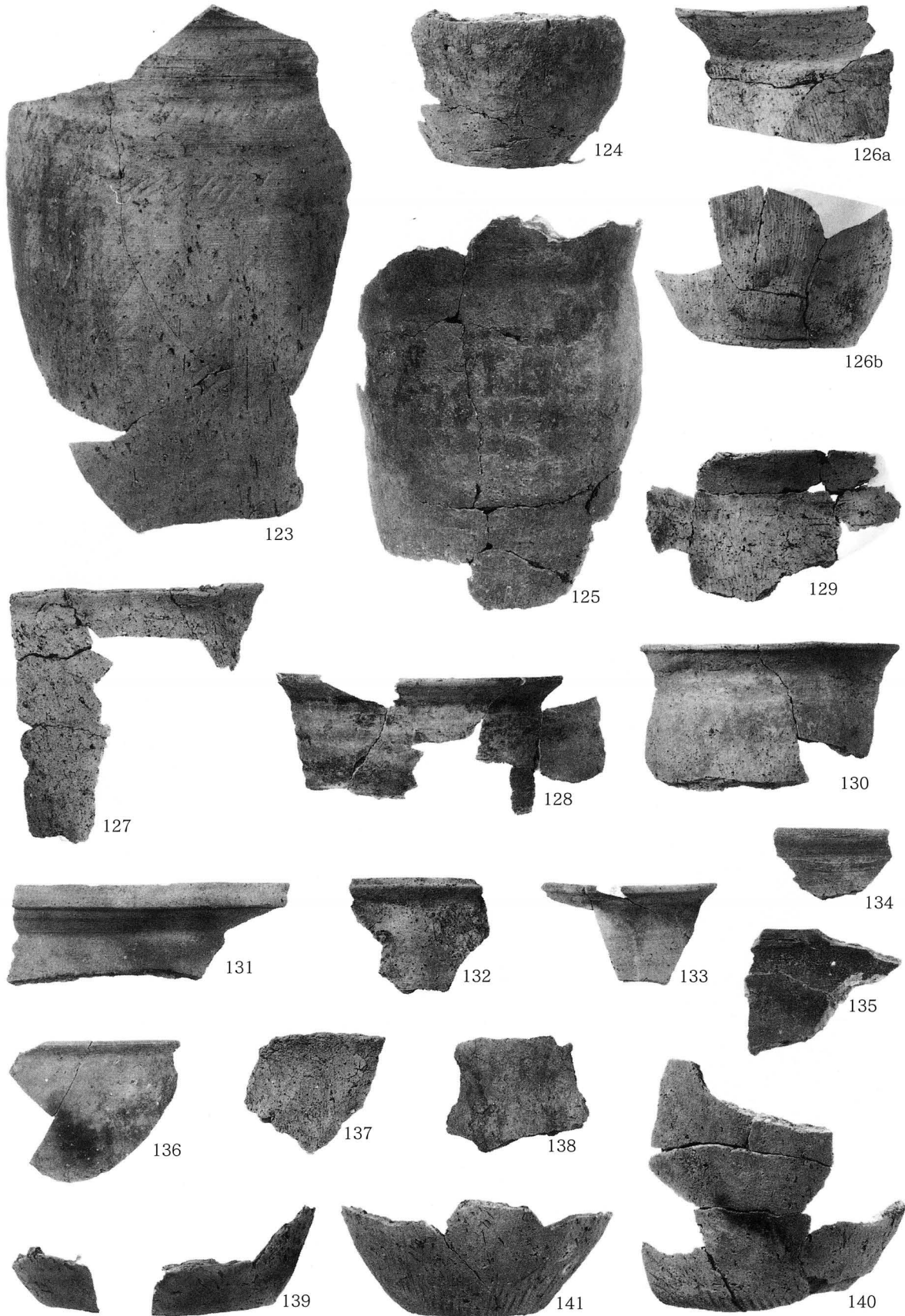
写真図版38 遺構内出土遺物 (3)



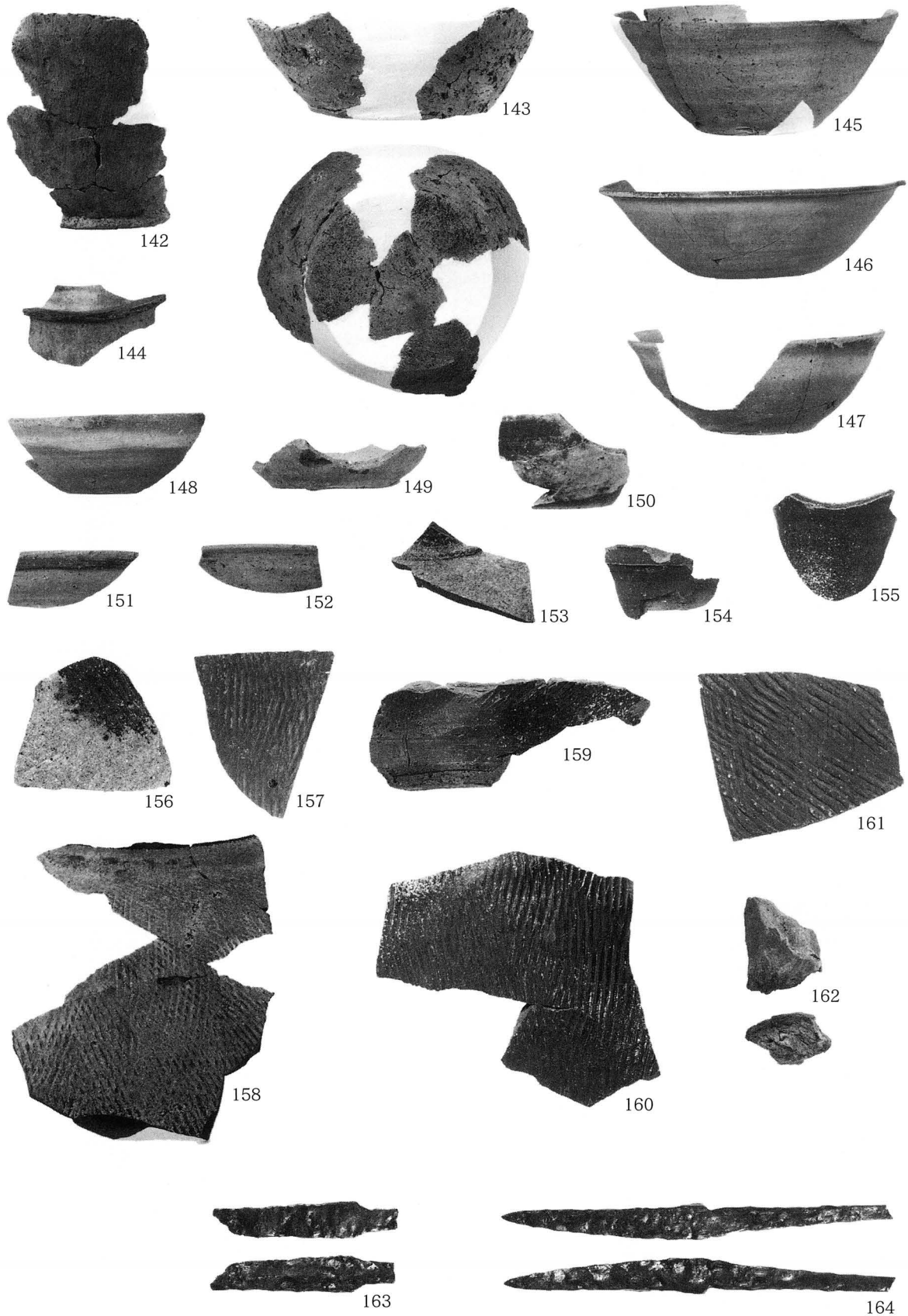
写真图版39 遺構内出土遺物（4）



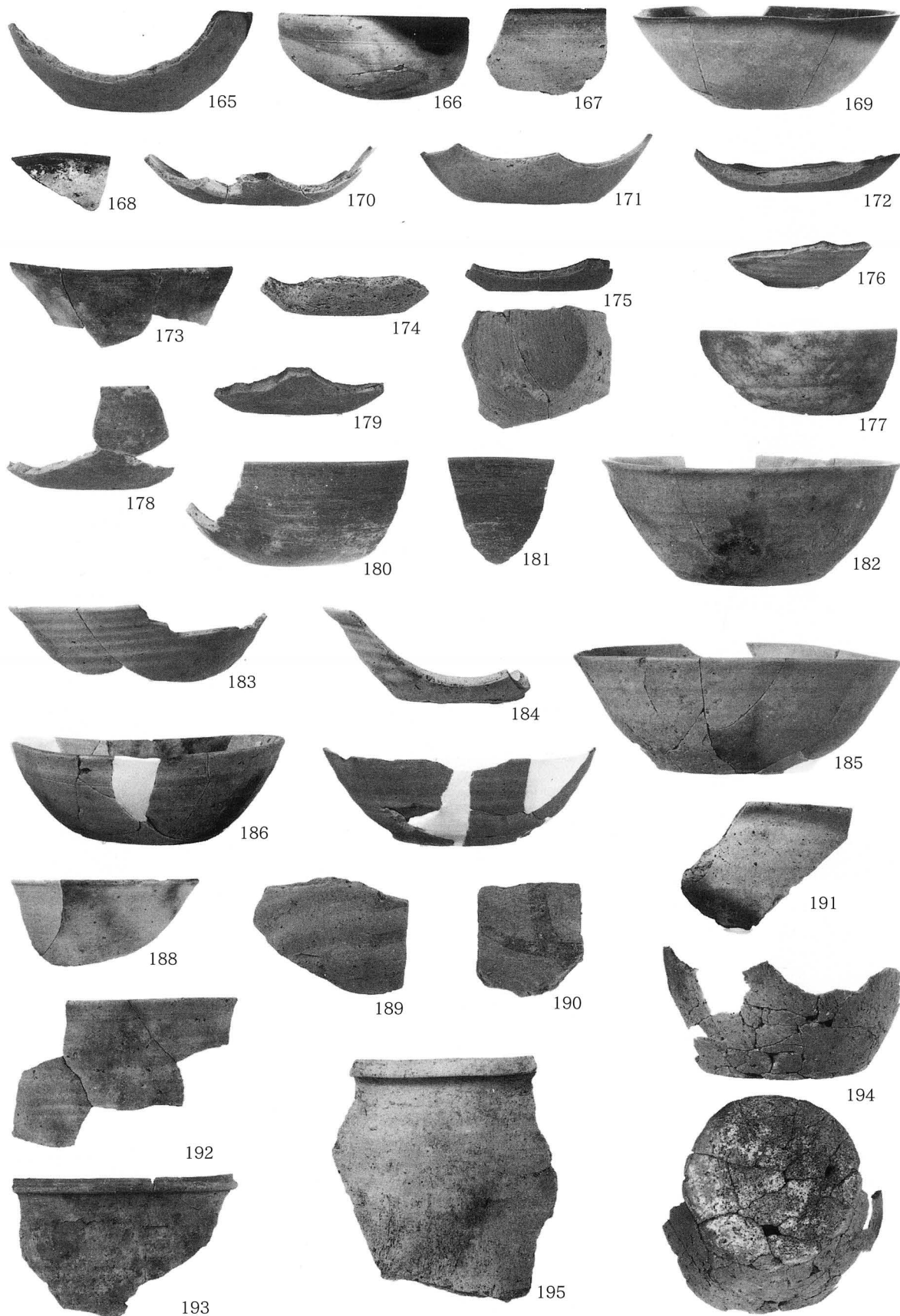
写真図版40 遺構内出土遺物(5)



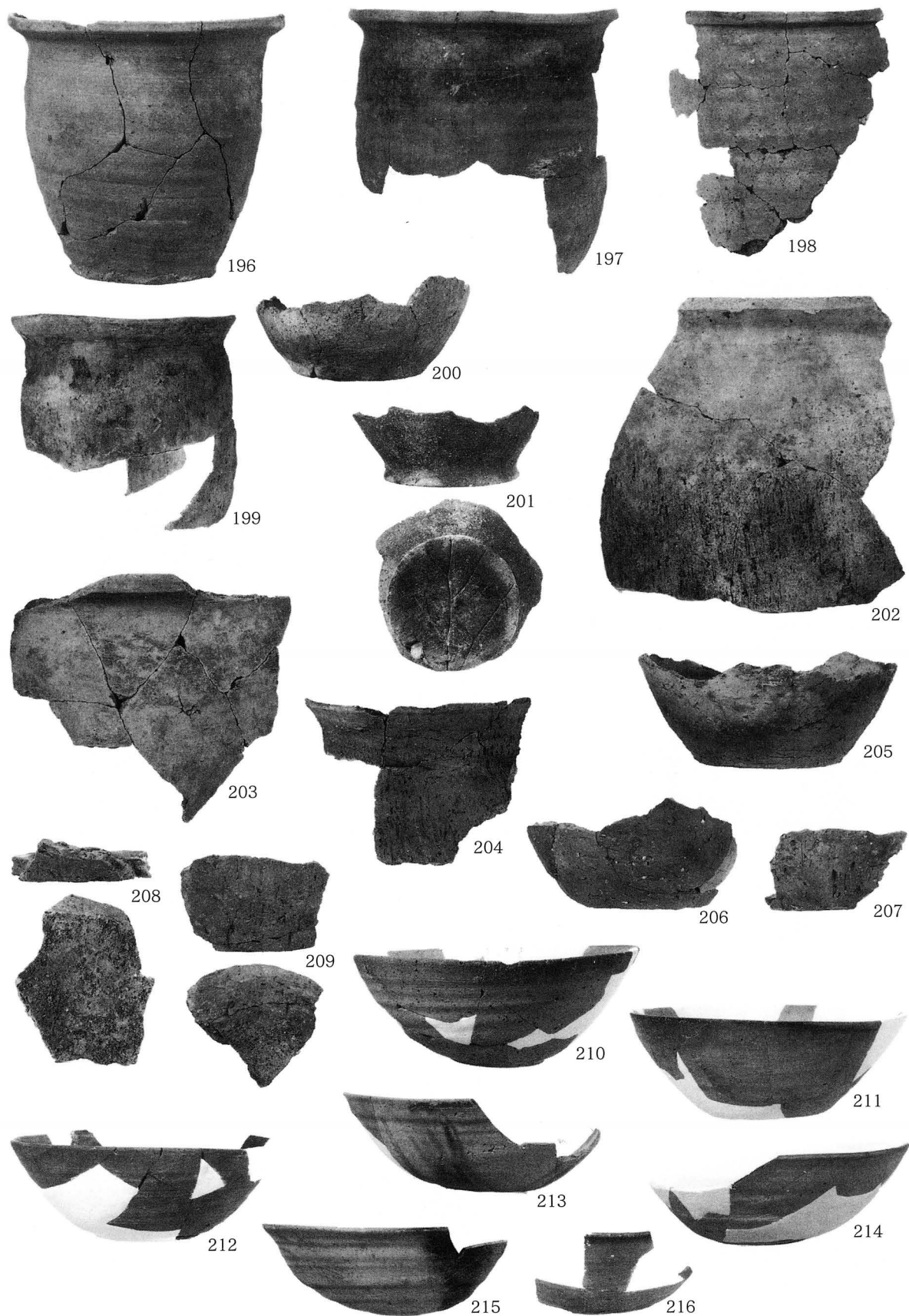
写真図版41 遺構内出土遺物 (6)



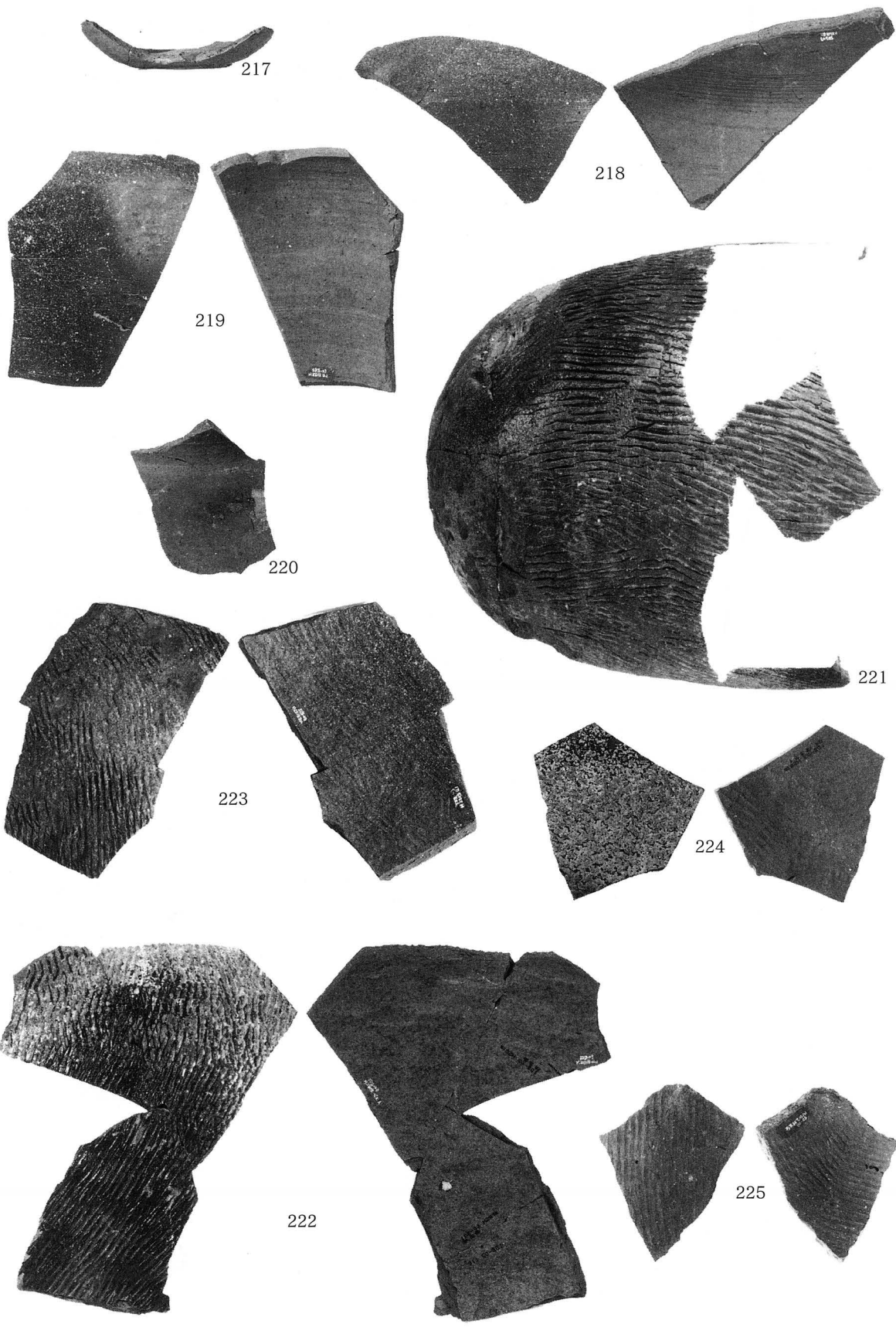
写真図版42 遺構内出土遺物(7)



写真図版43 遺構内出土遺物 (8)



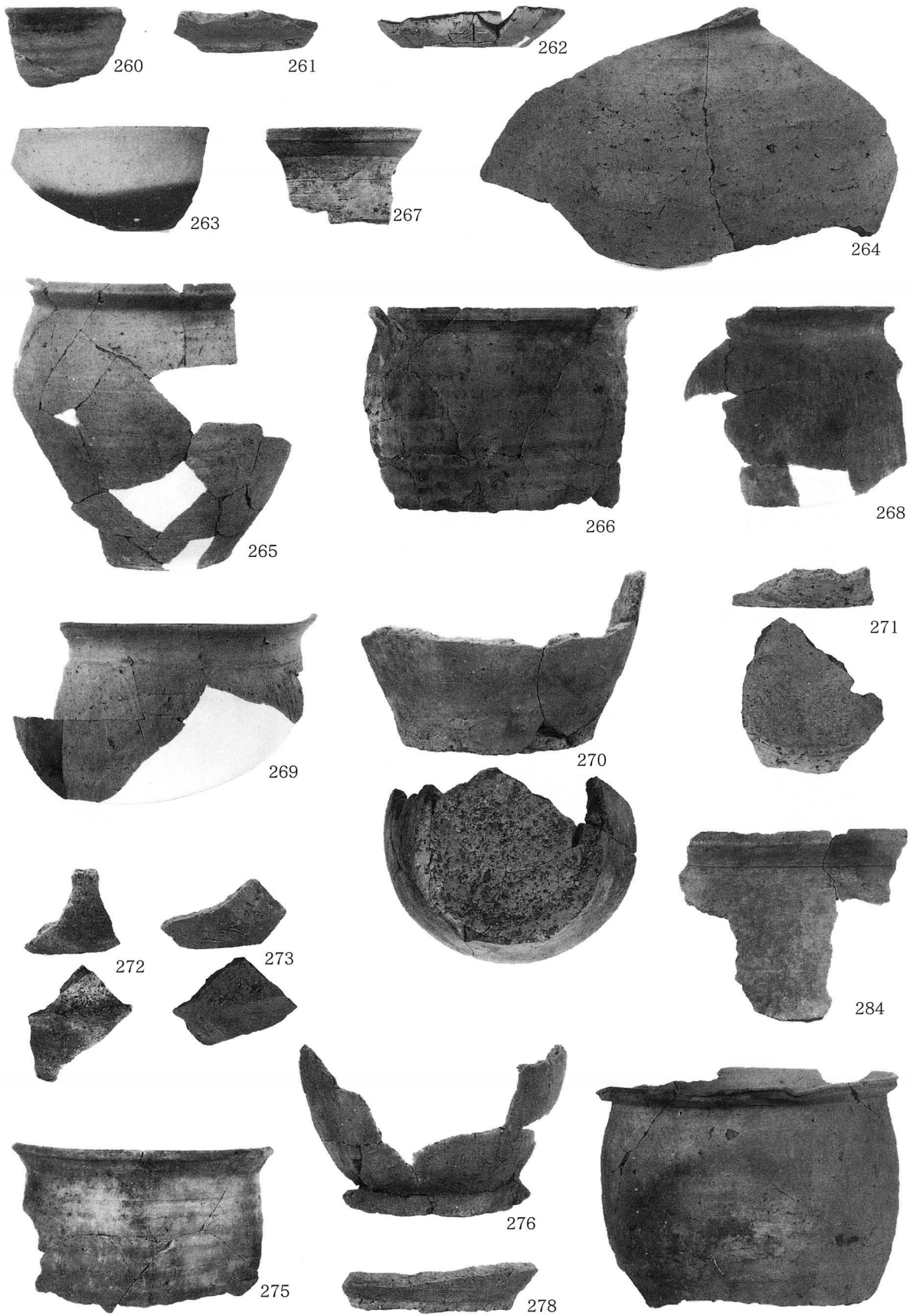
写真図版44 遺構内出土遺物(9)



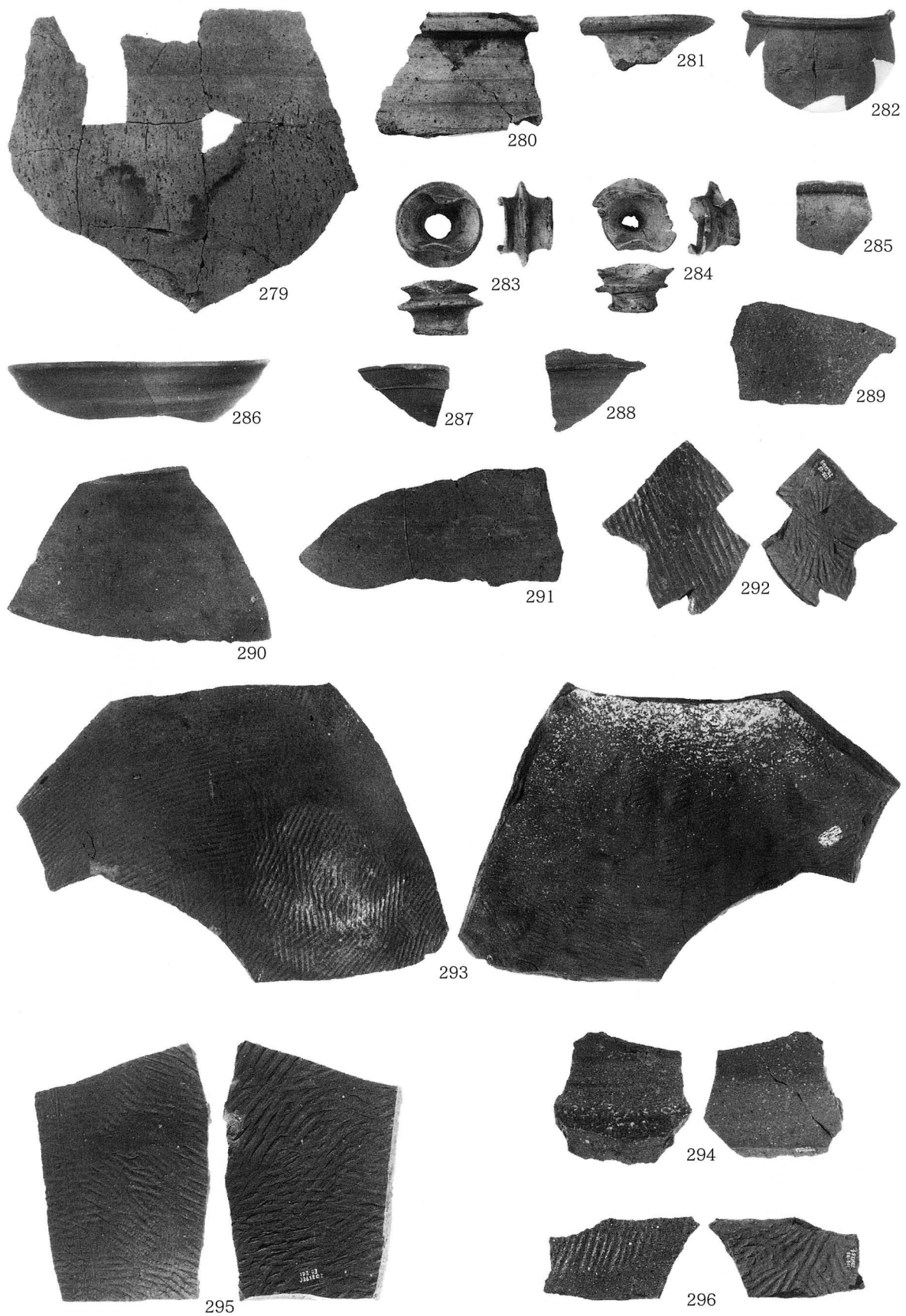
写真図版45 遺構内出土遺物 (10)



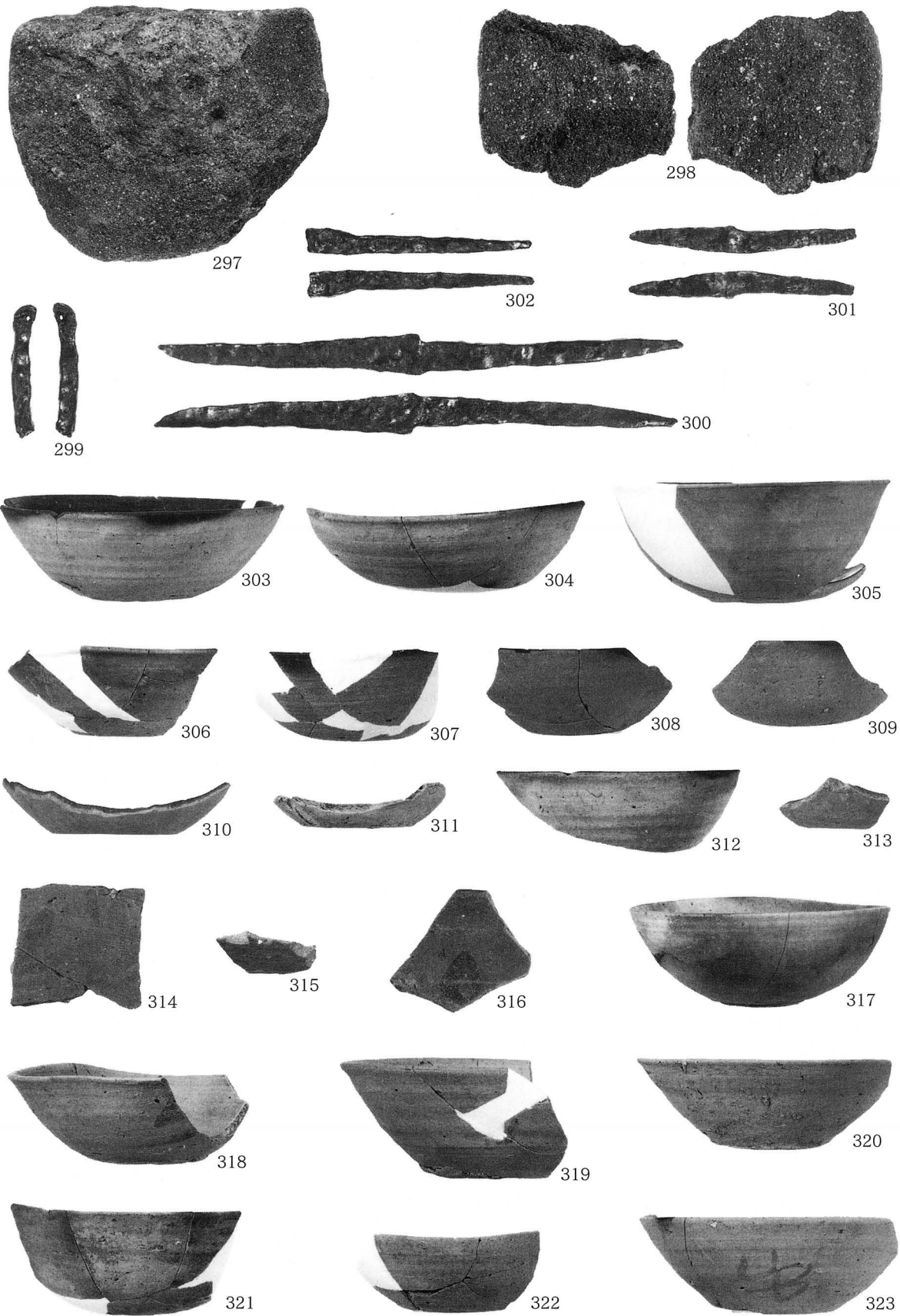
写真図版46 遺構内出土遺物 (11)



写真図版47 遺構内出土遺物 (12)



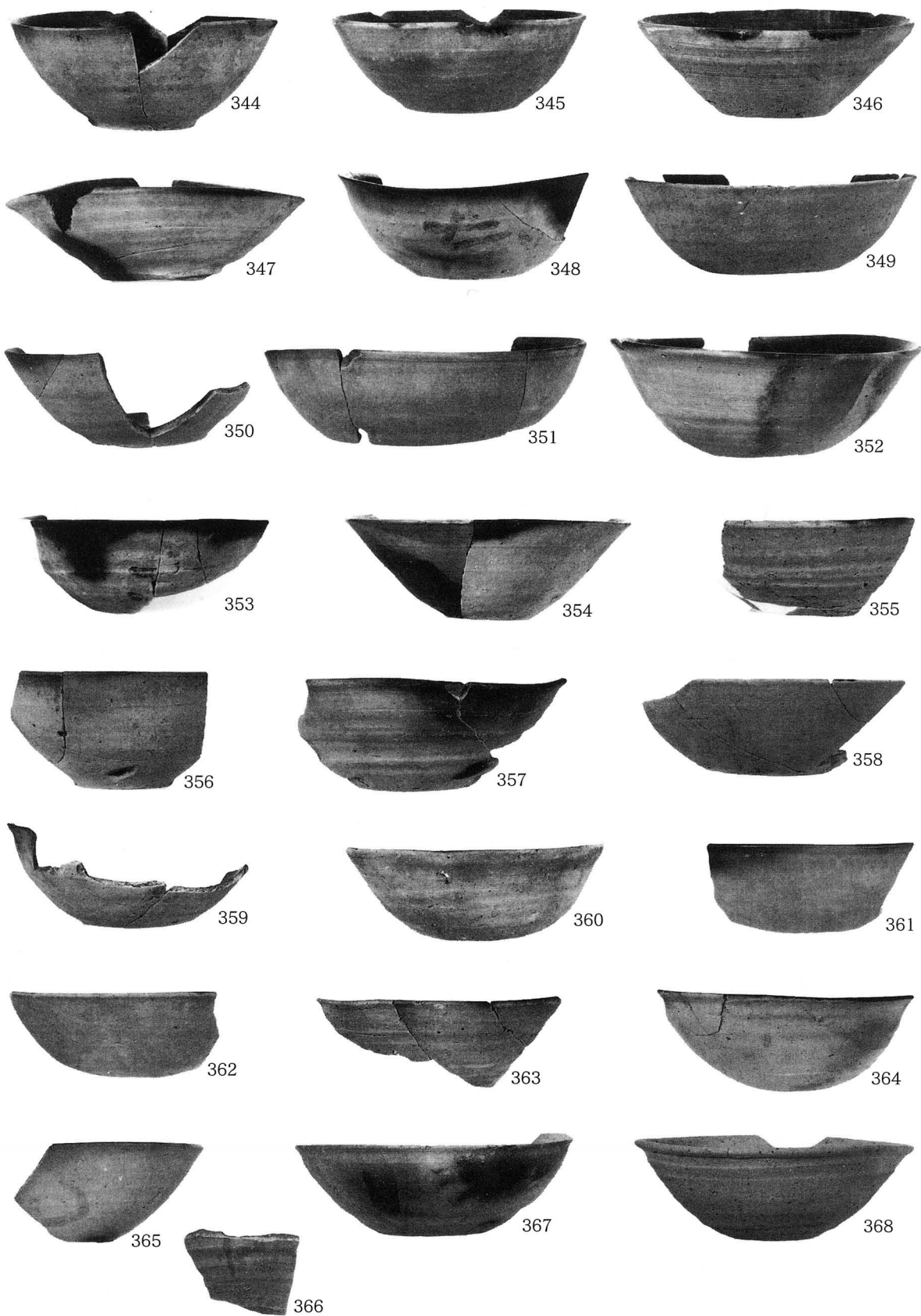
写真図版48 遺構内出土遺物 (13)



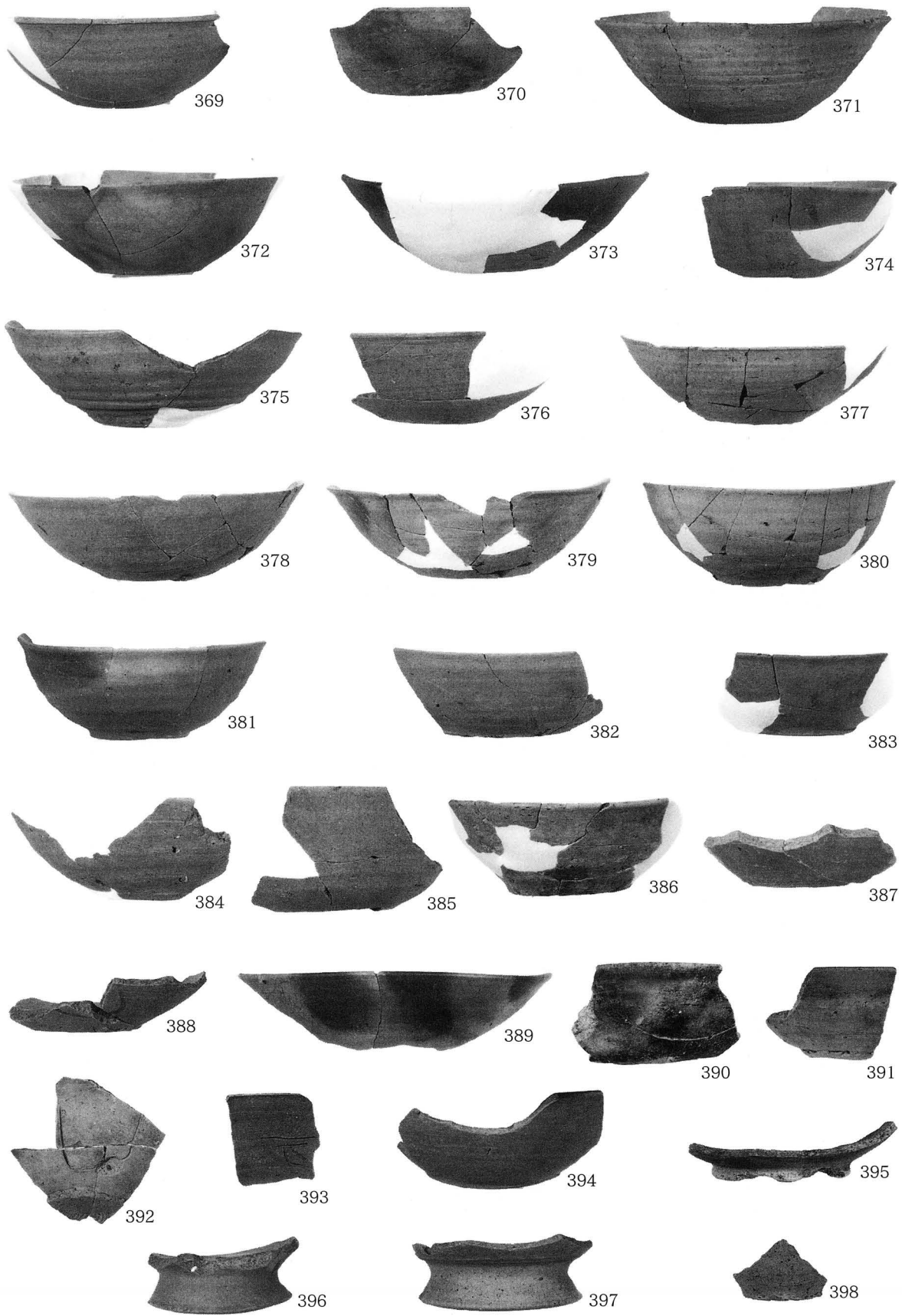
写真図版49 遺構内出土遺物 (14)



写真図版50 遺構内出土遺物 (15)



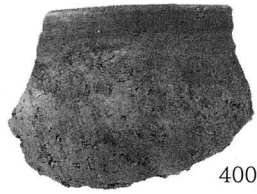
写真图版51 遺構内出土遺物 (16)



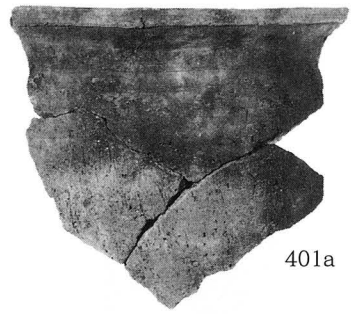
写真図版52 遺構内出土遺物 (17)



399



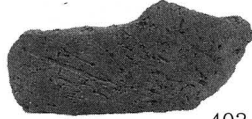
400



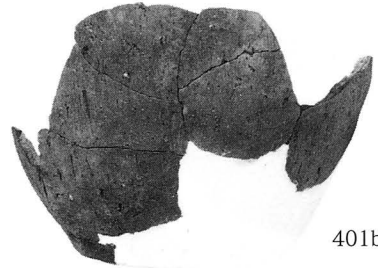
401a



402



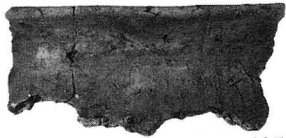
403



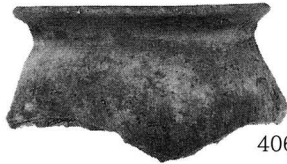
401b



404



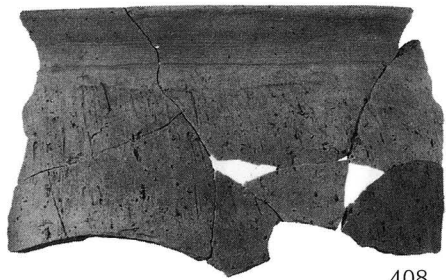
405



406



407



408



409

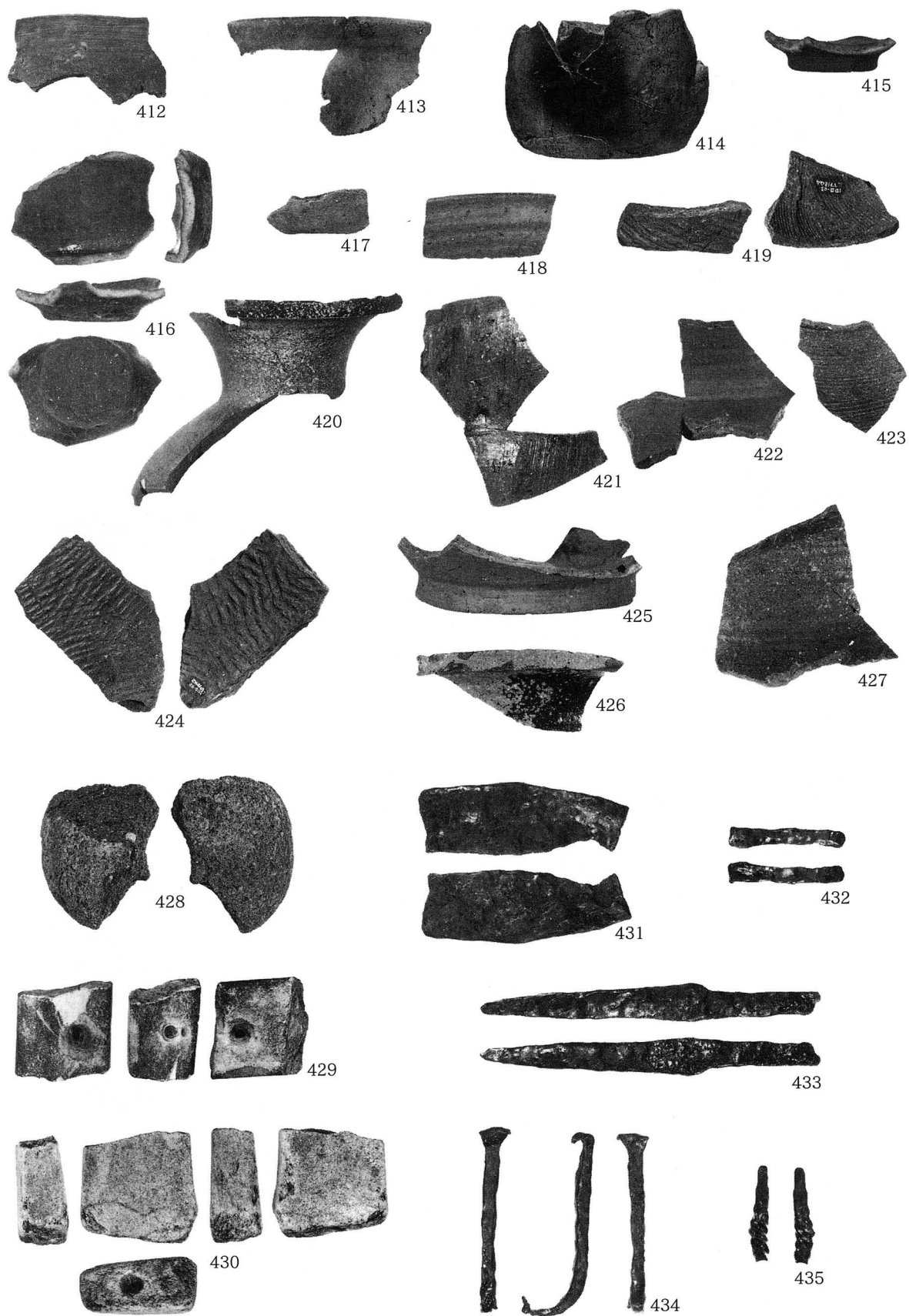


411



410

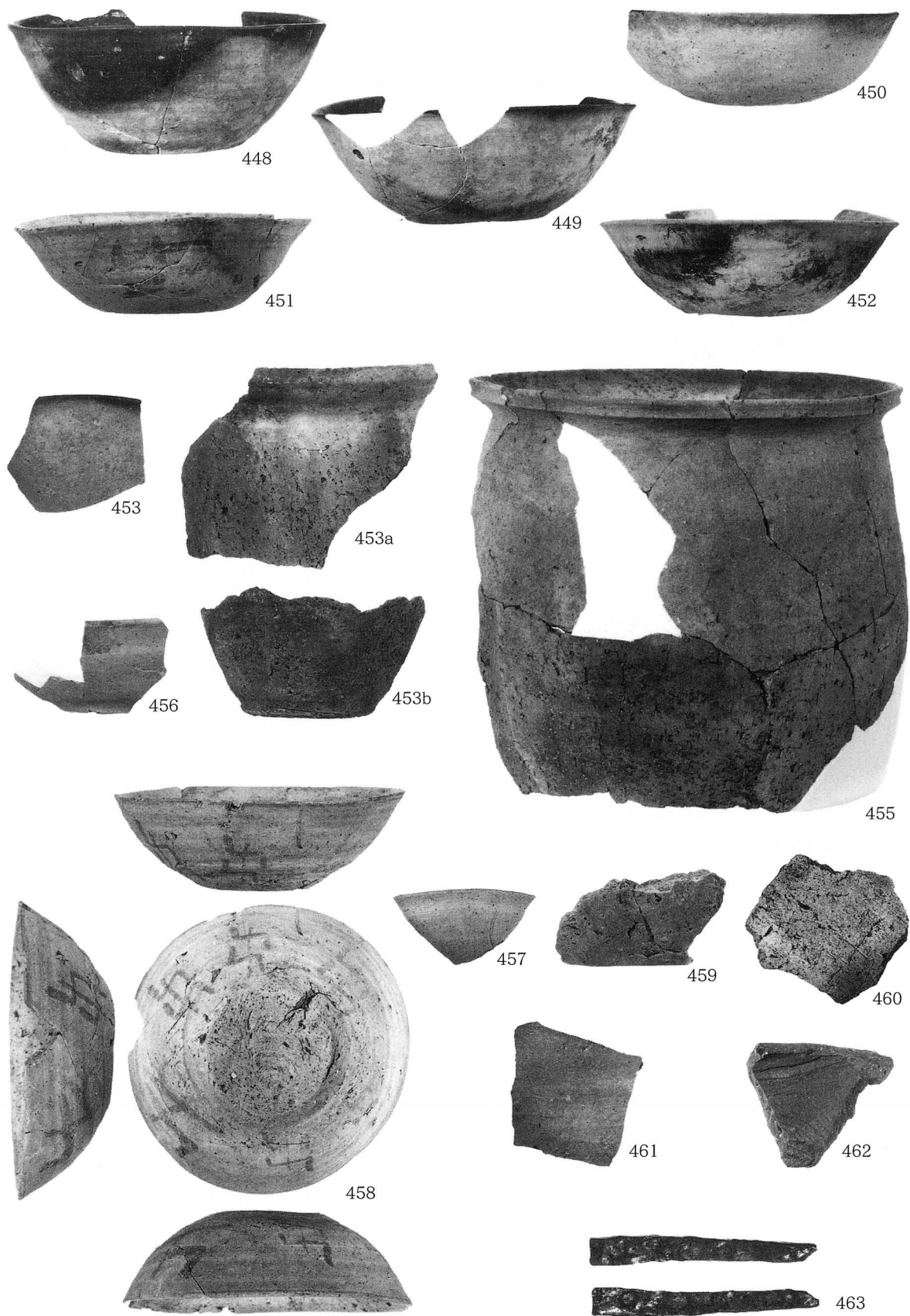
写真図版53 遺構内出土遺物 (18)



写真図版54 遺構内出土遺物 (19)



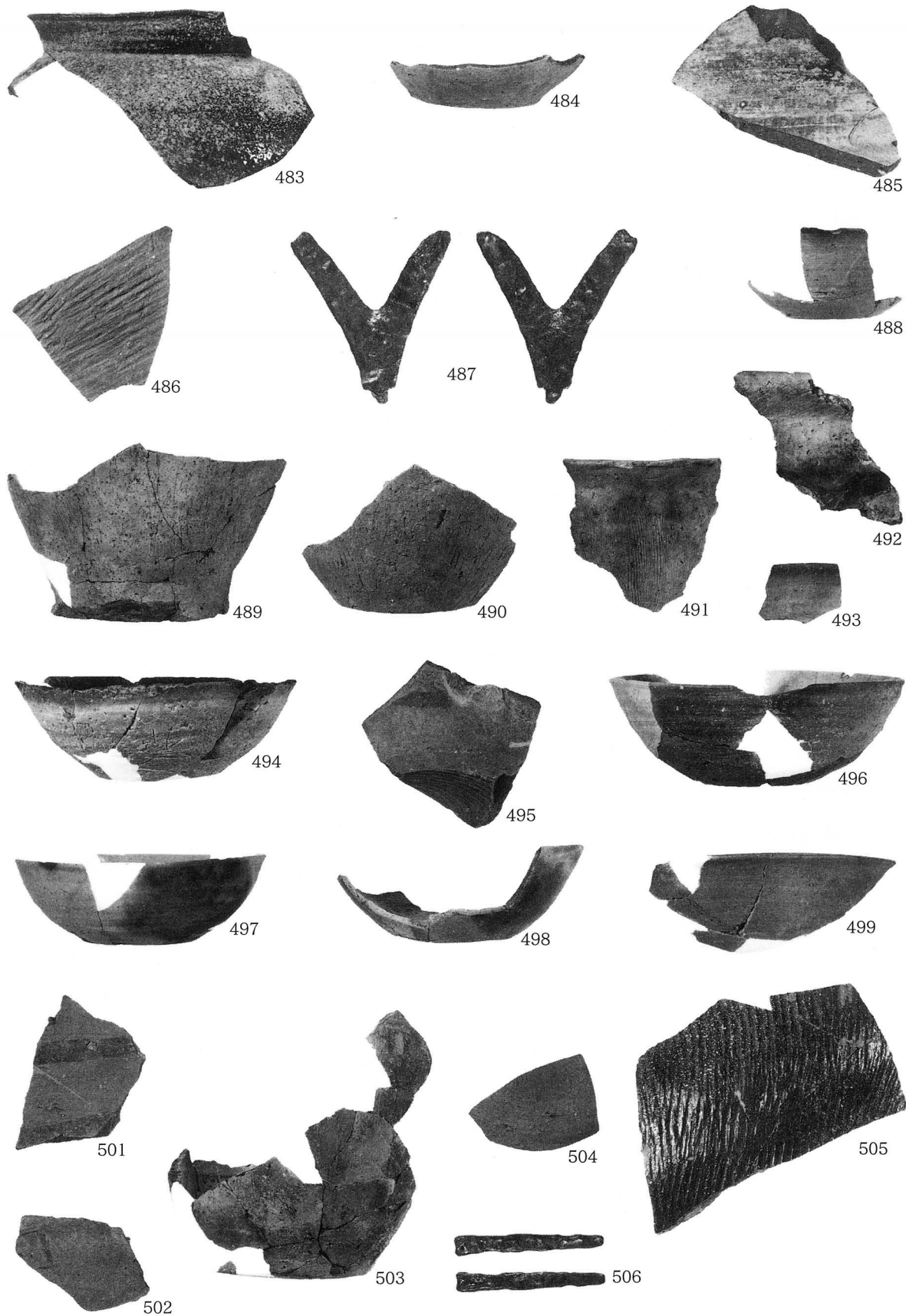
写真図版55 遺構内出土遺物 (20)



写真図版56 遺構内出土遺物 (21)



写真図版57 遺構内出土遺物 (22)



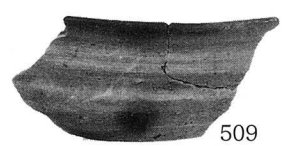
写真図版58 遺構内出土遺物 (23)



507



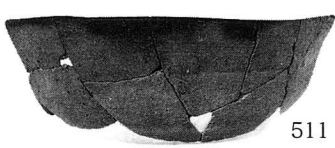
508



509



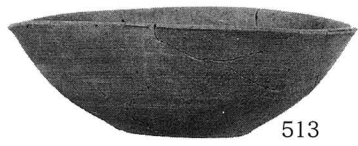
510



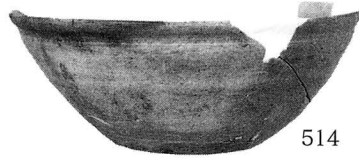
511



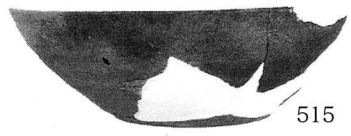
512



513



514



515



516



517



518



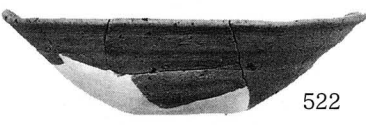
519



520



521



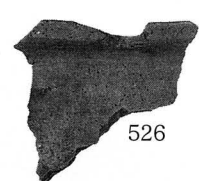
522



523



524



526



525



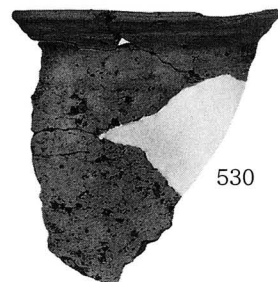
527



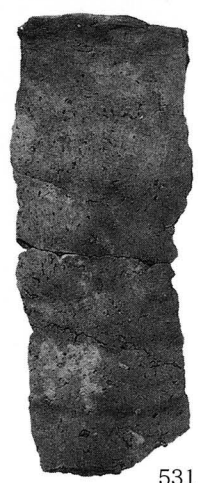
528



529

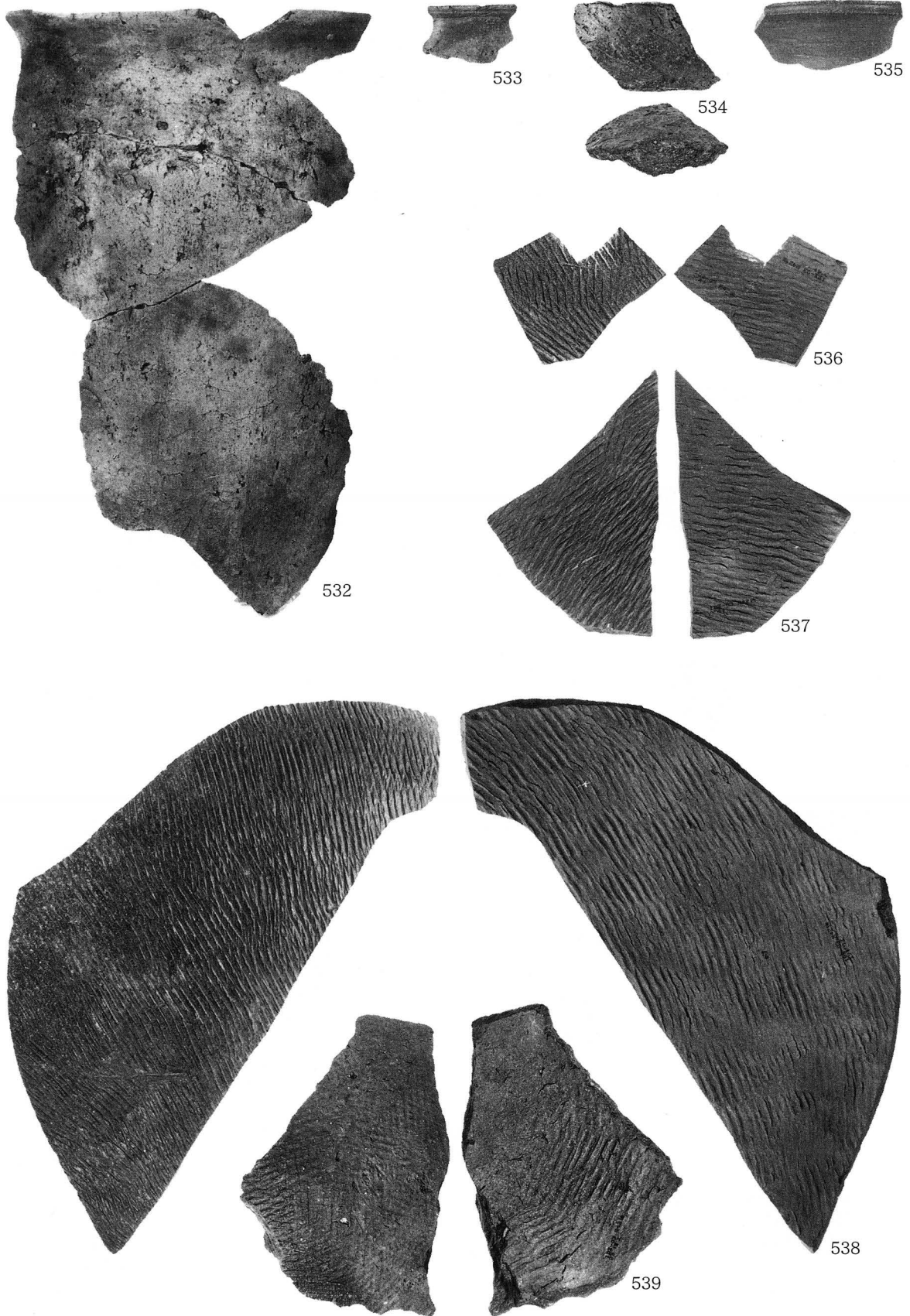


530

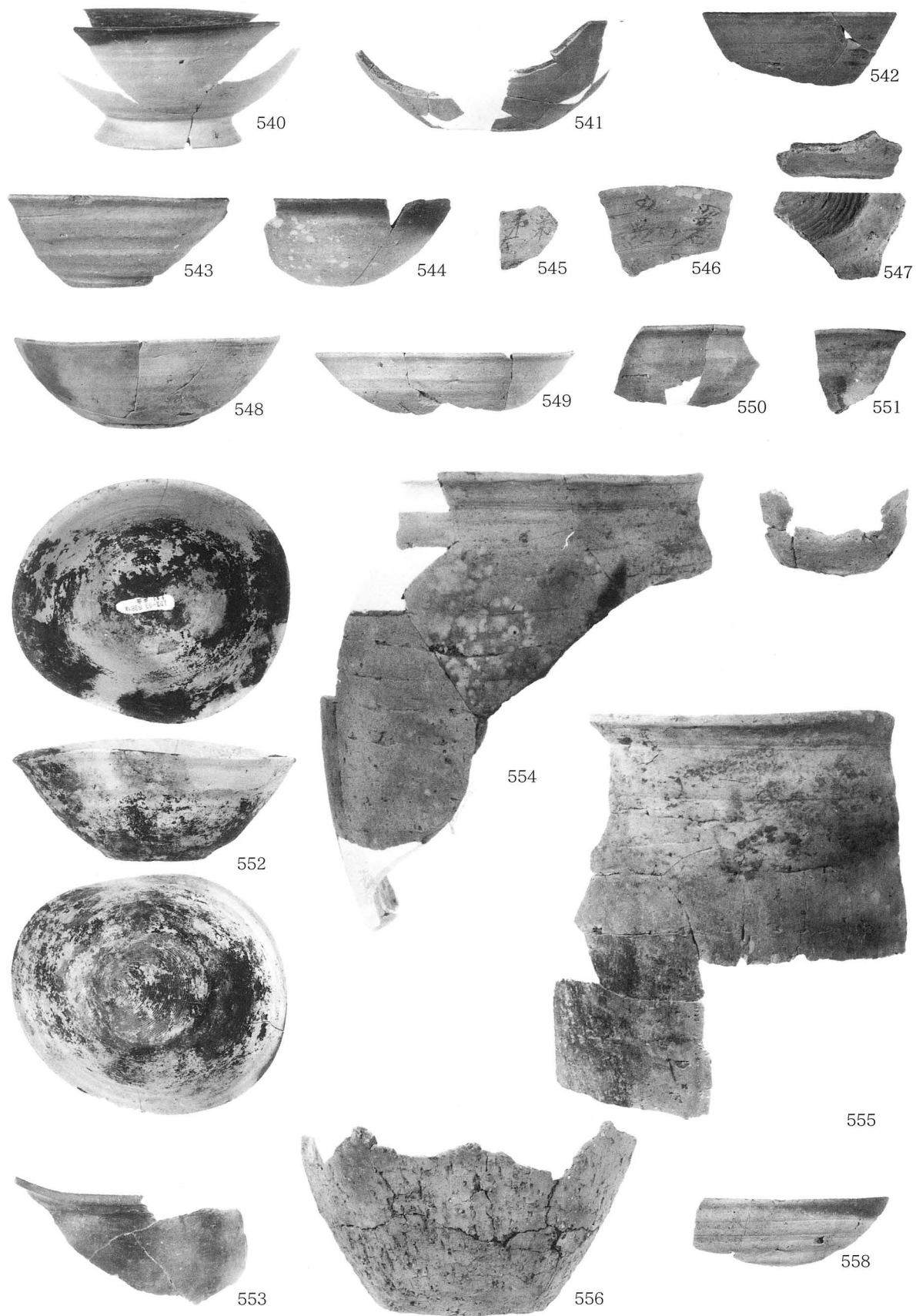


531

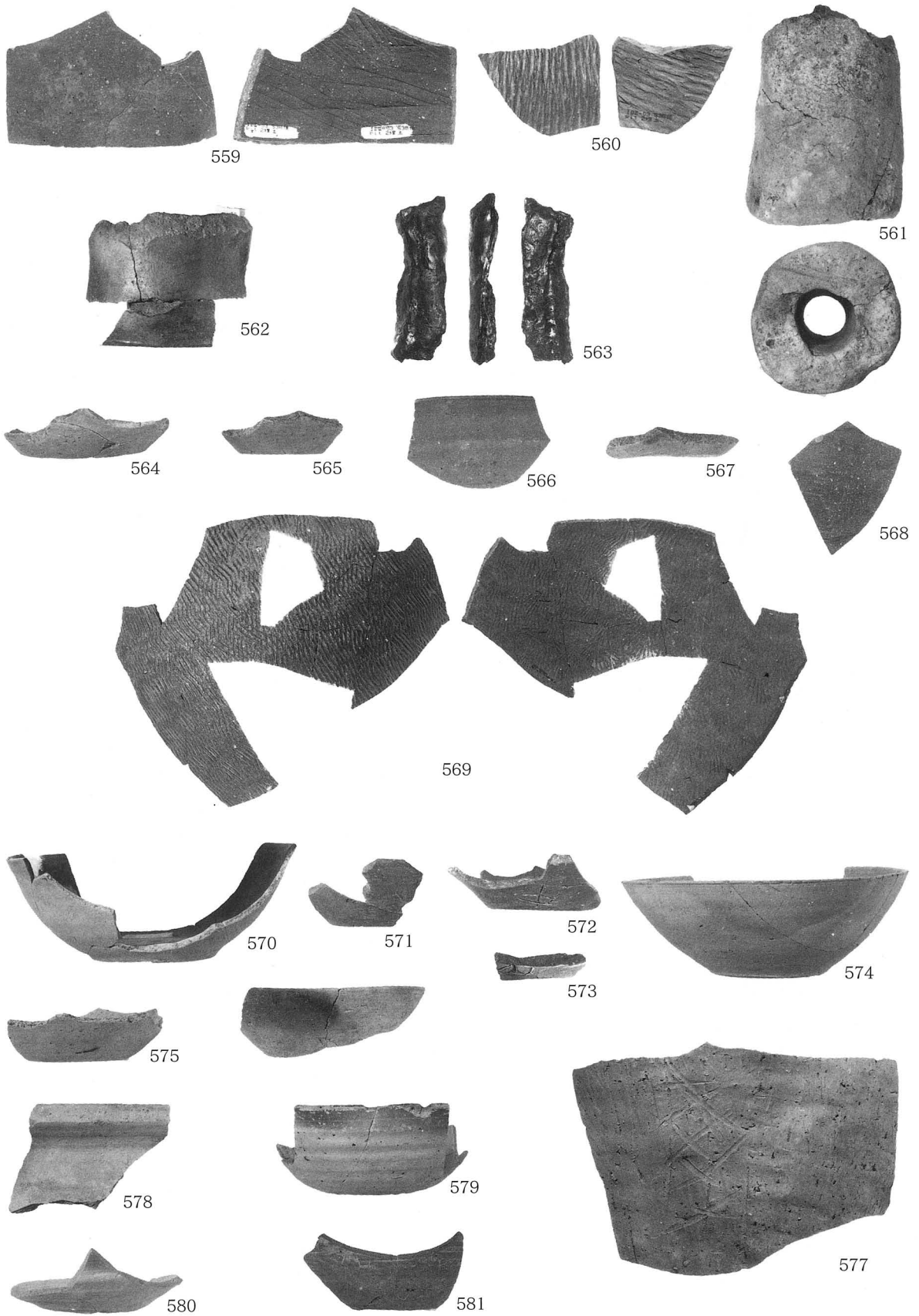
写真図版59 遺構内出土遺物 (24)



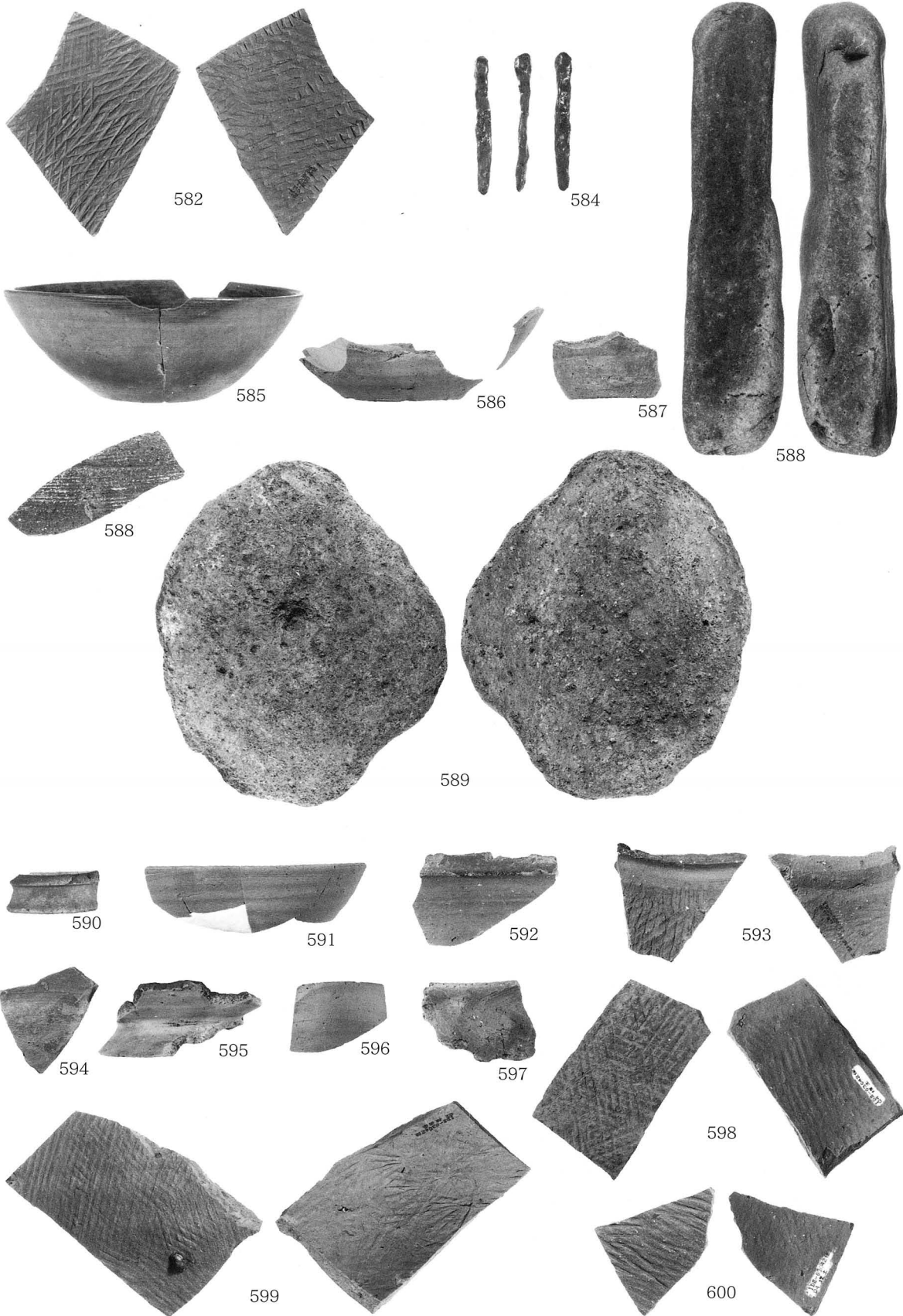
写真図版60 遺構内出土遺物 (25)



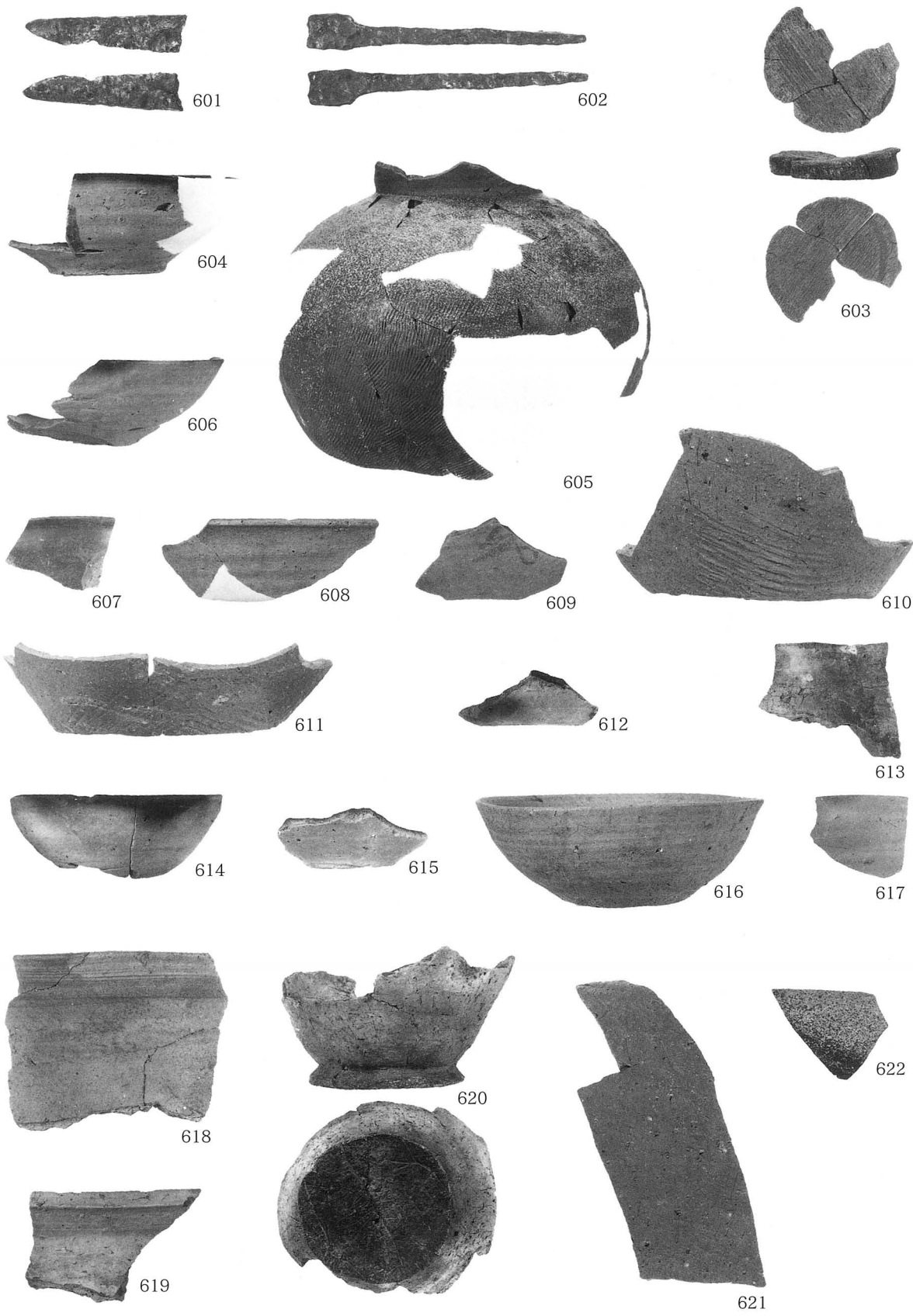
写真図版61 遺構内出土遺物 (26)



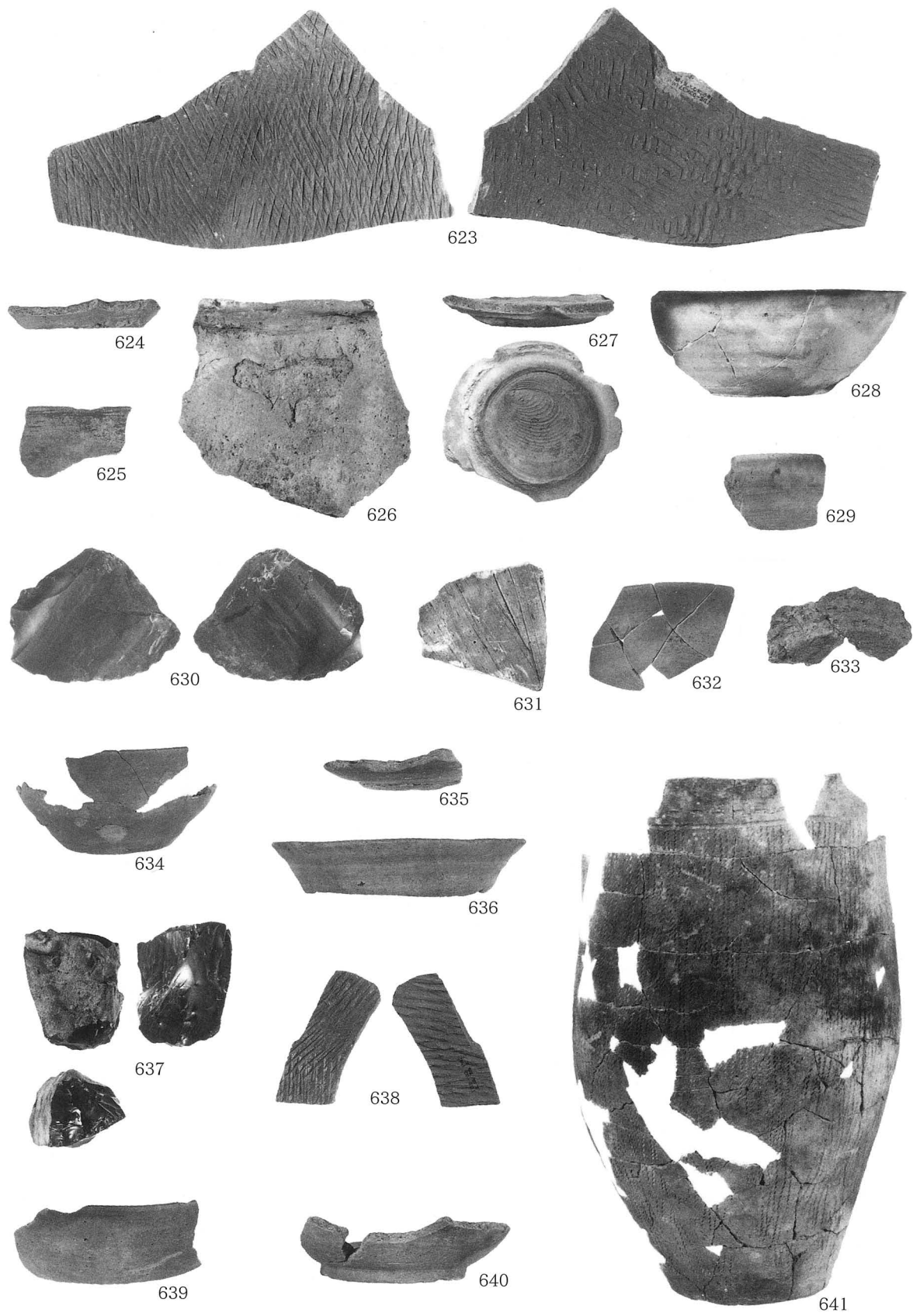
写真図版62 遺構内出土遺物 (27)



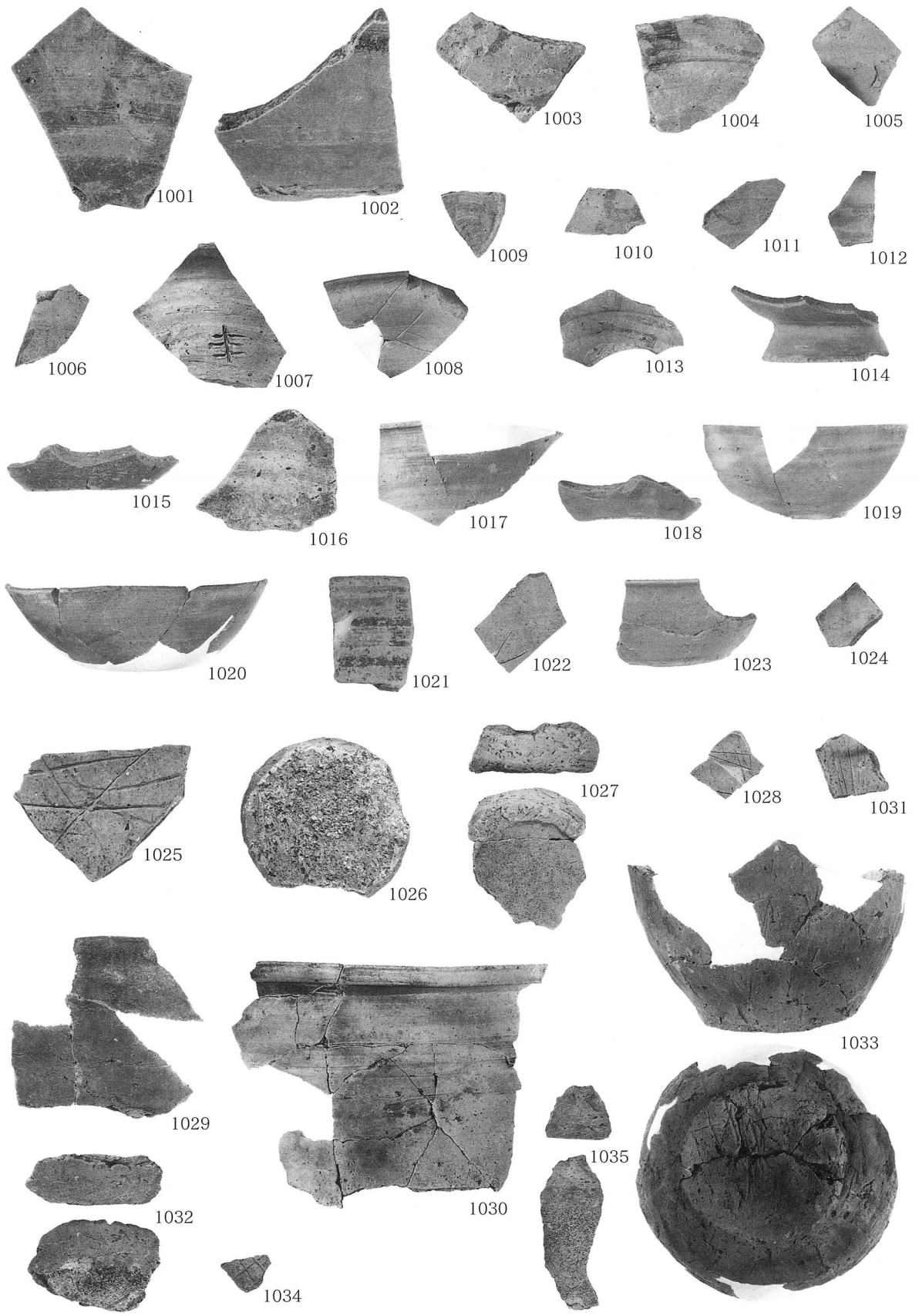
写真図版63 遺構内出土遺物 (28)



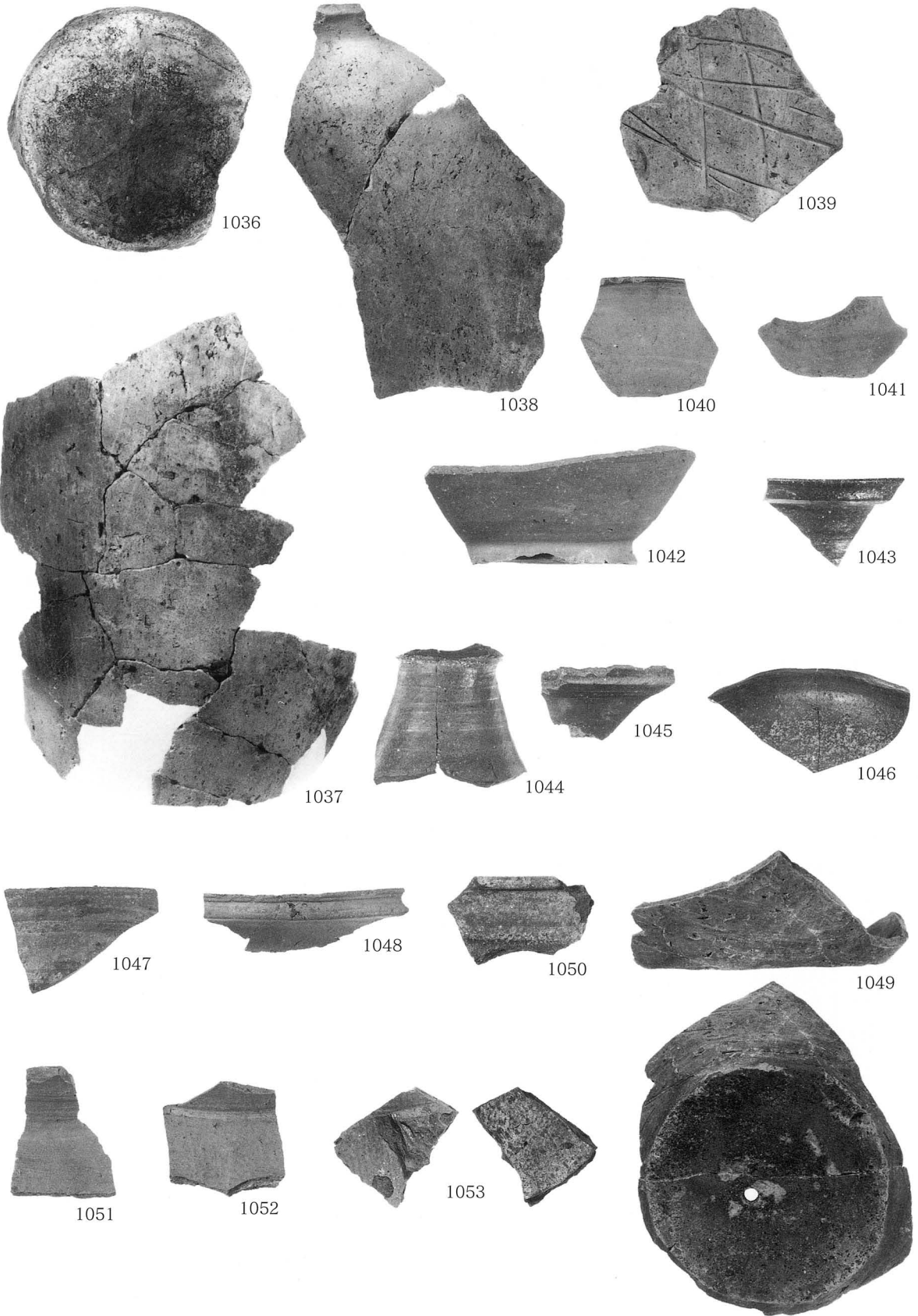
写真図版64 遺構内出土遺物 (29)



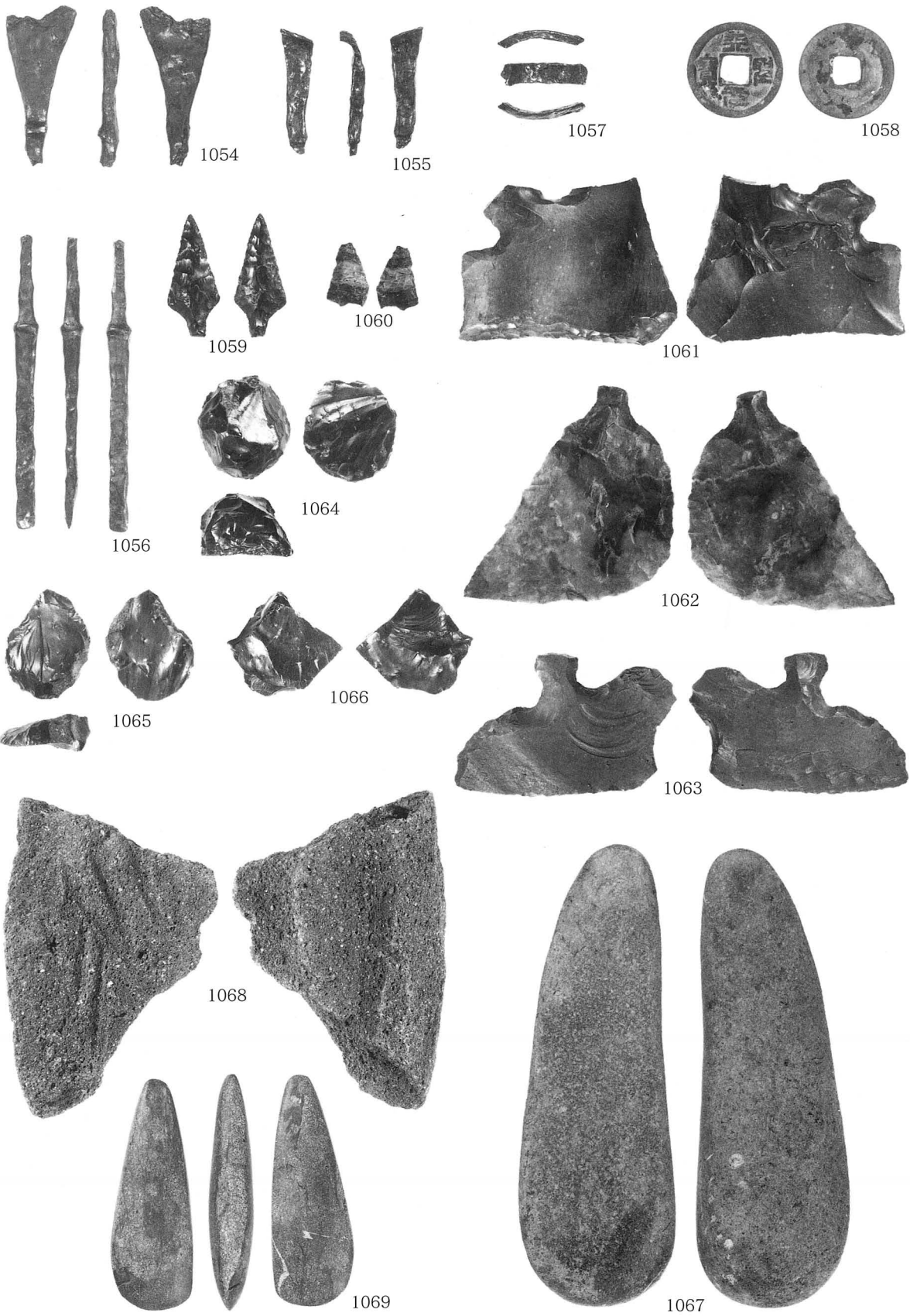
写真図版65 遺構内出土遺物 (30)



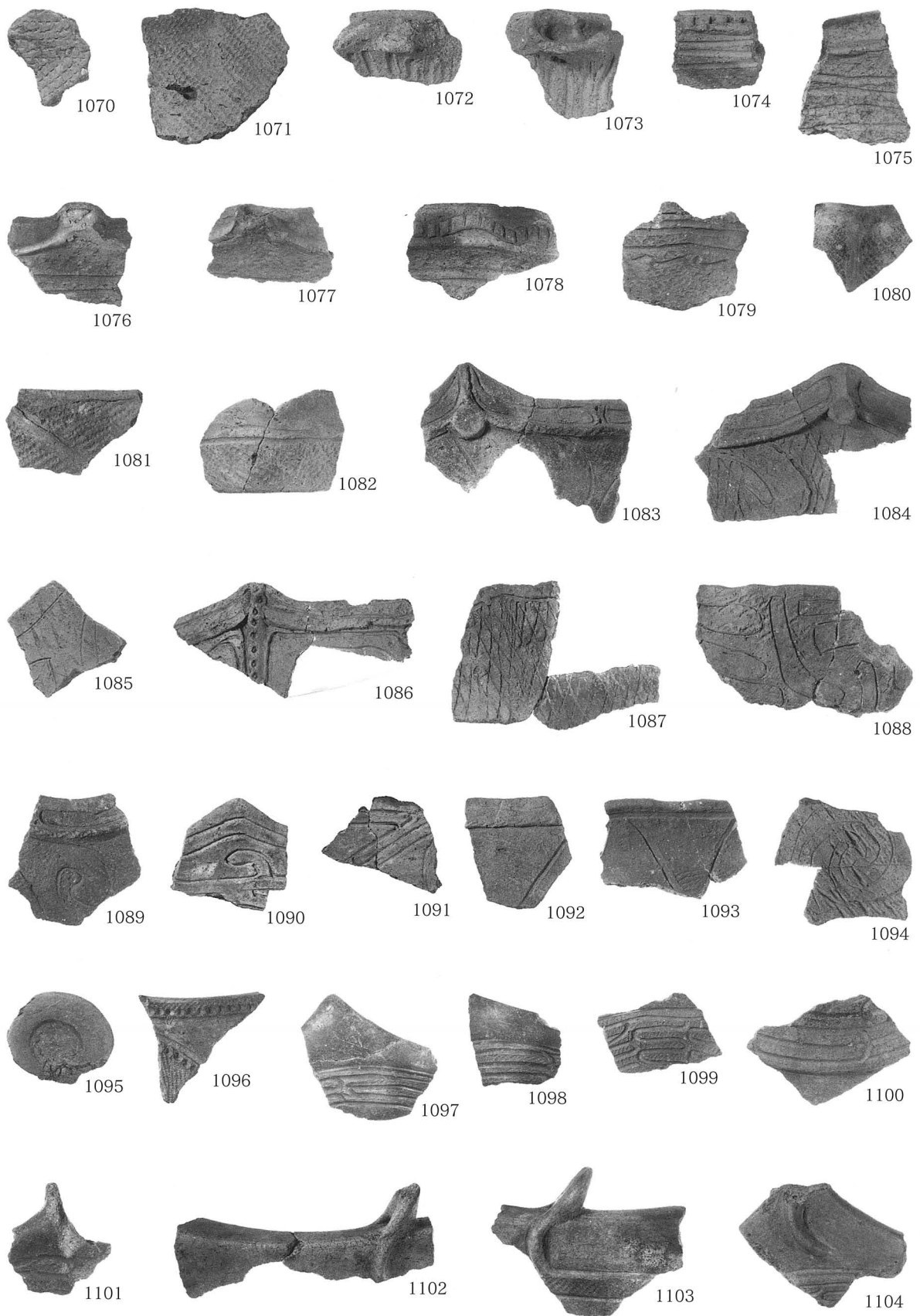
写真図版66 遺構外出土遺物(1)



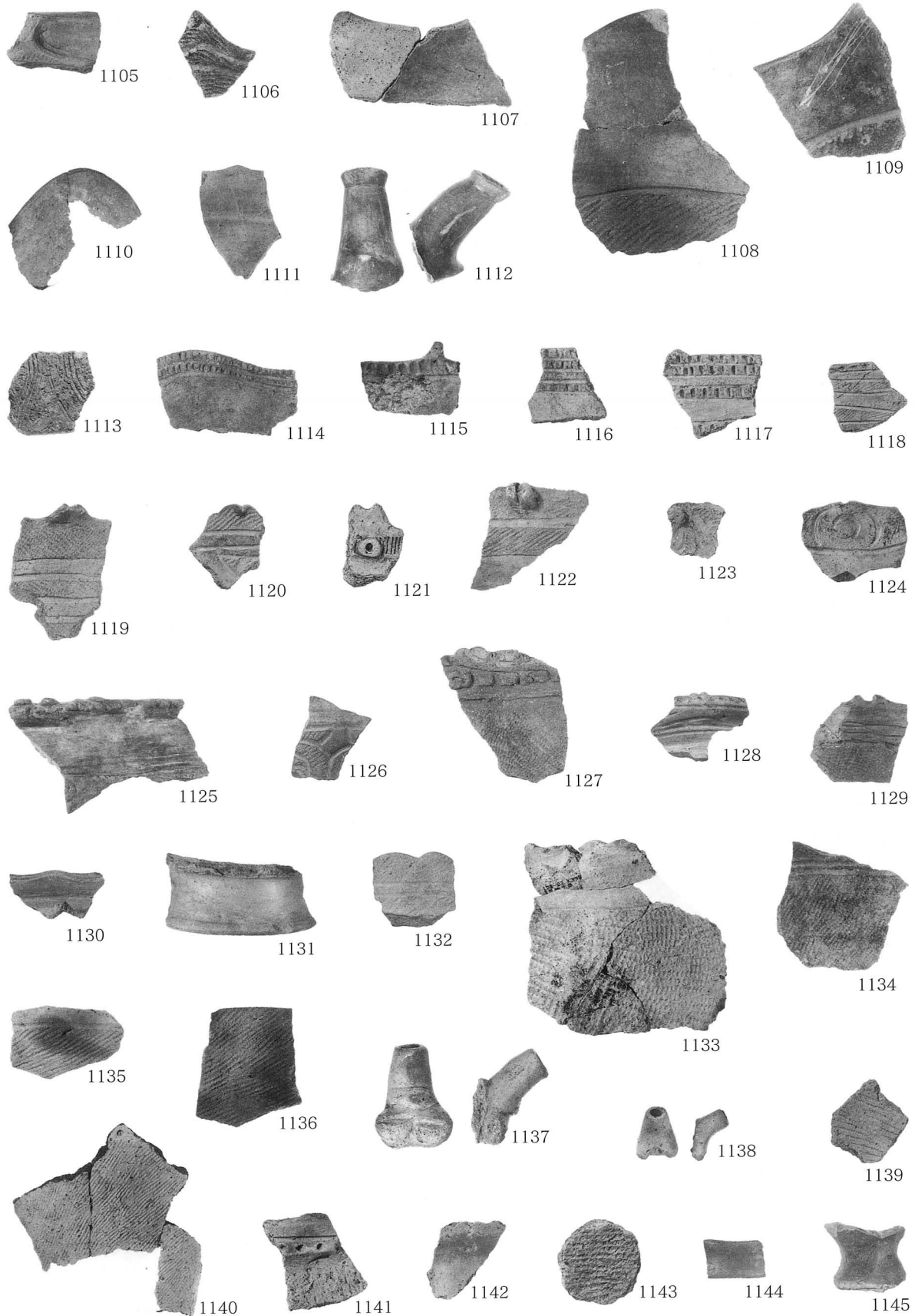
写真図版66 遺構外出土遺物(2)



写真図版68 遺構外出土遺物(3)



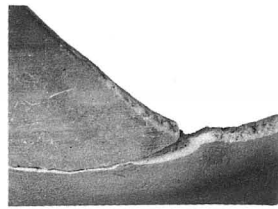
写真図版69 遺構外出土遺物(4)



写真図版70 遺構外出土遺物(5)



2



5



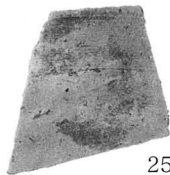
14



17



18



25



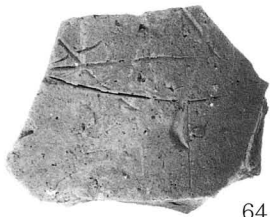
23



26



58



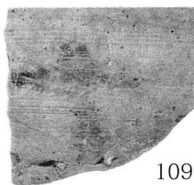
64



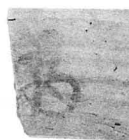
103



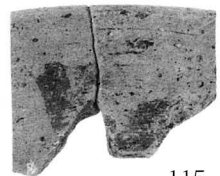
106



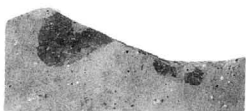
109



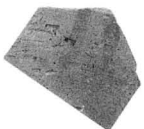
110



115



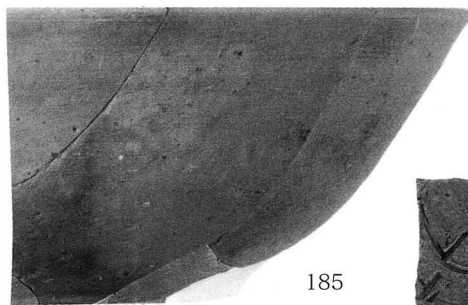
149



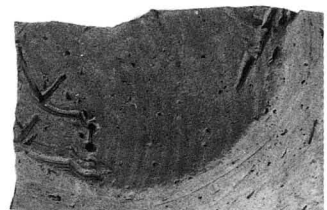
175



176

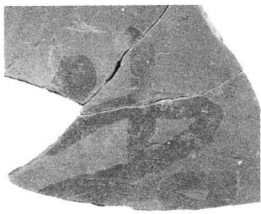


185



179

写真図版71 墨書・刻書土器集成(1)



237



249



250



260



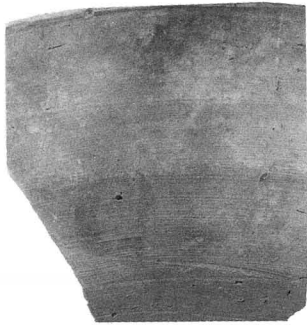
261



262



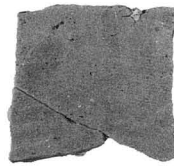
263



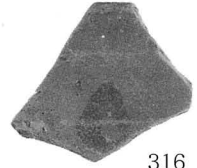
305



313



314



316



318



319



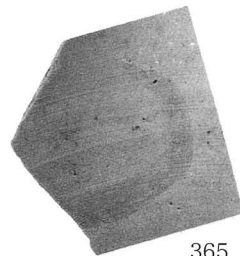
323



348



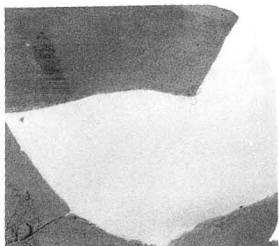
353



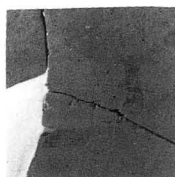
365



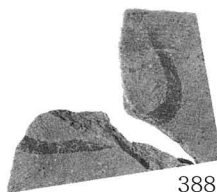
366



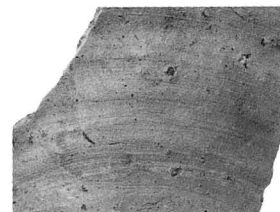
374



383



388

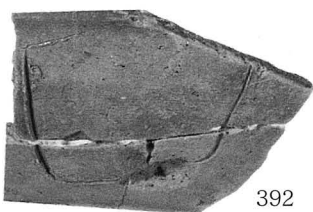


391

写真図版72 墨書・刻書土器集成(2)



379



392



393



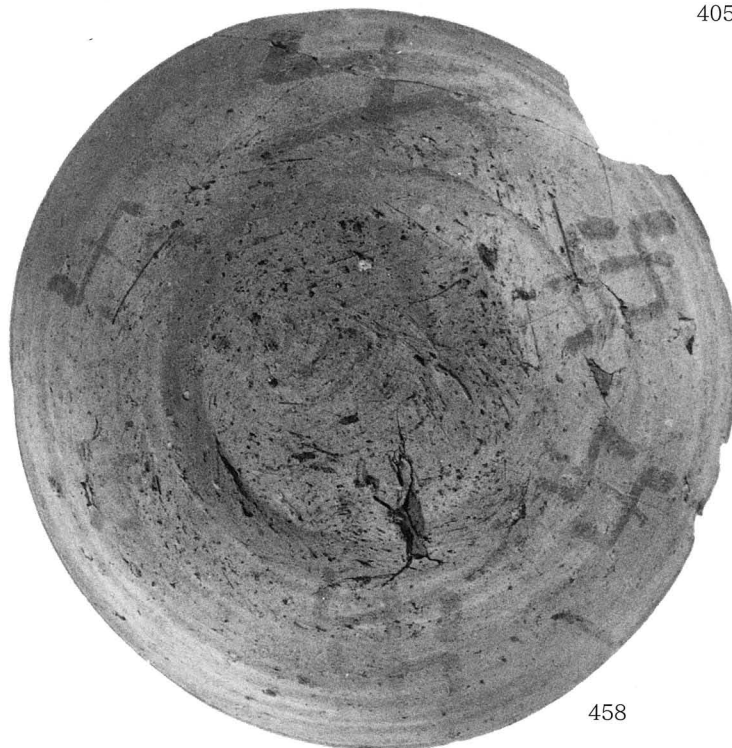
405



440



451



458



495



501



502



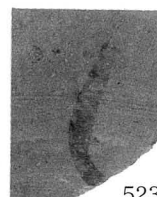
494



514



518



523



516

写真図版73 墨書・刻書土器集成(3)



542



545



546



547



572



573



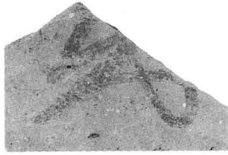
575



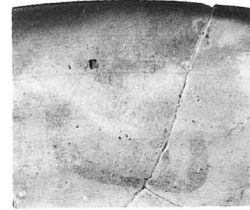
604



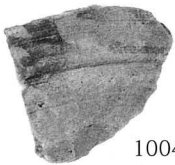
606



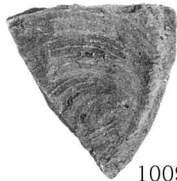
609



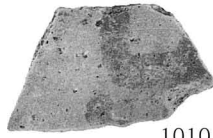
628



1004



1009



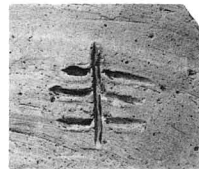
1010



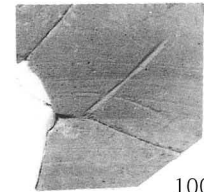
1013



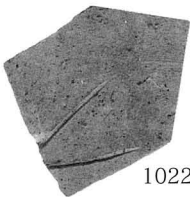
1018



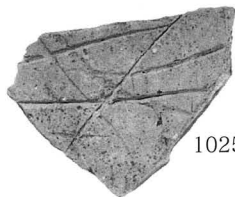
1007



1008



1022



1025



1033



1039

写真図版74 墨書・刻書土器集成(4)

報 告 書 抄 録

ふりがな	いもだにいせきはつくつちょうさほうこくしょ							
書名	芋田II遺跡発掘調査報告書							
副書名	国道4号渋民バイパス建設事業関連遺跡発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第457集							
編著者名	濱田 宏・飯坂一重							
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL 019-638-9001							
発行年月日	西暦2005年2月18日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
いもだにいせき 芋田II遺跡	いわてけんいわてぐんたま 岩手県岩手郡玉 やまむらのおおあざいもだあざ 山村大字芋田字 いもだ 芋田53-10ほか	03307	KE47-2199	39度 51分 59秒	141度 10分 50秒	2003.04.12 ~ 2003.11.11	6,784㎡	国道4号渋民 バイパス建設 事業
				世界測地系				
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構					特記事項
芋田II遺跡	集落跡	縄文時代 平安時代 近 世	土器埋設遺構	1基	縄文土器（早・中・後 ・晩期）石器類・土師 器・須恵器・墨書土 器・刻書土器・土製 品・木器・銭貨・金属 製品など			・墨書・刻書土器出土 ・一辺7~8m級の大型住居跡3棟 ・ロクロピットの検出
			竪穴住居跡	16棟				
			住居状遺構	7棟				
			土坑	20基				
			焼土遺構	10基				
			柱穴	41個				
			墓壇	1基				

平成16年度(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員名簿

所 長 相 原 康 二 副 所 長 平 野 允 苗

〔管 理 課〕

課 長	葦 澤 正 吾	嘱 託	高 橋 清 助
課 長 補 佐	小 田 島 宏 道	〃	常 泉 治 美
主 任 主 査	中 嶋 賢 一	〃	伊 藤 滋 子
主 事	猿 橋 幸 子		

〔調査第一課〕

課 長	三 浦 謙 一
課 長 補 佐	高 橋 義 介
文化財専門員	金 子 昭 彦
文化財調査員	水 上 明 博
〃	阿 部 勝 則
〃	杉 沢 昭 太 郎
	(柳之御所支援派遣)
〃	溜 浩 二 郎
〃	村 上 拓
〃	戸 根 貴 之
〃	八 木 勝 枝
〃	丸 山 浩 治
〃	米 田 寛
〃	北 田 勲
〃	島 原 弘 征
〃	村 田 淳
期限付調査員	石 崎 高 臣
〃	立 花 裕
〃	菅 野 梢
〃	新 井 田 えり子

〔調査第二課〕

課 長	佐 々 木 清 文
主幹兼課長補佐	中 川 重 紀
文化財専門員	小 山 内 透
	(県教委研修派遣)
〃	金 子 佐 知 子
〃	濱 田 宏
〃	羽 柴 直 人
文化財調査員	吉 田 充
〃	阿 部 徳 幸
〃	早 坂 淳
〃	小 松 則 也
〃	窓 岩 伸 吾
〃	亀 澤 盛 行
〃	鈴 木 裕 明
〃	新 妻 伸 也
〃	林 勲
〃	星 雅 之
〃	西 澤 正 晴
〃	丸 山 直 美
〃	村 木 敬
〃	福 島 正 和
〃	北 村 忠 昭
〃	須 原 拓
〃	川 又 晋
〃	中 村 絵 美
期限付調査員	小 針 大 志

(6月退職)

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第457集

芋田Ⅱ遺跡発掘調査報告書

国道4号渋民バイパス建設事業関連発掘調査

印刷 平成17年2月14日

発行 平成17年2月18日

発行 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地

TEL (019) 638-9001

FAX (019) 638-8563

印刷 杜陵高速印刷株式会社

〒020-0811 盛岡市川目町23-2

TEL (019) 651-2110

